LinkRing

やくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬｉｎｋＲｉｎｇ

【Ｎコード】
Ｎ５１４７Ａ

【作者名】
やくも

【あらすじ】
「Ｒｉｎｇ」と呼ばれるアクセサリ。そこに刻まれたものは、文字でも言語でも記号でもない。それらの羅列は血のように強く深い赤で記されたことから、「クリムゾン・テキスト」と呼ばれる。テキストを理解し契約するとき、「Ｒｉｎｇ」の力が開放される。これは現代に甦った古代の遺産の物語。契約の名の下に力を得た者は能力者となる。能力者達の求めるものは一つ。歴史の裏にさえ面影を残さない幻の「Ｒｉｎｇ」。それぞれの想いと目的を胸に、小さな街で「Ｒｉｎｇ」を求めた戦いが音もなく静かに始まる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１：呼び声

夏休みは一ヶ月も前に終わっているというのに、天気は相変わらずの炎天下の日々が続いている。
衣替えの期間は過ぎたとはいえ、さすがにこのバカみたいに暑い中、素直に校則に従って冬服を着込んでくる生徒の数は数えるほどしかいない。
それでも数えるほどはいるのだから、僕は色んな意味でその人たちに対して尊敬の眼差しを向けたい……とは思わない。

キーン、コーン、カーン、コーン……。

授業終了を告げるチャイムが鳴り響いた。
僕を含め、大勢の生徒達がその音に終わったぁーなどと口々にしている。
僕達は今、普通に教室の中で授業を受けているわけではない。
どういう経緯かは覚えてないけど、今日の六限の授業は高校周辺の清掃活動ということになっていた。
普通に授業を受けるよりはいくらかマシだと思っていたけど、この炎天下の中じゃそれも決して楽とは言えない。
陽が当たらないだけ、普通に授業を受けていた方がよかったかもしれない。
「大和、戻ろうぜ」
ふとそんなことを考えていたら、クラスメートに声をかけられた。
「あ、うん」
僕――黒栖（くろす）大和（やまと）はその声に促され、校舎裏をあとにする。
と、そのときだった。

キーン……。

チャイムとは違う、何か別のそんな音が聞こえた。

「え？」

僕は振り返るが、音だけが波紋のように耳の奥へと響き、やがて静かに消えていった。

何の音だったんだろう。

今の音は、コインが地面に落ちたような音だったけど……。

どうしてかその音が気になって、僕は数歩だけ来た道を戻る。

日陰になって、わずかに湿った地面。

僕達が掃除をしたこともあって、いくらかは奇麗になっている。

そんな土色の地面の上に、それはポツリと取り残されたように転がっていた。

僕はそれをつまんで拾い上げる。

「……指輪？」

土にまみれてところどころ汚れてはいるが、それは指にはめるくらいの大きさの銀の指輪だった。

宝石やガラス細工みたいな装飾は何一つ施されておらず、それはまさしくただの銀の輪に過ぎないものだった。

誰かの落し物だろうか？

いや、っていうか、今まで掃除してたけど、こんなもの落ちてたっけ？

その指輪を拾ったのは、今の今まで僕がゴミを拾っていた地面の上だった。

地面に埋まっていたというなら見過ごした可能性もあるだろうけど、今拾ったこれは地面の上に置かれたように転がっていたのだ。

「……」

手のひらの中のそれを、僕はぼんやりと見つめる。

端から見ればガラクタ同然のようなものなのに、どうしてか神秘さのような不思議なものを感じ取ってしまう。

「おーい。何やってんだよ大和。早く行こうぜー」
などと考えていたら、またクラスメートに呼ばれた。
「あ、ごめん。今行くよ」
呼ばれたことに慌てた僕は、拾った指輪をそのままポケットの中にねじ込んだ。
別にそれは意識してそうしたわけじゃなく、ただ急がなければという感情が先走って、結果として無意識のうちにそうなってしまっただけのことだ。
急ごう。
もう放課後だ。

今日がたまたま金曜日、つまりは土日の連休の前日ということもあって、僕達は真っ直ぐ帰宅せずに繁華街へと足を向けていた。
メンバーは僕の他に、男子のクラスメートの石塚悟(いしづかさとる)と大河内健史(おおこうちたけし)。
女子は僕の幼馴染でもある坂城唯(さかきゆい)と、その友人である風間美野里(かざまみのり)。
僕達五人はクラスメートであると同時に、小学校時代からの腐れ縁でもある。
中学時代はクラスが違ってバラバラになったりすることも多かったけど、今年入学した高校では晴れて同じクラスで顔を合わせることになった。
では、なぜ五人が揃いも揃って同じ高校を受験したのか。
僕はそんな大した理由でもなく、公立で家から通える距離にあったからだ。
そのことをいつだったか、他の四人にも聞いてみたことがある。
するとどういうわけか、四人も僕と似たり寄ったりな理由で同じ高校を受験したのだというから驚きだ。
「まぁ、私立だと金もかかるし、電車通いとかメンドイしな」

とは悟の弁。
ずいぶんと適当な理由だけど、僕も似たようなものなので何も言うまい。
とまぁ、それぞれに経緯はあったのだろうけど、僕達は五人揃って同じ高校へと無事進学を果たした。
入学からもうすぐで半年が経とうとしている。
時間が経つのは本当に早いもので、今だって昨日が入学式だったようにさえ思えるくらいだ。
しかし実際は、すでに夏が過ぎ、季節は秋の真っ只中に突入している。
そう感じさせないのは、あとを引くように続く連日の炎天下のせいだろう。
最高気温も真夏日と同じくらいに上昇し、涼しい秋のイメージなんてものは微塵も感じさせない。
とはいえ、さすがに夕方近くになると風も涼しくなり、気温もそれなりに下がってくる。
僕達五人は全員が未だに夏服の格好に身を包み、ようやく沈む始めた夕陽に後押しされるように道の上を歩いている。
「で、今日はどうする？　先週はビリヤードだったから、今日は別のにするか？」
信号待ちの道の上で、悟が振り返って聞いた。
「そだね。さすがに二週連続は芸がないし。適当なところだと、ボーリングとかカラオケとか？」
唯が答える。
どっちがいいと言わんばかりに、隣の美野里にも視線を向けた。
「私は、どっちでもいいよ。みんなが行きたいところに行こう」
どこか遠慮がちに、しかし楽しそうに笑いながら美野里は答える。
「健史、お前は？」
「俺？　まぁ、ぶっちゃけ俺もどっちでもいいっちゃいいんだけど。まぁ、どちらかといえばカラオケのほうがいいかな」

「大和は？　どっちがいい？」
「僕もカラオケでいいよ。ボーリングとかだと、なんか汗かきそうだし」
「確かに。まだまだ暑い日が続くもんね」
僕の言葉を後押しするように、唯が賛同する。
「んじゃ、今日はカラオケってことにすっか。この近くって、店いくつくらいあったっけ？」
「アーケードの入り口のトコと、ゲーセンの奥に一ヶ所。あとは、表通りの奥のほうにもいくつかあったかな」
「っていっても、どこもあんまり変わんないでしょ。近いところでいいよ」
それもそうだなと、唯の言葉に全員が頷く。
と、ちょうどいいタイミングで信号が青に変わった。
動き出す人の波に紛れて、僕達も歩き出した。

結論から言うと、さすがに休日前の夕方ということだけあって店は賑わいを見せていた。
それでも僕達が無事に店に入れたのは、僕達がこの店の常連客として店長に顔を覚えていてもらったからだ。
「ラッキーだったな。店長に感謝しないと」
「ホントホント。顔はちょっとおっかないけど、いい人だよな、店長」
笑い合いながら、僕達は荷物を置いてソファに座り始める。
唯が内線でフロントにドリンクの注文をしている間にも、僕達は新譜を見ながら各々のレパートリーの曲を次々と入力していく。
「あー！　また私だけ置いてけぼりー」
やや拗ね気味の唯を尻目に、僕を含めた男衆は早くもマイクを手に握っている。
「あー、あー。マイクテス、マイクテス」
悟の声が室内に反響する。

カラオケに来ると、大体は悟か健史が一番に歌い始める。
しかも、曲も大体の場合が一緒だ。
まぁ、僕も他のみんなも好きな曲だし、悟も結構歌はうまいから実はサマになってたりもする。
「おっしゃ。んじゃ、トップバッターいかせていただきますっ！」
立ち上がり、高々とマイクを掲げる悟。
ワイワイと、僕ら四人が後押しで場を騒ぎ立てる。
どうせこの曲はみんなが歌えるので、何も言わなくても途中から五人揃って歌い出すことは目に見えているのだ。
イントロが始まり、メロディーが流れ出す。
僕らの週末は、今日もこうして賑やかに始まりの合図を告げたのだ。

時間にすれば三時間……もうちょっとだろうか。
僕達は各々に熱唱を繰り返し、ある意味で完全燃焼しきっていた。
さすがにぶっ通しで歌い続けてたこともあって、のどの奥が少し痛くなっていた。
部屋を出て、会計を済ませて外に出ると、辺りはすっかり夜の暗さに包まれ始めていた。
携帯で時間を確認すると、ちょうど七時を回ったところ。
いくら夏の暑さを引きずる日々が続くとはいっても、夏至と冬至の間の今は日が暮れるのも早いみたいだ。
秋の日はつるべ落とし、とはよく言ったものだ。
「あー、歌った歌ったー」
悟は満足そうに背伸びをした。
それもそのはず、結局悟は終始ほとんどマイクを手放さず、他人の曲にもアカペラで乱入するくらいだったのだから。
「相変わらずっていうか何ていうか、よくのどが壊れないね……」
僕は半ば呆れ、半ば不思議なものを見るような視線で悟に言った。
「全くだな。同じ人間として、声帯の構造が違うとしか思えない」

僕の言葉を後押しするように、健史が続く。
「何言ってんだよ。ホラ、あれだよあれ。歌は地球を救ってやつ」
「それ、初耳」
「健史の座右の銘なんじゃないの？」
美野里と唯が交互に追い討ちをかける。
違いないと、僕と健史が小さく笑い出す。

「さてと。んじゃ飯行こうか」
そう言い出したのは健史だ。
言われて気付いたが、確かに僕もすっかり空腹感を覚えている。
考えてみれば、昼食を終えてからすでに六時間以上も経っているのだ。
しかも、今のカラオケでそれなりのカロリーを消費したと考えれば、腹が減ってくるのも当然だった。
僕達五人は、ほぼ決まって毎週の週末を揃って過ごすことが多い。
学校が終わり、そのあとは今日みたいにカラオケやボーリング、ビリヤードや買い物なので時間を潰し、夕食を近くのフォアミレスやファーストフード店で簡単に済ませてから解散となる。
どうやら空腹を覚えていたのは僕だけじゃなかったようで、言い出した健史に続いて僕達は移動を始める。
繁華街周辺は、今の時間ということもあってずいぶんと賑わいを見せていた。
仕事を終えたサラリーマンやＯＬの人達も、少なからずこれから飲み屋に直行する人もいるのだろう。
僕達は適当な会話をしながらアーケードの中を通り抜け、飲食店街の一角にあるファミレスに入っていった。
混んでるかとも思ったが、幸いなことに六人がけのテーブルが一つ開いていて、長く待つこともなく席へと案内された。
各々に席に座り、メニューの中から食べたいものを選ぶ。
一通りの注文が決まったところで、僕はテーブルのボタンを押し

た。
　間もなくウェイターがやってきて、僕達はそれぞれのメニューを注文する。
　注文の確認を終えると、ウェイターは厨房の奥へと戻っていった。
「あー、腹減った……」
　悟は背もたれにズルズルと背中を引きずり、ドッと疲れたような表情を見せる。
「そりゃ、あれだけ歌えば疲れもするよ」
　僕は苦笑しながら言う。
「いや、順番が違ったな。最初にまず軽く飯食ってからだったら、あと二時間はいけたぞ、俺」
「俺らが先にバテるっつーの」
　水を一口含みながら、健史が答える。
「それだけのスタミナを、運動部のために使おうとは思わないの？」
と、唯。
「いやー、俺体の弱い美術部員ですから。運動なんてとてもとても……」
「その割には、悟はいつも部活中も遊んでるような……」
「う……」
　美野里の鋭い突っ込みに、悟はわずかにたじろいだ。
　同じ美術部員の美野里が目の前にいたんじゃ、悟も言い逃れはできそうにない。
「まぁ、そういうところも悟らしいっていえばそれまでなんだけど……」
「だな。コイツが真面目に芸術に打ち込む姿なんて、それこそ逆に気持ち悪い」
「……お前ら、さりげにヒドイこと言ってねー？」
　などなど、どうでもいい会話を僕らは繰り返す。
　それからほどなくして、注文した料理が次々と運ばれてきたので、僕らはとりあえず食事に集中することにした。

とはいっても、食事中でも話が続くわけなのだけど。

食事中にあまりするような話ではないけれど、僕は途中で一度用を足したくなったのでトイレへと立ち寄った。

多分、カラオケのときにドリンク飲み放題をいいことにガブ飲みしたからだろう。

今度からは少し控えるようにしようかな。

洗面所で手を洗い、さっさと戻ろうと踵を返す。

そのとき無造作にポケットに突っ込んだ右手が、何か冷たいものに触れた。

「ん？」

と、僕は立ち止まってポケットの中からそれをつまみ出す。

それは。

「あ……」

僕の手の中には、土色に汚れた銀の指輪があった。

そうだった。

校外清掃のときに拾ったのを、そのままポケットの中に突っ込んだままだったのだ。

とはいえ……。

「どうしようかな……」

正直、どうしてこんなものを拾ってしまったのかよく分からない。

あのままあの場に捨て置いてくればよかったのに、何を僕はこんなものを後生大事にするように抱えてきたのだろう。

とはいえ、さすがに店の中、しかもトイレの中に捨て置くわけにもいかない。

やはり、帰り道にどこか適当なゴミ箱などに捨て去ってしまうべきだろう。

と、僕は手の中の指輪のもう一度目を落として……。

「……？」

——瞬間、誰かの声が聞こえた。

「え……」

僕は周囲を見回す。

しかし、トイレの中には今、僕一人しか利用者はいない。

清掃中の店員もいなければ、個室の扉もどれもが開いたままだ。

一体今の声は、誰のものなのだろうか？

それとも、単に僕の空耳だったのだろうか。

しばし考えたが、結局は空耳だったような気がする。

それに、いつまでもトイレの真ん中で突っ立って考え事してるっていうのも、端から見れば変な図式だ。

仕方なく僕は、取り出した指輪をもう一度ポケットのなかにしまおうとして……。

「……あれ？」

その異変に気付いた。

手の中には、何の変哲もない銀の指輪が一つ。

ただ、その指輪の内側に、何かこう……。

文字のような、記号のような……よく分からないものが刻まれていた。

ついさっきまでは、こんなものはなかった……と思う。

見落としていたということもあるだろうけど、銀の指輪に赤く掘り込まれたような記号だ、嫌でも目立つ。

僕は覗き込むようにその記号を間近で見るが、やはりそれはただのわけの分からない記号でしかなかった。

仮名でも漢字でもないし、ましてやアルファベットでもない。

例えるなら、エジプトの壁画とかに使われているような象形文字に少しにているような気がした。

しかしだからといって、その記号がどんな意味合いのものなのか、僕には理解できないんだけど。

だけどこういうのは、ちょっと好奇心をくすぐるものがある。

テレビの特集とかでもたまにやってるけど、こういう未知のものに対する欲求というのは僕も人一倍に持ち合わせているのだ。

よく見ると、赤く刻まれた記号はこびりついた土の裏にもう少し続いているようだった。

僕は途端に興味が沸いて、洗面所の蛇口をひねり、水で土汚れを洗い落としてみることにした。

記号一つじゃ無意味でも、全貌が見えれば意味を成すかもしれない。

爪を立て、こびりついた土の塊を剥がし落としていく。

全てを奇麗に取り落としていくと、赤く刻まれた記号は、実に指輪の内周をぐるりと囲むように走っていた。

しかし、やはりどう読み取ろうとしても、僕にはそれが記号なのか言語なのかさえも分からない。

ただ、何というのだろう。

僕は直感的に、ここに刻まれた全ての記号は、恐らく世界中のどの国にも属さない、しかもどれだけ過去に遡っても歴史の表舞台に登場することはないような、そんな存在なのではないかと思ってしまった。

それはとんでもなく突拍子のない思考だった。

自分でも、どうしてそんなことが想像できるのか不思議なくらいだ。

……だけど。

それでも僕は、何となく分かる。

しかも、断定できる。

これはきっと、あってはならないものなんだ、と。

それが本能なのか、ただの妄想なのか、それさえも分からない。

僕は赤く刻み付けられた記号の羅列を凝視する。

まるで血液を染み込ませたかのような、生きる色を連想させるほどの強く深い色合いの赤。

その美しさを超えた領域の神秘に、僕は魅入られそうになる。

――ドクン。

心臓が跳ねた。

まるで全身の血液が沸騰しているかのような感覚。

確かな熱を帯びていく体は、しかし永久氷土のごとく冷たい。

血の流れが、体内を巡るそのいくつも張り巡らされた血管の迷路が、今なら紙の上に正確に書き出すことさえもできそうだ。

細胞が、神経が、感覚が、全てが研ぎ澄まされていく。

まるで刃こぼれを知らないナイフのよう。

物体の構造を、全てを知り尽くしてしまったような……。

「う、あ……」

急なめまいに、体が揺れ、視界が傾ぐ。

洗面台に両手を突いて、僕はその正体不明の酔いに耐えた。

ジャージャーと、閉じられていない蛇口からは今も水が流れ続けている。

その音が、余計に神経を過敏にする。

握り締めた拳を解き、僕は今一度、その指輪の内周に刻まれた赤い記号の羅列を見る。

その、文字か記号なのかさえも分からないものを、僕は……。

――瞬間的に、全て理解してしまったような気がして……。

トン、と。

「わあっ！」

突然肩に触れられた感覚に、僕は思わず声を上げて身を翻した。

「うおっ！」

しかし、それは相手も同じことだったようだ。

僕が息を上下させながら見る視界の先には、同じように一歩ほど身を引いた健史の姿があった。

「……た、健史……？」
声がうわずる。
一体僕は、何をこんなにも緊張しているんだろうか。
「あ、ああ。いや、お前がやけに遅いから、ちょっと様子見にきたんだけどさ……悪い、驚かすつもりはなかたんだけどよ」
「え、あ、いや……僕のほうこそ、ゴメン。ちょっと、考え事してたからさ、それで……」
「ん、そっか。ならいいんだ。んで、そろそろ時間もいいところだしさ、店出ようってことになったんだけど」
「あ、うん。じゃあ、戻ろう」
僕は蛇口の水と止め、健史のあとに続いて歩き出す。
その手の中に握りこんだ指輪は、健史には見られていないようだった。
僕はその指輪を再び、そっとポケットの中に戻した。
「……あれは一体、何だったんだろう……」
僕は健史に聞こえないように、小声で呟いた。
あの瞬間。
この世界のどこにも存在しない、存在することのなかった未知の知識が、僕の中に流れ込んできたような気がした。
それらは大小様々な形をしているにもかかわらず、その大小には何の意味合いすらなく。
しかし一つ一つが確かな意思を持ち、連なることでそれらは一つの言葉となっていた。
だから、僕に分かったのはそんな無数の意思と言葉の中のたった一つだけ。
その一つだけが、唯一僕の知識の中でも理解できた言葉だった。
その、言葉とは……。

「――クリムゾン・テキスト……」

もう一度、呟くように僕は繰り返した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１：呼び声（後書き）

このたび本作を新しく連載することになりました、作者のやくもです。
初めての方は始めまして、そうでない方はこんにちは。
えー、今回はしっかりと戦いに重点をおいたストーリー作りを心がけてみようと考えています。
とはいえ、根気がどこまで続くのか、今から不安で仕方ないというのが現状です。
できる限りの努力はしますし、読者の方々を開きさせないようにがんばっていきますので、どうぞお付き合いのほどをお願いします。
では、終わりの見えない物語をお楽しみください。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２：前兆の光

ファミレスを出ると、辺りはすっかり暗がりに包まれていた。
にもかかわらず、目の前のアーケード通りが人ごみでごった返しなのは、やはり今日が連休前の夜だからなのだろう。
僕達以外にも学校の制服を着た学生の姿も少なくないし、まさに夜はこれからといった雰囲気をかもし出している。
「じゃ、今日はここで解散かな」
悟が言う。
「そうだな。じっくり遊んでたっぷり食ったし、満足満足」
健史の言葉に僕も頷く。
「じゃあまた。月曜日に学校でね」
唯がそう言って、僕たちの帰路は二手に分かれる。
僕と唯は家が同じ方向だが、悟と健史、美野里は方角が反対だ。
「じゃあね、唯。大和君も」
「バイバーイ」
「また、学校で」
「おう」
「んじゃなー」
軽く手を振り合いながら、僕達はそれぞれの帰路を歩き始める。
明日から土日の連休だと思うと、なんとなく気が楽だった。
とはいっても、僕の場合は単純に昼間で寝ていられるからなんだけど。
「うー、楽しかったー」
と、隣を歩く唯は満足そうに背伸びをしていた。
「楽しかったけど、僕は少し疲れた……」
調子に乗って歌いすぎたのが原因だろうか。
のどは痛むほどではないが、今も少し枯れているような気がする。
「まぁ、遊び疲れってことならいいんじゃない？　それだけ楽しめ

てたってことだしさ」
「うん、それもそうだね」
僕と唯は適当な会話を繰り返しながら、繁華街を抜けて住宅街へと歩く。
工業団地を抜けた奥、緩やかな坂の上に僕たちの住む家は立地している。
時刻が八時を過ぎたこともあり、道端の街灯にもポツリポツリと淡い光が灯り始めていた。

「あ、そうだ」
ふと思い出したように、唯が呟く。
「大和さ、数学のレポートってもうやった？」
「あれ？　提出期限っていつまでだったっけ？」
「えーと、確か週明けの月曜日だったと思う。三限に数学あったよね？」
「あ、そっか。まずいな、僕も早く終わらせないと」
「ってことは、まだ終わってないってことか……」
「……なんでそこで、少しだけ残念そうな顔するのさ？」
「……いや、終わってるならちょっと見せ……教えてもらおうかなって」
アハハと、唯は苦笑いしながら頭をかいていた。
まぁ、唯らしいといえば唯らしいけど。
「まぁ、半分くらいは終わってるから、前半の部分でよければ少しくらいは協力できるかもしれないけどね」
「マジ？」
「マジ」
「くぅー、さっすが大和。持つべきものは良き幼馴染よね」
ウンウンと、唯は勝手に何度も頷いていた。
いや、まぁ、いいけど……ね。
「じゃあさ、あとで大和の家行ってもいい？　私、口で言われても

よく分かんなくってさ」
「……それはいいけど、別に来なくてもいいんじゃない？　どうせ家は隣同士だし、二階の窓越しでも話せると思うけど」
僕と唯は幼馴染ということもあって、互いの家は隣同士だ。
僕の部屋も唯の部屋も二階で、窓を開けるとお互いに向き合うような形になる。
距離は二メートルくらいしか離れてなく、極端な話、何か橋の代わりになるものがあれば簡単に行き来ができるわけだ。
「そうだけど。ほら、前にそれで夜中に大喧嘩になったときがあったでしょ？」
言われて、僕は記憶の中をひっくり返す。
……ああ、確かに。
「そういえば、そんなこともあったね……」
「でしょ？　それであのとき、私母さんにこっぴどく怒られちゃってるからさ。それはちょっと、ね……」
なるほどと、僕は頷いた。
思い返してみれば、僕もあの後母さんに思いっきり叱られた記憶がある。
確かあれは三年前、僕と唯が中学に進学して間もない頃だったと思う。

……あれ？
そういえばそのとき、どうして僕達は大喧嘩なんかしてたんだっけ？
……思い出せない。
まぁ、無理に思い出すこともないかな。
「まぁ、そういうわけなの。で、どうかな？」
「ん、僕は別に構わないよ。でも、唯って頭いいのに数学だけは苦手って珍しいよね」
「そんなの買い被りだって。別に私、言われるほど優秀な人間じゃ

ないよ」
そうだろうか。
少なくとも僕から見れば、唯は十分頭がいいと思う。
運動だって人並かそれ以上にはできるはずだし、社交的で友達も多い。
それこそ悩みなんて一つも抱えてないように見えるけど……。
やめておこう。
これ以上勝手に僕が思い込むのは、きっと唯に失礼だ。
誰だって他人に語れない、語りたくない悩みや秘め事くらい抱えているんだから。
そうこう話したり考えたりしながら歩いているうちに、僕達はそれぞれの自宅の前までやってきていた。
互いの家の中に明かりが灯り、静かに僕達を出迎えているようだった。
「じゃ、あとで行くね。行く前に一回、部屋から声かけるから」
「うん。とりあえず、九時くらいに声かけてよ。多分部屋にいると思うからさ」
「オッケー。じゃ、また後でね」
僕達は十メートル程度の距離を離れ、それぞれの家の扉をくぐった。

「ただいまー」
言いながら、僕は家に上がる。
と、玄関に見慣れない靴が置いてあるのが目に留まった。
お客さん？
こんな時間に誰だろうと、僕は訝しげにリビングへと向かう。
「ただいま」
リビングに顔を出し、もう一度言う。

「あら、お帰り大和。今日も悟君やみんなと一緒だったの？」
「うん。メール届いてるよね？　夕飯は食べてくるって書いたはずなんだけど」
「ええ、ちゃんと届いてるわよ」
と、母さんとそんな会話をしているときだった。
「よっ、大和」
僕はふいに、自分の背後から名前を呼ばれた。
どこか懐かしい、聞き覚えのあるその声に振り返る。
するとそこに、久しぶりに会う兄――黒栖敏明（くろすとしあき）の姿があった。
「に、兄さん？　うわぁ、久しぶりだね」
玄関にあった見慣れない靴は、どうやら兄さんのものだったようだ。
「ハハ、お前もベタな反応を返すもんだな。まぁ、確かに久しぶりではあるけどな」
敏明兄さんは僕と歳が六つも離れている、たった一人の僕の兄弟だ。
去年に無事大学を卒業し、そのまま就職して他県に移り住むことになったのだ。
「でも、どうしたの急に？　まさか、仕事クビになったとかじゃないよね？」
「アホ言え。お前といい母さんといい、同じ第一声を口にするんじゃない」
鞄を置き、ソファに座る僕の隣に兄さんも座る。
「俺が大学卒業して、もう一年が経っただろ？　で、今回はそのときの同級生と少し会いにきたわけだよ」
ああ、そういうわけだったのか。
「敏明ったら、何の連絡もなしに今日の夕方にやってくるんだもの。私はてっきり、仕事やめて戻ってきたものとばっかり……」
「だー、もう。もうその話はいいだろ母さん。せっかく久しぶりに戻ってきたんだからさ」

そんな会話を聞きながら、僕はまず着替えるために二階の自室に戻ることにした。
「僕、着替えてくるね」
一応そう告げはしたが、二人の耳に届いたかどうかは不明だ。
机の上に鞄を置き、手早く制服を脱いでクローゼットに片付ける。
そのまま普段着に袖を通そうかとも思ったが、思ったよりも体が汗をかいているようなので、まずはそのまま風呂に入ってしまうことにした。
母さんと兄さんは相変わらず話に花を咲かせているようだし、今がちょうどいいだろう。

ゆったりと湯船に浸かり、体と髪と顔を洗ってもう一度湯船に浸かる。
今頃になって遊び疲れが湧き上がってきたようで、ぼくは何度か湯船の中に沈みそうになる眠気を覚えてしまった。
完全に眠ってしまう前に、僕は風呂から上がる。
脱衣所で体を拭き、着替えを済ませてリビングに戻ると、そこには母さんの姿しかなくなっていた。
「あれ？　兄さんは？」
ドラマを見ていた母さんに問いかける。
「ああ、出かけたわよ。お友達から電話があったみたいだったけど」
「ふぅん……」
僕はタオルで髪の毛を拭きながら、二階への階段を上った。
部屋に戻ると、もう間もなく時刻は九時を示そうとしているところだった。
どうやら思ったよりも長い時間、湯船の中でウトウトを繰り返していたようだ。
さて、もうそろそろ唯が顔を覗かせる頃だけど……。
と、そこで僕は思った。
カーテンを閉め切ったままでは、唯も僕がいないと思うんじゃな

いだろうか。
僕は急いでカーテンを開ける。
そのまま窓も開けると、涼しい夜風が前髪を揺らして吹き抜けていった。
向かいに見える唯の部屋にも明かりはついているが、まだカーテンは閉まったままだ。
まぁ、もうしばらくすればお呼ばれがかかるだろう。
「さて、と。数学か……」
僕は鞄の中から教科書やらノートやらを引っ張り出す。
本当はもう眠ってしまいたい気分でもあったけど、レポートを後回しにしておくわけにもいかない。
面倒ではあるけれど、二人がかりでやれば少しは負担も減るだろうし。

テーブルの上に教科書とノートを乗せたところで、コンコンと窓を叩く音が聞こえた。
窓の向かい側を覗くと、ちょうど唯が自室の窓を開けたところだった。
「あ、いたいた」
窓から身を乗り出し、唯は僕の姿を確認する。
「じゃ、今から行くね」
僕は無言で頷いた。
しかしこのとき、僕は言葉の意味合いを履き違えていたのだ。
今から行くねという唯の言葉は。
「……え？」
ガタンと鳴った音の方向に、僕は振り返る。
そこになぜか、窓から本当に全身を乗り出した体勢の唯がいた。
「ちょ、ちょっと唯、ここ二階……」
二階ではあるが、横方向の距離はわずか二メートル。
ちょっと勢いをつけて跳べば、容易くこちら側の窓の取っ手に足

が届く距離。
そう。
今から行くねというその言葉は、文字通り。
今、この場所からその場所に行くねという意味だったのだ。
「よっ、と……」
唯の足が自分の部屋の窓枠を蹴り、わずかに跳ねて僕の部屋の取っ手に乗る。
さすがにそれを傍観するほど僕も落ち着いていられなかったので、思わず唯の伸ばされた手を握った。
高さにすれば大したものではないけど、それでも打ち所が悪ければケガじゃすまない。
幸いにして、唯はかすり傷一つ負うことなく最短距離で僕の部屋へとやってきた。
本当に、最短距離で。
「到着ー」
笑顔で言う唯。
数学の課題をやる前から、僕は小さな頭痛に悩まされそうで仕方がなかった。

「……それで、そうするとこの公式が当てはまるだろ？　そこで、こっちを代入して」
「あー、そっかそっか。なるほどー」
思いがけないアクシデントはあったものの、とりあえず僕と唯は数学の課題を始めている。
一応、この場合は僕が教える立場ではあるのだけど、それもすぐにいらなくなりそうだ。
唯は飲み込みが早く、僕の舌足らずな説明でもすぐに基礎を理解してしまう。
これで数学が苦手というから驚きだ。
「唯さ、本当に数学苦手なの？　とてもそうは見えないんだけど…

…」

コーヒーを口に含みながら、僕は訊ねた。

ちなみにこのコーヒー、先ほど母さんがわざわざもってきてくれたものだ。

それはつまり、こうして唯が僕の部屋にいるということも当たり前のようにバレてしまっているわけで。

にもかかわらず、母さんと唯はさも当たり前のように挨拶を交わし、何事もなかったかのようにしているのだから恐ろしい。

普通、驚くと思うんだ。

いくら昔に、似たようなことが何度となくあったとはいっても。

まぁ、それを言えば唯も同じなのだろう。

自分で言うのもなんだけど、僕達だってもう高校生だ、子供じゃない。

かといって大人というわけでもないけど、大人に近づきつつある時期だと思う。

だから、というわけじゃないけど……。

唯はこう、異性を意識したりとかはないのだろうか？

相手が幼馴染の僕であるということもあるのだろうけど……。

僕はというと、完全に意識していないといえばそれはきっと嘘になると思う。

はっきりとは言えないけど、やはり無意識のうちにどこかで意識しているんだと思う。

それは幼馴染の唯とはいえ、きっと例外ではなく。

だから、なのだろうか。

普段とは違う、本当に小さい緊張のようなものが胸にあるような気がする。

……って、一体僕は何を考えているんだ。

今はレポートの処理に集中すればいいはずだろうに。

いやしかし、ああでも、でも待てよ、あーでもない、こーでもない……。

……ダメだ、これじゃ僕は百面相になってしまう。

「大和？」

と、僕が我に帰ったのは唯がそう呼びかけたからだった。

「……ん？　って、わぁっ！　な、何？」

思わず僕は腰を引いて後ずさった。

唯が僕の顔を覗き込むようにして顔を寄せてきたのだ、無理もない。

心臓が必要以上にバクバクしている。

ああ、もう、何だっていうんだ一体。

どうして僕が自分の部屋の中で右往左往して緊張しなくちゃいけないんだ……。

「大和、大丈夫？　何か顔赤いけど」

「あ、赤くない！　気のせいだよ気のせい！　うん、全然平気！」

明らかに墓穴だった。

しかし言ってしまったからにはもう取り返しはつかない。

「……変なの」

としかし、唯は黙々とノートに数式を書き連ねていく。

妙なところで鈍い唯の性格が、このときほど幸いしたことはないだろう。

僕は気付かれないように何度となく深呼吸を繰り返し、どうにか自分自身を落ち着けさせて、再びレポートに取り掛かろうとして……。

コトン、と。

ふいに聞こえたその音に、振り返った。

見るとそこに、クローゼットにかけた制服のズボンから抜け落ちた、あの銀の指輪が転がっていた。

思い出したように僕はそれを拾う。

そうだ、帰り際に捨ててしまおうと思っていたのに、唯と話しながら歩いてたからすっかり忘れていたんだ。

ひやりと冷たい金属の感触。
外見は何の変哲もないただの輪なのに、その内周にはビッシリと記号のようなものが書き連ねられている。
掘り込まれたようなその記号の羅列は、その溝の中にまるで血液を流し込んだかのような目移りするほどの美しい赤色に染まっている。
もう一度僕は、その記号を流し読みするように手の中で転がして。
――次の瞬間、その赤い記号が蠢いた。

ぐにゃりと、音もなく揺らぐ。
同時に、ファミレスのトイレの中で感じたのと同じ変動が僕の体にも起こった。
ドクン。
高鳴る心臓の鼓動。
血液が沸騰し、体中の至るところが熱を持つかのよう。
鉄を溶かしたモノが、血と混ざって体内を駆け巡る。
一瞬の後に、軽いめまい。
これはすぐに収まるが、体の熱は未だにまとわりついたまま。
……何だ？
これは、何だ？
一体僕の体に、何が起きている？
起きようとしているんだ？
「……ちょっと、どうしたの大和？」
わずかに呻いた僕の声は、唯の耳にも届いていた。
「……う、あ……」
僕の声は自分でも分かるくらいにか細いものだった。
体の自由が利かない。
見えない重圧に、僕は押し潰されそうになる。
「大和？　大和、しっかりして！」

背中に、肩に、唯の手が触れているのが分かる。
しかしそれさえも、駆け巡る熱の熱さに遠く感じる。

――……よ。……を……。

その声に。
僕は聞き覚えがあった。
今度のは間違いなく、空耳や幻聴なんかじゃない。

――我に……よ。……を求め……。

誰だ、お前は？
なぜ、僕に語りかける？
どうして、僕を呼ぶんだ？

――我に身を委ねよ。力を求めよ。

力……？
そんなもの、僕はいらない……っ！
望んだ覚えは、ない……。

――資格有る者よ。我は汝を待っていた。赤の予言を詠みし者よ。
ここに契約は果たされる。汝に力を授けよう。我が片割れの力を。

何を、言って……。
「大和、大和？　ねぇ、しっかりして……！」

体を揺さぶられる。
あ、れ……？
唯、何で……？

何で、お前が泣いてるんだ……。
虚ろな視界の先、透明な雫が一つ落ちて。
僕の頭の中に、一つのテキストが流れた。
それは日本語でも英語でも、ましてやこの世界のどこかで言語として使われているものではなく。
しかし、どれだけ歴史を遡っても、決して歴史の表舞台に現れることはなかったもの。
文字でも記号でもないそれらは、媒体として紙の上に書かれることさえ知らず。
ただ、イメージのように浮かんでは消えるだけの存在に過ぎず。
それらの羅列は全て、血のように強く深い赤色で記されていた。
ゆえに、それらはこう呼ばれる。
英知にして無知、予言にして記憶、覚醒にして封印。

――クリムゾン・テキスト。

唯一読めるその一文。
声に出さず、僕が胸の内でその言葉を繰り返すと、同時に僕の体は何事もなかったかのように平静を取り戻していた。
「……」
体内を駆け巡るような熱さも、心臓の鼓動も、頭の中に響いた声も。
何もかもが、過ぎ去った台風のように静かだった。
「私、小母さん呼んでくる！」
「ま、待って唯！」
慌てて立ち上がった唯の腕を、僕は掴んだ。
「僕なら、大丈夫。もう収まったから」
「だ、だけど……」
「……本当に大丈夫。別に病気でも何でもないから。ちょっと頭が痛くなっただけなんだ」

「……本当に、大丈夫なんだね？」
「うん。もう平気。収まったよ」
「……うん。分かった……」
僕がそう言うと、ようやく唯も落ち着きを取り戻してくれた。
唯は座っていた場所にもう一度座り、カップの中のレモンティーをゆっくりと口に含んだ。
それでもう少し落ち着いたのか、唯はハァと小さく溜め息をついた。
「……寒くなってきたから、窓、閉めるよ」
「あ、うん……」
立ち上がり、僕は窓枠に近づく。
窓を閉め、鍵をかけ、カーテンを引こうとしたそのとき。
窓ガラスの向こう側に、閃光が瞬いた。
そしてそれを、僕は直感でもなく、本能でもなく、潜在意識で理解した。

――あの場所に、鍵がある。

想像もしなかった。
まさか今日という一日が、夜を越えてこんなにも長く感じることになるなんて。
僕の非日常は、もう間もなく始まろうとしている……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３：目醒め

街灯の立ち並ぶ住宅街の道を、僕は自転車をこいで急いだ。
ヘッドライトが照らす先、夜に染まったアスファルトの道がどこまでも続いている。
周囲の家々にはまだたくさんの明かりが灯っているにもかかわらず、道行く人影はまばらでしかない。
そんな人達から見れば、暗がりの中を自転車で全力疾走している僕の姿は不思議なものに映るのかもしれない。
寒空と言っても過言ではない気温の中、僕はまともな防寒具など一つも身に着けず、わずかに白い息を吐き出しながら急いだ。
風はなく、はるか上空にある分厚い雲さえも流れを止めているように見える。
嵐の前の静けさとでも言えば分かりやすいだろうか。
だが、少なくとも今僕が向かうその場所は、嵐なんて程度の低いもので言い表せるような状況ではないと思う。
それはあくまで、僕がそう思っているだけのことだ。
直感でも本能でもなく、いわば意識的、感覚的に僕はそれを察知している。
マンガやゲームの中の登場人物が、よく殺気を感じるとか言うけれど、それに近いものがあると思う。
言うなれば、それは一種の気配だ。
ただ、それを普通の人間は感じ取ることができないだけの話。
自然界に住む野生動物も、身の危険を察知していち早く反応するというが、恐らくそれと同意だろう。
ペダルを踏むたびに、確実に僕はその気配のする場所へと近付いている。
しかし今の僕の行動は、決して褒められたものじゃない。

むしろ自殺行為と称されても、何らおかしくない行動だ。
今の僕は、言うなれば地震の震源地に自ら赴こうとしているようなものなのだ。
他の誰も感じ取ることのできなかった余震を僕だけが感じ取り、計算で震源地を割り出す。
ただし僕の場合、その計算という過程がスッポリと抜け落ちてしまっている。
それがどういうわけなのか、僕本人だって知るわけがない。
ただ分かっているのは、その震源地である場所で、もう間もなく何かが起こる。
あるいは、もうすでに何かが起こっているということだけ。
「……」
僕は無言でペダルを踏み続ける。
くそ、嫌な予感がする……。
寒気ではない、別の不気味な悪寒が、背筋を舐めるように走った。
僕が目指す震源地。
それは、街外れにある廃工場跡だった。

シンと静まり返るその静謐さは、ただ立っているだけでも耳鳴りを覚えそうなものだった。
自宅から自転車をこぐこと十分弱、僕はようやく廃工場の入り口付近の道までやってきていた。
「……」
息が上がり、真っ白な吐息が湯気のように立ち上る。
全力で自転車をこいでいたせいで、体がやけに火照っている。
寒さをそれほど感じないのも、そのせいだろうか。
僕は路肩に自転車を停め、静まり返った工場の敷地を眺めるようにして道を歩く。
当然だが、街外れのこの付近に人の住む家はない。
高い塀に囲まれ、基本的に立ち入り禁止区域となっているこの場

所は、もちろん人影すら見当たらない。
正面ゲートにも鉄柵が設置され、もう人の出入りさえ感じさせる雰囲気ではない。
敷地の中は荒れ果ててしまったような地面が広がるだけで、すでに工場としての機能は完全に停止している。
取り壊しの際に使われたものだろうか、僕の視界の端には工事用の小型の工作機械が数台ほど映り込んでいた。
あちらこちらに鉄骨や鉄パイプの残骸が散らばり、今でもわずかに機械油の臭いが立ち込めているようにも思える。
引き寄せられるようにこの場所にやってきてしまったけど、僕は一体ここで何がしたいんだろう？
正直なところ、僕は何も分からないままだ。
ただ、僕の部屋の窓越しに見えたあの閃光は、間違いなくこの場所から立ち上っていたものだ。
あれはまるで、迸るほどの強大なエネルギーが行き場を失い、制御できずに漏れ出したような、そんな光だった。
遠目から見て、その光の中には落雷を思わせるような雷の粒子が弾けたようにも見えた。
しかし、雨雲すら見当たらない空模様に落雷とはどうも考えにくい。
だとするとあれはやはり、僕の目が見たただの錯覚だったということなのだろうか？
事実、こうしてその現場までやってきても、僕の目には何一つ変化のようなものは見つけることができない。
廃工場周辺は危険防止のために高い塀が取り囲んでいるし、唯一塀のない正面ゲートにも同等の高さを誇る鉄柵が聳え立っている。
確かに、無理をすればよじ登るくらいのことはできそうにもないけど……。
僕は数歩ほど歩き、正面ゲートの鉄柵を見上げた。
高さはおよそ三メートルちょっと。

踏み台になるようなものが何か一つあれば、確かに乗り越えることはさほど難しくはないようだ。
すると案の定、付近の電信柱の陰に隠れるようにして、高さ五十センチほどのコンクリートの塊が転がっていた。
こんな風に隠されているということは、もしかしたら誰かがこっそりと中に入って遊び場にしているのかもしれない。
小学生とかならよく考えそうなことだ。
そうは思いつつも、僕はそのコンクリートをずるずると引っ張り出す。
もちろん、この塀を越えて中に進入するためだ。
ここまでやってきて、中途半端で戻れるわけがない。
せめて何もないことを自分の目で確かめないと、僕だって納得がいかない。
コンクリートを踏み台に、僕はその上に乗る。
足場の安定を確認して、そのまま垂直とびの要領で鉄柵の一番上に手を伸ばし、掴もうとしたところで……。
――バチンと、僕の手は見えない何かに弾かれた。
「な……」
何が起きたと呟く前に、僕の体は背中から地面に向けて落下し始めていた。
慌てて足を伸ばし、どうにか難を逃れる。
弾かれた右手が、ビリビリと麻痺しているかのように痺れていた。
今のは一体、何だったんだろうか？
まるでスタンガンを浴びせられたように、僕の手が弾かれた。
まさか本当に、侵入者防止対策用に見えない電流でも流れているとでもいうのだろうか？
いや、さすがにそんなことはないはずだ。
この手のトラップは、ノンフィクションの世界でだけ許されてい

る特許みたいなものだ。
少なくとも、こんな日常しか溢れていない場所にあるわけがない。
だとすると、今の現象は一体何だったというのか。
僕は地面の小石を一つ拾い上げ、それをゲートの上を越えるように軽く放り投げた。
何もなければ、小石はそのまま鉄柵の向こう側に落ちて転がるだけのはずだ。
だが……。
バチンと、再び稲妻のような青白い閃光が走り、放られた小石は黒コゲになるどころか消し炭のようにその場から消滅していた。
「……ど、どういうこと……」
石一つを消し炭にするほどの電流なんて、一体何ボルトだ？
いや、そもそも僕は、どうしてそんな電流の中に手を突っ込んで、痺れたくらいですんでいるんだ？
今のを見たら、僕の体だって黒コゲになっていてもおかしくなかったはずなのに……。
それに、今の青白い稲妻。
あれは確か、僕が窓越しに見たあの落雷のようなものとそっくりだったような……。
訝しげに、僕は鉄柵の上を見る。
そこに電磁波を思わせるような火花は何一つ見えない。
どういう仕掛けなんだ？
っていうか、そもそもこんな仕掛けあっていいのだろうか？
こんなんじゃ、ちょっとした好奇心で鉄柵をよじ登った人は例外なく感電死してしまうことになる。
いくら立ち入り禁止区域とはいえ、そんな仕掛けを施す理由はないはずだ……。
と、僕がそんなことに考えを巡らせた、次の瞬間。
――目には見えない、しかしはっきりと聞こえる爆音が鳴り響い

た。

「……！」

僕は咄嗟に頭上を見上げる。

すると、鉄柵の上、あの正体不明の電流が流れるその場所に、ポッカリと丸い穴が開いていた。

そして僕の耳に届いた爆音は、確かにその中から聞こえていた。

まるでそれは、結界に穴が開いたかのような図だった。

バチバチと、雷の粒子が青白い稲光を絶え間なく放っている。

開いた穴は、ちょうど人一人が通り抜けられるくらいの大きさで。

その穴は徐々に収縮し、少しずつ小さくなっていく。

それを見た僕の行動は早かった。

コンクリートの足場を勢いよく踏みつけ、跳躍の勢いを殺さずに鉄柵の上にしがみつく。

懸垂の要領で体を持ち上げ、そのまま閉じていく穴の中に転がり込むようにして体を潜らせた。

不思議なことに、電流は僕を襲うことはなかった。

僕の体は鉄柵を超え、どうにか工場の敷地の中へと到着する。

柵の外と同様に、敷地の中もシンと静まり返っていた。

限りなく無音に近い夜の静寂が、逆に僕の耳には聞こえないはずの音を届けているようにも感じ取れる。

だがそれは、勘違いであると。

僕はすぐに気付かされる。

「……？」

霧が晴れるように、僕の目の前の景色が変わっていく。

そう。

最初からここは、静寂など存在してはいなかった。

僕はただ、目の前に広がる濃すぎた霧に夜の暗さを照らし合わせ、ここが何事もない静かな場所だと勘違いしていただけだった。

だから、実際のこの場所は。

それとは、本当に正反対。
霧が晴れていく。
いや、それは霧なんかじゃない。
思い出せ、一瞬前の出来事を。
僕の耳に届いたその音は、どんな音だった？
紛れもなくあれは、何かがぶつかり合い破壊される、爆音だったはずだ。
つまり、この、霧のようなものは……。
「……ゲホッ！」
僕は咳き込んだ。
霧で咳き込むわけがないので、これは霧ではない。
僕の視界を覆い尽くすほどのそれは、煙だった。
いや、もはやそれは煙の領域をはるかに超えている。
それらは幾度となく破壊と衝突を繰り返した結果現れたもの。
地面を抉り、壁や天井を瓦礫と化し、想像を絶するほどの膨大な量のエネルギー同士がぶつかり合った結果だ。
黒煙が晴れ、僕の視界は一転した。
ゆらりと揺れる、それはまるで夏の陽炎のようだった。
燃え盛る炎の海が、僕の目の前に広がっていた。
そしえその、猛るように燃える炎の中に……。

――三つの人影が、二対一でにらみ合うように立ち尽くしていた。

「ったく、いちいちチョコマカとウザイったらありゃしないんだから」
「減らず口を叩く暇があったら、さっさと終わらせますよ。些か時間がかかりすぎてしまってます」
「分かって……」
青年の言葉に促されるように、少女は地を蹴って空を舞う。
空中でその手を天高くかざし、人差し指をさらに突き上げる。

瞬間、その指先に青白い閃光が集束してバチバチと稲光を上げた。
まるで少女の指が避雷針であるかのように、いくつもの雷がそこへ集う。
「ますよっ！」
そうして勢いよく振り下ろされた指先。
白光した稲妻が、まるで矢のような鋭さと音速を思わせる速度で夜の闇を切り裂きながら放たれた。
狙い定められたのは少年の影。
目で見てからでは決して避けられないであろうその稲妻の一撃を、しかし少年はいとも簡単に避ける。
狙いを削がれた稲妻の矢は、そのまま何もない地面の上を根こそぎ削り取るように掘り進み、やがて空気に溶けるように消滅する。
「もいっちょ！」
としかし、少女の攻撃はまだ終わらない。
予め一撃目は回避されると読んでいたのか、少女の二撃目はもう片方の手の指先から放たれた。
一撃目と同じく、稲妻の矢。
しかし、今度は数が三つ。
正面と左右の三方向から、再び音速の雷光が少年を襲う。
三つの矢はそれぞれに微妙な速度の差を持っており、三つを同時に回避することは不可能に等しい。
ゆえに、少年の回避行動はいくらか限られたものになってくる。
最速の矢は正面から、次いで左の矢、さらに右の矢と続く。
つまり、初撃は右方向に回避しなくては二撃目を回避できない。
少女の頭の中の設計図どおりに、少年は初撃と二撃を最小の動きで回避するため、体がやや右方向に傾く。
その隙を、青年が見逃すはずがなかった。
「そこまでですよ」
低く冷たい声。

少年の背後に先回りしていた青年は、少年の足元の地面に向けて掌を叩きつける。
瞬間、少年の足の動きが止まった。
地面が抉れたわけではない。
少年の足が、地面に繋ぎ止められてしまったのだ。
青年の操る水の力によって、少年の足と地面は氷付けにされて固められていた。
思わずたじろぐ少年。
青年の力が水に属するものだとは知っていたが、まさか氷まで操れるとは想定外だった。
しかし、考えてみればそれはおかしなことではない。
水の状態変化を考えれば、それは至極当然のことなのだから。
水はあくまで液体の状態であり、個体に変化させれば氷になるし、気体に変化させれば蒸気にもなる。
「チッ、原子分解から状態変化までできやがんのかよ。鬱陶しいことこの上ねーな、おい」
舌打ちしながら、少年は足元の氷を憎らしげに見る。
「お褒めに預かり光栄ですね。言っておきますが、その氷はそう簡単には砕けませんよ？　密度を調整して、空気の入り込む隙間をゼロにしてありますからね」
「そいつはどうも。丁寧な解説、感謝しますよお兄さん」
「いえいえ。どうせ今から消す存在ですしね。最後に講義くらい、お安い御用ですよ」
変わらない口調でそう言うと、青年はご覧くださいと言わんばかりにその方向を指差した。

少年の視線が移る。
その視線の先に、今まで以上に集束する強大な稲妻の矢が待ち構えていた。

「……コイツはちょっと、シャレにならんのじゃないの？」
「ええ。こちらは大真面目ですから」
冗談めいて言う少年に、青年はあっさりと返す。
「ナーイスアシストよ、メガネ君」
「……次にそう呼んだら、氷付けにしますからね」
言われて、青年は少し眼鏡を押し上げた。
「さっさとやってください。私はもうゆっくり寝てしまいたいんですよ」
「分かってますって。トビッキリの一撃で跡形もなく消し飛ばしてやるんだから」
少女の両手に集まった雷のエネルギーの集合体が、まるで飴細工のように見る見る形を変えていく。
左手には、しなやかに描く曲線に細い一本の弦を持つ弓。
右手には、槍さえも思わせるほど鋭いの切っ先の一本の矢。
青白い火花を散らしながら、少女が弓矢を構える。
矢を弦にかけ、ギリギリと引く。
「とっておきよ。冥土の土産に覚えておきなさい」
その言葉に、青年はその場を素早く離れた。
的である少年の付近にいては、巻き添えで青年までもが殺されかねないからだ。
それだけの威力が、少女の一撃にはある。
やがて少女は、詠う様に言葉を紡いだ。

「――紫電の光よ、我が元に集え。音速の名の下に、眼前の敵を消し去れ。我、射手座の名の下にこの矢を放たん……」

稲光が強さを増す。
矢の先端に、更なる力が加わった。
「こ、れ、で。おっしまい！」
一際強く矢が引かれ、刹那の後に矢は射られた。

「――サジタリウス・グングニル」

轟、と。

空気さえも切り裂いて、音速を超えるほどの速度の矢……いや、槍が放たれる。

少女と少年、両者の距離は実に二百メートル以上もあったが、音速を超える速さの前ではそれすらもゼロ距離に等しい。

まさしく一瞬の後に、放たれた紫電の槍が少年の体を呑み込むように貫いた。

その光景を、僕はただ立ち尽くして眺めていることしかできなかった。

一体これは何なのか。

目の前で起こっていることが何なのか、僕には到底理解できるものではなかった。

「……何、これ？　あの人達、本当に人間なのか？」

呟くように出した声は、ずいぶんと枯れていた。

それだけ目の前で起こったことが衝撃的だったということだろう。

一人は雷をバチバチと飛ばすし、一人は何もない地面をいきなり氷付けにするし、一人はいつのまにか殺されてしまっていた。

一体これは、何なんだ？

映画のロケ？

でも、スタッフいないよね？

じゃあ、これは何？

何かの実験？

ああ、もう、本当に何がなんだかわけが分かんない。

僕は混乱する頭を抱えながら、それでも目の前の光景から目が離せなかった。

けれど、それがいけなかったのかもしれない。

「……おや？」

ふと、青年の方と目が合ってしまった。

遠目だけど、ずいぶんと背の高い男の人だった。

服装は白いワイシャツに黒いズボン。

細身で眼鏡をかけ、その長い黒髪は首の後ろで一度束ねられているようだった。

目が合っただけなのに、僕は心臓が跳ね上がり、背筋に寒気を覚えた。

当たり前だ。

どういう理由か知らないけど、この人はたった今僕の目の前で人を一人殺すことに手を貸していた人物だ。

得体の知らないという恐ろしさよりも、僕は自分までも殺されてしまうのではないかという恐怖に怯えずにはいられない。

「飛鳥、ちょっといいですか？」

青年は一度僕から視線を外し、自分の背後にいる少女の名前を呼んだ。

「ん？　何よ？」

呼ばれて振り返った少女が、同時に僕の存在にも気付く。

その表情はわずかに驚いているようだが、すぐに厳しい表情へと変わっていった。

少女は青年に比べるとずいぶんと小柄で、服装もダブダブしたパーカーにプリーツスカートという、一見珍しくもない格好だ。

目立つのは、まるで月のように透き通った金色を思わせるその髪。

ショートのボブカット位の長さのそれが、夜風に揺れてうっすらと輝いていた。

二人は足並みを揃えるようにして、一歩また一歩と僕の方へ近づいてくる。

その様子に、僕は危機感を覚えずにはいられない。

どういう理由だろうと、この二人はたった今僕の目の前で人を一

人殺しているのだ。
警戒するなというのが無理な相談だった。
僕は無意識のうちに、一歩後ずさりをしてしまっていた。
しかし不思議なことに、もうそれ以上足に力がはいらない。
中途半端な姿勢で、僕はやってくる二人を待っていた。
恐怖と混乱が同じくらいに渦を巻く。
僕は、殺されてしまうのか？
……冗談じゃない。
何も分からないまま、何も知らないまま殺されるなんて、まっぴらゴメンだ。
だけど、だったらどうする？
きっと僕は、この二人から逃げ切ることなんてできっこない。
今だってもう、体が全然動いてくれないんだ。
どうすれば、どうすればいい……。

――我に身を委ねよ。力を求めよ。

え……？
また、その声が聞こえた。

――力が欲しいのだろう？　ならば、我を受け入れよ。さすれば我は、何時如何なるときも汝の力となろう。

僕は、その言葉に……。
微かな可能性を信じて、ポケットの中に手を入れた。
僕のその仕草に、向かってきた二人がわずかに歩みを緩めた。
恐らくは警戒したのだろう。
二人から見ても、僕という存在はこの場には限りなくイレギュラーだったはずなのだから。
そして僕は、それを取り出した。

手の中で鈍く光る、銀の指輪。
「……っ、それは」
「まさか、アンタも……？」
二人が口々に何かを言うが、僕はそんなことを気にも留めない。
ただ、自然に。
何も考えずに、僕は……。
――その指輪を、右手の中指へと導いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４：風の暴走

大和が慌てたように部屋を出てから、もうかれこれ十五分以上が経っている。
トイレにしては長いようにも思えるし、やっぱり本当は具合が悪かったのかもしれない。
私は大和の分のカップも持って、一度大和の部屋を出た。
階段を下りると、ちょうどリビングには八重子さんの姿があった。
「あら？　どうしたの、唯ちゃん？」
小母さんは私に気が付くと、小走りに駆け寄ってくる。
「あ、これ。飲み終わったんで、持ってきました」
私は空になった二つのカップを手渡す。
「そう。わざわざありがとうね」
受け取ると、小母さんはそれを持ってキッチンへと向かっていく。
「あの、小母さん」
その背中に、私はもう一度声をかけた。
「ん？　何？」
「その、大和はどうしたんですか？　やっぱり、具合でも悪かったんですか？」
「具合が悪いって、あの子が？」
小母さんは小首を傾げてそう返す。
「あの子だったら、ちょっとコンビニまで買い物に行くって出て行ったけど。何かあったのかしら」
「……そう、ですか……」
コンビニに買い物？
とてもじゃないけど、そんな風には見えなかったけど……。
あのときの大和は、何かこう……急いでいるっていうか、慌てているっていうか。

うまく言えないけど、とにかく様子が普通には見えなかった。
けど、それを確かめようにも肝心の大和本人がいないわけだし……。
「じゃあ、私もう少し部屋で待ってますから」
「ごめんね。帰ってきたらすぐに向かわせるから」
「はい」

私は八重子さんと会話を終え、再び大和の部屋に戻った。
数学のレポートも大半は終わり、あとは見直しをするくらいだけ。
私はちょっとだけ眠くなっていたので、目を覚まそうと思って大和の部屋の窓を開けることにした。
カーテンを開け、鍵を開けて窓を開ける。
外からは涼しい夜風が流れ込んできた。
ほんの少し肌寒く感じはするけれど、これはこれで心地いいものだった。
そういえば……。
ふと、私は数分前のことを思い出した。
大和が部屋を出て行って間もなくして、外から何かの物音が聞こえてきたのだ。
それに続くように、今度は自転車を走らせるような音も聞こえてきた。
この時間にしては珍しいなと思ったけど、私はレポートのほうに集中していたので気にも留めなかったのだけど……。
「さっきのあれ、大和だったのかなぁ……」
コンビニまでは歩いても五分ちょっとの距離だし、自転車を使う必要もないとは思うけど。
そんなことを考えながら、私はよく晴れた夜空をぼんやりと見上げた。
ところどころに厚い雲が流れているけど、今夜はいつもより空が広く見える気がした。

光る星は数えるほどで、月も半分しか顔を覗かせていないけど、こういう奇麗な夜空は見ているだけで気持ちが落ち着く。
と、そんなときだった。
遠くの空……あれは多分、街外れにある廃工場の方角だ。
そこの空が、一瞬だけ落雷があったかのように青白く光ったような気がした。
「今の、雷が落ちたのかな……って、そんなわけないか。大体、空も晴れてるもんね」
だから私は、そのことを気にすることもなくまた空を見上げた。
黒というよりは、青をどこまでも深く染め続けたような色の空。
秋の夜長は、実に平和な空模様だった。

「ったく、何でこうなるのよ！」
相変わらず少女はグチをこぼしている。
「ぼやかないで、早くあれを何とかしてくださいよ飛鳥」
相変わらず青年は他人任せだった。
「私に言うな！　たまにはアンタも働きなさいよ、氷室！」
「年寄りに何させようって言うんですかアナタは。若いんですから、多少の無茶しても死にはしないでしょう」
「だーっ、もう！　その減らず口叩いてる余裕は何なのよ！」
「お互い様でしょうに」
飛鳥と呼ばれた少女と、氷室と呼ばれた青年は、互いに一定の距離を保ちながら工場の敷地を疾走していた。
ただ走るだけではなく、本当に全力疾走だ。
なぜなら、そのくらい速く走らないと追いつかれてしまうからだ。
一体、何に追いつかれるのか？
それは……。
「さすがに速いですね……」

口調こそまだ冷静だが、氷室はすでに全速力で走っている。
息一つ乱さずに涼しげな顔をしているが、それは生まれつきのポーカーフェイスのせいなので、決して余裕があるわけじゃない。
「っていうか、速さ勝負じゃ勝ち目ないよ、私達。だってアイツ、風でしょ？」
「そのようですね。いやはや、全くもって他人を疲れさせるのが得意な属性です」
やれやれと、ずれた眼鏡を直しながら氷室が言う。
「で、どうするの？」
隣を走る飛鳥が聞く。
「どうもこうも、逃げるしかないでしょう。まさか殺してしまうわけにもいきませんからね」
「うー、メンドクサイなぁ。はっきり敵って分かってる方が、割り切れる分だけまだ楽なのに……」
「同感です。とりあえず、二手に分かれましょう。恨みっこなしで、ね」
言うや否や、氷室は右の道に一足速く退路を変えた。
「え、ちょ、ちょっと氷室……」
「いやぁ、若い人は体力が有り余っているでしょうから。よかったですね、飛鳥。ダイエットにもなるし、一石二鳥じゃないですか」
わざとらしく微笑んで、氷室は一足飛びに距離を離していく。
「わ、私はそこまで太ってないわよ！　ってアンタ、ドサクサに紛れて逃げてんじゃないわよ！」
「余所見をしてると、あなたでもケガじゃ済みませんよ？」
その言葉に飛鳥は我に返り、そして気付いた。
――すぐ後ろに、無数の風の刃が迫っていた。
「……ったく、ホントに今日は厄日なんだか、らっ！」
振り向き様に、飛鳥はその手からいくつもの雷の矢を放つ。

風の刃と雷の矢は、それぞれが一対一で相殺し、飛鳥の目の前は瞬く間に消滅の際の白煙に包まれる。
相殺の音がいくつもこだまする。
しかし、その音もやがて聞こえなくなる。
どうやら全てを相殺し終えたようだ。
「ハァ……何で私がこんなに疲れなくちゃいけないのよ……」
徐々に晴れていく白煙を目の前にして、飛鳥はいかにもダルそうに立ち尽くす。
「早いトコ何とかしないと、私の安眠に関わる大問題になっちゃうわね……」
そう思えば思うほど、逃げた氷室がムカついてならない。
覚えてろ、あのメガネ。
そう胸の内で憎々しげに呟いて、飛鳥は一歩白煙の中に足を踏み入れようとして……。

――瞬間、霧が晴れるように白煙の全てが視界から掻き消された。

「な……」
その光景に、飛鳥の足が一瞬だが硬直する。
白煙の消えた視界の向こう、そこに……。
「速い……っ！」
巨大な風圧の塊が、目にも留まらぬ速さで突き抜けた。
かろうじて反応できた飛鳥は、しかしその風の塊をギリギリで避けることが精一杯だった。
完全に避けきることは敵わず、通過した後の風圧で軽い体は簡単に空中に吹き飛ばされる。
「っと……」
吹き飛ばされた飛鳥は、空中で体勢を立て直し、そのまま足から地面へと無事に着地する。
傷らしい傷はないが、今の着地の際に足が痺れてしまっていた。

少なくとも、この足では全力疾走をすることは難しいだろう。
「……ちょっと、ヤバイかも。今の速さ、並大抵のものじゃなかった……」
風の力もハンパじゃないなと、飛鳥は舌打ちする。
それでも飛鳥の操る雷は、音速を軽く超える速度を生み出すことは可能だ。
速さ勝負なら引けはとらないはずである。
しかしそれは、能力の本来の使い方と大きく異なるものになるのだ。
飛鳥の操る雷は、確かに音速を超えるほどの速さを持つ。
だがそれはあくまでも、飛鳥の手から放たれた『雷そのもの』が持つ速さであり、飛鳥自身の運動神経によるものではない。
一方この風の能力は、能力者本人にも大きな影響を及ぼすようだ。
言ってしまえばそれは天然の加速装置を常に背負っているようなもので、しかも天然なだけにエネルギーもほぼ無尽蔵だ。
さらに付け加えるなら、風そのものも速さの象徴として相当レベルが高い。
右に出るものなど、それこそ光速を誇る光くらいのものではないだろうか。

「分かっちゃいたけど、速さ比べじゃ勝負にならないな……」
先の戦いのこともあり、飛鳥はすでに相当量の体力と精神力を消耗している。
調子に乗って大技なんて使うんじゃなかったと、今更に後悔していた。
「接近戦に持ち込まないと無理か。だけど、速さじゃ絶対に敵わないし……ああ、もう。少しは働けよあのノッポメガネ！」
苛立ちを隠せず、飛鳥が吐き捨てるようにそう言うと。
「……よほど氷付けになりたいようですね、飛鳥」
「わぁっ！」

いつの間にか、その隣に氷室が立っていた。
「な、何よ！　いるならいるって言いなさいよね、全く……」
「いちいち驚かないでください。今に始まったことでもないでしょう」
頭痛を訴えるように、氷室は飛鳥の言葉に呆れ果てる。
「ま、今はそんなことはどうでもいいです。とりあえず、飛鳥が時間を稼いでくれたことに関しては礼を言っておきます」
「……まるで感謝された気分がしないんだけど……まぁいいわ。今はまず」
「ええ。そういうことです」
暴走したこの風の力を止めなくてはいけない。
「では、行きますよ。合図をしたら雷撃を地面に向けて撃ってください。全力で」
「ハァ、明日は筋肉痛だなぁ……」
「ぼやかないでください。私だって相当力を使っているんです。お互い様ですよ」
「あー、ハイハイ。そうでございましたね」
と、お喋りもそこまで。
先ほど飛鳥がかろうじて回避したあの風の塊が、再び放たれようとしていた。

「行きます」
氷室のその言葉で、二人は同時に物陰から飛び出した。
それに対し、まるでレーダーのような精密さで、まずは風の刃の群れが二人を襲う。
しかし、この対処に力をつぎ込んでいる暇はない。
なので、二人は身体能力のみでこれを全て避けながら走り続ける。
風の刃が二人の衣服のあちこちを切り刻む。
まさしく紙一重で、それらの傷はかろうじて二人の皮膚には届かない。

ようやくのことで風の刃の中を駆け抜けると、今度こそ本命が待ち構えていた。
今までの攻撃がマシンガンなら、今度の一撃は間違いなくロケットランチャー級の破壊力がある。
直撃はおろか、かすることさえも致命的。
ましてやそれは風の力、発動と直撃までの速さはまばたきさえ許してはくれないだろう。
その一点に、渦を巻くように風の力が集束していく。
飛鳥はその両手に、ありったけの力を集めた。
これをやったら最後、もうガス欠の車みたいに動くことさえままならなくなってしまうのは間違いない。
周囲の風が、吸い込まれるようにその一点に集まる。
青と緑が混ざった、一見鮮やかにも思えるその色合いは、しかし確実に飛鳥と氷室の命を奪うだけの威力を誇るものだ。
やがて風の集束が少しずつ弱まり、一瞬だが完全に風が消えた。
「今です！　飛鳥！」
「ったく、ホントに……」
言われて、飛鳥は思い切り真上に跳躍する。
「人使いが荒いんだか……らっ！」
地面の上に飛鳥の雷撃が落ちるのと、風の塊が射出されたのは同時だった。
音速をものともしない速さで、風が迫り来る。

その風の下を、這うようにして飛鳥の放った雷撃が波を打つように突き進む。
いや、それは正確に言えばただの雷撃ではない。
通常の雷撃では、通電性のない土の中では瞬く間に威力は殺されてしまう。
先の戦いで、飛鳥の放った雷撃の矢が地面に突き刺さると同時に消えてしまったのもそれが理由だ。

では、一体何が雷撃に地面の上を這わせているのか。
答えは簡単だ。
土の中に、通電性のある物質があればいい。
まさしく、この場には水の力を操る氷室という男がいるのだから。
水は電気をよく通す。
小学生の理科の問題だ。
予め氷室は、この工場の敷地一体の地面の下に水路を張り巡らせていた。
飛鳥の放った雷撃は、まさに今、油の染み込ませた導火線に引火した炎のように水の中を走り抜けているのだ。
そして、その水路の行き着く先は一つ。
「間に合うか……！」
氷室は唸るように呟いた。
予想以上に、風による攻撃の速度は速かった。
すでにもう目の前まで、風の塊はやってきている。
ここから先は刹那の速度で命が削られる。
風が直撃するのが先が、地を這う雷撃が届くのが先か。
どちらも音速を軽く超えるほどの速さ。
その速さの中では、一秒という時間さえもとてつもなく長く感じる。
風の塊は勢いが止まらない。
すでに氷室の体には、台風のようなものすごい風圧が叩き付けられつつあった。
そしてその風が、氷室の体そのものを呑み込むほどに迫り……。
――直後に、空気に溶けるようにして音もなく霧散した。
同時に、何かがドサリと倒れる音。
咄嗟に身構えていた氷室は、目の前の風の塊が消えたことを確認すると、ようやく思い溜め息を吐き出した。

「何とか、なりましたね……」
氷室の見下ろす地面の上。
そこは風圧によって地面が抉り取られ、まるで隕石が落下したかと思わせるほどのものだった。
「氷室、無事？」
飛鳥が駆け寄り、訊ねる。
「ええ、とりあえずは。それよりも、彼のほうが気がかりです」
そう言うと、氷室は小走りに駆け出した。
ちょうど、あの風の塊の発生源ともなった彼の下へと。
飛鳥もそれに無言で続いた。

距離にしておよそ四百メートル。
それほど離れた場所に、彼は倒れていた。
駆けつけた氷室が、倒れた彼の脈を取り始める。
「……どうやら、命に別状はないようですね。気を失ってはいますが、呼吸も心拍数も正常です」
「まぁ、これで死なれたらこっちとしてはものすごく後味悪いしね」
「全くです。今夜は本当に、必要以上に力を使い過ぎてしまいましたね」
「でもまさか、まだ新しく能力に目覚めるヤツがいたなんて……」
言いながら、飛鳥はそこに倒れる彼を見下ろす。
歳は恐らく自分と同じくらいで、およそ争いごととは縁がなさそうなほどに優しい顔をした少年。
彼の右手の中指には、能力者の証である『Ｒｉｎｇ』がはめられていた。
そう。
彼が能力者として目覚めたのは、本当にたった今のことだったのだ。
ただ、結果として力は制御できず、暴走する形になってしまい、それをようやくのことで飛鳥と氷室が止めたのだ。

彼の属性は風。
風には癒しの力もあるはずなので、しばらくすれば彼も目を覚ますだろう。
だからこそ、それまでに二人はこの場を去っておきたかった。
「でもまぁ、なっちゃったもんは仕方ないか。私達だって似たようなもんだったわけだし」
「投げ槍ですが、確かにその通りですね。どの道今の私達も、相当に消耗しています。今夜はもう戻った方がいいでしょう。それに……」
と、氷室はそこで一度言葉を区切り、眼鏡を押し上げながら続けた。
「この少年も近いうちに、嫌でも思い知るでしょう。思いのほか、再開する日は遠くないでしょうね」
「……そう、だね。こんなこと言うのも何だけどさ、少しだけ、この子に同情するな……」
「……よしてください、飛鳥。それはつまり、私にも同情するということですか？　そして、あなた自身にも」
「……ゴメン、バカなこと言った」
「……疲れましたね。早く戻って、今夜はもう休みましょう」
「ん……」
一足先に歩き出す氷室に続いて、飛鳥も歩き出す。
ただ、去り際にもう一度だけ、飛鳥は彼のほうを振り返った。
その表情が、わずかに悲しみに染まっている。
「もう、逃げられないんだね。私も、アンタも……」
「……飛鳥」
「ゴメン、今行く……」
そうして二人は去っていった。
後に残されたのは、壁に背を預けて静かに眠る一人の少年。
――黒栖大和の姿だけだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５：今日の行方

どういうことか分からないが、僕はどうやら自分の足で家まで帰ってきたらしい。

らしい、というのは、僕自身の記憶の中にはそんなことが残っていなかったからだ。

言われてみれば確かに、自転車を押しながら道の上を歩いていたような気もする。

けれどやっぱりそれは気がするだけのことであり、果たしてそれが実際の僕の行動なのか、それとも記憶が混濁しているだけなのか、真偽のほどは分からない。

けど、どうやら母さんや唯の話を聞くところによると、僕は自転車で家を飛び出して一時間ほど戻ってこなかったそうだ。

そう、出かけたのは覚えている。

僕が自転車に乗って街外れの廃工場に向かったのは、紛れもなく僕自身の意思でそうしたからだ。

そして僕は廃工場に辿り着き、敷地の中へと進入した。

そしてそこには、今まで僕の生きてきた短い人生の中では決して巡り合うことのできないデタラメな光景が広がっていた。

まず最初に、三人の男女の姿。

それは遠目から見た僕の目にも、間違いなく人間の外見をしていた。

だが、次の瞬間。

僕のその見解は、改めざるを得なくなってしまう。

――三人のうちの一人の少女が、その手から雷の矢を放った。

それは本当に、マンガやゲームの世界でしか見ることのできなかった光景だった。
僕が暮らすこの現実世界……ノンフィクションの世界では、決してあってはならないような光景。
けれど目の前には、確かにフィクションである仮想現実が映っていた。
その、あまりに現実を跳び抜けすぎた光景に、僕は恐怖を忘れて見とれるくらいにその場で立ち尽くしていた。
奇麗だった。
少女の放ついくつもの雷の矢が夜の闇を裂いて走るたび、それはさながらに夏の夜空に浮かぶ花火を連想させた。
その矢は、壁に触れれば跡形も残さず吹き飛ばし、地面に落ちれば容易く土を抉り返した。
圧倒的な力だった。
それこそ、やはりこの現実世界の中にはあってはならないほどの。
少女は何者かと争っていた。
敵と言う言葉で表現するのならば、標的は一つだった。
とは言っても、僕から見ればその標的すらも一人の少年……つまり、人間の姿に見えた。
もう一人の青年は、どうやら少女の味方のようだった。
僕が呑気に見とれている間に、三人の戦況は著しく変化を遂げていた。
少女がいくつも雷の矢を放ち、いとも簡単にそれを回避していた少年の姿が、突然凍りついたように動きを止めた。
その瞬間、何が起こっていたのかは僕の目には遠すぎてはっきりとは分からない。
だけどそれで、この三人の争いは終局を迎えることになる。
迸る雷光。
少女の手に集う青白い閃光が、やがてゆっくりと一対の弓矢へと姿を変えた。

少女は弓を持ち、矢を構え、呪文のような言葉を詠うように呟いていた。
その言葉に呼応するかのように、雷の集束がいっそう激しさを増した。
ギリギリと、矢を引く音が僕の耳まで届くかのようだった。
そして少女は、フッと力を抜くようにして矢を放った。
それと同時に、再び呪文のような呟きを残して。
直後に、もはや矢とは言いがたいほどの大きさ……まるで槍のような巨大な矢が、夜の闇を全て呑み込みながら音を超えて駆け抜けた。
その瞬間に僕は、微かな耳鳴りを覚えていた。
空気が震え、一瞬だけこの場所から音という音が全てかき消されたようだった。
耳鳴りが収まる頃、僕の視界の先には三人いたはずの人影が二人に減っていた。
残っているのは少女と青年の二人。
そのうちの一人、青年の方が僕の存在にようやく気付いたようで、わずかだが驚きの表情を見せていた。
青年は少女を呼んだようで、二人は揃って僕の方へと歩み寄ってきた。
僕はこの瞬間、ようやく恐怖という感情を思い出した。
二人が一歩近付くたびに、僕の寿命が削り取られていくようだった。
殺される。
そう思った。
でも、逃げられない。
足がすくんで動かない。
どうすればいい？
どうしたらいい？
そんなとき、またあの超えが聞こえたんだ。

――我に身を委ねよ。力を求めよ。

そして、僕は……。

目が覚める。

そこが自分の部屋のベッドの上だと気付くのに、そう時間はかからなかった。

「……」

体を起こす前に、僕は寝たままの姿勢で軽く拳を握ってみた。

握っては開き、握っては開きを何度か繰り返す。

痛みはない。

体中が重苦しく、かぶせられている布団が鉄の塊とも思えるくらいだったけど、体は特に異常はないみたいだ。

「……うっ」

そう思って体を起こそうとしたら、腰周りと腹部、それにふくらはぎの辺りから痛みが走った。

筋肉痛のあの痛みだった。

まるで体内に電流を流され、そのせいで各部位が麻痺してしまっているかのよう。

「って……」

痛みに悩まされながらも、僕はどうにか上半身だけを起こす。

カーテンも締め切られ、わずかに薄暗い部屋の中。

今が何時頃なのかは分からないけど、少なくとも日付は変わって土曜日にはなっているだろう。

目はしっかりと覚めているのに、対して体はあちこちにダルさが充満している。

僕はとりあえずベッドから降りようと、机に右手を乗せて立ち上

がろうとして……。
「……え？」
それに気付いた。
――僕の右手の中指には、銀色の指輪がはめられていた。
緩くもなくきつくもなく、サイズは推し量ったかのようにピッタリと合っていた。
いや、そうじゃなくて。
僕はその指輪を凝視する。
それは紛れもなく、昨日学校で拾ってそのまま捨てるに捨てられなかったもの。
指輪の割には装飾が何一つ無く、ガラス細工の宝石さえ彩られていない。
指にはめられたままでは見ることはできないが、その指輪の内周には文字でも言語でも記号でもない不可解の羅列が刻まれている。
まるで血のように強く深い赤で記されたそれは、知ることも読むことも叶わない歴史の中の影の残骸。
だけど、僕はその何だか分からないそれを、何であるか知っている。
――クリムゾン・テキスト。
僕の頭の中にある唯一の情報がそれだ。
それが恐らく、この赤い記号のようなものの羅列の名称なのだとは思う。
……いや、そんなことはこの際どうでもいいんだ。
僕が驚いているのはそんなことではなく、一体なぜ、この指輪が僕の指にはめられているのかということだった。
「そんな、いつの間に……」

呟きながら、僕は思い返す。
近づいてくる、二人分の人影。
僕は逃げることもできずに、ただ立ち尽くす。
殺される。
逃げなくては。
殺される。
逃げなくては。
殺される殺される殺される殺される殺される殺される殺さ……。
「……そう、だ……」
思い出した。
僕は他の誰でもない、自分の意思でこの指輪を右手の中指にはめたんだ。
だけど、どうしてだろう。
その後の記憶がプッツリと途切れてしまっていて、僕は何一つ思い出せない。
この指輪を僕がはめたあと、一体何があったのだろうか。
気が付けば僕は自転車を押しながら自宅まで戻ってきていて、玄関先で母さんと唯に見つけられたんだ。
そして僕はそのまま意識を失って、倒れてしまった。
自転車の倒れる音が、やけに鮮明に耳の奥に残っている。

コンコン、と。
部屋の扉を叩く音がした。
「大和？　もう起きてる？」
母さんの声だ。
「……あ、うん。今起きたよ」
「入るわね？」
母さんがドアノブを握る音が聞こえ、僕は慌てて指輪を外して手の中に握りこんだ。
「どう？　体の具合は、もう大丈夫？」

「うん。平気だと思う。ちょっと筋肉痛みたいだけど」
「そう、ならよかったわ。でも、本当にビックリしたわよ。戻ってくるなり、いきなり玄関先で倒れこむんだもの」
「……何か、急に疲れちゃってさ。ゴメン」
「まぁ、幸いケガとかもないみたいだからいいけどね。でも、何かおかしいなって思ったら必ず言ってね？　精密検査とかは大げさかもしれないけど、そうじゃないと分からないケガとかもあるかもしれないから」
「分かった。そうするよ」
「それで、もう起きてこれそう？　もうすぐお昼だから、少しくらいは何かお腹に入れておいたほうがいいわよ」
「そう、だね。そうする」
「じゃ、私は下にいるから」
そう言うと、母さんは踵を返して部屋を出て行った。
僕も続いて立ち上がるが、やはり筋肉痛のせいだろうか、なかなか体は言うことを聞いてはくれない。
それでもまぁ、歩けないほどひどいものではなかった。
足取りは少し危なっかしかったけど、僕も母さんに続いてすぐにリビングへと顔を出した。
テーブルの上からは食欲を誘ういい匂いが流れ、僕は今更ながらに空腹を覚える。

「あ、大和……」
すると、なぜか僕の背中から母さん以外のもう一人の声が聞こえてきた。
振り返るまでもなく、僕はその声の主が誰であるかすぐに分かった。
そして振り返ってみると、案の定、そこには予想通りの声の主である唯がいた。

「唯？　あれ、何でここにいるの？」
と、僕は素直に疑問をぶつけてみる。
いや、別にそんなに驚くようなことでもないんだけどさ。
「何でって……そんなことよりも、体は大丈夫なの？　まだ寝てたほうがいいんじゃないの？」
「ん、ちょっとあちこち筋肉痛で痛いけど、それだけ。大したことじゃないよ」
「……そっか。なら、いいけど……」
一安心したようで、唯はホッと小さく息をついた。
なので、僕はちょっとからかうように言ってみる。
「……もしかして、心配してくれてた？」
「……あのね、当たり前でしょ？　いきなり目の前で倒れられたら、そりゃ私だって心配するわよ！」
なぜか怒鳴られた。
嬉しいのやら、そうでないのやら。
「ゴ、ゴメン……」
「……別に、もういいよ。大したことじゃなかったみたいだし」
そうして、唯はようやく肩の荷が下りたように小さく笑った。
幼馴染としての年月は長いから、僕にはその笑みの意味がよく分かる。
それに今だって、休日の昼間から唯はこうしてここにいる。
それはつまり、少なくとも僕が起きてくるよりも早い時間からやってきてくれたということなのだろう。
「……ありがと」
と、聞こえないように僕は呟いてみた。

昼食を食べ終え、それが疲労に拍車をかけたのか、僕はまた眠気を覚え始めてしまっていた。
病み上がりという言葉は適切ではないけど、今の僕はまぁそれに似たような体調なのは確かだ。

どの道この体では何をするにも負荷がかかりすぎるし、今日もこれといって得にする予定はない。
というわけで、僕は見舞いに来てくれた唯を玄関先で見送った後、また部屋に戻ってベッドの上で天井を見上げて寝転がっていた。
開けたカーテンの向こう側には、カーテンの閉まったままの唯の部屋の窓があった。
午後からは出かけると言っていたから、今は恐らく家にいないんだろう。
僕は視線を戻す。
再び見上げる天井と僕の顔の間に、ぼんやりと自分の右手をかざしてみた。
五本の指の真ん中に、銀の指輪が輝きもせずにはめられている。
それを外して、ジッと内周に刻まれた模様を見る。
相変わらず意味も規則性も何もかもが分からない記号の羅列。
もしこれが文字だとしたら、やはりそこには意味があるはずだと僕は思う。
頭の中に残る、クリムゾン・テキストという言葉。
もしもそれがこの記号の羅列のことを指し示しているのなら、これがテキスト……つまり文章ということになる。
文章というものは、単語の集まりだ。
となるとやはり、この記号一つ一つに文字としての機能が割り当てられていると考えていいだろう。
そうだとしたら、ここには一体どういった内容の文章が書き記されているのだろうか？
僕はそれが気になって仕方がなかった。
それに、頭の中に直接話しかけてくるようなあの声。
力を求めろとか、身を委ねろとか、受け入れろとか。
力っていうのは、一体何のことなんだろう？
知力、体力、適応力、判断力などなど。
力と一口に言われても、そこにある種類はまさに千差万別だ。

だとしたら、僕はその中からどの力を選び、求めるだろう？
知力を得て世間一般が言う天才にでもなるのか。
はたまた、体力を得てオリンピックの金メダリストにでもなるのか。
こうして考えると、そのどれもがあまりにも現実的だった。
もっとこう、現実離れしたような力を望むとすれば、それはどんなものなのだろう？
それこそ、僕はすぐに思いつくのはマンガやゲームの世界のことばかりだった。
例えば……そう。
誰もが一度は恋焦がれたことがあるだろう、魔法のような力を手に入れたいと。
炎を操り、水を操り、風を操る。
もちろんそんなことは現実には不可能だけど、だからこそ人間は空想するのかもしれない。
ああだったらいい、こうだったらいいと。
もしもそういう心がなければ、この世界は夢も希望もなくなっているのかもしれない。
しかし、そうだとすると……。
「昨日のあれは、一体何だったんだろう……」
間違いなく僕は昨夜、その空想の中でしか起こりえないであろうものを目撃した。
雷の矢を放つ少女と、その少女と行動を共にしていた青年。
そしてもう一人、恐らくはもうこの世には存在すらしていないであろう、三人目の少年。
どういうわけか知らないけど、昨日見た構図はまさに戦いのそれだった。
実質的な二対一の戦いの結果、僕の目の前で少年は殺されていた。
いや、僕がその生死を確認したわけではないけど、あれは確実に

殺されている。
少女の放った巨大な雷の矢に、少年は貫かれた。
跡形も残っていなかった。
そして次に、僕が見つかった。
向かってくる二人分の影。
殺されると、そう思った。
そして……。

「……あれ？　その後、どうなったんだっけ？」
僕の記憶はそこでプッツリと途切れている。
しかし、こうして今生きているということは、僕はうまく逃げ延びることができたということだろうか？
それとも、殺されずに済んだのか。
どちらにしても、その間の記憶だけがスッポリと抜け落ちているというのは不気味だ。
何か、一番大切な部分を見失っているようで、すごく居心地が悪い。
思い出せ。
あのとき僕は、何を思ったんだ？
「……あのとき、また声が聞こえたんだっけ」
力を求めろと、誰かの声がした。
だけどそのときの僕は、そんなことになりふり構っている余裕なんてこれっぽっちもなかった。
情けないことに、ただ逃げることだけを考えていた。
だって、殺されてしまうと思ったから。
でもそんなことはお構いなしに、あの声はしつこく僕に語りかけてきた。
録音されたカセットテープの声みたいで、催眠術をかけられているかのよう。
……そうだ。

その声があまりにもしつこく僕を呼ぶので、僕の意識も一瞬だけその声に向かったんだ。
力を求めろという声。
その声に応えるかのように、僕は無意識のうちに求めていた。
力を。
それは、どんな力？
「……逃げ延びる。いや、違う。僕が、求めた力は……」
あのとき、僕は心の中で叫んだんだ。

――生き抜く力が欲しい、と。

そうしたらまた、頭の中にあの真っ赤な記号……クリムゾン・テキストが流れ出して。
だけど、そのときは違った。
今まではただの記号にしか見えなかったそれらが。
あの時の僕には、こう、ちゃんと……一つ一つが意味を持つ、文章として理解することができたんだ。
だから僕は、そのテキストを読み上げた。
心の中で、静かに呟いたんだ。

――我は世界に流れる者。決して掴めず、決して見えず、決して消えぬ。されど我は、何よりも疾き者なり。汝、我が力を求める者か？
求めるならば、我が名を呼ぶがいい。古の契約の下に、我は汝に我が風の力を授けよう。

そして、僕は確かにその名前を呼んだ。
知るはずのない、その名も無き風の名前を。

「――シルフィア」

瞬間、僕の指にはめられた指輪が呼応するかのように輝き始めた。
「え……？」
眩いほどのその光は、青と緑が折り重なったようですごく奇麗だ。
見るものを圧倒させるほどのその光は、しかしまるで僕に恐怖を感じさせない。
それどころか、僕はその光に包まれて守られるような、そんな妙な安心感さえも抱いてしまう。
やがて光は音もなく収束し、何事もなかったかのようにただの銀色へと成り下がった。
僕は体を跳ね起こし、食い入るように指輪を眺める。
目で見た限りではおかしなところは見当たらない。
どこからどう見ても、それは単なる銀色の輪に過ぎない。
そうして僕がもう一度ベッドに体を預けて寝転がった、そのときだった。
「……」
ふいに僕は、自分の体に起こったその異変に気付いた。
おかしい。
こんなことって、あるのだろうか……。
――先ほどまでの筋肉痛が、まるでウソのように何一つなくなっていた。
腰周りも腹もふくらはぎも、もう何も感じない。
これは、一体どういうことだ？
これじゃまるで、本当に魔法みたいに……。
そう思った瞬間、僕の脳裏を映像が横切った。
そして同時に、僕はなくしたままだった昨夜の記憶の一部を完全に思い出していた。
「……そうだ、僕は、あのとき……」

歩み寄る二人を目の前に、僕は生き抜くための力を求めた。
そうしたら今みたいに、光に包まれて、それで……。

「――僕は、彼らと……戦っていた……？」

確かめるように呟いて、僕はもう一度その銀の指輪を見つめ返した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６：真昼の密談

一夜明けた今日、僕はまた昨夜と同じこの場所へとやってきていた。

街外れにある廃工場跡。

休日の昼間でも、この場所に見つけられる人影は一つもない。

周囲は高い塀で囲まれ、基本的に立ち入り禁止区域に指定されているこの場所。

どうして僕がそんな場所にいるかというと、それは昨夜のあの出来事に関しての手がかりを得るためのものだ。

……だった、のだが。

「……そん、な……」

正面ゲート越しに工場の敷地を覗いている僕は、そう呟かずにはいられなかった。

この目に映る景色が信じられない。

あれ、だって……どうして？

昨日は、あんなに……。

僕の目の前に広がる景色は、殺風景ではあるけど平和なものだった。

そう。

まるで一夜前に、この場所でデタラメな争いごとが起こっていたなんて思わせないくらいに。

――建物も地面も、何一つとしてあの戦いの痕跡を物語るものが見つけられなかった。

そんなバカなことがあってたまるものか。

僕は見たんだ。

昨日の夜、あの瞬間、確かにここは一つの戦場になっていた。
炎は猛るように燃え上がり、いくつもの雷の矢が地面を抉り取っていったはずだ。
けれど今、こうして僕の目の前に広がる景色は、その凄惨さをまるで感じさせない。
無機質なほどに寂れた地面が広がり、佇む倉庫跡や工事用の作業機器も何一つとして壊れた様子を見せない。
これは一体、どういうことだ？
それとも僕はやっぱり、ただ悪い夢を見ていただけなのだろうか？
「……違う。あれは絶対、夢なんかじゃない」
僕は自分の指にはめられた指輪を見て、そう呟いた。

念のため、僕は昨夜と同じように鉄柵を乗り越える前に小石を一つ放り投げてみた。
放物線を描きながら、しかし何事もなく小石は敷地の向こう側へと落下する。
どうやらあの電流トラップのようなものは、今は解除されているようだ。
安全を確認した上で、僕はまたコンクリートの塊を踏み台にして鉄柵をよじ登る。
柵を超え、無事に着地。
がらんどうなほどに広い敷地の中は、やはり寂しいくらいに殺風景だった。
昨夜のことに関して、何か手がかりの一つでもあればとやってきたはいいが、この様子だとどうやら無駄足になってしまいそうだ。
僕はざっと周囲を見回し、静かに溜め息をついた。
気温が低いせいか、吐いた息はわずかに白く濁って溶けるように消えていく。
天気も悪く、空は一面が曇天だ。
天気予報が正しいのなら、午後は小降りだけど雨が降るとのこと。

長居は無用かなと、僕はもう一度周囲を見回して再び鉄柵へと向き直り……。

「――体の具合はどうですか？」

ふとそんな声に呼び止められて、僕の足は凍りついたように止まった。

一拍の間を置いて、僕は声のした方を振り返る。

そこに。

昨夜と同じ、白いワイシャツに黒いズボンを崩すように着こなした青年がいた。

細身で長身、その長い黒髪は首の後ろで一度束ねられており、眼鏡がよく似合う理知的な顔立ちをしている。

僕と青年は互いに向き合ったまま、一言も発さずにいた。

それはというのも、僕としてはどういう反応をすればいいのか分からない。

僕は確かにこの青年の顔を覚えてはいるけど、こうして話しかけられる理由なんて心当たりがなかったからだ。

いや、それよりも何よりも。

もしも、僕の記憶に間違いがないとすれば、僕は昨夜、この青年ともう一人の少女を相手に戦っていたはずだ。

その結果がどういう形で幕引きになったのかは分からないが、少なくとも友好的な関係とは思えない。

だとしたら、この青年がこうして今ここにいるということは、僕を待ち伏せていたということなのだろうか？

しかしそうだとすると、少なくとも僕は生かされるべき存在ではないということになる。

でもそうだとしたら、昨夜のうちに僕を……殺してしまうことなんて、至極簡単なことだったはずだ。

それをわざわざ、日を改めて待ち伏せするなんて回りくどくて非

効率的な手段を取るだろうか？

……だめだ。

考えれば考えるほど否定論しか浮かんでこない。

このまま一人で坩堝に飲まれているだけじゃ、根本的な解決には至れない。

かといって、警戒を緩めるわけにもいかない。

一つはっきりしていることは、仮にここで再び青年と戦うことになったとすれば、僕に勝ち目はないということだけだ。

嫌な汗が流れる。

緊張で体が強張り、必要以上の力が全身に重くのしかかっているようだ。

がしかし、青年の口から出た言葉は僕にとって意外なものだった。

「安心してください。別にあなたに危害を加えるために、私はここにいるわけではありません。私は昨夜の事後処理をしていただけです」

青年の口調は極めて冷静で、まるで敵対心や闘争心を感じさせないものだった。

毒気を抜かれるとはこのことだろうか。

やたらと警戒を抱いていた僕の心が、その落ち着いた口調に弛緩していくのが分かる。

「物分りがよくて助かります。飛鳥にも見習わせてやりたいくらいですね」

僕が警戒を解いたことが分かると、青年は小さく微笑みながらそう言った。

「さて……」

青年は一度眼鏡を押し上げる仕草を見せ、微笑を消して少しだけ真面目な表情で言った。

「あなたがなぜ昨夜に続いてこの場所にやってきたのか。大方の見当はついています」

「……」

口を閉ざしたまま、僕は青年の言葉に聞き入った。

それは、青年の言う言葉が正しかったからだ。

僕がこの場所にやってきた、その目的は一つ。

昨日のあの光景は一体何だったのか？

そして、僕は一体どうなってしまったのか？

それらの問いに対する答え……とまではいかなくとも、手がかりくらいなら得られると思ったからだ。

まぁ、実際は青年の言う事後処理とやらが全てをなかったことにしているようではあるけれど。

「私が答えられる限りの問いには答えましょう。ですが、質疑応答をするのにこんな屋外というのはあまり好ましくありません。密談なら密談らしく、それに相応しい場所がある。分かりますね？」

ようするに、青年は僕についてこいと言っているのだ。

もちろん、危険の可能性もある。

青年の言葉のどこからどこまでが本音で、そこからどこまでが偽りなのか、僕には判断のつけようがない。

けれども。

危険を冒さずに利益を得ようなんて、それこそ甘い話だ。

虎穴に入らずんば虎児を得ず。

危険と分かっていても、踏み入れなきゃいけない瞬間もある。

少なくとも、今はその瞬間だ。

「……案内してください。今は、僕もあなたを信じます」

「本当に、理解が早くて助かります。では、こちらへ。車で移動になりますが、構いませんね？」

答えずに、僕は頷いた。

数歩先に歩き出す青年の背中を負って、僕はその後に続いた。

車の中での会話は皆無だった。

運転席で運転する青年を横目に、僕は助手席に座りながらフロン

トガラス越しに流れる街の景色をぼんやりと眺めていた。
時間にすれば十五分ほどだろうか。
いくつかの曲がり角を曲がって、車はオフィス街付近にある路肩に停車した。
「着きました。降りてください」
言われて、僕はシートベルトを外してドアを開ける。
歩道に上がると、僕の正面には一つの自社ビルらしい建物が聳え立っていた。
その二階の部分に当たる窓ガラスに、こんな文字が書かれている。

『各務探偵事務所』

「……探偵事務所？」
思わず僕はそう口にしていた。
まさかとは思うけど……いや、このビルは五階建てだし、まだそうと決まったわけじゃない。
そんな様子の僕を横目に、青年も車を降りて歩道までやってくる。
「こちらです」
その一言に促され、僕は青年のあとに続く。
ビルの階段を上り、二階の扉の前で青年は立ち止まる。
わずかに後ろを振り返り、僕が付いてきていることを確認すると、招き入れるようにその扉を押し開けた。
僕の中のまさかが的中した瞬間だった。
「どうぞ。狭くて汚いところですけど」
言われるがままに、僕は扉をくぐる。
部屋の中は薄暗く、わずかに埃臭い匂いがした。
耳元でパチパチと音がしたと思ったら、部屋の明かりが付けられた。
音は電気のスイッチだったようだ。
にわかに明るくなる室内。

その中で、僕が最初に見たものは……。
「……」
その光景に、僕は思わず体を硬直させた。
やや遅れて、僕の背後に立っていた青年の口からもハァという溜め息が漏れた。
僕の目の前にあるソファの上に、昨夜のあの少女が堂々と寝転がっていたのだ。
相当熟睡しているようで、僕達がやってきたことなどまるで気が付いていない様子だ。
そうでもなければ、見事な鼻提灯を浮かべながら寝ていられるわけがない。
「……あの、これは……」
僕は遠慮がちに青年に訊ねた。
「……見苦しい。あまりにも見苦しい」
うなるように、青年は顔を俯かせていた。
「飛鳥、何をしているんですかこんなところで。起きなさい」
飛鳥と呼ばれた少女は寝返りを打ちながらウンウンとうなるが、しかし目覚めない。
「いい加減にしてください。事務所で寝るなと、あれほど言ったでしょうに」
青年は飛鳥の体を何度もゆする。
しかし、飛鳥はうなるばかりで一向に起きる気配がない。
そう思っていたら、青年はついに強行手段に打って出た。
――寝ている少女の口と鼻を、何のためらいもなく指と手で塞いだ。
「……」
「……」
「……」

三人分の沈黙が続く中、しだいに飛鳥の様子がおかしくなっていく。

息苦しさを覚え、ジタバタと手足をばたつかせ、ついには死に物狂いで暴れ始め、最終的にソファから転げ落ちて鈍い音を響かせた。

「やれやれ。やっと起きましたか」

さらりと言う青年。

一方、飛鳥はゼェゼェと息を切らせながら無我夢中で酸素を貪っている。

「な、何すんのよ氷室！　私を殺す気？」

バッチリ目が覚めたようで、飛鳥は意気込んで言い返す。

「殺しても死ぬタマじゃないでしょう、あなたは。それに、寝るなら仮眠室を使えといつも言っているはずです」

「だからって！　もうちっとマトモな起こし方があるでしょう！」

「騒がないでくださいよ。寝起きの悪い人ですね。顔でも洗ってきたらどうですか？」

「誰のせいだ、誰の！　危うく三途の川を渡りきるところだったじゃない！」

「それは残念。次があったら、ぜひ渡りきってください。期待してます」

「任せろ！　……って違う！　ああもう、人の話を最後まで聞け！」

「そっくりそのままお返しします。いいじゃないですか。結果として目はしっかり覚めたんですから」

……何なんだろう、この二人のやり取りは。

僕は一人その場に取り残されたように、呆然とその光景を眺めていることしかできなかった。

「どうでもいいですけど、飛鳥。そろそろ来客がいることに気付いてくれませんか？」

「話を逸らすな……って、来客？　そんなのどこに……」

言われて、飛鳥が振り返る。

そして、僕とバッチリ目が合った。

「あ……」
そう一言呟いて呆然とする飛鳥に、とりあえず僕も礼儀として挨拶をしておく。
「……ど、どうも。初めまして……ってわけでもないけど……」
「あああああ！」
キーンと耳鳴りがするくらいの大声で、飛鳥は叫んだ。
思わず僕は両手で耳を塞ぎ、一歩後退する。
「アンタ！　昨日の風使い！」
「飛鳥、うるさいです」
しかし青年の言葉も虚しく、飛鳥のテンションは衰えない。
「か、風使い？」
飛鳥の言葉に、僕は疑問を覚える。
「無理ですよ、飛鳥。恐らく彼は、まだ記憶がしっかりと繋がってないはずです」
青年の言葉に飛鳥は振り返り、確かめるように聞く。
「じゃあ、昨日のあれはやっぱり……」
「ええ。『Ｒｉｎｇ』の暴走です。まぁ、幸いにも被害は最小で済みましたから、それはもういいとしましょう」
僕は二人の会話の意味が全く分からなかった。
なんだか急に迷子になってしまったような、居場所のなさを感じてしまう。
そんな僕の様子を読み取ったのか、青年が口を開く。
「ああ、すいません。一度に言っても分からないでしょうから、少しずつ説明しますね」
「……ん？　ちょっと氷室、それってどういうこと？」
「何がですか？」
「説明するって、もしかしてコイツも参戦させるってこと？」
「話に進み方次第では、そうなる可能性もありますね。決めるのは彼自身ですから、私はどうこう言いませんけど」

「ちょ、ちょっと。そんなの、私一言も聞いてないわよ？」
「当たり前です。寝てたじゃないですか」
「う……」
その一言で飛鳥は黙った。
どうやら痛いところを突かれてしまったようだ。
それにしたって、僕には分からないことだらけだ。
それに、参戦するっていうのは一体どういうことなんだろう？
などと、僕が考えていると青年が言った。
「とりあえずは座ってください。多分、長くなると思いますから」
そう促されて、僕はソファに腰掛けた。
僕の隣に飛鳥が座り、正面には青年が座った。
そしてゆっくりと、僕達の密談は始まった。

まずは自己紹介ということで、お互いを名乗ることになった。
「え、と……大和。黒栖大和です。歳は十六」
「私は各務氷室。一応、この事務所の経営者ということになります」
「……新宮寺飛鳥。十五歳でーす」
十五歳と聞いて驚いた。
僕より年下だったのか……。
「さて。とりあえず、私のことは呼びやすいように呼び捨てで構いません。こちらも省かせていただきますが、いいですか？」
断る理由はなかったので、僕は頷いた。
「結構です。では、大和。まず、あなたはどこまで事態を把握していますか？」
「……事態っていうのは、その……昨日みたいな出来事のことですか？」
「何でも構いません。身の回りの変化や、見たこと気付いたこと。何かありますか？」
僕は思い出してみる。
確かに、昨日今日の間に多少の変化があった。

一番衝撃が大きかったのは、何と言っても昨夜の一件だ。
今まで空想の中でしか起こらなかったはずの出来事が、目の前に現実として広がっていたのだから。
「……なるほど。極端な話、まだ何も分かってないということですね」
氷室の言葉に僕は頷く。
だからこそ、僕は手がかりを求め、その先で氷室と出会う形になったのだ。
「そうなると、どこから話せばいいですかね……」
氷室はしばらく考える素振りを見せる。
「大和」
そして一言、僕の名前を呼んだ。
「は、はい」
「いいですか？　今から私が話すことは、どれだけ現実離れしていても全て事実です。それをまず、頭の中に叩き込んでおいてください」
「……はい」

「結構。では、まずは単刀直入にいきましょう。質疑応答は後回しです」
氷室はそこで一度言葉を区切り、静かに深呼吸する。
「結論から言うと、あなたは契約者として選ばれた存在です。契約の媒体は、あなたが指にはめているその指輪。それらは『Ｒｉｎｇ』と呼ばれる、古代遺産のアクセサリの一つです。契約者は『Ｒｉｎｇ』を通じて契約を果たした後、能力者として覚醒します。早い話が、あなたはすでに能力者として覚醒してしまっているんですよ」
それは本当に、ＲＰＧの中に出てくるような設定だった。
まさかそんな空想の中の設定に、僕が巻き込まれている？
「……そして」
氷室はやや口調を重くして、再び言葉を続けた。

「覚醒した能力者は、『Ｒｉｎｇ』の中に封印された力を自由に使いこなすことができます。それらの力は千差万別ですが、一言で言えばどの力もとてつもないものばかりです。現代科学の兵器さえも圧倒するでしょう。では、なぜそんな力を授かったのか」

僕は息を呑んだ。

話の合い間のこの空気が、僕に見えない重圧を加えてくるようだ。

「これに至っては至極簡単です。そもそも……大和、あなたは力と聞いてまず、どんなものを想像しますか？」

「え、力、ですか？　そうですね……例えば、人よりも優れた知能だとか、才能だとか。そういうのですか？」

「なるほど。確かに大和の言うそれも、力としての大義名分には含まれるものですね。ですが、そんな回りくどいことなんて何一つ必要ないんですよ。そもそも力というものは、他者を圧倒するもの。それだけで強大なもの。支配をするものなのです」

「……」

氷室の言葉に、僕はわずかに圧倒される。

言っていることは間違いないのだが、そこに何か言いようのない恐怖を覚えてしまう。

「……力の使い方を間違った事例、何か分かる？」

ふいに隣の飛鳥が聞いてきた。

不意打ちのようなその問いに、僕は答えを持ち合わせていない。

「戦争よ」

と、飛鳥は簡単に言い切った。

「その通りです」

後押しする氷室の言葉。

「いいですか、大和」

念押しされ、僕は氷室の目を真っ直ぐに見た。

「ファンタジーの世界などでは、力は誰かを守るためにあるものなどと、正義の象徴として多用されています。ですが、実際はそんなことはありません。誰かを守るということは、つまり別の誰かを傷

つけるということと同意です。正義も悪もあったもんじゃありません。つまり、そういう力なんですよ。我々が持ち合わせたものは、ね……」

「……それって、つまり……」

「……あなたの思っている通りです」

一呼吸置いて、氷室は結論を述べる。

「――我々は、この契約の力を持って戦い合う、あるいは殺し合うのです。最後の一人になるまで、ね」

言われて、僕は改めて自分の両手を広げてみた。

どうやら、そう遠くない未来に、僕のこの両手も血の色で染まってしまうかもしれないらしい……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７：明日に向けて

夕暮れが迫る街の景色を、僕は後部座席のシートに座りながら窓越しに眺めている。
昨日までは夕方になってもまだ蒸し暑さを覚えていたけれど、今日はすっかり冷え込みが激しく、秋の夕暮れを実感させられる。
僕の目に映る景色がどんどん流れていく。
行き交う人々と街並み、生活臭の溢れるこの小さな街は、今日も静かに夜を迎えようとしていた。
だからこそ、僕はまだ信じられない。
この小さな街が、古代の遺産を巡る戦争の舞台になろうと……いや、すでになりつつあるなんてこと。
こうして僕が見ている景色に映る誰かも、もしかしたらすでに能力者として目覚めてしまっているのかもしれない。
望みもしない戦いの渦の中に、巻き込まれているのかもしれない。
それはやっぱり、どう考えても納得のいかないことばかりだと思う。
少なくとも、僕はそうだ。
戦争を始めましょうと言われて、分かりましたとすぐに返事ができるほど僕はバカじゃない。
しかしそれでも、僕達は……。
「……」
視線を戻す。
運転席の氷室と、助手席の飛鳥。
この二人も僕と同様に、能力者としてすでに覚醒を果たしている。
そして二人は、戦うことを選んだという。
だけどそれは、仕方のないことなのかもしれない。
生き残りが一人になるまで続く、これはサバイバルゲームのようなものなのだ。

つまりは、倒さなければ倒される。
それは死を意味するわけで、やはり生き残るためには最低限、身を守るための戦いを避けては通れない。
僕だってそれを、理屈の上では分かっているつもりだ。
だけど、それを受け入れることとは全く話が別問題だ。
身を守ることと誰かの命を奪うことは、決してイコールではない。
そんなことは分かっている。
分かってはいるけど……。

『――誰かを守るということは、つまり別の誰かを傷つけるということと同意です』

氷室の放ったその言葉は、紛れもない真実だ。
僕にはその言葉を否定することはできなかった。
できることなら、誰も傷付かずにこの戦争を終わらせてほしい。
もちろん僕は死にたくなんかないし、かといって赤の他人だろうとむやみやたらと死んでほしいとも思わない。
僕達が一体どういう理由でこんな運命の下に存在しているのかは知らないけれど、こんなのはあまりにも残酷だ。
考えれば考えるほど、僕は今にも逃げ出してしまいたくなる。
それが決して正しい道ではないと分かっていても、そうするしか方法がないように思えてしまうんだ。
この数時間の間で、僕の現状に対する見方はずいぶんと変わっていた。
氷室と飛鳥の話を聞いて、自分がどれだけ過酷な運命の中にいるのかを僕は思い知らされた。
そしてその運命というヤツは、どう足掻いても残酷な結末しか用意してはくれないようだ……。

「……どういう、ことですか？　戦争？　能力者？　僕には、何がなんだか……」

氷室の言葉を受けた僕は、それと同時にいくつもの疑問が浮かんできていた。

整理する情報が多すぎて、頭が混乱しているのかもしれない。

「落ち着いてください、大和。質問には一つ一つ、順序良く答えていきましょう。取り乱すと、肝心な部分を見落としますよ」

氷室の言葉に制されて、僕は少しずつ落ち着きを取り戻した。

体の力をできるだけ抜いて、気持ちをリラックスさせる。

握り締めていた拳を解くと、じんわりと汗をかいていた。

隣に座る飛鳥は、そんな表情の僕を見て、何か言いたそうな表情のまま結局口を開くことはなかった。

「……落ち着きましたか？　では、話を再開しましょう。聞きたくなくなる気持ちも分かりますが、少なくとも最低限の知識を持ち合わせていないと、この先色々と困ることになりますからね」

「……すいません」

「あなたに非はありません、大和。まずは目の前の現実をそのまま受け入れてください」

答えずに、僕は一つ頷いた。

「結構。では……そうですね。まずは『Ｒｉｎｇ』についてお話しましょうか」

言われて、僕は指にはめられた銀の指輪を見つめた。

それを確認してから、氷室は話を再開した。

「『Ｒｉｎｇ』とはそもそも、古代に何らかの目的で使われていた装飾品……アクセサリであるということしか分かっていません。これは、『Ｒｉｎｇ』そのものに関する歴史的資料が極めて少ないことが関係しています。ですから早い話が、私達……我々以外のすでに能力者として目覚めた人物も、何も詳しいことは知らないと見てまず間違いありません」

古代のアクセサリ。
それはつまり、紀元前のような大昔のことなのだろうか？
それとも、神話のような物語が伝わっていた創世暦のような太古のものなのだろうか？
どちらにしても気が遠くなるような過去の話だと思う。

「『Ｒｉｎｇ』に関しては、分かっていることの方が少ないですね。今の私に分かることは三つ。一つ目は、『Ｒｉｎｇ』には属性があるということ。二つ目、形状は名の通りに輪の形をしていること。三つ目、『Ｒｉｎｇ』による力は進化するということ。この三つです」

指を折りながら、氷室は言う。

「ちなみに大和、あなたの属性はどうやら風のようですね。覚えていませんか？　昨夜、ちょっとしたいざこざであなたは私と飛鳥を相手にやりあっていたことを」

そう言われて、僕はようやく確信が持てた。

どこか夢心地だった曖昧な記憶が、これでしっかりと繋がった。

「……やっぱり、僕は自分の力をコントロールできてなかったんですね」

「ええ、そのようです。ですが、それに引け目を感じることはありません。覚醒とは常に突然で、そのときの不可抗力で無意識に力が暴走するということは仕方のないことです。事実、私もそうでしたし飛鳥もそうだったらしいです」

僕が横目に飛鳥を見ると、飛鳥はどこかつまらなそうに頷いた。

「まぁ、過ぎたことは置いておきましょう。幸い、私達は大したケガもなく無事なわけですから。では、二つ目に移ります。形状に関してですが……」

言いながら、氷室はその長い黒髪の一部……右耳の辺りを掻き分けた。

「今言いましたが、『Ｒｉｎｇ』とはその名の通り輪という意味で

す。大和のそれが指輪であるように、私の『Ｒｉｎｇ』はイヤリングになっているんです」

氷室の右耳には、確かに何の変哲もない銀のイヤリングが付けられていた。

大きさなどは僕のものと異なるが、一見してただの銀の輪に見えるというのは共通項だろうか。

「ちなみに、飛鳥はペンダントにしていますよ。チェーンの先端に輪をくくっているんです」

言われて飛鳥の方を向くと、確かに飛鳥の胸元には銀のチェーンにぶら下がる銀の輪があった。

これもやはり、一見すれば珍しくもないただのアクセサリにしか見えない。

「次に属性。これははっきり言って、どれだけの種類が現存しているのか見当もつきません。とりあえず現在の段階で分かっているのは、私の水、飛鳥が雷、そして大和、あなたの風で三種類です。っと、忘れてました。昨夜の相手は火の属性を持っていたようでしたね。まぁ、詳しく確認する暇はありませんでしたけど」

その言葉に、僕の記憶の中で昨夜の出来事が甦る。

やはり、あの少年はもう……。

「……そんな顔をしないでください、大和」

僕の顔色を読み取ったのか、氷室がどこか悲しそうに言う。

「昨夜の相手。元を正せば、狙われていたのは私達のほうだったんですよ。結果として私達は彼を倒さざるを得なかったんです。そうでなければ、こうして私達は今あなたと会話することもできなかった」

それはつまり、逆に殺されてしまっていたかもしれないということなのだろう。

自らの命を守るための、当然の行動。

それは間違っていない。

自然界の動物の中では、弱肉強食なんてものはもはや暗黙の了解にすらなっている。
決して珍しいことじゃない。
「……それは、そうですけど……」
やはり、素直にその理を受け入れることは今の僕にはできない。
どちらが正しいとか悪いとか、そういう問題じゃないと思うから……。
「……話を戻しますが」
言って、氷室は眼鏡を押し上げる。
「属性というものは、戦闘に関しては大きく影響します。これはゲームの世界と同じと見ても問題ないでしょう。ようするに、相性の問題です。火と水なら水が優位ですし、水と雷なら雷が優位になります。あくまでも基本的には、ですが」
基本的には、というのはどういうことだろうか。
氷室の言い方からすると、何か例外のようなものが存在するという風に聞こえる。
「お察しの通り、例外があります」
氷室が続ける。
「例えば私の水。私が能力者として覚醒した当時は、私も水を操る程度のことしかできませんでした。しかし、ある日変化がおきた。それがつまり、三つ目の『Ｒｉｎｇ』の進化に当てはまるものです」
「……進化？」
進化とはつまり、原始人が現代人になるまでの過程の、あの進化だろうか？
「これは系列、あるいは系統と呼べばいいでしょうか。水というものは、つまりその中の一つに過ぎなかったんです」
「……その中の、一つ？」
僕が疑問で返すと、意外なところから答えが聞こえてきた。
「……状態変化のことよ」

隣の飛鳥だった。
「水っていうのは、あくまで液体の状態のこと。固体では水は氷になるし、気体では水蒸気になるでしょ？」
「あ……」
なるほどと、僕は言われて素直に納得した。
つまり、そういうことなのだ。
「その通りです。つまり私は水の属性しか操れませんが、間接的に氷や蒸気も操ることができるということです。扱える属性が増えると言い換えてもいいでしょう。当然そうなれば、攻撃や防御の手段としてもバリエーションが増え、相手側としても一筋縄ではいかなくなるというわけです」
そう言うと、氷室はおもむろに自分の右手を広げて見せた。
次の瞬間そこに、小さな水柱が発生した。
僕は思わず目を丸くし、その光景に釘付けになる。
湧き水ほどの勢いの水は、氷室の手の中で重力に逆らうように球体を形作っていく。
無重力空間では水が球体になるというが、それを見ているかのようだった。
そしてその水の球は、やがて白い霧のようなものに包まれた。
それは霧ではなく、冷気だった。
氷室の手の周囲だけ急激に気温が低下しているのだ。
見る見るうちに、水の球は表面が凍りついて氷の球へと変わっていく。
「まぁ、こんな風にね。もっとも、これは分子レベルの物質だからできる芸当なんですけど、ね」
次の瞬間には氷の球は再び水に溶け、そして今度は蒸気になって空気中へと消え去った。
「と、少し論点がずれましたね。まぁとにかく、まずは自分の能力を知ることが大事です。力の使い方を知れば、少なくとも最低限の

身の守り方くらいは身につきます。大和、まずあなたが成すべきことは、その風の力をある程度まで自由に使いこなせるようになること。これがあなた自身に対する最初の課題と言ってもいいでしょう」

「で、でも、具体的には一体何をどうすれば……」

「ええ。ですから、それは私達が協力します。コツを掴むまでは、できる限りのサポートをします。ですが……」

氷室はそこで一度言葉を区切り、少しだけ険しい表情になって続けた。

「そうするということはつまり、あなたもこの運命の渦の中に飛び込むということです。その意味を、今なら理解できますね？」

「……」

僕は思わず返答に詰まった。

氷室の言葉の意味は理解している。

それはつまり、僕自身が自ら戦場に身を投げるということ。

そしてそれは、この戦争に加わるという意思表示でもあるのだ。

そうなればきっと、僕も誰かに殺し殺される立場になる。

ルール無用の戦いの世界に引きずり込まれることになるんだ。

「……僕は……」

イエスとも、ノーとも言えない。

「……あまり急がせたくはないですが、そう時間に余裕があるわけではありません。ですから、今夜一晩。短いですが、あなたなりに考えてみてください。そしてイエスでもノーでも、答えを聞かせてください」

「……」

その問いにも、僕は答えられなかった。

氷室も飛鳥も、複雑な表情で無言の僕を見ていた。

車は僕の住む住宅街付近の道に静かに停車した。

「見ず知らずの人間に送迎されているところを見られては、不審に思われますからね。この辺りで大和には降りてもらいましょう」
と、予め氷室とそう話し合っていたからだ。
「着きましたよ、大和」
「……」
「大和、どうかしましたか？」
「……え？　あ、すいません。ちょっと、考え事してて……」
「……そうでしたか。とりあえず、あなたの家の近くに着きました。まだそれほど遅い時間ではないですが、どうします？　どこか行きたい場所があるなら、ついでですから送りますが？」
「いえ……いいです。今日は、もう帰ります」
「……分かりました」
ガチャリと、ロックが外れる音がした。
僕は自分でも驚くくらいの緩慢な動作でドアを押し開け、半分ほど沈みかけた夕陽の照る地面に降り立った。
足場がひどく不安定だった。
地面を踏みしめているはずなのに、皮一枚の隙間を隔てて宙に浮いているかのよう。
重さのない衣服を着て、味気のない空気を吸い込んでいる。
「……送ってくれて、ありがとう。また明日、会いに行きます」
それだけ告げて、僕は車に背を向けて歩き出す。
「大和」
背中から名前を呼ばれ、僕は振り返る。
「あまり思いつめないように。あなたがどういう選択をしても、それはあなたの意思が決めたことです。その結果がどういうものでも、あなた自身にだけは後悔してほしくない」
「……」
僕は答えられなかった。
だから最後に、氷室に向けて小さく頭だけを下げて、また歩き出

した。

緩やかな坂道を上る。

背中を後押しするような夕陽の暖かさが、今はどうしようもなく心強かった。

正直、僕の心は今すぐにでも折れてしまいそうだった。

今夜一晩の間に、僕は戦争に参加するかどうかの有無を決めなくてはいけない。

戦争なんて、そんなものはあってないようなものだと思っていた。

ニュースや新聞で、世界各地に未だに残る内線や紛争のことを見たり聞いたりしたことは何度もあった。

けれど、それもどこか実感の沸かないものばかり。

他国で起こっている情勢なんて、全く僕にとっては無関係なものだった。

それがまさか、こんな形で目の前に現れることになるなんて……。

ふいに、足は立ち止まっていた。

坂の中腹。

見下ろす地面の上に伸びた自分の影が、ひどく小さかった。

「……どうするの？」

その声も、不意打ちのように僕の耳に飛び込んできた。

僕は慌てて振り返る。

そこに、飛鳥の姿があった。

「……飛鳥」

名前を呟く。

飛鳥は色のない表情を携えたままその場に立ち、何をするわけでもなく僕を見据えていた。

「……どうするって、この戦争のこと？」

「それ以外に、何があるのよ」

トゲもなければ丸くもない言葉。

それだけに、飛鳥の言葉は実に真っ直ぐだった。

迷いというものを感じさせないくらいに、本当に真っ直ぐ。
「……どう、なんだろ。僕にはまだ、全部が信じきれない。氷室や飛鳥が話してくれたことがウソだとは思わない。けれど、どこからどこまでが現実で、どこからどこまでが非現実なのか、僕にはその境界線が全然見つけられないんだ……」
「……現実も非現実もないよ。目の前で起こったことがたとえどれだけ信じられないことでも、それを見たなら、その人にとってはそれが紛れもない真実になる。それ認めようとしないのは現実主義なんかじゃなく、ただの逃避」
淡々と飛鳥は語る。
その声色がどこか、少しだけ悲しげに聞こえた。

「……アンタの気持ちも、私には分からなくもない。私も、突然こっちの世界の事情に巻き込まれたようなもんだから。その、迷ったり、混乱したりっていうのは、やっぱり仕方がない……当然の反応だと思う」
「……」
「氷室は言わなかったけど、私も氷室も、別に殺し合いが好きでこんなことしてるんじゃないから。むしろ、その逆。この戦争をどうにかして終わらせるために、私達は共闘しているの」
「終わらせるって……そんな方法……」
「あるかどうかも分からない。だけど、ないとは言い切れない。どんな因果にも、結果があれば必ず原因があるもの。だから私達は、この戦争の原因を探してる。それが分かれば、もしかしたらこの無益な争いを終わらせることができるかもしれない」
「……」
「だけど、さっき氷室が言ってたように、『Ｒｉｎｇ』に関する知識や情報は歴史上にも数えるほどしか記録がないの。だから結局は、私達のしようとしていることはただの空想……それこそ、夢物語で終わってしまうかもしれない」

「……だったらどうして、そこまで必至になれるの？」
「死にたくないし、誰も殺したくないから。もっとも、後半の部分はもうとっくに叶わない願いになっちゃってるけど」
「……飛鳥はさ、今までに……その、他の能力者の人達を……殺したの？」
「……殺したよ」
「大勢？」
「……少なくとも、両手の指の数じゃ足りないわね」
「……そう、なんだ……」
沈黙が流れる。
受ける言葉も返す言葉も、もう痛々しくて仕方がなかった。
「……本当にさ、そんな方法があればいいのにね」
「……分からない。けど、可能性はゼロじゃない。ゼロじゃない限り、私も氷室も諦めない」
「……それでも、時には諦めることが必要になるんじゃないの？」
「それでも諦めない。だって、もう私達はやると決めたから」
強い意志を感じさせる言葉。
迷いなんてそれこそ、微塵も感じさせなかった。
僕は目の前にいる、自分よりも一つ年下の女の子の言葉一つ一つに圧倒されていた。
「それにね」
と、飛鳥は少しだけ表情を柔らかくして続ける。
「――私達、とっくにファンタジーの世界にいるんだもの。不可能はないって、夢くらい見てもいいんじゃない？」
そのときに見せた飛鳥の表情は、本当のそのくらいの年頃の女の子が見せるような、そんな当たり前の笑顔だった。
「引き止めてゴメン。それだけ言いたかったから。それじゃ、また明日ね」

言うと、飛鳥は踵を返して坂道を下っていった。
「あ、そうそう。一つ言い忘れてた」
途中で振り返り、坂の上の僕を見上げて飛鳥は言った。
「できることなら、私も氷室もアンタとは戦いたくないから。だから、できれば私達の仲間になってほしい。これ、氷室の言葉でもあるからね」
最後にそれだけ告げると、飛鳥は駆け足で坂道を下っていった。
少しずつ遠ざかるその背中を、僕は見えなくなるまでずっと見ていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８：決意の日に

ボスンと音を立て、僕の体はベッドの中に沈むように倒れた。
疲れることなど何一つしていないのに、体中には疲労の色が濃く蔓延していた。
夕食も入浴も済ませ、もうあとは寝るだけで今日一日が終わるという今頃。
いつもなら雑誌を読みふけったりして過ごしている時間だが、今日は何だかそういう気分じゃなかった。
原因は分かってる。
そんなことに費やす時間があるのなら、僕は真剣に考えなくちゃいけないことがあるのだから。
だけど、そのことを考え出したらそれはそれで頭が重苦しくなってくる。
迫られたのは単なる二択問題なのに、そのどちらの答えも正解であって不正解でもある。
結局決めるのは自分だと分かっていても、僕はまだ悩み続けることしかできないでいた。
不明瞭な点はまだいくつもあったけど、根っから全てを否定できるわけでもなかった。
受け入れるか受け入れないか、どちらが得策かと聞かれても、正直難しい。
この見えない戦争に参加するか、それとも逃げ回るか。
常識的に考えれば、参加することなんて考えられない。
けれど、僕はすでにその戦争に対する参加資格を持ち合わせてしまっている。
それは決して、僕自らが望んだことではなかったけれど、資格がある以上は参加するのが正しいという気持ちもわずかにある。
だが、この戦争はスケールが違う。

そもそも戦争そのものが大規模な国同士の喧嘩なわけだけど、これはまたそういうものとは一線置いたものだ。

なぜなら、その戦争が起こっていることに、普通の人は誰一人として気付かない。

つまりこれは、あまりにも静かすぎる戦争なのだ。

限られた視点の中でのみ繰り返される争い。

そしてどうやら、僕はすでにもう戦場の真っ只中に立っていることになるらしい。

氷室が言っていたあまり時間がないという言葉は、恐らくこういう意味合いのものだったのではないだろうか。

「戦争、か……」

ハァと、僕は重い溜め息を吐いた。

いまいちピンとこない部分はあるけれど、それ以上に戦争という単語の持つイメージが僕の心を容易く暗転させる。

恐怖が芽生え、不安が混じり、怯えながら暮らす日常がありありと脳裏に浮かんだ。

戦争である以上、決着をつける以外に終結の方法はないのだろう。

史実の中の戦争のように、条約の締結や停戦などで終わらせることができるのならば話は別だけど、そういうわけにはいかないから、すでに火種が燃え始めているのだ。

僕はまだ、この戦争の先にあるものが見えていない。

戦争というのは極端な話、敵を倒して支配下に置き、莫大な利益を得るためのものだ。

とすると、一体この静かすぎる戦争の果てに、何があるというのだろうか？

仮にこの戦争に、誰かが最後の生き残りとして勝者の栄冠を勝ち取ったとしよう。

では、その勝者に与えられる……その利益とは一体何だ？

何も知らない僕には、全く想像がつかなかった。

けれど、この『Ｒｉｎｇ』というものが戦争に絡んでくる以上、戦いの果てに得られるものは少なくとも常識的に考えられるようなものではないような気がする。

氷室はこれを、古代の遺産であるアクセサリだと言っていた。

明確なことは何一つ分からないけれど、もしもそれが事実で、なおかつ『Ｒｉｎｇ』と何らかの関わりがあるのだとしたら。

やはり得るものも、『Ｒｉｎｇ』に関係のあるものなのではないだろうか。

僕の想像にできるものだと、それは恐らく……。

「……やっぱり、力、なのかな。それも、並大抵じゃない……世界を滅ぼせるくらいの、とか……」

それはあまりにもファンタジーな想像だった。

しかし、今の僕はそれをありえないの一言で否定することはできない。

なぜなら、僕だってとっくにそのファンタジーの世界の中に引きずり込まれてしまっているのだから。

……急に眠気がこみ上げてきた。

どうしよう、考えなくちゃいけないことがあるのに……。

と、そんなときだった。

机の上に置いた僕の携帯が、メールの着信を知らせるメロディを奏でていた。

こんな時間に誰だろう？

時刻はすでに夜の十一時半を回ろうとしている。

そう思いながらも、僕はベッドから身を乗り出して携帯を掴んだ。

未読メール一通、送信者――坂城唯。

「唯？　何だろう、こんな時間に……」

折りたたみ式の携帯を開いて、僕はディスプレイの文字に目を落とした。

そこにはこんな一文が書かれていた。

『カーテン開けろー』

何だこれはと思いながらも、僕は指示されたとおりに部屋のカーテンを開けた。

すると、二メートルほど離れた向かいの窓の向こうに、携帯を握った唯の姿があった。

夜も遅いし大声を出すわけにも行かないので、僕は自分の部屋の窓ガラスをコンコンと叩き、その音で唯を呼んだ。

その音に気付いたようで、唯は窓を開けた。

同じく僕も窓を開ける。

「や。こんばんは」

「……いや、それはいいけど。どうしたの？　何か用なら、そのままメールに続けてくれればいいのに」

「まぁ、それでもよかったんだけどね。具合はどうかなーって思って」

「ああ……まぁ、特にどうってことはないよ。至って健康」

「そっか。ま、顔色も悪くないみたいだし、それならそれでいいんだけどさ」

小さく笑って、唯は窓枠に腰掛けた。

話ってそれだけと僕が聞き返すよりも早く、唯は言葉を続けた。

「……なんかね、変な話なんだけど」

「……うん？」

「大和さ、昨日の夜、どこ行ってたんだっけ？」

「え……あ、コンビニ……だけど？」

「……一時間近くも？　何してたの？」

「……雑誌を立ち読みしてたら、つい夢中になっちゃって、それでさ」

「……そう。だったら、やっぱり私の考えすぎかな……」

「な、何だよそれ。すごく気になるじゃんか」

「え？　いや、ホントにね。ただの思い過ごしだと思うから……ゴ

メン、忘れてよ」
アハハと、乾いた笑いで唯はごまかしていた。
けど、それは僕も同じだ。
実際僕は昨夜、コンビニなんかには一歩も立ち寄ってはいない。
そのとき僕は、ちょうど現実とファンタジーの境界線を越えてしまったところだったんだ。

などと、しかしそんなことは口が裂けても言えない。
何より誰も信じないだろうし、信じてくれたところで余計な心配をかけるだけだろう。
他言は無用、とは念押しされなかったけど、こんなことはホイホイと口を割って言いふらすものでもないだろう。
でも、それはそれで隠し事をしているようなもので、後ろめたさがゼロかと言われるとそうではないけれど……。
「大和？　どうかした？」
「え？　あ、何？　聞いてなかった……」
「ううん、別になんでもないけど……その、ボーっとしてたからさ」
「ああ……ゴメン」
……あれ？
どうして僕は、謝っているんだろう？
後ろめたいから？
隠し事をしているから？
それとも……。
そのとき、僕の思考を停止させるかのように、冷たい夜風が僕と唯の間を吹き抜けた。
「わ……」
「……」
肌寒さを覚え、僕達は揃って小さく身震いした。
そんなどうでもいいような光景が、どうしてか互いにおかしくて仕方がなくなってしまって……。

「ハハ……」
唯は小さく笑い出していた。
「何がおかしいのさ?」
そう聞き返す僕も、きっと笑っていたんだろうと思う。
「別にー。ただ、何となくね……」
何となく、か……。
うん、そんな感じだ。
ただ何となく、そのときは笑えたんだ。
今がある、この当たり前の中で、僕は笑うことができたんだ。
……何だ。
結局、僕の心はとっくに決まっていたんじゃないか。
ただそれに、それらしい理由をこじつけようと躍起になっていただけだったんだ。
どうしてなんだろう。
こうして何気ない時間を過ごしただけで、不思議と今日は眠れるような気がしたんだ。
雲が厚く、月のない夜だった。
それでも星は、確かに光っていた。

一夜が明け、間もなく時刻は正午を迎えようとしている。
今僕がいる場所は、全ての始まりになった場所。
街外れの廃工場跡地だ。
だけど、そこにいる人影は僕一人分のものだけではない。
向かい合うようにして、視線の先には飛鳥と氷室が立っている。
双方の間に会話らしいものは何もなく、今はただ時間が流れるのを互いに感じ取っているだけ。
氷室が腕時計に視線を落とした。
秒針が時を刻み、間もなく約束の時刻になる。

「時間です」
きっかりに、氷室はそう言った。
そして視線を戻すと、再び向き合うように僕を見る。
「急がせてすいませんでした、大和。本来ならこういうことは、もっとちゃんと考えて結論を出すことなのですが……」
「……分かってます。時間がないんですよね？　こうしている間にも、僕達の戦争はどこかで始まっているのかもしれない」
「……その通りです。では、早速ですいませんがあなたの答えを聞かせていただきたい。即ち、戦うか否かを」
「……」
「……」
「……」
三人分の沈黙が流れる。
飛鳥と氷室が揃って直視する中、僕はわずかに下を俯いていた。
一つの風が、僕達の間を吹き抜ける。
それを合図にするかのようにして、僕は顔を上げ、口を開く。
「僕は……誰かに傷つけられるのも、誰かを傷つけるのも、そこに理由があってもなくても、できることならしたくない。だけど、もしここで僕が背中を向けたら、きっと無関係な誰かまで傷つけてしまいそうな気がする。それはきっと、僕が一番望んでいないことだと思う。だから、僕は……」
一度だけそこで言葉を区切り、小さく息を吸い込んで、僕は告げる。

「――僕は、僕のやり方で、今ある当たり前を守るために戦う」

言葉は風に乗り、何処へと運ばれた。
再び三人の間に沈黙が下りる。
そのままどれだけの時間が経ったのだろうか。
恐らく一分にも満たない時間だとは思うけど、僕には何時間にも

感じられるものだった。
やがて氷室は、ずれかけた眼鏡を押し上げながら言った。
「……結構です。よく決心してくれました。あなたの決意に応えられるよう、私達も全力で力を貸します」
「……ま、建前は何でもいいよ。敵になるより、味方でいてくれるほうがずっといいもの」
そう言いながら、二人は歩み寄る。
僕も数歩ほど前に出る。
「改めて、よろしくお願いします、大和」
「よろしくー」
「うん。こちらこそ」
僕達三人は互いの手を重ね合わせ、共闘を誓い合った。

「その……いきなりで言い辛いんだけど」
僕はこの機会に、言おうとしていたことを切り出してみることにした。
「何ですか？」
「その、僕も一応戦いはする。だけど、やっぱりどうしても殺し合いっていうのだけは賛成できないんだ。できるなら話し合いで……戦うにしても、相手の命を奪うっていうのだけはしたくないんだ……」
それは甘い考えだった。
実際の戦争を知っているんだから、そんな理屈が通るなんて思ってはいない。
だけどそれでも、やはり僕は誰かを殺すなんてことはしたくない……いや、できないと思う。
それは、単純に怖いからだろうと思う。
聖者でいようなんてことは思わない。
けれど、この手を血の色に染めてしまいたいとも思わない。
だから、こうしてこんな状況で甘いことを言うようでは、僕は二

人に激を飛ばされることも覚悟していた。
だが、意外にも二人の言葉は僕の理想に沿ったものだった。
「ええ、分かっています。私達だって、好きで殺しをしているわけじゃありませんからね」
「そうそう。気持ちは同じだよ。ただ、殺さなきゃこっちが殺されるってときは、やむをえないだろうけどね」
「じゃあ、何か方法があるの？　その……相手を殺さずに、終わらせる方法が……」
「あります。というより、大和なら気付いているかとも思ったんですけどね。まぁ、いいです。混乱して考えがまとまらなかったということもあるでしょうから、一応説明しておきます。そもそも、我々能力者がそう呼ばれる所以は『Ｒｉｎｇ』にあるわけです。つまり、相手
から『Ｒｉｎｇ』を奪う、もしくは『Ｒｉｎｇ』そのものを破壊してしまえばいいんですよ」
「あ……」
言われて僕は気が付いた。
そうか、確かにその通りだ。
そんな単純なことに気が付かなかったなんて、僕はどうやら自分で思ってる以上に焦っていたらしい。
「できれば破壊してしまうのが好ましいですね。仮に『Ｒｉｎｇ』を奪っても、再び奪い返される危険がないとは言い切れません。まぁ、一度奪った時点で『Ｒｉｎｇ』の力は封じたようなものですから、そうなれば生身の人間と何ら変わりませんし、大丈夫だとは思いますけどね」
「能力者は『Ｒｉｎｇ』と契約することによって力を得る。ってことは、『Ｒｉｎｇ』がなくなれば契約は破棄されるってこと。まぁ、新たに別の『Ｒｉｎｇ』と契約すれば、別の力を得ることはできるかもしれないけどね。『Ｒｉｎｇ』は道端に転がってるわけでもないんだから、そう簡単に次から次ってのはまず無理ね」

それを聞いて僕は安心した。
戦争の真っ只中で安堵するなんて場違いもいいところだけど、今はその事実を素直に喜びたい。

「ですが、それにしたって時間がないことは事実です。こうしている間にも、次々と戦いは始まっているのかもしれませんからね」
「『Ｒｉｎｇ』って、そんなに多くの数が存在するんですか？」
仮にも遺産と呼ばれる代物なのに、そんな風にあちこちに配られるようにあったんじゃキリがないと思う。
「いいところに気が付きましたね、大和。確かに、現存する『Ｒｉｎｇ』の数から考えても、能力者の数は尋常ではありません」
「だったら、どうして……」
「ようするに、劣化コピーなんだよね」
「……コピー？」
飛鳥の言葉に僕は聞き返す。
「『Ｒｉｎｇ』というものは、言わば膨大な量の魔力を貯蔵しておくための器みたいなものなんです。ですが、長い間……それこそ何世紀という時間の流れの中で、その膨大な魔力は徐々にですが漏れてしまっているんですよ。その流れ出した魔力の一部は、現代でも存在し続けています。それこそ、目には見えませんが空気中に溶け込んだり、各々の属性の引き合う場所などにね」
「そういう流れ出した魔力が、他のものに乗り移ることは珍しいことじゃないの。もう分かるでしょ？　つまり、その乗り移ったものが人の身に着けるものとかだったりすると……」
「……それが擬似的に、『Ｒｉｎｇ』に似た役割を果たす」
「そういうことです。まぁ、このケースはまず無視して問題ないですよ。微力な魔力程度じゃ戦うことはできませんし、放っておけばすぐに消滅します。ようするに切れかけの乾電池と同じですよ」
確かに、そのくらいなら大きな影響はなさそうだ。
むしろそれで影響があるくらいなら、今頃社会そのものが大きな

パニックに陥ってしまっていることだろう。
「とりあえず、先日炎使いを倒しましたからね。その後から今まで、特に大きな反応は感じられませんから、今は安全と思っていいでしょう。ですから、この間に大和には少し『Ｒｉｎｇ』の力というものを肌で感じ取ってもらいたいと思います。同時にそれは、あなたの風の力を自在に操ることにも、身を守ることにも繋がります。いいですか？」
「感じ取れって、具体的にはどうすれば？」
「百聞より一見。口で言うより感じ取る方が早いでしょう。では、早速移動しますよ」
そう言うなり、氷室はさっさと歩き始めてしまった。
「ま、付いてくれば分かるよ。私達も行こう」
「あ、うん……」
なんだかよく分からないけど、とりあえずこの場は氷室に従うことにしよう。
僕も一応能力者としては目覚めているらしいけど、力の使い方に関しては無知も同然なのだから。

そして僕達三人がやってきたのは、どこからどう見ても昨日と同じ場所だった。

『各務探偵事務所』

と、そう書かれた窓ガラスが僕の頭上にある。
「さ、こっちです」
「大和、こっちこっち」
言われるがままに僕は付いていく。
二階へと階段を上り、昨日と同じ事務所の中に僕は招き入れられ

た。
「あの、ここって……」
そう僕が呟くのにも構わずに、氷室と飛鳥は事務所の中の別室へと向かう。
扉を開けると、そこは仮眠室のような小さな部屋だった。
一見して珍しいものも何もないその部屋で、しかし氷室はおもむろに棚の裏へと手を伸ばし、次の瞬間カチリという何かのスイッチのような音がした。
すると、床の一部がポッカリと顔を覗かせた。
そこには地下に続く階段があり、僕達を迎え入れるかのように口を開けている。
「さ、行きますよ」
氷室はスタスタと階段を下っていき、飛鳥も無言でそれに続いた。
「……ここ、本当に探偵事務所なの？」
僕は一人そう呟いてから、何かを諦めるようにして階段を下りていった。
やや長い階段を無事に下り終えると、そこにはまるでホールのような大きなスペースが広がっていた。
ただし、大きさはハンパなものではない。
四方がそれぞれ五百メートル近くある上に、天井までの高さも二十メートル近くある。
まるで巨大な水槽から水を抜いたような形だった。
もちろん地下なので、四方も天井も全て壁。
材質は鉄なのかコンクリートなのか、僕にはよく分からない。
「さて。それでは早速始めましょうか。現在十二時半ですから……そうですね、まずは二時間、体を動かしてみましょう」
体を動かすという言葉を聞いて、僕はこの広い空間を使って走り込みなどの基礎体力を養わされるのかと思った。
しかし、それこそがとんだ甘い考えだった。

「では飛鳥、あちらへ。大和はそのまま動かないで」
「はいよー」
「は、はぁ……」
言われて飛鳥だけが動く。
僕との距離をおよそ三百メートルほど取ったところで、飛鳥が僕のほうを振り返る。
「では、始めましょう。いいですか、大和。今からあなたには、飛鳥の攻撃を二時間避け続けてもらいます」
「避けるんですね。分かりま……」
……ちょっと、待て。
「……って、避け？　何言い出すんですか突然！」
僕は焦って言葉を返した。
氷室は一体何を考えているのだろうか。
悪い冗談ならやめてほしいものだ。
という僕の願いも届かず、氷室は相変わらずの表情でもう一度同じことを繰り返した。
「ですから、今言ったでしょう？　大和には、飛鳥の攻撃をひたすら避け続けてもらいます」
顔は笑っていたけど、目は笑っていなかった。
どうやら僕は、冗談ではなく本気で……。

「――……マジですか？」

「ええ、大マジです」
だから、目が笑ってないってば……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９：予感

「……時間です。一度休憩にしましょうか」
氷室のその声で、僕はようやくホッと胸を撫で下ろした。
が、その直後。
「大和！　避けて避けて！」
とかなんとか、そんな慌てた様子の飛鳥の叫びが僕の耳に届いた。
「え？」
思わずその声のした方向を振り返る僕。
しかしこのとき、僕は飛鳥の叫んでいた避けてという言葉をすっかり把握していなかった。
その結果……。
「……う、うわぁっ！」
僕は本当にギリギリのところで体をひねり、奇跡的のその一撃を回避することができた。
ドゴンと、直後の僕の背中で壁が崩れる音がした。
僕がその方向を見ると、背後の壁の一部が鉄球のハンマーでもぶつかったかのように変形していた。
もちろんそこに鉄球などはなく、代わりに突き刺さった雷の矢はほどなくして溶けるように消え去っていく。
「ゴメンゴメン、大丈夫？」
そう言いながら駆け寄ってくる飛鳥。
「……いや、まぁ、無事ではあるけど……」
何度思い返しても僕はゾッとする。
けれど、そんなことよりも今はこの疲れ切ってしまった体を速く休ませたいことで頭が一杯だった。
この不思議な地下室のような場所にやってきてから早二時間。
その間、僕はぶっ続けで飛鳥とトレーニングを繰り返していた。

トレーニングと言っても、それはむしろ一方的な暴力と言ったほうがはるかに分かりやすいかもしれない。
ようするに僕は、飛鳥の放ついくつもの雷撃の矢をひたすらに避け続けていただけなのだ。
もちろん、戦うことはおろか喧嘩に関してもほとんど素人同然の僕がいきなりうまくやれるはずもなく、この二時間のという時間の前半は、僕はことあるごとに強い静電気を浴びせられては痛い思いをしてきたわけで……。

「ま、最初にしては上出来ですよ。私はてっきり、途中でダウンするかとばかり思ってましたから」
それはそれで氷室なりの褒め言葉なんだろうけど、僕は全く嬉しくない。
そもそも、ダウンした数なんてそれこそ数え切れないくらいだ。
僕がそれでも立ち上がったのは、ダウンしてようとしてなかろうと、飛鳥がところ構わずにバリバリと雷撃を飛ばしてくるので、それを必至になって動かない体なりに逃げ回っていただけなのだ。
そんなわけで、今の僕の服装はずいぶんとみすぼらしいものになってしまっている。
衣服のあちこちは雷撃のせいで黒コゲになっているし、地面を転がっていたこともあって薄汚れている。
まぁ、それでも命に別状がないことを喜ぶべきなんだろうけど、それは飛鳥の力加減もあったわけで。
「……ねぇ、氷室。このあとも、一日中こんなことが続くの？」
僕はうなだれるように聞いてみた。
「大和がそう望むのなら、私も混ざりましょうか？　ですが、私はあいにくと手加減というものが苦手ですから……」
「……分かった。今のはなかったことにして……」
どこか楽しそうに眼鏡を押し上げる氷室は、小悪魔的な笑みを浮かべていた。

ハァと溜め息を一つついて、僕はだらしなく地面の上に腰を下ろした。
「そう悲観しないでください。正直、大和は私が思っていたよりもずっと『Ｒｉｎｇ』の力を使いこなしていましたよ。今はまだ、自覚が持てていないだけかもしれませんけどね」
「……そう、かなぁ……」
そうは言われても、やはり実感が沸かない。
この二時間で僕がしていたことといえば、それこそ避けるか逃げるかのどちらかでしかなかったのだから。
「それでいいのよ。まずは身を守ることが最優先。死んじゃったら、それこそ元も子もないでしょ？」
「まぁ、それはそうだけど……」
隣に腰掛け、飛鳥は言う。
「それに、大和は本当に何も感じなかった？」
「え？　どういうこと？」
「んーと、大体一時間半くらい経ってからなんだけどね。私は、少しずつだけど雷撃の速度を上げていったんだよ」
「え、本当に？」
「うん。だって、そのくらいの速さでも大和なら避けれそうだったもの。けど、大和にはそれが全部同じ速度に見えてたんでしょ？」
「……うん。変わったようには見えなかった」
「それってつまり、体や目が早さに慣れていってるってことじゃない。私が速くした雷撃も、大和の目には同じ速さに映ってたってわけ」
「ああ、なるほど……」
と、僕は納得したが、それでも実感はイマイチだ。
「焦らなくとも大丈夫です、大和。私が見ていた限りでも、少しずつではありますがあなたは風の力を吸収している。現に、今だってね」

「今？」
僕はただ、休憩しているだけなのだが。
「痛みや疲労はどうです？　まだ溜まるように残っていますか？」
「そんなの、残ってるに決まって……」
言いながら、僕は体を動かして気付いた。
「……あれ？」
手も足も、それどころか体中の至るところからはすでに痛みらしいものが引き始めていた。
失った体力だけはまだ回復はしていないが、それ以外のかすり傷や疲労の具合はずいぶんと和らいでいるような気がする。
「分かりましたか？　風の力は、あなたの肉体そのものの治癒力も高めてくれます。今ぐらいの運動で失った疲労や傷程度なら、それこそ瞬く間に回復してしまいますよ」
僕は立ち上がり、その場で軽く体全体を動かしてみる。
驚いた、痛みがもうほとんどなくなっている。
「これが、風の力……」
呟いて、ふと僕は昨晩のことを思い出した。
あの全身に走っていた筋肉痛さえもが、一瞬で完治してしまったこと。
今思えば、あれもこの自己治癒力の活性化がそうさせたものだったのだろう。
「力の使い方に慣れてくれれば、ある程度の傷を癒す力も身に付くでしょう。それは自分に限らず、他者にも使えるようになるはずです」
身体能力の向上に加え、治癒の力。
こうして聞いていると、僕の風の力というものは直接戦闘向きというよりは補助に向いているようなものなのかもしれない。
それに、僕本人も腕力に特に自信があるわけじゃない。
体力は人並みかそれ以上にはあると思うけど、殴り合いになったとしたら自信はない。
でもそうだとすると、僕は一人で生き残るということは難しいの

ではないだろうか？
そう考えて、あることに思い至る。

「ねぇ、飛鳥は弓矢を武器にしてるよね？」
「ん？　ああ、一応ね。でもあれは、奥の手みたいなものだから。基本は素手だよ」
「でも、雷の矢があるでしょ？　あれも立派な武器になると思うんだ」
「まぁ、そうだね」
「けど、僕にはそういうのがないし、どうすればいいかな？　やっぱり、実際に武器を持つしかないのかな……」
「いえ、大和。能力者同士の戦闘において、目に見える武器などそれこそ意味を成しません。武器を持つということは、その時点で己の腕力の低さを誇示していることに等しい。そうすれば相手も、武器破壊を狙ってくるでしょう。そしてもし武器を破壊されれば、本当に勝機はなくなってしまいます」
確かに、それは氷室の言うとおりだった。
そして僕はやはり、どう考えても腕力に関しては自信がない。
となるとやはり、武器に依存した強さを求めてしまうことになると思うんだけど……。
「まぁ、そこはものは考えようです。飛鳥だって、そのために雷の矢という遠距離系統の攻撃手段を用いてるんですよ。飛び道具であれば、一つを破壊されてもそこでおしまいということにはなりません。加えて、避け切るだけでもそれなりの体力を消耗させることができる」
「氷室にも、そういうのがあるの？」
「まぁ、相手のタイプによって多少の変動はしますがね。こういうのは、戦いの中で嫌でも身に付きますよ。その上でイメージを重ねて、徐々に具現化していけばいいんです。飛鳥の弓矢も、あれ自体は弓も矢も雷のエネルギーの集合体ですからね」

「ま、とにかく焦るなってことだよ。焦って中途半端な結果になったりしたら、それだけで命取りになりかねないんだから」
「そっか……そうだよな」
「……さて、そろそろ休憩も終わりにしましょうか。大和、どうします？　もう少し続けましょうか？」
「あ、うん。それはいいんだけど……」
言いながら、僕は腹部に手を当てる。
「具合でも悪いですか？　無理はさせませんけど……」
「……いや、そうじゃなくて……逆」
僕は十二時に二人と合流し、それから二時間ほどトレーニングをしている。
付け加えるなら、僕が起きたのは十一時過ぎだ。
さらに付け加えるなら、僕は今日、食事らしい食事を一度も済ませていない。
つまり、ようするに……。
「……ゴメン、お腹減った」
ということだった。

氷室が経営者でもあるこの『各務探偵事務所』。
実際にその名の通りの仕事をしているのかそうでないのかは僕には分からないが、仮に本当だとしても客足はあまり多くなさそうだ。
ともあれ、今はそんなことは気にしないでおくとする。
僕達三人は最寄のファミレスへと足を運び、そこで遅い昼食を食べることになった。
後から聞いてみたら、氷室も飛鳥もまだ昼食を食べていないとのこと。
そんなことだったら、トレーニングよりも先にまず腹ごしらえをするべきだったんではないだろうかと、僕は思わずにはいられない。

それぞれに注文を終え、ウェイターが下がっていく。
時間が時間とはいえ、休日ということもあって店内はにわかに混み合っていた。
それでも待たされるほどのものではなく、僕達三人はほどなくして窓際奥の席へと案内された。
あとは頼んだ料理が運ばれてくるのを待つばかりなのだが、どうも僕は落ち着かない。
「どうしましたか、大和？　妙にそわそわしているようですが？」
その様子に気付いてか、真向かいで腕組みをしていた氷室が口を開く。
「いや、どうってわけじゃないんだけど……何か、妙に落ち着かなくって……」
「まさかとは思うけど、外食くらいで緊張とかしてないよね？　極度の上がり症とか？」
グラスの水を一口含み、隣に座る飛鳥が言う。
「いや……そういうんじゃないんだけど」
緊張というものとは、似てるけどまた少し違っているような気がする。
そもそも僕は上がり症ではない。
「あ、分かった。大和って、空腹になると性格が変わるとかいうオプションでもついてるんじゃない？」
「……何その、どこぞの多重人格人間みたいな設定。僕にはそんなのはないよ」
「おや、ないんですか？　それは残念」
「……」
冗談めかしているのだろうけど、氷室が言うと冗談に聞こえないので怖い。
「ま、冗談はさておいて。もしかしたら、能力の使用にまだ体が追いついておらず、そのための後遺症のようなものなのかもしれませんね。気にするほどのものではないと思いますが」

「二人も、そういうことがあったの？」
「いえ、私は特に何も」
「私は、そうだなー。丸一日体中が痺れてたことはあったかも」
「……それって、さらりと言ってのけることなのかな……」

と、僕らはそんな会話を繰り返しながら運ばれてくる料理を待っていた。

店内は僕達が入店してからも客足は途絶えず、入れ替わりに新しい客がやってきているようだ。

僕はぼんやりと、窓ガラス越しに映る街並みに目を向けた。

夕暮れにはまだ少し早い時間、道端を行き交う人々はどこかしら早足に見えて、見えない何かに追われているかのようだった。

大半の場合、それは時間という名の拘束なのだろうけど。

そんな景色の中を、一つの例外がサイレンという音を響かせながら走り抜けていった。

響き渡る鐘の音。

赤いランプに赤い車体。

緊急時を思わせる消防車両は、真昼の街中にわずかな混沌の音色を響かせて去っていった。

どこかで火事でも起きたのだろうかと、僕はすでに視界の先で小さくなりつつある消防車両を追いかけながら、そんなことを考えていた。

すると、消防車両の去った先の空に、灰色の煙がわずかに立ち昇る景色が見えた。

さらによく見ると、その煙が立ち昇る周囲の空だけが、一足速く夕暮れによく似た朱色の空模様になっている。

やはり火事のようだ。

今目の前を通り過ぎた消防車両も、恐らくはその消火活動か何かに駆り出されたのだろう。

「やだなぁ、また火事？」

隣に座っていた飛鳥がわずかに身を乗り出して、僕と同じ視線の先を眺めていた。
「みたいだね。そんなに遠くってわけでもないみたいだけど」
「多いですね、最近。大抵はボヤ程度で事なきを得ているようですが、今回はどうなることやら。時期的にも冬の手前で、空気も乾燥していますから、珍しい光景というわけでもありませんが」
眼鏡を押し上げながら、氷室もそう口にする。
気が付けば僕達は、揃いも揃って窓の向こうの朱色に染まる空だけを食い入るように眺めていた。
すると、ちょうどウェイターが注文の料理のいくつかを運んできた。
テーブルに置かれた料理を各々に引き寄せ、僕達の遅い昼食はようやく始まった。

ちなみに僕が注文したのはパンとスープとサラダのセットで、スープはおかわり自由な定番のコースだ。
飛鳥はカルボナーラのパスタを、氷室は温野菜のスープとリゾットを食べている。
食事中だけあって、僕達も食べることに集中して会話は少なかった。
それよりも何よりも、二人は何かこう……食という一つの概念に対して根本的に貪欲なような気がした。
もう少しゆっくり食べても時間的に問題はないはずなのに、二人に食べっぷりはどこか必至だった。
そこまで空腹だったのなら、なおのこと食事を優先すべきだったのではないだろうか……。
「食べた食べたー」
「飛鳥、口の端にソースが付いたままです」
二人のそんな会話が聞こえたとき、僕はまだ食事の半分ほどしか終えていなかった。

付け加えておくが、これは決して僕の食べる速度が遅いからではない。

この二人が異常なほどに早いだけの話だ。

「さてと。ではデザートの注文を……」

言うなり、飛鳥はメニューを開いてデザートを選び始める。

「言っておきますが、自腹ですからね」

氷室が釘を刺す。

「えー、ケチくさいこと言わないでよ。大人なんだし、懐のデッカイところ見せてよ」

「何言ってるんです。それよりも飛鳥、あなたは少し食べすぎですよ。それとも何ですか？　今あなたの中では体脂肪を増やすことがブームにでもなっているんですかね？」

「う……」

言葉に詰まったようで、飛鳥は一瞬押し黙った。

やはり女の子というだけあって、人一倍そういうことに関しては気になるものなのだろうか。

だが、僕がこうして見た限りでは、飛鳥の体型は標準か、むしろずいぶんと痩せているようにも見えるけれど……。

「ああ、大和。それは見せかけですよ。着痩せするタイプなら、それだけで体型はいくらでもごまかせます。体脂肪というのはあまり表面上の変化には見えないものなんですよ」

「な、何その私が太ってることを前提としたような会話は！　氷室、アンタはデリカシーが足りなすぎ！」

「私だってそのくらいは持ち合わせていますよ。ただ、使う相手は選んでいるだけです」

「がー、ああ言えばこう言う！」

「お互い様です」

テーブルを挟み、飛鳥と氷室はいかにもスケールの小さな争いを繰り広げていた。

だから僕は、そのことを気にせずただ黙々と食事を続けているべ

きだった。
たまたま飛鳥の方に視線を向けたら、飛鳥にはそれが体型を見られているように感じたらしく、それで僕は……。
「ま、まさか大和まで？　ああ、これだから男ってやつはもう……」
「……僕、まだ何も言ってない……」
「まだ？　まだってことは、何か言いたいことがあるってこと？　え？　どうなの？」
しまった。
これじゃ丸っきり墓穴じゃないか。
「……氷室、どうすれば」
「放っておきましょう。これでカロリーが消費されていれば、飛鳥としては一石二鳥でしょうし」
いや、それはあくまで氷室はそれでいいかもしれないけど。
その……僕はこのあとも、飛鳥とトレーニングするんじゃなかったっけ？
「……」
そう思い、僕はゾクリと寒気を感じた。
手加減してくれる……よね、飛鳥……。

その後僕が食事を終え、もう少しだけ雑談をしてから僕達は席を立った。
結局この場は氷室の奢りということになり、今になってデザートを注文しなかったことを飛鳥はずいぶんと嘆いていた。
そして会計を済ませるためにレジに向かう途中、それは起きた。
「……飛鳥、ちょっと代わりに会計を済ませておいてください」
そう言うなり、氷室は財布を飛鳥に預けて一目散に店の外へと駆け出していった。
まるで食い逃げを思わせるほどの速さだったが、店員は連れの僕達が残っていることを見て一安心したようだ。
「ちょ、ちょっと氷室……」

とっくに見えなくなったその背中に呼びかけたところで、今度は飛鳥が口調を変えた。
「大和、会計お願いね！」
「え？　ちょっと……って、わぁっ！」
氷室に続き、今度は飛鳥までもが店の外へと飛び出していった。
一体どうしたんだろうか？
疑問に思いながらも、僕は預かった氷室の財布から三人分の会計を済ませ、それから店の外へと出た。
すると、氷室と飛鳥の二人は路上で背中合わせに立ちながらジッと人波の中に目を凝らしていた。
まるで、雑踏の中から何かを探し出すかのように。
「二人とも、どうしたのさ」
駆け寄って、僕はひとまず氷室に財布とレシートを手渡す。
「……いえ、すいません。気のせいだったようです」
そう言って、氷室は僕から財布とレシートを受け取る。
「飛鳥、そっちは？」
「ううん、いないみたい。やっぱり、見間違えだったかな……」
「……そうだといいんですけどね。そうでないと、またずいぶんと厄介なことになります」
二人の会話は真剣なものだったが、その意味は僕には全く分からなかった。
「何があったの？」
僕は聞いてみる。
二人はようやく目に見えない警戒心を解いたように、ゆっくりと僕に向き直る。
「いえ、本当にただの勘違いですから。取り乱してすいませんでした」
「ゴメンね大和。勘違いだったみたい」
「いや、別に謝らなくてもいいよ……」
このときの僕は、何となく嫌な予感がしていた。

それは、食事をする前に感じていたあの妙な落ち着きのなさに直接関わっているようで。
けれど僕は、それをただの気のせいだと思い込んでいた。
ふと、どこかの空を見上げる。
一足速いその夕焼けは、火事の名残だろうか。
火のないところに煙は立たない。
それはつまり、煙が立つところには火があるということ。
そんな簡単なことを、僕はまだ理解できていなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０：黄昏迫る頃

氷室の携帯に電話がかかってきたのは、僕達が事務所に戻って間もなくした頃だった。
「すいません。ちょっと仕事が入りました。飛鳥、あとは頼みます」
それだけ言い残すと、氷室はまた一人車を走らせてどこかへと向かっていった。
仕事というのは、やはりこの経営していると思われる探偵事務所……つまり探偵としての仕事なのだろうか？
普段の氷室がどんな仕事をこなすのかすごく興味深かったけど、今は詮索はしないでおくことにしよう。
「さて、どうしよっか？」
「どうするって……どうしよう」
こうして僕と飛鳥が事務所に取り残されたわけだけど、結論から言えば何をするか何も決まっていない。
氷室に仕事が舞い込んでいなければ、恐らくは先ほどの続きということでトレーニングを続行していたかもしれない。
だから素直にそうするのも一つの手ではあるけれど、何か他にすることはないものだろうか。
そう思ったまではよかったが、やはり結論としてはすることは何も見当たらない。
僕も休日の大半は家で寝ているか、あるいは音楽を聴いたり雑誌を読みふけっているだけで消化してしまうタイプだ。
母さんにはもっと時間を有意義に使えと呆れ果てられるが、僕にとってはそういうグータラな時間だって有意義なものに変わりない。
「……とりあえず、またさっきの続きでもする？」
と、僕は提案する。
もともと今日はそのために午後の時間を割いたようなものだし、

僕自身も先ほどの疲労はもう何も残っていないので問題ない。
「んー、それもいいんだけど……」
としかし、一方で飛鳥はあまり乗り気ではないようだ。
まぁ、考えてみればトレーニングとはいってもお互いにすることは実に単調だ。
飛鳥は攻撃を繰り返すだけで、僕はその攻撃を避けるだけ。
それでも遊んでいるわけではないから、それなりに重要なものなのではあるけれど……。
「少し歩かない、大和？」
「え？　うん、いいけど……」
「私、あんまり人が多いところって好きじゃなくってさ。できれば少し静かなところがいいんだけど」
「あ、僕も同じ。じゃあ、どうする？　ここからだと、近い場所は森林公園くらいかな」
「なら、そこにしよう。今の時間なら、そんなに人も多くないだろうし」
先に歩き出す飛鳥の背中に続いて、僕も歩き出す。
太陽はまだ遥か頭上。
ほのかに暖かな日差しが、休日の街並みを照らしていた。

さっき遅い昼食を済ませた中心街を外れて、僕達は街の西側にある森林公園へと向かっている。
ここは昔から小高い丘や小さな山がいくつも連なっていた場所で、その一部を開拓して作られたのが森林公園だ。
僕も昔は、時々だけど母さんに手を引かれてこの場所にやってきたことがある。
とはいえ、それも今から数えればずいぶんと古い話だ。
こうしてこの場所を訪れたことなんて、もう十年振りくらいではないだろうか。
家から割りと遠く離れた場所にあるということも、その理由の一

つだった。
自転車をこげば来れない距離ではないけど、そうまでして来るよりは近所か友達の家へ向かう方が遥かに楽だった。
「到着ー」
公園の入り口にある小さなアーチをくぐり、飛鳥はグッと背伸びをした。
「あー……やっぱり静かなところはいいわー」
その言葉がどこか、飛鳥本人の外見とはかけ離れて見えておかしかった。
どう見ても飛鳥は、おとなしいというよりは賑やかという言葉のほうが当てはまりやすいと思う。
口調も話し方もそうだし、何より活発で行動的だ。
似合う場所は図書館ではなく、グラウンドや体育館に間違いないだろう。
「ん？　何？　どうかした？」
顔に出ていたのだろうか、振り返り僕を見た飛鳥は不思議そうに訊ねた。
「いや、別に。ただ、何となく意外だなぁって思って」
言いながら、僕は数歩ほど歩き出す。
「意外？」
僕の歩調に飛鳥が合わせ、僕達は隣り合って公園の敷地を歩き出した。
「飛鳥って、もっと騒いだりするのが好きなタイプだと思ってたから。それなのに静かな場所が好きだって言うから、ちょっとギャップみたいなのを感じちゃってさ」
「あー、確かにね。大和に限らず、氷室にも前に同じことといわれたことある」
そうだろうなぁと、僕は声には出さずに胸の中で頷いた。
「まぁ、別に騒いだりするのが嫌いってわけじゃないんだ。やっぱり、楽しいことは大勢でやった方がもっと楽しいと思うし、賑やか

なのはいいことだと思う。だけど、ね……」
「だけど？」
わずかだが、飛鳥の声のトーンが落ちたことに僕は気付いた。
表情では相変わらず何事もないように小さく笑みを浮かべているけど、肝心な感情を隠しているような、そんな妙な違和感を覚えた。
「……ううん、何でもない。私が静かなところが好きだっていうのは、別に大した理由じゃないよ。ほら、大和にだってあるでしょ？時々、一人になりたい時間とかさ」
「まぁ、そりゃね……」
「それと同じ。たまーに一人で考え事とかするときは、やっぱり静かな場所の方が落ち着くんだ。誰かに気を遣う必要もないし、逆に気を遣われる心配もないから」
「そう、だね……」
飛鳥の言いたいことは、僕にも何となくだけど分かる。
多分、そのことには理由なんてないんだと思う。
誰にも相談せず、だけど一人で抱えるには少しだけ大きな悩み事とか。
そんなとき人は、自分に向き合うのかもしれない。
誰でもない、自分自身に。
その自問自答の中で、答えを見つける人もいるだろう。
もちろん、そうでない人もいるだろう。
けど、どんな結果でもそれは、自分自身で悩みぬき、考え抜いた結果なのだから、答えがなくてもそれでいいものなんだ。
「……あのさ、大和」
「……何？」
「大和は、十六歳だっけ？」
「そうだよ。飛鳥は十五歳だっけ？」
「うん。そっかそっか、一つだけど、大和は人生の先輩ってワケだ」
「人生って……そんな大げさな。たった一年生まれたのが早いだけの話だよ。大差なんてないって」

「……ううん。そうだとしても、やっぱ違うと思う。一年早く生まれた大和には、私より一年分沢山のことを見たり聞いたり感じたりできてるもん。それって、たった一年でもすごいことだと思わない？」

「……まぁ、そう言われてみれば確かにね。あんまり昔のことなんて、もう全然覚えてないけどさ……」

「あーあ……」

吐き出すようにそう呟くと、飛鳥は視線を空に向けて続けた。

「もしも私があと一年早く生まれてたら、今十六歳になってるはずの私は、今と同じようにこの場所でこの空を見上げてたのかな？」

「……どうなんだろう。それは分からないと思う」

「……そうだよね。そんなの、分かりっこない、か……」

そう呟くと、飛鳥は視線の高さを戻して僕の方を振り返った。

「あのさ、大和」

「うん」

「もしも……もしもだよ？　どんな願いも一つだけ叶えてくれる魔法のアイテムがあったとしたら、大和は何を願う？」

「……願い、かぁ……。どうだろ。いざ聞かれると、それらしいことって何も浮かんでこないんだよね」

「アハハ、確かにそうかも」

「……飛鳥は？」

「え？」

「飛鳥は、何かあるの？　その、叶えて欲しい願い事っていうの」

「……私は、そうだなぁ……」

考えながら、飛鳥はもう一度空を見上げた。

つられて、僕も同じ空を見上げる。

秋の空は雲が少なく、少し薄れた青色の空が澄み渡っていた。

「……を、……に……ことにして……」

「……え？　何？」

何かを呟いていた飛鳥の声は、小声過ぎて僕には聞き取ることが

できなかった。
「……やっぱいいや。そんなこと、あるはずないもの」
「……飛鳥？」
「何でもない。変なこと聞いてゴメンね」
「いや、いいけど……」
一瞬僕が感じたその違和感も、気紛れに吹いた秋風が何事もなかったかのように全てをさらっていってしまった。
「せっかく来たんだし、もう少し散歩でもしていこ」
「え？　あ、うん」
そうやって振り向いた飛鳥は、僕が垣間見た違和感を全て忘れ去ってしまうほどに今までどおりだった。
気のせい、だったのかな？
浮かびかけた疑問を掻き消して、僕は飛鳥の背中をゆっくりと追いかけた。

「よぉ。お早い到着だな、名探偵」
「茶化さないでください、竹上さん。その呼び方はやめてくださいと、何度も言っているでしょう」
「そう言うな。事実、お前さんはそう呼ばれるに相応しいだけの頭脳を持ってるんだ。もっと誇れ」
「……まぁ、そんな話はいいです。それで、お話というのは？」
「なんだ、言われなきゃ分からないのか？　お前さんほどなら、呼ばれた理由にはもう大方の見当がついてるんだろ？」
「……全く、相変わらず人が悪い。そりゃ、気付きもしますよ。こんな……」
言いつつ、視線を逸らして氷室は続ける。
目の前にはすでに全焼してしまい、見る影もなくなりつつある建物の遺影。

二階建ての全八室のアパートは、見るも無残なほどに焼け焦がれていた。

「こんな火事としか思えない現場に、捜査一課の刑事であるあなたが出向いている時点で不可解と言わざるを得ないでしょう」

するとその答えに満足したのか、竹上と呼ばれた刑事は薄く口元を歪めた。

「ま、そういうことだ。お察しの通り、これはただの火事じゃない。放火の可能性大ってとこだな」

つまらなそうに舌打ちをしたあと、竹上は懐から取り出した一本のタバコに火を点けた。

放火現場だと言っておきながら、そんなところでタバコに火を点けるのはいかがなものだろうかと、氷室は内心で呟く。

「それで、被害の方は？」

「ん？　ああ、とりあえず幸いにも、住人は全員出払っていたそうだから死傷者はいない」

「……アパートの管理人は？」

「そのときは買い物に出かけていたそうだ。で、帰り道に炎上するアパートを遠目で見つけて慌てて戻ってきたらしい」

「……そうですか」

見ると、現場の一角で色々と事情を話している中年くらいの女性の姿が目に入った。

仕草や状況からして、恐らくあの女性がこのアパートの管理人なのだろう。

「……どうした、名探偵？　何か気になる点でもあるのか？」

フーとタバコの煙を吐き出しながら、竹上は無関心に言う。

「……竹上さん、そういうのはあなたの悪い癖だ。何か気になる点があったから、こうして私を呼んだのでしょう？」

「……ホンット、お前さんは勘がいいねぇ……」

「そういう職業なのはお互い様でしょう。違いますか？」

「いや、違いない違いない。じゃ、そろそろ本題といこうか」

咥えタバコを地面に吐き捨て、靴の踵でグリグリと竹上は踏み潰した。
そしてまたフーと、一つ大きな溜め息を吐き、言葉を続けた。
「――火の手が上がった事件当時、アパートに誰もいなかったのはただの偶然か？　答えろ、名探偵」
「……いいえ、必然ですね。犯人は誰もいないと知って火を放ったのでしょう。普通なら限度の枠を超えたイタズラか、性質の悪い愉快犯のような行動にも見えます。ですが……」
氷室はそこで一度言葉を区切る。
だがもしもという、そんな嫌な予感が頭の中を横切る。
少し前に自分の目に映ったあの映像が、リアルタイムで再生された。
やはりあれは、ただの見間違いや気のせいではなかったのではないだろうか？
いや、だがそれはそれでありえてはいけない事実だ。
確認することはまだいくつかある。
結論を出すのは些か早いだろう。
「どうした？　腹でも痛いのか？」
「……いえ、そういうわけではないんですが。ところで竹上さん、その、放火に使われたと思われる道具などは？」
「ああ、一応今調べさせてはいるが、期待はできんだろうな。お前の言うとおり、もしもこれが誰もいない瞬間を狙っての騒ぎ目的の事件だとしたら、そこまで頭の回るヤツがそんな初歩的なミスをするとは考えにくい」
「……それもそうですね。ですが一応、調べてみる価値はあるでしょう。少なくとも、火種となった何かは見つかるはずです」
「まぁ、それだけの手がかりじゃ何とも言えんがな。やってはみるさ。ムダの積み重ねが警察の仕事なんだ」

と、竹上はやれやれといった感じで二本目のタバコに火を点けようとして、どこか罰の悪そうな表情でそれをやめた。
その様子を見送って、氷室は再び目の前にある全焼したアパートに目を向ける。
隅から隅までが黒コゲになっている。
もはやこれは、聳え立つ炭の塊と言っても過言ではないだろう。
木造アパートだったのがいけなかったのだろうか、火の回りは思った以上に早かったようだ。
最近になってからは、こういった火事騒ぎがこの街でもずいぶんと多発している。
そのほとんどは火の元不注意から始まる小さなボヤ程度で事なきを得ていたが、こうして一つの火災という形で現れたのはこれが初めて
ではないだろうか。
季節的に決して珍しいことではないとはいえ、話としては物騒なことこの上ない。
どれだけ注意を促しても、必ずミスは出る。
それが人間という生き物なのだ、こればかりはもはや仕方がない。
「……」
氷室はゆっくりとその場を離れ、すでに面影すら残さないアパートへと歩み寄る。
木造の床や壁はおろか、鉄の柱やコンクリートの階段までもが真っ黒に塗り潰されている。
近寄ると、まだ微かに煙たい匂いが鼻腔を突いた。
と、氷室は視界の端にあるものを見つけた。
それは焼け焦げて崩れ落ちた木の一片で、今はもうただの炭の塊になってしまっている。
地面に落ちたそれは、どこかの壁か床が崩れたものだろう。
しゃがみこみ、その炭の塊を拾い上げようと手に掴んで……。

――瞬間、まるで砂粒のように炭の塊が音もなく風化した。

「……これは」

サラサラと、まるで砂時計が落ちるかのように黒い粒子が風に乗って地面の上を流れていく。

ただ手で触れただけで、その炭の塊は溶けるように消え去ってしまったのだ。

しかしそれは、普通ではありえない光景だった。

どれだけ炭を焼いたとしても、こんな風に、砂粒かそれ以下の大きさになってしまうことなんてまずありえない。

よほどの高熱で焼かれれば、こうなる可能性もゼロではないかもしれない。

だが、あくまでも今いるこの場所は至って普通の火災現場だ。

もしもそんな高熱を持った火災が発生したら、それは消防隊はおろか生身の人間では現場に近づくことさえできはしないだろう。

「……嫌な感じですね。思ったこと全てが、最悪の方向に流れ始めている……」

小声で氷室は呟いた。

嫌な予感は消え失せるどころか、逆に炎のように燃え上がるばかりだ。

炎……。

それも悪いイメージだ。

そう考えるだけで、全ての事実がその一点に集束してしまう。

「竹上さん！」

ふと、そんな声がした。

氷室が振り返ってみると、竹上の隣にはまだ若い男性の刑事がおり、どうやら何か報告のようなものを済ませているようだった。

「そうか、ご苦労さん。念のためもう一度周辺を調べておけ。それと、お前はこのことを本部の方にも伝えておいてくれ」

「分かりました」

会話を終えると、若い刑事は元来た方向へと走り去っていった。
「何か進展が？」
竹上の下へ歩き、氷室は聞く。
「進展っつーか……なんなんだろうな、これは……」
フゥと、竹上はどこか重苦しい息を吐き捨てた。

「――現場からは、何も発見されなかったそうだ。着火装置の類はもちろん、ガソリンや灯油が撒かれた形跡も見当たらないそうだ」
「……それは、本当ですか？」
「ウソ言うほどこっちも暇じゃない。そもそも、呼び出したお前さんにウソ言ってどうするんだ」
舌打ちしながら竹上は言った。
そしてそれは、同時に氷室の中にある悪い予感が一つの事実へと切り替わった瞬間でもあった。
「竹上さん、すいませんが急用を思い出したので、今日はここで失礼します」
「そうか。わざわざ呼び出してすまなかったな。何かあればこっちから連絡する」
「ええ、お願いします」
口早にそう告げると、氷室は急いで車へと向かう。
その途中で一度だけ振り返り、竹上の名を呼んでこう付け加えた。

「――竹上さん、恐らくもう放火は起きないと思いますよ」

それは、確かな自信があった言葉だった。
なぜなら。

――その放火魔が狙っているのはどの住宅や建造物でもなく、古代が遺した未知なる遺産だけなのだから。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１：最初の戦い

最初はただの煙だった……と思う。
どちらからともなく僕達は目配せし、その方向へと小走りに駆け出していた。
舗装された道を抜け、芝生の上を走り続けること一分ほど。
やや開けたその場所で僕達が見た光景は、人気のない静かな公園にはよほど不釣合いなものだった。
「……火事？」
思わず僕はそう呟いた。
僕達の目の前には、猛るように燃える炎が揺らめいていた。
数メートル離れた場所でも、確かに熱さを覚え、飛び散る火の粉も目に見えて本物だと分かった。
あまりの突発的なその出来事に、僕はしばしの間見とれるようにしてその炎を見つめていたのだと思う。
「早く、消さないと！」
飛鳥のその声に、僕はようやく意識を現実へと引き戻されていた。
だがしかし、消すといってもどうすればいいのだろう。
近くに水場はないし、仮にあったとしてもバケツやそんなもので水汲みしているようでは到底間に合わない。
だとすると、いち早く電話による連絡で消防に連絡すべきだ。
「飛鳥、とりあえずここから離れよう。僕達だけじゃ無理だ、消防署に連絡しないと」
「う、うん。分かった」
僕達は徐々にではあるが確実に燃え広がる炎に一度背を向けて、元来た道を引き返すことにした。
だが。
「……な」

「何よ、これ……」
振り返り、僕達は揃って言葉を失った。
たった今僕達が走ってきたであろうその芝生の道は、いつの間にか炎の壁によって退路を塞がれてしまっていた。
さらによく見ると、炎の壁はそこだけではない。
まるでそれらは僕達二人を檻の中に閉じ込めるかのように、円を描いて壁を作っていた。
つまり、もう出口はない。
「閉じ込められた……？」
「そんな、どうして……いや、まさか……」
そう呟いた飛鳥の表情が、しだいに緊張を見せていく。
「そんなはずは……あのとき確かに、アイツは倒したはず……」
幻でも見ているかのように虚ろな表情。
そして、そんな僕達を嘲笑うかのように、第三者の声は炎の檻の中にこだました。

「――よぉ。また会ったな、雷使い」

「……っ！」
その少年の声に、跳ね返るように飛鳥は向き直った。
僕もそれに続き、声のした方向を振り返る。
するとそこに、一人の少年が立っていた。
間違いなく今の今までは、そこには人影はおろか動物の気配すら存在しなかったというのに……。
「何だ？　今日はあのメガネの兄さんは一緒じゃないのか？　そりゃ好都合だ」
そう言うと、少年は歳相応には相応しくない嫌な笑みを浮かべた。
一瞬、僕は炎の中にいるのに寒気を覚えてしまう。
そして同時に、本能的に感じ取ってしまった。
目の前にいる少年も、僕達と同じ……能力者であると。

「……お前、生きてたのか……」
絞り出すように飛鳥は言う。
その額にはわずかに汗の球が浮かんでおり、それがこの炎の熱さなのか緊張のせいなのかははっきりとは分からない。
「ああ、このとおりな。だが、あのときはマジで死ぬかと思ったぜ？　あんなキツイ一撃もらったら、それこそ跡形も残らねーわな」
「……っ、だったら、どうしてお前はこうしてここにいる……！」
「あ？　人の話を聞いてなかったのか？　だから、喰らわなかったからだよ。お前のあの、必殺の一撃をな」
「っ……」
僕だけが取り残されたかのように会話は続くが、その話の内容で僕も大体のことが分かってきた。
今目の前にいるこの少年は、恐らくあの夜……僕が初めて現実の狭間を踏み越えたあの夜に、飛鳥と氷室が戦っていた少年だ。
あのときは遠目で顔はおろか容姿もまともに見ることはできなかったけど、今こうしてみると、僕や飛鳥とほとんど変わらないくらいの年頃に見える。

「さて。だとすると、また一つ疑問が出てくるよな？　どうして俺はあのときのお前の一撃を、回避することができたのか？」
「……」
飛鳥は無言だったが、それは肯定を意味していた。
それもそのはずだ。
僕もあのとき、飛鳥の放った巨大な雷の槍を目の当たりにしているから分かる。
あれは直撃はおろか、かすりでもしてしまえば細胞の一つも残さずに消し飛ばすくらいの威力を持った一撃だ。
加えて、その速度は音速を遥かに凌駕する。
一秒の時間もかからずに的を射抜く矢は、放たれたのを確認してからでは回避する手段などないはずだ。

「ま、タダで教えてやるほど俺も優しくないんでな。だから、これから見せてやるよ。もっとも、それを俺に使わせるかどうかはお前の努力しだい……だけどな」

言うなり、少年は今までポケットの中に突っ込んでいた両手を外へ出した。

僕も飛鳥も警戒するが、その手には特に何も握られてはいなかった。

「あの夜は出し惜しみしたが、今回は見せてやるか。苦手な水使いの兄さんもいないことだし、大サービスだ」

少年の握られた手が開く。

そして次の瞬間、少年の掌から迸るほどの炎が立ち上った。

轟々と猛るその炎は、見ているだけで相当の高温を思わせるものだった。

にもかかわらず、少年はその熱さをまるで感じさせない涼しげな表情をしている。

確信が持てた。

この少年は、炎使いだ。

「まずは一つ。よーく見てろ……」

言われたことに従うわけじゃないけど、僕は少年の手に視線を集中させた。

隣の飛鳥も警戒だけは解かず、しかしすでにその両手にはバチバチと音を鳴らす雷の矢が握り締められていた。

「――我が手に宿るは真紅の焔。形無しの焔よ、契約者の名の下に命ず。触れるものを灰燼と化す刃となりて形を成せ……」

詠うように紡がれた言葉。

それを合図にするかのように、少年の掌の上で渦を巻いていた炎がさらに激しく猛り、そして徐々にその形を変えていった。

やがて炎は揺らめいたままの赤色で形を持ち、それらは少年の両

手にしっかりと握られた。
その炎は、短剣。
見た目だけならサバイバルナイフによく似ているが、それは刃物であって刃物ではない。
なぜならそれは、形のない炎が短剣の形を見せているだけだからだ。
だが、それは決して見せかけのものではない。
「……これが俺の、イマージナル・ウェポンだ。言っておくが、ただのナイフと思うなよ？　どういう意味かは、切られれば分かるさ」
赤く揺らめく短剣が光る。
そして少年は、己の武器の名前を囁いた。

「――行くぜ。プロミネンス・ダガー」

そして、少年の手から二本のナイフが矢のように投げられた。
同時にそれは、未知なる戦いの合図となった。

赤い二本の短剣が空気を切り裂く。
標的となったのは飛鳥だった。
二本の短剣はそれこそバカ正直とも言うほどに真っ直ぐ、飛鳥へ向けて切っ先を向けてくる。
「こ、のっ！」
対して飛鳥も、その二本の短剣に対して両手から一つずつの雷撃の矢を放った。
青白い火花がバチバチと音を立て、矢の鋭さをもって迎え撃つ。
両者の中間距離ほどの場所で、炎の短剣と雷撃の矢は互いに衝突した。
一瞬まばゆいほどの閃光がはためき、直後に小さな爆発と共に白煙が立ち上る。
僕はただその勢いに押されるように、腕で視界を覆い隠すことし

かできなかった。
威力はほぼ互角、結果は相殺だろうか？
しかし、そう思ったのも束の間だった。
「大和、離れてて！」
飛鳥のそう怒鳴るような声が聞こえて、僕は反射的にその言葉に従った。
急いで足を動かし、周囲を囲む炎の壁に背を向けるようにして立つ。
徐々に白煙が晴れていく。
そして元に戻った視界の中には、僕の目には信じられない光景が映りこんだ。
「な……」
思わず僕は言葉を失った。
それはあまりにもデタラメな絵だったからだ。
僕と同じ心境なのだろう、飛鳥も苦々しい表情を隠せないでいる。

「悪いが、俺の炎に相殺なんて安い真似は通じねーよ。って、言わなくても見れば分かるか？」
相変わらずの嘲笑うような声。
己の絶対の優勢を思わせる、自信に満ち溢れた声。
しかし、それもそのはずだ。
少なくともこの状況……四方を炎の壁で囲まれている限られた空間の中では、少年のこの力は最大限に効力を発揮すると言える。
少年の手には、すでに新しい短剣が二本。
そればかりではない。
少年の周囲を取り囲むかのように、いくつもの炎の短剣が鋭い切っ先を向けて宙に浮いているのだ。
その数はゆうに二十を超える。
一つ一つが陽炎のように揺らめきながら、真っ赤に燃える刃を飛鳥へと向けている。

飛鳥と似た飛び道具系の能力ではあるが、その数が違いすぎる。
少年の短剣は、まるでその一つ一つが少年の意志一つで自由自在に動かせるような……言わば高性能の誘導弾のようなものだ。
対して神楽の雷の矢も、威力では決して劣ってはいない。
いや、威力の面だけで見れば恐らく上だろう。
しかし、そこには機械のような正確さはない。
結局は矢を放つのは飛鳥自身なわけで、狙い定めるのも本人の役目だからだ。
負けじと飛鳥は両手に雷撃を溜めてはいるが、これではさすがに多勢に無勢。
飛鳥が仮に両手のそれぞれの五指から雷撃を放ったとしても、限界数は十。
対して向こうはその倍以上もの数を用意している。
十を相殺しても、残りの十が飛鳥の体を突き刺す。
それでは全く勝ち目がない。
「さて、解説終了。まぁ、せいぜいがんばって避けてみろ」

少年が手を前方にかざす。
それに反応するかのように、まずは計五本の短剣が飛鳥へと襲い掛かった。
「くっ！」
飛鳥の反応は早い。
ただの直線的な攻撃であれば、身体能力だけでも余裕に回避できるほどだ。
しかし、それは意味を成さない。
向かってくる短剣は、的を追いかけるかのように進行方向を変えてくる。
つまり、避け切ることはほぼ不可能。
ならば、やはりムダと分かりながらも相殺するしかない。
「この……」

左手を払い、同時のそこから五本の雷撃の矢を放つ。
再び正面から激突する互いの攻撃。
そうなるはずだった。
だが……。
互いの攻撃がぶつかり合うその直前、その変化は起きた。
グニャリと、まるで溶けた飴細工のように短剣が形を変えた。
「な……」
真っ直ぐに撃ち出された飛鳥の雷撃は、迎え撃つはずの短剣の一つも破壊することなく空を切る。
そして変化はまだ続く。
一度は溶け出した短剣が再び形を取り戻し、こともあろうか、その数を倍の十に増やして再び飛鳥へと襲い掛かった。
一つ一つの短剣が溶け合い、二つの短剣へと変化していた。
威力そのものは半減されるが、その数は倍。
下手な鉄砲も数撃てば当たるというが、これはそれよりも数倍性質が悪い。
なぜなら、その全てが下手じゃないのだから。
「飛鳥！」
僕は思わず叫んだ。
飛鳥は雷撃を放ったままの体勢で、とてもじゃないがあの十本の短剣を避けることなんてできない。
しかしそんなことはお構いなしに、時間を取り戻した十本の短剣が襲い掛かる。
「……っ！」
飛鳥の表情が強張る。
無理だ。
回避なんてできっこない。
じゃあ、どうすればいい？
今から僕が走り出したところで、間に合わないのは明白だ。
どうする？

どうする？
せめて、せめてもっと……。
――……もっと、もっと速く動くことができれば……。
そう思った瞬間、僕の周囲にわずかな変化が起きた。
ふいにはためいた優しい風。
僕の体を包み込むように、足元から立ち上る。
炎の熱さを忘れるほどに暖かく、それでいて身を裂くように鋭い。
風が舞う。
そのとき僕は、一つのイメージに支配された。
――今なら、間に合う。
その言葉が何度も脳の中で反芻されたと思ったら、僕の体はすでに動き出していた。
自分でもはっきりと分かった。
地を蹴る足。
体を包む風。
目の前の景色が、急速に近づいた。
周りの景色なんて、それこそ止まって見えた。
そしてたった一歩を踏み出しただけのはずの僕の体は、直後に……。
背後ではいくつもの短剣が地面に突き刺さっていた。
「何？」
少年の声。
疑問を隠せないのが、その口調からよく分かる。
少年の言葉は至極当然のものだった。
なぜなら今地面に突き刺さっている十の短剣は、その全てが確実

に飛鳥の体のどこかを突き刺すに違いないものだったのだ。
にもかかわらず、短剣は全て的を外して地面へと突き刺さった。
つまり、飛鳥がそこにはいないということだ。
では、何が起こったのか。
少年はわずかに視線を動かし、その方向を見る。
そこに。

――飛鳥の体を抱きかかえるようにして方膝をつく、僕の姿があるはずだ。

「……大和？」
驚きを隠せないでいたのは、どうやら飛鳥も同じだったようだ。
いや、僕自身この出来事に驚いている。
「……あ、れ？　僕、何を……」
気が付けば僕は、距離にして三十メートルほどを移動していた。
あの一瞬で、だ。
それでも僕は、はっきりと覚えている。
今の一瞬で、僕自身が確かに動き、飛鳥の身を抱えていったことを。
あの瞬間、湧き上がるような力をこの体が感じ取ったことを。
どうやら、これが……。

「――これが、風の力……？」

誰かに問うように、僕は静かに呟いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２：戦況悪化

今にして思えば、予感というものに頼るのはずいぶんと久しぶりかもしれない。

車を運転しながら、氷室はふとそんなことを考えていた。

休日の夕方、人通りも多く道路は混雑していてなかなか前へ進むことができない。

クラクションを連打したくなるような焦りをどうにか抑えつけて、氷室はフロントガラスの向こうに映る、少し赤く染まり始めた空を眺めていた。

目の前にある信号は未だに赤。

いつもならばこんなに焦りは苛立ちを覚えることもないはずなのに、今はこの一分一秒がじれったくて仕方がない。

「……まったく、この忙しいときに限って……！」

苦々しげに吐き捨てて、腕時計の文字盤を覗いた。

先ほどの火事の現場を出てすでに十五分ほどが経過しようとしている。

車に乗り込む直前に飛鳥にも電話をかけてみたが、どういうわけか繋がらなかった。

圏外にいるのか、それとも電源を切っていたのか。

どちらにしても、そのときに連絡が付かなかったことは氷室にとって大きな遅れの一つに違いない。

「……よくない展開ですね。まさかあのときに仕留め損なっていたとは、思いもしませんでしたよ……」

信号はまだ青に変わらない。

焦りや苛立ちがさらに拍車をかけるように襲い掛かる。

「しかし、一体どうやって？　飛鳥のあの一撃をまともに受けて、無事でいられるとは到底考えにくい……いや、まさか……」

そう呟いたところで、ようたく信号が青に変わった。

ゆっくりと車の流れが動き出し、十字路を境に右折や左折する車の間を通り抜け、氷室は車を真っ直ぐに走らせた。
氷室がその気配を感じ取ったのは、車を走らせ始めて十分ほど経った頃だった。
その気配というのは、言うなれば『Ｒｉｎｇ』を持つもの同士が互いを感知できる見えない信号のようなものだ。
能力者が能力を使うということは、それはつまり『Ｒｉｎｇ』の力を解放しているということである。
それはつまり、戦いが始まることの知らせに他ならない。
そして今回、氷室がその気配を感じ取った場所は火事現場から全く正反対の方向だった。
ちょうどその方角には、この街で一番大きな公園である森林公園が位置している。
炎使いと森林。
考える限りでは最悪の部類に入る組み合わせだ。
炎使いともなれば、あのくらいの広さの規模を誇る公園だろうと、焼け野原にするのは決して難しいことではない。
そうなれば最後、飛鳥も大和もただでは済まない。
最悪の場合、二人は死体すら残らずに灰になってしまうことだろう。
氷室は制限速度を完全に無視し、アクセルを踏み込んだ。
「間に合ってくださいよ、二人とも……！」
車体が加速する。
現在位置から森林公園まで、どんなに急いでもあと五分はかかる距離だ。

「へぇ……ただの連れだと思ったら、そっちのアンタも能力者だったってワケか」

炎の中、赤い短剣を操る少年はわずかに驚いたような口調でそう言った。

「つっても、まだ発展途上もいいとこじゃねーか。自分の力を、まるっきりコントロールできてねーでいやがる。そんなんじゃ、ただのお荷物にしかならないぜ。逆に不利なんじゃねーの？　雷使い」

少年の視線の先には、身構える体勢の飛鳥と大和が立っている。

二人ともケガらしいケガはしていないが、逃げ場のない炎の中ではどう見ても状況が苦しいことは確実だ。

「……大和、できるだけ私から離れないで。離れればアイツは、絶対に無抵抗のあなたを狙うに決まってる」

「だ、だけど、それじゃ飛鳥が……」

「……大丈夫、何とかする。少なくとも、大和だけは守るから」

「そ、それじゃ……」

意味がないだろうと、僕は言葉を続けることができなかった。

悔しいけど、目の前の少年の言うとおりだ。

僕はまだ能力者としては卵同然で、力の使い方はおろか理解さえも中途半端なままだ。

そんな僕が、こと実戦にか関して飛鳥の助力になることは極めて難しい。

むしろ逆に、足手まといになるのが目に見えている。

まさか……まさか、能力のいろはを覚え始めたその日にこんな状況に遭遇することになるなんて……。

「ま、どうでもいいか。まとめて倒せばそれでいいわけだしな。的が一つでも二つでも大して変わらねーし、むしろ当たる確率が増えたワケだしな」

薄く笑い、少年は再びその掌から炎を生み出した。

猛る炎は見る見るうちに赤い短剣へと姿を変え、まるで射出されるのを待っている銃弾のように切っ先を僕達に向けている。

「どこまで避けきれるか、見物だな。風使いなんだろ？　逃げるのは得意分野じゃねーのか？」

次々に生み出されていく赤い短剣。
その数はゆうに二十を超えた。
無理だ、あの数を全て避けることなんて、絶対にできっこない。
素人目で見た僕でもそう分かるくらいに、それは絶望的なほどの数の暴力だった。

「……大和、少しだけ後ろに下がって」
囁くように、飛鳥は言った。
「え？　う、うん……」
飛鳥が何を考えているかは分からないが、僕はとりあえず言われるがままに指示に従った。
直後に、飛鳥の両手に今まで以上の膨大な量の雷のエネルギーが集束した。
バチバチと稲光を発しながら、青白い閃光が迸るように視界を照らす。
「……っ！」
飛鳥のその様子に、少年もわずかに身を引いた。
あの夜、その必殺の一撃を目の当たりにしているからだろう。
今の飛鳥は、まさにあのときのそれだ。
「避けられないなら、まとめて消し去るまでよ」
言い放ち、両手を構える。

「――紫電の光よ、我が元に集え。音速の名の下に、眼前の敵を消し去れ。我、射手座の名の下にこの矢を放たん……」
あの夜と同じ、詠うように紡がれる言葉。
それは契約の言葉であり、同時に飛鳥の今持てる最大の力を集めた一撃の名前だ。
「今度はアンタが避ける番だ。避けれるものなら、避けてみろ！」
「チッ、やらせるか……よっ！」

一瞬早く、少年は命令をするように両手を払った。
するとそれを合図に、二十を超える赤の短剣が一斉に飛鳥目掛けて襲い掛かった。
正面からだけではなく、左右と上方向も含めたまさしく全方位からの襲撃。
理屈だけで考えれば、文字通り逃げ場はない。
だが、しかし。
「遅いっての！」
この雷の槍の速さに、理屈などはもはや通じない。

「――サジタリウス・グングニル！」

必殺の威力を誇る、紫電の槍の名が紡がれる。
青白く光る巨大な槍は、向かってくる赤い短剣全てを呑み込んでなお、その勢いは止まらない。
雷の槍の軌道は一直線。
従って、左右のどちらかに回避すれば容易に直撃は免れることができる。
しかしそれは、この一撃が回避可能な速度で飛来する場合の話であって……。

――音速をはるかに凌駕するその速さの前では、もはや回避という概念すら存在しない。

ゆえに、放てば必中。
ゆえに、必殺。
瞬きする間もない刹那の中で、赤い短剣を飲み込んだ雷の槍が少年目掛けて突き進む。
回避は不可能。
防御などもってのほか。

この槍を防ぎきれる盾など、まず存在しない。
そして雷の槍は、あっけなく少年の体を呑み込んで森の奥へと消え去った。
「……やった？」
呟くように飛鳥が言う。
目の前にあるのは、一直線に続く槍の軌道の地面。
一面に芝生が敷き詰められている場所に、一本だけ直線のような地肌が色を覗かせている。
その先に、あの少年の姿はない。
見れば、先ほどまで周囲を取り囲んでいた炎の壁も跡形もなく消え去っていた。
その炎が周囲の木々に移った形跡も見られず、火事という大惨事には至らずにすんだようだ。
僕は飛鳥の背後でホッと胸を撫で下ろした。
一方飛鳥は、今の一撃で相当量の体力を消耗してしまったのだろうか、地面に膝を付いたまま肩で息をしている。
「あ、飛鳥！　大丈夫？」
呼びかけ、僕は慌てて駆け寄った。
「う、うん。どうにかね……ちょっと、力を使い過ぎちゃったみたいだけど、それだけだから……」
そう言って飛鳥は僕に振り返る。
額に浮かんだ汗の球が、飛鳥の疲労の色の濃さを物語っていた。
とりあえず僕は肩を貸そうと、さらに数歩ほど飛鳥に歩み寄って……。
「……え……」
その先に、あるはずのない映像を見た。
「飛鳥、危ない！」
僕は叫び、駆け出した。
その言葉に、飛鳥が自分の背中を振り返る。
そこに。

――いくつもの赤い短剣が迫っていた。

「ぐっ！」

僕は全力で走った。

しかしこんなときに限って、先ほどのような足の速さは現れない。

無我夢中で走り、飛鳥の体を抱え込むようにして芝生の上になだれ込んだ。

頭上で空気を切り裂く音がする。

そしてその赤い短剣のいくつかは、容赦なく僕の体を切り裂いていった。

「……っ！」

寝転がったままの状態で、僕は痛みを堪えながらどうにか顔を上げる。

その視界の先に、少年は立っていた。

まるで何事もなかったかのように、小さな笑みを浮かべた表情でそこに立っていた。

「よく避けたな。とはいえ、さすがに完全回避ってわけでもなさそうだ」

僕は左腕と右足の二ヶ所を、あの赤い短剣によって傷つけられていた。

直撃はどうにか避けられたので、傷そのものは掠った程度だ。

だがしかし、何だこの痛みは。

いや、痛みのほかにもう一つ別の痛覚が働いている。

これは……。

「……熱っ……！」

僕の傷口は、火傷を負ったときのように熱を持っていた。

その熱さが普通じゃない。

まるで傷口から炎が燃え上がっているかのようだった。

「分かったか？　俺のナイフは、もともと切ったり刻んだりするた

めの代物じゃないんだよ。そもそもこのナイフは、俺の炎に形を与えただけのもんだ。最初からただの炎のままなんだよ」

そう言うと、少年は赤い短剣をいとも簡単にその手で握りつぶして見せた。

すると赤い短剣は、まるでその形が最初から仮初のものであったかのように形を崩していく。

そしてまたただの炎に戻ると、少年の手の中で勢いよく燃え始めた。

「……っ！」

「ま、よく避けたと思うぜ？　あんだけ投げて、かすり傷二つか。アンタが風の力を扱える理由も、なんとなく分かる気がするよ」

「……なん、で……」

呻くような声で、飛鳥が口を開いた。

「……どう、して……絶対に命中したはずだ。なのに、どうして……」

「ああ、そうだな。確かにその通りだ。お前の攻撃は命中……いや、必中だったさ。そして、確かに命中した」

「……だったら……」

「おいおい、こんだけ言ってまだ分かんねーのか？　ようするにだ、お前の攻撃は命中した。にもかかわらず、俺はこうしてピンピンしてる。だったら、もう答えなんて一つしかねーだろーが」

もったいぶるような口調の後、少年はまた少しだけ楽しそうに笑って言った。

「――つまり、お前の攻撃が当たったのは俺じゃなく、別のものだったって話だ」

「……別の、って、まさか……」

「ま、こんだけヒントをやったんだから、そりゃ気付くよな。ああ、

そういうことだよ。お前が打ち抜いたのは、俺じゃなく、俺の……」
言いながら、少年は炎を操って何かを作り出す。
それらは互いに混ざるように集まり、少しずつ一つの形を作っていく。
やがてそれは、人の形をしたものへと変わっていった。
そして、さらに……。
「な……」
僕は思わず声を上げた。
出来上がった炎の塊のそれは、どこからどう見ても少年の姿をした炎の人間だった。
「そう。俺の姿をした炎だったってワケだ。付け加えると、あの夜のときも同じ手で逃げさせてもらったぜ。敵の手の内を知るのは戦闘において重要なことだからな。ま、こうして俺も今手の内をいくつかさらけ出してるんだ。これであいこだろ」
少年が自分の姿をした炎を撫でると、それは瞬く間に形を崩して元の炎へと成り下がった。
そしてそれらは再び、僕達に狙いを定めたいくつもの赤い短剣となって切っ先を向け始めた。
「さてと。どうやらここまでみたいだな。雷使いはもう戦う力は残ってねーだろーし、風使いのアンタじゃ俺の相手にはならない。死にたくなかったら、さっさとお前らの『Ｒｉｎｇ』をよこしな」
……え？
その言葉に、僕は疑問を抱いた。
てっきりこのまま情け容赦なく殺されるのだとばかり思っていた僕は、思わず耳を疑った。
『Ｒｉｎｇ』を渡しさえすれば、命は助けるということだろうか？
いや、そうとは限らない。
飛鳥が言っていたじゃないか。
一度『Ｒｉｎｇ』を失ったとしても、能力者である以上は再契約の可能性があるんだと。

そんな危険な芽を、摘んでおかないはずがない。
……だけど、このまま『Ｒｉｎｇ』を渡すことを拒んだら、僕はもちろん飛鳥も確実に殺されてしまう。
僕を守るために力を使ってしまったがゆえに、こんなことになってしまった。
その盾となってくれた飛鳥をみすみす見殺しにすることは、僕にはできない。
「……大和、ダメ。渡したらダメだよ……」
「分かってるけど……このままじゃ、どの道僕達は殺されちゃうんだ」
「……どの道、コイツが私達を生かしておく保障なんて、どこにもない……それに、私はまだ、戦え……」
そう言って立ち上がろうとする飛鳥だったが、体がついていかない。
僕が体を支えなくては、飛鳥はまともに立ち上がることさえできないほど消耗している。
ダメだ、飛鳥をこれ以上戦わせるわけにはいかない。
だから、今は……。

「……飛鳥は、休んでて」
「大和……？　どうする気なの……って、まさか……」
「……うん。何もできないかもしれないけど、僕も一応能力者として選ばれたから。自分だけ戦わずに逃げるなんて、できない」
「む、無理だよ。だって大和は、まだ力の使い方を何一つ覚えてないじゃない……」
「それでも、逃げる理由にはならないよ。やれるだけのことはやってみる」
「……ダメ、そんなの許さない。みすみす死ににいくようなものじゃない。そんなのは、仲間として見過ごすわけにはいかない……」
「まだ、死ぬって決まったわけじゃない。言っただろ？　やれるだ

けのことはやるって」
「大和……」
僕は立ち上がり、少年に向き直る。
「……へぇ。アンタ、見かけによらず大したもんだな」
「見かけって、外見だったら僕も君も同い年くらいだろ？」
「ハハハ、そりゃそうだ。いや、アンタいいよ。俺、アンタみたいなタイプは好きだぜ」
「……あんまり嬉しくない」
「そう言うなって。心構えに共感したのはマジだぜ？　だが、それと手加減どうこうとは話が別だな。やるからには俺も本気で行く。覚悟はできてんだろーな？」
「……あいにくだけど、死ぬ覚悟ならできてないよ。僕にあるのは、逃げない覚悟だけだ」
「……上等。行くぜ！」
こうして、僕の勝ち目のない最初の戦いは始まった。
だけど、どうしてなんだろう？
このとき、僕は不思議と……。

負けることなんて、これっぽっちも考えてなかったんだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３：風の声

正直、僕は自分の行動のその根拠となる理由がまるで分からないままだった。

こんな風に現実を飛びぬけた世界の中で戦うことなんて今までにあるはずもなく、それどころか普通の取っ組み合いの喧嘩ですら、僕は全くといっていいほど経験したことがない。

ましてや今目の前にあるのは、それこそ命がけの戦いといっても過言ではないものだ。

一歩間違えたり、一瞬の判断の遅れが容赦なく僕の命を削り取る、あるいは奪い去っていく。

だというのに……。

「チッ、チョコマカと……それも風の恩恵ってやつかよ……」

苦々しげに言葉を吐き捨てるのは、炎を操る少年の方だった。

対する僕は、その少年の言葉通り、全ての攻撃をまさに紙一重の間合いでかわし続けていた。

「……」

僕は自分で自分の体の動きが信じられなかった。

背中にはまるで羽根が生えているかのように、体そのものの重さをまるで感じさせない。

確かに踏みしめているはずの地面もどこか不安定で、わずかばかり体が宙を泳いでいるような錯覚さえ覚えた。

僕と少年の交戦は、まだ始まって五分と経っていない。

しかしその時間の中で、僕が少年から受けた傷は一つもない。

左腕と右足を襲っていた焼けるような痛みさえも、今ではもう何も感じさせはしない。

僕は幾度目かの赤い短剣を、やはり体のひねりのみで避ける。

不思議だ。

体が勝手に動いているみたいで、まるで自分の体じゃないみたい

だ。

「クソッタレ。これなら……どうだっ！」

痺れを切らしたのだろうか、少年は忌々しげに吐き捨てると、両手を交差させるような振りで膨大な数の赤い短剣を飛ばしてきた。

目測できるだけで、その数は三十。

それらが正面からだけでなく左右、さらに足元、頭上に至るまでのありとあらゆる方向から追尾機能のあるミサイルのように襲い掛かってくる。

だから僕には、用意された逃げ道は一つしかない。

それはつまり、後ろだ。

だが僕は、あえてその方向へ逃げることをしない。

僕が取った行動は、自分でもおかしいと思えるくらいに無謀で、それゆえに少年の思考回路さえも一時停止を余儀なくされるものだった。

「なっ……」

そして案の定、少年は口を開けたまま呆然と立ち尽くしていた。

無理もない話しだ。

なぜなら、僕が取った行動は……。

――赤い短剣に正面からぶつかるように、前へと走り出していたのだから。

数多の方向へと分散された攻撃の手は、当然一つの方向に対しての絶対数を少なくせざるを得ない。

実際、僕の真正面から向かってくる赤い短剣の数は七本か八本という、数えるほどのものでしかなかった。

そのくらいの数ならば、かすり傷を覚悟すれば避けきれない数ではない。

僕は地を這うように体勢を低くし、後は体が動くままに前へ前へと押し進んだ。

左肩、左太もも、右頬に微かな痛みが走る。
焼けるような熱さを持つそれは、しかし気にもならない。
今、少年は手元にある全ての短剣を出し切った。
つまり、体はがら空きだ。
僕の体と赤い短剣が交差する。
致命傷はない。
余裕で切り返せる範囲だ。
僕は右拳を強く握り締め、遮るものの何もない少年の腹部目掛けて思いっきり拳を叩き込んだ。
が、しかし。

「え……？」
勢いよく振りかぶった僕の拳は、しかし手応えを感じ取ることができなかった。
変わりに伝わってきたのは、猛る炎の熱さだけだった。
「詰めが甘いな」
囁くような声。
気が付くと、少年はいつの間にか僕の側面に立ち、見下ろすような視線を向けていた。
だが、それだけではない。
空振りの拳の反動で、今度は僕の体ががら空きになる。
その隙を少年が見逃すはずもなく、勢いよく振り上げられたその右足が、例えようのない音を上げて僕の腹にめり込んだ。
「……げ、ほっ……」
せき込む間も一瞬だった。
半分ほど宙を浮いていた僕の体は、少年の蹴りによって容易く宙を舞った。
恐ろしく長く思えるほどの、しかし刹那的に短い滞空時間が終わり、僕の体は背中から芝生の上へと落下した。
その衝撃で、肺の中にある空気の塊を全て吐き出してしまった。

「げほっ、げほ……」
夢中で酸素を取り込むように、僕は呼吸を繰り返す。
しかし、蹴られた腹部が呼吸のたびに別の悲鳴を上げる。
手で触れてみるだけで、鈍い痛みが走った。
幸い骨折はしていないようだが、深手には変わりはない。
逆流しかけた胃液を無理矢理押し込んで、僕はすぐに上半身だけを起こした。
すると思ったとおり、僕の倒れていたその一瞬の間に少年はすでにいくつもの赤い短剣を作り出していた。
もう少し僕が起き上がるのが遅ければ、杭を打ちつけられるかのように赤い短剣が降り注いでいたことだろう。
「……う、ぐ……」
どうにか起き上がったまではいいが、思った以上に体に力が入らない。
さっきまでの背中に生えた羽根がウソのようだ。
今はまるで足枷をはめられているかのように、動きが重い。
このままでは、追撃となるあの赤い短剣を避けきることなんて到底不可能だ。

「……なんてヤツだよ、ホントに。実戦の中で成長するタイプもいるとは聞いてたが、ちょっと桁違いの速さなんじゃねぇのか？　まさか、風使いだから成長も速いだなんて、そんな屁理屈こねられたらこっちはたまんねぇぞ……」
相変わらず少年は憎々しげに言葉と吐き捨てている。
しかし聞きようによっては、それは間違いなく少年の中で誤算が生じているということに他ならない。
その誤算というのが恐らく、僕の成長速度、ということなのだろうか。
正直、実感はない。
僕はただ体の動くままに体を動かしただけであって、現に今の僕

には目の前の少年を攻撃する手段なんて何一つないのだ。
そう、僕にはまだ、戦闘において決定的な欠落がある。
それは、武器となる攻撃の力だ。
それがないままでは、いくら風の力の影響で敏捷性が向上しても、逃げの一手しか生まれてこない。
それでは戦いに勝つことなど、到底不可能だ。
だけど僕は、まだそれを知らない。
自分が何を武器にするかなんて、何も考えていなかったんだ。
しかしそうも言ってはいられない。
このままでは僕は、確実にこの少年に敗北してしまう。
命を失うかそうでないかは分からないけど、負ければ僕は『Ｒｉｎｇ』を奪われる。
そうなれば、飛鳥だって同じ目に遭ってしまう。
それだけはできない。
僕は決めたんだ。
戦争の利益を求めるためじゃなく、この戦争を終わらせるために戦うと。
しかしそのためには、やはり戦うための力は不可欠だ。
それをここで失うわけにはいかない。
だから、そのためには僕は、どうしても負けるわけにはいかない。

「ぐ……うあ……」
足元がふらつく。
痛みもそうだけど、ダメージは思ったより足にきている。
この足では、さっきまでみたいに満足にあの赤い短剣を避け切ることはまず無理だ。
ならば、どうする？
避けることができないなら、防御するしかないのか？
いや、仮に防御したところでどうなるというのだろう。
元は炎とはいえ、それはれっきとした殺傷力を持ったナイフだ。

刺されば、それこそかすり傷程度で済むはずがない。
むしろ当たり所によっては、それだけで絶命することだってありえる話だ。
回避もできず、防御もできない。
だとすると、僕に残された手段は……。
僕はわずかに視線を外す。
その先に、飛鳥の姿が見えた。
言葉には出さないが、その表情は絶望的なものだった。
もう後がないと、その目が言っている。
だけど、それでも、僕は……。
「もういいだろ？　アンタはよくやった。俺だって好き好んで殺しなんてしたいわけじゃない、だから、最後に聞く。おとなしく『Ｒｉｎｇ』を渡せ。そうすれば、命までは取らない」
少年の言葉は本音だろう。
そのに敵意はあるが、悪意は感じられなかった。

だけど僕は、それに応じるわけにはいかない。
「……まだ、負けたわけじゃない……」
痛みを堪えて、腹の底から声を出した。
するとその言葉に、少年は一瞬だけどこか悲しそうな表情を見せた。
が、それもすぐに上塗りされる。
「……そうか。だったらこっちも、手加減はしない。戦争は常に勝者と敗者でしか分かれない。そして敗者を待つのは、例外なく死だ」
言って、ゆっくりと手をかざす。
いくつもの赤い短剣がそれを合図に、より激しく燃え盛る一つの短剣に姿を変える。
「……悪く思うなよ。使いたくねぇ言葉だけど、これも運命ってやつだと思ってくれ」
その一つになった赤い短剣は、もはや刃物としての機能を失って

いる。
これは炎の形をした短剣ではない。
紛れもなく、それは炎そのものだ。
「……できるならアンタとは、もうちょっと違う形で会いたかったな。そうしたら、笑って話せてたかもしれない……」
炎をその手に。
形のないはずの柄を握り、狙いを定める。
「じゃあな。これで本当に終わりだ」
そして少年は告げる。
名も無き焔の刃の名を。

「――カタストロフ・ダガー」

そして、名付けられた焔は放たれた。
見る見るうちにその切っ先が視界を覆い尽くし、全てを飲み込む赤の恐怖が迫る。
……ダメなのか？
もう、僕は何もできないのか？
まだ、何もしていないのに？
ここで終わる？
……嫌だ。
そんなのは、嫌だ。
戦うと決めた。
無意味な戦争を、犠牲なく終わらせて見せると決めた。
だから、こんなところで……。
「……負けられ、ない。力を……力を貸してくれ……！」
そして僕は思い出す。
あの日、ふいに浮かんだ名も無き風のその名を。

「――力を貸してくれ……シルフィア！」

直後に、僕の指の中の指輪が眩しいほどに発光した。
そしてそれと同時に、少年の手から放たれた名付けられし焔は爆発した。
ドォンと、まさに爆弾が爆発したかのような轟音。
周囲は瞬く間に灰色の煙に覆われ、誰の姿も見えなくなってしまう。
「大和っ！」
そんな中で、飛鳥のそんな叫ぶ声を僕は聞いた気がした。
だけど、体が思うように動かない。
目の前には灰色の煙の壁。
その向こう側に、少年の立つ影が確かに見えた。
……え？
何で、だ？
どうして、僕は……。
――それらの声や映像を、見聞きすることができるんだ？
「……あ……」
そうして僕は、目を開けた。
……生きている。
僕は先ほどまでと同じようにふらつく足でどうにか地面を踏みしめて、今にも崩れ落ちそうな体で立っていた。
しかし、どこかその感覚が違う。
まるで再び、背中に羽根が生えているような……。
そう思った瞬間、僕の目の前で風が生まれた。
小さな台風のようなそれは、一面に広がった灰色の煙を一瞬で晴らしてしまう。
そして晴れた視界の向こうに、やはり少年は立っていた。
ただし、その目を驚愕の色に染め替えて。

「……何だ？　何をしたんだ、一体……」
微かに震える少年の声。
その目と向き合っているのは、やはり僕の姿だった。
「答えろ！　今何をした！」
震える声は怒鳴り声へと変わった。
僕はその言葉に答える術を持たず、どこか手持ち無沙汰に自分の両手を広げた。
そしてそこから、僕の風が生まれた。
ヒュウヒュウと優しい音を立てながら、生まれたばかりの風が僕の体を包み込む。
その風はどこか暖かく、まるで抱かれているような心地よさだった。
そして、腹部の痛みが引いていく。
それは癒しの風だった。
「これが、僕の……」
初めて実感した、力というものの存在。
目に見えるのは春風のような優しさなのに、それがこんなにも心強い。

『――契約者よ、お初にお目にかかります。我が名はシルフィア。貴方の持つリングに宿る、風の精霊』

「こ、声が……？　ど、どこから……」
『私は常に、貴方と共にあります。永き間封印されていた私の力は、契約者の言葉によってようやく解放されました。貴方の意思の強さ、我が力を託すに相応しいものと判断し、力の一部を解放しましょう』
僕は指の中の『Ｒｉｎｇ』に目を落とした。
声の主の姿は見えないが、その声は確かにそこから聞こえてきていた。
『さぁ。我が力、見事使いこなして見せなさい』

その声と共に、僕の手の中の風がその姿を変えた。
優しい春風は、一瞬のうちに触れるものを切り刻むであろう風の刃に姿を変えていた。
「こ、これが……風の力……」
僕は自分の手の中で吹きすさぶそれを、完全には制御できなかった。
まるで風本来が自由であるように、身勝手に動き出すかのようだった。
『恐れてはなりません。風は貴方の体の一部だと思いなさい。同調するのです。貴方は風、そして風は貴方そのものであると』
「……僕は、風の一部……」
イメージを膨らませる。
それはまるで、何もない空の上に体を浮かべるかのように。
体を包む風。
最初はバラバラだけど、しだいに波長を整えていく。
流れが一つになり、思うがままに操れる。
目を閉じ、開ける。
そして僕の手の中に生まれた風は、見えない渦を巻く刃だった。
『放ちなさい。今の貴方なら、その風を操れるはず。名も無き我が風の一部、その名は……』
「やらせるかよっ！」
途端に、今まで傍観していた少年が叫んだ。
放たれるは赤い短剣。
それを迎え撃つように、僕は名も無き風に新たな名を与える。

「――飛べ。エアリアル・ブレード！」

炎の短剣と風の刃が、それぞれに放たれる。
ぶつかり合い、そのまま相殺を果たすかと思われたその瞬間のことだった。

「なっ……」
最初に声をあげたのは少年だった。
間違いなく正面からぶつかり合ったはずの炎と風。
しかし、炎は風の前に跡形も無くかき消され、風は一方的に突き進む。
「そんな、どういう……」
戸惑う少年をよそに、僕にはその原理が理解できていた。
僕の放った風は、いわばカマイタチと呼ばれる真空の刃だ。
さて、ここでちょっとしたクイズをしよう。
炎が燃えるためには、空気中に何が必要か？
答えは酸素だ。
では、もう一問。

――真空状態で、酸素は存在するか、否か？

もちろん、答えは……。

――ノー、に決まっている。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４：台風一過

氷室がようやくのことで渋滞を抜け、森林公園に辿り着いた。
こういうときに限って嫌な予感というものは的中し、それを後押しするかのように、公園の一角からただならぬ気配が流れ出していた。
「っ、無事でいてくださいよ、二人とも……」
半ば祈るように呟いて、氷室は公園の敷地の中を疾走する。
石畳を蹴り、芝生を蹴って奥へと向かう。
そして小さな木々の迷路を少し抜けたところで、氷室はピタリと足を止めた。
「飛鳥、大和！」
二人の名前を呼び、急いで駆け寄る、
木の幹に背中を預けるようにして、二人は力なく座り込んでいた。
呼びかけると、二人はそれぞれに疲労の色を見せながらもどうにか顔を上げてくれた。
「……氷室」
「大丈夫ですか、二人とも？　一体何があったんです？　やはり、あの夜の炎使いが生きていたんですか？」
「うん。やっぱり、見間違いなんかじゃなかった。アイツは生きていて、今回は私を狙ってきてたみたい。だけど……」
チラリと、飛鳥は視線を隣に座る大和に移す。
今、大和は気を失っている。
飛鳥と同様に、力を使いすいたための一時的なオーバーヒートの状態だ。
「……飛鳥、一体何が？」
「……炎使いは、何とか追い払えた。けど、そのせいでまた大和の力が暴走しかけて……」
「……まさか、この周囲の木々の葉や枝は……」

「うん、大和の風。でもあれは、まるで暴走した台風だった……」

氷室が見回す周囲の地面の上には、これでもかというくらいに木の葉や枝が、むしりとられ、へし折られたかのように散らばっていた。

さらに地面に至っては、芝生が根こそぎ引き抜かれたように、一部が茶色い土肌を覗かせている。

それは、並大抵の力の暴走ではない。

「……とりあえず、詳しい話は戻ってから聞きます。今はあなた達二人の体のほうが心配です。歩けますか？」

「私は平気。でも、大和はしばらく目覚めないかもしれない……」

「……大和を止めるために、雷撃を使ったんですね？」

答えずに、飛鳥は一つ頷いた。

「そうするしかなかった。そのときの大和は誰の言葉も聞こえてなくて、無理矢理にでも意識を失わせておかないと、力の暴走だけで肉体そのものが崩壊しちゃいそうだったから……」

「賢明な判断です。非を感じることはありませんよ、飛鳥。大和は私が運びましょう」

言うと、氷室は大和の体を背負って立ち上がる。

意識を失っているからだろうか、大和はどちらかといえば細身の体格だが、それにしたってひどく重さを感じさせない体だった。

もしかしたらそれも、風の力の影響なのかもしれない。

と、氷室はそんなことを思いながら背中の大和に目を向ける。

目は閉じているが、規則正しい呼吸が繰り返されている。

見た目にも大きな外傷はなく、恐らくは命に別状はないだろう。

今はとにかく、安静にできる場所で休ませることが必要だ。

「さ、行きましょう。向こうに車があります」

促す氷室の言葉に、飛鳥は無言で従った。

すでに原形を留めていない公園の一角に背を向けて、三人はその場をあとにした。

帰り道を歩く中、飛鳥はやはり浮かない顔をすることしかできなかった。
その表情を読み取ったのかそうでないのか、氷室は何も言うことはなかった。

最初、その光景を見た飛鳥は我が目を疑った。
「何、これ……」
ほんの一瞬前、大和の風の刃は少年の赤い短剣を全てかき消しながら宙を舞い、その切っ先をしかと標的へと命中させた。
被弾の衝撃に、少年の体はわずかに後ろへと吹き飛ばされる。
「……く、そ……」
そう呻いた少年の声が聞こえ、それでも立ち上がる少年が前を向き直ったときに見たもの。
それはすでに、風の原型など留めてはいなかった。
いや、そもそも風に形などあるわけがないのだから、その表現はどこか言葉としては矛盾しているのだろう。
だがそれを差し引いても、目の前にある光景はそういう言葉でしか言い表すことのできないものだったのだ。
「……う……」
その呻き声は、吹き飛ばされた少年のものではない。
また、力を使い果たした飛鳥の声でもない。
「あ……ぐ、うあ……」
その、悲鳴のような苦しさにまみれた声は……。

「――……う、あああああっ！」

他でもない、風を操る大和のものだった。
轟々と渦を巻く風は、まるで形の無い鎧のように大和の全身を取

り囲んでいる。
吹き荒ぶその風切り音だけで、それらが鋭い刃だということは明白だった。
ヒュンヒュンと耳が痛くなるほどの音を鳴らしながら、風は大和を中心に勢いを増していく。
だが、その様子がおかしい。
それに気付いたのは飛鳥だけではなく、対峙している少年もまた同様だった。
「何だ、こりゃあ……」
呆気に取られたような表情で、少年が呟く。
少年の目の前で、大和の風は見る見るうちに巨大になっていく。
やがてそれは、なりふり構わずに周囲のものを吸い込むような風圧を作り上げていった。
芝生が散り散りに切れ、木の葉は吹き飛び、あまつさえ枝までもが音を立ててへし折れた。
すでに目の前には、目に見える形で台風が実体化していた。
「おいおい、冗談じゃねぇぞ。このまま周囲のものを全部吸い込んじまうつもりか？」
「……力が、暴走してる。やっぱり今の大和じゃ、まだ制御が完全にできないんだ」
そんな二人の会話をよそに、一瞬だけ大和を取り囲むその風が完全に停止した。
音一つ消えてなくなる世界。
静寂という名に包まれ、怖いほどの静けさが佇む。
「……止まった？」
と、少年がそう呟いた直後。

轟、と。
今の今まで集束させた風の力を一気に解放するように、大和を中心に膨大な風圧が弾き出された。

「な……」

咄嗟に身構える少年。

しかしそれも抵抗には程遠く、風の力によって吹き飛ばされたその体は背中から勢いよく木の幹へと激突した。

「が、は……」

ドサリと音を立て、少年の体がくの字に折れ曲がる。

一方飛鳥も、膝を付いたままの体勢で何度も地面を転がってようやく止まっていた。

「や、大和……」

そう声に出した言葉も、吹き荒ぶ風の中では音として認識すらされない。

完全に暴走してしまった大和の風は、このままでは周囲一体をあらかた吹き飛ばしてしまうのは間違いない。

そしてそうなってしまえば、術者である大和の体さえもバラバラになってしまうだろう。

「……どうにかして、止めないと……」

動かない体にムチを打って、飛鳥は木を支えにしてどうにか立ち上がる。

ありったけの力で雷撃を放ち、大和を一種の気絶状態にできれば暴走は収まるはずだ。

しかしそのためには、この風の壁を乗り越えなくてはいけない。

今の飛鳥の力では、雷撃の矢は撃ててあと一発が限度。

しかしこの風の壁を突き破るほどの力はもう残っていなく、仮に残っていたとしてもそれでは大和が無事ではすまない。

「……どう、すれば……」

そう苦虫を潰すようにしている飛鳥に手を差し伸べたのは、意外な人物だった。

「……おい、雷使い」

気が付くと、すぐ隣に炎使いの少年が立っていた。

「っ！」
すぐに身構え、警戒をする飛鳥。
いつの間に接近されていたのだろうか、全く気がつかなかった。
数歩ほどの間合いを取り、出方を窺いながらも視線は外さない。
が、少年の言葉は意外なものだった。
「お前の雷撃なら、アイツを止めることくらいできるか？」
「……え？　な、何よ急に」
「いいから答えろ。どの道このままじゃ、震源地の俺達は揃って跡形も残らねーんだ。俺だってこんなところで死ぬのはゴメンだ。だから、今だけは一時休戦ってことにしといてやる」
「……」
少年の言葉に嘘は感じられなかった。
そしてその言葉は、確かにこの状況に置いては事実でもある。
今やるべきことは、大和を止めることだ。
「……分かった、いいよ。今はアンタの口車に乗ってやる」
「チッ、疑り深いヤロウだな。まぁいい。で、できんのかよ？　その自慢のビリビリでよ？」
「できる。強めの衝撃で気を失わせれば、力の暴走も収まるはず。けど、今の私の力じゃあの風の壁を突破するだけの威力は出せない」
飛鳥はすでに一度、この少年に向けて必殺の一撃を見舞ってしまっている。
必殺というだけの威力を誇るだけに、それ相当の体力を消耗するのは仕方のないことだった。
「じゃあ、あの風さえどうにかすればいいってワケだな？」
「……それは、そうだけど……」
頷いて、飛鳥は少年を見返す。
「できるの？　アンタの炎は、真空の前では存在することさえできないのよ？　それはアンタが一番よく分かってるはずじゃない」
「まぁ、見てろって。炎の使い方にも、色々あるんだよ」

やけに自信ありげにそう言うと、少年は一歩前へと出た。
たったそれだけで、それ以上前に進めなくなる。
それほどの風圧……風の壁が、大和を中心に吹き荒んでいるのだ。
しかしそれは、大和から見ればただ一方的に力を放出し続けていることにしか過ぎない。
言わば、蛇口から出る水を汲まずに出しっぱなしにしている状態だ。
ただの水ならどれだけ流れても料金がかさむだけだが、それが力だとしたら必ず限界は来る。
それでもなお、限界を超えて流れ出ようとすれば、その先に待ち受けるものは力の枯渇。
すなわち、死である。
「俺が合図したら、目一杯の力で雷撃を叩き込め。いいな？」
「……それはいいけど、本当にできるの？　そんなこと」
「ナメんなよ。これでも能力の覚醒に関したら俺のほうが先輩だぜ？」
言って、少年はその両手に力を集中させた。
一瞬でそこには、猛る炎が天を焦がすように燃え上がる。
改めて間近で見ると、それは相当量の力のものだった。
すでに飛鳥との一戦を終え、続けざまに大和との連戦。
さらにはたった今、打ち付けられた肉体のダメージさえもまるで感じさせないほどの力のレベル。
この少年は本当に、今の飛鳥が万全の状態で戦いを挑んでも勝てるかどうか分からないかもしれない。
「おい、ボーっとすんな。チャンスは一度っきりなんだからな。耳の穴広げとけ」
「な、何よ、偉そうに……」
確認するように一度飛鳥を振り返り、そして少年は向き直る。
目の前に立ちはだかる、風の壁に向けて。
その両手に集まった炎を一つにし、そして勢いよく大和目掛けて

投げつけた。

「ちょ、ちょっと！　そんなバカ正直に真正面からやったってかき消され……」

かき消されるだけじゃないと、飛鳥は言葉を続けることができなかった。

少年の手から放たれた炎は軌道を空中から変え、地を這うようにして進んでいた。

そして風の壁とぶつかり合うその寸前で弾け、まるで風の壁そのものを包み込むような炎の壁へとその姿を消した。

その直後のことだった。

今まで真正面から吹き付けていた風が、ふいに勢いを弱めた。

「おい、今だ。さっさとやれ！」

その声に飛鳥は意識を戻し、その手にありったけの力を込め、大和目掛けて投げつけた。

そして放たれた雷撃の矢は、風の壁を抜け、見事大和の体へと命中した。

バチンと大きな音がしたと同時に、轟々と渦を巻いていた風が音もなく静かに消え去った。

わずかに宙に浮いていた大和の体が、風という支えを失い、そのまま重力に引かれて力なく地面へと崩れ落ちた。

「……や、大和！」

飛鳥は慌てて大和の元へと駆け寄る。

少年も一段落をその目で見届け、炎の壁を奇麗に消し去った。

「……」

飛鳥が無言で大和の脈を取ると、そこからは確かに鼓動が伝わってきた。

意識は失っているが、胸はゆっくり上下して呼吸もしている。

ホッと、飛鳥は胸を撫で下ろした。

「……やれやれ。今日はとんだ厄日だな」

嘲るように、少年は言う。
「……まぁいい。色々と得たものもあったしな。さてと……」
一歩、少年は飛鳥と大和に歩み寄った。
その様子に、飛鳥は油断をできない。
しかし、そんな緊張をあっさりと拭い去るかのように、少年は言ってのける。

「――腹減った。ってなワケで、俺帰るから」

「……は？」
と、思わず飛鳥は聞き返してしまった。
この少年は一体、今何と言ったのだろうか？
「もう夕方じゃねーか。早く帰って晩飯の準備手伝わねーと、色々ウルセェんだよなー」
「……」
その独り言のような素振りに、飛鳥はグゥの音も出ない。

「ま、そーゆーワケだ。じゃ、またな雷使い。そこの風使いと、水使いの兄さんにもよろしく言っといてくれ」
「……ちょ、ちょっと待ちなさいよアンタ！」
「あ？　何だよ？　俺忙しいんだけど？」
「……私達を、見逃すつもりなの？」
「見逃す？　何でまた？」
「とぼけるな！　……悔しいけど、今のアンタでも手負いの私達から強引に『Ｒｉｎｇ』を奪うことくらいは簡単なはずでしょ。この絶好の機会に、何でそうしないかって聞いてるのよ」
「それじゃつまんねーから」
「な……はぁ？」
「だから、つまんねーから。そんだけだよ」
「……」

今度という今度こそ、飛鳥は何も言い返せなかった。
その楽天的極まりない自由奔放さは、もはやどう言い表せばいいものだろうか……。
「……もういい。勝手にすれば。次に会ったときに後悔したって、こっちは手加減なんかしてやらないからね」
「そんなもの、こっちから願い下げだ。やるんなら、全力で来いよ」
「……フン」
それだけを告げると、少年はやたらと満足そうな顔で立ち去っていく。
と、その背中に飛鳥はもう一度だけ呼びかけた。
「……さっきの、どういうことだったの？」
「あ？　何が？」
「……どうやってアンタの炎で、風の壁を消したのよ」
「ああ、何だそのことか。別に難しいことじゃねぇよ。風っつっても、結局は空気だろ？　だから俺は、その空気を炎で暖めてやっただけだ」
「……暖めたって、それに何の意味が……」
言いかけて、飛鳥はふと気付いた。
そうか、だからあの一瞬、風の向きが前ではなくなっていたのか。

「――上昇気流って知ってるか？　空気は暖められると、上方向に流れ出すんだぜ？」

「……アンタ、それをあの一瞬でやってのけたっていうの？」
「まぁ、前例はなかったけどな。理屈としては通ってたから、八割方はいけると思ってたさ」
そんな思考の展開を、あの追い詰められた状況で……？
「じゃあな。俺は帰るぞ。ああもう、こんな時間じゃねーか。また後片付けやらされちまう……」
などとぼやきながら、少年は何事もなかったかのように去ってい

った。
その場に取り残された飛鳥は、徐々に見えなくなっていくその背中を呆然と眺めていた。
同時に、敗北感で胸は満たされていた。
「……もっと、強くならなくちゃな……」
誰に言うわけでもなく、静かにそう呟いた。
氷室の足音が聞こえてきたのは、それからほどなくしてからのことだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５：今日の終わりに

僕が目を覚ましたとき、すでに時刻は夜の七時を回っていた。
「気が付きましたか、大和。具合はどうです？」
と、目覚めて最初に聞こえてきた声は氷室のものだった。
どうやら僕はソファの上に寝かされているらしく、真上にある蛍光灯の明かりが起き抜けの目には少し毒だった。
「……氷室？　あれ、ここは……僕は、どうして……」
ゆっくりと体を起こす。
が、そのたびに体中の筋肉がキリキリと悲鳴を上げるようで、僕は思わずその痛みに声を漏らしてしまう。
「痛っ……」
「まだ無理をしないほうがいいでしょう。今のあなたは、相当量の体力を消耗しています。まぁ、無理もありませんか……」
そう付け加えるように言うと、氷室はテーブルの上のカップを僕に差し出した。
「ホットコーヒーです。よかったら飲んでください」
「あ、ありがと……」
真っ白な湯気が立ち上るカップを僕は取り上げ、まだ暖かいコーヒーを一口だけ口に含んだ。
少し苦かったけど、逆にそれが覚め切ってない頭を鮮明にしてくれる。
ハァと一つ溜め息を吐いて、僕はカップをテーブルの上に置いた。
そして、今頃になって自分のいる場所を見回す。
どうやらここは氷室の事務所のようだ。
「あれ……僕、飛鳥と一緒に森林公園に行ってたはずなんだけど……」
自分で言いながら、僕は記憶の糸を手繰り寄せた。
「……そうだ。氷室、僕と飛鳥はその公園で……」

「ええ、聞いています。炎を操る能力者と出会い、戦っていたのでしょう？」
「う、うん。それで……あれ？　そのあと、どうなったんだっけ……？」
僕の記憶の糸は途端にプッツリと切れてしまう。
あの炎使いの少年と出会い、戦うことになったことまでは覚えている。
僕も確かに、あの少年と一戦を交えたはずだ。
それは間違いない。

「……そう、だ。あのとき僕は負けそうになって、それで……」
「あなたはそこでまた、自分の力を制御しきれずに暴走させてしまったんですよ。ちょうど、初めて私達と出会った夜のようにね」
「……僕が、暴走……？」
言われて思い出そうとするが、やはり記憶はひどく不安定だ。
でも確かに、あの負けると思ったその瞬間に何か別の意識が入り込んできたようなことは覚えている。
……そうだ、確かあのとき、僕は……。
「……シルフィア……」
その名を呟く。
僕は確かに、その名を持つ風の声を聞いた。
そして少年の炎に対抗するべく、僕も風の刃を生み出した。
それを放った、その瞬間までは覚えている。
だけど、そのあとの記憶が全くない。
一体僕はその後、どうなってしまったのだろうか？
「……氷室。それで、あの炎使いの彼は……？」
「私が森林公園に到着したときには、すでに姿はありませんでした。飛鳥の話だと、暴走したあなたを止めるために一時休戦したんだそうですよ。その後彼は、何をするわけでもなく去っていったそうです」

「……」

どうして、だろうか？

僕の中のその記憶がないということは、僕が意識を失っていたということだ。

そして僕の覚えている限り、あの場にいた飛鳥もすでに相当量の体力を消耗し、少なくとも戦える状態ではなかったはずだ。

つまり、彼が僕達に止めを刺す機会なんてそれこそいくらでもあったということになる。

殺す殺さないに関わらず、少なくとも僕と飛鳥の『Ｒｉｎｇ』を奪い取るくらいのことは簡単にできたはずだ。

なのに、一体どうして……？

「恐らくは、飛鳥とあなた相手の連戦、加えてあなたの暴走を止めることによって、彼も相当量の体力を消耗していたのでしょう。飛鳥もずいぶんと消耗していたとはいえ、戦えないというわけではなかったようですしね。そんな状態で戦えば、彼も無事ではすまない。あえてその場は、リスクを背負うことをしなかったということかもしれません」

と、氷室は僕の考えをそのまま見透かしたように言った。

……そうなのだろうか。

僕はまだ能力を自由に使いこなせるわけではないし、何ともはっきりと言えることは少ない。

それでも、実際に彼と戦ってみた僕は分かる。

彼はまだ、全然手の内を……本気で戦ってなんかいなかった。

そうでなければ、僕相手にあんなに苦戦を強いられることだってなかっただろう。

あれはまるで、僕に合わせて戦っているような、そんな訓練じみた感覚を覚えた。

だとすれば、余力は十分に残っているはずだ。

なのに、なぜ？

「……」

僕は無言で考え込み、そしてもう一度コーヒーを口に含んだ。

「まぁ、深く考えることは得策ではありませんよ、大和。理由はどうあれ、まずは今自分の体が無事であることをよく思うことです」

「……そう、だね。うん、そうする」

とはいえ、あんまり体のほうも無事というわけではない。

本当に、まるでフルマラソンでもした後のように体中の筋肉が悲鳴を上げている。

このままじゃ、明日は確実に筋肉痛だろうな……。

「何はともあれ、ひとまずはあなた達二人が無事でよかった。元を正せば、あの夜私達がしっかりと枯れに止めを刺したかどうかの確認を怠ったのが原因でした。本当にすみません」

「い、いいよ。そんなの、気にしないでよ。それに、どの道遠からず通る道だったんだからさ。それがたまたま、今日だったっていうそれだけの話だよ」

「……ええ、確かに。確かにそうなのですが、これは私としてもあまりに突発的なことでした。まさか向こうから再び接触を試みてくるとは……。彼の属性は炎。ゆえに、水使いの私がいる限りはしばらく大人しくしていてもいいはずなのですがね……」

「……彼、そういう性格じゃないみたいだよ。好戦的ではあったけど、好きで殺しをしたいわけじゃないっていうところは、僕達と同じみたい。純粋に、戦いそのものを楽しんでるようにも見えたけどね」

「やれやれ。性質が悪い分だけ始末に終えませんね。やはりあの夜に、しっかりと『Ｒｉｎｇ』の破壊の確認、あるいは残っていたのなら奪い去ってくるべきでした」

ハァと溜め息を吐いて、氷室はどこか疲れたように言った。

「それよりも大和、時間のほうは大丈夫ですか？　もう七時を回っていますが、あなたは明日から普通に学校があるでしょう？」

「あ、そっか。何か、今日が日曜日っていう実感が全然なくなってたよ」
「まぁ、これだけ騒々しい一日を休日と思えというのが無理でしょうね。平日だったら騒がしくてもいいというわけでもありませんが」
事務所の窓ガラス越しに映る街並みは、すでに薄暗さに包まれ始めていた。
夕方の赤い空は何処へと消え、今はもう深い青色の空が一帯を包み込んでいる。
雲が厚く、輝きを覗かせる星はまばらだ。
雨が降らなければいいのだけど……。
などと、そんなことを考えながら僕はふと思った。
「あれ、そういえば飛鳥は？」
僕自身のこともそうだが、飛鳥だってかなりの消耗をしていたはずだ。
それが僕を守るための行動でもあったとなると、やはり体の具合が気になる。
「飛鳥は少し出かけています。大和が目を覚ます一時間ほど前には、ずいぶんと疲労の色も回復していましたからね」
「出かけても大丈夫なのかな……」
「心配ですか？」
「……当たり前だよ。そもそも飛鳥が必要以上の体力を消耗したのは、短期決戦を狙って僕を庇ったからだし……」
「心配いりません。ああ見えて頑丈ですからね、飛鳥は。鼻の穴にコンセントでも差し込めば見る見るうちに回復しますよ」
「……」
そんなわけないだろうと、僕は内心で突っ込みを入れておく。
「さて、冗談はこの辺にしておきましょう。大和もそろそろ帰らないと、家の人が心配するでしょうしね。家の近くまで送りますよ」
「あ、うん。ありがと……」
僕はぐいっと残りのコーヒーを一気に飲み干し、事務所のドアを

くぐる氷室の背中に続いた。

階段を下り、僕は助手席へと乗り込む。

シートベルトをするように言われ、体の前にベルトを通した。

エンジンがかかり、車体がゆっくりと動き出す。

夕方から続いていた街の喧騒は、今の時間は打って変わってひっそりとしていた。

人通りがないわけではないが、まばらであることは確かだ。

ヘッドライトを光らせ、僕達を乗せた車は僕の自宅がある住宅街の方向へと道を進む。

「大和、疲労は大丈夫ですか？　筋肉痛などが起こっているのでは？」

「うん。もうあっちこちが痛い。明日はまともに動けないかも……」

「やはり、反動のせいでしょうね。自分の意思で無茶をしたわけではないので、負担も必要以上にかかってしまうのでしょう。火事場の馬鹿力というわけにもいかないようですからね」

「明日、学校でも一日中寝てるかもなぁ……」

「ハハハ。まぁ、その心配はないでしょう。前にも言いましたが、あなたの力である風には癒しの力も含まれています。まだ能力に慣れてないとはいえ、もともと人間には自己治癒力というものがある程度備わっていますからね。大和の場合、それは人一倍優れていると思えばいいんです。ですから、明日になればある程度、あるいは痛みは完全になくなっていると思いますよ」

「そう、かなぁ……。確かに理屈では分かるんだけど、やっぱりまだ実感が沸かないんだよね」

「まぁ、目に見える大怪我が一瞬で直るというわけではありませんからね。自分の意思で治癒の力を使いこなそうと思えば、それ相当に時間もかかるでしょう」

「治癒、かぁ……」

僕は指の中の『Ｒｉｎｇ』を見る。

確かにあのとき、この中からシルフィアの声がしていた。
その結果僕は一つの武器を手に入れ、代償として意識を失って暴走してしまったわけだけど……。
それでも確かに、僕は風を体で感じることができた。
それは本当に一瞬だけのことかもしれなかったけれど、僕は確かに見たんだ。
あの、言葉ではうまく言い表すことのできない不思議なイメージが瞬く中。
いつかの赤い記号……クリムゾン・テキストがその脳裏に浮かんだときのように。

――形のない風の姿を、この目で捉えたような気がしたんだ。

「とりあえず、今夜はゆっくりと休むことです。面倒なことに巻き込んでしまいましたね、すみません」
「だから、もういいって。それに、面倒に巻き込まれてるのは氷室も飛鳥も一緒でしょ？」
「いやはや、全くです」
そう返して、氷室は小さく笑った。
それにつられて、僕も少しだけ笑ってしまっていた。

「この辺りでいいでしょう。さすがに自宅前まで車で送るのはまずいでしょうからね」
「うん。ありがと」
停車を確認し、僕はシートベルトを外してドアを押し開けた。
「あ、そうでした大和」
僕がドアを押し開けて外に出ると、運転席から氷室が呼び止めた。
「え？」
「いらないことかとは思いますが、くれぐれも表向きは普通の生活を続けてください。他人に話したところで信じはしないと思います

が、それでも他言は無用です。うっかり口を滑らせたその結果、無関係な人達まで巻き込んでしまう可能性もありますからね」
「うん、分かったよ」
頷き、僕はドアを押し戻そうとして、一度の手を止めた。
「っと、ちょっと待って氷室」
「何でしょう？」
「その、だったらやっぱり、この『Ｒｉｎｇ』は普段は外しておいた方がいいのかな？　さすがに目立つよね？」
「いえ、それだと逆に、放課後などに襲われたときに無抵抗になってしまいます。それに、安心してください。能力者ではない人間の目には『Ｒｉｎｇ』は認識されません。これは私も飛鳥も実証済みですから、安心していいでしょう」
「そうなんだ……。じゃあ、普段から身に着けてても……」
「ええ、問題ありません。むしろ、身に着けるのを忘れた方が危険でしょう。私達がまだ知らない能力者もこの街にはいるはずですから、極端な話、いつどこで奇襲を受けてもおかしくはないんです」
「……それって、かなりヤバイんじゃ……」
「ええ。ですから、私はいち早くあなたにも最低限身を守る術を教えておくつもりでした。もっとも、今日一日は色々とあってそうもいきませんでしたけどね」
「……ちょっと、不安だな」
「恐らくとしか言えませんが、まだ奇襲を受けることはないと見ていいでしょう。そんなことがあるなら、この街のどこかで毎日ドンパチが始まっているはずですからね。それがないということは、今はまだ安全です」
それなら大丈夫かなと、僕はようやく安堵の息をつく。
「しかし、そうともいかないから奇襲と呼ぶのですけれどね」
「……」
一気に不安になった。
氷室は一体、僕を安心させたいのだろうか、それとも緊張させた

いのだろうか。

「まぁ、ひとまずは安心していいですよ。こちらとしても、対抗策がゼロというわけじゃありませんからね」

「え？　それって、どんな？」

「それは企業秘密です。さ、早く帰らないと、家の人が心配していますよ？」

促され、僕は緩やかな坂の上にある自宅を見た。

明かりがついているから、もう夕食の支度は終わった頃だろうか。

兄さんも今日は戻ってきているかもしれない。

「……じゃ、行くね。今日は色々ありがと」

「いえ、こちらこそ。また何かあったら、こちらへ連絡してください」

氷室は財布の中から名刺を取り出し、僕に手渡した。

「その番号が私の携帯です。できれば控えておいてください」

「あ、じゃあ僕の番号も教えておくよ」

僕はポケットの中から携帯を取り出し、番号を読み上げる。

「……はい、分かりました。では、お互いに何かあったら連絡を」

「うん、分かった」

「飛鳥の番号は、後日彼女に直接聞いておいてください。では、気をつけて」

僕は助手席のドアを閉める。

再びエンジン音がかかり、氷室を乗せた車は元来た道をゆっくりと引き返していった。

薄暗い夜の道の向こう、白い車体がどんどんと遠ざかっていく。

それをしばらく見届けて、僕は緩やかな坂道を筋肉痛のする両足で歩き始めた。

「……あー、クソッタレ！」
署内の喫煙所でタバコをふかしていた竹上は、忌々しげな言葉と共に手の中のファイルをテーブルに放り投げた。
何度見ても原因は不明。
イライラは募る一方で、いくらタバコを吸ったところでストレスの発散には全然物足りない。
手近にある自販機を思い切り蹴り飛ばしたい気持ちで一杯だが、そんなことをしたら別の意味で始末書ものなのでやめておく。
「ったく、一体何がどうなってやがる……」
何度資料や報告書を読み返しても、手がかり一つ残されてはいなかった。
本日未明、アパート一つを全焼した火事。
幸いにして犠牲者は一人もいないという、聞けば奇跡的にも思えるその結果。
だがそれは、逆に不気味で仕方がないことだ。
アパートは全八室。
管理人も含め、住人は全部で八人。
その全員が、火災当時にどこかしらへと外出していたために被害者はゼロで済んだ。
そうだ、ゼロで済んだ。
だったらそれを、不幸中の幸いと素直に喜べばいいではないだろうか。
「……ふざけんな。んな幸いがあってたまるか」
竹上は呟く。
無人の廊下には、そんな言葉がわずかに反響していた。
もっとも簡単な、しかもメチャクチャな確率計算をしてみよう。
火災当時に住人がいるか、いないか。
これは単純に二分の一とする。
それが八人分ということは、すなわち二分の一の八乗。
イコール、二百五十六分の一である。

確かにこれは、まだまだ現実的な数字の上での確率だ。
一年は三百六十五日わるわけで、そう考えれば年に一度はそんな日がある計算にはなる。
だが、だからといって。
それらを単なる偶然の重なり合いだと言い切ってしまえるのだろうか？
「んなわきゃねーだろーが。こりゃ必然ってんだよ、ひ、つ、ぜ、ん！」
誰に説教するわけでもないのに、竹上は虚空に向けて怒鳴った。
五本目のタバコをもみ消して、タバコが切れたことに気付く。
「ええい、クソッ！」
空の袋をグシャグシャと潰し、ゴミ箱目掛けて放り投げた。
入らなかった。
「……」

余計にイライラが募りそうになるそんなときに、廊下の奥から竹上の名を呼ぶ声が聞こえてきた。
「竹上さん！」
「あん？」
不機嫌度マックスで、竹上が睨む目で振り返る。
すると一瞬、その部下の若い刑事は蛇に睨まれた蛙のように固まってしまった。
何か悪いことしましたかと、聞きたそうな表情だった。
「何だ、どうかしたか？」
「あ、は、はい。その、実はですね……」
若い刑事は廊下には自分と竹上しかいないのにもかかわらず、職業上のクセだろうか、耳打ちで竹上に内容を伝える。
そして、竹上の表情が見る見るうちに変わっていく。
「ちくしょうが。どうなってやがるんだ、一体……」
「どうしますか？」

「……」

竹上はしばし悩むように下を俯き、しかしすぐに顔を上げて再び無人の廊下に怒鳴るように言った。

「ええい、面倒かけやがる！　行くぞ、万代！」

「は、はい！」

そして二人は小走りに署内の廊下を走り去っていった。

本当に無人になった廊下には、二人の足音がどこまでも響き渡った。

「……ったくよぉ、どういうことだよ名探偵」

走りながら、竹上は愚痴をこぼすように呟いた。

――街外れの森林公園が火の海に包まれたのは、今からほんの数分ほど前のことだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１６：嘘

夕食を終え、僕は一足先に入浴している兄さんが風呂から上がる時間を待って、自室でぼんやりと横になっていた。

さすがにまだあちこちの筋肉は痛くて、あまり自分から動こうという気分にはなれない。

こうしてベッドの上で大の字で寝転がっているのが、今の僕の体には一番いいことなのかもしれない。

「ふぅ……」

途中まで読んでそのままだった週刊誌を読み終え、僕はそれを枕元に置いた。

急激とまではいかないが、徐々に眠気もこみ上げてくる。

今にして思えば、今日の午後は実に長く感じた。

昼過ぎに街外れの工場跡で氷室と飛鳥に出会い、そしてそのまま話の流れで行動を共にした。

そこで僕は今の自分か置かれている状況を大雑把にだけど理解することができ、これからの目標も見定めることができた。

しかしまさか、こんな日に限って事態が一転して進行してしまうなんて、僕は思いもしなかった。

喧嘩などというレベルではない、そんなものをはるかに超越した能力者同士の戦い。

それはまさしく、規模こそ小さいものの一つの戦争だった。

銃器も火器も何もない、ただ己のうちに宿った契約の力を行使した戦い。

それは普通の人の目から見れば、まるっきりファンタジーの世界の出来事にしか見えないだろう。

事実、今だって僕はそうだ。

自分の手の中で生み出せたあの風も、飛鳥の操る雷も、あの少年の操る炎さえも幻ではないかと疑ってしまいそうになる。

本当は今こうしていることまでもが全て悪い夢で、このまま目を閉じた次の瞬間、僕はいつもと変わらない日常の中に当たり前のように立ち尽くしているのではないだろうか、と。

しかしそれこそが、ただの妄想に過ぎないことを僕は知っている。

僕の左肩、左太もも、右頬の三ヶ所には、あの少年の炎の短剣によってつけられた焼き傷がくっきりと残っているからだ。

左肩と左太ももは、服の上からでは分からないので気にはならないし気にもされない。

が、右頬は別だ。

帰宅してすぐに、僕は母さんと兄さんにその傷のことを問い詰められた。

その場は何とか適当に言い繕ってごまかしはしたけど、こういうのは何も今回ばかりではないだろう。

今回はたまたまかすり傷程度で済んだからいいものの、戦況がもっと悪化していれば入院するくらいの大怪我をしたって何の不思議もありはしないのだから。

僕は自分で傷のある右頬を指でなぞってみる。

痛みはない。

それに、言われるほど目立つような傷であることを感じさせなかった。

それでも薄く切れたように、横に数センチほど線が引かれているのは分かる。

自分では気にならなくても、さすがに顔の傷というものはやはり嫌でも目立ってしまうのだろう。

氷室の言うとおり、僕の風に癒しの力があるとするのならば、この傷も明日の朝には奇麗に消え去ってくれればいいのだが……。

って、それじゃ逆に母さんや兄さんに不思議がられてしまうじゃないか。

「……どうしろっていうのさ」

と、僕は一人呟いてみる。

すると、コンコンとノックの音が聞こえた。
僕は最初、その音は風呂から上がった兄さんが部屋の扉をノックする音だと思った。
だが、それにしては音の発生源がまるで正反対の方向だった。
もしかしたらと思い、僕は閉め切ったままのカーテンをそっと開けてみる。
「あ……」
すると案の定、わずか二メートルちょっとの距離を隔てた窓の向こう、同じく窓越しに小さく口を開けている唯の姿があった。
ガラガラと、僕はできるだけ音を立てないように窓を開けた。
それを確認してか、唯も同じように窓を開けた。
「や。こんばんは」
「うん、こんばんは……」
「……」
「……」
そして僕達の会話は中断した。
断っておくが、これは僕の責任じゃない。
そもそも最初に窓ガラスをノックしたのは唯の方なのだから。
「……あー、いい夜ですね」
言われて、僕は空を見上げる。
雲は厚く、月はおろか星さえもまばらにしかその姿を覗かせない……早い話がただの曇天だった。
「……そう、でもないみたいだけど」
「ア、アハハ……」
僕が素直に返すと、なぜか唯は乾いた笑いを繰り返していた。
「……唯、何かあったの？」
「へ？　ど、どうして？」
「何か、やけに挙動不審だし。変なものでも食べた？　鬱病になる

毒キノコとか」
「そ、そんなもん食べてないわよ！」
と、さすがに冗談が過ぎたのか、唯は一気に怒鳴りつけた。
「……唯、もう夜なんだから、少しは声を抑えて……」
「あう……って、今のは大和が悪いんでしょ！」
今度は器用にも小声で怒鳴りつけてくる。
結局は怒鳴るのか……。
「ごめん、悪かった。それで、何か用事？」
僕が素直にそう返すと、唯はキョトンとした様子で目を点にしていた。
「え、いや、その……何て言うか、特にどうってわけじゃなかったんだけど……元気かなー、と……思いまして」
「……いや、まぁ、一応元気といえば元気だけど……」
「そ、そう……それはよかったー……なんて」
「……」
「……」
再び沈黙。
再度言うが、決して僕は悪くないぞ。

「うん、と……」
そうして今になって言葉を探し始めるんだろう。
唯は今までにも時々こういうことがあったけど、僕には未だにその原因が解明できていない。
「そ、そうだ！　昨日はありがとね。ほら、数学のレポート」
「え？　ああ、何だ、そのことか……」
「そうそう、それよそれ。ホントに助かったよ。おかげで明日の提出に間に合いそうだし」
「うん。役に立てたなら、それでよかったよ。それと、僕も途中で抜け出したりしてごめん」
「あ、いいっていいって。全然気にしてないし。っていうか、その

時間で大和のノートそのまんま丸写しにできたわけだから」
「……それ、初耳」
「あ……」
見事に唯は墓穴を掘っていた。
昔から嘘がつけないタイプというか正直すぎるというか、そんな性格だったけど、近年になって僕の抱くイメージは天然に変わってきているのは確かだ。
「まぁ、別にいいけどね。その代わり、僕が間違ってたら唯も痛み分けだからね」
「平気平気。こういうのは正しいか間違いかじゃなくて、まずやり遂げることに意義があるのよ」
「……それ、堂々と人の答え丸写しにした人間が言う言葉なのかな……」
「アハハハ……細かいことは気にしないの！」
また怒鳴る。
コロコロと表情が変わって、見ている僕としては退屈しないんだけど。
ただ、その仕草が少しだけどこかと違うような気がした。
長い付き合いだから分かる。
それは普通に見ていれば見落として当たり前の小さな間違い探しなのだろうけど、僕には何となく分かってしまった。
「唯、何かあった？」
「え……ど、どうして？」
やはり、少しだけど動揺している。
「……いや、何もないならそれでいいんだけど。何か、無理してるように見えたからさ。僕の勘違いだったらいいんだ。気にしないで」
「……」
しかし、その言葉に唯はすぐには答えなかった。
それは僕の言葉が的を射ているからなのか、それとも……。

「……それは、こっちのセリフだよ、大和」
「え？」
その言葉に、今度は僕がわずかに動揺した。
「……あのね、これ多分、私の考えすぎだと思うんだけど……」
そのあとに続く一言一句が、なぜか恐ろしい。
「大和、何かあったんじゃないの？　昨日から少し、様子が変だよ？」
「……」
そして僕もまた、油井のその言葉にすぐに答えることができなかった。
心の中では、すでに返す言葉はしっかりと用意してあったのに、それが口から出てこない。
何もないよ、と。
たったそれだけの言葉が、どうしてこんなにも絞り出さなくては出てこないのだろうか。
それはきっと、僕の中に後ろめたさがあるからだろう。
他言できない秘密を抱えているということは、僕の周囲を危険に犯さないためである。
けどそれは同時に、親しい間柄の人にも嘘を突き通さなくてはいけないということだ。
それは、こんなにも苦しいことだったのか……。
「……別に、何もないけど？」
どれだけの時間を沈黙で過ごしたのだろうか。
気が付けば僕は、胸の中の同様を全て抑制させてそう答えていた。
「……本当に？」
「本当に」
「……何も、隠してない？」
「隠すようなことを僕はしてないし、持ってもいないよ。それは、唯だってよく分かってるんじゃないの？」
「……」

僕のその言葉に、今度は唯が押し黙る。
もちろん、それはウソだ。
それでもこう強く言い切れば、唯は必ず引く。
僕はそれを知っているからこそ、その言葉を選んだのだ。
「……そう、だよね。ゴメン、やっぱり私の考えすぎだったみたい。今のは忘れて」
「うん。それはいいけど……唯、少し疲れてるんじゃないの？　顔色も少し……って、それは夜のせいか」
「ううん、全然平気。聞きたいこと聞いてすっきりしたから、これでグッスリ眠れるわ」
「そう。ならよかった」
そうして僕達は互いに小さく笑い合った。
だけど、どうしてだろうか。

――もうずいぶんと忘れたままだった、その痛みのない傷が、今頃になって開いてしまったような……。

「よっし。それじゃあ私はもう寝る！」
「もう？　まだ十時半だよ？　今時、小学生だって起きてる時間なのに……」
「いいのいいの。今日はうんとグッスリ寝るって決めたの。うん、今決めた」
「そ、そう……」
「んじゃ、おやすみ大和。また明日ね」
「うん、また明日」
そう言うと、結いは小さく手を振って窓を閉め、そのままカーテンを閉め切った。
僕はその閉じられたカーテンの向こうにやるせない思いをわずかに抱え、ふいに痛んだ胸の辺りを手で鷲掴みにしていた。
「……っ、痛っ……」

何なんだろう、この痛みは。
遠い昔にも、同じ痛みを味わったことがあるような気がする。
……そうだ、あれは、確か……。

――ザァザァと、まるでラジオのノイズのような冷たい雨が降っていた日のことだ。

「……」
しばらくそのままでいると、痛みは自然と引いていった。
必要以上に汗を握る自分の手が、どこか不安定だった。
僕は窓を閉め、カーテンを閉めた。
「ふぅ……」
重い溜め息を一つ吐き出す。
それと一緒に、色々なものまで吐き出してしまったように感じた。
コンコン、と。
今度こそ、僕の部屋の扉をノックする音が聞こえた。
「大和ー、風呂空いたぞー」
廊下から兄さんの声がする。
「分かった、今行くよ」
扉越しに僕は答える。
今になって再び、今日一日の疲れがドッと押し寄せてきていることに気付いた。
唯に倣うわけじゃないけど、僕も今日はさっさと休むことにしよう。
着替えを手に、部屋を出るその前にもう一度窓の方を振り返った。
閉め切られたカーテンの向こうにある、隣の窓。
僕は唯に、ウソをついた。
ズキンと、また胸のどこかが痛んだ。
……いいんだ、これで。
僕は決めたんだ。

誰も巻き込まず、誰も殺さず、この戦争の生き抜いて終わらせて見せると。
そのためだったら、僕は……。
――今ついたウソを、いつか真実に変えてみせる。
「……ごめん、唯」
今はもう見えない、カーテンの向こう側に向けて僕は呟く。
「約束を先に破るのは、いつも僕の方だね……」
それは、もうずいぶんと遠い日の約束……だったと思う。
その約束を交わしたきっかけなんて、僕はもう何も覚えていない。
ただ、その約束だけはしっかりと覚えている。
幼い頃の日々に、まだお互いに嘘の罪深ささえも何一つ知らないままで交わした一つの約束。
互いの小指を絡ませたのは、恐らくその日が最初で最後だっただろう。
どんな言葉を交わしてその約束をしたのかは、はっきりと覚えている。
でも、そうしてだろうか。
そのときの唯の顔だけが、未だにぼやけてしまってよく見えないままなんだ。
それはきっと、そのときの僕が泣いていたからなのだろう。
涙ながらに交わした約束は一つ。
――隠し事をせず、辛いときはお互いが支え合おうという、そんなどこにでもあるようなちっぽけな約束……。
それを僕は、破ってしまっている。
「……ごめん」
もう一度僕は、届かないと知って同じ言葉を繰り返した。

この見えない戦争の中で、僕は最終的に勝者の立場にいるのだろうか。
それとも、敗者の立場にいるのだろうか。
今はまだ分からない。

『――戦争は常に勝者と敗者でしか分かれない。そして敗者を待つのは、例外なく死だ』

それは、あの炎使いの少年の言葉だ。
その言葉はきっと、いつの世にも等しく正しい。
だからその言葉に従うのならば、僕は勝者にならなくてはならない。
けれど、そこに正義なんてものはきっと、何一つ存在しはしないだろう。
僕だけじゃなく、誰もが身勝手な自分の正義を振りかざしているのだ。
ゆえにこの戦争に、真の勝者なんて絶対に存在しない。
勝者が全て正しいというのが、ファンタジー世界の基本設定だ。
だけど僕は、それをこのリアルなファンタジーの中で覆す。

――僕は勇者にも、魔王にもなりはしない。

それでもきっと、この戦争を終わらせて見せる。
そのための嘘なら、どれだけ心苦しくても突き通してみせる。

部屋の電気を消し、扉を閉める。
眠気はとっくになくなってしまっていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１７：不安と疑問と

午前中の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、同時に黒板を叩くチョークの音も鳴り止んだ。
「よし。では今日はここまで。週番、号令を」
教科担当の教師のその声に、教室内はにわかに活気付く。
「きりーつ。礼」
号令が終わると、すでに何人かの生徒は教室を急いで抜け出し、廊下を勢いよく走り出していた。
まぁ、大半は食堂へと向かったのだろう。
そんないつもの風景を見送りながら、僕は机の上に広がったままの教科書やノートを机の中へしまいこむ。
「あー、やっと前半戦終了かー」
と、そんな声を出しながらグッと背伸びをしているのは、僕の席の後ろにいる悟だった。
「腹減ったー。大和、お前昼飯どうすんの？」
「僕？　いつもどおり、売店で何か買うか食堂の席が空いてたら食券を買うけど」
「ま、そうだよな。んじゃ、俺らも食堂行こうぜ。おーい、健史」
悟は僕の頭越しに、離れた席に向けて呼びかける。
その声に振り返った健史は、手招きする悟を見てこちらへとやってきた。
「昼飯食いに行こうぜ。お前も食堂だろ？」
「ああ、まぁな。でも、今は混んでると思うぞ？　席がないかもしれないな」
「ま、そんときはそんんときで。ちょっと寒いけど、中庭に行くのも悪くねーだろ？」
「そうだな。まぁ、まずは移動だな」

僕達三人は立ち上がり、教室を出て食堂へと向かうことになる。
「あれ？」
と、その途中に僕は気付いた。
「ん？　どうした、大和？」
「唯と美野里も誘おうと思ったんだけど……」
「あれ？　あの二人、もういないのか？　珍しいな」
僕に続き、健史がそんな声を漏らす。
僕達三人と唯と美野里を含めた五人は、基本的にいつも昼食を共にしている。
誰がそう決めて言い出したわけでもなく、自然とそうなっていたことだ。
まぁ仲のいい友人同士の食卓ということで、それ自体は決して珍しいものではない。
大体いつも僕達三人が唯と美野里に声をかけて、揃って食堂に向かうというのが定番のパターンだったのだが……。
「一足先に行ってるんじゃねーのか？　ほら、席を確保しててくれてるとか」
「案外そうかもな。二人揃っていないなんて、珍しいもんな」
と、僕達はそんな結論に至り、にわかに騒がしくなった昼休みの喧騒の中を歩き始めた。

「あーあ、あと二教科かぁ……」
悟はそう呟くと、大げさに嫌そうな顔を見せた。
「悟、何もそんな顔しなくたって……」
今にも泣きそうなその横顔を間近で見た僕としては、なぜかあるはずのない罪悪感がこみ上げてしまいそうだった。
「たった二教科じゃねーか。午前中の半分だと思えば、すぐに終わるだろ」
健史のその言い分に僕も賛成だ。
確かに授業はその全てが面白いというわけでもないし、眠くなる

ことだって少なくはない。
いや、今の時間だって実際、僕の後ろの悟の席からはわずかだがいびきのようなものが聞こえていたような気がするのは僕だけだったのだろうか。
「そうだよ。肝心要の数学のレポートだって、無事提出できたんだからさ。あとは気楽なもんだって」
沈んだその横顔に、僕と健史はなぜか精一杯のエールを送っていた。
端から見れば、それはきっとおかしな図式になっているに違いない。
「まぁ、そうなんだけどよ……」
そう呟くと、悟は今の今までのいびきを髣髴させるかのように、大きなあくびを掻いた。
「ふぁ……寝不足なんだよなぁ、俺」
「……それ、いつもじゃないの？」
「同感だな。お前が丸一日学校で起きているときなんて、体育祭と文化祭のときくらいだろう」
「う……当たってるだけに言い返せねぇ……」
図星を突かれ、悟は苦しい表情を見せた。
「でも、そんなに眠いの？　っていうか、いつも何時ごろに寝てるのさ？」
「んー、大体夜の二時くらいには寝てるな」
「で、起きるのは？」
「七時半。その時間に起きないと、さすがに遅刻する」
「そういえば悟、未だに無遅刻無欠席無早退は一貫してんだよな」
「おう。健康は俺の代名詞だからな」
「それ、威張って言うことじゃないと思うけど……そのままそこに、無居眠りも追加しちゃえばいいのに」
「それだ。悟、ぜひそうしろ」
「バカ言うな。世の中には不可能なことが沢山あるんだぞ」

「……自信ありげに言うことじゃないと思うけど」
僕達三人はそんな談笑を繰り返しながら、生徒の行き来の多い廊下を歩いて食堂に着いた。
さすがに食堂の中も混み合っており、パッと見た感じで空席はなかなか見つけることはできない。
券売機の前には未だに長蛇の列が控えているし、今から並ぶのは骨が折れそうだ。
「さすがに混んでるな。仕方ない、俺は売店でパンでも買ってくる」
「あ、僕もそうする。悟は？　まさかとは思うけど、並ぶの？」
「……フ、世の中には不可能ということが……」
「あー、はいはい分かった分かった。まとめて買ってきてやるから、さっさと注文言え」

まとまっていても通行の邪魔になるだけなので、買い物は健史に任せて僕と悟は一度食堂の外に出た。
「ふぁ……」
と、悟はまた大きなあくびを繰り返していた。
「悟、やっぱりもう少し早く寝たほうがいいんじゃないの？」
「あー、そうしたいのは山々なんだけどよ。深夜のラジオ番組とか聴いてると、これが結構面白くてさー」
「あー、それは気持ち分かる。ああいうのって、ついつい長い時間聴き入っちゃうんだよね」
「そうそう。そんで、意外にＤＪとかが面白いキャラだったりすると、さらにな」
そんな風に僕達が会話をしているうちに、食堂の中から健史が袋をぶら下げてやってきた。
「お待たせ。で、どこで食う？　教室戻るか？」
「どこでもいいぜ。どうする？」
「今日はちょっと風が冷たいからな。まぁ、ありきたりだけど教室でいいだろ。寒いの嫌だし」

というわけで、僕達は元来た道を引き返すことになった。
「……あ、ちょっと待って」
その前に、僕はもう一度食堂の中に入って周囲を見回した。
「どした？　大和」
「……いや、唯も美野里も、どこ行ったのかなって……」
「そういや、結局いなかったな。まぁ、アイツらにも色々あるさ。それよりも今は腹減ったよ。さっさと戻って昼飯にしようぜ」
そう促す健史の声に、僕達は再び廊下を歩く。

僕達が教室に戻ると、そこには美野里の姿があった。
「あ、三人ともやっぱり食堂行ってたんだね」
「ああ。さすがに混んでたから、売店で買って戻ってきたけどな」
「それよりも美野里、授業終わってすぐにもういなかったけど、どうしたの？」
「うん。今日は昼休みに、委員会の集まりがあったから、それでね」
「そっか。美野里は図書委員だったっけ」
「うん。そうだよ」
「何だよ。だったら一言言ってくれれば、お前の分の飯も一緒に買ってきてやったのに」
「あ、それなら大丈夫だよ。朝にコンビニで買ってきてあるから」
そう言って、美野里はコンビニの袋を鞄の中から取り出した。
「んじゃま、いつもどおり俺達の席の方で食べるとしますか……って、なぁ美野里。そういえば、唯はどうしたんだ？」
「え、唯？　ううん、私は知らないけど……てっきりみんなと一緒に食堂に行ってると思ってたから」
「ありゃ？　んじゃアイツ、一体どこ行ったんだ？　貴重な昼休みだってのに……」
「さっきの授業のときは、ちゃんといたよな？」
「うん。それは間違いないと思う。唯の席は、私のすぐ近くだから」
唯の席を見てみると、机の脇には鞄が掛かっているし、机の中に

筆記用具の形も見て取れる。
「……まぁ、何か用事があるんだろう。美野里が委員会の集まりがあったみたいに、何かの用事で出払っているんだろうさ」
「ま、そうだろうな。んじゃま、唯には悪いけど一足早く昼食としようぜ」
悟の言葉に頷いて、僕達は揃って席を移動する。
僕と悟の席が前後で並んでいるということもあって、昼食時に教室を使うときはもっぱらこの場所が定位置となる。
僕と悟は健史から注文したパンを受け取り、代金を渡す。
机を合わせてその上に各々が食事を置き、他愛のない会話に花を咲かせながらいつもどおりの風景が始まった。
ただ、その場所に。
いつもはいるはずの唯の姿が見当たらないことに、どうしてか僕はわずかな不安を覚えてしまっていた。
当たり前の景色が崩れた瞬間。
それはまるで、現実からファンタジーへの境界線を踏み越えてしまったかのような、そんな……。
……いや、よそう。
そんなこと、あるわけがない。
人地不謹慎なことを考えていた僕の耳に、皆の笑い声が届く。
その声で僕は、胸の内にあった小さな不安を消し去ることができた。

「ふぁ……」
「悟、またあくび出てる」
「お前、よっぽど寝不足なんだな」
「食べてすぐ寝ると、牛になるよ?」
口々に感想を述べられ、しかし悟の眠気はなかなか強情で収まることを知らない。
「おっかしーなぁ。いつもはここまでひどくはないんだけど……」

「いや、ひどいとかそういう問題じゃ……」
「やっぱ、あれかなぁ。昨日の夜の、あれが原因か……？」
「あれ？」
「何だよあれって……って、ああ、もしかしてあれか？」
と、健史は何か思い当たる節があるのか、わずかに身を乗り出して言った。
「二人とも、あれって何のこと？」
その様子を見て、美野里が控え目に聞く。
「ああ、昨日の夜のことなんだけどな」
と、そんなくだりから健史の話は始まった。
「大体、夜の十二時ちょっと前くらいだったかな？　街外れにさ、森林公園があるの知ってるだろ？」
「うん。あの小高い丘みたいなところだよね？」
「そうそう、そこだよ」
ピクリと、僕はその単語に反応してしまう。
街外れの森林公園。
それは昨日、僕が生まれて初めて本当の意味での戦いを経験したその場所だった。
あの炎使いの少年の姿が、ありありと思い出せる。
一夜明けた今だからこそ、あれは悪い夢だったと言えるかもしれない。
しかしそんなことはない。
僕がこの目で見て、この体で感じたあれらの全ては、紛れもない僕の中のもう一つの現実だ。
そう、ファンタジーという名の紛れもない現実なのだ。
……いや、この際この話は置いておこう。
今問題なのは、健史の言葉のその続きだ。
つまり、その時刻。
昨夜の十二時少し前……もう間もなくで日付が変わるであろうというそのとき。

その場所で、一体何があったというのだろうか？
僕は無言で飲み物を一口含み、耳だけを静かに傾けた。

「――その公園がさ、火事になったんだってよ。ひどかったらしいぜ。もう木なんて、一本残らず全焼だってよ」

その言葉に、僕は飲みかけた液体を全て吐き出してしまいそうな衝動を覚えた。
が、それをどうにか無理矢理に意の中へと流し込む。
「……っ、げほっ！」
当然のように僕はむせ返った。
「だ、大丈夫、大和？」
隣の美野里が心配そうに視線を向けてくるが、僕はそれを手で制して大丈夫と伝えた。
しかし実際のところ、表向きは何とか平静を保っていられても、内面ではそうはいかなかった。
全焼した？
森林公園が？
そんな、バカな……だって、あのとき僕達は確かに……。

――戦いこそしたものの、その爪痕はごく一部にしか残さなかったはずだ。

しかも、僕達の戦いの結果であの公園が全焼するということはまずありえない話だ。
確かにあの少年は炎使いではあったが、公園そのものを日で包むようなことはしなかった。
僕はその戦いの結末部分の記憶がプッツリと途切れているままだけど、氷室から聞いた話の限りでは公園が炎上したようなことは何一つ聞いていないし、氷室がそれを僕に隠す理由もないはずだ。

そして何より、僕達は夜七時以前にはすでに戦いの幕を下ろしている。
にもかかわらず、日付変更直前の深夜になって公園は炎上し、全焼した。
これは一体、どういうことなのか？
そういえば昨日の昼間にも、街のどこかで火事があったみたいだけど……。

「それで、どうなったの？」
その美野里の問いに、健史は続けて答える。
「いや、俺も詳しくは知らないんだけどさ。聞いた話だと、幸いなことに死傷者は一人もいないって話。でもさ、おかしな話だよな？　何でいきなり、あんな場所から火の手が上がるかねぇ」
「それった、放火ってことなのかな？」
「そう考えるのが普通だろうけど……よく分かんねぇな、そうだとすると。単なる愉快犯にしても、性質が悪いよな」
「そうだよね……。あの公園、この街のちょっとしたシンボルでもあったのに……」
わずかに残念そうに、美野里は目を伏せた。
その隣で僕は、一人考え込んでいた。
何がなんだかワケが分からなくなっている。
入ってくる情報は紛れもなく正確なものばかりなのに、僕の思考回路がその処理に追いついていない。
ハードディスクはもう容量が限界なのに、データだけが一方的に流れ込んでくるかのようだ。
「でも、それと悟の寝不足と、どういう関係があるの？」
「あー、ほら。俺の家って、マンションの十三階じゃん？　だから昨日の夜のその時間、遠目にだけど火の手が上がってるのが見えたんだよ。んで、何て言うか……野次馬根性みたいなので、しばらくベランダからずっと眺めててさ。で、気が付いたらもう夜の二時回

ってやがんの」
「……完全に自業自得だな」
「呆れた……」
「何だよ。仕方ねーだろ？　気になっちまったんだからさー」
「……」
その会話に、僕だけが取り残されているようだった。
食事の手も止まり、やけに意識がおぼろげだった。
……何だろう、このモヤモヤとした感覚は。
いつまでも晴れない霧を目の前にしているようで、ひどく気分が悪くなってくるようだ。
はっきりとしない物事。
矛盾だらけの事実。
どうしてこうも、当てはめられるパズルのピースに狂いが生じる？
こんなにも近くで聞こえる友人達の声が、ひどく細い。
僕はまた、いつの間にか現実を逸脱しようとしていた。
が、それを引き止める手が、僕の背後から近づいてきていた。

「――玉子サンド、いただきっ！」

「……え？　あ……」
そんな素っ頓狂な声を上げて、僕は自分の背中を振り返った。
するとそこには、玉子サンドを摘み上げた唯が小さな笑みを浮かべて立っていた。
「お、ようやく戻ってきたか」
「遅かったな。何かあったのか？」
「唯、どこ行ってたの？」
口々に質問が飛ぶ。
「いやー、ちょっと職員室に呼ばれちゃってさ。で、先生の話がちょっと立て込んじゃってね」
そう説明をしながら、唯は手近な席の椅子を引いて僕と美野里の

間に割って入った。
「……」
まるで毒気を抜かれるようなタイミングの登場に、僕はすっかり目が点になっていた。
しかしそれは、同時に僕に落ち着きを取り戻させてもくれた。
ありがとう、唯。
と、声に出さずに胸の中で呟いた。
きっと、この出来事に不信感を抱いているのは僕だけじゃないはずだ。
そう、少なくともあの二人なら……氷室と飛鳥なら、同じ疑問を抱いているに違いない。
今日の放課後、また会いに行こう。
飛鳥の行方は知らないけど、氷室にはあの場所に行けば会えるはずだ。

『各務探偵事務所』

まさか、こんなことになるなんて。
どうやら今回、僕は依頼者みいたいな役回りに立たされているようだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１８：もう一つの炎

放課後になると同時に、僕はすぐに街へと足を向けた。
「あれ？　大和、もう帰るのか？」
「うん。ちょっと今日は、家の用事頼まれてるんだ。ごめん」
「そっかー。んじゃ、また明日なー」
「じゃあね、大和」
「うん。また明日」
悟達と簡単な挨拶を交わして、僕は校舎を出る。
はやる気持ちは抑えているはずなのに、それでも自然と足は早足になってしまっていた。
結局僕は、午後の授業の内容なんてまるで覚えていない。
それはというのも、昼休みでちょっと話題に出た、昨夜の森林公園の火災のことが頭から離れなかったからだ。
僕はそれに、全く心当たりがないわけではない。
だが僕の思うとおりだとすると、なぜそうなったのかという根本的な理由が空白のままだった。
とにもかくにも、この事実は氷室や飛鳥にも伝えるべき……いや、二人もすでに周知のことかもしれないが、だったらなおのこと会って話をした方がいいだろう。
なぜなら昨夜の火災は、恐らく自然なものではない。
つまり、人の手による放火ということになる。
だが、だとしたらどうして森林公園を標的にしたのか。
僕の心当たりはそこにあった。
去る前日、その場所で能力者同士として一戦を交えた僕だからこそ、そのことに不信感を抱いているのだ。
「一体、どうして……」
街へと続く道を走りながら、僕は一人呟いた。
もしも僕の思うとおり、これが放火だとしたら。

そこに犯人像として浮かび上がる人物が、僕の中には一人いる。
何を隠そう、僕は字際にその人物と……炎を操る少年と、すでに一戦を交えているのだから。
「……」
続けて浮かんでくる言葉を、しかし僕は呑み込んだ。
事実を事実として受け入れるかどうかは、結論を出すにはまだ早い。
西の空に、日がゆっくりと傾いていくのが見えた。
間もなく、街は黄昏色に染まり始める。

ビルの階段を上り、僕は二階にある事務所の扉をノックした。
しかし、しばらく待っても中から返事のする声はない。
「留守かな……」
そう思いながらも、僕はそっとドアノブを握り、ゆっくりと回して扉を押し開けた。
カチャリと音を立て、扉はあっけなく開いた。
「……無用心だなぁ……」
そう呟きながらも、僕は身を隠すような仕草で事務所の中に体を入り込ませる。
そして静かに扉を閉め、明かりの点いていない事務所の中を隅々まで見渡してみた。
しかし、やはり氷室はおろか飛鳥の姿もどこにも見受けることはできない。
もしかしたら本当に、鍵を閉め忘れてどこかへ出かけてしまったのだろうか。
そうだとしたら、さすがに僕もこのまま帰るというわけにもいかない。
一応用心のためにも、氷室が戻ってくるまでは留守を預かっていなくては。
「……あ、そうだ。携帯……」

僕は今更ながらに、昨日の夜に氷室から受け取った名刺を財布の中から取り出した。
そこに記されている携帯の番号に、自分の携帯からすぐに電話をかけた。
だが……。
「……圏外？」
お掛けになった電話番号は……という、お決まりのメッセージだけが通話口の向こうから聞こえてきた。
あえなく僕は電話による連絡の手段を諦めた。
しかし、これはこれで困ったことになった。
僕としては氷室に一刻も早く相談したいことがあってここまでやってきたのだが、本人の行方はさっぱり分からない。
かといって、この空き巣歓迎します的な事務所を放っておいて帰るわけにもいかない。
ここはやはり、氷室が戻ってくるまで待たせてもらうのが一番だろうか……。
立っていても疲れるだけなので、僕は空いているソファに座り、人気のない室内を見渡した。
こうして見ると、ここは事務所というよりはただの物置のように見える。
氷室には失礼かもしれないが、あまり生活観のようなものは感じさせなかった。
もちろん、氷室がこの部屋で寝泊りを繰り返し、普段の生活をしているのかどうかは僕には定かではないのだが。
「……」
ぼんやりと天井を見上げる。
薄暗かったので電気を点けようとも思ったが、それもどこか気が引けた。
仮にも他人の部屋、それも仕事部屋だ。
勝手にいじるというのは、やはりイメージとしてはよくないもの

だろう。
と、何もすることがなく、ただ無言で耳を済ませていた、そんなときだった。
「……？」
不意に僕の耳に届いたのは、何か小さな爆発音のような、そんな音だった。
「何の音だろ……」
気になり、僕は立ち上がって音の出所を探る。
しかし、部屋の中には何も変化は見当たらない。
念のために窓の外を覗いてみたが、街並みにも何も変化はないようだ。
だとしたら、今聞こえたその音は僕の空耳だったのだろうか？
それにしては、やけに鮮明に聞こえていたような気もするが……。
そんなことに考えを巡らせながら、ふと僕は思い出した。
僕の視線の先には、仮眠室用の部屋がある。
「……もしかして、下に？」
そうだ、すっかり忘れていた。
この事務所の仮眠室の中にはちょっとした仕掛けがあって、その先は地下に通じる大きな空洞へと繋がっている。
思い出し、僕はすぐに仮眠室へと駆け込んだ。
扉を開けると、案の定、地下に通じる階段がポッカリと顔を覗かせていた。
「やっぱり、この中にいるのかな……」
そっと聞き耳を立てると、地下からは先ほどと同じような爆音の残響が響き渡っていた。
だがそれにしたって、今日の氷室は一体どうしたんだろう？
事務所の扉の鍵を閉め忘れたり、こんな風に地下に通じる扉も開け放したままだったり……。
何かこう、いつもの落ち着きというか、冷静さが欠けているよう

に思わせる。
しかし、僕もいつまでもこの場所で呆然と立ち尽くしているわけにもいかない。
とりあえずは中に入ろう。
そこで氷室に話を聞けば、疑問も解決するだろう。
僕は地下に続く階段を、そっと下り始めた。
事務所の扉に、鍵をかけることなどすっかり忘れたまま……。

僕はこの場所を訪れるのはこれで二回目だが、相変わらず地下に通じる階段は長く、そして薄暗かった。
壁に手を添えておかないと、足を踏み外してそのまま間っ逆さまに転落してしまいそうなほどだ。
下るにつれて、先ほどから僕の耳に届く爆音はその大きさを増していった。
そもそも爆音が響くという時点でただごとではないのだ。
一体地下の空洞では、何が起こっているのだろうか。
嫌な予感を半分ほど抱えながら、僕はどこか焦り気味に足を速めた。
そして、ようやく平らな地下の地面に辿り着く。
その瞬間、僕の目は迸るような閃光によって遮られた。
「うわっ！」
思わず飛び退いて、僕は壁を背にした。
今僕の目の前を通過したものは、間違いない。
あれは、飛鳥の放つ雷撃の矢だ。
ということは、飛鳥もここにいるということだろうか？
さらに少し歩き、僕は顔を覗かせる。
するとそこに、互いに対峙し合う飛鳥と氷室の姿があった。
「おや？　もう息切れですか？　そんなことでは、先が思いやられますよ？」
「……っ、ま、だまだぁっ！」

どこか怒りを含めたような言葉と共に、飛鳥の両手に青白い雷が宿る。
弾けたと思った次の瞬間、飛鳥は地面を蹴り、空高く跳躍する。
「これで……」
片手を上に掲げ、指先一つ一つに雷撃の力を分散させる。
合計で五本の雷撃の矢が、それぞれの指先から鋭い切っ先を覗かせていた。
「どうだっ！」
そして放たれる、五本の雷撃の矢。
左右と正面の三方向から、襲い掛かるように氷室目掛けて飛来する。
「……ですから」
としかし、氷室はどこか疲れたような声でそう呟くと、面倒くさそうにずれた眼鏡を押し上げた。
そうしている間にも、飛鳥の雷撃は氷室の体へと迫りくる。
その速度は肉眼でも十分に追いきれるほどの速度ではあったが、直撃すればただではすまない。
にもかかわらず、氷室はその場を微動だにしない。
眼前には迫り来る雷撃の矢。
それらは狙い済ましたかのように氷室の体目掛けて直進し、そして……。
ドォンという爆音と共に、氷室の体を呑み込んだ。
「……っ！」
巻き起こった煙に、僕は思わず視界を腕で覆った。
バチバチと雷の粒子が残す余韻が去ってなお、巻き起こった煙はなかなか晴れない。
いや、そんなことよりも。
氷室は無事なのだろうか？
呆然と眺めていた僕だったが、事態は全く把握できていない。

「ひ、氷室！　大丈夫？」
とりあえず氷室の名を呼んでみる。
しかし、煙の向こう側からは何の返事もない。
「や、大和？」
変わりに聞こえてきたのは、遠くから僕を見る飛鳥の驚いたような表情だった。
「おや？　大和ですか？」
と続けて氷室の声も聞こえてくる。
ただし、煙の向こう側からではなく、なぜか……。

――僕の背後から、その声は聞こえていた。

「……え？　って、うわあ！」
振り返り、そこに当たり前のように直立不動でいる氷室を目にして、僕は思わず声を上げた。
「な……」
それに続くように、少し離れた場所にいる飛鳥がそんな驚きの声を漏らしていた。
「お、驚かさないでよ氷室。心臓が止まるかと思った……」
「驚かすつもりはなかったのですけどね。それは失礼しました」
そう答えると、氷室はいつものように小さな笑みを顔に浮かべた。
「あー、もう！」
と、そんな僕と氷室を尻目にして飛鳥は叫んだ。
「どうして？　何で無事なワケ？　完璧に直撃だったのに！」
地団太を踏むように、飛鳥は悔しさ目一杯といった感じで頭を抱えている。
「やれやれ、困ったものです」
呆れ果てたのか、氷室は小さく溜め息を吐き出した。
「……ところで、二人は何をしてたの？」
と、僕はようやく一つ目の質問を切り出せた。

「ん？　ああ、ちょっと飛鳥がトレーニングに付き合えと駄々をこねるものですから、遊んであげてました」
サラリと、氷室は今すごいことを言ったような気がする。
しかし肝心の飛鳥にはその言葉は届いていないようで、今もウンウンと何かに頭を悩ませてうなっている。
「……やれやれ。溢れるばかりの才能も、使いこなせなくては手に余るものだというのに……」
そんな飛鳥を見ながら、氷室は楽しいのかそうでないのかよく分からない笑みを見せていた。
「それはそうと大和。そういうあなたは一体どうしてここに？」
「……え？　ああ、えっと僕は……」
そうだった。
こんな風に呑気に話している暇なんてなかったんじゃないか。
忘れかけた焦りが戻って、僕はそれが表情に出ていたのだろう。
いち早く察した氷室が、少しだけ真剣な目つきになっていた。
「飛鳥、一度休憩しますよ。私はともかくとして、今のあなたはもうヘロヘロでしょうに」
「うー……次こそ！　次こそは絶対にー……」
納得したのかそうでないのか、とりあえず飛鳥もこちらへと歩み寄ってくる。
「大和。話は上の事務所で聞きます。まぁ、大方の見当はついていますけどね」
そう言うと、氷室は一足早く階段を上っていってしまった。
僕はただ無言で、その背中を追いかける。
その後に、ブツブツと不機嫌そうに独り言を呟く飛鳥も続いていた。

「さて、と」
僕達三人は揃ってソファへと座り、ようやく話を始めようとしていた。

「順序が逆になってしまうかもしれませんが、まぁいいでしょう。大和、結論から聞きます。あなたが今日私のもとを訪ねたのは、昨夜の火災のことが原因なのではないですか？」

何となくは分かっていたことだったが、案の定、氷室は僕の考えを見透かしていた。

なので、僕は無言のままその言葉に頷いた。

「なるほど。では、あなたもこう思ったのですか？　昨夜の火災は、あの炎使いの少年となんらかの関係があるものではないのだろうか、と」

「……うん。僕はそう思う。だって、偶然にしてはこんなのって……」

続く僕の言葉を遮って、氷室は付け加える。

「ええ。確かにそう考えてしまうのは仕方のないことでしょう。むしろ、昨日の出来事から考えて、あなたや飛鳥がそう考えることは至極当然のことでしょう」

つまり、飛鳥も僕と同じだったということだろうか。

似たような疑問を抱き、こうして氷室のもとを訪ねた。

もっとも、どういう話の流れでその後トレーニングに進展したかは謎なのだが。

「あなた達二人の考えは、決して間違っていないでしょう。ああいった火災が起きたということは、確かに彼がこの事件に関わっているのではないかという可能性は、決して否定できるものではないですからね」

その通りだ。

まして、その日の夕方に一戦交えたその場所で、同じ日の深夜に火の手が上がるなど、どうみても偶然で終わらせられるわけがない。

「……ですが」

としかし、氷室は今までの言葉を覆すような言葉を選んだ。

「実際問題、昨夜の火災は彼とは無関係だと言っていいでしょう。断言しても構いません。昨夜の火災に、彼は関わっていません。関

わっているとしても、それは直接的にではなく間接的に、といったところでしょうか」
「……それって、どういうこと？」
飛鳥が聞き返す。
僕も全く同じ意見だ。
氷室の言葉を疑うわけじゃないけど、今の説明はどこか矛盾しているような気がする。
「だって、おかしいじゃない。昨日私と大和は、あの公園でアイツと戦った。その日の夜に、同じ場所で火の手が上がった。どう考えたって、無関係であるはずがないじゃない」
「ええ、そうですね。そう考えるのは自然なことですよ」
「だったら、どうして……」
言いかけた僕の言葉を呑み込むように、しかし氷室はキッパリと言い切った。

「――そう考えることは自然なことです。ですが、そう考えることが自然だと思い込むことが、そもそも不自然なのですよ」

それはやや分かりにくい説明だった。
ちょっと言い換えれば揚げ足を取るような言い方にも聞こえるし、どこか氷室らしくない意見だった。
「……どういうことなの？」
しかし結局僕も飛鳥も分からないままなので、同じ質問だけが飛び交ってしまう。
「少し整理しましょうか」
言って、氷室は眼鏡を押し上げた。
「まず一つ目ですが……では仮に、昨夜の公園の火災の原因を彼だと決め付けた場合で話をしましょう。しかしこれは、いきなり疑問点に直面することになります」
「疑問点？」

「ええ。そもそも、なぜ彼はわざわざ公園そのものを焼き払ってしまわなくてはならなかったのか？　要するに動機ですが、それが存在しません」

「それは、私達みたいな能力者の存在を公にしないために……」

言いかけた飛鳥だが、途中から言葉に勢いがなくなっていく。

言いかけたことで、何か疑問にぶつかったようだった。

「なるほど。飛鳥の言う場合は、要するに証拠隠滅の意味合いのものですね。確かに世間一般から見れば、私達のような能力者として覚醒した人間は危険極まりない存在です。その存在を隠す理由としては、大いにあるでしょう。ですが、それだったらそもそも別の問題を何一つ解消できないのですよ」

「他の問題？」

「……そうか、考えてみれば、当たり前だ」

飛鳥が呟いた。

目の色が少し変わり、何かを理解したような様子だった。

「その通りです。存在を公にしたくないのなら、そもそも昨日のあの時間あの場所で、あなた達を襲う理由なんてないはずなんですよ、彼にはね。当然ですね。仮にも休日の夕方、人通りなんて腐るほどあります。ましてや場所は街のシンボルとも言われている公園です。人目に付く可能性は十分高い」

「あ……」

言われて、僕も納得した。

なるほど、それは確かにその通りだ。

昨日は本当に、たまたまその時間に誰もいなかったからよかったものの、もし誰かいれば大事件になっていたはずだ。

「これは私の推測ですが、恐らく私があなた達二人と別れた後、彼はあなた達を尾行していたのだと思います。そしてたまたま、人気の全くない公園に辿り着いた。ですから、あなた達を誘い出したのでしょう」

確かに僕達は、ただ公園の中を散歩していただけだった。
そんな中で公園の片隅から煙が立ち上れば、誰だって不思議に思ってその場に近づきもするだろう。
「まぁ、彼にどんな意図があったかは定かではありませんがね。とりあえず現段階で断定できることは、昨夜の火災に彼は少なくとも直接的な関わりはないということです」
「……直接的ってことは、それじゃあ」
「ええ。間接的には関わっているでしょうね。仮にも炎使いなのですから、火災と結びつくことは彼も承知の上でしょう」
「ちょ、ちょっと待って……」
飛鳥が慌てたような声を上げる。
「ってことは……つまり、昨夜のあれはただの火事ってこと？」
「いいえ。そんなわけはありません」
飛鳥の問いに、しかし氷室は考える間もなく即答する。
「考えても見てください。普通火事というのは、出火箇所から徐々に炎が広がっていくものです。しかし、あの公園はそうではなかった。昼間のうちに現場を見てきたから言えることですが、あれはとても火事や火災という言葉ではくくりきれるものではありません」
そして一呼吸置き、氷室は続ける。

「――公園の出火箇所など、存在しませんでした。逆に言えば、あらゆる場所が出火箇所だったということです」

「な……」
飛鳥は言葉を失い、僕もただ目を丸くすることしかできなかった。
そんな僕にでも、一つだけ分かったことがある。
それは……。
「……ねぇ、氷室」
「……」
氷室は答えない。

すでに僕が続けるその言葉に対する答えを用意してあるかのようだった。

「……これって、つまり……」

「……あなたの思うとおりですよ、大和」

そしてぼくがその仮説を言う前に、氷室は断定した。

「――この街には、彼以外にもう一人……炎使いが存在しているということです」

そして沈黙が降りる。

空はもうすぐ、その色をオレンジから紺色へと変えていく頃だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１９：彼の風景

僕は今、すっかり日が暮れた夕方の街を歩いていた。
足取りは決して軽いとも重いともいえなかったが、内心にいくつかの不安が渦を巻いているのは確かだった。
結論から言うと、氷室はまだしばらく様子を見るべきだと判断を下した。
昨夜の火事があくまでも誰も巻き込まないものだということは、それはその人物なりのアピールということも考えられるからだそうだ。
要するに能力による何らかの被害を出して、他の能力者達の反応を確認しているということなのだろうか。
それにしたって公園一つを丸々焼け野原にすることもないだろうと、僕は思う。
とまぁ、そんなことをいくら考えていたところで、肝心要のもう一人の炎使いの姿形は何一つ分かりはしないのも事実だ。
僕達が遅れを取っているわけではないのに、どこかで出遅れ感を感じてしまう。
とはいえ、こちらから探して接触するのは得策ではないだろう。
特に僕の場合は、いざ戦いになったら勝つことなどもってのほか、逃げおおせることも難しいだろう。
だから一日も早く、時運の風の力をある程度まで使いこなせるようにならなくてはいけないのだが……。
「大和、気持ちは分かりますが、焦りは禁物です。特にあなたの場合、自分の肉体の限界を超える力……要するに許容量をはるかに超過するほどの力が流れているように思えます。しかも、それほどの力であってもまだ力は一部ほどしか解放されていない。もしもあなたが今のままの状態で全能力を開放すれば、間違いなくあなたの肉

体が崩壊します。ですから、焦らないでください。大丈夫です。少しずつではありますが、あなたは力を吸収しつつある。今はまず、その感覚と呼吸を全身で感じ取ることが重要です」

というのが氷室から言われた言葉だった。

それは正論ではあると思うし、事実として僕はその言葉に反論する言葉を持っていなかった。

そう、頭では分かっているつもりなのだ。

ただ……。

「……やっぱり、このままじゃダメだよな……」

僕は呟く。

確かに僕は、まだ自分の力を丸っきりコントロールすることができない。

言わば未熟者だ。

だったら、未熟者なりに早くコツを掴もうとすることはいけないことなのだろうか？

氷室から言わせれば、それこそが焦りということになるのだろう。けれど、僕だっていつまでも守られるだけの立場でいるわけにはいかない。

事実として、先日の炎使いの少年との戦闘において、僕は飛鳥の足手まといにしかなっていなかった。

結果、短期決戦を急いだ飛鳥は手の内を見透かされ、その身を危険に晒してしまった。

それは誰でもなく、僕のせいだ。

能力者としての覚醒から日が浅いとかそういうのは、結局は僕の中での甘えごとだ。

僕は少しでも強くならなくちゃならない。

せめて、自分のことを自分で守り通せるくらいには……。

「それができれば、苦労しないんだけどな……」

ハァと、僕は大きく溜め息を吐き出す。

いくら頭ではそう思っていても、結局はどうにもならないこととというのは世の中に腐るほどあるものだ。

僕は指の中の『Ｒｉｎｇ』に目を落とす。

昨日僕が意識を失ってからもうすぐ丸一日が経とうとしているが、あれっきり何も呼びかけのような声は聞こえない。

今朝になったら、体中の筋肉痛も完全に引いていた。

つまり、風の力そのものはしっかりと機能しているということになる。

「……シルフィア？」

ふと、僕はその風の名前を呼んでみた。

しかし、返事はない。

答える代わりに、冷たい木枯らしが一つ、僕の目の前を通り過ぎていった。

そしてどういうわけか、僕はそのままの足でデパートの地下食品売り場にやってきていた。

それはというのも、母さんからの電話で買い物を頼まれたからだ。

しかしまぁ、何と言うか……。

「さすがに混んでるな……」

当たり前だが、平日の夕方ともなれば雄藩の献立を考える近所の奥様方でこの場所は大いに賑わう。

さながらにそれは早朝の満員電車を思わせる客足っぷりで、僕は買い物かごを片手に人の波を掻き分けながら進んでいた。

「えっと……」

僕は携帯のメモ帳画面を開いて、母さんに頼まれた品物を確認する。

台所用洗剤とゴミ袋、それにおそらく今夜の献立になるであろう豚肉とほうれん草。

僕の買い物かごの中には、すでに台所用洗剤とゴミ袋は確保済みだ。

人波を掻き分けてどうにか野菜売場にも到着し、ほうれん草も無事に入手。

さて、残るは豚肉だけなのだが、なんというか、この日は本当にタイミングが悪かったようだ。

『皆様お待たせいたしました。ただ今よりお肉売場で、タイムセールスを開始します。個数に限りがございますので、ぜひお早めにご利用くださいませー』

などという店内アナウンスが流れたと思ったら、直後に大勢の客足が肉売場へと集中した。

何もこんなときにタイムセールスを開始しなくたっていいじゃないかと、僕は内心でグチをこぼす。

しかしまぁ、急がなくては肝心の豚肉はあっという間に売切れてしまう。

どの道買うものなら、安いに越したことはない。

というわけで、全く気乗りはしなかったが、僕はさらに密度の増した人山の中に果敢にも身を入り込ませた。

が、これは思った以上の難関だった。

どこにそんな体力があるんだと思うくらい、ご近所のマダム達は実にパワフルだった。

僕はもみくちゃにされるのを覚悟しながら、すでに満身創痍になりつつもその中を突き進んだ。

そしてようやく僕の視界の中にパック詰めされた豚肉が見え、それに向けて手を伸ばし、指先がパックを掴んだところで……。

――全く正反対の方向から、もう一つの手が伸びて、僕と同じパックを掴んでいた。

「え？」

「あ？」
と、僕の声ともう一人の人物の声は同時に発せられ、見事に重なった。
僕は恐る恐る、その手の方向に視線を向ける。
想像したのは、血管が浮き出るほどに必死な顔をした小太りの団地妻のような人物……だったのだが。
「……」
予想に反して、そこにあった顔は僕と同じくらいの年頃の少年のものだった。
ただし。
「……何で？」
と、僕はそう呟かずにはいられない。
対して、その少年も口を開く。
「……ホンット、どういう偶然だよこれは……」
呆れたようなそんな声で、溜め息混じりにそう呟いていた。
僕と同じパック詰めに手を伸ばしていたのは、あの炎使いの少年だった。

そしてさらにどういうわけか、僕は今、その炎使いの少年と共に同じ道の上を歩いている。
しかも、並んで歩いている。
僕達は互いの手に買い物袋をぶら下げており、会話らしいものは何もない。
当たり前だ。
ほんの一日前に命のやり取りに近いことをした相手に、気軽に話しかける言葉なんて僕は持ち合わせていない。
だが。
どうやらこの少年に、そんな理屈は通じないようだった。
「しっかし、ホントにどういう偶然なんだかね、これは。ここまでくるともはや運命的ってヤツですか？」

「……」
僕は答えない。
聞こえる言葉は全てただの空耳だと割り切ることに決めた。
「って、男同士で運命的だなんて、それこそキモイな。そんなシチュはお呼びでないな、うん」
「……」
「……なぁ、さっきから必要以上に俺のこと無視してねーか？」
「……別に」
「何だよ、そう緊張すんなって。安心しろよ、別に今から殺し合いを始めるってワケじゃねーんだからさ」
そう言いながら、少年はアハハと笑っていた。
本当に、緊張感のカケラも感じさせない。

「……あのさ、一つ聞いてもいいかな？」
「あん？　何だよ？」
「……その、どうしてそんなに気楽って言うか……楽観的、なの？　僕達、表向きはれっきとした敵同士だよね？」
「んじゃ逆に聞くが、アンタはどうしたいんだ？　たった今この場所で、昨日の続きをやりたいっての？」
「……そうじゃないけど」
「だろ？　あのな、昨日も言わなかったか？　俺は、ムダな殺し殺されってのはゴメンなんだ。戦うからには、それ相当の理由があるときだけだ。で、今はその戦う理由が俺には全くない。それとも、アンタにはあるのか？　俺と戦う理由が？」
「……」
「ま、少なくともアンタにはないよな。あの雷使いとかだったら、問答無用で襲ってきそうだけどな」
「……君は、本当に……」
「ん？　ああ、同じだよ。アンタ達と何も変わんねーさ。幸か不幸か、望んでもない力を手に入れた、哀れな子羊の一匹に過ぎない」

「哀れ……？」
「ああ、哀れだ。こんな力、俺は望んで手に入れたわけじゃねー。ただあえて言うなら、これも運命ってやつなんだろーな。だったら、抵抗するのもバカらしい。流れに流されて、行くとこまで行ったほうが楽そうだ」
スラスラと少年は言葉を並べる。
やけにスッキリとした口調で、聞いてる僕の方まで嫌な気持ちが吹き飛んでいくようだった。
「アンタはさ、どーなんだ？　その風の力は、望んで手に入れたものなのか？　違うだろ？」
「それは……そうだけど」
「だったら、やっぱ俺もアンタも同じだよ。結局は運命の掌の上で踊らされてるだけの、駒の一つに過ぎねーさ」
「運命、か……」
「……だがな」
と、少年の声のトーンがわずかに変わる。
「俺はただ黙って、運命とやらに従ってやるつもりは毛頭ない。むしろ逆に、運命さえねじ変えてやる。だからそのためには、この戦争に勝ち残らなくちゃいけねーんだ。だから俺は戦う。その先に、本当に俺が望むものがある限りはな」
「本当に望むもの？」
「ま、それは企業秘密だ。お？　知りたいか？　その顔は知りたい顔だな？」
「……いいよ、別に」
「チッ、ノリが悪ーな」
「……」
どうしろって言うのだろうか。
と、僕達は敵同士と言う立場にもかかわらず、そんなどうでもいい会話をしながら道の上を歩いていた。

しばらく歩いて、少年は立ち止まる。
「っと、悪い。俺はこっちなんだ」
「あ、うん。って、あれ？　でも確か、この先には……」
「ん？　何だ、知ってるのか？」
「えっと……確か、孤児院があったんじゃ？」
「ああ、そうだ。そこが俺の家だからな」
「え……？」
僕は少年の言葉に、思わず反応していた。
「あー、やっと帰ってきたかシンゴ！」
すると、突然少年の背後からそんな声が聞こえた。
見ると、孤児院の庭から顔を出した、まだ小学生低学年くらいの背丈の男の子が、その手にサッカーボールを抱えて小走りにやってきていた。
「オイコラ、年上には敬語を使えって、何度言われれば分かりやがる大樹」
「うるせーなー。いーだろ？　シンゴはシンゴじゃんかー」
「……ったく、これだからガキは……」
大樹と呼ばれたその少年は、憎まれ口を叩かれながらも笑顔を絶やすことはなかった。
「なーなー、晩御飯までサッカーしようぜー。今日こそシンゴからゴール奪ってやるからなー」
「ケッ、クソガキがいくらやったってムダなんだよ。黙って飯の支度が終わるまで絵本でも読んでろ」
「んだとー！　キュウソ犬を噛むって言葉知らないのかー！」
「犬じゃねぇ、猫だ、猫。犬噛んでどーすんだよ……」
「いーからやろーぜー。皆待ってたんだからさー」
「皆？　まさか、ガキども全員まだ遊んでやがるのか？」
「おー。みんなクモの子を散らしたように遊んでるぞー」
「……お前、どこでそんな言葉覚えやがった？　しかも、微妙に用途方法が違ってやがる……」

僕はそんな二人のやり取りを、どこか遠巻きに眺めていた。
何だろう、この光景は。
本当に当たり前で、どこにでもありそうなほどにありふれた日常の一ページ。
……ああ、そうか。
そういう意味だったのかもしれない。
僕も彼も、結局は一緒だったんだ。
僕には僕の、彼には彼の日常が、当たり前の景色がある。
そして僕達はそれぞれに、そんな当たり前を簡単に踏み越えてしまったんだ。
だからこれが……今こうして僕の目の前に広がる光景こそが、彼にとっての何でもない当たり前の日常なんだ。
「なーなー、シンゴ。その人誰だー？」
と、少年は……大樹は僕の方を指差して言った。
さっきからずっと立ち尽くしていた僕のことが気になったのだろう。
「あー、その人はだなぁ……」
と、しかし彼もどこか困ったような表情を見せる。
それもそのはずだ。
結論から言えば僕達はやはり敵対関係にあり、その人物を第三者に紹介することなど、どういう言葉を使えばいいのか分からない。
それでも、僕は。
このときだけは、あえてその言葉を選んだ。

「――こんにちは。シンゴの友達で、大和って言うんだ。よろしく」

「……」
案の定、彼は……シンゴは目を点にして、しばらく僕のことを凝

視していた。
仕方ないだろうと、僕は目配せでその意図をシンゴに告げる。
「へー、シンゴにも俺達以外の友達がいたのかー」
としかし、大樹はさらりとひどいことを言ってのけた。
「……オイコラ。そりゃ一体どーゆー意味だ？」
「え、違うのか？　だって、ユウキが言ってたぞー。シンゴは目つきも態度も頭も悪い上に、性格も悪いから友達なんて全然いないんだーって」
「……あんのヤロウ、ガキに何てこと吹き込んでやがる」
「なーなー、大和ー」
と、気が付くと大樹は僕の元へと歩み寄ってきていた？
「な、何？」
「……」
しかし、大樹はしばらくジッと僕の目を見つめ、そのまま沈黙の時間が流れた。
そしてふいに顔を柔らかくして、小さく笑ってこう言った。

「――へー、大和は優しい顔してるんだなー」

「え……」
不意打ちのようなその言葉に、僕は一瞬だけ恥ずかしさを覚えた。
「コラ、ガキ。変なこと言ってからかうんじゃねーよ。仕方ねーな。少し遊んでやるから、先に中に戻ってろ」
「おー。シンゴ、早く来いよなー」
「分かった分かった。ホレ、さっさと行け」
シンゴがそう言うと、大樹は嬉しそうにまた孤児院の庭の中へと走っていった。
その姿を見送って、シンゴは僕に振り返る。
「悪かったな。口が悪いガキでよ。つっても、大半は俺の影響なんだろうけどな」

「いや、気にしてないよ。それよりも……」
「ん？　ああ、まぁ、そういうことだ。俺はな、この場所に捨てられてたのを拾われて、育てられたんだ。ここにいる連中は、全部俺と同じような境遇のガキばっかりさ。だからっつーか……ムカツクガキどもばっかだけど、ここにいる全員が俺の兄弟であり、家族なんだよ」
　どこか遠くを見る目で、シンゴは言う。
「それよりも、よかったのか？」
「え、何が？」
「俺とオトモダチになっちまって。後悔するぜ？　そのうちに」
「……どうだろ。そうは思わないけど、僕は」
「……ふぅん。ま、それならそれでいいさ」
　言って、シンゴは孤児院の方に振り返る。
「んじゃ、またな。戦うことになっても、恨みっこなしだからな」
「……ねぇ」
「ん？」
　引きとめたその言葉に、僕はその言葉を続けるべきか迷った。
　しかしわずかに考えた末に、僕はその言葉をあえて呑み込んでおくことにした。
「……その、名前を聞いてもいいかな？　僕は大和。黒栖大和」
「……ああ。俺は真吾。緋乃宮真吾だ」
　それだけの言葉を最後に交わして、僕達は分かれた。
　ガサガサと風に揺れた真吾の買い物袋が、少し透けて中身が見えた。
　どうやら、今夜はカレーらしい。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２０：現実の終わりの夜に闇は詠う

大和が事務所をあとにし、その後しばらくしてから飛鳥もその場をあとにした。

なんだかんだで疲れてしまったという感もあったし、何より考え事をしているときは一人になりたかった。

かといって、デスクワークにいそしむ氷室は声をかけてくるわけでもなく、事務所の中そのものは静かなものだった。

ただ、それでも考え事をするのには適した場所とはいえない。

ただでさえ鋭く、勘のいい氷室のことだ。

おそらくは、飛鳥の考えていることも大方の見当はついているのだろう。

「……私も行くわ。じゃあね、氷室」

「そうですか。気をつけて。それと、飛鳥」

案の定、思ったとおりの言葉で氷室は飛鳥を引き止めた。

「……分かっていますね？　焦りは禁物ですよ」

「……とりあえずは、うんと言っておく」

それだけ告げて、飛鳥は事務所の外へと出て行った。

走らせていたペンを止め、氷室は扉の閉まる音と飛鳥の後姿を見送った。

「……やれやれ。面倒なことにならなければいのですがね……」

ペンから手を離すと、ペンはコロコロとデスクの上を転がった。

椅子から腰を上げ、すっかり夕陽の色が差し込み始めた窓ガラス越しに、目下の街並みを眺める。

歩道の上、行き交う人並みの中に紛れて飛鳥の後姿が見えた。

「……強くなりたい、ですか……」

氷室は誰に言うわけでもなく呟いた。

「ええ、そうでしょうね。誰しもが、必ず一度は辿り着く結論です。

私だって、そうでしたから……」
窓ガラスに手を当てて、視線をわずかに上に向ける。
西の空の向こう側、夕陽がすでに半分ほどその体を地平線の下に潜らせていた。
「……ですが、飛鳥」
再び視線を歩道へ。
しかし、その先にすでに飛鳥の後姿を見分けることはできなかった。
「……今よりも強さを求め、その先にあなたは、何を求めるつもりですか？」
届かないと知って、しかし氷室は呟く。

「――あなたの望みは、どこにあるんですか？」

答えはない。
「……我ながら、愚問ですね」
と、ふいに眼鏡を押し上げる。
「野心の一つや二つ、誰しもが持っていること。それは私も、例外ではないのですから……」
そう呟いて、氷室はデスクの上の書類を揃える。
それらの書類は、『Ｒｉｎｇ』に関するごくわずかな資料だ。
ただでさえ歴史の中に姿形はおろか、その存在さえも隠蔽されたかのように情報の少ない代物。
そんなものに関する記述がある書物などは、世界中をくまなく探したところで数えるほどしかありはしない。
これらの資料は、氷室が独自でかき集めたものを、自分なりに編纂したレポートのようなものである。
しかしそれでも不明な点は数多く、むしろ分かったことの方など皆無に等しい。
が、それらは決して捨てたものではない。

もっとも重要であるかもしれない情報の記述が、そこには記されていた。
曰く。

――『Ｒｉｎｇ』の力を統べし者、栄光の名の下に如何なる望みも一つ叶えん。代償として……の……を……。

文献がかなり古いもので、ところどころが虫食いになっていたり破れて読めなくなっている。
しかしこの一文だけからでも、ことの重要性はよく分かるだろう。
ようするに、この戦争の勝利者となることは、イコール自分の望みを叶えることができるという解釈になる。
この事実を全ての能力者達が知っているわけではないだろう。
いや、むしろ氷室を含めたごく一部の能力者達しか知らないといっても過言ではない。
飛鳥はこのことを知ってはいるが、氷室はこの事実をまだ大和には話していない。
それに何より、この一文にはまだ読み取ることのできない続きがある。
その先には果たして、どんな文章が書かれていたのだろうか？
わずかながらの好奇心さえも抱きながら、氷室はそこに非常に興味を示していた。
「……望みを叶える、ですか。確かにこのファンタジーの中では不思議さも半減しますが、それにしたって……」
話ができすぎているような気がしてならない。
確かにこの手の設定は、ゲームなどで多用されるありふれたものだ。
それだけに、目の前に現実の一部として付きつけられると疑いを隠すことはできない。
そんな都合のいいことが起こるはずがないと思いながらも、今自

分がいるこの場所はすでにファンタジーの世界なのだという事実が、無意識のうちに混乱を招いてしまうのだ。
「……吉と出るか、凶と出るか……いえ、この場合はちょっと違いますか」
ハァと溜め息を一つ吐いて、氷室は呟く。
「――蛇が出るか、鬼が出るか。どちらにしても、一筋縄ではいかないわけですが、ね……」
揃えた資料をクリップで留め、デスクの引き出しにしまいこんだ。
「さて、と……」
一度グッと背伸びをし、疲れを押し出すように呼吸を整える。
「では、蛇が出そうな藪を探しに行くとしましょうか」

一方飛鳥は、夕刻の人の多い駅前の歩道を歩いていた。
昼と呼ぶには遅すぎて、夜と呼ぶには早すぎる、そんな実に中途半端な時間帯。
それでも人ごみだけは相変わらず賑やかで、飛鳥としてはあまり気分はよくなかった。
考え事をするために一人になったのに、行けども行けども人の数は減らない。
どこか落ち着いて休める場所はないものだろうかと、辺りを見回していた。
と、ふいに視界の端に喫茶店の看板が映りこむ。
窓ガラス越しに見える店内は客足も多そうだったが、まだいくつかの空席も目立って見える。
当てもなく歩き詰めているよりは十分マシだろうと、飛鳥はひとまずその喫茶店へと足を向けることにした。

カランカランと、鐘の音を鳴らして扉を押し開ける。
店内にはわずかに温かみを覚える程度の暖房が掛かっており、比較的寒かった外の空気に慣れていた体を優しく包み込んでくれる。
「いらっしゃいませー」
カウンターの向こうからウェイトレスのそんな声がした。
飛鳥は壁に書かれたメニューを眺めながら、ホットコーヒーとシナモンクッキーを注文して、店の隅にある二人がけの席に陣取った。
黒味の強いコーヒーの中にミルクを流し込みかき混ぜる。
見る見るうちにカップの中の液体は色合いのいい茶色へと変わり、暖かいそれを飛鳥は口に含んだ。
「ふぅ……」
と、前触れもなく溜め息が出た。
疲れているのではなく、どこか安心できるようなそんな安堵の息だった。
カップを置く。
頬杖をついて、窓の外の景色に目を向けた。

人間観察、というわけではないけれど、目は自然と通り過ぎる人々へと向かってしまう。
誰もがどこか早足で、まるで今日という一日の終わりに追われているかのように見えた。
そんなに急いでどこ行くのさ。
などと、飛鳥は口に出さずに胸の内で呟いてみる。
帰る場所、向かう場所、辿り着く場所。
一体そこに、どれだけの違いがあるというのだろう。
忙しそうに足を動かしたって、どうせ何も変わりはしないというのに。
なのにどうして、誰もがこんなにも慌しく、変わらない毎日の中でいつも加速しているのだろうか。
追われているの？

逃げているの？
どっち？
それとも、どっちでもないの？
その先に、一体何があるって言うの？
浮かんでくる言葉は質問だらけ。
もちろん、いちいち丁寧に答えてくれる解説者なんてどこにもいない。
飛鳥はもう一口コーヒーを口に含み、味わうわけでもなく、無言で飲み干した。
ふと、窓の外の景色に目を奪われる。
はしゃぐように走る子供の姿。
少し遅れて、その子の母親と思われる女性が後を追っていた。
「あ……」
飛鳥がそう呟いたと同時に、前を走っていた子供が転んでしまった。
母親はそれに気付いたようで、小走りに子供の下へと駆け寄ってくる。
どうやら子供の方も怪我らしい怪我もなく、涙一つ滲ませてはいないようだ。
駆けつけた母親はサッと子供の膝の汚れを払うと、今度は二人揃って仲良く手を繋いで歩き出した。
決して大きくはない母親の手の中に、さらに小さな子供の手が包まれる。
ゆらゆらと揺れる二つの手。
小さな手と、それより少し大きな手。
ゆらり、ゆらり。
ブランコのように、揺れる。
そんな珍しくもないはずの景色が、どうしてか目に痛い。
「……何してんだろ、私……」

呟いて、飛鳥はテーブルに顔を突っ伏した。
少しだけ。
ほんの少しだけ、その光景に涙腺が緩みかけてしまっていた。
「……ダメだなぁ、私。決めたのにさ……」
弱々しく呟く。
浮かびかけた透明な粒は、しかし流れずに袖口へと吸い込まれて消えた。

『――……さん、……さん？　ねぇ、どうしたの……さん……お……さん？　……母さん？　……お母さん？』

「……っ、痛っ……」
顔を突っ伏したまま、飛鳥はわずかに痛んだ胸に手を添えた。
目を閉じれば、いつでもどこでもありありと思い出せる。
当たり前があった日々。
だけど、今はもうない。
どこにもない。
なくなった。
なくなってしまった。
それはきっと、誰のせいでもなく、ただ……。

「――私が、壊したんだ……」

カタン、と。
カップの中のスプーンが、わずかに傾いてそんな音を立てた。
店内に流れ出した緩やかなメロディ。
歌詞も曲名も知らないけど、なんだかやたらと気分が落ち着いた。
今はもういない、誰かの子守唄に少し似ていた。

それを形容する言葉は、正直言ってなかなか探そうとしても見つかるものではない。
それはやはりそれ以外の何者でもなく、ゆえにそれはそれであるのが当たり前だからだ。
夜が始まった頃の時刻。
すっかり見る影もなくなった、かつて公園だったその場所に、それは佇んでいた。
「……」
まだ浅い夜。
夕暮れの残滓があちこちに残り、常闇と呼ぶにはお粗末もいいところ。
にもかかわらず、それの周囲の闇は異常なほどの密度を保っていた。
それはまるで、ブラックホールのようだった。
何もかもを吸い込み、そして決して還さない。
全てを呑む存在。
そこに際限という領域の限界はなく、ゆえにそれは無限として認識される。
佇んだ闇は、音を殺しながらゆっくりと侵食を繰り返していた。
何かを探るように、注意深く。
しかしその反面、何もかもを壊すほどに手荒に。
「……そうか。やはりここだったか」
ふいに、その闇の中のそれは囁いた。
声色は少年のそれで、まだ幼ささえ十分に残す、汚れを知らぬ無垢な音色を奏でていた。
しかしそれでいて、その声は明らかに異質なものだった。
それは何よりも深く、何よりも遠く、何よりも高く、何よりも暗く、何よりも切なく、何よりも儚く。
今にでも消え入りそうなほどの声で囁いていた。

「……ふぅん。こんな小細工まで施してあるんだ。ちょっと面倒だけど、まぁ、これはこれで一つの余興として楽しむべきなのかな？」

と、独り言だと思われたその言葉は、しかし確かにすぐ側にいる別の何かに向けられていたものだった。

そしてそれを証明するかのように、それは自らの傍らにあるモノの名を呼んだ。

「――ねぇ？　アビス」

深淵の名が紡がれる。

途端に、ぐにゃりという奇怪な音……いや、正確には音など皆無だが、そんな音をイメージさせる動きがあった。

それを囲み、包み込んでいた闇がうねり、呼びかけに答えるように蠢き始めた。

「……へぇ、これがそうなんだ」

一体誰に対してその言葉を向けているのか、それは闇に抱かれたまま呟いている。

一方、闇は変わらずに奇怪な動きを繰り返すだけだった。

しかしその様子が、あたかも会話として成り立っているように見えるのは気のせいではないだろう。

事実、それは闇と対話しているのだ。

ゆえにそれは、ただの闇ではない。

それは闇という形なき暗黒に意思を宿した、精霊だ。

「……なるほど。封印は全部で……八ヶ所。この小さな街にしては、ちょっと多すぎるくらいだけど……まぁ、いいか」

クスリと、それは小さく笑ったように見えた。

「え？　何？」

それは闇の囁きに耳を傾ける。

「楽しんでるのかって？　僕が？　……うーん、どうなんだろうね」

嘲るように小さく笑みを浮かべて、それは闇に言葉を返す。
「でもきっと、楽しいことになると思うんだ。アビスだって、そうでしょ？　気が狂いそうになるほどの月日を経て、ようやく戦争は再開されようとしているんだから……」
答えるように、闇はその両手を大きく広げて見せた。
それを包んでいた球体の闇が、突如として巨大化する。
まさしくそれは、場違いにもほどがある闇色のカーテンだった。
「……うん、そうだね。せっかくの戦争だもの。楽しまないとね」
音もなく、闇が雄叫びを上げた。
その音が心地いいのか、それはひどく安らぐような笑みを浮かべていた。
見た目も実際も、間違いなく正真正銘の人間。
性別は男、年齢で言えばまだ十三歳の少年。
自身を包み込む闇の中でなお黒銀に輝く伸びた髪は、風もないのになびいて揺れていた。
そしてその髪の奥、少年の額には銀のサークレット。
そしてそれは、能力者の証である『Ｒｉｎｇ』に他ならなかった。
表面に刻まれた凹凸は、文字でも言語でも記号でもない。
そしてそれらは、まるで血のように深く強い赤色で……示されてはいなかった。
確かに少年の銀のサークレットには、記号の羅列が掘り込まれている。
しかしそこに、あの目立つほどの赤さはどこにもなく。
代わりに目で見えるその色は、全くの正反対とも言える色合い。
――夜の訪れを感じさせる空の色によく似た、深い蒼色を示していた。
「さぁ、もうすぐだ……」
詠うように少年は呟いた。

その顔には、相変わらずの汚れを知らない無垢な笑みを浮かべている。
その周りで、闇が吼えていた。
「間もなく、戦争の再開だよ、みんな……」
空を仰ぎ見る。

「――クリムゾンとディープブルー。決して相容れない赤と蒼の、楽園を求めた戦争の始まりだ……」

そしてそれは、何かの合図になったのだろうか。
一瞬後に、その場からは何者の影も形も消えうせていた。
見た者は誰もいなく、気付いた者も誰もいない。
ただ、確かに何かが始まっていた。
この夜を境に、リアルとファンタジーはついに交錯し始めることになる。
そしてそのことを知る者は、まだ誰もいなかった。
少なくとも、今は、まだ……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２１：隣の誰か

一夜が明けて、また今日も新しい一日が始まろうとしていた。
それは何の変哲もない、いつもどおりの朝の訪れだった。
……と、僕は思っていた。
少なくとも、こうして自分の部屋で目を覚ました時点では……。

いつもと同じように朝食を済ませ、制服に着替えて家を出る。
途端に、僕はその場で膝をつきそうなほどの急激な息苦しさを覚えた。
「……う、あ……？」
空気が重い。
まるで重力そのものが極端に強まっているような感じだ。
吸い込んでいるのは本当に酸素なのだろうか？
まるで有害な毒ガスでも吸い込んでいるかのように、僕の体は跪くかのように沈んでいく。
意識が朦朧として、かろうじて手が掴むドアノブの感触すらも徐々に薄れていく。
吐き気がする。
胃の中のもの全てを逆流してしまいたくなるほどの、おぞましいほどの気分の悪さ。
こんな感覚は今まで生きてきた中で一度として味わったことはない。
「……っ、は、あっ……」
何度も何度も酸素を取り入れようと肺は動いているのに、一向に気分は楽にならない。
それどころか、もがけばもがくほど意識は薄れ始め、ついには目の前の景色までもがメチャクチャに歪み始めていた。

……何なんだ、これは？
一体、何が起こっているんだ？
声に出すこともできずに、僕は呻くように呟いた。
ドクンと、心臓が跳ねた。
その鼓動が全身に伝わり、体全体が無意識のうちにその奇妙な揺れのようなものを感じ取っていた。
空気が歪む。
目に映る全ての景色が渦を巻き、螺旋のようにやがて中心であるその一点に向けて集束していく。

この瞬間、世界は確かに壊れていた。
いや、それは僕の目から見える世界だけのことなのかもしれない。
おそらく他の人の目から見ればおかしいのは僕であって、ここは何も変わらない当たり前の現実という世界が広がっているに違いない。
しかし今僕の目に映るこの壊れた世界は、あまりにも不安定だ。
空も大地もあったもんじゃない。
歪み続ける大地はあらぬ方向へと道が曲がり、見上げているはずの空はなぜか正面にある。
その映像の一つ一つが全て壊れかけの出来損ないで、つぎはぎだらけの絵のように見える。
まるで、はめ込む場所を間違えたパズルのピースのよう。
正しく配列されることを忘れ、自分勝手な新しい風景を作り出し、結果として自ら壊れ果てていく。
どこにも繋がらない、繋がってない世界。
それはまさしく、このリアルを容易く消し去ることができる狂ったファンタジー。
僕は今、まさにその渦の中にいた。
現実と仮想の狭間で、僕は侵食の影響を受けている。
引きずりこまれ、引きずり出されてを繰り返している。

「あ、う……く……っ」
呼吸することなどとうに忘れていた。
意識は確実に薄れ、僕の目はもう間もなく音も立てずに静かに落ちようとしていた。
映る景色がどんどん細く狭くなっていく。
最後までその目の先に青い空も白い雲も映ることはなく、崩れ落ちる作りかけのジオラマだけが、鮮明に僕の脳に焼き付いていた。
「……っ……」
目が閉じる。
閉じればきっと、僕はもうどこにも戻れない。
ダメだ、目を開けろ。
立つんだ。

その思いとは裏腹に、体はすでに抵抗することを忘れていた。
手足には力が入らず、まるで自分の体ではないかのようだった。
繋がっているのに繋がってない。
僕はまるで、操り糸の切れたマリオネットそのものだった。
誰かの糸なしでは、自分で立ち上がることさえもできない。
意識が閉じていく。
現実と仮想の狭間のその場所に、僕は落ちていく。
そこにはもう、何もない。
現実に帰る扉も、仮想に進む扉もない。
あるのはただ、絶対的なほどの……虚無。
言葉なき誘いが、音も立てずに僕を連れ去ろうとしている。
「……嫌、だ……」
かろうじて出た言葉は、しかしたったそれだけのものだった。
それだけでもう、僕はありとあらゆる意味で力尽きてしまった。
抗う力さえも、もう微塵も残されてはいない。
そんな僕の目が最後の最後で捉えた映像。
それは、一体どういう皮肉の意味合いが込められていたのだろう

か。
「……」
――揺らぐ視界のその先には、理解できない記号の羅列を刻み込んだ『Ｒｉｎｇ』があった。
そして僕の意識はそこで完全に途絶えた。
その目で見ていた世界から、ありとあらゆる音が消えた。
最初からなかったのかもしれない。
僕は色のない無の世界に包まれた。
そこには本当に何もない。
白でも灰色でも透明でもない、言葉の定義の領域を超えた色の世界が、そこには広がっていた。
前も後ろも右も左も、上も下もない世界。
例えるならそこは一面のキャンバスのようで、広ささえも推し量ることはできそうになかった。
「……ここは……」
僕はその虚無の空間で立ち尽くしていた。
不思議なことに、先ほどまでの苦しみから僕は解放されていた。
手も足も意のままに動くし、息苦しさや吐き気も何一つ感じさせない。
まるで、最初から何もかもが幻であったかのように。
「……」
僕はその、無限に広がるほどの広大な虚無の空間を見渡した。
ここには本当に、何もない。
……いや、あるという定義が存在していないのだ。
例え何かがここにあっても、誰かがここにいても、この空間はそれらの定義を全て打ち消す。
互いに互いを認識できなくさせ、結果として目に映る景色は虚無だけとなる。

あるけど、ない場所。
それはまるで、いつか見て、忘れた記憶のような。
そんな、あまりにも空虚で、忘却された場所。
零れ落ちる時の砂は、ひっくり返せば再び時を刻むことができる。
しかし、ここはそうではない。
時を刻んで零れ落ちる時の砂は、行き着く先を知らない。
ゆえに、ひっくり返しても再び砂が落ちることはない。
ちょうど、ここはそんな場所だった。
確かにあるのに、決して見つけることのできない場所。
それは今も昔も、ずっとずっと僕達の暮らすこの平面世界の延長上にあった場所。
僕達が毎日を暮らす現実という名の平面世界から、ほんのわずかに位相のずれた場所に位置する、あるけどない世界。
気が遠くなるほどの昔、誰かが楽園と呼んだその場所は、同時に名もなき聖域でもあった。
やがていつの日か、別の誰かがこう呼んだ。

――空白の箱庭……ロストカラーガーデン、と……。

そして、どうして僕は、そんなことを理解することができるのだろうか？
見たことも聞いたことも、記憶にもないこの場所。
それなのに、なぜか僕は……。
「……」

――僕は、この場所を知っている……。

そして次の瞬間、世界に色が生まれた。
生まれた色は、赤。
それは生命の誕生を意味する命の色。

流れる赤は生の証。
ゆえに生まれたその赤も、意思を持って僕に道を示そうとしていた。
色のないキャンバスに描かれるそれは、文字でも言語でも記号でもない。
しかしそれらは、意思を持つ古代の力。
「……クリムゾン・テキスト……」
そして僕は、描かれたそれらの理解不能な旋律を目に焼き付けていた。
決して言葉にはできないもの。
それなのに、僕はそれらを読み取り、本能的に理解することができた。
やがてその記号の羅列は煙のように消え去り、代わりに今度は何かの図形のようなものが浮かび上がってきた。
最初はただの点だった。
その数は八。
さらにそれらの点の中心に、一際大きな点が生まれた。
八つの点は中心の大きな点から八角形を象るように、均等な距離で浮かび上がっていた。
そしてさらに、それら計九つの点を取り囲むように、どこかで見たような形が浮き上がる。
「……これは……」
と、僕がその浮かび上がった形にわずかな心当たりを持ったところで、再び僕の意識は奈落の底へと落下していった。
その後のことは、僕は何一つ覚えていない。
ただ一つ確かなことは、僕が目を覚ました場所は、学校の保健室のベッドの上だったということだった。

頭はいつまで経ってもボーっとしたままだった。
僕は今、昼休みの最中をこうして保健室のベッドの上で寝て過ごしているわけだが、こうなった経緯を何一つとして覚えていなかった。
僕の今朝の記憶は、家の扉を閉じたあの時点で途切れている。
僕はそこで正体不明の苦しさを覚え、薄れ行く意識の中で何度も抵抗しながら、それもむなしく気を失ったはずだった。
ただ、そのときに見えた映像はしっかりと覚えている。
あの色のない世界も、そこに浮かび上がった記号と、それの意味するところも、あの意味深な図形も何もかも。
僕の脳の中に高性能のデジカメでも内蔵されているかのように、それはやけに鮮明だった。
「……っと」
上体を起こす。
先ほどまでいた保険医の先生も今は昼食に出ているようで、保健室の中は僕一人だけだった。
妙に懐かしさを覚えるような、薬品の匂いが僕の鼻をついた。
今年の春に健康診断を行って以来、僕は保健室を利用したことはなかった。
だから懐かしいというよりは、どこか物珍しいといったような、そんな感覚を覚えているのかもしれない。
真っ白な天井に真っ白なカーテン、真っ白なベッドの真っ白な枕と真っ白なシーツ。
何もかもが真っ白に包まれたその場所は、あのときふいに見えた無色の世界にどこか似ている気がする。
もっとも、清潔感の塊みたいなこの場所に、嫌でも目立つようなあの赤い記号はどこにも見当たりはしないのだけど。
「……やっぱり、変だ」
僕は呟く。

僕が目を覚ましたのは、実は今から二十分ほど前のことになる。
そのときは保健室の中にまだ保険医の先生がいて、時刻も間もなく昼休みを迎えるという、その直前のことだった。
目覚めてまず、僕はここがどこだか分からなかった。
しかし、どこか見覚えのある保険医の先生の顔を見て、僕はここが学校の保健室であることを知った。
その先生の話によると、僕はどうやら朝登校してきて間もなく体調の不良を訴え、それから今までずっと眠り続けていたのだという。
もちろん、僕の中にそんな記憶はない。
唯一合致しているのは、僕が倒れたというその事実だけだ。
しかしその場所は学校ではなく、間違いなく自宅の玄関前のはずなのだ。
はずなのだが……。
「どうなってるんだ？　まさか、誰かが僕をここまで運んだっていうのか？」
しかしそれは考えにくいことだ。
僕の家から学校まで、徒歩で十五分ほどの距離がある。
その間ずっと僕が気を失っていたとして、その僕を運んだであろうその人物は、一体どうやって僕を運んだのだろう？
単純に背負ったりなどということも考えられるが、それはあまりに目立ちすぎではないだろうか。
仮にも時間帯は会社や学校に急ぐ人の波が多い時間帯だ。
そんな中を誰かを背負って移動するようなことがあれば目立たないわけがないし、逆に不審に思われるのは明白だ。
だとすると僕は、車にでも乗せられて運ばれたということだろうか？
確かに徒歩に比べればずいぶんと自然な形にはなるだろうが、それでも不自然さは拭いきれない。
そうやって学校まで運んだところで、次は僕をこの保健室まで送り届けなくてはいけない。

しかし、保険医の先生の言葉をそのまま借りるのなら、僕は他でもなく、自分自身の言葉で休ませてほしいと申し出たらしい。
この証言で、全ての可能性は潰えることになる。
だとしたら本当に、僕は一体どうやって……。
まさか、本当に無意識のままで学校まで歩いてきたとでもいうのか？
……おいおい、夢遊病の一種じゃあるまいし、ましてや僕にそんな病気はないぞ。
これは断言できることだ。
つまり僕は、少なくとも自分の意思で学校にやってきたわけではないということになる。
だとすると、もう考えられる可能性は一つしかない。
――僕以外の誰かが、無意識の僕を操るかのようにしてここまでつれてきたということだ。

「……そんなこと」
バカバカしいなどと、僕は吐き捨てることができなかった。
なぜならすでに僕は、現実の境界線をとっくに踏み越えてしまっているのだから。
もはや僕の目に映るこの世界の中に、万人が見ている世界の常識なんて通用しない。
ここは現実であると同時に、ファンタジーの世界だからだ。
できるはずのないことができる、あるはずのないものがある、そんな世界だからだ。
「……」
途端に僕は言葉を失った。
今この口を開いても、おそらく僕は否定と肯定を繰り返すことしかできないだろう。
全ての出来事を整理する時間が必要だった。

そしてそれは、まさしく今この瞬間なのかもしれない。
この際、今僕がこうして保健室のベッドの上にいることは大きな問題ではないだろう。
それよりももっと注目すべき点があるじゃないか。
そう、それは……。

「――誰が僕をここまで運んだか……」

その一点に尽きることだった。
裏を返せば、その人物こそはおそらく僕と同じ境遇……つまりは能力者である可能性が非常に高いからだ。
考えても見て欲しい。
仮に玄関前でぶっ倒れている学生の姿なんて見かけたら、普通はすぐさまその家の扉を叩くとか、救急車を呼ぶとか、そんな非常時に行う行動なんて実に限られたものだ。
僕の場合もまさにそれで、少し大声をあげれば家の中から母さんは飛び出してきたことだろう。
しかし僕は、それをされなかった。
つまり僕をここまで運んだその誰かは、原因不明で倒れた僕が発見されることを意識的に隠したかった、ということになる。
それはなぜか？
決まっている。
つまりその誰かは、わずかにでも僕が能力者であるがゆえにこのような症状に見舞われているという、その一点のみの事実をどうしても公の場に認識させたくなかったからだ。
そうまでして僕を保護するような理由はまだ分からないが、その誰かから見て、僕の今朝の出来事というのは予想外なことだったのだろう。
逆に、僕がそのまま病院などに担ぎ込まれることになれば、少な

からずそれはちょっとした話題になる。
遠からずそれは、近所や学校にまで届くことだろう。
そうなれば、その話を耳にした人間の中で、もしも僕と同じように能力者として目覚めている人間がいれば、僕のことを不審に思うことはおかしなことではない。
そして結果的にそれは、僕もまた能力者であるということを知らせることに繋がる。
「……でも、そうすると……」
そう。
そうだとすると、疑問点も浮かんでくる。
この仮説が正しいとすると、僕を運んだその誰かは、間接的とはいえ僕の身を守ってくれたということになるからだ。
そしてぼくを運んだその誰かもまた、能力者であるということになる。
そうなるとやはり、合点がいかない。
「どうして、僕を助けるようなことをしたんだ……？」
能力者達は僕を含め、この戦争に生き残ることを考えているはずだ。
それぞれの思惑は違ったとしても、行き着く先はさほど変わらないだろう。
だとすれば。
今朝の僕の状況は、まさしくその一人の敵を脱落者にする絶好の機会ではなかったのだろうか？
「……」
……分からない。
一体どうして、僕はこうして無事なままでいるのだろう。
ご丁寧にも、僕の指の中の『Ｒｉｎｇ』は奪われてすらいない。
そうした理由は、何？
そして、何よりも……。

「――君は、誰？」

僕は虚空に向けて呟いた。

答えたのは、昼休みの終わりを告げるチャイムの音だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２２：嵐の前の

一日の始まりとその終わりが、日に日に体で感じ取れなくなっている。

もしも人の一生をたった一日で表現するのならば、誰もが朝に生まれ、夜に死ぬということになるだろう。

そう考えると、命というものはとてつもなく儚いものだという言葉にも、些か納得をせざるを得なくなってくる。

「そんなの、みんな同じなんだろうけどさ……」

そう呟いて、飛鳥は一度その場で足を止めた。

歩道の真ん中、真昼の路上に往来する人の数は数えるほどで、時間の流れがやけにゆったりしているようにも感じ取れた。

本当なら、こんな風にのんびりしている暇なんてあるはずはないというのに……。

「……これから、どうなるんだろ。どうするんだろう、私は……」

街路樹の傍らに立ち尽くして、飛鳥はそんなことを考える。

太陽はちょうど真上にやってきたところで、多少なりとも空腹感を覚え始める時間帯。

しかし今の飛鳥に食欲は全くといっていいほどなかった。

昨夜もあまり眠ることができず、朝まで何度もうたた寝を繰り返しては目を覚ましていた。

そんなわけで、こんな風に秋晴れの気持ちいい天気の下だと、どうにも眠気がこみ上げてきてしまう。

「ふぁ……」

だらしなく開きかけた口元を両手で覆い、飛鳥はあくびを殺した。

街の中心へと続く道を当てもなくブラブラと歩いてきたわけだが、そこに目的というものは存在しなかった。

本来なら今日も、氷室と少し体を動かそうとかそんなことを思い

ながら自宅を出たはずだった。
だが、肝心要の氷室とは連絡がつかなかった。
携帯は留守電モードに切り替わるばかりで、通話口の向こうに本人が出てくる様子は感じられなかった。
「さて、と。どうしようかな……」
思いがけずに暇な時間を持て余すことになった飛鳥は、文字通り手持ち無沙汰だった。
やりたいことなんて得にありはしない。
やりたくないことならいくらでもあるというのに……。

ちなみに余談ではあるが、飛鳥は通信制の学校に通っている。
授業はもっぱらパソコンの画面越しに行われるので、一般の学生達が普通に学校へ登校しているような今の時間、こうして平然と外をぶらついていることそのものには何ら問題はない。
午前中でレポートの提出は終えたし、課題もこなした。
ようするに、飛鳥は暇だったのだ。
それこそ自分の置かれた立場から考えれば不謹慎だとしか言いようがないのだが、暇なものは暇だから仕方ないじゃないというのが飛鳥の弁。
しかしこうして外に出てきたまではいいものの、すぐに目的を見失ってしまう。
いや、もとから何かを目的にして外出したわけでもないので、その表現もどこかおかしい。
「……はぁ……」
溜め息を一つ吐いて、飛鳥は仕方なく目の前に続く歩道を道なりに歩くことを再開した。
こんなことなら、大人しく自宅で仮眠でもしておけばよかった。
いや、そもそも全ての原因は氷室にあるに違いない。
氷室が電話に出さえすれば、飛鳥は少なくとも時間の潰し方に関しては困ることはなかったのだから。

うん、そうだ、そうに違いない。
悪いのは氷室だ、あのノッポメガネだ。
などと、飛鳥は自分の中で勝手に極論をつけて自己完結させてしまう。
投げ槍と言うか何と言うか、大雑把にもほどがある。

しかし改めてこうして真昼の街並みを歩いてみると、不思議と物珍しさを覚える景色は少なくなかった。
もともと人ごみが苦手で外出をあまりしなかった飛鳥にとって、こうしたいわゆる散歩のような時間というのは、ずいぶんと懐かしさを感じさせるものだ。
もっとも、『Ｒｉｎｇ』に関わってからは、大人しくしていることの方が自分の中の不自然の定義に変わっているのだが。
「あれ？　こんなところに本屋なんてあったんだ……」
交差点付近まで歩いて、飛鳥はその見慣れない書店の看板を見上げていた。
飛鳥の記憶の中では、この場所はもうずいぶんと長い間空き地のままだった。
いつ頃できたのだろうと、ぼんやりとそんなことを考えながら周囲の景色に目を向けた。
よく見ると、街のあちこちが飛鳥の中にある記憶とは少しずつ違った景色に変わっていた。
昔より道幅も広くなったような気がするし、何より車通りが激しくなっている。
昔……といっても、もう十年以上も昔のことだが、当時はもっと物静かな雰囲気のある場所だった……と、思う。
記憶なんてものは実に曖昧にできているものだ。
人間という生き物は特にそれの典型で、都合の悪い記憶を都合のいいように改竄することなんて、もはや日常茶飯事だ。
それは飛鳥も決して例外ではない。

「……この場所、こんなにうるさかったっけ……」
記憶を遡って、飛鳥は映像を重ね合わせる。
まだ自分が幼かった頃の同じ場所を、現在のものと並べてみる。
当然、ピタリと当てはまる部分など数えるほどしかない。
そんなのは当たり前だ。
人だろうと犬だろうと猫だろうと、生物は皆歳を取る。
それと同じことだ。
月日が流れれば、街も空も想い出も、その全てが形を変えていく。
未来永劫そのままであり続けるものなんて、それこそ珍しい。

昔懐かしい友達に出会って、誰もが十中八九こう言うだろう。
『お前、変わったな』
『昔と全然変わらないな』
などと。
変わることは自然なことで、それは別にいけないことではない。
だからといって変わらないこともそれと同様で、善悪や優劣の頓着なんてものはそこには存在しないはずだ。
けれど誰もが、変わったのは自分なのか、それとも自分の周囲の環境なのかを知らない。
それでもきっと、誰もが何もがどこかで変わっている。
変わらないものが何一つないなんてことは言わない。
けれど、変わらずにあり続けることは褒められることではないし、褒められるために変わらずにいるわけでもない。
自分は変わったのか、それとも変わっていないのか、どっちなんだろう？
と、そう考えた時点でその誰かはすでに変わっている。
なぜなら、昔はそんなことなど考えたことがなかったはずだからだ。
つまり、考え方が変わっているのだ。
それは目には見えないが、しかしれっきとした一つの変化だ。

だから、誰もが何もがきっとどこかで変わっている。
変わらないものなんて、きっと数えるほどしかありはしない。
それでも確かに、やはり変わらないものというのはあるわけで。
例えばそれは、記憶だったり。
例えばそれは、想い出だったり。
それらがどんな形で今の自分の中に残っていても、それらがすでに過ぎ去った過去のものである限り、事実を曲げることはできない。
どれだけ都合よく自分の中で書き換えても、上塗りしても。
文字は消えず、色は落ちない。
「……」

そんな分かりきったことを、どうして今頃になって思い出したのか。
交差点前に立ち尽くした飛鳥は、ぼんやりとその景色を眺めていた。
やがてその視線が、ふいに路肩に置かれたそれに気付く。
「……花？」
交差点の隅、電柱とガードレールの隙間に、いくつかの花束が供えられていた。
同じようにジュースの缶や、お菓子の袋、オモチャの類まで一緒に置かれている。
ああ、そうか。
飛鳥は思い出した。
今から約一ヶ月ほど前に起きた、この交差点での交通事故のことを。
ニュースで見た程度の情報だが、確かその事故で五歳の男の子が亡くなったはずだ。
原因は、その男の子が赤信号の横断歩道に飛び出したことらしい。
確か、手に持っていたボールか何かを落として、それを拾おうとして赤信号の中に飛び出してしまったとか。

「……そっか。この場所だったんだ」
供えられたそれらは、その男の子に向けられたものなのだろう。
よく見ると、花束の間に小さなゴムボールが一つ、色褪せて佇んでいた。
「……バカだなぁ」
と、気が付くと飛鳥は口に出していた。
「バカだよ、ホントに……」
それが死者を愚弄する言葉だと分かっていても、飛鳥の口は止まらない。
その表情が、どこか悲しみに満ち溢れていることを飛鳥自身は知らなかった。

「――ダメじゃん、死んじゃったら……それで、全部おしまいだもの……」

呟くように言って、その場にしゃがみこんでそっと両手を合わせて目を閉じた。
神様でも天使でもない飛鳥は、その男の子を天国に導いてあげることはできない。
そもそも、天国なんてあるわけがないと飛鳥は思っている。
死んだらそれでおしまい。
天国も地獄もあったもんじゃない。
皆等しく、土の中へと還るだけ。
……だけど、それでも。
今の飛鳥は、そんな天国とか地獄があってもおかしくないような、そんなファンタジーの世界の中に身を置いているから、少し分かる。
天国があればいいなぁと、少しだけ思ってしまう。
そして本当にそんなものがあるのなら、できればこの男の子をその場所に連れて行ってあげてほしい。
せめて、笑ってこの世界とお別れできるように。

「……ごめんね」
それだけ告げて、飛鳥は立ち上がる。
同時に、信号が変わった。
カッコーの鳴き声が響く中、飛鳥は無言で横断歩道を歩き始めた。

「コラ、逃げるな真吾！」
「ザケンナ。逃げるなといわれて逃げるのを止めるやつがどこにいる」
「口答えするな！　いいからアンタは言われたことやってりゃいいのよ！」
「ハン、んな義理はねーな。そんなにやりたきゃお前がやれよ」
「あー、もう。ああ言えばこう言う！　いいから黙って止まれってんのよ！」
「黙るのか止まるのか、どっちかにしやがれ」
「黙って止まれ！」
「……支離滅裂じゃねーか、おい……」
真昼の孤児院の中、二人分の大声と足音がドタバタギャーギャーとこだまする。
部屋を、廊下を、中庭を慌しく駆け抜けて、終わりの見えない鬼ごっこは続いていた。
「つーか、今日の当番はお前だろーが。ルールは守れよルールは」
「だーかーらー！　アンタが前の夜に当番一回サボってるから、今日で帳消しにしてやるって言ってるんでしょ！」
「だからって、何で今日なんだ？　別に今度でもいいだろーが」
「う、うるさい！　いいから黙って交代する！　アンタが逃げてる分だけ、皆のお昼ご飯が遠ざかっていくんだからね！」
「……逆ギレかよ。マジ最悪……」
などと愚痴をこぼしながら、真吾は相変わらず走る足を止めよう

とはしない。
とはいえ、いい加減にこうして逃げ回ることに疲れてきたのも事実だ。
全く、たかだか食事当番のことで何をこうムキになって追いかけられなくてはいけないのだろうか。
チラリと、真吾は走り続けながら背後を振り返る。
数メートルほどの距離を置いて、相変わらず彼女は……相庭優希（あいばゆうき）は追いかけてきていた。
しかし、真吾の目から見てもそろそろ息切れの具合が見て取れる。
そして案の定、次の廊下の曲がり角を待たずして優希はその場で立ち止まった。
「っ、ったく、昔っから逃げ足だけは成長を続けてるんだから……！」
忌々しそうにそう吐き捨てると、優希はその場に膝を折った。
「逃げ足だけとは心外だな。ちゃんと身も心も成長してるっつーの。ああ、万年チビ助のお前には成長って単語は辞書にねーんだっけ？」
真吾の視線の下で膝を付く優希は、年齢は真吾と同じ十六歳である。
だがしかし、それを補って余りある成長速度の遅さを露にしていた。
身長百七十八センチの真吾の長身に対して、優希の身長はズバリ、百四十九センチほどしかない。
これではまるで兄と妹のような対格差である。
「う、うるさい！　人の体のことをいちいち言うなんて、最低だぞ！」
「お前の声が一番ウルセーよ。目の前にいるんだ、怒鳴らなくても聞こえる」
「うー……こ、この大木！　アンタなんてあれよ、井戸の大木よ！」
「……井戸じゃなく、ウドだろ？　井戸に大木が生えるなんて、ど

んな場所だよそこは……」
オマケによく日本語の使い方を間違える。
おそらく、大樹に間違った日本語を吹き込んだのも優希の仕業に間違いないだろう。
「……もういい。アンタと話してると疲れてくるんだもん……」
「……一方的に追いかけられて、挙句に疲労まで俺のせいか？　やってらんねーぞ、ったく……」
舌打ちし、真吾は面倒くさそうにその場に座り込む。
中庭では多くの子供達が、今までの二人の騒ぎなど何でもないかのように賑やかに遊んでいた。
「……で、何なんだよ？」
「……何がよ？」
「とぼけんな。料理に関しては俺なんかよりお前のほうがずっとうまいだろ。それなのにここまで執拗に当番代われってことは、何か理由があんだろ？」
「……」
「何だよ？　ねーのか？　だとしたら俺、ずいぶんとムダなカロリー消費させられちまったワケか」
「……別に、そんなんじゃない」
「どんなんだよ？」
「……」
「……ったく、ダンマリかよ。やれやれだな……」
言って、真吾は再び面倒くさそうに立ち上がった。
「……下ごしらえはやってやる。あとはお前がやれよな」
そして実に面倒くさそうにそれだけ告げて、廊下の向こうへと歩いていった。
「あ……」
その背中に、優希は何か居痛そうな言葉を呑み込んで、そのまま無言で真吾のあとに続いた。

二人はその足で台所へとやってくる。
すると案の定、まな板の上には生の魚がさばかれずに置いたままの状態であった。
「……ったくよ、ガキじゃあるまいし……」
これまた面倒くさそうに吐き捨てて、真吾は調理台へと向かう。
「そ、そんなこと言ったって、仕方ないでしょ。私だって、好きでこんなんじゃ……」
「……アホ。逆だ逆」
「……何よ、逆って……」
ハァと、そこでまた真吾は大きく溜め息を吐いて、背中を向けたままで優希に告げた。
「――お前が生物さばくのができないことぐらい、こっちは百も承知なんだ。回りくどいことしねーでも、こんなもん頼まれりゃいくらでもやってやるよ」
「……」
言うなり、真吾は慣れた手つきで魚を三枚におろし、小骨や腸を取り除いていく。
その手つきは、素人なりには中々見事なものだ。
長年台所に立ち、手伝いと称しては料理の腕を磨いていったのも頷ける。
「おい？　聞いてんのか？」
「……え？　あ、う、うん……」
「……まぁいいや。ほれ、こっち終わったやつだから、お前も手伝え。早くしねーとガキどもがまたウルセーからな」
「うん……」
作業に没頭しているので、真吾は後ろを振り返らない。
仮にも包丁を扱う作業なのだから、当たり前といえば当たり前のことだ。

だからこそ、真吾は気付いていない。
自分の背後にいる優希が、どうしてかわずかばかりに頬を赤く染めていたことに。
「ほい、終わり。あとはできるんだろ？」
「あ、うん。大丈夫……」
「んじゃ、俺は先生呼んでくるから。後は任せた」
そう言って、真吾はその場をあとにして廊下に出る。
「あ……」
その背中に、優希は呼びかける。
「んだよ、まだ何かあんのか？」
「そ、そうじゃなくて……」
優希の口調がわずかに変わる。
「……そ、その……がと」
「あ？　聞こえねーって。何だ？」
「……な、何でもない！　早く、先生呼んできてよ……」
「何なんだ、一体……」
最後にまた愚痴をこぼし、真吾はそのまま廊下の奥へと向かっていった。

部屋の扉をノックする。
「先生ー。昼飯の準備できたぞー」
少し間を置いて、扉は内側から開いた。
「あら、もうそんな時間？　全然気が付かなかったわ」
出てきたのは、三十代後半から四十代前半の外見の女性だった。
彼女……久保平斎（くぼひらいつき）こそが、この孤児院、あじさい園の園長を務める人物である。
「急いで支度しないと……間に合うかしら」
「あー、いいっていいって。昼飯の支度は、優希がやってっから。先生は俺と一緒に皿でも並べてればいいんだよ」
一足先に廊下を歩き出す斎に続き、真吾が続く。

「あら？　でも確か、材料には生魚があったはずだけど……」
言いかけて、斎はチラリと真吾の顔を覗きこむ。
「……何？」
「……いいえ、何でもないわ。そうね。それじゃ、お皿でも並べてましょうか」
何が楽しいのか、斎は小さく微笑んでそのまま台所へと向かっていった。
「チッ、どいつもこいつも……」
真吾はつまらなそうに呟き、ふと中庭に視線を向け、そのまま空を見上げた。
快晴だった。
雲ひとつない秋晴れ。
意味は知らないが、これが天高く馬肥ゆる秋というやつなのかもしれない。
だが、しかしどうして……。
「……気味がワリーな……」
そんなことを思ってしまうのだろうか。
空はただどこまでも青く澄み渡っているだけだというのに……。
「……ま、気のせいならそれに越したことはねーよな」
それだけ呟くと、真吾も再び台所へと向かった。
フライのいい匂いが鼻に届いて、改めて真吾は自分の空腹加減を思い知らされた。
やっぱり季節は食欲の秋だろと、自分自身に言い聞かせた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２３：その目に映る全て

変化は文字通り、急激に訪れた。
「……っ？」
気のせいかと、僕は何度も首を傾げていた。
しかしそのたびに、体ではなく脳が直接訴えかけてくる。
それは目には見えない些細な変化であると同時に、しかし明らかに空気の色が変わっていくものだった。
平穏を保っていた世界の温度が、目には見えない何かをきっかけに急激に低下していく。
僕は体に寒気にも似た何かを覚え、同時にのどの奥はカラカラに乾ききってしまった。
間違いなく、周囲の空気は変わっていた。
具体的な表現は難しいが、それだけは間違いない。
わずかにこみ上げてくる吐き気は、今朝のものによく似ている。
僕はベッドの上から跳ね起きて、もたついた足取りで保健室の窓側へと歩み寄る。
そして窓越しの空を見上げる。
見て、すぐに異変に気付かされた。
空の色が、ある一部分だけ奇怪な色に変わり果てていた。
青く澄み渡る空の中でそこだけが、赤と青を幾重にも混ぜ合わせてグチャグチャにしたような紫の色に染まり変わっていた。
その色合いはまるで、さながらに混沌という言葉を連想させる。
うねりあい、歪みあいながらさらに混ざり合う赤と青。
もはやそこに鮮やかという表現はなく、ただただ不気味の一言に尽きる。
ゆっくりと渦を巻くその場所は、まるでその場所に周囲のあらゆるものを吸い込まんとしているようだった。

「何だ、あれ……」
僕は枯れた声で呟く。
見ているだけでさらに吐き気を後押しするようなその色合いは、今の僕にとって有害なものでしかない。
だというのに、僕はその光景からまるで目が離せないでいた。
誰に言われるわけでもなく、他ならぬ僕自身の意思で、僕はその光景を目に焼き付けていた。
いや、正確には目が離せなくなってしまったと言ったほうが正しいかもしれない。
なぜなら僕は、そこに不気味さ以外のもう一つのものを感じ取っていたからだ。
「……呼んでる」
もう一度僕は呟く。
混沌の色の空は、呼びかけるかのように告げていた。
ただ一言、我が下へ集えと。
「……」
それが本当にただの空耳だったのなら、僕はこうして跳ね起きたりはしなかっただろう。
つまりこれは、空耳なんかではない。
確かに、僕は呼ばれていた。
その、狂い始めた歯車の中心に向けて……。

今が授業中でよかったと思う。
僕は生まれて初めて、無断で学校を抜け出した。
と、今はそんな些細な罪悪感に囚われているような悠長な時間はない。
僕はただ走り続けていた。
その、混沌の空の真下に向かって。
ふいにこんなことが頭に思い浮かんだ。
幼かった頃、僕は空に浮かぶ月を目指してどこまでも続く道の上

をひたすらに走り続けたことがあった。
その頃の僕は、月が空に浮かんでいることは知っていても、手の届かないものだとは考えていなかった。
それは史実としては間違ってはいなく、確かに人類はその頃にもなれば月の地面を足で歩けていたのだから。
だからその当時の僕が目指していたのは、単純にあの月の真下に行ってみたいという、好奇心からの想いだったのだ。
しかし実際にはそんなことは叶うはずもなかった。
当然の話だ。
月は地球の衛星であり、肉眼では驚くほど低速で動いて見えるが、実際の速さは比べ物にならないほど高速だ。
少なくとも、幼い頃の僕の走る速度は月の公転速度に比べればそれこそまさしく月とスッポンである。
しかし今、僕がこうして追いかけている空は微動だにしない。
なので、走れば走っただけ、僕の目に映るその混沌の空は徐々に距離を縮めていく。
いや、そうではないかもしれない。
僕は今、間違いなく僕自身の意思で走っている。
だがそれは、僕がそう思い込んでいるだけの話なのかもしれない。
実際のところは、実は僕があの渦の中心に吸い込まれているだけなのではないだろうか？
などと、僕は走りながらにそんなことばかりを考えていた。
どう見ても真昼の空に不釣合いとしか思えないこの異変。
天変地異の始まりすら思わせると言っても過言ではないだろう。
しかし、そんな目に見えるこの異変に。
「……やっぱり、そうなんだ」
僕は走りながら、すれ違う人々に目を向ける。
それらの人々は、誰一人としてこの異変に気付いてはいなかった。
意識して空を見上げなくても、これだけの異変には誰かしら気付きそうなものだ。

なのに、誰も気付かない。
いや、そうではない。
見えていないのだ。
なぜなら、それらの人々は選ばれた者ではないから。
つまり、これは。

――能力者達にのみ伝える、何かのメッセージのようなものということになる。

「……」
僕はこの際、そのメッセージの内容に関してとやかく想像することはやめておいた。
どの道僕はもう、自らの足で渦の中心に向けて走っているのだ。
遅かれ早かれ、否が応でも真実を知る立場にある。
だったら、曖昧な想像の一つや二つなど、それこそ全くの無意味ではないか。
しかしそうと分かっていても、やはり気分はひどく落ち着かない。
それも当たり前のことだった。
能力者達にのみ知らせているであろうこの合図。
その時点で、すでにいい知らせであるという望みは果ててしまっているのだから。
恐らくは、これが……。

「――戦争の始まりを告げる、合図……」

それだけ呟いて、僕はまた足を動かした。
向かう場所は一つ。
この街の、ちょうど中心に当たる場所。
そこには、この街で一番大きな一本の木が聳え立っている。
僕はその木の名前も何も知らないけれど、まつわる話は少しだけ

耳にしたことがあった。
曰く。
その木はすでに樹齢を何万年と超え、今もなお生き続けているものなのだと。
街の誰もが知っている場所で、街の誰もがその木の名前を知らない。
だからいつしか、その木にはこんな名前が付いていた。

――永遠を超える大樹……永久の木、と。

近付くにつれて足取りが重苦しくなっていく。
体のあちこちに鉛の枷を埋め込まれているような、そんな感覚だった。
肩で息をしながら、ようやく僕はその場所へと辿り着いた。
見上げるその場所には、巨大な傘のように葉を生い茂らせる大木が聳え立っている。
真下から見上げたところで、幾重にも張り巡らされた枝と葉の向こうに空は見えない。
木の幹はそれこそ直径が一メートルに届くほどに太く、台風や嵐の夜でも倒れることはなかったというのも頷ける。
そんな場所には今、嫌な風が吹いていた。
湿った空気が充満して、鼻の奥にこびりつくような異臭を放っていた。
雨上がりのあの匂いと、それはよく似ている。
肌にまとわり付くような、ジットリとした空気。
そこにいるだけで吐き気を覚え始める匂い。
これだけ揃えば、その場所は十分異質である。
「……」
僕は今さらながらに周囲を見回すが、辺りにはまるで人の気配はない。

この場所は確かに人通りから少し外れた場所ではあるが、こんな風に誰一人として姿が見当たらないというのはどこかおかしい。
シンと静まり返る周囲。
ただ一人、僕だけがまるで取り残されたようにそこに佇んでいた。

「う……」
と、僕は一瞬よろめいた。
目の前の景色がわずかに霞んで見える。
まずいと、直感的に判断した。
こうしてこの場所にいるだけで、僕はまるで生命力を徐々に吸い取られているかのように力を失っていく。
立つ足に力が入らなくなり、足元がやけにふらつき始めた。
たまらず僕は、木の幹に背中を預けてそのままその場へと座り込んだ。
全身の力が抜けていくようだった。
いや、まさしくそうだった。
見上げればそこにあるはずの、しかし遮られて見えない空。
そこにあるものは、間違いなく異質なものだった。
本当に何もかもを吸い取るかのように渦を巻く空は、僕の体からありとあらゆる力を吸い取ろうとしているのかもしれない。
「……力、が……抜けて……」
もはや僕の体には立ち上がる力も満足には残されていなかった。
呼吸をするのも一苦労で、しかし吸い込んだ空気は毒のように重く苦しい。
「……く、そ……」
這いずるように手を伸ばし、木の幹にしがみつくようにして僕は体を持ち上げようとした。
しかしそれも虚しく、半分ほど持ち上がった僕の体はあえなくズルズルと地面に引きずられていく。
意識が遠ざかっていくのが分かる。

今朝と同じだった。
僕の体は糸の切れた操り人形のそれと同じで、自分の意思では何一つ満足にすることができなかった。
見えない重力に押し潰されるように、僕の体は沈んでいく。
底なしの沼の中にズブズブと、音も立てずに沈んでいく。
それでもどうにかしようと、僕はただ手を伸ばした。
掴むものなど何もないと知ってなお、そうすることしかできなかった。
しかしそれは、確かな感触だった。
人としての温もりを確かに持った、人の手の暖かさだった。

「――しっかりして。大丈夫ですか？」

その声は、まだ幼さを残す少年のものだった。
当然、僕はその声に聞き覚えなんてあるはずがなかった。
だけどどこうして手を握り返してもらっていることで、徐々に僕の意識は戻っていった。
「……え？」
僕が正面を見返すと、そこには一人の少年の姿があった。
パッと見て、歳は僕よりも年下。
恐らく中学生くらいだと思う。
どこにでもいるような普段着に身を包んだ少年は、しかしそれとは対照的に目立つほどの蒼い目をしていた。
「……君、は？」
「僕のことより、今は自分のことを心配してください。瘴気に当てられたみたいですね。少し、この場所から離れた方がいいです。立てますか？」
少年はそう言うと、握ったままだった僕の手を一度離し、僕の隣やってきて肩を抱えた。
「ご、ごめん……」

「いえ、気にしないでください。それに……」
言いかけて、一度少年は言葉を区切る。
そしてどうしてか少しだけ寂しそうに微笑んで、言葉を続けた。
「――僕もあなたも、同じみたいですからね。望みもしない力に選ばれた、星の下の命」
「……それじゃあ、君も……」
言いかけて、僕はまた吐き気を覚えた。
「とにかく、今はここから離れましょう。安心してください。少なくとも、今はまだあなたの敵ではありませんから」
「……うん」
言われるがままに肩を借りて、僕はおぼつかない足取りでその場をあとにした。
そのときに、わずかに振り返って空を見る。
そこに、あの混沌の色の空はどこにも広がっていなかった。
疑問を抱くよりも早く、僕はそのまま歩き去っていった。
僕はそのまま少年の肩を借り、最寄にある小さな公園までやってきていた。
ベンチに座る僕の体に、先ほどまでのような息苦しさや疲労の類はすでにほとんど消えかけている。
「どうぞ」
と、少年は手近にあった自販機から買ってきたスポーツドリンクを一つ、僕に向かって差し出した。
「あ、ありがとう……」
せっかくの好意を断るのも悪かったので、僕はそれを受け取っておく。
プシュと音を立て、ペットボトルの蓋を開ける。
一口ほど口に含むと、驚くほどに水分が足りていなかったことが

分かった。
「どうですか？　少しは具合の方も落ち着きましたか？」
「あ、うん。もう大丈夫。ありがとう、おかげで助かったよ」
僕がお礼を言うと、少年はどこか嬉しそうに微笑んだ。
その笑みは同性の僕でも素直にかわいいと思えるくらいに無垢なもので、少年の誠実さのようなものがにじみ出ていた。
「あの場所は、ずっと昔から瘴気が流れ出しやすい場所なんだそうです。普通に暮らしている分には誰もそのことに気付かないけど、僕達みたいな境遇の人間は、能力の覚醒と同時に副作用みたいな感じで、そういうのにひどく敏感になってしまうみたいです」
「……それじゃあ、やっぱり君も？」
うすうす分かっていたとはいえ、今の発言ではっきりした。
「……はい。僕もあなたと同じ、能力者の一人です」
少年は言い切った。

わずかに沈黙が流れ、その後に僕は聞いてみた。
「どうして、僕を助けてくれたの？」
「理由、ですか？」
「うん」
僕がそう聞くと、少年は少し戸惑ったような表情を見せた。
「いえ、その……理由らしい理由なんて、特になかったんですけど……ただ、あからさまに目の前で苦しんでいる人がいたら、助けるのが普通じゃないですか？」
「それは、そうなんだけど……君は、僕のことを能力者だって分かってたんでしょ？」
「いえ、最初は分かりませんでした。けど、実際に触れてみて分かったんです。独特の空気というか気配というか、体の中からそんな流れのようなものを感じましたから」
言って、少年は飲み物を一口口に含んだ。
「それに、僕は能力者同士で戦うっていうのは正直いい気分はしま

せん。それが仮に、遥か太古の昔から当たり前のように繰り返されてきたことであったとしても、僕は賛成できません。どう言葉を並べ立てたところで、結局は必ず犠牲が出てしまうのだから……」

少年は言い終えて、わずかに目を伏せた。

僕は思った。

この少年は、僕と少し似ている。

性格や態度とか、そんなものはどうでもよくて、ただ根底の部分では僕と同じ気持ちを持っていた。

「……ごめん。その、問い詰めたりするつもりじゃなかったんだ。ただ、ちょっと不思議に思ってさ」

「あ、いえ。気にしないでください。むしろ他にもいるであろう大多数の能力者から見れば、僕の言っているようなことこそが理想主義の甘えごとなんです。誰も傷つけずに終わらせられる戦争なんて、夢物語もいいところですから……」

寂しげに笑って、少年は言う。

「あの、僕も一つ聞いていいですか？」

「あ、うん。何？」

「その、どうしてあの木のある場所にいたんですか？」

「あの木の真上の空だけが、変な風になってたんだ。紫色に染まってて、こう渦を巻くように……」

「……空、ですか？」

言って、少年は空を見上げる。

しかし、今はもうどこの空にもそんな異変は見えはしない。

「……何もないように見えますけど」

「さっきまではそうだったんだ。ちょうど君が僕を助けてくれたときには、もう元に戻ってたんだ」

「そう、なんですか……」

どこか疑問の混じる声で少年は呟き、今はただ青く広がるだけの空を目で追いかけていた。

と、そこで僕はやや疑問に思った。

「あのさ、ちょっといい？」
「はい。何でしょう？」
「逆に聞くけど、どうして君はあの木の場所にいたの？　それって、僕と同じで空があんな風に変わったの見たからじゃ？」
「……えっと、その……すいませんが、その空が変な風に変わり始めたのって、いつ頃ですか？」
「……確か、午後一時過ぎくらいだったと思う」
僕は保健室の中で昼休み終了のチャイムの音を聞いており、そのほぼ直後にあのおかしな空は現れたのだ。
そこから逆算して考えると、その時間であっているはずだ。
「……あの木のある場所の真上の空が、変化していたんですか？」
「うん。だから僕は、それを不思議に思ってここまで……」
言いかけて、僕はふと思い当たる。
もしかして、これは……。
「……もしかして」
恐る恐る、僕は少年に声をかけた。
「……はい。多分、そうだと思います」
少年の肯定で、僕の予感はおかしな方向に的中した。

「――少なくとも僕は、そんな空を見てはいません」

僕の中で、また一つの疑問が増えた。
ということはつまり、あの空に起きた変化は、僕の目にしか映っていなかったということなのだろうか？
僕は最初あの空を見たとき、これはきっと能力者達の目にしかそうは見えないものなのだと、無意識のうちにそう考えてしまったけど、それは大きな勘違いだったのではないだろうか？
つまり、あの空の異変を目にすることができたのは僕だけであり。
あの木の場所に導かれたのもまた、僕一人だったということだろ

うか？
だとしたらそれは、一体何のために？
一体何が理由で？
疑問ばかりが重なっていく。
明確な答えなど、まるで最初からどこにも存在しないかのように。
僕と少年の間に、長い沈黙が降りた。
答えが見つからない。
全ての物事には結果があり、そうである以上は原因があるはずなのに。
では、今回の場合のそれらは一体何だ？
結果として、僕はこの場所に導かれた。
その原因は、あの異質な空だ。
原因も結果もはっきりとしている。
にもかかわらず、何だろう……この胸の内に残るモヤモヤは。
数式があり、答えがある。
それだけで数学は成り立つはずなのに、式の過程をまるで理解できていないかのよう。
答えが合っていればそれだけでいいはずなのに。
そしてようやく僕は思い知らされる。
迷路のような日々は、今になってようやく始まったのだということを……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２４：黒い少女と黒いウサギ

結局、僕が見たものは何だったのだろうか。
一時の幻か、それとも本当にあったことなのか。
考えながら歩くうちに、足は自然と街外れへと向かっていた。
今更だが、僕は学校を抜け出してこうして出歩いているため、服装はいつもの学校指定の制服のままだ。
平日の真昼にこの服装は嫌でも目立ちそうなものだが、すれ違う人も特に気にするような様子はない。
もしかしたら今頃、学校ではちょっとした騒ぎになっているかもしれない。
それはそれで後々に面倒なことになりそうだったが、今の僕はそこまで頭が回っていなかった。

あのあと公園で少年と別れ、僕はただ当てもなく道の上を歩いているだけだ。
一度氷室にも電話をしてみたのだが、どういうわけか通じなかった。
肝心なときに限って連絡が付かないというのは、どうにもじれったい気持ちになってくるものだ。
あれほど感じていた吐き気やめまいも、今はもう何も感じなくなっている。
それが僕の見たあの奇怪な色の空となんらかの関係があるのか、そうでないのか。
そこまでは僕にも何一つ分からないままだったが、僕が見たあの空は決して幻なんかじゃなかったと思う。
だとするとあの空は、僕にだけ見えたということなのだろうか？
ではそれは一体、何のために？

限られた存在にしか認識できないという事実は、それだけで何か意味を成しているようにも思える。

この場合は僕がその限られた存在というわけになるのだが、では果たして僕は特別な存在なのだろうか？

確かに僕は能力者として目覚め、『Ｒｉｎｇ』の所持者であるということについては特別な存在にもなるだろう。

しかしそれだったら、先ほどの少年はもちろん氷室や飛鳥、真吾だってそれの中に含まれるのではないだろうか？

彼らだって、あの奇怪な色の空を見れば何かあったのだろうかと思うはずだ。

実際僕は例えようのない何かを感じたから、あの木の場所までやってきたのだから。

だが実際はそうではなかった。

偶然といっていいかどうか分からないが、そこで出会った少年もまた能力者の一人であり、しかし僕が見たものを何一つとして見ていないと少年は言っていた。

これが何を示すことなのだろうか。

現時点で僕に理解できることは極端に少ない。

だからこそ氷室に相談しようと思ったのだが、結果は先の通りだ。

まぁ、しばらく時間を見て再度かけ直してみるべきだろう。

僕が今立たされている現状は、不安定すぎてひどく不気味だ。

戦争という見えない檻の中に僕達は閉じ込められているはずなのに、僕だけがその檻を自由に出入りしているかのような……。

「……何が起こってる？　いや、起ころうとしているのか……？」

呟いた声は低く、僕自身でさえ聞き取ることが困難なものだった。

こういうときに一人でいると、焦りや不安だけが胸の中を蔓延してくる。

せめて誰かにこのことを相談できればいいのだが……。

気が付けば僕は、下ばかり見て歩いていた。

だからだろう。
体に軽い衝撃が訪れ、直後にトスンという、そんな音が聞こえたことに気付くのに、僕はずいぶんと時間が掛かっていたに違いない。
「……え？」
ふと、僕は遅れた衝撃に気付いて顔を上げた。
そこは歩道のど真ん中であり、サッと周囲を見渡した限りでは特に何もおかしなものは見つけられない。
「今、何かにぶつかったような……」
もう一度注意深く、僕は周囲を見回した。
しかし何もない。
通行人はまばらで、道路も走る車の数も少ない。
と、そこでようやく僕はその視線に気付いた。
こともあろうか、その視線は僕の真下から見上げられていたものだった。
「……あ」
僕が下を見ると、そこには鎮座するようにしりもちをついたままの少女が、ただジッと無言で僕を見上げていた。
「……」
「……」
空気が重い。
しりもちをついたままの体勢で地面に座る少女は、その両腕の中に大事そうに黒いウサギのぬいぐるみを抱えていた。
それだけではない。
全身をフリルだらけの黒い服装に包み、頭にはカチューシャまでもが備え付けられている。
一見どこぞの人形にも見えるその格好は、俗に言うゴスロリ……ゴシックロリータのものに間違いなかった。
「……えっと、その、立てる？」
僕は自分がこの少女にぶつかってしまい、その衝撃で少女がしり

もちをついてしまったのだと理解し、そっと手を差し伸べてみた。
「……」
しかし、目下の少女からは何の反応もない。
視線だけはしっかりと僕の目を捉えているが、口は全く微動だにしなかった。
「……その、ごめん。考え事をして歩いてたから、君にぶつかっちゃったんだ。大丈夫？　怪我はない？」
再度僕は謝罪を含めて声をかける。
だが……。
「……」
少女は頑なに口を閉ざしたままだった。
表情一つ変わらず、それが怒っているのかそうでないのか僕には判別がつかなかった。
「……えーっと……」
ここまで来ると僕のほうが参ってしまう。
非があるのは間違いなく僕なので、ここで逆ギレでも起こせば僕は相当な悪者になってしまうことだろう。
もっともそんなことはないが、ただこうして沈黙を守られるだけでは話がどうにも進まない。

強行手段、というには程遠いものだったが、とりあえず僕は実力行使をすることにした。
しりもちをついたままの少女の両腕をそっと取り、抱き上げるように立たせた。
驚くほどに少女の体は軽く、力を入れた僕が逆にひっくり返ってしまいそうになったほどだ。
「よっ、と。本当にごめん。怪我とかしてないかな？」
「……」
しかし、相変わらずの沈黙。
困った。

人通りが少ないのが幸いしたようだが、これじゃ帰って罪悪感が募るばかりじゃないか。

ハァと、僕は息を殺すように小さく溜め息を吐き、ふと少女の抱きかかえる黒いウサギの人形に目を向けた。

人形というよりはぬいぐるみなわけだが、少女の両腕に抱きかかえられてなお、黒いウサギは手足をだらんとぶら下げている。

というかこのぬいぐるみ、大きさが少女の体の三分の二ほどもある。

真っ黒な全身に目の部分だけが赤く、両耳には対照的に白いリボンが一つずつ付けられていた。

口の部分はおなじみの×印。

刺繍されている糸は、この部分も白だった。

そのぬいぐるみの額の部分が、少し砂に汚れていた。

恐らく、僕とぶつかったときについてしまったものだろう。

なので、僕はその汚れを取り払おうと黒いウサギのぬいぐるみに手を伸ばし、額に触れてサッとその汚れを掃った。

その瞬間。

「――うんうん。見た目にたがわず誠実な心を持っているね、少年。オイラは嬉しいよ」

などと、そんな声が聞こえてきた。

「……え？」

ふと、どう考えても男の声だったそれに、僕は慌てて周囲を見回した。

しかし、そこには誰の姿もなく、ましてや声から察する少年のような人物はどこにも見当たらなかった。

「……今の、君？」

まさかとは思いながらも、僕は目の前の少女に聞いてみる。

しかし……。

「……」

またこれか……。

分かっていながら質問を投げる僕もどうかしているが、だって他に考えられないじゃないか。

もしかしたらこの少女、見た目がすごく女の子に見えるけど実は男の子でしたとか、そういうオチしか僕には想像がつかない。

「……あのさ」

何か喋ってくれないかと、僕が聞くよりも早く。

「何かな？　少年」

「……」

そんな声はまた、確かに僕の耳に届いていた。

しかも間違いなく、僕の目の前から聞こえていた。

オーケー、整理しよう。

声は僕の目の前から聞こえてきて、目の前には少女の姿しかない。

周囲に人影はなく、間違いなくこの場にいるのは僕と少女の二人だけだ。

少女が実は少年でしたというオチがあれば、僕は納得できる。

しかし、その少女の外見をしたこの子は、唇をピクリとさえ動かしてはいなかった。

では、今の少年の声は。

一体、どこの、誰が、口に出したものだというのか？

重くなった頭を支えるように、僕は額を手で抑えた。

何がどうなっているんだろう？

もしもこれが空耳や幻聴なのだとしたら、やはり先ほど見たあの奇怪な色の空も幻だったと断言せざるを得ない。

覚悟を決めて、僕はもう一度だけ同じ問いを繰り返してみることにする。

少女の目を真っ直ぐに見て、その唇が微動だにするかどうかさえも見逃さないように。

「……あの、さ……」
「うむ。何かな？　さっきからずっと、その続きを待っているんだが？」
「……」
結論。
少女は喋ってはいない。
唇は微動だにしなかった。
だが僕はそこで、一つの仮説に辿り着いた。
これはいわゆる腹話術というやつでは……。
「ああ、そうそう。付け加えておくが、これは腹話術なんかではないぞ」
「……」
あっさりと撤回された。
というか、何なんだこれは一体？
これが腹話術ではないのだとしたら、まるでこれではこの黒いウサギのぬいぐるみが一人で勝手に喋っているみたいじゃ……。
「……って、まさか……？」
「うん？　どうかしたか、少年？」
ぬいぐるみは当然、口を動かしたりはしない。
しかしもう、そうとしか考えられなかった。
さっきから僕と噛み合わない会話を繰り広げていたのは……。
目の前の少女ではなく。
目の前の少女のフリをした、実は少年でもなく。
目の前の少女が腹話術で喋らせていた、黒いウサギのぬいぐるみでもなく。
もっと、単純に……。
「――ぬ、ぬいぐるみが……喋った……？」
恐る恐る、僕はうわずった声でそう呟いた。

しかしそれとは反対に、黒いウサギは実に冷静にこう語る。
「ぬいぐるみとは失敬な。オイラにはちゃんと、主人が付けてくれたクロウサって名前があるんだ」
「ク、クロウサ……さん？」
「そう、クロウサ。黒いウサギだから、クロウサ。どうだ？　いい名前だろう」
と、どこか誇らしげな声でクロウサは言った。
しかしその表情はあくまでもぬいぐるみのそれであり、僕の目には喜怒哀楽の変化さえ見極めることはできなかった。
「さぁ、次は少年、君の番だ」
「……へ？　き、君の番って……何が？」
「鈍いぞ少年。オイラは自己紹介をしたんだから、次は君の番だろうと言っているのだ」
「……え？　あ、ああ、はい」
って、どうして僕はぬいぐるみ相手に敬語なんだ？
「えっと、大和……です。黒栖大和……」
「ヤマト、か。うん、いい響きだ。ヤマトはいい名前をもらったんだな」
「ど、どうも……」
何だろう、この不思議空間は……。
「あ、そうそう。ついでと言ってはなんだが、オイラの主人の名前も教えておくよ」
クロウサのその言葉に、僕は視線を少女へと戻す。
途端に、バッチリと目と目が合った。
というかこの少女、瞬きとかしたいのだろうか……。
「紹介しよう。オイラの主人、鈴代かりん（すずしろ　かりん）だ」
「……」
クロウサの言葉に、僕は何も返せなかった。
堂々と紹介を受けたにもかかわらず、かりんと呼ばれる少女は相変わらず無言のままだった。

「……あの、クロウサ……さん？」
「ん？　なんだいヤマト？」
「その……あなたのご主人、いつもこうなの？」
「こう、とは？」
「その、無口っていうか無表情というか……」
「ああ、なんだそのことか」
と、実に気楽そうにクロウサは言った。

「――かりんは人見知りで照れ屋なんだ。だから気にすることはないさ」

……いや、さっきからずっと見てますよ、僕のこと……。
何というか、まるで僕は観察されているような気分だった。
と、そんなときだった。
微かに動いたかりんの口を、僕は見逃さなかった。
視線は相変わらず僕に向けたまま、隙間ほどだけ開いたその口から、ようやくかりんは一つ目の言葉を吐き出した。
「――……あなたも。同じ。私と同じ」
言葉はもはや単語の集まりのように一つ一つで区切られ、まるで詩の朗読を聞いているようだった。
しかし思った以上に声は低く、それでいて女の子らしい繊細さも感じさせるものだった。
「……同じ？」
「ん？　どういうことだかりん？　あ、もしかして……」
言いかけて、クロウサは黙った。
表情の変化は見えないが、何となく驚いているような感じがした。
そしてかりんは、言葉を続けた。
そしてそれは、思いもよらない方向で交錯することになる。
「……同じ。私も持ってる。あなたも持ってる。望んだもの。望んでないもの。大きなもの」

「……え？」
その言葉に。
僕は一瞬だけ、寒気を覚えた。
さらに言葉は続く。

「――……力。大きな力。私は目覚めた。夢から覚めた。私は音。あなたは……何？」

それは。
「まさか、君も……？」
聞き間違えようのない、突然の告発。
目の前にいる寡黙な少女は、僕と同じ……能力者だった。
「……ねぇ？　あなたは何？　見せて」
その声色一つ変わらない言葉に。
ゾクリと、僕の背中に感じたことのないほどの寒気が走り出した。
かりんを中心に、周囲の空気が急速に変化を始める。
間違いない。
これは……。
「ダ、ダメだ！　こんなところで……！」
周囲に人はいなくても、ここは路上の真上に過ぎない。
こんな場所で能力を使いでもしたら、その反動で周囲はメチャクチャに吹き飛んでしまう。
「落ち着くのだ、かりん。こんなところで力を使うものではない」
「……クロウサ。黙ってて。これは。私の宿命」
クロウサの静止も聞かず、かりんはとうとう能力を開放した。
途端に、その場に場違いなメロディが流れ始める。
この曲は、確か……。
「……くるみ割り人形？」
と、僕がその曲名を呟いたところで、それが合図となった。
「……私と。戦って」

息つく間もなく、僕の目の前に現れたのは巨大な音の塊だった。
これがかりんの能力の武器なのだろうか。
目に見える形で具現されたそれは、音符や休符の様々な形を模し、そして僕に狙いを定めていた。
「……行くよ。ヤマト」
その名を呼び、人形を抱えていた両腕の片方を空にかざし、僕に向けて振り下ろした。

「――序曲。プロローグ」

具現化された無数の音符の中の一つ、ト音記号の形をしたそれが、かりんの言葉を合図にして僕目掛けて飛来する。
「く、そ……！」
また一つ、望んでもない戦いが始まった。
くるみ割り人形のメロディが流れる中、音と風はぶつかり合う。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２５：小さな小さな

「くっ！」

眼前に迫り来る巨大な音の塊。

その威圧感だけで、今にも僕は押し潰されそうになる。

唯一救いなのは、音ゆえにその攻撃の軌道は直線だったということだろうか。

僕は避けることだけに全神経を集中させ、地面を蹴ってその音の塊を回避した。

……はずだった。

「……それでは無理。フラット」

囁くような声でかりんがそう呟くと、変化は起こった。

「な……」

確かに一度は回避したはずの音の塊が、まるでリモコン操作で命令でも受け付けたかのような反応速度で向きを変え、再び僕の体を目掛けて襲い掛かってきた。

瞬間、僕は思った。

避けきれない。

そしてそれを後押しするかのように、直後に僕の体に大きな衝撃が激突し、僕の体は容易く吹き飛ばされた。

「……っ」

もはや悲鳴も出ない。

本来形の見えないはずである音の塊は、しかし貨物を満載にしたトラックのような重圧で僕に激突してきた。

衝撃で肺の中の空気が全て押し出され、痛みよりもまず息苦しさが僕の体を襲った。

緩やかな放物線を描きながら、僕の体は短い滞空時間を終えると、そのまま無機質なコンクリートの地面の上に壊れたオモチャのよう

に投げ出された。
落下の際に、左肩を強く打った。
そのときになってようやく、打ち付けた左肩の痛みと腹部を抉るような痛みが同時にこみ上げてきた。
「……が、あ……」
もはや呻き声すらまともに出すことはできない。
それでもよろよろと、僕はふらつく足でどうにか体を起こす。

――途端に僕は、その場に吐血した。

「ゲホッ……」
咳き込んだと同時に、口の中から真っ赤な血が吐き出された。
口の中に鉄の味が広がり、ひどくまずかった。
吐血の量そのものは大したものではないが、そもそも吐血する時点で相当の重症には違いない。
痛みのあまりに感覚では分からないが、肋骨の数本は骨折、あるいはヒビくらいは入っているのかもしれない。
「……っ、はぁ……」
口の中に広がる鉄の味を無理矢理飲み込んで、僕は口元を袖口で拭った。
白のワイシャツが、その部分だけ真っ赤に染まる。
背筋がゾッとするほどの寒気を感じたまま、しかし僕は視線を一点に見据えていた。
そこには、クロウサを抱きかかえたまま立ち尽くすかりんの姿がある。
その目に色はあるが、表情と感情は見て取れない。
まるで最初から何も見ていないかのように、その目はただ僕だけを見据えていた。
吹き飛ばされた僕とかりんの間には、十数メートルほどの距離があった。

この距離から見れば、やはりかりんのその姿はまるで人形のようにしか見えない。
だが、その力は外見とは比べ物にならないものだった。
あんなに小さな女の子でさえ、たったの一撃で僕に致命傷に十分な傷を負わせることができるのだから。
「……」
僕は何も喋らず、ただ呼吸を整えることだけに集中していた。
もっとも、今の僕には呼吸すらも苦痛でしかない。
酸素を肺の中の送り込み、二酸化炭素を吐き出すというその一連の行動だけで、僕の腹部はギシギシと音を上げ、痛みを強めていった。
こんな体では、もう満足に動くことさえも難しいだろう。
実際、こうしている間にも僕の体力は確実に消耗されている。
呼吸を整えて補給する体力よりも、傷の痛みで失われていく体力の方が明らかに多かった。

スッと、かりんは無表情のままで一歩僕のほうへ踏み出した。
しかし、それで互いの距離が急激に変わるわけではない。
だがそれでも、僕はわずかに体を引いていた。
「……どうして？」
と、ふいにかりんは呟いた。
凍えすぎる声は聞き取り辛かったが、不思議と僕の耳によく響いた。
「……どうして。力を。使わないの？」
その問いに、僕はどう答えればいいのだろうか。
正確に答えれば、今の僕は力を使わないのではなく、使いこなせるようになっていないということなのだが……。
いや、ダメだ。
どんな理由があろうと、自分がこれ以上不利な状況に追い詰められることだけは避けなくてはいけない。

もしもここでバカ正直に説明などすれば、それこそ殺してくれと言っているようなものだ。

「……戦いたく、ないから。それじゃ、理由には……ならないの？」

言葉一つ吐き出すたびに、僕の腹部に痛みが走る。

それでもどうにか、文章として伝わるであろう言葉が吐き出せた。

その言葉は僕の本当の気持ちだったが、半分は嘘だ。

正確には、本当が百パーセントに嘘が五十パーセント。

戦いたくないのは本当だ。

しかし、避けられない戦いなら僕は戦う。

今はただ、僕の力が戦うにまるで値しないという、それだけのことだ。

「……それは。間違い。力は。戦う。ためにある。ヤマトは。力の。意味を。間違えて。理解している」

たどたどしく語られる言葉。

だが、それはある意味では真実だった。

理由はどうあれ、確かに力そのものは戦うためにあるものだ。

それに関しては間違っていない。

ただそこに、もう一つの定義があるはずだ。

つまり、何のために戦うのか、ということだ。

「……かりんは、どうして戦うの？　その力は……君が望んだもの？」

「……この力は。私が。望んだ。ものじゃない。けれど。私は。戦う。その先に。願う場所が。あるから」

「……願う、場所？」

「……ある人が。教えてくれた。戦争に。勝つことは。願いが。叶うこと。どんな。望みも。現実となる。だから。私は。戦う」

「願いが……叶う？」

それは僕にとって初耳のことだった。

この能力者同士の戦争の終わりには、そんな得体の知れないもの

が用意されていたのか？
「……私には。望みがある。だから。私は。負けるわけには。いかない」
言って、再びかりんは片方の手を空に向けて掲げた。
それは、第二の攻撃の合図だった。
「……っ！」
しかし、その前触れを目で見ることはできても、僕にはもうそれを回避するだけの力が残されていなかった。
仮に百歩譲って回避できたとしても、先ほどのように攻撃の軌道が急激に変わったら、それでおしまいだ。
あの攻撃はまるで、追尾機能でもある誘導弾のようなものなのだ。
いや、能力である以上はそれよりも性質が悪い。
恐らく、どこまで逃げても追いかけてくる可能性も捨てきれないだろう。
「……今の。ヤマトじゃ。これは。避けれない。あなたは。ここで。脱落する」
掲げたその手に、音符の塊が集まる。
「……死にたくなければ。戦うこと。私は。きっと。手加減。できない」
相変わらずの場違いなメロディが耳に痛い。
流れるメロディの通り、僕はまるでくるみのように割られてしまうのだろう。
「……さっきより。強くやる。直撃は。ヤマトの。死を。意味する」
淡々と述べられる言葉。
しかし、そこに嘘は一つもない。
これだけの距離があるというのに、威圧感は先ほどにも増して大きくなっていた。
正真正銘、かりんは僕を殺すつもりでこの攻撃を放つつもりだ。
色のない表情でも、それだけははっきりと分かった。

「……かりん、君は、何を願うの？」
ふと、気付けば僕はそんなことを聞いていた。
まるで、死を目前にした最後の言葉であるかのように。
「……それを。聞いて。ヤマトは。どうするの？」
「……それは……」
僕は答えられなかった。
ただ、何となく気になっただけなのかもしれない。
こんな小さな子までが戦わなくてはならない、その理由に相当するほどの望みというものを、僕は知りたかったのかもしれない。
「……私の。望みは。一つだけ」
そこで初めて、かりんは瞬きをしたように見えた。
スッと目を閉じ、スッと開ける。
ただそれだけの動作が、やはりかりんが人形などではなく、れっきとした一人の人間であることを物語っていた。

「――……私は。私を。取り戻す」

それが、かりんの願い。
対して、僕の返答は必要なかった。
いや、すり暇がなかったと言い換えるべきだろう。
すでに、かりんの手から第二の攻撃は放たれていた。
目には見えないはずの音の塊が、場違いなメロディと共に僕に迫る。
その巨大な音の塊を前にして、僕はやけに冷静だった。
避けなければ、確実に死ぬ。
そんな攻撃を目の前にして、どうしてこんなにも気分は落ち着いているのだろう。
それはきっと、至極簡単なことだった。
なぜなら……。

――その攻撃が、あまりにも遅く見えていたから……。

直後、音の塊はコンクリートの地面を削り、吹き飛ぶ残骸を巻き込みながら、やがて音もなく消失した。

その軌道の中に、僕の姿はない。

「……」

かりんはただ、文字通り何もなくなったその地面の上を見ていた。

「……よかったのか？　かりんよ？」

腕の中で、クロウサが静かに、しかしどこかいたたまれないような口調で言った。

「……いいの。これが。宿命。私も。ヤマトも。そういう。運命の下に。生まれた。ただ。それだけ」

「……そうか。ならばオイラはもう何も言わないが……」

クロウサの声のトーンがわずかに落ちる。

こうして聞いていると、クロウサの方がずっと人間らしかった。

「……かりんよ、一つだけいいか？」

「……何？」

「実はな、言いにくいことなのだが……」

「……？」

クロウサは一瞬だけためらい、しかししぶしぶと続く言葉を吐き出した。

「かりん、後ろを見てみろ」

「……後ろ？　どうして……」

言われながら、かりんは背後を振り返る。

そしてそこで、初めて感情の変化とも思える驚きの表情を見せた。

「……嘘。どうして……」

「……言わない方が、よかったかもしれん……」

そう言って、クロウサはどこか疲れたように大きな耳を垂れた。

まぁ、かりんが驚くのも無理はないだろう。

――なぜなら、たった今確実に倒したであろう僕が、こうしてかりんの背後で無事に生存しているのだから。

「……どうして。絶対に。避けれる。はずがない」

「……僕だって、すっかり諦めかけてたよ」

僕は相変わらずの腹部の痛みに悩まされながら、それでもどうにか立っていられるだけの体力を取り戻していた。

これもひとえに、風の力のおかげだろうか。

「……どうやって。避けたの？　その傷じゃ。まともに。動けないはず。今だって。立っているのが。精一杯」

「そうだね。確かに、かりんの言うとおりだよ。だけど、別に僕自身はかりんの攻撃を自分から避ける必要なんて、なかったんだ」

「……？　どういう……」

言いかけて、かりんはハッと気付く。

「……そう。それが。ヤマトの。力。あなたの。それは。風の力」

「……そういうこと。だから僕は避けるんじゃなく、風に僕の体をここまで運ばせた。それだけだよ」

しかし正直、結果として助かったからいいものの、ずいぶんと分の悪い賭けだったのは確かだ。

理屈の上では通っていても、いざ行動に移すときは冷や汗ものだった。

音の塊が僕の動きを誘導するのは、あくまでもその僕の動きを、術者であるかりんがその目で見て、しかるのちに指示を与えているからだと僕は考えたのだ。

ということは、ようするに目で追えないほどの速度で回避すればいいだけのことである。

とはいえ、ここにも危険性はある。

僕がどれだけ素早く回避したとしても、かりんの目がそれを捉えてしまえばいいだけのことである。

ましてや、かりんは瞬き一つする素振りを見せなかった。
そんなのでは、簡単に見切られてしまうのではないだろうか？
そう思った僕は、急遽逆のことを考えた。
僕が動くのではなく、僕が動かされればいいのだ。
そうした結果として、とりあえず僕は一命をこうしてとりとめている。
危険な賭けだったとはいえ、今は生還を素直に喜ぶべきだろう。
「……どうして？」
「え？　何が？」
「……背後を。取ったのに。どうして。攻撃を。しなかったの？
チャンス。だったはず」
「……それは」
と、僕が言葉を続けるよりも早く、クロウサはその先を代弁した。
「それは違うぞ、かりん」
「……クロウサ？」
かりんは腕の中のクロウサの体の向きを変え、ちょうど正面から見合うように抱き直す。
「ヤマトはな、かりんを傷付けたくなかったんだ。いや、かりんに限らず、きっとどんな能力者相手にも同じことを思うんだろうな。ヤマトはそういうやつだ。ようするに、優しすぎるんだ」
「……クロウサの。言っていることは。私にも。分かる。ヤマトは。優しい」
言って、かりんは一度僕に視線を戻した。
「……けれど。それは。戦いの中では。不必要。優しさは。同時に。甘さでもある。捨て切れないのならば。勝つことは。できない」
それは正しい言葉だった。
優しさというものは誰が持っていても長所に聞こえるが、それは同時に短所でもあるからだ。
「だから、違うんだってかりん」

としかし、クロウサは言葉を続ける。
「そもそもヤマトは、戦う意思がほとんどないんだ。それなのに、この戦争には勝ち残るつもりでいる。つまり、誰も傷付けずに、この戦争を終わらせるつもりなんだよ」
「……クロウサ。冗談にしては。笑えない。そんなことは。できない。戦うことは。宿命であって。だからこそ。これは。戦争なの」
「分かってるよ、それくらい。でも、ヤマトは本気でそう思ってるんだ。そうだろう？」
話が僕に振られる。
僕は答えずに、しかし確かに首を縦に振って頷いた。
「……無理。そんなことは。不可能。それに。勝者のいない。戦争の最後では。叶う望みは。どこへ消えるの？」
「……そのことだけど、僕は戦争の勝者が望みを叶えられるなんて、全然知らなかったんだけど……」
「……本当？　では。ヤマトには。今。望みは。何もないの？」
「……あるとすれば、この戦争を終わらせること、かな。だけどこれ、無理な願いだよ。だって、願いを叶えるためには、まずこの戦争に勝ち残れってことなんでしょ？」
「……確かに。ヤマトの。願いは。矛盾している」
「そういうこと。だけど、僕の気持ちは変わらない。こんな戦争で誰かが誰かを傷付けたり殺したりなんて、僕は見たくもない」
「……」
もちろん、これはあくまでも僕の理想論に過ぎない。
理想だけに、実現は困難だということも十分分かっている。
だけどそれでも、やはり納得はいかない。
望まない力に右往左往しながら、誰かが誰かを傷付けて、そして知らずに自分と自分の大切なものまで傷付けるこんな戦争は、絶対にあってはいけないものだ。
「……私には。分からない。どれが正義で。どれが悪か。どちらもいない。けれど。どちらも誰の中にもいる」

「かりん……」
「……もういいだろう、かりんよ。少なくとも、ヤマトにはお前を傷付ける理由がないのは分かったのだ。それだけでも十分じゃないか」
「……そう、かもしれない。クロウサ。たまには。いいことを言う」
「何言ってるんだ。オイラはいつもいいことしか言わないさ」
そう言って、クロウサは誇らしげに笑ったように見えた。
そしてそれよりも何よりも……。
「……フフ」
と、そんな囁くほどに小さな声で、しかし確かに……。

——目の前の人形のようなかりんは、確かに小さく微笑んでいた。

……なんだ、ちゃんと笑えるんじゃないか。
その屈託のない笑顔を見て、僕は不思議と救われたような気がした。
少なくとも、この戦争はまだかりんから笑顔までもは奪い去ってはいないようだった。
できれば、この先も。
奪わないで欲しいと、僕は密かに願う。
まるで人形のように、小柄で無表情なかりん。
誰が望んで、こんな小さな子を争いの渦の中に放り込んだのだろうか。
例えそれが運命だとしても、僕はその運命を恨まずにはいられなかった。

「……ヤマト」
ふいに、僕は名前を呼ばれた。
「……何？」
「……傷は。大丈夫？　自分で。やっておいて。心配なんて。おか

しいけれど」
「……ん、多分、大丈夫だよ」
だが、それは僕の強がりだった。
今でも立っているのがやっとだし、痛みは引いても吐血を下のは紛れもない事実だ。
内臓のどこかしらに痛手を受けているのかもしれない。
とにもかくにも、放っておくわけにはいかないだろう。
「……」
としかし、かりんは怪訝そうな目でいつまでも僕を見上げていた。
「な、何？」
「……嘘。ヤマト。血を吐いてた。ただの怪我じゃ。済んでいない」
言うなり、かりんはそっとその小さな掌を伸ばし、僕の腹部にあてがった。
「……っ！」
それだけで、僕は膝が折れそうな激痛を覚えてしまう。
情けないが、本当に立っているのもやっとの状態だった。
「……やっぱり。ごめんなさい。私のせい。今。痛みを。取り除く」
「……かりん？」
今、何と言ったのだろう？
痛みを取り除くって、そんなことが……。
「まぁ。見ていなよヤマト」
と、クロウサの声に僕は言葉を呑み込んだ。
腹部に触れたかりんの小さな手が、妙に暖かく感じた。

「――……鎮魂歌。レクイエム」

そうかりんが呟くと、かりんの手を中心に淡い光が生まれた。
光は暖かく、しだいにそこには音が生まれる。
オルゴールのような静かな音で、聴く者を安らかにさせるようだった。

そしてあろうことか、見る見るうちに僕の腹部からは痛みが消え去っていった。
「……うわ」
僕は素直に驚いていた。
淡い光が消え、音が消える頃には、僕の体はすっかり痛みを訴えなくなっていた。
「……どう？　痛みは？」
「あ、うん。もう全然何ともない……」
「……そう。よかった」
「ありがとう、かりん」
「……お礼は。おかしい。その傷を。つけたのは。私」
「それでも、ありがとう」
「……ヤマトは。おかしい。けれど。優しい。暖かい。私が。探しているものと。少し。似ている」
その言葉の真意は、僕には分からなかった。
「……そっか」
だから今は、こうして相槌を打つだけ。
「……私は。いや。私も……」
何か言いたげに、かりんは僕のことを見上げる。

「――……私も。ヤマトとは。戦いたく。なくなった。不思議。こんなことは。今までには。思わなかったこと」

その何気ない言葉も、きっとかりんの本当の気持ちなのだろう。
僕は嬉しい反面、急にどこか恥ずかしくなってしまい、慌てて視線を逸らしていた。
そんな僕とかりんの様子を見ているクロウサだけが、声を出さずに笑っているような気がした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２６：途切れた記憶のカケラ

「……じゃあ。私。こっちだから」
並んで歩き始めた道の途中、二つ目の分かれ道で」かりんはそう言った。
「あ、途中まで送ろうか？」
「……いい。大丈夫。ヤマト。私だって。子供じゃない」
どう見ても外見は子供そのものなのだが、ここはあえて何も言わないでおこう。
「じゃあ、気をつけて」
「……うん」
それだけの簡単な会話を済ませて、僕とかりんはお互いに背を向けた。
「……あ」
としかし、後ろ髪を引くようなかりんの小さな呟きは、しっかりと僕の耳にも届いた。
僕は無言で背中を振り返る。
すると、案の定そこには同じように振り返って立ち止まるかりんの姿があった。
「どうかした？」
「……」
僕がそう声をかけても、かりんは最初黙ったままだった。
そのままわずかに沈黙が流れた頃、ようやくかりんはその小さな口を開いた。
「……ヤマト。また会える？」
「え……」
僕はその言葉に二つの意味を想像した。
「……それは、また僕と戦うってこと？　それとも、普通に……友

達同士で会うみたいにってこと？」
「……」
僕の問いに、かりんはすぐには答えなかった。
腕の中のクロウサにわずかばかりに視線を落とし、何やら言葉を探しているようだった。
「はぁ……。全く、かりんは舌足らずなんだからさぁ……」
そんな様子に見かねたのか、クロウサが溜め息を吐きながらそう言った。
「よし。オイラが代わりに言ってやるよ」
「……クロウサ」
かりんはそう呟くと、腕の中で抱いたクロウサの視線を僕の方へと向けた。

「すまないな、ヤマト。かりんは昔からこうなんだ。さっきも言っただろ？　人見知りで照れ屋なんだって」
「いや、別に気にしてないよ」
「ならよかった。で、まぁ簡単な話、かりんはもうヤマトとは戦いたくないわけだ。ってことは、ヤマトもかりんの言葉の意味は分かるだろ？」
「……じゃあ、後者の方でいいんだね？」
「もちろんさ。騙し討ちなんて卑怯な真似はしないし、オイラがかりんにさせないさ」
何となく偉そうに、しかしクロウサははっきりと言い切った。
もちろん、僕は最初からかりんの言葉の意味は理解していたつもりだった。
それでもやはり最低限の警戒を怠るわけにはいかず、念のため聞き返したわけだ。
「……うん、分かった」
「……本当？」
僕の言葉に、わずかに目を丸くしてかりんは聞き返す。

「うん」
「……ありがとう。ヤマト」
そう呟いたかりんは、小さくも確かに微笑んでいた。
「じゃあな、ヤマト。また会える日は。きっとそう遠くはないだろう。少なくとも、次に会うときは敵同士として争うことはないんだ。オイラもその日が来るのを、心待ちにするとするよ」
最後のクロウサがそう言って、かりんは音もなく静かに立ち去っていった。
道の向こうに、その小さな人影がさらに小さく遠ざかっていく。
結局、かりんはその後一度も振り返ることはなかった。
が、それでも僕は、その後姿が見えなくなるまでずっと、その場でその背中を見送っていた。

その後の僕は本当に大変だった。
まず、どうのか学校まで戻ってきたものはいいものの、時刻はもう間もなく放課後を迎えようというそんなときだった。
潜むように昇降口を抜け、静かに保健室の扉を開けたところで、僕の命運は尽きたのだろう。
「コラ！　一体どこへ抜け出してたの！」
開口一番、保険医の先生……生島晴香（いくしまはるか）は僕に怒鳴りつけた。
無理もない、それは当然のことだ。
具合が悪くて保健室で休んでいたのに、まだか学校を抜け出しているとは誰が思っただろうか。
「……すいません」
と、僕はただただ頭を下げて謝るばかりだった。
しかし、いくら謝ったところで先生のお説教の嵐は止まることを知らない。
小鳥のさえずりのようにそれはキリがなく、普段からたまってるストレスまでまとめて僕にぶつけられているんじゃないだろうかと思うほどのものだった。

「……ハァ、呆れた。まぁ、とりあえずは無事でよかったわ」
と、ようやく先生が息をついて椅子に腰掛けたのは、実に十五分にもわたる一方的な喋りが終わった頃だった。
「……すいません」
僕はその言葉の嵐でもはやコテンパンにされ、反論など一度もできなかった。
もっとも、この場合は学校を抜け出した僕が百パーセント悪いわけで、先生が怒り狂うのは当然のことなのだ。
それでもどうにか、僕が学校を抜け出していたことをごまかしきれたのは不幸中の幸いだった。
とりあえず僕は、昼休みの最中に保健室を抜け出し、今の今まで屋上で言え無理をしていたという言い訳で、先生は呆れながらもその事実を認めてくれた。
「何を考えてるのよ、君は。あんな真っ青な顔で朝にやってきたかと思えば、呑気に屋上で昼寝だなんて……」
「……はい」
「言ってみれば、今朝の君はまるで死人の顔してたわよ？　全く、あんな体で登校してくるのが不思議で仕方ないわ」
「……はい」
「このことを、担任の岡崎先生が知ったらどう思うでしょうね……」
「……勘弁してください」
「……」
「……」

結局その後も、二言三言僕と先生の小競り合いは続いた。
とはいえ、僕が一方的に謝罪を繰り返すばかりなのだが。
と、そんなときだった。
間合いを計ったかのように、ちょうどいいタイミングで授業終了を告げるチャイムの音が響いた。
思い返せば、結局僕は今日一日を一つの授業も受けずに過ごして

しまったことになる。
「……まぁいいわ。今回のことは内密にしておいてあげる。なんだかんだで、私も午後は来客の対応でまともに様子を見に来れなかったわけだしね。私にも多少の責任はあるわ」
「……すいませんでした、先生」
「いいわ。私も少し、強く言い過ぎたから。それで、どうなの？体の方は……」
「あ、はい。今はもうすっかり……」
そう答えかけて、僕は先生の目が見る見るうちに変わっていくのに気付いた。
その視線を追うと、先生の目は僕の左手の一点をジッと見つめていることが分かった。
そして僕は、今更ながらにハッとなった。
そうだ、今僕のワイシャツの袖口の部分には……。
「……あ、これはその……」
言って隠そうとしたところで、すでに手遅れだった。
目つきを真剣なものに変え、先生は僕の腕を引っ張るように取った。
「……どうしたの、これ？」
「……それは」
「……これ、血よね？」
僕の左腕を掴み上げ、先生は言った。
僕のワイシャツの左の袖口の部分には、今も真っ赤な血の跡がこびりついたままだった。
「……」
先生はそのまま無言で、僕の袖を捲り上げた。
しかし、僕の腕に傷跡などはあるはずもない。
当たり前だ。
この血は、僕の口から吐き出されたものを拭った、その後に付いたものなのだから。

「これ、どうしたの？」
「……それは、その……」
「……言いたくないの？　それとも、言えないの？」
「……すいません」
答えになっていなかったと、自分でもよく理解していた。
だから結局、僕の口から出る言葉は謝罪の言葉でしかなかった。
先生の目つきは真剣そのものだ。
本気で僕の身を案じてくれていることはよく分かる。
しかしそれでも、僕は本当の理由を話すことはできない。
いや、話したところで信じてもらえはしないだろう。
だって僕が話すことは、全部ファンタジーの世界の中のことなのだから。
それに、万が一信じてくれたとしても、それはそれでまた一人無関係な人を巻き込む結果に繋がってしまう。
それだけはできなかった。
「……本当に、何でもないんです。ほら、怪我だってしてないし……」
自分で言っていてわざとらしい。
嘘をつくということは、こんなにも息苦しいことだっただろうか。
「……」
先生は僕の目を見たまま、一言も発さなかった。
視線が痛い。
すぐにでも目を逸らしてしまいそうになるのを、僕はどうにか堪えていた。
僕の腕を掴む先生の手が、わずかに痛い。
それが先生の中の苛立ちなのか、それとも別の何かなのかまでは僕には分からない。
ただ、今確実に、僕は僕の身を案じてくれた人を騙している。
それにはちゃんとした理由があった。

巻き込みたくない、巻き込むわけにはいかないという理由が。

「……本当に、どこも怪我してないのね？」

しばらくして、先生はまるで自分自身に言い聞かせるような低い声で呟いた。

僕はその言葉に答えることができず、ただ黙って首を縦に振った。

「……そう」

それだけ言うと、先生はどこか悲しそうな寂しそうな、そんな曖昧な表情で僕の腕を掴む手を離した。

「……体が大丈夫なら、もう帰っていいわ。岡崎先生には、私から伝えておくから」

先生は背中越しにそう語る。

僕はなぜか、その場に置き去りにされてしまったような妙な感覚に囚われながらも、何も言い返すことはできなかった。

「……すいません、先生」

「……」

やはり、先生も何も言わなかった。

僕はさっきまで自分が寝ていたベッドの脇に置かれた鞄を手にして、すでに放課後の始まった校舎を後にすることにした。

窓越しにグラウンドを見ると、一足早く陸上部の面々がグラウンドの整備を行っていた。

「黒栖君」

僕が保健室を出ようとすると、先生が呼び止めた。

「はい……」

「言いたくないのなら、私はもう何も聞かない。けれど、ちゃんとお礼くらいは言っておくべきよ？」

「あ、はい。ありがとうございい……」

「違う違う。私じゃなくて」

「……え？」

「えって、君、本当に何も覚えてないの？」

「……あの、どういうことですか？」
僕は先生の言っている意味が分からなかった。
てっきり、私に感謝しなさいとか、そんな意味合いなのだと思ったのだが……。

「今朝、君が保健室に来たときに、一緒に付き添ってくれた子がいたじゃない。その子にお礼を言っておきなさいって、そういうことよ」
「……付き添ってくれた子？」
それは、一体、どういうことなのだろう？
「ま、待ってください先生。先生、さっき言ってたじゃないですか。僕は一人で保健室にやってきたって」
「保健室に入ってきたのは君一人よ。だから、その前の廊下までは、彼女と一緒だったじゃないの」
「……彼女？」
ふいに、僕は直感的にその人物を予想してしまう。
いや、まさかそんなはずは……。
「えーっと、彼女、名前何だっけな……あ、そうだそうだ。確か……」
その先に続く言葉を。
その人物の名前を。
僕は、聞いて、知って、いいのだろうか？
しかし僕の中の葛藤は虚しく、先生の一言でそれはまさしく現実となる。

「――坂城さんだっけ？　彼女、心配そうに君を見てたわよ？」

それは。
どんな音の始まりだったのだろうか。
また一つ、見えない波紋がどこまでもどこまでも広がり始めてい

た。

「だーっ！　クソッタレが！」

怒鳴り散らすように、竹上はデスクの上に書類の束を叩き付けた。

「物に当たらないでください、竹上さん」

「そうですよ警部。これじゃただの八つ当たりにしか見えませんよ」

「だーっ！　ウルセェ！　八つ当たりの一つもしたくなるってモンだろーが！」

静止する氷室と部下の万代の言葉をそのまま無視して、竹上は七本目のタバコに火を点けた。

いかにもイライラが納まってないといった感じで、竹上の目の前にある灰皿には吸殻が山のように積みあがっている。

かれこれもう三時間ほどになるだろうか。

ここ最近で急激に増え始めた原因不明の火災について、三人は待合室の一角で議論を繰り返していた。

世間一般では火の元の不始末が招いた事故と認識されているこれらの事件だったが、竹上はそうは思っていない。

物的な証拠仮名の一つないこの状況下で、憶測だけで事件の調査を進めるのは刑事として愚行かもしれないが、それで長年この職業を続けてきた竹上の経験と勘がこう言っている。

――この事件は、ただの火事ではなく放火である、と。

「やれやれ。ここまで何もないとすると、手詰まりも仕方ないですよ、竹上さん」

氷室は目を通していたファイルをデスクの上に戻し、嘆息と共にそう呟いた。

「アホぬかせ。仕方ないで済んだら警察はいらねーんだ」

煙を思いっきり吐きながら、竹上は言う。
「しかし警部、これは本当に放火なんでしょうかね？」
と、同席している万代も訝しげな表情で聞く。
「警部の言うとおり、仮にこれらの事件を放火だと仮定すると、今までの一連の火事は全部同一犯の犯行ということになるんでしょうか？」
「いえ、私はそれは違うと思います」
と、氷室が口を挟む。
「恐らくですが、竹上さんが放火と睨んでいる事件は最近の二つだけでしょう。つまり、森林公園の炎上と、その前のアパートの全焼事件です。そうですね、竹上さん？」
「……ああ、その通りだ」
氷室の問いに、竹上は一度だけつまらなそうに舌打ちしながら答える。
タバコの火を揉み消し、後ろ髪を掻き毟りながら竹上は続ける。
「あのアパート全焼事件以前の小さな火事は、ありゃ全部火の不始末とかボヤとか、ようするに人為的な行動で起こったもんじゃない。調査の結果にも頷ける。だがな、あのアパートの火事と森林公園の炎上。これだけは確実に放火だ。間違いない」
「……そりゃ、俺にだって森林公園の炎上は明らかに放火だってのは分かります。けど警部、どうしてアパート全焼事件まで、人為的なものだと断言できるんですか？」
「……万代、そもそも火事ってのはどうして起こるか、分かるか？」
「どうやってって……そりゃ、まずは火が点くことから始まるんじゃないですか？　それで、次々と燃えるものに広がっていって、最終的には家丸ごとが……ってな具合で」
「違う。もっと根本的な部分の問題だ」
「根本的って、どういう……」
「おいおい、小学生の理科だぞ……」
ウーンと、万代は首を傾げる。

代わりに答えたのは、隣に座る氷室だった。

「――酸素。もとい、ある程度乾いた状態の空気、ですね？」

「あ……」

と、言われて気が付いたのか、万代はやや目を丸くした。

「そういうことだ。まぁ、確かに雨が降ってても火事は起こるけどな。それにしたって、今回のは自然とはとても言い難い」

言うなり、竹上は一つのファイルを万代に手渡した。

「これは？」

「いいから、中見てみろ」

言われるがままに万代はファイルを開く。

が、そこにあった書類は万代の目には何がなんだか分からないものだった。

「……何ですか、これ？」

「アパートが全焼した事件のあった日の、一日の天気と気温の変化を表した表だ。気象庁に取り合って、作ってもらった」

「はぁ……」

万代はもう一度ファイルに目を落とす。

文字よりも図形が多く、グラフなどが多く使われていた。

「けど、これが何だって言うんですか？」

「アホ。何を聞いてたんだお前は。いいから黙って、そのグラフから事件当時の天気や湿度を読み取ってみろ」

食い入るように、万代はグラフに目を向ける。

正直、万代は理数的な分野が得意ではない。

自他共に認める根っからの文型だ。

しかしそれでも、万代はある事実に気付く。

あまりにもそれは分かりやすく、逆に見落としてしまいそうなほどだった。

「あ……警部、これってつまり……」
「そういうことだ」
氷室は万代からそのフィイルを拝借し、確認するかのように目を通した。
「……なるほど。竹上さんがこだわった理由も、これなら分かる気がしますね」
事件当時、時刻はちょうど夕方に差し掛かった頃だった。
そして同時にその頃、天気は急な下り坂に向かっていた。
雨に至ることはなかったものの、空は厚い雲で覆われ、気温もそれに伴って冷え込みを見せていたという。
通常であれば、空気が乾燥する季節は主に冬であり、その手前とも言うべき今の時期は、空気が乾燥していてもおかしくはない。
しかし、事件当時はたまたま天気が下り坂に入り、湿度も高くなっていたのだ。
湿度が上がれば、乾燥した空気も少なくなる。
つまり、自然と火の手は上がりにくくなるはずなのだ。
にもかかわらず、火災は起きた。
それも、アパートを丸々全焼させるほどの大火事だ。
これがボヤ程度のものだったら、竹上もここまで執拗に疑って掛かることはなかっただろう。
「全焼はいくらなんでもありえん。色々なデータを集計してみたが、あんだけ大きな火事には伸びないはずなんだ」
八本目のタバコに火を点けて、竹上は言う。
「まだ何ともいえない部分は多々あるが、少なくともこれは自然発生した火事じゃない。それだけは断言できる」
「……それは、そうですが……」
万代はまだ何か言いたそうだったが、明らかに機嫌の悪い竹上の横顔に怯え、それ以上口出しすることはなかった。
「……なぁ、名探偵よ」
「……ですから、その呼び方はやめてくれと何度も言ってるじゃな

いですか」
「お前さん、実はもう事件の手がかりの一つや二つは握ってるんじゃないのか？」
「……なぜですか？」
「……いや、根拠はないさ。ただ、お前さんがアパートを立ち去った後に言っていたあの言葉。もう火事は起きないと思うって、あの言葉だ。しかしその夜に、続けざまに今度は森林公園が炎上した。それがちょいと気になってな」
「……考えすぎですよ、竹上さん。私はただ、竹上さんがそこまで核心をついているのなら、もう事件は起こらないだろうと、そう思ったからああ言っただけのことです」
「……本当にそうか？」
「ええ、そうですよ」
「……」
「……」

そのまま氷室と竹上は、睨み合うというには毒のない視線同士でぶつかり合っていた。
その様子に、万代はどこか萎縮したように肩身の狭い思いをしていた。
「……まぁ、今はそのことはどうでもいいか」
半分も味わっていないタバコを揉み消して、竹上は席を立った。
「長く付き合わせたな。どうだ？　晩飯ぐらいなら奢るぞ？」
「いえ、今回は遠慮しておきます。酔いに任せて詰め寄られても困りますからね」
「チッ、勘がいいんだか、単に用心深いんだか」
「両方、ですよ。職業柄、どすいてもね。それは竹上さんも、お互い様でしょう？」
「……そいつは違いないな」
そう答えて、竹上は小さく笑った。

「おい、万代。名探偵さんを外まで送って差し上げろ」
「え？　ああ、は、はい」
やれやれと、氷室は口に出さずに溜め息をついた。
とにもかくにも、まだまだ調べることが多そうだ。
「一つでも厄介なのに、二つとはね。先行き不安ですよ、全く……」
「え？　どうかしましたか？」
「……いえ、何でもありません」
苦笑を噛み殺して、氷室は待合室を出た。
日暮れにはまだ早く、しかし昼はとっくに通り過ぎている曖昧な時刻だった。
街並みはどこか静かで、しかしいつもと何も変わらないままでいる。
逆に、それが嫌な空気だった。
何か起こるとすれば、こういうときに他ならないことを、氷室は本能的に感じ取っていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２７：水と炎

時間が昼と夜の間、即ち夕方に差し掛かった頃、再び街に異変は起きていた。

遠くの空が夕焼けの色にほんのりと染まり始めたばかりにもかかわらず、それはやけに奇麗な赤色に映えていた。

「あれは、まさか……？」

いち早く気付いたのは、雑踏の中を歩いていた氷室だった。

気付いたというよりは、気付かされたといった方が正しいだろう。

行き交う人波の中、急に辺りがざわつき始めたことに気付き、氷室は今まで歩いてきた背中を振り返ったのだ。

するとどうだ。

遠くの空が、夕焼けとはまた別の赤い色に包まれているではないか。

しかしそれは色と表現するにはただの赤なのに、決して現実的に生み出すことのできない緋色だった。

それは、揺らめく陽炎のような炎だった。

「……なんなんでしょうね、このタイミングは。明らかに作為的にも思えますが……」

立ち止まる人の中、氷室は小声で呟いた。

しかし、いつまでもこうして傍観者やその他大勢の一人として立ち尽くしているわけにもいかない。

ならば、やることは一つだ。

ここから事務所まで戻って車を走らせるよりも、急いで走った方が早いだろう。

そう判断するや否や、氷室は絶倒の中を掻き分けるようにして走り出した。

ずれかけた眼鏡を押し上げながら、氷室は目つきだけを鋭くして

夕暮れの街並みの中を逆走し始める。
「叩いても出てこない埃が、どうして自分から湧き出るんでしょうかね。全く、面倒なことこの上ない……」
愚痴を漏らすが、その足に衰えは見えない。
隙間を縫う糸のように、氷室はその場所へと向かって走り続ける。
目には見えない、しかし漠然とした気配がすでに伝わってきていた。
それはまるで蚊取り線香が虫を誘っているかのように、氷室もまたその場所へと誘われていたのかもしれない。

――まだ見ぬ、二つ目の炎が猛る場所へと。

街の北側には、今も天然の森林が姿を残している。
先日の火災で全焼してしまった森林公園も、もとはそこに小高い丘があって、そこを開拓して作られた場所だ。
その延長上にある場所が、この森林地帯だ。
森林といっても、規模はさして大きくはない。
雑木林といった方がしっくりくるだろうか。
この時期、季節は秋ということもあり、多くの木々は赤や黄色の葉をわずかばかりに残し、大半はすでに木の葉となって地面の上に積まれるように重なり落ちている。
一歩足を踏み入れれば、クシャクシャそんな音が周囲にこだまることだろう。
だが。
今だけに限定して言わせてもらうのならば、そんな音は一つとして聞こえるはずがなかった。
代わりに聞こえるのは、轟々と猛って燃える赤い炎のそれだけで、地面はすでに焼け野原のごとく、赤茶けた土色だけが肌を覗かせていた。
「……イイネェ、この感じ。俺様絶好調なんじゃねーの？」

クスクスと乾いた笑いを漏らすように、炎の中心でその男は笑っていた。

細身で長身、一見大人しそうに見える男だが、短く切られて逆立ったその髪の毛だけが、似合わない赤色に染まっている。

その笑い方は実に独特で、俗に言う微笑みといったようなかわいらしさは微塵も感じさせない。

男の笑いはすでに狂気を宿したそれに近く、笑うというよりは狂うという表現が近いだろう。

何もかもを見下したような卑下の笑みは、ただでさえ場違いな炎の中心で一際引き立っていた。

男の周囲で、また一本木が燃えて倒れる。

ズンという、木が地面へと崩れ落ちるその様を見て、男は何が楽しいのか、またその口元を歪んだ三日月のようにニィと歪めた。

「やっぱイイワ、この瞬間。命あるものが燃え尽きて消える瞬間、タマンネェ」

やはり男は狂っているのかもしれない。

一体どこに快感を覚えたのか、歪んだ笑みはよりいっそう引き立てられていく。

「全部崩れ落ちちまえ。何もかもな。ゼロになる瞬間ほど、気分のいいものはねーな」

そうしてまた小声ながらに高々と笑う。

男の視線の先で、次々と木々が焼かれ、そして地面にひれ伏すように倒れていく。

男はそこに、絶対的な強弱関係を覚えていた。

それは何も誇れることではない。

無抵抗な木を一方的に燃やすことなど、どこの誰にだって簡単にできることだ。

しかし、男はそこに快楽のような愉悦を覚えている。

無抵抗のものが自分の手でいいようにやられていくその様が、男にとって至福の時となっているのだろう。

だから、それだけに。
次に男の目の前で起こったことは、あまりにも予定外のことだったのかもしれない。
「……あ？」
変わり始めた周囲の空気に、男の笑い声は止まる。
気が付けば男の周囲は、真っ白な霧に包まれていた。
「……何だこりゃ？　煙か？　にしては、やけに湿気が多い……」
と、そこまで言いかけて、男は瞬時に理解した。
それと同時に、その霧はさらに変化を遂げる。

「――スプラッシュレイン」

その囁くような言葉に反応し、瞬く間にその霧は姿を変える。
気温が急激に冷え込み、霧だったそれらは冷却され、液体である水へと変化を遂げた。
そしてそれは、周囲の炎を丸ごと洗い流すかのようなその場限りの雨となり、瞬く間にその炎をかき消していった。
当然、降り注ぐ雨は男の頭上からも雨粒を降らせる。
なので、男の頭はその雨のせいでわずかに濡れていた。
しかしそれは、その能力を使った氷室とて同じことで、彼の長い髪はいくつもの雫を垂らしながら揺れていた。
「少しは頭が冷えましたか？　全く、自然破壊もほどほどにしてほしいものですね」
呆れ果て、見下げたような声色で氷室は呟いた。
言いながら、ポケットの中から取り出したハンカチで濡れた眼鏡の雫を拭き取り、再びかけなおす。
「……テメェ、ナニモンだ？」
対する男は、どこか憎々しげにそう吐き捨てた。
男にしてみれば、これ以上ない至福の時を台無しにされたのだから無理もないだろう。

しかし氷室に言わせれば、それは馬鹿げたもの以外のなにものでもない。
「化け物にでも見えますか？　まぁ、そう言われても完全否定はできませんがね。それに、それを言うならあなただって化け物でしょう」
「……なるほどな。そういうことかい」
「ご理解ありがとうございます。もっとも、ここまで言って理解できない程度の頭なら、最初から話になりませんけどね」
「ふざけやがって……」
男はそう呟くと、その身に宿る力の一部を解放した。
冷え切ったはずの空気が再び熱によって上昇し、雨上がりにも似たジメジメした空気が生まれた。

「――我に宿りし業火の名残よ。矛先に集いて全てを貫く刃とならん。灼熱の鼓動を我に伝えよ……」

歌うように紡がれる男の言葉。
立ち上る湯気のような熱が、しだいに目に映るほどの赤みを増していく。
やがてそれらは赤い蒸気となって、男の手の中に細く長い一本の棒のようなものを作り出す。
否、それはただの棒ではない。
それぞれの先端部分に赤銅色に染まる赤い刃を備えた、双極の槍だった。
先端部の切っ先からは、まるで毒を思わせるような赤い蒸気が絶え間なく噴出している。
それだけで不気味さを覚え、思わず後ずさりの一つでもしたくなるというものだ。
……普通の人間ならば、だが。
「ブッ殺す。蜂の巣より多い風穴開けてやるよ」

切っ先を氷室に定め、男は構えた。
「……やれやれ」
としかし、氷室は心底嫌そうに首を左右に振った。
「全く、そうしてこういうことになりますかね。本当に、運命の神というものがいるのならば、それを恨みたくなりますよ」
「ハン。今更命乞いか？　おせーよ、十年おせー。グダグダ言ってねーで、お前はただ黙って俺に貫かれてりゃいいんだよ」
「……命乞い？　誰が？　誰に？　勘違いもほどほどにしておいてほしいものですね」
「……何だと？」
「私が呆れているのは、あなたの持つその槍のことですよ。全く、どうしてこんなことに……」
ブツブツと、氷室は実に投げ槍に言葉を吐き捨てる。
そうこうしているうちにも、男の苛立ちはさらに募っていった。
「……面倒だ。さっさと死ね」
言うや否や、男は地面を蹴って氷室に向かって突進した。
その手に握る双極の槍の先端、赤く染まった刃の切っ先は、氷室の心臓のみに的を狙い定めた。
当たれば一撃、間違いなく即死を余儀なくされるその一撃。
「クタバレ！」
「ふぅ……気が進みませんが、まぁいいでしょう」
迫り来る切っ先を目の辺りにしながらも、氷室はまだそんなことを言っていた。
しかしそれは何でもない、ただの余裕であるということに。
「……？」
男はようやく気付かされることになる。

「――大いなる潮流よ。汚れなき清流よ。全ての源である命の流れよ。我はここに、海神の遺産をその手に……」

氷室の言葉が紡がれる。
その手の中で、空気中の水分が凝縮し、冷却され、水の球となり、さらに形を変えていく。
やがてそれは、細く長い一本の棒のようになり……。
「……なん、だと？」
そう吐き捨てるように呟いた男の目の前で、それはついに武器としての形を保った。

――それは、長い棒の先端が三つに分かれ、それぞれの切っ先に青い刃を備えた……三つ又の槍だった。

「チッ、テメェもその武器かよ！」
男の突き出した一撃は、しかし容易く氷室が迎え撃った矛先によって阻まれていた。
「だから、言ったじゃないですか」
再び深く溜め息を吐き出して、再度氷室は告げる。

「――本当、嫌になりますよ。格下相手に、同じ武器でやり合うことになるなんてね」

弾きあう槍と槍。
片方は赤、片方は青。
炎と水は交わることができず、ゆえに互いを弾きあう。
いや、仮に交わることができたとしても……。

――この二人が相容れる日など、何世紀先になってもやってくることはないだろう。

「ハン、言ってくれるじゃねーか……よっ！」
男は手にした槍で、的確に氷室の体のあらゆる箇所を狙い撃ちに

してくる。
そしてそのどれもが、当たれば即致命傷となるであろう、急所狙いのものばかりだった。
額、首筋、胸、脇腹、大腿部、そして足首。
ダーツの矢のような正確さで、しかも鋭く槍が突かれる。
だが、氷室はまるで鏡合わせにでもするかのように、一撃一撃をその手の三つ又の槍の切っ先でしっかりと受け止めていた。
ギィンと、そのたびに矛先同士がぶつかり合う音が共鳴する。
決して金属でできてはいないそれらがそんな音を上げるのは、それぞれが能力によってダイヤモンドにも勝るとも劣らないほどの強度でコーティングされているからだ。
そんな強度を持った、しかも楽々と人の体に突き刺せる刃先だ。
どこであろうと、傷を負えばそれだけで戦いは大きく不利な展開になることは間違いない。
それにしたって、本来槍を扱うには剣を扱うときに比較して三倍の力量を要するといわれている。
にもかかわらず、二人の競り合いは端から見れば見事の一言に尽きるものだった。
まるで剣舞ならぬ槍舞を見ているかのように、それほどまでに両者の技量は卓越されてものだった。

「クソが、性懲りもなく……」
しかし、明らかに舌打ちを繰り返しているのは男の方だった。
「おや？　どうしかしたか？」
対する氷室はまだまだ余裕があるといった感じで、一撃一撃を丁寧に捌いている。
いや、確かにそれは一見、捌いているようにも見えるかもしれない。
しかし実際はそうではない。
氷室はただ、相手の動きにあわせて自分の槍を突き出しているに

過ぎないのだ。
つまりこれは、言わば模擬戦のような合わせ打ちに他ならなかった。
氷室から言わせれば、相手の力量はともかくとして、技量はさほど驚異的なものではなかった。
どれほど強力な武器を持っていても、結局はそれが使いこなせなくては意味がないことと同じだ。
攻撃力百の武器を持てば持ち主の攻撃力が百上昇するのではない。
攻撃力百の武器を使いこなせるようになって初めて、持ち主の攻撃力が百上昇するのだ。
その部分の足し算を、この男はまるで分かっていなかった。
だから氷室の目には、男の攻撃の動きそのものは早く映っても、捌くことは造作もない。
ようするに、攻撃の軌道が単純なのだ。
もともと剣と違い、槍は突くという一点しか攻撃手段がないと断言してもいい武器だ。
ゆえに、その攻撃の軌道はどうしても直線にならざるを得ない。
とうことは、早い話が左右に動くだけでも回避することなど簡単なことだ。
だからそれを補うべく、突く速さが要求される。
それを踏まえて言うならば、男の攻撃の速さは申し分なかった。
しかし、それは逆に攻撃の単調化を意味することになる。
ある程度の速さに目が慣れてしまっていれば、それらを見切って先読みし、回避すること、もしくは合わせた軌道に同等量の攻撃を加えて威力を殺すことなど、さして難しいことではない。
なにしろ氷室は、常に音速を超える雷を放つ飛鳥と共にトレーニングを行っているわけで、そんなことを繰り返していれば、否が応でも動体視力というものは鍛えられてくるのだ。
「クソッ、どうして……」

「やれやれ。攻撃が単純なら、頭の中まで単純ですね。その程度の速さじゃ、音速はおろかバッティングセンターの百五十キロにも及びませんよ」
「クッ……」
捌き合いは続く。
だが、徐々にだが男の攻め手の数が減ってきている。
前述したとおり、槍を扱うには剣に比較して三倍の力量が必要となる。
つまりそれは、三倍の速度で体力を消耗するということに他ならない。
「……フン」
としかし、男はそこでまたあの嫌な笑みを浮かべた。
「ようするに、速さが足りねーってことか」
「今更分かっても、頭の悪さは隠し切れませんよ」
「……いいだろう」
と、ふいに男の笑みが別物に変わったのも氷室は察知した。
何かが来る。
「だったら、少しだけスピードアップしてやるよ」
「……何？」
と、氷室が呟いた直後。
男は一度その場から距離を取り、しかし切っ先を氷室へと向けたままの状態で姿勢を低く保った。
シンと、空気がわずかに静寂に包まれる。
半分ほど沈みかけている男の体は、石になったかのように硬直して動かない。
しかし切っ先と、その鋭い双眸がしっかりと氷室を捉えていた。
「……行くぞ。予告通り、スピードアップだ」
その言葉に、氷室もわずかに身構えた。
互いの距離は約七メートル。

男なら一足飛びで詰め寄れる間合いだろう。
氷室は今にでもくるであろうその一撃を警戒し、受けずに回避することを考えていた。
言うまでもないが、槍というものは一撃の攻撃力が強力である反面、剣などと違って防御面に関して性能が悪い。
いや、ないといっても過言ではない。
ゆえに、槍対槍の戦いに防御という概念は存在しない。
防御することは即ち相手の攻撃を体で受けることであり、それは敗北、あるいは死を意味することになる。
ゆえに、防御はない。
あるのは絶えず責め続けることと、相手の攻撃を見切ることのみ。
氷室は集中する。
仮にも相手は能力者、しかもまだ未知の力もあるかもしれない。
わざわざ宣言するほどのものなのだ、必殺と呼ぶに相応しいかそうでないかは別として、今までの競り合いのようにはいかないだろう。
集中するのは一点。
男の槍の、その切っ先のみ。
軌道さえ見切れば、目で見てからでも回避は十分に間に合うはずだ。
そして、長すぎるように思えた沈黙が終わる。
クシャ、と。
男の足が、地面の木の葉をわずかに踏みしめたその音を合図に……。

――男の姿は消えた。

「……っ！」

速いと、氷室が思うよりもさらに早く、男の体は氷室の目の前に沈んだままの体勢で移動していた。

その手に握られた槍の切っ先が、眼前に迫る。
赤い切っ先が、視界を全て埋め尽くす。
「死ね」
何でもないようなその一言の直後、男の槍は確かに、氷室の心臓をいとも容易く貫いた。
だが。
「……何？」
そこに、手ごたえと思える感触は何一つとして存在しなかった。
あるのは、まるで空気の塊を貫いたような、そんな余韻だけ。
いや、少し違う。
これはまるで……。

――液体の壁を突き破ったような……。

「……まさか」
そう男が思ったときには、すでに手遅れだった。
「……ですから」
男の背後で、そんな声が聞こえる。
振り返るよりも早く、男は理解した。
氷室は、背後にいると。
「バカな！　どうやって……」
「どうもこうもありませんよ」
つまらなそうに、しかし静かに氷室は告げる。
「まぁ、今の一撃に関しては驚きました。それは正直に認めましょう。ただ……」
言いながらも、氷室の手は止まらない。
三つ又の槍を構え、その切っ先を男に向ける。

「――それでも遅すぎます。私を貫きたいのなら、せめて音速を超えてからにしてください」

言って、氷室は振りかざした槍の切っ先を男に向けて振り下す。
……フリをして、がら空きになった男の脇腹目掛けて思いっきり蹴りを見舞った。
「ガハッ……」
空気の塊を吐きながら、男はゴロゴロと枯葉だらけの地面を転がっていった。
咳き込みながら、男は体を起こして呟いた。
「グ、クソ……一体、何をしやがった……」
「何を、とは？」
「……とぼけんな。あの速さなら、確実にお前は心臓を貫かれて終わりだったはずだ。事実、俺は確かにお前の体をこの槍で……」
言いかけて、男はまたしてもハッとなる。
「……そうか、テメェ、水使い……」
「ま、ご想像にお任せしますよ。敵の手の内を解説するほど、私も暇ではないのでね。それに……」
氷室は数歩ほど歩み寄り、倒れた男を見下ろしながら続ける。
「あなたにはまだ、少々聞きたいことがあるのでね。まずは私の質問に答えてもらいましょうか」
切っ先を脅し代わりに突きつけて、氷室は言う。
「……っ、ハン。ほとほと甘いな、お前。そんなんじゃ、いつか寝首をかかれるぜ」
「心配には及びません。少なくとも、あなたにそんな日はきませんから」
「……そうかい。だったら……」
と、男は諦めたかのように一度だけ目を閉じ、そして次の瞬間に重いもよらない行動に出た。
「――その日が来るのを待っててもらおうか！」

叫ぶなり、男はあろうことか、素手で氷室の槍の切っ先にその手をあてがった。
「な……」
理解を超えた行動に、わずかばかり氷室に隙が生まれる。
その隙を男は見逃さなかった。
瞬く間に周囲は白い霧に包まれ、一寸先の景色さえも見えなくなってしまっていた。
「……っ、しまった。水蒸気か……！」
男はその手に熱を集中させ、氷室の武器である槍そのものに熱を加え、蒸気を発生させたのだ。
武器とはいえ、それは水の力の集合体……言わば水そのものだ。
当然、水は熱を加えればお湯になるし、さらに加熱すれば水蒸気へと気化してしまう。
まるで間欠泉さながらの蒸気の壁に、ほとんどゼロだった二人の距離はそれさえも確認できなくなってしまう。
それよりもまずは、この蒸気の壁に乗じて男が攻撃を加えてくることも警戒しなくてはいけない。
自然と氷室は、男よりも周囲に注意力をはらう羽目になってしまう。
「安心しろよ。今はまだ殺さない。お前は必ず、俺が全能力を開放したそのときに殺してやる。その日が来るのを、待っててくれよな？」
遠ざかる男の声に、氷室は警戒を解く。
男はもうこの場から離れたようだ。
「……逃がしましたか。失態ですね」
呟いて、蒸気の壁を振り払うように三つ又の槍を振った。
それだけで蒸気は冷却され、小さな氷の粒となってパラパラと地面へ落下した。
もとの雑木林の中に、男の姿はもうどこにもなかった。
「……」

氷室は無言でずれかけた眼鏡を押し上げ、その手をそのまま胸へと当てた。
そこには、衣服の上に小さな穴が開いていた。
ちょうど心臓の真上の部分である。
それだけではない。
氷室の左胸には、本当に小さな、それこそ針で刺したくらいの小さな傷が残っていた。
そこからわずかに血が流れ出してはいるが、痛みはないに等しかった。
「……音速？　冗談じゃない」
氷室は傷口を眺めながら呟く。

「――さっきの一撃。あれは、飛鳥の雷撃と互角……いや、もしかしたらそれ以上の……」

ツーと、氷室の首筋を汗が伝う。
冷や汗などかいたのは、何年ぶりだろうか。
とにもかくにも、一難は去った。
それを喜ぶべきなのか、どうなのか。
「……やれやれ」
と、それだけの言葉を吐き捨てて、氷室はもと来た道を歩き始めた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２８：急襲の大地

道はどこまでも永遠に続くものではない。
もちろん、中には永遠と思えるくらいに遠く長く続く道もあるだろう。
とはいえ、大抵の道はいつしか必ず行き止まりという壁にぶつかってしまうわけで……。
「……行き止まり、か」
それは飛鳥も例外ではなかった。
市の中心を通る道路沿いに道を歩くこと約二時間。
その間、一体自分が何をぼんやりと考えていたのかさえもあまりよく覚えてはいない。
ただ自然と足が向いた方向に歩いていただけ。
そこに理由もなければ、目的もなかった。
しかしこうして立ち止まってみると、周囲の景色はおよそ見覚えのないものばかりで囲まれている。
建物はおろか、家屋すらまばらで、だだっ広いだけの空き地の中心のような場所だった。
かつては広い草原のような場所だったのかもしれないが、今ではその面影もほとんど残ってはいなかった。
地肌が覗く地面は荒れ果てた荒野のようで、雑草さえもまばらにしか生え残っていない。
それでもところどころに草の緑が残るので、砂漠と呼ぶにはまだ早い気がした。
飛鳥はその空き地の真ん中で、暮れかけていく空の色をぼんやりと眺めていた。
まだ空は明るく、遥か遠くの空の向こうだけが、ほんのりと淡いオレンジ色に染まりかけていた。

真上の空はまだまだ青く、白い雲ものんびりと流れている。
空を飛ぶ鳥達の姿はなかったが、秋晴れの気持ちのいい青天だ。
しかしあえて文句を言わせてもらうならば、それはたった一つだ。

「うー……寒い」

徐々にだが、気温が冷え込んできていた。
日中の暖かさを考慮して、薄着で外出した飛鳥としてはこれは堪える。

しだいに風も出てきたようで、飛鳥の足元から救い上げるように、秋の冷たい木枯らしがヒュウヒュウと鳴いていた。

「上着、持ってくればよかったかな……」

そうは言うが、時はすでに遅い。
短めのスカートが災いして、冷たい風が素肌を直接打ち付ける。
痛みはないが、痺れるようなこの感覚が飛鳥は苦手だった。
両手で自分の肩を抱き寄せながら、飛鳥は身震いする。
それはそうと、どうして自分はこんな何もない場所に突っ立っているんだろう？

と、内心で呟いたその問いに自分で答えることができなかった。
答えはすぐ傍にあるような気がするのに、いくら手探りで手繰り寄せても見つからない。

入り口から出口までが一本の直線でできている、そんな迷路で迷ってしまったかのよう。
ただ真っ直ぐ歩けば、迷わずに出口に辿り着けるというのに……。

「迷路、か……私も、とっくに迷い込んでるのかなぁ……」

言って、飛鳥は手近にポツンと置き去りにされた小さな岩に腰掛けた。

ここから眺める景色は初めて見るものなのに、なぜか懐かしさのようなものを覚えてしまう。

いつか、どこかで見た、名前も知らない場所を見ているような。
だけどそれは、ここだけどここじゃない場所。

似ているけど違う。
違っているのは何？

それは簡単。
なぜなら、そのよく似た景色を見たその日、飛鳥は一人ではなかったから。
隣にもう一人、手を繋いでくれた人がいた。
暑い、夏の日だったともう。
幼い頃の自分。
手を引かれ、同じ道の上を歩いてやってきた。
二人分の影が前に伸びて、いくら追いかけても追いつけない。
太陽の熱を反射するアスファルト。
ジリジリと、陽炎が揺れていた。
見上げればそこには、懐かしい面影。
麦藁帽子のリボンが風に揺れて、小さなこいのぼりのようにはためいていた。
そこから覗く笑顔。
暖かくて、優しくて、それでいて心強かった。
だけどそれはもう、今は遠い夏の日の最後の記憶。
一緒に手を繋いで歩いたその人は、もう、いない。
この世界のどこを探しても、決して見つかることはない。
その人は、終らない旅に出かけてしまった。
最後の最後に、たった一言。
ごめんね、と。
そんな、望んでもないメッセージだけを残して。
「……」
時間だけがさらに過ぎていった。
飛鳥の体はすっかり冷えてしまっていたが、しかしそれはまるで冷たさを感じさせなかった。
「……お母さん」

ふいに呟く。
その声は、木枯らしに乗ってどこかへと運ばれていくのだろうか。
「――どうして、死んじゃったの……？」
そしてまた、冷たい風が吹いた。
身を裂くようなそれは、しかし痛みを感じさせることはなかった。
そんな痛みなどなくても、飛鳥の心はもうとっくの昔に傷だらけだったから。
最愛の人が死んでしまった、あの夏の終わりの日。
正真正銘、飛鳥は一人ぼっちになった。
飛鳥にとって母親が全てで、世界そのものだった。
例えるならそれは、カチコチと時を刻む大きな時計。
クルクル回って、新しい時を刻む。
チク、タク、チク、タク……。
共に歩んでいける時間は、まだまだあったはずだった。
秒針がゆっくりと、しかし確実に時を刻みつけるように。
二人で歩いていける時間は、それこそ永遠のように続くのだと信じてやまなかった。
……しかし。
時計はその日、突然に動きを止めた。
電池が切れたわけでもなく、ネジが止まったわけでもない。
その時計は、時計としての生涯をそこで終えてしまったのだ。
時計の仕事は時を刻むこと。
時が刻めなくなったら、その時計はそこでおしまい。
新しい時代の時を刻むのは、次の時計の役目だから。
だから今は、飛鳥が時計。
自分自身の時間を刻んでいく。
母親が死んで、もう十二年が経った。

どうにかやってはいる。
辛いことも多かったけど、同じくらいに楽しいこともあった。
この街は好きだし、一人でいることも何も苦痛には感じない。
……だけど、それでも。
飛鳥の時間は、もうずっとあの日から止まったままだった。
時間は確かに刻んでいる。
だけどそれは、仮初のものに過ぎない。
季節が変わるのと同じで、放っておいても時間は流れていくものだから。
だから本当の飛鳥の時間は、その辺に置き去りのまま。
何も変わってなどいない。
あの夏の終わりの日、握り締めた手が逃げるように抜け落ちたその日から、今までずっと止まったまま。
「……もし本当に、願いが叶うなら」
俯いて、飛鳥は呟く。
「私は、お母さんを取り戻してもいいのかな？　それを願っても、いいのかな……？」
誰かに向けたその問いは、しかし誰にも届くことはなく。
答えの代わりに、木枯らしだけが悲しげな声で鳴いていた。
「……」
日が暮れ始めた。
飛鳥は岩から腰を上げた。
うっすらとオレンジ色に染まり始めた地面に、飛鳥の影がやけに長く伸びていた。
そこにあるのは、あの日と同じ自分の影。
走っても追いつけない、過去の名残。
その、隣に。
「……え？」
飛鳥は気付いた。

――その隣に伸びている、もう一人分の影があるということに。

慌てて飛鳥は背後を振り返った。

するとそこには、銀色に輝く長い髪の毛を風に揺らす、一人の女性の姿があった。

どういうわけか、女性はその手に何か長い棒のようなものを持っていた。

長い紐のようなものでグルグル巻きにされ、何であるかまでは一目では分からなかった。

振り向いた飛鳥は、その女性とバッチリ目が合ってしまう。

その女性……いや、歳で言うなら恐らくまだ十代後半、つまり飛鳥と大きな差はないはずだろう。

その割りに、女性は端正な顔立ちのせいかひどく大人びて見える。

同じ女性の飛鳥が見ても、素直に奇麗だと思えるくらいに美しい女性だった。

「……」

「……」

向かい合う二人は、しかしどちらからも話しかけることはない。

互いに初対面で面識などあるはずもないのだから、それは至極当然のことだった。

しかしそれでも、まるで見詰め合うかのようにこうして視線を交わしているというのはどうにも気分がよくない。

向こうが声をかけないのなら、こちらから一声かけてみればいいだけの話だった。

「……あの」

どうかしましたかと続けるよりも早く、その女性……いや、少女は唇を動かした。

「――私は天宮蓮華（あまみやれんげ）。大地の精霊、ガイアと契約を果たした能力者の一人」

「……は？」

と、飛鳥はあまりに突発的なその言葉に思わず固まってしまった。

……今、何と言ったのだろう？

何度も胸の中でその言葉を繰り返した。

しかし、何度自分の耳を疑ったところで、答えはいつも同じもの。

つまり。

彼女は能力者であり、大地の精霊というその言葉から察するに、

属性は恐らく土。

いや、そんなことよりも。

一体全体、どうして彼女はそんなことをわざわざ公にしてしまっているのだろうか？

「ちょ、ちょっと待って。え？　何？　能力者？　どうしてここに……」

それでも頭の混乱は収まらず、飛鳥は一人でパニック状態に陥ってしまった。

「私は名乗った。さぁ、お前も名乗れ」

としかし、飛鳥の質問などどこ吹く風といった感じで、蓮華はマイペースに話を進めようとする。

「だから、ちょっと待ってって。大体どうして、能力者が私に一体何の……」

何の用、とは聞けなかった。

それは聞くまでもない愚問だったからだ。

能力者が能力者と出会うという、ただそれだけのことで、それは……。

――戦いの合図に他ならない。

「名乗らないというのなら、それまで。戦いの中で吐かせてやる」

言うなり、蓮華はその手に握っていた長い棒のようなものに巻か

れている布をシュルシュルと解いていく。
どこまで長いんだというくらいに解かれた布の中からは、黒塗りの鞘に赤い柄を見せる日本刀が納められていた。
パッと見た感じでも、それがオモチャの類ではない、紛れもない真剣だということはすぐに分かった。
「ちょ、ちょっと！　アンタ、何考えてんの？」
「問答無用。行くぞ！」
本当に問答無用で、蓮華は瞬く間に剣を構えて飛鳥に向かって走り出していた。
同時に、カチャリと鍔元が鳴る音がした。
「人の話を……」
さすがに真剣を抜き出されてまで悠長に語らいを続ける余裕などはない。
飛鳥は頭を切り替え、瞬時に戦闘体制へと入る。
その両手に、青白く迸る雷光を握り、抜き出された白刃を迎え撃つ。
「最後まで聞けっての！」
後ろに飛び退きながら、飛鳥は三本の雷撃の矢を放つ。
蓮華の走る速さを考えれば、正面と左右の三方向同時攻撃ですでに逃げ道はない。
最低でも一発は、体のどこかの命中を余儀なくされる。
……はずだった。
文字通り、目にも留まらぬ速さで蓮華は抜刀した。
その、抜刀の圧力だけで……。
「な……」
飛鳥の雷撃の矢は、薙ぎ払われたように散っていった。
そして驚愕の事実はまだ続く。
「その程度か、雷使い」
「……っ！」
その一瞬の間に、蓮華はすでに飛鳥の背後へと回りこみ、無防備

な背中目掛けて剣を振り上げていた。
速い。
そう思って、口にするそれよりもさらに早く、蓮華は静かすぎり声色で囁くように告げた。
「――名刀、天地（あめつち）の露と消えるがいい……」
そして、剣は振り下ろされる。
その名と共に。

「――弐式・地裂閃（ちれつせん）」

体を縦に両断する勢いの一撃。
受け止めることはできず、しかも背後からの決定的とも言える位置取り。
逃げ場は、ない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２９：女心と秋の空

眼前には白刃が迫っていた。
もはやそれは身体能力の反射神経をどう駆使したところで、回避は絶望的なものだ。
「……冗談じゃ」
しかし、飛鳥はあえて避けることを捨てて蓮華の体に向き直る。
「ないっての！」
そして、両手に集めた雷撃を思いっきり蓮華の腹部目掛けて撃ち付けた。
バチバチと青白い閃光が瞬いて、一瞬だけ目の前が明るくなる。
「うっ……」
目くらましにはほど遠いが、一瞬の隙を作るにはそれで十分だった。
わずかに目を逸らしたその隙に、飛鳥は急いで距離を取る。
剣を使う近距離戦の相手には、遠距離戦を得意とする飛鳥では間合いを開かなくては不利になる一方だ。
幸い今の一撃は、ある種のスタンガンのような役目も果たしている。
微弱ではあるが、飛鳥の体は雷撃の影響で痺れていた。
追撃の手が鈍り、飛鳥はその時間を利用して十分な距離を保つことができる。
「……！」
しかしそれでも、油断をするわけにはいかない。
今の短い攻防の中で分かったことは、蓮華の身体能力の高さだった。
何の力も借りず、生身の状態であれだけの敏捷性は脅威に値する。
恐らく、剣術に置いての心構えがあるのだろう。

そうでなくては、あれだけの速さで剣を振るうことなど素人には到底できない芸当だ。
「小癪な真似を……！」
わずかな苛立ちを含んだ言葉と共に、蓮華は再び剣を構え直した。
磨き上げられて銀色に輝く日本刀は、夕焼けの色を反射させて場違いにも美しかった。
風が出てきて、同じく銀色の蓮華の髪もなびいて揺れた。

「行くぞ！」
再び、蓮華は地を蹴って飛鳥へと向かう。
速さだけで言えば陸上の短距離選手にも匹敵しそうなほどのものだ。
対して飛鳥は、運動神経は常人よりはるかに優れてはいるが、それでも蓮華には及ばない。
そもそも間合いを詰められるということが、飛鳥の戦い方に置いては決して許してはいけないものだ。
なので、飛鳥も同様に走るしかない。
せめて等距離を保ったままでなくては、飛鳥の有利は確実に奪われていく。
「もう、一体何だっての？　いきなり問答無用で襲ってくるわ、こっちの話は聞こうともしないわ……」
「話すことなどない。戦う理由など、我々の置かれた状況を考えれば一目瞭然だろう」
逃げる飛鳥と追う蓮華。
二人の距離はほぼ一定で、どとらにとっても有利にも不利にも働かない。
「そうだとしても、私にはあなたと戦う理由がないんだってば！」
「戯言を……。ならばここで倒れればいい！」
瞬間、蓮華は跳躍した。
一足飛びで、間合いが一気に縮まる。

「……ったくもう！」
口ではいくら言っても無駄だと理解し、ようやく飛鳥も逃げることをやめる選択をした。
両手に雷が迸る。
片手からまずは三つ、雷の矢を撃ち出す。
「トライデント！」
先ほどとは違い、正面から縦並びに放つ三本の矢。
さながらに、それは三つ又の槍を想像させる一撃だ。
空中では体の自由は利かず、正面からの単調な攻撃でも十分に仕留めることはできる。
そういう意味では、跳躍した蓮華の行動は失敗だったといえるだろう。
少なくとも、飛鳥はそう思ったからこそこの矢を放った。
だがしかし。
飛鳥は改めて思い知らされる。
このファンタジーの世界に、もはや理屈などは通用しないのだということを。

「詰めが甘いと言っただろう」
言うや否や、蓮華は片手に握ったままの剣の鞘を、勢いよく地面に投げて突き刺した。
その衝撃で、地面の一部がまるで隆起するかのように盛り上がり、それはまるで土の上から生えた棘のように、飛鳥の雷撃の矢を下方向から打ち砕いた。
「な……」
思いもよらぬその反撃に、今度は飛鳥の体が硬直する。
蓮華の跳躍の勢いは止まらない。
すでに振りかぶったその剣の軌道は、確実に飛鳥の体を両断するだろう。
「今一度食らえ！」

振りかぶった蓮華が叫ぶ。
二度目の斬撃が見舞われた。
「地裂閃！」
「くっ……！」
直後に、大地が悲鳴を上げた。
まるで上空から隕石でも落下したかのように、蓮華の剣の切っ先はクレーターのように地面を抉り返した。
深さこそないものの、その威力は目で見れば恐ろしいほどに実感できるだろう。
土埃がパラパラと舞う中、蓮華は剣を構えて煙の向こうを見据えていた。
しだいに土の霧が晴れていき、周囲の状況が見え始める。
蓮華が立っているのは、ちょうど自らの技でできたクレーターの中心だ。
そこから円形に地面は中華鍋の底のように薄く陥没し、さらに正面と背後には地面そのものに直線の亀裂が刻まれている。
地を裂く一閃、ゆえに地裂閃。

名刀天地は、その名の如く天と地を支配しうるほどの強大な力を秘めたものとして代々天宮家に伝わってきたものだ。
その剣は持つ者の潜在能力を限界まで引き出し、さらに大地の加護で剣そのものの強さも増すという代物。
そこに追い討ちのように『Ｒｉｎｇ』の力が、それも大地の力が加われば、威力はさらに増大する。
だが、それだけ強大な力を扱うにはそれ相当の体力と精神力を要するのもまた事実だ。
能力者として目覚めてまだ日の浅い蓮華では、まだその全能力を開放できるというわけではない。
仮にできたとしても、それは一瞬の出来事で終わってしまうもので、攻撃にも防御にも実戦レベルで使えるものではない。

なので、今の一撃は本来の威力の十分の一程度の威力しか含んでいないものだ。
だが逆に言えば、十分の一程度でもこれほどの威力を出すことができるということだ。
これが本来の力を解放したことを考えると、蓮華自身もわずかばかりに恐怖を覚えそうになる。
「……今の私では、まだ難しいか」
手の中の白刃を見つめ、蓮華は呟いた。
そして、ようやく晴れた土煙の向こうにその姿を捉えると、再び剣を構えなおした。
「……いったー……」
そこには、体中土の汚れでまみれてはいるものの、かすり傷程度で事なきを得た飛鳥が立っていた。
「……さすがだな。完全に捉えたと思っていたが、私の力量が追いついていなかったか、あるいはお前の機転か。どちらにしても、能力者は誰もが一筋縄ではいかないということか……」
褒め言葉にしては全く嬉しくない一言を頂戴し、飛鳥は吸い込んだ土煙にゲホゲホと咳き込んでいた。
「……あんたねぇ、少しは加減ってものを知りなさいよ。ここら一帯、まとめて吹き飛ばすつもり？」
飛鳥は一直線に走る地面の溝を目で追いながら言う。
円の中心である蓮華の立つ場所から、亀裂は目測でも三十メートルほど遠くの地面まで続いていた。
「……知ったことか。私はただ、目の前の敵を倒すだけだ」
そして蓮華は剣を構え、続行だと言わんばかりに飛鳥へと向き直る。
「次こそ仕留める。ここで果てるがいい、雷使い」
「冗談。こっちにはまだ、やることがいっぱいあるんだから。例えば……」
言いかけて、飛鳥は両手を合わせる。

そこから生み出されたのは、一対の弓と矢。
飛鳥の体格にはそれこそ不釣合いにもほどがある、巨大な弓矢だった。

「――人の話を聞かないわからずやを、少し痛い目に遭わせてやること、とかね」

「……これは？」
蓮華の目に映ったものは、今まさに放たれんとしている膨大なエネルギーを集束させた雷の矢だった。
それは矢と呼ぶにはあまりにも巨大で、まるで槍のように見えた。
しかし飛鳥がああして弦を引いている以上、やはりあれは矢なのだろう。
などと、そんなことを考えているのも束の間だった。
直感的に、蓮華は身を半歩ほど引いた。
しかしそれ以上体を動かすことができない。
目には見えない、しかし恐ろしいほどの重圧が目の前にあったからだ。
動けば、その隙にあの矢は放たれる。
しかし、先手を打っても速さで勝ち目はない。
何しろ相手は雷だ、速さは音速を軽く超えるのは確実だろう。
かといって、防御する手段はあるのだろうか？

……いや、落ち着け。
冷静に考える。
いくら強力な雷とて、通電性のない物体に阻まれれば威力はゼロになる。
そしてそんな都合のいいものは、踏みしめる地面の上にいくらでもあるではないか。
地裂閃の威力をうまく調節すれば、目の前に土砂の壁を作り出す

こともできるはずだ。
だがこれは、蓮華自身もまだ試みたことのない、言うなれば未知の挑戦だった。
一か八かのこの場面で試すには、リスクが大きすぎる。
だが、他に方法は浮かばない。
どうする？
賭けに出るか？
いや、しかし……。
などと、蓮華は内心で葛藤していた。
しかしそうこうしている間にも、よりいっそう飛鳥の雷撃はその威力を高めていく。
空気中のそこら中から静電気を根こそぎかき集めて、充電するかのように威力を高めている。
すでに矢を構えた飛鳥の全身は、おびただしい量の電圧によって取り囲まれ、その中心にいる飛鳥の髪の毛は泳ぐように浮ついていた。
「さーてと。次はこっちの番よ」
ギリリと、矢を引く音が響き渡る。
もはや蓮華に考えるだけの時間の余裕はない。
一秒後にでも、あの矢は放たれるかもしれないのだ。
放たれたと、目で分かってからでは回避は間に合わない。
ならばここは、あえて先手を打って相手のタイミングをずらすことがもっとも効果的なはずだ。
そう決めて、蓮華の行動は早かった。
一瞬でも早く、目の前に土砂の壁を作り出すことができればどうにかなる。
これほどの威力の大技なのだから、命中に関わらず撃った後の隙も大きいはずだ。
そこを狙う。

「先手！」
叫び、蓮華は目の前の地面を強く切り付けた。
岩盤さえ砕けそうなその一撃で、飛鳥と蓮華の間に再び土砂の壁が行く手を阻んだ。
しかしそれでも、今の飛鳥の雷撃の威力を持ってすれば全てを巻き込んで矢を放つこともできたかもしれない。
だが、そこは蓮華の思ったとおり、先手を打つことによって飛鳥の動きはわずかに鈍った。
土煙の向こうにそれを確認し、蓮華は全力で横方向に移動を開始する。
仮に今あの矢を放たれても、これなら直撃を免れることができるし、何よりも矢を放った直後の側面は隙だらけだ。
そこに一撃を見舞うことができれば、それで勝負は着く。
蓮華はクレーターの中から脱出し、即座に方向を転換。
目測の間合いから、土煙の中にいる飛鳥の姿を追った。
そして直後に、真横を轟音が通り抜けていった。
あれは間違いなく、雷の矢だ。
そう確信し、蓮華はさらに加速した。
そして十分な間合いを詰めたところで、全力を込めた横薙ぎの一撃を、土煙ごと叩き切るように振りかぶって……。
「……な」
ピタリと、その剣の動きを止めた。
理由は一つだった。
そこにあるはずの気配が、どこにもなくなっていたからだ。
おかしい、そんなはずはない。
自分の歩幅と目測の距離から考えて、ここから振るう剣の間合いギリギリに飛鳥は立っているはずだ。
そうだというのに、そこにはまるで人の気配を感じられない。
あるのはただ、自らの力で起こした土煙の壁だけ。
「これは、一体……」

どういうことだと考えかけて、蓮華は反射的にその場から後退した。

その直後に。

再び轟音が鳴り響いたかと思ったら、蓮華の真横を雷の矢が駆け抜けていった。

「な……？」

その雷撃は、わずかに蓮華の銀の髪を焦がしていった。

通り過ぎたその後には、青白い閃光が残り火のように音を立てていた。

いや、そんなことよりも、一体どうして……。

――今の攻撃は、間違いなく真逆の方向から飛んできていたものだった。

「そんな、まさか……！」

呟き、蓮華は振り返る。

たった今横を抜けていった雷撃の尾が、土煙の壁を奇麗に消し飛ばしてくれていた。

その、向こう側。

ちょうど、クレーターを越えた平坦な地面のその場所に。

「惜しい。ちょっとズレてたかな？」

――平然とそう呟く、飛鳥の姿があった。

それはありえない光景だった。

なぜなら、今飛鳥が立っている場所は、少し前に蓮華が立っていたクレーターの中心の場所よりもはるかに後方の場所だったからだ。

「なぜ……」

呆然と蓮華は呟く。

あの一瞬、蓮華の目には移動した飛鳥の姿は映らなかった。

それはつまり、それだけの速さで移動したということだろうか？
いや、それだったら、先ほどの攻防のときも同じ方法で避けることができたはずだ。
一つ前の攻防で飛鳥がほぼ無傷で済んだのは、あの一瞬で手の中の雷撃を足元の地面に打ち込み、その衝撃で自らの体を後方へと弾き飛ばしたからである。
結果として全身砂汚れまみれになったわけだが、あの状況ではそれが唯一の打開策だったことは間違いない。
直撃を受けて致命傷を負うよりは、ずっとマシな選択だ。
では、今はどうだ？
全く同じことをしたのか？
いや、それはない。
なぜなら、蓮華は一度自分の真横を駆け抜けた轟音を耳にしている。
つまり、少なくとも雷撃は確かに放たれているのだ。
今蓮華の立つ、この場所で。
なのに、その飛鳥はなぜか真逆の場所にいる。
そしてその場所からたった今、再び雷撃が襲い掛かってきた。
それは一体、どういうことなのか……。
「一体、どうやって……」
呟く蓮華を尻目に、しかし飛鳥は実に呆気なく言ってのける。

「――それは、企業秘密」

と、わずかに笑みすら見せながら。
「……っ、フン」
と、その様子に憤慨したのか、鼻を鳴らした蓮華はそのまま天地を静かに鞘の中へと納めた。
「止めだ。命がけの戦いの最中に笑うなど、どういう神経をしている……興醒めにもほどがある」

まるでふてくされた子供のように、ズカズカと蓮華は飛鳥に歩み寄ってきた。

しかし不思議なことに、言葉通りそこにはもう敵意や殺意は感じられない。

歩きながら鞘の上にグルグルと布を巻きつけて、飛鳥の真横までやってきて蓮華は厳しい表情で言う。

「いいか。今回は分けにしておく。だが、次はないと思え。私はまだまだ強くなる。次がお前の命日だ。いいな」

と、言いたいことだけを言いたいように言うだけ言って、蓮華はさっさとその場をあとにしようと去っていく。

その様子がどこか、飛鳥は自分と似ているなと、そんなことを思いながら、去り行くその背中に一言だけ告げた。

「……飛鳥。新宮寺飛鳥」

その言葉に、蓮華は一度立ち止まって半分ほど振り返った。

「ちゃんと名乗ったからね。あんまりお前とか呼ばれるの、好きじゃないから」

「……」

無言だったが、蓮華はどこか不機嫌そうな目をしていた。

まぁ、無理もないだろうか。

どうやら蓮華にとって戦いとはどんな形であっても神聖なもののようだ。

それが中途半端なまま終わってしまったので、それで不機嫌なのだろう。

と、飛鳥がそんな結論を出して小さく溜め息をついたとき。

「……新宮寺、飛鳥か」

ふいに、蓮華はその名を読み上げた。

「……悪くない名だ。その名、しかと覚えておこう」

と、それだけ言って、再びスタスタと去っていってしまった。

ただ、その背中からほんの少しだけ不機嫌な気配がなくなっていたように見えたのは、気のせいだったのだろうか？

「……ま、いっか」
そう結論付けて、飛鳥はようやく張り詰めたままの肩を降ろしたのだった。
とにもかくにも、今は早く……。
「……お風呂入りたい」
砂まみれの自分を見て、飛鳥は一言呟いた。
日は暮れ始めていた。
あの夏の終わりの日と同じように、飛鳥の影は長く伸びていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３０：情報交換

放課後、僕は急いで氷室のもとを訪ねていた。
するとそれはちょうどいいタイミングだったのだろうか、事務所の中には飛鳥の姿も揃っていたところだった。
が、二人とも僕同様にどこか言いようのない、掴み辛い空気を持て余しているようだった。
促されて僕はソファに腰掛けるが、しばらくは三人揃って沈黙を保つままだった。
やがて、ずれた眼鏡を押し上げる素振りを見せながら、まずは氷室が口を開いた。
そして僕と飛鳥は、その内容に少なからず驚きを覚えることになる。
「昼間、二人目の炎使いと接触しました。いえ、戦闘になったと言った方が正しいでしょうね」
「え……」
「ちょ、まさか、アンタもなの？　氷室」
「……私、も？　では飛鳥、まさか、あなたも……？」
氷室の問いに、飛鳥は無言で首を縦に振った。
それはつまり、氷室同様に戦闘になったということである。
それは、誰と？
決まっているじゃないか。
能力者である僕達が戦う理由と相手など、それこそ一つしかない。
――つまり、能力者と接触したということだ。
「……いやはや、どういう偶然ですかね、これは。まさか飛鳥も他の能力者と接触していたとは……」

「それはこっちのセリフだよ。それに、接触って言っても別に私から探してたわけじゃなくて、向こうから戦いを仕掛けてきたんだから」

「ふむ。その点に置いては、私は正反対ですね。私は自分から能力者の気配の中に突っ込んでいったわけですから」

「な……アンタ、何無茶なことしでかしてるのよ……」

「確かに、ちょっと軽率だったかもしれませんね。結果として、戦闘には勝利しましたが捉え損ねました」

「……まぁ、氷室が負けるとは考えにくいけどさ」

「それはどうも」

二人の会話を耳にしながら、僕は口を挟むタイミングをすっかり見逃してしまっていた。

しかし、ここで口を挟んでいいものだろうか。

二つ重なればそれは偶然で済まされるかもしれないが、三つ重なればそれはもはや偶然という言葉の領域を超越してしまうのではないだろうか。

僕の中に、そんな不安めいた気持ちが生まれる。

しかしかといって、このことを話さずに済ませておくことはできないだろう。

何よりも今、僕達には情報が不足している。

この戦争の中で生き残るためにも、互いの情報提供はかかせないもののはずだ。

しかもそれが、他の能力者に関わることだとすれば、それはもはや最重要と言っても過言ではないだろう。

だから僕は、落ち着きかけた空気を再び揺さぶる覚悟で口を開くことにした。

「あの、さ……」

僕の遠慮がちな言葉に、二人の視線が移る。

「そのことなんだけど……実は僕も、昼間他の能力者と出会ったんだ」

「な……」
「……それは本当ですか、大和？」
「うん。そのことなんだけど……」
僕は一度話を区切り、最初から簡単な経緯を説明することにした。
僕が今日朝から体調不良で、学校に着いてすぐに保健室で休んでいたこと。
目が覚めたらもう昼休みで、そのときに見えたあの奇怪な空のこと。
学校を抜け出し、街の中を散策していたこと。
そして、かりんと名乗る寡黙な少女と出会い、そして交戦したこと。
僕が一通りの説明を終えると、二人は納得した反面、言葉を失っていた。
「……なるほど。それは確かに大和の言うとおり、その少女は音を武器にしているようですね。すると、『Ｒｉｎｇ』には音の属性もあると、そういうことになりますね」
氷室は深刻そうに考え込んでいた。
「そんなに深刻に悩むことなの？　別に驚くほどのことでもないと思うけど……」
と、飛鳥はそんな言葉をかける。
「……いえ、これは相当厄介かもしれませんよ」
氷室は顔を挙げ、真剣な目つきで僕達を見た。
「私は今まで、『Ｒｉｎｇ』の属性は基本的に自然界の元素を基準にしていると考えていました。ようするに地、水、火、風、雷など、それ単体でエネルギーとして存在しているものだと、そう思っていました。しかし……」
一度話を区切り、眼鏡を押し上げる。
「今回のことで、少し見解が変わってきましたね。確かにいわれて見れば、音そのものも一つのエネルギー体としては存在します。で

すが、これでまた一つデタラメな可能性が出てくることになりました」

「何よその、デタラメな可能性って？」

「……極端な話をしましょう。仮に、命という属性を持つ『Ｒｉｎｇ』があったとします。生命そのものも生物の活動エネルギーの源なわけですから、これも理屈としては通るはずです。で、問題はその効果のほどですね。もしもそんな属性の『Ｒｉｎｇ』が実在するのなら、それは能力者の意思一つで命を奪うことができる、ということになるのではないでしょうか？」

「あ……」

「ちょ、ちょっと、いくらなんでもそんなのって……」

「ない、とは、とてもじゃないが言い切れません。事実として、大和は音の属性を持つ能力者と接触していますからね。そう考えると、間接的にでも力という要素が絡んでいれば、それだけで『Ｒｉｎｇ』の属性として存在する可能背は非常に高い……」

僕と飛鳥は沈黙するしかなかった。

氷室の言葉は現段階ではただの想像に過ぎないものだが、それは決して具現化しない想像ではない。

何しろ僕達は、とっくに常識外れの世界の真っ只中に位置しているのだから。

だがしかし、もしも本当にそんな理屈がまかり通って、挙句そんな『Ｒｉｎｇ』が実在するのだとしたら、それこそ本当にデタラメだ。

「……考えるだけでも仕方ありません。今はお互いに、そのときの各自の状況を情報交換しましょう。余計な詮索はかえって混乱を招く要因になりかねません」

とりあえず、僕も飛鳥も氷室の言葉に頷いた。

確かにそんなことが起こりうるとすればこの上なく脅威だが、逆に言えばそんな脅威が起こってない今は、まだ比較的安全と言えなくもない。

今の僕達がすべきことは一つ。
他の能力者について、まずは知ることだ。

「……そんなわけで、確かに戦いにはなったけど、決着って言うか、そういうのはなかったんだ」
と、僕はかりんと出会ったときのことを説明した。
成り行きで戦うことにはなったものの、とりあえずは互いに無事生存し、敵対関係を破棄するに至ることにはなったということ。
「やれやれ。相変わらず、大和らしいですね」
と、氷室は苦笑いしながらどこか呆れた笑みを浮かばせていた。
「ま、大和らしいっちゃ大和らしいけどさ。今回は相手がよかったんだと思って、気を抜いちゃダメだよ」
飛鳥からも念押しを受け、僕はそれに素直に頷いておくことにした。
「大和の話からするに、そのかりんという少女も何らかの望みがあって、それを叶えるために戦争に参加しているようですね。ですが、一つ腑に落ちない点があります。彼女にこの戦争のことを教え、その先に望みが叶うと示した人物。これが誰であるか、現段階ではまだ分かりかねます」
「ある人が教えてくれたって、かりんはそう言ってた。でも、それが誰なのかまでは……」
「まぁ、仕方ありません。身勝手な想像は現実とはかけ離れるものです。今は置いておきましょう。では、次に飛鳥ですが……」
「あ、うん。私はさ……」
飛鳥は自分の状況の説明を始めた。
襲われたのは郊外の空き地であること。
相手の名前は天宮蓮華という女性であり、地の属性の『Ｒｉｎｇ』を所持していること。
生半可ではない身体能力を持ち、武器は日本刀を扱っていたこと。
どこか古臭い口調で、一見侍のような仕草を見せていたこと。

「……と、こんなところかなぁ……」
「これはまた、大和に勝らずとも劣らずの正直者ですね」
「……何だろう。褒められてる気がしない……」
飛鳥と氷室は互いに小さく笑い、しかしすぐに表情を元に戻す。

「まぁ、それは置いておくとして。確かに、珍しいタイプではありますね。普通、戦う前に自らの手の内をさらけ出すことなどまずしないでしょう。戦いに置いて、それは自殺行為と何ら変わりありません。にもかかわらず、彼女がそうしたということは、単純に武士道精神によるものなのか、それとも他に理由があったのか。まぁ、飛鳥の説明からするに恐らくは前者でしょうけどね」
話を聞くだけだと、確かの僕もその蓮華という女性には裏があるようには感じなかった。
恐らくは、そういう環境の中で育ってきたのだろうと思う。
それにしても……侍か。
米国などでは未だに衰えを知らないほどの人気があるとは聞くが、まさか今の時代のこの街にも、そんな志を持った人がいるとは……。
「それで、実際に戦った感想として、どうでしたか？」
氷室が問いかけると、飛鳥は表情をさらに真剣なものにした。
「……隠す理由もないから、はっきり言うよ。あの人、本当に強い。多分、『Ｒｉｎｇ』の力なんかなくったって私は負けていたと思う」
「え？　飛鳥、負けたの？」
「ううん。今回に限っては引き分けって言うか……相手が勝手に興醒めだって言い出して、中断しただけ」
「興醒めですか。それはまた、ずいぶんと侍のようで……」
「……だけど、正直私はそのおかげで助かったようなもの。あのまま戦い続けてても、私には勝ち目はなかったと思う。どうにか逃げ切ることだけを考えて、私は戦ってたから……」
人一倍勝気なはずの飛鳥がこんなに消沈するなんて、それはよほどのものだったのかもしれない。

「多分、彼女もまだ能力に目覚めて日が浅いんだと思う。だから、思うようにコントロールできずに、結果としてそれが今回は私にとって優位になっただけ」

「何にせよ、まずは自分の無事を喜ぶべきですよ、飛鳥。その蓮華という人が文字通りの侍なら、それこそ情けなどかけないでしょう。敗北はまさしく、あなたの死を意味するものだったはずです」

「……そう、だね。うん……」

「付け加えるなら、よく無事でいられたものです。飛鳥の戦闘手段は主に、中距離から遠距離にかけての遠距離戦。対して相手は、剣を使う接近戦。互いに間合いが最重要となるわけですからね。身体能力の基準から見ても、飛鳥は常人から見ればすこぶる優秀です。しかし、相手はそれ以上だった。仮にも剣を使いこなすくらいですから、体術においてかなりのものがあると思えます」

「……そんなに、すごかったの？」

不謹慎ではあったが、僕は隣の飛鳥にそう聞いてみた。

「うん。本当にすごかった。これ、行き過ぎた表現かもしれないけど……」

飛鳥は一度目を閉じ、そのときのイメージを掘り起こすようにして言った。

「――多分、風の力を使った大和と比べても、互角かそれ以上の速さかもしれない」

「……」

僕は言葉を失った。

「私がかろうじてその動きに反応できたのも、実際に大和の動きを間近で見ていたからだと思う。もしもそれがなかったら、私はもうとっくに土の中だよ……」

悔しげに、飛鳥はギュッと両手で拳を握っていた。

「……私は、もっと強くならなくちゃ。今の能力だけで満足してい

るようじゃ、簡単に足元をすくわれる」
「同感ですね。しかしそれは、飛鳥に限らず私にも大和にも言えることです。戦うということ、生き残るということ、逃げ延びるということ。その全てにおいて、私達は今より強くなる必要があります」
「強く、か……」
漠然と言われ、僕はどこか戸惑っていた。
強くなるということは、力をつけるということ。
でも僕は一体、何のために強くなるというのだろう。
身を守るため？
この戦争に勝ち残るため？
強くならなきゃいけない理由はあるのに、強くならなければならない理由が見当たらない。
今更に僕は思う。
どうして僕は、選ばれたのだろうか、と。

その後、僕達は氷室の接触した炎使いの話を聞き、最後にお互いの行動に注意を払うことと、何かあったらすぐに連絡をすることを互いに示し合わせ、その場は解散となった。
陽はもうずいぶんと沈み、夕暮れ色の街並みは黄昏色へと変わりつつあった。
僕と飛鳥は一緒に事務所を出て、歩道の上で電話番号を交換した。
またねと、軽く挨拶を交わし、僕達はそのまま背中合わせにそれぞれの帰路へと歩き出した。
ふと、僕は歩く道のうえでそのことを思い出す。
今日一日で、僕も飛鳥も氷室も、何らかの形で他の能力者と接触している。
と、いうことは。
「……もしかしたら、真吾も……？」
その炎使いの少年の名を、僕は何気なく口にしていた。
しかし、口にしてしまえばもうそれまでだ。

気になるという衝動は、気持ちでは止めることなどできない。
僕は帰る足をそのまま、あじさい園へと向けることにした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３１：氷の爪痕

視界の向こうにあじさい園の門を捉えた僕は、すぐにその異変に気がついた。
門の横にある石柱が、まるで抉り取られたかのように大きく欠落していた。
しかし、異変はそれだけには留まらない。
わずかに早足で、僕は正門へと駆け寄る。
するとどうだ。
中庭の地面はまるで隕石が落下したあとのように、大小さまざまな大きさの溝がまるでクレーターのように跡を残している。
「何、これ……」
僕は呟き、思わず立ち止まった。
当然、先日のように庭の中で元気よくはしゃぐ子供達の姿は一つもなく、あじさい園はまるで眠りについているかのように静寂の空気に包み込まれていた。
その静寂を打ち破る音は、不意に僕の耳へと飛び込んできた。
ガラガラと、ガラス戸を引く音がした。
僕は音のした方向を向き直ると、そこには一人の少女の姿があった。
彼女は僕と目が合うなり、わずかばかりに警戒したような態度を取る。
そして、恐る恐るその口を開いてこう言った。
「……どちら様ですか？」
「……え、あ……」
と、思わず僕は咄嗟の返答につまずいてしまう。
改めてどちら様と聞かれると、正直僕はどう答えていいのか分からなかった。

真吾とはいい意味ではないにしろ面識はあるので、赤の他人というわけではない。
とはいえ、その関係そのものは友好的というよりは敵対的といったほうが正しい気もする。
今はお互いに休戦のような状態になってはいるが、いつまたどんなことがきっかけになって戦うことになるとも分からない。
そういう意味では、今の僕は敵陣の中に無防備に突っ込んだ命知らずの兵士のようなものなのかもしれない。
とか何とか、僕がそんなことを考えているうちにも、少女の警戒心は強まる一方だった。
見ず知らずの人間が土足で立ち入れば、それは十分警戒に値するのだから無理もないだろう。
でも結局、僕はどう説明したらいいのだろうか……。

と、そんなときだった。
向き合う彼女の背後から、もう一つの小さな影がひょっこりと顔を覗かせた。
「ユウキー、何してんだー？」
「あ、こら！　勝手に出てこないの、大樹」
「……大樹？」
その聞き覚えのある名前を、僕は繰り返して呟いていた。
するとその声が届いたのか、大樹は一度だけキョロキョロと周囲を見渡して、そして正面を向き直って僕のことに気がついた。
「あ」
そんな、何かを思い出したかのような声が出る。
「おー、ヤマトじゃんかー」
直後に、大樹は廊下を駆け抜けて裸足のままで中庭へと飛び出してきた。
「あ、こら大樹！」
静止する優希の声も聞かずに、大樹は一直線に僕の目の前へとや

ってきた。
「また会ったなー、ヤマトー。今日はどうしたんだー？　遊びに来たのかー？」
「あ、いや。遊びにってワケじゃないんだけど……」
言いながら、僕はもう一度中庭の全貌を見渡した。
とてもじゃないが、これでは遊ぶこともまともにできないような気がした。
「そうなのかー。じゃー、どうしたんだー？　あ、ひょっとして、真吾に会いにきたのかー？」
「あ、うん。一応、そのつもりなんだけど……」
「こら、何してるの大樹！」
僕達の会話を仲裁するかのように、優希はサンダルを履いて中庭へとやってきた。
「こら、ダメでしょ。裸足で出歩いたりしたらケガするじゃないの」
「平気平気ー。どってことないぜー」
「どってことあってからじゃ遅いんだって。ほら、サンダル履いてきなさい」
「分かったー」
意外と素直に、大樹は言われたとおりにサンダルを履きに戻っていった。

結局その場には、僕と優希だけが取り残される形になった。
「……」
「……えーっと」
多少は警戒心を緩めてくれているようではあったが、それでもまだ少し視線が痛い気がした。
「……真吾の知り合いの方ですか？」
「知り合いというか……」
まさかここで、バカ正直に以前命のやり取りをした関係です、などと公言できるわけもなく。

「……まぁ、そんな感じです」
と、僕は素直に頷いておくことにした。
「へぇ……真吾にも、外で作る友達なんているんだ……」
呟くように、そしてどこか物珍しそうに優希は呟いた。
「……あの、それで真吾は？」
「……え？　ああ、真吾だったら中にいます。呼んできましょうか？」
「あ、じゃあ、お願いできますか？　ちょっと話があるので……」
「分かりました。ちょっと待っててくださいね」
そう言うと優希は踵を返し、園の中の廊下を足早に去っていった。
「なーなーヤマトー、せっかくだから遊ぼうぜー」
と、いつの間にやってきたのか、サンダルではなくしっかりと外靴に履き替えた大樹が足元にやってきていた。
「え？　そ、それはちょっと困るかな……今日はさ、真吾と大事な話があるんだよ」
「大事な話ー？　それってどんな話だー？」
「いや、それはちょっと言えないんだけど……」
「むー、なるほどなー。これがいわゆる、男同士の情事ってやつかー」
「じょ、情事？」
一体どこでそんな言葉を覚えたのだろうかと、僕が疑問に思ったとき、待ち人は遅れてやってきた。

「コラ。まーたテメェは、どこでそんな言葉覚えやがったんだ。っつーか、意味分かってんのかよ？」
軽いゲンコツと共にそう言いながら、真吾は僕の目の前にやってきた。
「ぐえー。イッテーなー真吾ー。何しやがるー」
「ウルセェ。オラ、ガキは向こう行ってろ。大和は俺のお客さんなんだよ」

「チェー。なーなー大和ー、今度は絶対に一緒に遊ぼうなー」
「え？　あ、うん。そうだね」
「おーし、約束だぞー。覚えてろよー」
そう言い残し、大樹は足早に園の中へと戻っていった。
そのまま土足で廊下をよじ登ったところを優希に見咎められ、首根っこを捕まえられてどこかへと引きずられていった。
「ったく、これだからガキってのはよ……」
面倒くさそうに、しかしほとんど苛立ちを感じさせない言葉で真吾は言ってのけた。
「さて、と」
そして僕に向き直り、また曖昧な笑みを浮かべていた。
「どうしたよ？　まさか、お前から俺を訊ねてくるなんてな。まさかとは思ったけど、マジでお前だったとはな」
「あ、いきなり来たことはごめん、謝るよ。ただ、どうしても聞いておきたいことがあったからさ……」
「ふぅん。まぁいいや。で、その聞きたいことってのは？」
「それは……」
と、聞く前に僕はもう一度、荒れ果ててしまった中庭を見渡した。
そして中途半端な説明は不要だと確信し、要点だけを率直に聞いた。

「――これ、どういうこと？　やっぱり、真吾のところにも誰か来たんだね？」

「……俺のとこにも、ってことは、お前もそうだってことか」
「……うん。僕だけじゃない。氷室も飛鳥も、今日の昼間に知らない能力者に遭遇してる」
「……なるほど。で、もしかしたら俺も同じ具合なんじゃねーかと？」
答えずに、僕は首を縦に振った。

「……ま、見りゃ分かるだろ。ご覧の通りさ」
視線を移し、真吾は中庭をぐるりと見渡した。
「あのヤロウ、時間も場所もわきまえずにいきなり現れやがった。おかげでこっちは大迷惑だぜ。まさかアイツラの目の前で炎出すわけにもいかねーしな。ま、幸いなのは、そのときは昼寝の時間で、ほとんどのガキ共は夢の中だったってことだけどな」
「……それで、どうなったの？」
「あ？　ああ、まぁ、その場はどうにかお帰り願った。もちろん力ずくだけどな。それにしたって、何だってこんな真昼間の街中でやりあわなくちゃいけないのかね。まるでアイツは、自分から能力者ですって吐露してるようなもんだったぜ」
「……実は僕達も、ほとんど似たような状況で遭遇してる。もっとも、結果として人の目には触れていないけど」
「……一体どうなんってんだか、こっちがサッパリだ」
「……」
どこかイライラした感情を抑えきれず、真吾は短く切り揃えられた髪の毛をぼりぼりと掻き毟っていた。

「んで？　話ってのはそれだけか？」
「あ、うん。今日はとりあえず、確認したかっただけだから」
「……今日だけで四人追加、か。ますます面倒クセェことになりそうだな、この戦争とやらは」
「……あ、そうだ」
「ん？」
「一応、僕達の遭遇した能力者の力について分かったことだけ教えておく。僕達が出会ったのは、それぞれ音と地、そして炎を使う能力者だった」
「……炎、だと？　俺以外にもう一人、炎使いがいるってのか？」
「実際に交戦したのは氷室だったから僕は知らないけど、間違いないと思う」

「……そうか。あのメガネ兄さんがそう言うなら、まぁ本当なんだろうが……」

どこか怪訝そうに、真吾はあさっての方角を見据えた。

「……まぁいい。いずれ分かるだろ。ああ、ちなみにな。俺の相手は氷使いだったぜ」

「氷？」

「ああ。推測だが、あのメガネ兄さんの力と近いものがあるな。空気中の水分を瞬間的に冷却させて、氷の弾を作り出しやがる。おかげでそこらじゅうが穴ぼこだらけになっちまったってワケだ」

改めて僕は中庭を見渡した。

確かによく見ると、大小さまざまな穴の中はわずかに土が湿り気を帯びていた。

恐らく氷の弾が地面に残り、そのまま溶けて水になり、地面に吸い込まれていったのだろう。

「フン、どうでもいいけどな。炎に氷で立ち向かうなんざ、身のほど知らずもいいところだ」

「……言われてみれば、確かに」

単純な相性だけで考えれば、氷は炎で容易く溶かされることは火を見るより明らかだ。

そういう意味では、被害がこの程度で済んで幸いと思うべきなのかもしれない。

「……とはいえ、あんま勝ち誇れたモンでもないんだがな」

「え？」

意味深なその言葉に、僕は二つ返事で聞き返す。

「今回は属性の相性で俺が優位に立ったが、もしもそうでなければどうなってたかは分からねぇ。明らかに劣勢の戦いの中でさえ、こんだけの爪痕を残していってるんだ。それなりに能力を使いこなせるやつってことだけは、否定しようがねーんだよ」

「……」

僕は無言で真吾の言葉の呑み込んだ。
今もなおこうして目の前ではっきり残る戦いのあとが、僕に何かを語ってくるようだった。
「……いいか、油断だけはするなよ」
「……うん、分かってる」
「あんま不確かなことは口にしたくねーんだが、とりあえず言っておく。俺達を個々で別々に襲撃したやつらが、それぞれの独断で動いているのか、それとも、お前らみたいにある程度の同盟を組んでいるのか、もしくはもっと大きな組織じみた構図が背景にあるのか。今の段階じゃまだ何とも言えないが、そのどれもが可能性を持ってるってことを忘れんな。昼間だから襲われないとか、周囲に人がいるから平気だとか、そんな甘い考えは捨て置けよ。何度でも言うぜ？　これは戦争だ。生きるか死ぬかでしか、決着はねーんだ」
冷たく強く、真吾は言い切った。
しかし僕は、その言葉に対して反論する術を持ってはいなかった。
紛れもなくそれらの言葉は真実で、もはや曲げようのないものだったのだから。
「……一応、胸に留めてはおくよ」
「……フン、どうだかな」
どこかつまらなそうに、しかしどこか楽しそうに、曖昧な笑みのまま真吾は吐き捨てた。
「まぁ、わざわざ訊ねてきてくれたことんは礼を言っておく。多少の情報交換にはなったわけだし、少なくともデメリットにはならねーだろ」
「うん、そうだね」
「んじゃ、今日はお開きだ。このあと晩飯の支度しなきゃいけねーんでな」
「……へぇ」
「……何だよ、その顔は」

「いや……ちょっと、意外だなって思った」
「チッ……どいつもこいつも……」
やれやれと、真吾はどこか疲れた素振りで溜め息をついた。
「まぁいい。んじゃな」
それだけ言って、真吾は足早に園の中へと戻っていった。
面倒くさそうに言った割りに時間に追われているその背中が、少しだけおかしかった。
そうして僕はあじさい園をあとにした。
陽はすっかり落ち、周囲は薄闇色に染まり始めていた。
長いようで実は短い、そんな秋の夜長が、今日もまた始まろうとしている。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３２：一度目の再会

自宅前に誰かの人影が立っていた。
夕陽の逆光を受ける視界の中、僕は遠くに見えるその人影に目を凝らしてみる。
「あ……」
すぐに気付いた。
その人影は、唯のものだということに。
途端に僕の足取りは、わずかばかりに重くなる。
原因は恐らく二つ。
一つは、結局今日一日は何一つとしてまともな会話すら交わさずに過ごしていたこと。
そしてもう一つは、保健室での先生との会話のその真相が、未だに僕の中で結論を出せずに右往左往を繰り返していること。
先生はああ言っていたが、正直なところ僕にそんな記憶は微塵も残されてはいない。
今朝、唯と一緒に登校したことはおろか、そもそも今朝の時点で誰かに出会ったことすら記憶にないのだから。
「……」
単純に僕の記憶が部分的に飛んでいるだけなのならば、どんなにいいことだろうか。
そうだったら、今みたいにこんな曖昧な気持ちと足取りにだってならずにすんだろうに。
僕の足取りは重くはなったが、しかし前に進むことをやめたわけではない。
視線はいつの間にか地面へと向き、逆光の眩しさも一時的に回避される。
足元には自分の影がなく、背中の方向に長く長く伸びていた。
一足先に影だけが逃げ出したような、そんな妙な印象を受けてい

るようだった。

「あ……」

そんな唯の声が聞こえて、僕の意識は急激に現実の中へと引き戻される。

靴音が地面を叩き、徐々に僕の方へと近づいてくることが分かった。

対して、僕の足はピタリとその場で止まってしまった。

知らず知らずのうちに、僕はうろたえていた。

やがて、僕の目の前までやってきた足音がピタリと止まる。

顔を上げなくても分かった。

目の前に唯がいるということに。

「もー、何してたのよ大和！」

唯の口調はどこか不機嫌さを思わせるものだった。

ただ怒っているというよりも、それは心配の延長上に至る怒りの意味合いのものだと、僕にはすぐに分かった。

「放課後になって、皆ですぐに保健室行ったんだよ？　そしたら、大和はもう一足先に帰らせたって先生が言うから、すぐに皆で追いかけてきたのに……」

「……」

「それなのに、家にきたら小母さんも留守だし、肝心の大和もまだ帰ってないみたいだし……。皆、結構心配してたんだよ？　どこかで事故にでも巻き込まれてるんじゃ……」

そこまで言いかけて、唯の言葉は途端に途切れた。

僕は何も答えられないままだったが、そのときになってしまったと思った。

が、時はすでに遅かった。

僕がゆっくりと視線を上げると、思ったとおり、唯の視線は赤く染まった僕のワイシャツの袖口に釘付けになっていた。

保険医の先生のときといい、これで二度目。

自分の配慮のなさが恨めしく思える瞬間だった。
「……あ、これは……」
僕は先に適当な理由を言い繕うつもりでそんな言葉を出したが、それも無意味だった。
「見せて！」
途端に慌てふためくように、唯は僕の二の腕を掴んで、まじまじと血染めの袖口を凝視していた。

「……」
息を呑むような一瞬の沈黙が流れる。
しかしそれも束の間で、結いは恐る恐る僕の袖口のボタンを外し、傷口をいたわるように捲り上げた。
だがそこに、出血の原因となるような傷痕は何一つとして見受けられない。
僕から言わせれば、それは当然のことだった。
なぜならこの血は、僕が吐血した際に口元を拭って付着したものなのだから。
「唯、違うんだ。これはさ……」
言い訳にしかならない言葉を探しながら、僕はとにかく言葉を繋ごうとした。
しかし、それは無意味なことだった。
「……どうしたの、これ？」
唯の声色が低くなる。
「……ねぇ、どうしたのよ大和？　これ、どこか怪我してるんじゃないの？」
「違うんだ。だからこれは本当に何でもなくって……」
「何でもないわけないじゃない！」
唯は怒鳴った。
それは本当に、正真正銘の怒りを覚えている怒鳴り声だった。
静寂に包まれていた住宅街の一角に、エコーのようにその言葉の

残響が響き渡る。
「だって、こんなに血が出てるんだよ？　平気なわけないじゃない。どうして隠すの？　心配させたくないから？　私はそんなに頼りにならないの？」
もはや唯は取り乱しかけていた。
それはすでに怒鳴るという領域を超えて、まるで駄々をこねている幼い子供の姿のようにも見て取れた。
しかしそれでも変わらないものは、眼差しが真剣だったということだった。
唯は本気で僕の体のことを案じてくれていることが、痛いくらいに伝わってきた。

だからこそ、僕は再び迷っていた。
正直に事実を語ることはできない。
けれど、もうこれ以上上塗りの嘘を繰り返してもいいのだろうか？
僕の中で葛藤が始まった。
どちらも正しくはなく、しかし間違いでもない。
突き通した嘘はやがて真実になる。
その言葉は嘘ではないが、やはり正しくはない。
僕と唯の視線がぶつかった。
ほんのわずかだけど、唯の目元が潤んでいるのを僕は嫌でも見せ付けられる。
心が痛んだ。
見えない何かで締め付けられるような、今までに感じたことのない痛みが胸を支配した。
しかし、それでも僕は……。
「……唯、落ち着いて聞いてくれる？」
僕はできるだけ自分の中の動揺を押し殺して、冷静な物腰で言葉を選んだ。
それが伝わったかどうかは別として、唯は微かに首を縦に振った。

僕はまだ迷っている。
果たしてどちらが正しいのか、間違いなのか。
これ以上、僕の身勝手な嘘の上塗りで誰かを傷付けてもいいのか？
そしてその結果、誰よりも傷付くのは他ならぬ自分自身だと分かっていて、なお。
僕は、その痛みに耐え続けることができるのだろうか？
……いや、そんなことは。
もうとっくに、決めていたはずじゃないか。
最初の夜。
窓越しに夜空を見上げていたあの夜に。
僕は決めたはずだ。
いくらでも嘘をつき続けてやるんだと。

「――この血は、僕の血じゃないんだ」

取ってつけたような嘘。
言い切った瞬間、チクリと胸のどこかが痛み出した。
それがどうした。
こんな痛み、これから幾度となく襲い掛かってくるに違いないんだ。
それなのに、こんなところで根を上げてどうする？
誰かを傷付けないための嘘だったら、僕はいくらでも突き通してみせる。
そう誓ったはずだ。
「だから、僕はどこも怪我なんてしてないから。平気だから」
わずかに僕は微笑んで言う。
偽りだけの笑顔を、偽りのない涙を滲ませた唯に見せながら。

丸く収まった、などとは、お世辞にも言えなかった。
けれど、唯もあれ以上にしつこく詰め寄ってくることはなかった。

僕はそれがありがたい反面、また一つ突きつけた嘘の見えない痛みに少しだけ心苦しさを覚えていた。

「ハァ……」

ボスンと、僕の体はベッドの中に沈むように呑み込まれた。

途端にドッと疲れが押し寄せて、僕のまぶたはそのまま閉じてしまいそうになっていく。

空白だらけの長い一日がようやく終わろうとしているのに、僕の中にある問題は何一つとして解決の兆しを見せてはくれなかった。

そればかりか、浮かび上がるのは後悔にも似た曖昧な気持ちばかりだ。

どうして僕は、選ばれたのだろうか？

暇さえあれば、僕はそんなことを繰り返して考えていた。

僕が能力者として選ばれたということは、所詮一つの結果でしかない。

結果であるのだから、それには必ず原因となる理由もなくてはならないはずだ。

けれど、僕にはそれが一体何なのか見当もつかない。

自分で言うのもなんだが、僕はこれといって他人と違う特別な何かを持っているわけではない。

知力も体力も、恐らく同年代の大勢の少年少女と比較しても平均前後のものしか持ち合わせてはいないだろう。

だから僕はこれまでに、自分を他人より過大評価したことはなかった。

それは同時に、過小評価をしたこともなかったということだ。

僕自身、僕は普通だと思い続けていた。

他人より優れていたいと思うこともなく、劣っていたいと思ったこともない。

何かを望んだことはあっても、それは渇望というには程遠いもので、ものすごく現実的な望みだった。

少なくとも、こんな現実離れした得体の知れない力を手に入れた

いなどとは、僕は過去に一度として望んだことはない。
そう望む理由もなければ、得た結果として成すべきこともなかったからだ。

だからどう考えても、やはり僕には僕自身が能力者の一人として目覚める、その発端となるもの……言うなればきっかけのようなものが何もないのだ。
だけどこうして、僕はこの身に風の力を宿している。
その力は、やはり僕が望んだものだからなのだろうか？
だとしたら、それはいつのことだろう？
どうして僕は、そう望んだのだろう？
「……僕は、どうして……」
顔を埋めたまま、僕は呟く。
独り言は静まり返った部屋の四方に散り、壁に吸い込まれるかのように消えていった。
目を閉じる。
睡魔には及ばないが、まどろみが少しずつ押し寄せてきた。
思い返せば、今日は今日でやけに多忙な一日だったような気がする。
一介の高校生の日常としてはあまりに現実離れした一日だったが、終わってしまえばそれも所詮は日常の一部分に過ぎない。
誰も知らない、知ることがない僕の中にある日常。
歪み、崩れ、堕ちる。
僕は渦の中にいた。
螺旋を描くような深い渦の中で、今もなお徐々に中心に向けて引きずり込まれていこうとしている。
抗うことはできず、足掻くこともできず。
ただただその流れに身を任せて、やがてもう一つの現実を見つけ出す。
それはいつも、いつの日も、僕達の生きるこの世界の隣に、知ら

ず知らずのうちに存在していたもので。
交わらない平行線のように、僕達がただその存在に気が付かなかっただけで。
理由もなく。
原因もなく。
あえて言葉にして例えるのならば、それはまさしく運命という、身も蓋もない屁理屈の究極形の言葉によって表されるのだろう。
その運命の中に、どうして、僕は……。

「――……教えてくれ。一体、何が、誰が……僕を、選んだんだ？　……誰でもいい、教えてくれよ。ねぇ……」

目を閉じ、ふいに頭に浮かんだのはその名前。
この身に宿る、巡る風。

「――……答えてよ……シルフィア……」

そしてそれは、本当に。
僕のその言葉に応えるかのように、起こった。

「……？」

僕の指の中の『Ｒｉｎｇ』が、激しく光を放ち始めた。
カーテンを閉め切った薄暗い部屋の中が、瞬く間に淡い光に包まれる。

「……っ！」

その光の眩さに、僕は両腕で視界を遮った。
まともに目を開けていられない。
暗い夜道で、突然に車のヘッドライトを焚き付けられたみたいだ。
そして、さらに変化は続いた。
眩い光の中、次に感じたのは身を包むような優しい感覚だった。
それは仄かに甘い、春風のような香りと暖かさを運び、僕の目の

前で少しずつ集束していった。
光が収まる。
ようやく僕が目を開くと、そこには緑色の光に包まれながら微かに渦を巻く、風の姿があった。
その姿が、見る見るうちに更なる変化を遂げていく。

輪郭が現れ、点と点を線で結ぶかのように。
その光は確かに、人の形を形成していった。
いや、もはやそれは人そのものだった。
僕は我が目を疑うよりも、まずその幻想的ともいえる美しさに見とれてしまっていた。
流れるように長い、エヴァーグリーンの髪。
整った顔立ちと白い素肌、瞳の色も髪と同じ澄んだ紺碧を覗かせる。
真っ白な、ローブのような衣服に包まれた体躯は、華奢という言葉がよく似合うほど細身だった。
性別で言えば、十中八九女性だとは思う。
ただ、僕はその表現が正しいかどうか分からない。
ピンと長く伸びたその特徴的な耳の形だけが、僕の中で彼女が人間ではないという事実を告げていた。
マンガやゲームの知識でしかないが、これは僕も知っている。
彼女はまるで、エルフと呼ばれる森の妖精のような出で立ちをしていた。
「……」
僕は言葉が出なかった。
目の前でしだいに和らいでいく緑の光に見とれながら、呼吸することさえも忘れそうになっていた。
やがて、最後にまた一つ優しい風が彼女を包んだ。
光は彼女の中に溶けるように消え、部屋の中には元通りの静寂が訪れた。

シンと、空気さえも凍りそうなほどの沈黙。
それを最初に破ったのは、目の前の彼女だった。

「――ようやく会えましたね、我が主よ。本来ならすぐにでも御前に姿を見せるべきでしたのですが、力の解放に思ったより手間取ってしまったことをこの場でお詫びいたします」

と、実に礼儀正しく、そして美しすぎるほどの声で彼女は詠うように言った。

僕の頭の中に、その声が反響する。

その声を、僕は今までにも何度か聞いたことがあったからだ。

しかしそれでも、まさかという疑念が拭いきれない。

だって、まさかこんなことが……。

「……君、は……？」

半ば震えた声で、僕はそれだけを呟いていた。

聞くまでもない問い。

すでに僕の中で、答えなど決まっていたのだから。

しかし彼女は、まるで何事もなかったかのように、相変わらずの美しい音色の声で言葉を続けた。

「――お察しの通りです。我が名はシルフィア。貴方の持つ『Ｒｉｎｇ』に封印されし、風の力を司る古よりの精霊」

僕はようやく、遅すぎる瞬きを一つ、繰り返していた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３３：緊急召集

幻なんかじゃなかった。
目元をいくらこすったところで、目の前の光景は蜃気楼のように消え去ることはない。
例えようのないほどの存在感。
にもかかわらず、僕の目の前の彼女はどこか希薄だった。
「……君が、シルフィア……？」
僕はもう一度、その風の名前を呟いた。
すると彼女……シルフィアは、どこか柔らかく微笑んで小さく頷いた。
「信じられない、といった顔をしていますね、主よ。まぁ、無理もないことです。私自身、こうして人前に姿をさらけ出すこと自体、もうずいぶんと久しくなります。かれこれ、数万年ぶりでしょうか」
「す、数万年？」
計り知れないその単位に、僕は思わず身を乗り出していた。
「……ってことは、紀元前なんかよりもずっと前に、もう君は……シルフィアは……」
僕の言葉に続けるように、また一つ頷いてシルフィアは続ける。
「ええ、その通りです。この世界が西暦という起源を迎える、はるか昔。それこそ気の遠くなるような太古の時代から、私はすでに世界の深層意識の一部として存在を確立していました。私だけではなく、多くの精霊がその頃には自我を持ち、存在を確立していたはずです」
「多くのってことは、それじゃあ……」
「そうです。主の身近な存在で言えば、あの二人ですね。ヒムロ、そしてアスカと名乗っていましたか。彼らの持つ『Ｒｉｎｇ』にも、私同様に精霊が封印されています」

「……」

僕はただ、黙ってその言葉に耳を傾けていた。

にわかには信じられないことだが、目の前のシルフィアを見る限りは信じざるを得ないだろう。

「ですが主、今はそのことは大して問題ではないのです。私がこうして貴方の前に姿を現したのは、貴方に伝えておくべきことがあったからなのです」

「……伝えるべきこと？」

「はい」

答えて、シルフィアは一度静かに目を閉じ、音もなく開いた。

「――八つの封印が、時を迎えます。時は満ち、開放の鼓動は始まりました。主よ、貴方はまず、己を探し出さなくてはいけない」

「……封印？　己を、探す……？」

僕は単語一つ一つを繰り返すように反芻する。

しかし、言葉とは単語がいくつも繋がって初めて意味を成すものであり、つまるところ僕には意味がさっぱり分からなかった。

「それって、どういう……」

僕がそう聞き返しかけたとき、ふいにまた、緑色の光が粒子のように湧き上がった。

「……っ、やはり、このままでは実体化の時間は短すぎたのですね……」

どこか苦しげな表情を見せ、シルフィアは言葉を漏らした。

「……主よ、まずは封印を探すのです。この街にある、八つの封印。その中の一つが、貴方の見つけるべき風の封印。それを開放すれば、私は……」

「シ、シルフィア？　どうしたんだよ、一体……」

「……申し訳、ありません。もう、時間が……」

謝罪の言葉と同時に、光はさらに強く輝きを放ち、シルフィアの

姿を呑み込むかのように包んでいく。
「……早く、開放を……。頼みました、主よ……」
一際強く溢れた光は、急激に集束していく。
やがて光は球となり、全てを包み込んだまま静かに霧散していった。
最後に弾けた緑の光の名残が、蛍火のように部屋の中を舞っていた。

夕食が終わり、僕はいつもと同じように寝るまで時間を部屋の中で過ごしていた。
時刻はまだ夜の十一時を少し回ったところ。
健全な学生諸君は明日に備えて安眠を始める頃なのかもしれないが、僕にとってはどうでもいいことだ。
「……」
ベッドの上に大の字に寝転がり、見上げるのは電灯の明かりでわずかに黄ばむ白い天井。
カチコチと、枕もとの目覚まし時計だけが部屋の中に無機質で機械的なメロディを響かせていた。
「……結局、僕は何をどうすればいいんだ？」
体を横倒しにしながら、僕は呟く。
シルフィアの言葉をそのまま借りるのなら、僕はまずこの街にあるという八つの封印の一つである、風の封印を開放しなくてはいけないらしい。
しかし僕の知る限り、この街にそんないわくつきの場所は見当がつかなかった。
封印という以上は、やはり何かしらとして古いものや神秘的な場所を連想させる。
そんな場所が、この決して大きくもない街に八ヶ所もあるという

のだから驚きだ。
とはいえ、やはり僕には全く見当がつかない。
自慢にもならないが、歴史は苦手教科だ。
普段学校で習うような世界史や日本史は嫌でも覚えないと試験に影響するわけだが、逆にこの街の歴史なんて知っていたところでどうというわけでもない。
まぁ、それでも生まれ育った街であるだけ、何も知らないというわけではない。
ただそれはやはり、僕が生まれた後に起こった出来事くらいのものでしかない。
それ以前にこの街がどういう経緯でどう発展したのか、過去のこの土地周辺はどんな環境だったのか、などと、そんなことは全くもって知るはずがない。
今までだって知ろうとも思わなかったけど、今回はそういうわけにはいかないらしい。
どうやら僕は、まずはこの街の歴史について知ることから始めなくてはいけないようだ。
「……って言っても、どうしようかな……」
街にも一応、図書館はある。
確か隣には歴史民族資料館も連なっていたはずなので、そこで調べれば少しは何かが分かるかもしれない。
いや、もしかしたらそんな回りくどいことなどしなくても……。

「……氷室だったら、何か知ってるかな」
ふと思い立って、僕は体を起こして机の上に投げ出したままの携帯電話を掴んだ。
メモリ機能を呼び出し、氷室の名前と電話番号がディスプレイに表示される。
正直言って微妙な時間帯だったが、まぁ今の時間に氷室が寝てしまっているということは考えにくい。

迷惑かもなとも思いつつ、僕は発信ボタンを押した。
一応こちらとしても進展があったわけなのだから、報告をするのは悪いことじゃないだろう。
電話越しにコール音が連動する。
三回……四回。
「……留守かな」
五回……六回。
氷室は出ない。
仕方ないかと思いながら、僕が通話を終わらせようとしたそのとき。
プツッという電子音が、僕の耳の奥に届いた。
「もしもし？　出遅れてすいません。どうかしましたか、大和？」
ややあって、通話口の向こうから氷室の声が聞こえてきた。
「あ、氷室？　僕だけど。その、夜遅くにごめん」
「いえ、構いませんよ。まだ早い時間帯ですしね。それに、わざわざ電話で連絡するくらいなのですから、何かあったのですね？」
「……うん。一応、ちょっとだけど進展があったから、報告しておこうと思って」
「進展、ですか。興味深いですね。しかしそうとなると、少し長くなりそうだ……」
電話の向こう側で、氷室は少し考えるような間を作っていた。
「もしもし、大和？」
「うん、何？」
「明日も学校が控えているあなたにこういうのは申し訳ないんですが、少し出てこれますか？」
「出るって、外に？」
「はい。確認しますが、飛鳥にはまだ連絡は？」
「いや、まだしてないよ。まずは氷室に相談しようと思ったから……」
「だったらなおのこと三人で集まった方がいいでしょう。飛鳥には

私から連絡をつけておきます。そうですね……私の事務所の近くに、深夜まで営業している喫茶店がありますから、そこにしましょう。適当に理由をつけて外出できますか？」

「……できなくはないけど」

「結構。でしたら、先日私が大和を自宅付近まで送り届けて、車から降ろした場所がありますね？　あの坂の下のところです。あの場所で今から十五分後、迎えに行きます」

「分かった。そこで待ってればいいんだね？」

「頼みます。それと、言うまでもないですができるだけ目立たないように。もっとも、夜の外出の時点ですでにいくばくかは不審なわけですがね」

「分かった」

「では、また後ほど」

プツリと、電子音が鳴って通話は終了した。

「さて、と……」

どうしたものだろうか。

母さんは早ければもう間もなく寝てしまう頃だろう。

いっそ眠ってしまってくれたほうが抜け出す分には楽だが、それはそれで後々苦労しそうな気がした。

「ベタだけど、友達の家にちょっと行ってくるって感じでいいかな」

そうと決まり、僕は手早く服を着替え始めた。

夜も徐々に深まり、寒さも日に連れて厳しくなっている。

風邪を引かないように普段より少し厚着して、携帯電話と財布だけを上着のポケットにねじ込み、僕は準備を整えた。

部屋の明かりを消し、出るその前に、僕は何となく閉め切ったままのカーテンをそっと覗いてみた。

真向かいの唯の部屋の窓も、今はカーテンがかかっていた。

明かりが見えるから、まだ起きてはいるんだと思う。

「……」

隙間からその明かりを見て、僕はまた少しだけ後悔にも似た感情を覚えていた。
どうにもならないと知っていながら、だからこそもどかしさを隠せない。

『――どうして隠すの？　心配させたくないから？　私はそんなに頼りにならないの？』

その言葉が、胸を打つ。
答えを持たない僕は、そっとカーテンを閉め直した。
ごめんと、聞こえないその言葉を窓越しの向こうに投げ捨てて……。

寒空と街灯の下、白い息が舞い上がった。
まだ暦の上でもようやく冬になったばかりだというのに、気温の冷え込みは真冬日のそれだった。
厚着してきてよかった。
上着がなければ、僕は寒さに身を震わせていたことだろう。
氷室が指定した時刻まで、もう間もなくだ。
目の前を通る二車線に目を向けると、いくつかの車がヘッドライトを照らしながら行き来していた。
と、その中に一つ、街灯の明かりに照らし出されながら白い車体がゆっくりとこちらへやってきた。
見覚えのあるその車は確か氷室のものだったはずだ。
案の定、その車は僕の立つ街灯の間近に停車し、すぐに運転席の窓越しに氷室が顔を覗かせた。
「お待たせしました。あまり長くするのもどうかと思いますので、すぐに行きましょう。さ、後ろへ」
ガチャリと、後部座席のドアのロックが外れる音がする。
ドアを引き中に入ると、そこにはすでに飛鳥の姿があった。

「大和、早く閉めて閉めて。私寒いの苦手なんだよー……」
「あ、ああ、ごめん」
バタンと、僕はドアを閉める。
「さて、それでは行きましょう」
僕を乗せ、車は再びやってきた道を戻り始める。
すっかり暗がりに包まれた街道は、街灯の明かりがあるといってもまだ薄暗さを隠せない。
夜の闇は深く、僕達はすでに暗い森の中に迷い込んでしまったかのようだった。

「うー、寒い寒い……」
と、隣でやたらと寒そうに両肩を震わせる飛鳥が、そんな緊張感を全て吹き飛ばしてしまっていた。
これはまるで寒さに震える捨て猫のようではないか。
「……はい、飛鳥」
僕は着込んでいた上着を脱ぎ、飛鳥に差し出した。
「え？」
「寒いんでしょ？　少しサイズが大きいかもしれないけど、ないよりはマシだよ」
「けど、それじゃ大和が寒いんじゃ……」
「僕は平気。一応厚着してきてるからね。ほら、風邪引いても知らないよ？」
「あ、うん。ありがと……」
飛鳥は意外と素直に受け取ると、やはり思ったとおりブカブカの袖口に苦戦しながら僕のコートに袖を通した。
「おやおや。これじゃまるで優しい兄と手の掛かる妹みたいですね」
運転席の氷室が、どこか茶化すようにそう言った。
「ちょっと氷室。手の掛かるってのは余計じゃないの？」
「おや？　私はピッタリだと思いますがね。どうです、大和？　兄としての立場だったら、飛鳥は手が掛かりそうじゃないですか？」

その問いに、いち早く飛鳥が僕を振り向いた。
どうなのと、無言でその目が聞いてくる。
「……えーっと……」
困った。
一体僕は、どう答えたらいいんだろう……。
口ごもる僕を尻目に、氷室はまた少しおかしそうに笑っていた。
一方飛鳥は、ふてくされたような照れたような、実に曖昧な表情で僕と氷室を交互に睨んでいた。
結局僕は、どう答えることもできなかったのだけど……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３４：始まりの地図

喫茶店ブラウニーの店内はひっそりとした空気に包まれていた。
まぁ、さすがに時間が時間なので客足も数えるほどで、むしろこんな時刻に来店した僕達の方が、店側からすれば物珍しいのかもしれない。
一応、営業時間は深夜二時までとなっているようなので、時間には得に問題ないだろう。
僕達三人はカウンターでとりあえず飲み物の注文を済ませ、品物を持って店の奥の方にある四人掛けのテーブルに陣取った。
各々にホットの飲み物を頼んだので、僕達のテーブルからは暖かな湯気が白く立ち上っている。
鼻腔をくすぐるカフェオレの香りを感じていると、ようやく僕らの対談は始まった。
「さて。単刀直入にいきましょう。ずばり大和、あなたが電話越しで言っていた、進展というのは一体？」
話を振られ、僕は飲みかけのカフェオレをテーブルに戻し、口の中の液体を飲み干してから答える。
「あ、うん。その、信じてもらえるか分からないんだけどさ……」
「信じるに決まっているでしょう。仮にも同じ境遇のあなたが言ううことです。疑う要素はありません」
「……うん。じゃあ……どう説明すればいいのかな……」
僕は少し頭の中を整理して、先刻のことをどう口に出そうか考える。
しばらく考えたが、やはりうまく一つの文章にまとめることは難しかった。
なので、僕はとりあえず体験したその出来事を、文章で言うところの箇条書き要領で話すことにした。

まず、何らかの理由で僕は自分の持つ『Ｒｉｎｇ』に宿る風の精霊、シルフィアと話をしたということ。
その話の内容は、簡約すると八つある封印を開放してほしいということ。
開放することによって、どうやら『Ｒｉｎｇ』の力はさらに発揮されるらしいということ。

と、僕は要点だけをまとめてそんなことを話した。
ところが……。
「……」
「……」
氷室も飛鳥も、反応は全くと言っていいほどない。
というより、どういう反応を示せばいいのか分からないといった表情を見せている。
「二人とも、聞いてる？」
念を押して、僕はそんな言葉をかけた。
すると今更ながらにハッと我に返ったように、氷室は表情を変えた。
「……え、ええ。聞いてます。聞いてますが……」
言いかけて、氷室は隣の飛鳥に視線を向けた。
対する飛鳥も氷室と視線がぶつかり、逆にどうすればいいのか分からないような曖昧な表情を見せていた。
「……大和、それは決して、あなたが見ていた夢の話とか、そういうのではないんですよね？」
「違うよ。僕は現実に、この目で見たんだ」
まぁ、無理もない話かもしれない。
確かに僕らは非常識極まりない力の一端をそれぞれに担っているわけだが、さすがに話のスケールが膨大になりすぎだと僕も思った。
『Ｒｉｎｇ』にはそれぞれ、属性を示す力が宿っている。
ここまでは実際に、能力を使いこなせるのだから理解も及ぶだろ

う。

しかしそこに、さらに追い討ちをかけるように精霊という存在が絡んでくると、さすがに話はこじれてくる。

精霊とはつまり、僕達の中の単語の意味としては目には見えない大多数の存在の一つでしかない。

フィクションの世界では多用される要素ではあるが、そんなものが実在するかと言われれば立証はできないだろう。

仮にも今の時代、科学技術の進歩が日を追うごとに目まぐるしく進歩しているのだ。

言わば僕達は完全に科学サイドの世界の中で暮らしているわけで、そこにファンタジー世界の要素を無理矢理に組み込もうとしても、結果として僕達の理解は混乱という結論にしか至ることはできないのだ。

「……まぁ、そうなるよね、きっと」

僕は半ば予想できていた二人の反応に小さき溜め息を吐き出して、もう一口カフェオレをすすった。

「あ、いえ。疑っているわけではないんです。ただ、こればかりは私も飛鳥も、まだ未経験のことなんですよ。ですから、口頭でそう説明されてもイメージが沸かないというか……」

「精霊、かぁ……。ホント、改めて私達が現実離れした境遇にいるんだなって実感させられるよね」

「え？　二人は、まだないの？」

僕は問い返す。

「ないの、とは？」

「だからその。自分の『Ｒｉｎｇ』の精霊と会ったこととか、声を聞いたこととか……」

僕の言葉に二人は向き合い、しかしどちらからともなく首を横に振り、僕に否定の意を告げた。

「……そう、なんだ。だったら、僕の方もちょっと自信がなくなっ

てくるような……」
「いえ、そうでもないでしょう」
と、半信半疑の意を唱えたままの氷室が口を挟む。
「理由は分かりませんが、恐らく大和の体験は夢幻なんかではなかったと思います。ただ、それなら同じことが起こる可能性が私にも飛鳥にもあるはず。それが起こっていないということは、何らかの起因となる要素が私達にはまだ足りていないのでしょう。逆に言えば、大和はその条件のような何かを満たしたため、自分の契約した精霊とコンタクトをとることができた。そう考えるべきだと思います」
「でもさ、そうだとしたら、その条件ってのは一体何なの？」
「さぁ、そこまでは今の段階では何とも……」
僕達の会話は一時中断し、短い沈黙が訪れる。
「まぁ、不明要素を追求しても迷宮入りするだけです。今は分かることから進めましょう」
氷室の切り返しの言葉に、僕も飛鳥も無言で頷いた。

「では二つ目ですが、確か、八つの封印でしたか？」
「うん。少なくとも、シルフィアはそう言ってた。この街には、八つの封印がある。その中には、風の封印っていうのもあって、そこを開放すれば僕の『Ｒｉｎｇ』は更なる力を解放できるんだって……」
「……封印が八ヶ所、ですか。パッと考え付くようなところでも、心当たりになる場所は全くと言っていいほどありませんが……」
「封印って言うくらいなんだし、やっぱり古めかしい場所とか、いわくつきの場所になるのかな？　でもそれって、ますますないんじゃない？　この街って、比較的新しい感じだし、何年か前に大規模な都市開発があって、今の姿になってるわけだし……」
「ええ、そうです。確か、五年前だったと思いますよ。駅前を中心に大通りが展開され、交通の便がよくなっています。アーケードや

繁華街の辺りも、同時期に展開されていたと思いますが……」
言いかけて、氷室は何かに気付いたような表情を見せた。
「ああ、そうか。逆に言えば、五年前と今の街並みは大分変わっているはずですね。つまり、五年前のこの街には、そういういわくつきの場所がいくつかあったのかもしれません。私も昔のことは正確には覚えていませんが、資料館などで調べれば何か分かるかもしれません」
「五年前、かぁ……。ダメだ、私は何にも覚えてないや」
「……僕も、あんまり覚えてないな」
「まぁ、それは私の方で調べておきますよ。二人は明日も、いつもどおり学校があるでしょうからね。何か分かり次第、電話かメールで連絡します」
氷室の提案に、僕は素直に頷いておいた。
僕も明日の放課後には歴史民族資料館に足を向けるつもりだったが、その手間はこれで解消できそうだ。
「それにしても、急展開とはこのことですね。今まで何も見えてなかった霧の向こう側が、急に晴れてしまったような感覚です」
「だね。正直、いい流れなのか悪い流れなのかは分からないけどさ」
「封印の開放、か……。開放すると、どうなるんだろ？『Ｒｉｎｇ』の真の力が解放されるってことらしいけど……」
「今はまだ何とも言えませんね。それが単純に、力の強化を示しているだけのものなのか。それとも、他にも何か起こることがあるのか。ただ、私は単に力の解放だけで済むはずがないと思うんですがね……」
「それだけじゃ済まないって、例えば？」
飛鳥が問う。
しかし氷室は答えずに、コーヒーを一口含んで飲み干した。
「……今は何とも。ただ、もしそうなるのなら、何らかの形で影響が現れるでしょう。それこそ、現実のこの世界を巻き込むほどの影響力で、ね……」

意味深に言って、氷室はカップをテーブルの上に戻した。

そして再び沈黙が流れ、その頃になってようやく、僕は話そうと思っていたことを思い出していた。

「あ、そうだ」

「ん？」

僕の言葉に、二人が視線を移す。

「夕方、話そうと思って忘れてたことがあったんだけど……」

「聞きましょう。この際、どんな些細な情報でも必要です」

「それが……」

言いかけて、僕はやや押し留まる。

どこまでを話せばいいだろうか。

かりんとの交戦についてはもう話してあるので、その部分は割愛するとして。

僕の中には話すことが二つある。

一つは今朝の、あの正体不明の感覚に襲われ、薄れ行く意識の中で見えた赤い記号と何かの図形。

もう一つは、かりんと出会う少し前に、永久の木のある場所で一人の少年と出会っていること。

しかし、後者はどこか話すことがためらわれた。

なぜなら、その少年と出会うきっかけにもなったあの奇怪な色をした真昼の空の異変は、氷室や飛鳥はその目で見ていなかったからだ。

ここでさらに混乱を招くことは好ましくない。

それよりも、今朝のあのイメージの中にも八つの点が出てきていたことを僕は思い出す。

正確には点の数は九つだが、そのうちの一つは中心を示すものなので実際は八つと見ていいだろう。

その八という数は、どういう奇遇か、この街にある封印の数と一致する。

こうなった以上、それはもはやただの偶然で片付けておくことはできない事実だ。
僕はその旨を、二人に話した。
「……なるほど。そこにも八つの点が出てきたんですか……」
口元に手をあてがい、氷室は考え込むように椅子の背もたれに体重を預けた。
「無関係ってわけじゃなさそうだよね。ここまで重なって、はいただの偶然でした、なんてさ。そんなの逆に不気味だよ」
「僕もそう思うんだけど……」
各々に意見を口にしながら、しかし決定的な意見は出てこない。
こうなると、考え込んでいる氷室に期待するしか方法はなさそうだ。

「……大和、あなたが見たというその図形と、図形の上に配置された点。それは今もはっきりと思い出すことができますか？」
「え？　あ、うん。丸っきり正確ってわけじゃないけど、大体のイメージなら……」
「結構です。ではそれを……」
氷室は車の中から持ち出してきた鞄の中から、ゴソゴソと何かを取り出し始める。
テーブルの上のカップやら食器やらが端にどけられ、真ん中には取り出した一枚の模造紙とボールペンが置かれた。
「大体で結構ですので、その点と図を書き記してみてくれませんか？」
「分かった。やってみるよ」
僕は手渡されたボールペンを握り、模造紙の上にまずは一つ、大きな丸を書いた。
それが僕の見たイメージの中の、何かの中心に当たる点である。
そこからまずは縦横に、ちょうど東西南北を分かつかのように四つの点を書く。

さらに、北東、北西、南東、南西に当たる位置にさらに四つの点を書く。

それはちょうど、直線で結べば正八角形を象るような位置取りだ。

「点の位置は、ちょうどこんな感じで……」

「……なるほど。では、図というのは？」

「それは、確か……」

やや歪な形をしていたので、個々から先は少しうろ覚えだ。

僕は記憶の糸を手探りに、その形を書き上げていく。

八つの点を取り囲むように、しかしどこか不安定ささえ感じさせる線を伸ばしていく。

ちょうど一筆書きで、その歪な形は書き上がった。

線は点を全て取り囲んで、やはりどこかで見たことのあるような形を見せている。

しかし、それが何であるかは僕にはまだ思い出せない。

すごく……ものすごく身近なものだと思うのだけど……。

「これは……！」

しかし、氷室の反応は早かった。

図形が書き上がるなり、模造紙を食い入るように凝視する。

「……なるほど。やはりこれは、八つの封印を示しているのですね……」

一人納得し、氷室は頷いた。

「ちょ、ちょっと氷室、一人で納得してないで、私達にも分かるように説明しなさいよ」

隣の飛鳥が口を挟むと、氷室はやや落ち着いた物腰で模造紙を指差して説明を始める。

「二人とも、この形に見覚えはありませんか？」

たった今僕の書き上げたその図を指差し、氷室は問う。

しかし、僕はもちろんのこと飛鳥も特にパッと思い浮かぶものはない。

だが、やはりどこかで診たことがあるような気がしてならない。
何なんだろう、この妙な感覚は……。
僕は一体、何を見落としているんだろうか……。
「……ダメ、分からない。でも、どっかで見たことがあるような気はするんだけど……」
どうやら飛鳥も僕と同じ感覚を抱いているようだった。
「灯台下暗しとは、このことかもしれませんね。身近すぎて、逆に気付けない。これはその典型かもしれません」
眼鏡を押し上げ、氷室は小さく深呼吸した後、呟くように言った。

「――この形はこの街の……月代市全体の地図になっているんですよ」

その言葉で、ようやく僕は引っかかりを外すことができた。
そうだ、そうだったんだ。
この形は紛れもなく、僕達が住むこの深山町を含んだ、月代市全体の地図になっていたんだ。
「ま、待って。ってことは、この八つの点がある場所って……」
飛鳥はわずかに身を乗り出し、呟く。
「ええ、そういうことでしょう」
氷室はそこで一度言葉を区切り、すぐにまた続ける。

「――実際の地図と照らし合わせ、それぞれに点に該当する場所。そこが恐らく、八つの封印の場所です」

こうして、舞台はまた一つ新たな展開を見せ始めた。
厚い雲に月が隠れた、光の降らない夜のことだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３５：すれ違い交差点

一夜が明け、すでにこの日も夕方になろうとしていた。
ちょうど放課後を迎えた頃に、僕の携帯に一通のメールが届いた。
差出人の名前は氷室で、それがつまりどういう意味合いの内容のものなのか、僕には大方の想像がついていた。
「あ、ごめん。僕ちょっと先に帰るよ」
始まったばかりの雑談の輪の中から抜け出して、僕は鞄を手に掴む。
「あれ？　何だ大和、用事でもあんのか？」
「うん。ちょっとね……」
「ふーん。まぁいいけど、お前最近、妙によそよそしくないか？　それに昨日だって、いきなり体調崩したみたいだしさ」
悟の何気ない言葉が、針のように僕の胸に突き刺さる。
分かっている。
そこに悪気は何一つないのだということは。
むしろ負い目を感じているのは、他ならぬ僕の方だ。
「大和、何かあったのか？」
続くように健史が聞く。
しかし僕は答える術を持たず、やはり愛想笑いのような笑みを浮かべて何でもないよと告げることしかできなかった。
「二人とも、その辺にしておきなよ。大和、単純にまだ体の調子が戻ってないだけだよ、きっと」
意外にも、助け舟を出してくれたのは唯だった。
「そうだよ。昨日も丸一日保健室で休んでたんだもん。一日くらいじゃまだ本調子に戻らないって」
続くように美野里が声を揃える。
さすがに女性陣にこう言われては、悟も健史もただただ言葉を濁

すだけだった。
「いや、悪い。そういうつもりじゃなかったんだけどよ。ただ、何となくそんな気がしてさ……」
「悪い、大和。あんま気にしないでくれ」
「あ、うん。大丈夫。それじゃごめん。急いでるから……」
軽く挨拶を交わして、僕は教室を走ってあとにした。
背を向けた友人達に、どこか申し訳なさを感じずにはいられなかった。
そんな僕の背中を、最後まで唯が見送っていたことを、僕は知らなかった。
「……」
その目がどこか、悲しさを隠し切れずにいることも。
僕は何一つ、知らないままだった。

僕は歩道の上を早足で歩きながら、先ほど届いた氷室からのメールの内容に目を通す。
内容は実に簡潔なもので、要約するとこうなる。
昨夜の話し合いの際に出た、八つの封印に関していくつか分かったことがあるので、集まってほしい。
場所は氷室の事務所、時刻は予定では五時前後を目安にするが、早く来れるなら繰り上げるとのこと。
もっとも、僕は返事を出すよりも早くこうして事務所に向かっているわけなのだが。
携帯のディスプレイに表示されたデジタル時計は、ちょうど四時を示しているところだ。
集合予定時間よりは大幅に早いが、急ぐに越したことはないだろう。
正直、僕も昨日の夜からずっとそのことが引っかかっていて気に

なって仕方がなかったのだ。
結局今日も、学校で過ごす時間もそのことばかりを考えていた。
おかげで授業の内容なんて、半分ほども頭の中に残ってはいない。

大通りの交差点で赤信号に引っかかり、僕は足を止めた。
交通量の多い道路を横目に見ていると、僕が歩いてきた歩道のちょうど反対側の方から見慣れた人影がこちらにやってきていた。
「あれ？」
と、僕は思わず小声で呟いていた。
その声が聞こえたのか、それとも向こうも僕の存在に気がついたのか。
その人影は僕の姿を確認すると、やや小走りに駆け寄ってきた。
その小さな少女が走るたびに、嫌でも目立つ黒いフリルだらけのゴスロリの衣装はヒラヒラと揺れた。
ただでさえ注目を集める格好なのに、それを後押しするかのように、腕の中には真っ黒なウサギのぬいぐるみを抱えている。
そのウサギ、何もかもが真っ黒なのに目だけがウサギらしく赤く、両耳に備え付けられたリボンだけは対照的に白い。
パタパタと、そんな足音が聞こえるくらいの小さな足取りで、少女はやがて僕の目の前にやってきた。
僕と少女の身長差の都合で、僕は思いっきり少女を見下ろし、少女は逆に僕を見上げる形になってしまう。
そして何か言いたそうに、少女は……かりんはジッと、僕のことを見上げていた。
「……」
相変わらずの無言。
寡黙な黒い少女は、それこそ人形のような目でただ僕を見つめていた。
「……えっと……」
結局その沈黙に耐えられなくなったのは僕の方で、そんなありき

たりな言葉で口を割ることになった。
「……かりん、だよね？」
恐る恐る、僕は訊ねる。
すると、答えずにかりんはコクンと首を縦に振った。
「えっと、何してるの？　こんなところで」
「……」
そう聞くと、かりんは答えずにまた僕のことをジッと見つめ始めた。
何だかその視線が攻め立てられているように思えてしまい、僕は不思議と後ずさりをしてしまう。

「……ヤマト」
「え？　あ、うん」
ふいに名前を呼ばれ、僕は聞き返す。
「……」
「……」
しかしそれだけで、かりんはそのあとに言葉を続けることはなかった。
一体僕はどうしたらいいんだろう……。
などと、とっくに青信号に変わった横断歩道の前で立ち往生しながら、僕は頭を抱えていた。
「……えっとさ」
今はちょっと急いでるからと、そう言うよりわずかに早く、ようやくかりんは口を開いてくれた。
「……ヤマト。また会えた。こんばんは」
「……へ？　え、あ、うん……こ、こんばんは……？」
どうして疑問形なのか、僕自身よく分からなかった。
そして今更になって、僕とかりん以外のもう一人……もとい、もう一匹も賑やかに口を開いた。
「やぁやぁヤマト。意外と早い再会になったものだね。元気にして

たかい？　え？　オイラ？　オイラはいつでもハッピーさ。そうだね、どれくらいハッピーかと言うと、アイスの当たりが三連続するくらいにハッピーだよ」

「……いや、僕まだ何も言ってないし。それと、ずいぶんと現実的で、なおかつ安上がりな幸せだね、クロウサ……」

「アッハッハ。安い幸せほど平和なものはないからね。高い幸せは、いつか必ず返り討ちを食らうことになるんだ。覚えておくといいよ」

「……そ、そう」

僕は急激に頭が痛くなってきた。

知恵熱とまではいかないが、そろそろぬいぐるみとして接するのか人間として接するのかを決めておく必要があるかもしれない。

「……クロウサ。ちゃんと。挨拶して」

「ん？　ああ、そうだったそうだった。オイラとしたことが、紳士のたしなみを忘れるとはね。うっかりしてたよ。ゴホン。では遅ればせながら、こんばんはヤマト。ご機嫌はいかがかな？」

「……いや、特によろしくもないし、悪くもないけど」

「うんうん。つまり、平凡ってことだね」

「……そうなるの、かな……？」

相変わらずクロウサは実にマイペースだ。

この黒いウサギ、決して腹話術なんかで喋っているわけではないのはすでに承知の上だけど、二度目の今でもまだ信じられない。

一体その×印の口のどこから、こんな軽快な少年のような声が発せられているのだろうか。

考えても無駄だと知りつつも、僕は少しだけ究明を求めてしまいそうになる。

「……ヤマト」

「え？　あ、何？」

かりんに呼ばれ、僕は視線を戻す。

「……ヤマトは。ここで。何しているの？」

「あ、僕はその……ちょっと、人と会う約束があるんだ。今からその、待ち合わせの場所に向かうところなんだ」
「……待ち合わせ？」
「そう、待ち合わせ」
「む？　もしかしてヤマト、それはデートというやつなのかな？　いやいや、君も隅に置けないなぁ」
などと、クロウサは勝手に話を進めているようなので今回は無視しておく。
「……それは。ヤマトの。友達？」
「え？　待ち合わせをしてる人のこと？」
コクンと、かりんは答えずに頷いた。
「……うーん、友達って言うよりは、知人って言うか……仲間って言うか」
「……仲間？」
聞き返すかりんに、僕はハッとなった。
言い方が悪かったかもしれない。
僕が仲間と言えば、それはイコール『Ｒｉｎｇ』を持つ能力者に他ならないことになるからだ。
しまったと思ったときにはもう遅く、かりんはわずかに怪訝そうな表情を見せていた。
「……ヤマト。それは。ヤマトの仲間の。能力者のこと？」
案の定、かりんは真っ直ぐに意味を捉えて聞き返してきた。
そう聞かれると、僕はやや答えづらい立場だ。
「えーっと……それは……」
「……」
戸惑う僕を変わらぬ視線で見上げたまま、かりんは無表情のままだった。
僕はどう答えるべきなのだろう。
一応口約束ではあるけど、かりんとはもう戦わないということに

なっているし、それはかりんも承諾してくれてはいるようだ。
そうでなかったら、僕達は路上でこんなに悠長な会話をしていることはないだろう。
かといって、迂闊に油断すればそれはそれで氷室や飛鳥は大反対するだろう。
口では何とでも言えるに決まっているとか、そう言い出すに違いない。
悔しいけど、でもそれは事実だった。
かりんが僕を騙しているとは思えない。
初めて会ったときに垣間見せたあの、屈託のない少女そのものの笑顔は、決して偽りのものではないと思う。
いや、僕はそう信じたい。
「……まぁ、一応そうなるのかな。多分、かりんはまだ会ったこともないと思うけど……」
遠まわしに言葉を探しながら、僕は曖昧な返事をした。
しかしその様子にかりんは特に感情を変化させることはなく、変わらない視線で僕を見上げていた。
「……その人達は。ヤマトの。味方なの？」
「……少なくとも、僕はそう思ってるよ」
「……それは。相手も同じ？」
「それは……はっきりとは言えないけど、そうだと僕は信じてる」
「……そう。ヤマトは。強いね」
「強い？　僕が？」
僕は我が耳を疑った。
そんなわけはない。
だって僕はすでに、目の前のかりんとの交戦の際に敗北を喫したようなものだったのだから。
「そんなことないよ。むしろ僕から言わせれば、かりんの方が……」
「……ううん。違うの。そういう。意味ではなくて……」
そう言いかけたところで、かりんはふとその先の言葉を無理矢理

呑み込んだように見えた。
「……ううん。やっぱり。何でもない」
「……そう？　ならいいけど……」
かりんの様子はどこかおかしかった。
何かに迷っているような、戸惑っているような、そんな困惑を僕はわずかに感じ取っていた。
「……引き止めて。ごめんなさい。じゃあ。私は行く」
「え……あ、うん」
そしてかりんはそれだけ告げると、さっき僕が歩いてきた道の方へと歩き出した。
その足取りはどこか重く見えて、小さすぎる背中に見えない何かを背負っているような、そんな印象を受けた。

「……かりん」
僕はその背中を一度だけ呼び止めた。
ピタリと止まり、半分だけかりんの顔が振り返る。
「……その、何かあったの？」
「……」
かりんは答えなかった。
首を縦にも横にも振らず、ただ僕を見返しているだけだった。
夕陽が差し、頬の色が紅潮しているようにも見える。
やがてかりんは、その顔に初めて会ったときに見せたものと同じ、あの優しい笑顔のカケラを浮かばせて、言った。

「――……ううん。大丈夫。ヤマトのおかげで。少し。楽になれた。ありがとう。またね。ヤマト」

その声は真っ直ぐで、一点の曇りさえ感じさせない微笑みを携えていた。
僕の返事を待たずに、かりんはそのまま歩道の向こう側へと去っ

ていった。
そのとき僕が感じたものは、気のせいだったのだろうか。
去り際に何か一言喋りそうなクロウサが、無言だったこと。
それが僕の中に不思議な違和感を覚えさせ、どこか不安な気持ちにさせていた。
「……何が、あったんだ?」
僕の中で、それはもはや確信に変わりつつあった。
何かがあった。
けれど、それが何か分からない。
要するに、何の解決にも至らない。
信号が再び青に変わる。
動き出す人波に紛れるように、僕は足を動かし始めた。
最後にもう一度だけ、今はもう見えなくなったかりんの背中を探しながら……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３６：合わない辻褄

扉をノックし、押し開けるとそこにはすでに氷室と飛鳥の姿が揃っていた。
「やほ」
飛鳥が片手を挙げ、軽く挨拶をした。
「あ、遅れてごめん」
予定時刻には間に合っていたが、どうやら僕がラストだったようなので一言謝っておく。
「いえ、構いませんよ。ちょうどいい時間ですしね」
デスクワークをしていた氷室も腰を挙げ、僕達はいつものように向かい合うソファに座ることになる。
「さて。では早速ですが、二人に報告があります。言うまでもありませんが、昨夜の続きになります」
そう言うと、氷室はその手に持っていた一枚の紙をテーブルの上に広げた。
それはガイドブックなどの付録についてくるような、一メートル四方程度の大きさの地図だった。
そしてその地図の中心は、僕達の暮らすこの深山町を含む、月代市一体のものだった。
さらに氷室は赤いマジックペンを片手に、まず最初に地図のほぼ中央のその場所に丸をつけた。
「ここ。この場所がちょうど、月代の市の中心にあたる場所になります」
氷室が書いた赤い丸。
地図の上ではそこには何も記されてはいないが、そこにはこの街の人間なら誰もが知っているであろう一つの大木が聳え立っている。
それは永久の木と呼ばれ、呼び名の通りもうずいぶんと長い年月

を経てなお、倒れることなく佇む木だという。
「そしてここに、昨夜の大和の言葉をヒントに加えて八ヶ所の地点を割り出します。まずは東西南北にそれぞれ一ヶ所ずつ……」
言うと、氷室は長い定規を取り出して、南北と東西を分かつ二つの線を、中央の赤い丸を通過させて交差させた。
「さらに、ここから追加で四方向……」
続いて、今度は南東と北西を結ぶ線、南西と北東を結ぶ線を書き足していく。
見る見るうちに地図の上には合計四本の直線が書き出され、それらは等しく内角を四十五度ずつに分けた風車のような図だった。
「これで八ヶ所。さて、問題はこのあとなのですが……」
定規を脇にどけ、氷室はわずかに身を乗り出した。
「この線の延長上にあり、なおかつ過去に何らかのいわくがあった場所。私が昼間に調べた限りでは、残念ながらその場所は三ヶ所ほどしか見つけることができませんでした。その三つとは……」
再び赤いマジックペンで、氷室はまず一つ目の場所に赤い丸を書く。

「ここです。中心から見て真東。今で言えば、ちょうど住宅街のさらに向こう側の辺りですね」
地図の上に記された赤い丸は、確かに僕が住む住宅街を通り越したその先にあった。
しかし、その辺りは今は都市開発が中断され、ほとんどが空き地のような状態になっていると聞く。
「現在は何もない場所ですが、都市開発以前の段階ではそこは小規模な集団墓地だったようです。過去の文献に記録が残っていました」
「墓地、かぁ。確かに、幽霊とかそんな噂なら一つや二つはありそうな場所だけど……」
「でも、そんな話聞いたことないけど……」
「まぁ、こればっかりは出向いて見なければ分かりかねます。噂な

んて、そもそも出所さえもが不明瞭なのですからね」
氷室の言うとおりだ。
ありもしない話に頼るよりは、足を伸ばす方が早いに決まっている。
まさしく、百聞より一見というやつだろう。
「そうだね。一見の価値ありってやつよね」
……いや、それはちょっと違うと思う。
しかし飛鳥のその発言に、僕はあえて何も言わないでおく。
「では、二つ目です。二つ目はここ。南西に当たる場所です」
そしてまた一つ、地図の上に赤い丸が書かれる。
としかし、僕は思わず目を丸くしてしまった。
「え？」
そう思ったのは飛鳥も同じなのか、僕達は揃って身を乗り出していた。
「ちょっと氷室、ここって……」
飛鳥がそう言いたくなるのも無理はない。
むしろ僕だって、我が目を疑ってしまったくらいだ。
「……ここ、駅前だよね……？」
僕は恐る恐る確認するように、氷室に聞いた。
そして氷室は、どこか面倒くさそうに眼鏡を押し上げ、小さな溜め息を吐き出しながら首を縦に振った。
「……ええ。どう見ても街そのものの機能が集中している場所です。全く、ずいぶんと厄介な封印もあったものです」
だがそれを言うのなら、厄介だからこそ封印と呼べる代物なのかもしれない。
と、そんな屁理屈をこねている場合じゃなかった。
僕は再び地図の上に視線を落とした。
赤い丸は、深山駅を中心とするアーケード一帯のどこかを示していた。

しかしそうなると、疑問が浮かぶ。
一体駅前付近のその場所は、どういった意味合いのいわくつきの場所なのだろうか？
「それに関しては、やや季節が関係するかもしれませんね」
「季節？」
僕は二つ返事で聞き返した。
それは一体どういう意味なのだろうか？
「二人とも、駅前のターミナルに続く長い歩道、その植え込みに街路樹として植えられている木が、何だか知っていますか？」
「街路樹って、あれは確か……」
僕は思い出す。
普通なら銀杏並木が真っ先に思い浮かぶところだが、それは却下される。
なぜならこの秋の真ん中の季節にもかかわらず、道端の街路樹は赤や黄色の葉を色づかせてはいないからだ。
そう、この深山町は少し変わっていた。
街のシンボルのマークにもあるように、この街の名物でもある、ある木が植えられているのだ。
「……そっか、そういうことか」
思い出して、僕は気付いた。
確かにこれはいわくつき……いや、もはやその中の定番のメニューと言っても過言ではないかもしれない。
「……桜の木か。だからいわくつきってことだね？」
「ご名答。よくある話ですよ。桜の木の下には、死体が眠っている」
「うわ、なんかベタ……」
そうは言うが、確かに理屈としては通っているかもしれない。
まぁ、そうだとしても多くの人はそんなことを考えなどもしないだろう。
毎日のように通勤通学で歩く道の下に死体が埋まっているなど、考えただけでその一日のテンションは急降下してしまいそうになる。

「ベタでも何でも、昔は実際に信じられていた話のようですからね。そうした理由は分かりかねますが」
「……それにしたって、まさか駅前周辺とはなぁ……」
「全くです。こんな場所じゃ、休日平日を問わずにまず人目につかずに調査をするなど不可能に等しい」
「ここは後回しにするしかないのかな。多分、私達じゃなくてもこれは厳しいんじゃない？」
「そう願いますね。そもそも、我々がであった他の能力者たちがこの八つの封印のことを知っているのか、知っているとすればどこまでの情報を入手しているのか、それとも全く知らないままなのか。これが気になるところですけどね」
やれやれと、氷室はもう一つ溜め息を吐き出した。

「さて。それでは三ヶ所目。それは北西の方向にある、この場所です」
また一つ、地図の上に赤い丸が書き足される。
しかしそうして書き足された三つ目の地点に、僕達はまたもや言葉を失うことになる。
「……氷室、ここって」
「ウソ、だってここは……」
揃ってそう呟く僕と飛鳥を尻目に、氷室は一度深く座り直した。
返事はない。
言うまでもないことだと、その表情が無言で語っていた。
再び地図に視線を落とす。
書かれた三つ目の赤い丸。
その場所とは……。

——数日前に全焼してしまった、あの森林公園のある場所だった。

「……偶然、じゃないよね」

飛鳥が呟く。
ホント、偶然だとしたらこれはあまりにもできすぎではないだろうか。
僕は内心でそう呟いた。
「全くもって同感です」
氷室が続け、立ち上がる。
「やめましょう。もう、偶然とかそういう言葉を使うのは。私達の目の前には、これから先全て必然の可能性しか提示されないのですからね……」
窓際に立ち、差し込む夕陽を浴びながら氷室は言った。

そうして僕達は氷室の手に入れた情報を聞き入れ、今日はそれでお開きの雰囲気が流れ出した頃だった。
しかし氷室は、全く逆の発想を持ち出した。

「――私は今から、森林公園の跡地に向かいます。少し気になることがあるのでね」

「え、でも……」
「待ってよ氷室。だったら、私達も一緒に行く」
「ダメです。安全よりも危険の度合いが高すぎます。それに、多人数では目立ってしまう」
「危険だったら、なおさらアンタを一人では行かせられない」
「そうだよ氷室。僕だって、何かの役には立てる」
「……二人の気持ちはありがたく受け取っておきます。ですが、これは私のミスが招いたことでもあるのです。ですから、後始末は私に任せてほしいんです」
「ミスって、何のこと？」
「……今はまだ確証が持てないので、はっきりとは言えません」
「ダメ。言わなきゃ、言って納得しなかったらアンタを行かせない

から」
　立ち塞がるように、飛鳥は腰を上げる。
「……」
「……」
　睨み合うには程遠い図柄ではあるが、二人は押し黙っていた。
　数十秒ほどの沈黙が流れ、やがて溜め息と共に氷室はやれやれと呟く。
「……子供は大人の言うことを素直に聞くものですけねぇ……」
「お生憎様。聞き分けのいい良い子を演じる余裕なんて、私にはないからね。そんなの、アンタだって分かってるでしょ？」
「……そうでしたね。素直で聞き分けのいい飛鳥なんて、こっちから願い下げです」
「む、それはそれで何かムカツク言い方だけど……まぁいいわ。今のは聞かなかったことにしておいてあげる」
「……やれやれ。仕方ないですね」
　曖昧な笑みを浮かべながら、氷室は腕組みする。

「それで？　アンタの言うミスっていうのは何のこと？」
「昨日も話したとおりです。私はあの炎使いを取り逃がした。これは私の失態です」
「……それだけ？」
「ええ、それだけですよ」
「でも氷室、それだけですよ」
「でも氷室、それだったら僕も飛鳥も同じじゃないの？　まぁ、僕の場合はあれだけど……」
「いえ、そういう意味合いのものではなくてですね……」
　わずかに氷室は言葉を探し始める。
　観念して口を開いたようには見えても、まだまだ煙に巻く気は満々だったようだ。
「……参りましたね。どう言えばいいのやら」
「正直に話しちゃえばいいでしょ。隠し事なんて、アンタが一番嫌

いそうなくせして」
「……痛いところを突きますねぇ……」
苦笑いし、氷室は静かに一度目を閉じた。
「……まぁ、確かに隠し事はない方がいいのかもしれません」
眼鏡を押し上げ、氷室は目を開ける。
「私の言うミスというのは、もっと別のことです。タイミングで言えば、あの森林公園が炎上した、その日のことでしょうか」
「前置きはいいから。早く本題を話して」
「……この先は移動しながら話しましょう。時間が惜しいです。二人とも、どうせ来るなと言ってもついてくるでしょうからね。大和はともかくとして、飛鳥は絶対についてきそうですし」
「……分かってるなら、最初から話せばいいのよ」
「……まぁ、とりあえず車へ。向かいながら話しますよ」
氷室は引き出しの中から車のキーを取り出すと、無造作にそれをポケットの中に突っ込んだ。
出入り口への通路を塞ぐように仁王立ちしていた飛鳥がまず外に出て、それに続いて氷室が部屋を出る。

「やれやれ。妙なところで強情なんですよね、あの子は……」
「飛鳥なりに、氷室のことを心配してるんだよ」
「心配されるほどヤワではないんですがねぇ……」
「それは違うよ、氷室。理由はどうであれ、自分の身を案じてくれる人がいるっていうことは、それだけで幸せなことだと思う。いなくなってしまえば、もう誰かを心配することだってできなくなってしまうんだから……」
「……大和」
「……あ、ごめん。これ、受け売りなんだ。別に氷室に説教するつもりとか、そんなんじゃなくって……」
「……いえ、あなたの言うとおりだ。私も少し軽率でした。もう一度、あなたや飛鳥を信じることを胸の内に留めておきます」

そう言うと、氷室はどこか機嫌よさそうに僕の横を通り抜けていった。

「さぁ、急ぎましょう。待たせるとうるさい仲間が、車の前で待ちぼうけてるはずですから」

「あ、うん」

事務所の扉を施錠し、僕と氷室は揃って階段を下りる。

そして案の定、後部座席のドアの前で腕組みしていた飛鳥に遅いと怒鳴られるのだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３７：取引

毎度のことながら、僕は切に思う。
どうしてこう、人間の第六感とも言われるほどの予感というものは、こう……。

――悪いことに限ってばかり、的中してしまうのだろうか……。

「お？　こりゃ予想外の客人達だな」
ほとんどの樹木が焼け落ち、もうほとんど見る影もなくなった森林公園の跡地の奥。
黄昏色に染まる逆光に背を向けながら、その男は僕達三人を見返してそう呟いた。
細身で長身、外見の体格で言えば氷室に近いものがある。
その男は一体何がそんなに楽しいのか、まるでこみ上げる笑いを堪えきれずにいるようにニヤついた表情を覗かせていた。
「やれやれ。その言葉はそっくりそのままお返ししますよ。まさか、そちらから出向いてくれるとはね。探す手間が省けました」
と、氷室は嘆息と共にそう呟くと同時に、一瞬の間にその手の中に長く伸びる三又の槍を握っていた。
「ひ、氷室？」
いきなりのその臨戦態勢に、僕は少なからず驚きの声を上げる。
それは隣にいた飛鳥も同じで、いきなり何をするつもりだという、そんな表情を見せていた。
「おー、怖い怖い。ガキ共のボディガード気取りか？」
しかし男は、武器を構えた氷室を目の前にしても相変わらずの不敵な笑みを浮かべているだけだ。
しかし、この場の空気の流れがどんよりと澱み始めていたことは

僕にも分かった。
　少なくとも目の前にいるこの男も、僕達同様能力者の一人に違いないのだろう。
「お喋りは結構。先日の決着と行きましょうか。こちらにはまだ、聞きたいことが山ほど残っているのでね」
「……ちょっと氷室、先日の決着って、まさか……」
　その言葉に気付いた飛鳥が、氷室と男を交互に見やった。
「……じゃあ、まさかこの人が、もう一人の……？」
「ま、そういうことです」
　と、氷室はつまらなそうに眼鏡を軽く押し上げ、三又の槍の矛先を真っ直ぐに男へと向けた。
「……もう一人、ねぇ……」
　僕の声が耳に届いたのか、男は反芻するようにその言葉を繰り返した。
　その表情が不敵な笑みを失い、わずかに真剣味を覚えたものへと変わる。
「そういや、アイツもそんなこといってたっけな。俺かもう一人か、どちらかが例外だとか何とか。ま、んなことは俺にとっちゃどうだっていいんだけどな。ようは、弱いやつは死ねばいいだけの話だろうが」
「……」
　何の抑揚もない言葉に、僕はわずかに身構える。
　僕達三人と男との距離はおよそ十メートル前後。
　恐らく、氷室ならものの一瞬でその間合いを詰め、手にした槍で的を貫くが如く一撃を見舞うことができるだろう。
　氷室を中心に両脇に立つ僕と飛鳥も、無言でその両手に力を集中させ始める。
　すでに飛鳥の両手からは青白い閃光がバチバチと火花を散らし、僕の両手からも風の刃が生み出され始めていた。

合図があれば、ものの一瞬で攻撃に移ることはできる。
人数で見ただけでも三対一。
僕達は圧倒的に有利な状況に立っているはずだ。
……だが、それでも。
「……フゥン」
男は微動だにしない。
恐らく炎使いであろうその男は、戦闘態勢はおろか闘争本能のカケラさえも見せることはなかった。
すでに諦めているのだろうか？
確かに通常ならば、三対一という絶対的に不利な状況では戦うことそのものもバカらしく思えるかもしれない。
だが、だとしたら。
あの男の顔に浮かぶ、余裕とも取れる笑みは一体何なのだろうか？
まるで奥の手を隠し持っているかのように。
仕掛けた罠に掛かる獲物を待ち焦がれているかのように。
男とその周囲の空気は、グニャリと奇怪なねじれ方をしていた。
が、それもすぐに終わる。
男の口から出た言葉は、まさしく僕らの想像をはるかに超越したものだった。

「――お前ら、封印の一つを探しにきたんだろ？」

「……！」
その言葉に、僕はわずかに反応してしまったのかもしれない。
返答のない態度を見て、男はまた不敵に笑った。
「やっぱりそうか。だとしたら、今俺とやりあうのはそれこそお門違いってもんだぜ？」
「……どういうこと？」
飛鳥が問う。
すると男は、その言葉を待っていたと言わんばかりにまた小さく

笑い、言葉を続ける。
「なぁに、簡単なことだ。ここで戦えば、戦況のどうこうにかかわらずにお互いに全滅しかねるってことだ。ほら、全くもって戦うことにメリットがないだろ？　あるのは互いにデメリットばかり、しかも死ぬ危険性まである。どう考えたってお門違いだろうが」
「そんな口からでまかせ、信じると思ってるの？」
「なんだったら試してみればいいさ。でまかせかどうかよく分かる。が、分かったときにはもう手遅れかもしれないぜ？　俺も、お前らもな……」
「……っ」
飛鳥はわずかにたじろいだ。
確かに口からでまかせのようにしか聞こえないが、それでも万が一と言うこともある。
敵側の言葉を丸々鵜呑みにすることはできないが、それでなくても危険性は絶えることはない。
みすみす命を放り出すほど、愚かなことはない。
無謀と勇気は紙一重であり、しかし意味合いは全く違うものなのだから。

「……それで、あなたはどうしたいんです？」
矛先を向けた槍を下げ、氷室は男に聞く。
「ちょっと氷室、こんなやつの言うこと信じるワケ？」
「まぁ、私とて不本意ではあるのですよ。ですが、まんざら全部がデタラメというわけでないんです」
「さすがに、アンタほどの頭脳があれば察しはついたみたいだな」
「全くもって嬉しくありませんが、それはどうもと言っておきましょう」
溜め息を吐き出し、氷室は呟く。
「……どういうことなの、氷室？」
僕は氷室に聞く。

「……早い話が、ここがどこだと思っているんだと、彼はそう言いたいのですよ」
「どこって……」
言いかけて、飛鳥はハッと気付く。
一瞬遅れ、僕もその言葉の意図に気付かされた。
「……もしかして、封印がある場所だから、ってこと？」
「その通りです」
と、あっさりと氷室は頷いた。
そしてもう一度眼鏡を押し上げながら、いかにもつまらなそうに言葉を続ける。
「……推測の域を出ない話ですが、仮にも封印と名のつくほどの場所。そこには膨大な量のエネルギーが凝縮され、何らかの形で封印となっているはずです。言わばそれは、地中に埋まっている地雷に等しいのですよ。タイマーの止まったままの時限爆弾と言い直してもいいでしょう。要するに、何かのきっかけで爆発を起こすか分からない、ということです。ましてやそれが、能力者同士の力のぶつかり合いだとすれば、起爆装置として申し分はない。結果、連鎖反応のようなもので共倒れになることも十分考えられます」
「ご名答。博識だな。『Ｒｉｎｇ』に関する記述は、この世界にはもうほとんど残ってないはずなんだがな」
褒めているのかけなしているのか分からない、曖昧な言葉と笑みで男は小さく笑った。

「ま、そういうことだ。どうする？　それでもやり合おうってなら、気分じゃないが相手にはなるぜ？」
言うなり、男はその手に猛るほどの炎を握り締めた。
夕方の冷えた空気が急激に熱され、距離の離れた僕達の元にまで熱気が押し寄せてきた。
男の手に握られた炎は、見る見るうちにその姿を変えていく。
その形は真吾の操る赤い短剣とはまったく別の形で、細く長く。

まるで見て覚えたかのように、氷室の持つ槍とそっくりな炎の槍と形を変えた。
唯一の違いは、氷室の切っ先は三又に分かれているが、男の切っ先は真っ直ぐに刃を覗かせているということだろうか。
と、冷静にそんな分析をしている場合ではない。
互いに武器を手にしたのだ、いつ戦いが始まっても不思議はない。
もう一度僕は意識を集中させる。
すでに生まれた風は、鋭い刃を剥き出しにして舞い始めている。
これならすぐにでも攻撃に転じることは可能だ。
「……やれやれ。これで二度目ですか」
そう言うや否や、氷室はその手に握った三又の槍をあっという間に消し去ってしまう。
「……え？」
僕はその行動が理解できなかった。
「氷室、どうして……」
「……大和、飛鳥も。武器を納めてください。従うのは癪ですが、ここでの戦闘は控えるに越したことはないようです」
「……みたいだね」
不本意ながらに飛鳥も応じ、その手の中の雷撃を霧散させた。
「……分かったよ」
僕もその言葉に従い、手の中の風の刃を音もなく消し去った。
僕達三人が揃って戦闘の意思なしを提示すると、男もようやくその炎の槍を空気に溶かして消した。
「そうそう。お利巧さんだな、ガキ共。子供は素直が一番だ」
嘲笑うような言葉を浴びせるが、僕も飛鳥も完全にそれを無視した。
「で、これからどうするつもりですか？　私達が封印の場所に出向いたと知っておきながら、あなたはこのまま素直に場を明け渡すとでもいうのですか？」
氷室の言葉は挑戦的だ。

ここで返答がこじれれば、結局は戦う羽目になってしまうのだから。

もっとも、僕はそうなることを予想していた。

氷室が武器を納めたのはあくまで男を油断させるためのものだと、僕はそう思い込んでいたのだ。

しかしそれも、空回りのままで終わる。

「――構わんさ。どの道三対一じゃ俺の不利は揺るがない。だったら、無駄な戦闘は避けるに越したことはない」

明け渡してやると、男はつまりそう言っている。

「……その言葉を、私達に信じろと？」

「信じる信じないはそっちの自由さ。俺に決定権はないからな」

「……」

氷室は押し黙る。

明らかに状況は僕達の優勢のはずだ。

にもかかわらず、男は言葉巧みに僕達の心理を操り、選択の幅を狭くする。

これはすでに心理戦という、目には見えない戦いの始まりだったのかもしれない。

「……いいでしょう。今回は見逃しますよ」

いいのかと、僕は一瞬叫びたくなる衝動を押さえ込んだ。

それは恐らく、飛鳥も同じはずだったろう。

「取引成立、だな」

男はまた小さく笑い、そのままの足でゆっくりと僕達へと歩み寄ってくる。

警戒するなという方が難しい。

「安心しろよ。俺だってバカじゃない。そうやすやすとくたばるワケにはいかねぇんだ」

薄ら笑いを浮かべ、やがて男は僕達の真横に立ち、その方向を指差した。
「封印はこの先にある。もっとも、何の封印かは俺にも分からないがな。まぁ、せいぜいがんばることだ」
そして何事もなかったかのように、男は僕達がやってきた方向へと去っていった。
まるで嵐が通過したあとのように、僕達の間では緊張しきっていた空気がようやく弛緩したようだった。
「……さて、では行きましょうか」
「それはいいけど……氷室、あんなやつ信用して大丈夫なの？」
「信用などしてませんよ。ただ、今回は辿り着いた思考の先が同じだったから信用に足ると判断しただけです。そもそも彼と私では、人間的に相容れることなどまず無理でしょうね。彼の仕草のどれをとっても、私には不快感しか生まれない」
それはもはや、完全否定だった。
水と炎は相容れないが、まさか本人達もここまでとは……。
しかしそれを言うのなら、氷室に気に入られることも相当に難しいことじゃないだろうかと僕は思ってしまう。
「どうかしましたか、大和？」
「……え？　あ、いや。別に……」
と、そんなことを思っていたなどと口が裂けても言えるはずがなく、僕は何とか平静を装っていた。
「そうですか？　ま、いいでしょう。それよりも、今は封印の方を優先しましょう」

僕達三人は揃って向き直る。
周囲には焼け残ったわずかな木々と、燃え果てた芝生の名残だけが広がっている。
男が指差した方向へと、僕達は歩き出す。
焼けた地面を踏みしめ、燃え尽きた木々の合間をくぐりぬける。

時間にしてわずかに一分弱。
わずかに開けたその場所に、僕達はそれを見つけた。
「これは……」
第一声は氷室だった。
僕はというと、そのあまりに神秘的かつ幻想的な、まるで絵本の中の挿絵のような風景に見とれ、声も出なかった。
「すごい……」
飛鳥が呟く。
僕も全く同じ意見だった。
というよりも、これはもうすごいという言葉でしか表現することができないような気がする。
それはまるで、一つの絵画。
展覧会の会場のど真ん中で、厳重な警備体制の下で一般公開を許されているような、言わば生きた芸術のようなものだった。
そこにあったものは……。

――あの燃え盛る炎の中でも枯れることなく、今なお美しく咲き誇る赤い花と、その赤い花に囲まれて厳かに佇む、灰色の墓石。

「……これが、封印……？」
ようやく僕は呟いた。
それは、誰の墓なのか。
彩られた真紅の花はまるで炎のように赤く染まり、夕陽の色さえも容易く塗り替えていくだろう。
すでにこの場所は、僕達の住む現実の場所ではなくなっていた。
踏み入れたそこは、紛れもなく別次元。
遠い遠い昔、聖者に近づきすぎた誰かを弔った場所。
それは聖域。
眠れぬ時を無限に彷徨い続けた、魂の揺り籠。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３８：封印開放

目を奪われるほどの色彩の景色の中、僕達三人はしばしの間ただただ立ち尽くすばかりだった。
意識が戻ったのは、氷室が損灰色の石碑のようなものに数歩ほど歩み寄り、表面を撫でるように触れたときだった。
わずかばかりに埃と汚れをかぶったその石碑は、しかし今も色褪せることなく輝いている。
何かこう、普通では考えられないような力が封じられていると言うのも、何だか頷けるほどだった。
「……これが、封印ですか？　しかし、一体どこがどうなって……」
氷室は石碑を中心に、周囲をくまなく探し始める。
足元で咲き誇る赤い花は、風もないのにゆらゆらと揺れていた。
「ん？　これは……」
と、氷室は石碑のちょうど裏側に当たる部分に何かを見つけたようだった。
「二人とも、ちょっとこちらへ」
呼ばれ、僕と飛鳥はその方向へと足を向ける。
「何かあったの？」
駆け寄りながら、僕は訊ねた。
「これを見てください。見覚えはありませんか？」
言われて、僕は指差されたその場所を覗く。
するとそこには、何かのくぼみのようなものがいくつも横に連なっていた。
それらはまるで掘り込まれた文字のようにも、記号のようにも見て取れる。
しかしその形は実に不定形で、歴史の中にある象形文字などと比較しても例のないものだ。

だが僕は……いや、僕達は、その記号が何であるのかを知っている。

それは時に文字であり、記号であり、図形でもある。

本来その記号を浮かび上がらせるほどに強調される赤い色は今は見えないが、それを差し引けばそのくぼみは間違いなく……。

「――クリムゾン・テキスト……」

僕はその言葉を呟いた。

頷く代わりに、氷室は眼鏡を軽く押し上げた。

「何て書いてあるの？」

飛鳥の声に、僕達は揃ってその羅列に目を落とした。

一見不可解な記号の集合でも、僕達にとっては唯一解読できる暗号のようなものだ。

頭で考えることを必要とせず、ただ本能の奥底で意味を理解すればいい。

やがて、僕の脳裏にそれらが伝えんとする言葉が浮かび上がってくる。

「――……我、真紅に染まる焔を纏いてここに眠る者なり。永き時を経て、我の目醒めを望む者よ。汝が力を我が前に示せ。猛る焔を以って、赤き花を染め上げよ。さすれば我は、長き眠りから解放され、汝を主と認め、契約の名の元に従いて力を示さん……」

僕はそこに掘り込まれたテキストの全文を読み上げた。

「……察するに、どうやらここは炎の封印ということになりそうですね」

「でも、それって意味あるの？　だって私達の中には、炎使いなんていないわけで、これじゃ封印を開放したってどうにもならないんじゃないの？」

「いえ、そうとは限りません。ですが、だとすると妙ですね。一体どうして……」
氷室は一人で呟きながら、何かを考え始める。
「どうかしたの？」
「……いえ。この場所はまず間違いなく、炎の封印でしょう。しかしだとすると、どうにも合点がいきません。なぜ彼は、封印の場所まで分かっているにもかかわらず、開放を行わなかったのか」
「彼って、さっきのヒョロ長いヤツのこと？」
「ええ、そうです。封印を解けば更なる力が手に入る。彼もそれを知っていたからこそ、この場所に出向いていたはずなんです。ですが、結果として彼は解放を放棄したことになる。その理由が分かりません」
「いざ解こうとしたら、タイミング悪く私達がやってきたからじゃない？　しかもこっちは三人で、戦いなったら不利は確実。だから、仕方なく撤退したとか」
「……まぁ、そう考えるのが普通なんでしょうけど」
「それに、どの道私達じゃこの封印は開放できないんじゃないの？　だって、私達は炎使いじゃないんだもの」
その意見には僕も同感だった。
テキストにもあるように、どうやらこの封印に限らず他の封印でも、能力者と封印の力の属性が一致しなければ解放はできないように思える。
となると、もうこの状況で僕達にできることは何もなくなってしまうのではないだろうか？
しかしかといって、このまま封印を放置してしまえば、後にさっきの彼はこの封印を解放するに至るかもしれない。
そうなれば、敵の戦力を増大させてしまうことになる。
それは極力避けたいところなのだが……。
「氷室、何か方法はないのかな？」

「……難しいですね。そもそも私も、『Ｒｉｎｇ』に置ける契約の意味合いをまだ完全には理解していないのですよ。契約と言うのは、言葉の意味の上では約束と似た意味合いではありますが、本当の意味合いは全く別物です。契約とはそう簡単に破棄できるものではありません。友人と会う約束をしたが、急用で行けなくなったから断りを入れる。そんな簡単なものじゃないんですよ。ですから、この封印に関しても大きな束縛の力が働いていると考えるべきです。ましてやこれは、古代の精霊の名の下に築かれた契約だ。生半可なことじゃ崩れたりはしないでしょうね」

「……要するに、それだけ大きな力が働いてるってこと？」

「そう考えるべきでしょう。結論から言えば。この封印は炎使い……つまり先ほどの彼の手によることでしか開放できません」

「じゃあ、結局は無駄骨ってこと？」

「いえ、まんざらそういうわけでは。要するに、私達の中の誰かが炎使いになってしまえばいいんですけどね」

「けど、そんなことって……」

言いかけて、僕は思い出した。

一番最初に、氷室に言われたその言葉を。

――殺し合うことが嫌ならば、相手から『Ｒｉｎｇ』を奪うか破壊してしまえばいい。

しかしこの場合、破壊してしまっては封印そのものが開放できなくなってしまう。

となると、あとはもう奪うという手段しか残されていない。

「……多重契約。そんなことが実際に可能かどうかは分かりませんが、そうする他ないでしょうね」

「だったら詰まるところ、結局はさっきのヤツを……」

「……ええ。倒すことから始めないと、もはや話になりませんね。全く、逃がしたことがこうも裏目に出るとはね……」

嘆息し、氷室は立ち上がる。
直後に。
「二人とも、横に飛びなさい！」
と、怒鳴るようなその声がしたと思ったら、僕は体を突き飛ばされていた。
「え……」
突き飛ばされた体がゆっくりと倒れ、地面の上を何度か転がった。
すぐ隣では、飛鳥も同じように突き飛ばされ、地面の上で上半身だけを起こしたところだった。
そして氷室はと言うと……。
「もしやと思ってはいましたが、やはりそういうことだったようですね……」
そう語る氷室の口調には真剣さが溢れており、すでにその手には先ほど見せた三又の槍が再び握り締められていた。
青く澄み渡る半透明の切っ先からは、湧き水のような雫がわずかに渦を巻いていた。
「……氷室？」
起き上がりながら、僕は氷室の視線の先を向き直る。
すると、そこに。

「――解読ご苦労さん。一仕事終えたばっかで悪いが、こちとらお前らにはもう用無しだ。手早く死んでくれや」

相反する炎の槍をその手に握り締めた先ほどの男が、敵意を丸出しにして立っていた。
「アイツ、逃げ帰ったんじゃ……」
忌々しそうに飛鳥が呟く。
「逃げ帰るとは、人聞きの悪い。俺はただ、利用できるものを利用させてもらったまでだ」
利用できるもの？

利用させてもらった？
それは一体、どういう意味だ？

「……なるほど。やはりあなたでは、あの掘り込まれた文字を解読することができなかったようですね」
「……え？」
僕はその言葉に疑問を覚える。
……読めなかった？
それはまた、どうしてだ？
彼だって、僕達と同じ能力者のはずではないのだろうか？
「違うんだよ、坊主。同じじゃない。ただ、ひどく似通ってはいるけどな」
まるで僕の考えを見透かしたように、男は囁くように言う。
「あなたはここが、自分の力の……炎の封印の場所だと知っていた。だから、この公園そのものを炎で包んで炎上させたんですね」
「ああ、その通りだ。だが、実際にそうしても何も起きやしない。ただ一ヶ所だけ、燃えずに残った空間だけが残ったのさ。それがまさしく、今いるこの場所だよ」
手の中で槍を回しながら、男はまたあの不気味な笑みを浮かべてる。
「ま、自分でも浅はかな考えだとは思ったがな。炎の封印なら、炎に反応するんじゃないかと思ったわけだ。結果としてはこの場所を炙り出せたわけだが、ここからまた一筋縄ではいかないときた」
「……あなたには、あのテキストが読めなかった、ということですか」
「ご名答。せっかく封印の場所を見つけ出しても、開放の仕方が分からないんじゃお手上げだろ？　そんな折りに、お前らがノコノコとやってきた。これは利用してみる価値はあるんじゃないかと踏んだわけだが、思ったとおりだったぜ」
ヒュンヒュンと風を切る音を鳴らしながら、炎の槍が男の手の中

で踊る。
　真っ赤に燃えた切っ先はさながらに炎そのものを思わせ、いくつもの火の粉が蛍火のように夕焼けの中を舞っていた。
「だが、おかげでそれも解けた。礼を言っておくぜ」
　ニヤリと笑い、男はその槍の切っ先を切っ先を一点に定める。
　しかしその向けた先は、対峙する氷室の体ではなく。
　かといって、地面に座り込んだままの僕でも飛鳥でもなく。
　その切っ先はただ、灰色の石碑を取り囲むように咲き誇った、赤い花だけを狙っていた。
「……まずい！」
　氷室が明らかに不利な表情を見せる。
　しかしそれも一瞬で、氷室の動きは早かった。

「――海神の遺産よ、その大いなる流れの力を我が前に示せ。濁流の如く、全てを呑み込め！」

　三又の槍の矛先に渦が巻く。
　氷室はその槍を、目の前の男ではなく、足元に地面目掛けて勢いよく突き刺した。

「――ストライク・タイド！」

　直後、何もない地面の上を津波が走った。
　せせらぎとは程遠い、荒れた海の波を思わせるその流れの速さは、まさしく潮流。
　波の高さで言えばゆうに五メートル。
　津波は楽々に男の体を丸ごと呑み込んで、周囲の木々さえへし折るほどの勢いをもって迫っていた。
　だが、しかし。
「……フン」

と、男は実につまらなそうに鼻で笑い、その手に握った炎の槍を同様に、地面の上に突き刺した。
瞬間、変化はおきた。
石碑を取り囲む赤い花が、一斉に燃え上がった。
ただでさえ燃えるような赤を備えたその花弁が、いっそう激しく燃え盛っている。
それがまるで、天に向かって叫んでいるように見えて、美しさを通り越して不気味なほどだった。
だがだからといって、氷室の放った津波がどうなったわけではない。
確実に津波は、男目掛けて襲い掛かる。
そしてその体が水滴の一つに触れ、直後に何もかもが飲み込まれるというときに。
一つの爆音だけが、その場を支配した。

同時に、周囲に霧散するように広がった白い霧。
しかしそれは霧ではなく、蒸気の壁だった。
まるで間欠泉のように、熱を持った霧が一面に広がっていた。
その霧の中、僕はようやく立ち上がった。
すぐ隣にいるはずの飛鳥の姿も、この濃い霧の前では全く確認できない。
僕は身構える。
この視界の悪さでは、どこから何が飛んでくるか分かったもんじゃない。
ほどなくして、徐々に霧は晴れていく。
冷えた蒸気が水分に変わり、ポツポツと音を立ててあちこちで落下していた。
「大和、無事？」
隣から飛鳥の声が聞こえ、僕はその方向を振り返る。
「うん。僕は大丈夫。けど、氷室は……」

僕と飛鳥は揃って、先ほどまで氷室のいたその方向を向き直る。
霧はすっかり晴れ、しだいにその向こう側の景色がはっきりと見えてきた。
その中に、人影。
「氷室！」
僕は叫び、その場所へと駆け寄る。
槍を地面に突き刺したまま、氷室はそこに立っていた。
見たところ、外傷などもなく無事な様子だ。
僕はその様子にホッと安堵の息をつきかけて……。
氷室の様子がおかしいことに気付いた。
「……逃げなさい、大和。飛鳥を連れて、できるだけ遠くへ……！」
か細いほどの声。
まるで絞り出したように掠れている。
「……氷室？　どうした……」
僕はその先に続く言葉を呑み込んだ。
いや、呑み込まされた。
その、怖気を覚えるほどの殺気に。
「……なるほど。これが封印開放ってやつか。手に余る力だな……」
愉快そうな声色。
そんなはずがと、ブレーキのかかる心が呻く。
霧が完全に晴れた。
その、向こうに。

「――逃がすと思うか？　冗談。皆殺しに決まってんだろ」

まるで何事もなかったかのように、炎の槍を携えた男は薄ら笑いを浮かべたまま立っていた。
あの、津波の一撃をまともに正面から受けたはずなのに。
……いや、それは違った。
そもそも男は、その体に一滴の水さえ触れさせてはいなかった。

全部消し飛ばしたのだ。
あの爆音は、まさしくそれだ。
信じられないほどの高温の炎で、全ての水を消し飛ばしたのだ。
「さて、と。喋っててても分からねぇしな。まずは軽く、力試しといくか」
矛先が変わる。
赤い花はすでに消え去り、変わりに向けられたその赤い切っ先には。
「安心しろって。一思いには殺さないからよ」
僕達三人の姿が、映り込んでいた……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３９：決別

何が起こったのだろうか。
記憶が途切れたわけじゃない。
にもかかわらず、僕は目の前で何が起こったのかを全く理解できないでいた。
一番新しい記憶は……そう。
あの男の炎の槍の切っ先が、確かに僕を捉えていたということだけだった。
……なのに。
それなのにどうして、僕は……。
「……氷室……？」
掠れたような声で僕は呟く。
いつの間にか僕は地面の上に膝を付き、僕の目の前には同じ地面の上に横たわる氷室の姿があった。
しかしそれは、ただ横たわっているだけではなく。
「……逃げろと、言ったでしょう……」
悶えるような苦しむような、そんな苦痛に満ちた声で、氷室は僕に語りかけていた。
その横たわる体の一部、ちょうど右肩の辺りからは、おびただしい量の血液が流れ出していた。
蛇口が壊れた水道管のように、止まることを知らずに流れ出してくる赤い液体。
知らぬ間に触れた僕の両手にも、ベットリと血の色が映っていた。
「……氷室、どうして？　何が……」
僕はまだ目の前の状況が分からない。
頭の中がグチャグチャに混乱して、物事をまともに考えられるほど思考が安定していないのだ。

おかしい。
どうしてこんなことになっているんだ？
僕の中の最新の記憶を掘り返す。
あのとき確かに僕は、その炎の槍の切っ先に魅入られ、そして赤い切っ先は真っ直ぐに僕へと向かってきた。
そして次の瞬間にやってきたのは、胸を押される軽い衝動。
痛みはなく、その衝撃で体が軽く宙を泳いだ。
……そうだ。
僕の体を突き飛ばしたのは、氷室だ。
だからこそ、その結果として氷室は……。

「氷室！　しっかりして！　今、傷を塞ぐから！」
僕は要約のことで我を取り戻し、無我夢中で氷室の体を抱き起こした。
僕の……僕のせいだ。
結局氷室は僕を庇って傷を負ってしまった。
しかも傷口は、完全に右肩を貫通している。
出血がひどく、氷室の真っ白なワイシャツの半分以上がすでに血の色に染まり変わっていた。
横たわりながら傷口を片手で抑える氷室。
僕はその傷口の上から両手を覆いかぶせ、焦りながらも力を集中させた。
しかしその両手を、氷室は掴んだ。
「……何を、しているんですか。早く、逃げなさい。死にたいんですか……」
「だ、だけど！　氷室だって……」
「……私は、大丈夫です。このくらいでくたばるほど、ヤワな体じゃありませんよ……」
そう言いながら、氷室はフラフラと不安定な足取りのままでどうにか立ち上がった。

だがそれは、文字通りただ立ち上がっただけ。
二本の足でかろうじて大地を踏みしめているだけに過ぎない。
左手に握った三又の槍を支えに、どうにか立っているだけ。
そんな状態では戦うことはおろか、歩くことさえもままならないはずだ。
「む、無理だよ氷室！　そんな傷じゃ、もう戦えるわけが……」
「……元を正せば、私がまいた種みたいなものです。私が枯らせるというのが、礼儀というものでしょう……」
乱れる呼吸、止まらない出血、極度の消耗。
はっきり言って、今の氷室は『Ｒｉｎｇ』の力の影響でどうにか命を繋ぎとめているに過ぎない。
恐らく常人であれば、最初の一撃ですでに絶命していたはずだ。
「私が、少しでも時間を稼ぎます。だから、その間に飛鳥を連れて逃げてください……」
そう言って僕を振り返った氷室の表情が、途端に曇った。
「……大和、飛鳥は……どうしました？」
「……え？」

僕はその言葉に、慌てて周囲を見回す。
……だが。
「……飛鳥？」
そこに、飛鳥の姿はすでになくなっていた。
すでに距離を離れてしまったのだろうか？
いや、そんなはずはない。
氷室があの一撃を受けるその直前まで、僕と飛鳥はほとんど隣り合わせに立っていたはずだ。
一体、飛鳥はどこに……。
「……この際、どこにいったかはもういいです。逃げ切ってくれることを願いますよ。さぁ、大和。あなたも行きなさい……」
「で、でも……！」

「いいから！　行けと言ってるんです！」
氷室は怒鳴った。
その声に僕は思わず肩を震わせ、返す言葉を失った。
「……っ！」
「大和。私をこれ以上追い詰めないでください。正直、あなたを庇う余裕はもうありません。不利に不利を重ねたところで、有利には変わりようがないんです」
「……分かったよ。けど……氷室、絶対に死なないで。約束だよ」
「……あなたといい飛鳥といい、どうにも無茶な約束ばかり押し付ける」
そう呟き、氷室は小さく笑った。
「……行きなさい。大丈夫、必ず戻ります」
その言葉を何度も頭の中で繰り返して、僕はようやく地面を蹴って走り出した。
が、その直後。
「な……」
行く手を阻むように、炎の壁が僕の目の前に立ちはだかった。
「おいおい、人の話を聞いてなかったのか？」
嘲笑うような声。
僕は背後を振り返る。
そこに、悪魔の笑いを携えた男は立っていた。

「――言ったはずだよな？　皆殺しだって」

その手にたぎるほどの熱く燃え盛る炎の槍を握り締め、今まさにその槍で目の前の獲物を貫かんとする仕草。
愉悦に満たされつつあるその不気味な笑みは僕に対して向けられたもので、僕の背筋は熱さとは裏腹に寒気が走る。
「……勘違いを、してもらっては……困りますね」
絞り出したような氷室の声。

正真正銘、その言葉は命を削って紡がれたものだろう。
「……あなたの相手は、私です。余所見をする余裕を与えた覚えはありませんよ……」
「フン、その体でも口だけは達者だな。まぁ、俺としては順番なんてどうだっていいんだよ。どうせ最後には、三人まとめて仲良く死体で横並びにして……」
言いかけて、男の言葉が止まる。
「っと、そうかい。すでに一人は逃げおおせちまったワケか。だったらなおのこと、お前ら二人に構ってやる時間はねぇな。なぁに、安心しろって。すぐにあの女も殺して、ここに並べてやるからさ」
クックッと、男は愉快そうに笑う。
歪んだ笑みがさらに歪み、見ているだけで寒気と吐き気を覚えそうになるほどだ。
「……少し、……じゃないですか？」
ふいに氷室は呟いた。
その言葉に、男の高笑いはピタリと止まる。
「あ？　何だと？」
「少し、余裕を見せすぎじゃないですかと、そう言ったんですよ」
「バカかお前？　余裕もクソも、見せ付けるほど余ってるに決まってるだろうが。見ろよ、この力の差を。蟻が虎に敵うとでも思ってるのか？」
「……やれやれ」
そうして氷室は、軽く眼鏡を押し上げる。
「……一つ、覚えておくといいでしょう」
「……あ？」
一呼吸置いて、氷室は続ける。
「――その蟻相手に一矢報いられるのは、あなたかもしれませんということですよ」

その言葉を合図にするかのように、刹那、青白い閃光が瞬いた。
「な、に……？」
男は振り返るが、閃光に視界を奪われる。
「いちいち探しにこないでよね。気色悪い」
吐き捨てるその言葉とともに、紫電の槍が放たれる。
「これでも……食らえっ！」
直後、雷の槍は放たれた。
音速を超える速さで接近する、必殺必中の雷。
ましてや、視界を奪われた男にその槍を回避する手段などあるはずがない。
迫り来る雷を目の前に、しかし男は……。
――相変わらず、その歪んだ笑みを浮かべていた。
そして、雷の槍は確かに男に命中した……かに思われた。
だが、実際は……。
「フゥン、ずいぶんと大技隠し持ってるんだな、お前」
「……な」
飛鳥はそれ以上声が出なかった。
自分で目の当たりにしているその光景が、信じられない。
こともあろうか男は、音速を超える雷の一撃を、素手で掴み取っていた。
男の手によって握りこまれた雷の槍は、今もなお衰えることなくバチバチと稲光を発している。
しかし、男に苦痛の色は見えない。
直後に男は、まるで何事もなかったかのようにその手で雷の槍そのものを簡単に握り潰した。
バチンと音を立て、無残にも雷は空気の中に溶けて消える。
「だがそれじゃあ、必殺技とは呼べないだろ？　必ず殺すから、必殺って言うんだろ？」

そしてその歪んだ笑みで、飛鳥を見据える。
一瞬だけ、飛鳥は確かにその胸のうちに恐怖感を覚え、わずかに足を退いた。
しかしそれが合図であるかのように、男はその手に握った炎の槍を何一つのためらいもなく、飛鳥目掛けて突き出した。

ズブリ、と。
この世のものとは思えない、思いたくもないほどの不気味な音が響き渡った。
炎の槍の切っ先は飛鳥の腹部を浅く貫き、引き抜くと同時に真っ赤な鮮血を宙に舞わせていた。
「……っ、あ……」
悲鳴にすらならない声がわずかに響き、飛鳥はそのままゆっくりと地面に倒れこんだ。
間もなくして、その周囲を真っ赤な血の水溜りが濡らす。
「飛鳥！」
僕は叫び、飛鳥の元へと駆け出していた。
しかし、それが自殺行為だったのかもしれない。
「騒ぐな。すぐにお前も同じになる」
そんな囁きは、どうしてかすぐ横合いから聞こえてきたのだった。
振り返ればそこに、すでに男の炎の槍の切っ先が迫っていた。
「ぐ……」
ダメだ、間に合わない……！
そう思った瞬間、全く正反対の方向から突き出された一撃によって、かろうじて僕は傷を負わずに済んだ。
「チッ、まだそんなことする力が残ってるのか」
忌々しそうに男は呟く。
繰り出された一撃は、氷室が放ったものだ。
「……余所見をするなと、言ったでしょう……」
しかしそれは本当の意味で最後の抵抗であり、もはや氷室の余力

が残されていないのは明白だった。
ともあれ、僕はこの隙に飛鳥の元へと駆け寄った。
「飛鳥、しっかり！」
「……う」
呼びかけると、まだ意識ははっきりとしていた。
出血は多いが、今ならまだ傷口を塞げば助けることができるはずだ。
僕は急いで治癒に力を注ぎ込む。
徐々にだが、傷口が塞がり、出血も止まる。
だが、僕にできるのはせいぜいこの程度の応急処置だけだ。
重症なことに変わりはないし、一刻も早く安静に休ませる必要がある。
だがそのためには、どうやったって……。
――この男を倒す以外に、道はない。
だけど、どうすれば……。
飛鳥はこの通り、もう戦える状態じゃない。
氷室にしたって重症に変わりはない。
……だとしたら、もう残されているのは一つだけじゃないか。
「……僕が、戦わなくちゃ……」
そう口にした言葉とは裏腹に、僕の中ではためらいがあとを引いていた。
何をしているんだ。
五体満足なのは僕しかいないんだぞ？
ここで戦わないで、いつ戦うつもりだ？
何度も自分に言い聞かせ、奮い立たせる。
しかし、何かが足りない。
きっかけのような、そんな何かが確実に。
……僕は、まだ恐れているのか？

守ることと傷つけることの境界線に、今もまだ怯えているのか？
あの日から、今日までずっと。
夢に出た日なんて、一度もなかったのに……。

「――まだ、恐れているのですね」

「……シルフィア……？」
ふいに聞こえたのは、風の声。
「『Ｒｉｎｇ』を通じ、私は主の記憶をも共有しています。主は過去に、深い傷を負っている。今もなお、その傷は塞がることを知らずにさらけ出されたまま」
「……」
僕は答えられなかった。
何もかもが、その通りだったから。
「……過去に囚われることは罪ではありません。しかし主。あなたが今ここで戦う意思を捨ててしまえば、あなたはまた過去の過ちを繰り返すことになる。誰も救えず、自分さえも救えず。それでも、いいのですか？」
「……嫌だ、そんなのは……」
絶対に、嫌だ……！
「……ならば、やることは一つです。戦いなさい。奪うためでも、傷付けるためでもない。守るべきもののために、力を……」
「……力を、貸してくれ。頼む……」
「もちろんです、主。あなたは無意識のうちに、今まで我が風の力を抑え込んでいた。しかし、今その楔は外れました。これか見せるものこそが、真の風の力。しかしそれさえも、解放前の私ではほんのひとかけらに過ぎないもの。見事、使いこなして見せなさい……」
そしてそれは起こった。
炎の熱ささえも忘れるくらいに、僕の中で風が吹いた。
「……何だ？」

「……これは、風……？」
男と氷室の言葉が、ひどく霞んで聞こえる。
僕の耳に届く音は一つ。
ただ、風の流れる音が奏でるメロディだけ。
「……氷室から離れろ。僕が相手になる」
「……ヘェ、お前、そういう顔もできるのか」
「や、大和……」
「面白い。お前の力も見せてみろ」
僕の方に興味が沸いたのか、男はあっさりと標的を移した。
その赤い槍の切っ先が、三度僕に狙いを定める。
「どうした？　かかってこないのか？」
「……言われなくても」
瞬間、僕は間違いなく、一瞬だけ消えた。
そして次の瞬間には、男の背後で思いっきり拳を振り上げ、力任せにその背中を殴りつけようとしていた。
「な……」
「……速い！」
男と氷室の驚愕の声も、僕の耳には届かない。
今はただ、この振り上げた拳を思いっきり握り締めて……。

「――今、やってやる！」

その一撃は、男の体をいとも簡単に吹き飛ばした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４０：戦い終わって……

体が軽い。
重力なんて、まるで感じさせないほどに。
背中に羽根が生えているかのようだった。
「こ、の……ガキがっ！」
苛立ちと共に破棄捨てられる男の言葉。
同時に、その炎の槍が僕の胸目掛けて真っ直ぐに突き出される。
当たればそれで即死。
僕の心臓はいとも簡単に貫かれ、真っ赤な鮮血を散らしながら地に伏せるだろう。
だがそれも、当たればの話であって……。
「……遅いよ」
ほんの少し体の軸をずらすだけで、無常にも炎の槍は空気の壁を貫くことしかできない。
貫かれた虚空の空間は、一瞬だけたぎる炎の熱さに揺らめく陽炎のような残像を残し、静かに消えた。
「ぐっ……！」
苦々しい男の言葉。
もう何度目か分からなくなるほどに繰り出した突きは、ただの一度として僕の体を掠ることさえもなかった。
「クソッタレ。だったら、これで……」
男は高々と槍を掲げると、切っ先に集中させた力をそのまま地面に向けて突き刺した。
同時に、地面が抉れ爆音が響く。
突き刺した地面の土がつぶてのように宙を舞い、さらに周囲からはいくつもの火柱が立つ。
その檻のような中に、僕は閉じ込められた。

「どうだ？　これならもう逃げ場はない」
「……」
しかし僕は、その男の言葉に全く恐怖を感じなかった。
なぜなら、これで逃げ場がなくなったのは僕もそうだが、同時に男にも逃げ場はなくなっているのだから。

「この距離なら外さねぇ。避けれるモンなら避けてみやがれ」
周囲に立つ火柱の一つ一つから、流れるように熱気が溶け出していく。
それらはやがて、男の持つ炎の槍へと吸収されていった。
ただでさえ真っ赤な切っ先が、それこそ火山のマグマのようにいっそう激しい赤色を示す。
もはやそれは、摂氏数千度とも思えるほどの熱量を帯びていた。
本来刃であるその切っ先も、今では触れるものを刻むものではなく、溶かすものへと変わっていた。
触れるだけで、恐らく肉も骨もロウソクのように溶けていくことだろう。
「終わりだ。まずお前を殺して、そのあと残った二人もすぐに同じ場所に送ってやるよ」
ニヤリと笑い、男はその炎に名を与える。
全てを焼き尽くすであろう、灼熱の名を。

「――シアリング・ロンギヌス」

熱さも痛みも感じさせず、ただ全てを焼き尽くすだけの炎が放たれる。
轟々と渦を巻くそれは、もはや太陽の熱さえも凌駕しうるものなのかもしれない。
この炎は、どれだけ大量の水をもってしても消すことはできないだろう。

だが、それは僕にとっても同じことだ。
例えどれだけ灼熱の温度を持つ炎であろうと、それは形のないものを焼き尽くすことなどできない。
それが風ともあろうものなら、なおさらのことだ。
だから僕は恐れない。
この目の前に迫る炎は、決して僕と僕の風を、消し去ることなんてできないのだから……。

「――連なり、束ねよ。重なり、交われ。消えることなき、風の咆哮よ……」

形のない風に、今こそ形を。
両手を中心に集束した全ての風の力を、目の前に展開。
目には見えないほどに薄く、そして色のない風のカーテン。
だがそれは、紛れもなく風の盾。
音もなく吹き荒れ、そして全てを吸収する。
「なん、だと……」
男の放った槍の切っ先から、見る見るうちに赤さが失われていく。
それはまるで、消えかけの焚き火を見ているのに等しい光景だった。
風の盾はただそこにあるかのように見えるが、実際はそうではない。
目には見えないほどの高速で、常に回転を繰り返している。
その回転速度の前に、炎は少しずつその熱をこそぎ取られていくのだ。
加えて、あまりの高速回転のあまりに一時的にその空間は真空状態に保たれる。
無論、酸素のない真空状態で炎は燃えることなどできるわけがない。
結果、どれだけ勢いづいた炎であろうと、風の壁を突き破ること

はできない。
「炎が、消えて……」
もはやそれはわずかな残り火。
例えるならそう、夏の夜の線香花火ほどの儚さだろうか。
とにもかくにも、そこにもはや炎としての強大さはカケラも残されてはいない。
残ったのは、わずかなかがり火と強大な風の盾だけだ。
「今度は、こっちの番だ」
風の盾が形を崩す。
弾け、霧散し、自由に飛び回る鳥のように飛来する。
それらは風の刃。
小さな風の音を奏でながら僕の周りで踊りだす。
それらの風に、新たな名を。

「――ハウリング・ゲイル」

刃は放たれる。
目の前の、敵に向けて。
「ぐっ……！」
せめてもの抵抗と言わんばかりに、男も薙ぎ払った槍の切っ先から炎の弾丸を打ち出す。
しかしそれらは、どれ一つとして風の刃と相殺することはなく、一方的に呑み込まれて消えるだけ。
炎をかき消し、風は突き進む。
無数の刃が、男の体を切り刻む……その、刹那。

――突如、地面が割れた。
軽い地鳴り。
「うあ……」

僕はその衝撃でわずかにバランスを崩したが、それだけだった。
しかし目の前で起きていることは、それだけではなかった。
「……これは」
僕の目の前にあったのは、土の壁だった。
砂煙を立ち上らせながら、その土壁は僕を見下ろしていた。
次の瞬間、音もなくその壁が崩れ始めた。
バラバラと零れ落ちる土砂に、僕は思わず数歩引き下がる。
「一体、何が……」
視界を覆う砂煙の向こうに、僕は何かを見た。
それは人影。
ただし、なぜかその数は二つ。
しばらくして、ようやく砂煙は僕の視界をクリアに戻してくれる。
そして、その視界の先に。

「――命令違反だな、赤穂。彼はお前に、彼らを殺すようにとは一言も命じていないはずだ」

凛と美しい、長身の女性がそこに立っていた。
その手には何か長い棒のようなものが握られているが、真っ白な布でグルグル巻きにされているので実体は分からない。
長さから見て刀のようにも見えるが……。

「……テメェ、蓮華。なぜここにいる？」
「その言葉、そのまま返そう。貴様こそ何をしている？　独断で動くなと言われているはずだがな」
「……チッ」
「……まぁいい。とりあえず最悪の事態は免れているようだ。ここは退くぞ。文句はないな？」
「……クソが。分かったよ……」
蓮華と呼ばれた女性と男……赤穂はそれだけの会話を済ませると、

再び僕に向き直る。
「そういうわけだ。お互いに命拾いだと思って、ここは退こう。お前の仲間も、決して軽い怪我ではないだろう？」
言いながら、蓮華は視線を動かす。
そしてその視界の遠くに、横たわる飛鳥の姿を捉えると、なぜか一度だけ驚いたような素振りを見せていた。
「……フン、奇縁とはこのことか。だが、まだ決着と言う形には相応しくないな……」
「おい蓮華、何をブツブツ言ってやがる」
「……何でもない。とにかく退くぞ。あとのことは彼に任せる」
「ケッ、面倒くせぇな。皆殺しの方が手っ取り早いじゃねぇかよ」
「私に愚痴るな。彼に聞け」
そしてもう一度、蓮華は僕に向き直る。
「さて。こちらは退くつもりなのだが、そちらはどうする？　どうしてもというのなら、相手にならざるを得ないがな」
「……」
僕はその返答に迷う必要などなかった。
そもそも僕が戦ったのは。氷室と飛鳥を守るためだ。
相手が退き、二人の身の安全が保障されるなら、これ以上の争いごとも僕が望むところじゃない。
「……分かった。けど、先に退くのはそっちだ」
「賢明な判断だ。いいだろう。行くぞ、赤穂」
「……ヘイヘイ」
そして二人は、僕に背を向けてその姿を消した。

ようやく訪れた静寂に、僕は心のそこから安堵の息をついていた。
としかし、そんなことをしている暇はない。
「……そうだ。氷室と飛鳥は……」
僕は急いで二人の元へと向かう。
あのまま戦っていては二人にも危険が及ぶので、少し場所を移し

て戦っていたのだ。
　ほどなく走ると、そこには木の幹に背中を預けて座る氷室と飛鳥の姿があった。
「氷室、飛鳥！」
　駆け寄り、僕は叫ぶ。
「大和、無事でしたか」
　そう返してくれたのは氷室だった。
　着ている白いワイシャツは真っ赤に染まってしまっているが、左肩からの出血はもう収まっているようだ。
　一方飛鳥は、まだ意識を失ったまま氷室の横で眠っている。
「……飛鳥は？」
「傷そのものは、大和のおかげでもう塞がっています。ですが、まだ安心はできないでしょう。内臓などのどこかしらに痛手を受けている可能性もありますからね」
「そっか……」
「大和、あなたは大丈夫ですか？」
「あ、うん。僕は平気。だけど……」
「だけど？」
「……ごめん。ちょっと成り行きで、また逃がすことになっちゃった」
「ああ、そのことですか。私も遠目では見ていたので、何となく分かりました。ですが、今回に関してはそれが正解でしょう。さすがに二人を同時に相手をするのは不利です」
　氷室は眼鏡を押し上げながら、蓮華と赤穂が去っていった方向をぼんやりと眺めていた。

「とりあえず、私達も戻りましょう。傷の手当てにしたって、ここにいては何もできない」
「氷室、運転できるの？」
「いえ、さすがに無理でしょうね。ですから、迎えを呼ぶことにし

ます」
「迎え？」
そう言うと、氷室はポケットの中から携帯を取り出し、発信した。
「もしもし？　竹上さんですか？　私です。ええ、実はちょっと、頼みがありまして……」
そんな具合で会話は続いていく。
何はともあれ、迎えが来てくれるのなら心配はしなくてよさそうだ。
と、そんなときだった。
「……う……」
飛鳥がようやく意識を取り戻しかけたようで、何かを呟いていた。
聞き耳を立てるわけじゃないけど、どうしてか僕はその言葉の続きが気になってしまう。
「……も……」
も？
その続きは何だ？
「……も、もう……」
……もう？

「――……もう、そんなに食べられないってば……」

「……」
その、あまりに間の悪い気の抜けた寝言に、僕はドッと押し寄せる疲れを感じていた。
人の気も知らないで、一体どんなに幸せな夢を見ているんだか……。
「……ハァ」
と、重い溜め息を一つ。
陽は沈み始め、もう間もなく夜の帳が下りようとしている頃だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４１：束の間の休息

どういうわけか、僕は生まれて初めてパトカーに乗る羽目になってしまった。

というのも、氷室が電話で呼んだ竹上という人は、現役の刑事だったのだ。

確かに迎えに来てくれたのだが、だからといってわざわざご丁寧にパトカーを引っ張り出してやってくることもないんじゃないだろうかと、僕は未だに頭を悩ませずにはいられなかった。

とまぁ、多少のいざこざはあったものの、僕達は竹上さんとその部下の万代さんのおかげで、今はこうして無事に氷室の事務所へと戻ってきていた。

僕はてっきり病院へと直行するものとばかり思っていた。

何しろ、僕はともかくとして、氷室と飛鳥は目で見ても分かるほどの怪我を負っていたからだ。

特に氷室は、ワイシャツの大半部分を血で真っ赤に染めているのだ。

素人目に見たって、それが重症かそうでないかの違いくらいは判別できる。

しかし氷室は病院へは向かわず、真っ直ぐに事務所へ向かうように竹上さんに頼んでいた。

当然、竹上さんとしても見た目重症な氷室を病院へと運ばないわけにはいかなかったはずだろう。

しかし、数分間の言い合いの末に、結局竹上さんはしぶしぶ氷室の話に従ってくれることになった。

この二人の間にどれだけの付き合いがあるのかは僕には分からないが、それでも互いにある程度の信頼関係を持っているということは何となく感じられた。

そうして僕達は無事に事務所へと送り届けられ、竹上さんと万代さんはそのまま署へと戻っていった。

もちろん、車から降ろしてもらったのは人目につかない裏路地の一角にしてもらった。

夜も近づき人通りもわずかに多くなる時間帯に、歩道の路肩に停車させられたのでは僕達はあまりにも浮いてしまうだろう。

ある程度落ち着いた僕達は、まず真っ先に怪我の治療をしなくてはいけなかった。

三人の中で唯一五体満足で動けるのは僕だけで、なおかつ治癒の力を使うことができるのも僕だけだ。

力のコントロールも日に日にいくらかマシにはなってきている。

まだ劇的な効果を及ぼすとまでには程遠いが、自然回復に任せるよりはずっと早いはずだ。

「氷室、肩を見せて」

僕は椅子に腰掛けた氷室にそう言って、まずは血まみれのワイシャツを脱いでもらうことにした。

しかし、時間経過のせいで血は固まり、ワイシャツもカサカサに乾いていた。

無理に脱がせて傷口に影響するといけないので、手荒だがまずはワイシャツをハサミで切ってしまうことにする。

幸い、傷口とワイシャツの間には空気の隙間があり、血によって繋がっているということはなかった。

出血はすっかり収まり、今は痛みも多少は引いているのだろう。

だが、僕はその傷口を目の当たりにして、わずかばかりに言葉を失い、同時に一瞬だけ目を逸らしてしまう。

「……っ！」

見ているこっちが痛みを覚えるようだった。

氷室の左肩には、あの炎の槍で一直線に貫かれた傷があり、今でこそその穴はすでに塞がりつつあるが、その痛みは計り知れないも

のだったに違いない。
「……まだ痛む、よね？」
「まぁ、さすがにそうですね。ですが、ずいぶんとまともになってきてますよ。これも、大和の応急処置のおかげです。それがなければ、恐らく私の左腕はそう遠くないうちに腐り落ちていたでしょう。これは貫かれた傷であると同時に、焼かれ焦がされた傷です。普通の傷とはワケが違う。受けたときも、間一髪で水の防御壁でダメージを減らしましたが、もしそれが間に合わなければ、とうにこの左腕は炎に包まれて炎上していたでしょうね」
「……」
口調は落ち着いて述べてはいるが、僕は寒気を覚えずにはいられなかった。
それはつまり、言葉どおりに容易く人一人を死に至らすことができるほどの力ということ。
そんな力を持つ者が現実にいて、僕達もそれに近い力、もしくは匹敵するかもしれない力を備えている。
それは、考えただけで恐ろしいことなのかもしれない。
今はこうして互いの無事を喜び合っていられるけど、次はそうはいかないかもしれない。
僕達はいつ殺し、殺されてもおかしくない存在になってしまっていた。

「……大和、大丈夫ですか？　傷を負った私よりも、無傷のあなたのほうが辛そうに見えますよ」
「……あ、ごめん。何でもない」
心理を読まれた僕はそう言葉でごまかして、氷室の左肩に手を添えて癒しの力を行使した。
淡い緑の光がわずかに温かみを覚え、傷口を中心に浸透していく。
目に見える表皮の損傷はしだいに消えていき、元通りの肌色の皮膚が構築されていく。

「……どう？」
とはいえ、傷を負った本人ではない僕には具合の程度が分からない。
その言葉を受け、氷室は左腕を軽く動かし、手を握ったり開いたりしてみる。
「……ええ、ずいぶんと楽になりました。まだ多少の痛みは残りますが、これも後々引いていくでしょう。少なくとも、日常生活に支障をきたすことはありません」
「……そっか。よかった……」
僕はホッと安堵の息をつき、いつの間にか額に浮かんでいた汗の珠を袖口で拭った。
「……っと、そうだ。飛鳥の傷も……」
そう言いかけて、僕はふと思いとどまる。
「……あ」
肝心なことを忘れていた。
しかもそれは、結構重要な問題だ。
簡単な話が、僕と氷室は男同士だから、地肌を見せることもある程度までは許容することができる。
だがしかし、飛鳥の場合は別だ。
多少男勝りで勝気な部分があったとしても、飛鳥は正真正銘の女の子だ。
いくら傷の手当てが名目だからといって、医者でもない僕が直接体に触れるというのはいかがなものだろうか……。
まぁ、実際は衣服の上からでも効果はあるのだろうが、それでも抵抗を覚えずにはいられない。
一歩間違えれば、これはれっきとしたセクハラ……いや、ヘタをすると痴漢行為に近いものになってしまうのではないだろうか？
かといって、飛鳥を放っておくわけにはいかない。
傷口は腹部であり、氷室と比較しても危険度は高い。
飛鳥は今隣の仮眠室でまだ眠ったままだが、起きるまで待ったほ

うがいいのだろうか？
もっとも、あんな寝言を言うくらいだから問題はないのかもしれないが、それでも安否は気に掛かる。
もしも目には見えない内臓や器官のどこかに傷を受けていたとしたら、それは放置するわけにもいかない。
とはいえ、やはり異性の体に触れることは抵抗があるわけで……。

「……氷室、飛鳥の傷のことなんだけどさ」
とりあえず僕は大人の意見を聞いてみることにする。
「その……やっぱり、放っておくわけにはいかないと思うんだけどさ。その……」
「そうですね。ヘタをすれば、私より傷は深いかもしれません。早急に処置を施す必要があります」
言うなり、氷室は椅子から立ち上がって一直線に仮眠室へと歩き出す。
「ちょ、ちょっと待って！」
「どうかしましたか？」
「いや、そうじゃないけど……ほら、飛鳥だって女の子のワケだしさ。僕達が勝手にどうこうってのはちょっとマズイんじゃ……」
「ああ、そういうことですか。しかし大和、事は緊急を要します。そういう小さな境界線につまずいている暇はありませんよ」
「そ、そんなこと言ったってさ、氷室はどうか知らないけど、僕にはやっぱり抵抗があるわけで……」
「ふむ。ではこうしましょう。飛鳥は実は男だった。さぁ、そう思い込みなさい。それで問題解決です」
「無茶言わないでよ……」
「無茶ではありません。では聞きますが大和、あなたは飛鳥に女性としての可憐さや美しさ、愛らしさがあると思いますか？」
「な、何で僕がそんなことを……」
「いいから答えなさい。どうなんです？」

「……それは……」
確かに氷室が言うような、可憐さとか美しさとか、そういう大人っぽいイメージはあまりないかもしれない。
でもそれは、飛鳥がまだ僕と同じ成長途中な年齢だからであって……。
「……ない、というか、まだ少ないとは思う、けど……」
やはり飛鳥には、活発とか元気とか、そういう言葉が似合いそうな気がする。
「そうでしょうそうでしょう。はい、これで問題は解決ですね。従って飛鳥は女ではありません。私達と同性と思って接しなさい」
「してない！　全く解決してない！　接せない！」
思わず僕は声を荒げてしまった。
扉一枚隔てた向こうでは、飛鳥が眠っているというのもすっかり忘れて。
「やれやれ。困り者ですね、大和も。まぁ、そういう年頃なのかもしれませんが……」
どうしてか溜め息までつかれ、しかし氷室はどこか楽しそうに笑みを見せた。
これはもしかしなくても、僕は氷室にからかわれているんじゃないだろうか？
「……氷室、わざとやってない？」
「いえいえ、真剣ですよ」
としかし、顔は笑ったままだった。

「まぁ、冗談はさておきにして。傷の具合が気になるのは私だって同感です。飛鳥は嫌がるかもしれませんが、無理にでも傷の具合は見せてもらいます。一時の気恥ずかしさくらい、生死に比べれば大したものでもないでしょう」
「それはそうだけど……」
言いながら、氷室はガチャリとドアノブを回し、仮眠室の扉を押

し開け……。
直後に、そのまま硬直した。
「……氷室？」
僕は背中越しに氷室を呼ぶ。
しかし、反応はない、
何かと思って体の位置をずらしてみると、何とそこには……。
――明らかに怒りを噛み殺した満面の笑顔を見せ、なぜか片手に思い切り強く枕を握り締めて仁王立ちする飛鳥の姿があった。
「あ……」
僕は思わずそんな一言を漏らした。
そして、最悪の事態が脳裏をよぎる。
もしかしたら今までの会話全て、飛鳥の耳に筒抜けだったのではないだろうか……。
「おや、飛鳥。もう起きても大丈夫なんですか？」
「おかげさまで。ぐっすり眠ったからもうピンピンよ」
目が……目が笑ってない……。
「そうですか。しかし、油断は禁物ですよ。もう少し横になっていた方がいいでしょう」
「平気よ氷室。心配しないで」
見ていて恐怖を覚える笑顔だった。
「ところで飛鳥、一つ不思議に思ったのですが」
「ん？　何？」
「どうしてその、そんなに握り潰すほどに強く枕を掴んでいるんですか？」
「ああこれ？　別に、気にしないで。まだ充電中だから」
「充電ですか。ということは、どこかに発散する予定でも？」
「さっすが氷室。よく分かってるじゃない」
棒読みに近い会話が続く。

僕は血の気が引いていくのを切に感じていた。
「飛鳥」
「何？」
「ついでにもう一つ聞いていいですか？」
「だから、何よ？」
「どうしていつの間にか、私の襟首をちぎれんばかりに掴んでいるんでしょうか？」
「やだなぁ、もう。氷室ったら。分かってる……」
そう言った直後、飛鳥はその場で一気に振りかぶって……

「――クセにいいいいっ！！！」

右手に握り締めた枕が、ほとんどゼロ距離から氷室の顔面に直撃した。
ボスンとかズゴンとか、そんな不可解な効果音がして、氷室の体はゆっくりと床の上に倒れていった。
「……それだけ元気なら、心配はいりませんかね……」
顔面に枕をめり込ませたまま、氷室は力ない声でそう呟き、ヨロヨロと立ち上がるのだった。
「ハー、ハー……ったく、黙って聞いてれば好き放題言ってくれちゃってさ！」
「私じゃありませんよ。元はといえば大和が」
「何で僕！　僕は何も言ってないよ！」
「おや、言っていたじゃないですか。飛鳥は女性としての魅力がカケラもないって……」
「言ってない！　そんなの初耳！」
「……やーまーとー……」
としかし、もはや話は聞いてくれないようだった。
「ち、違うって！　僕は何も……」
「うるさい！　共犯だから問答無用！」

と、僕は顔面に思いっきりクッションを投げつけられ、氷室同様に床の上へと倒れ込むのだった。
とはいえ、とりあえず飛鳥のこの調子なら心配の必要はなさそうだ。
それだけに安堵を覚え、僕はヒリヒリする顔をさすりながら起き上がった。
と、同時に。

――ギュルルル……。

と、そんな誰かの腹の虫が鳴いた。
言うまでもなく、音の出所は……。
「……」
「……」
「……う……」
僕と氷室の視線が飛鳥に集中する。
やれやれという氷室の溜め息と、わずかに吹き出した僕の笑いが重なる。
「やれやれ。ではとりあえずは、夕食でも食べにいくとしましょうか」
顔を赤らめた飛鳥は、答えずに明後日の方角を向いていた。
傷付き傷付けた一日が、もうすぐ終わる。
しかしこれはまだ、ほんの始まりに過ぎない。
残る封印はあと七つ。
僕達は一体、どれだけの傷を負って前に進んでいくのだろうか。
答えはない。
今はただ、こうして笑い合える一日の終わりを揃って迎えられたことを喜ぼう。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４２：知らぬ間の開放

今日も一日、色々なことがあった。
思えば、この『Ｒｉｎｇ』に関わるようになってから、一日一日がやけに長く感じるようになった気がする。
まぁ、それも無理もないことなのだろう。
言ってみれば、毎日が新発見や驚きの連続で溢れているわけなのだ。
しかもそれが、大半は命に関わる危険性を伴っている。
よくまぁ今日も無事に生き延びることができたものだと、僕は眠る前に考えずにはいられなかった。
しかしとにかく、今日という日はもう終わろうとしている。
部屋の壁掛け時計に目を向けた。
時計が告げる二十四時はもう間もなくだ。
明日は明日で、また一見していつもと変わらない日常が幕を開けるのだろう。
しかしその裏側で、今度は一体何が起こるというのだろうか？
残された封印はあと七つ。
その中で僕達が場所を特定できているのは残り二ヶ所。
それらは何の封印が施されているのだろうか？
考えたところで、今の僕には見当もつかなかった。
それどころか、今は疲れ切ったこの体を起こすことさえも苦しくて仕方がない。
シルフィアの言葉をそのまま借りるのならば、これは僕が使った力に対する反動だそうだ。
まだ封印開放に至らず、にもかかわらずに大量の力を消費してしまったため、僕の体は言わばガス欠寸前の車のようなものだという。
休息を取れば疲労などもすぐに回復するだろうとの事だが、なる

ほど、確かにこれはキツイ。
オーバードライブとでも言えば分かりやすいだろうか、ちょうどそんな現象を体感しているようだった。
まぁ、何はともあれ、今日はもうゆっくりと休むことにしよう。
そろそろ睡魔も限界だ。
僕は部屋の電気を消し、暗がりの中で静かに目を閉じた。
睡魔はすぐにやってきて、そのまま僕を見えない夢の中へと運んでくれた。

同時刻、県立月見沢高校校舎の一角。
月見沢高校は新校舎と旧校舎に棟が分かれており、基本的に新校舎の方で一般生徒達の授業などが行われる。
旧校舎はと言うと、主に文科系や同好会系統の部室代わりとして放課後の時間帯をメインに使われる、言わば離れのようなものだ。
そして今、場所はその旧校舎の裏手。
もう間もなく日付が変わる真夜中にもかかわらず、月明かりの落ちないその暗がりの中に佇む人影が二つ。
一人はその闇の色に解けるように黒い、しかし全身をフリルだらけのかわいらしい服装……いわゆるゴスロリの衣装に身を包み、その腕には大事そうにこれまた真っ黒なウサギにぬいぐるみを抱えた、小柄な少女のもの。
何もかもが真っ黒で染まる中、ウサギのぬいぐるみの赤い目と赤い口、そして耳に結わえられた白いリボンだけがひどく目立っていた。
もう一人は、これと言って特徴のない少年。
歳で言えば十代後半くらいだろうか。
高校生くらいの高くも低くもない背丈、痩せ型とも肥満とも言えない体つき。

ただその何の抑揚もない瞳には、月光さえも凍てつかせる蒼い光が宿っていた。
無造作にポケットの中に両手を突っ込んでただ立ち尽くすだけで、少年の周囲は凍えるほどに冷たくなる。
そんな、組み合わせだけ見れば明らかにギャップさえ感じる二人は、しかし同じ目的の下にこうしてこの場所に立っている。
「……ここが。封印の。一つなの？」
ぬいぐるみを抱えた少女……かりんは呟いた。
「そうらしい。もっとも、これから足で探すことになるがな」
返す言葉は淡々としたもの。
優しさも怒りも込められていない、それこそただ言葉を返すという最低限の行動しか取らない機械じみた低く冷たい声色。
「行くぞ。あまり時間をかけすぎると、人目につくかもしれない」
答えずにかりんは頷き、音もなく歩き出す少年のあとに続いて歩き出した。

旧校舎とはいえ、意外とその敷地全体の面積は広い。
三階建ての木造校舎は一見古びて見えるが、中の設備などはさほど気後れしているものではない。
最低限の設備は今も整っているし、仮にも部活動などで使われる場所だ、倒壊の危険などもない。
過去には何度か取り壊しの話も上がっていたようだが、そのあたりの真偽については不明。
しかしこうして形を残しているのだから、取り壊しの話もいつしかなかったことにはなったのだろうと思う。
と、そんなことをこの二人が知る由はなく。
ヒタヒタと忍ばせるような足音だけを鳴らしながら、二人は旧校舎の裏手を歩いていた。
一見何もない、あるのはただ佇み続ける闇だけの世界。
目を凝らしても一寸先は見えないし、地面を照らす月明かりがな

い今、頼りになる明かりさえも二人は持ち合わせてはいなかった。
それでも二人は迷うことなく歩き続ける。
それはまるで、見えない何かに引き寄せられているかのように。
「……近い。力の余波が。伝わってきている」
「ああ。どうやらこの辺りみたいだな。アイツの言っていた、氷の封印とやらは……」
言いながら、少年はその足を止めた。
そして今までずっとポケットの中に突っ込んだままだった両手を取り出し、その手を静かに広げた。
シンと静まり返る空間。
その中で、ピキパキと、そんないくつかの音が鳴り出す。
目を凝らして見れば、少年の手の中でいくつもの小さな透明のカケラが生まれているところだった。
闇の中で妖しく輝くそれは、一見ガラス細工のようにも見える。
しかしそれはガラスではなく、少年の力によって空気中の水分が冷えて固まり、氷となった結晶だった。
「……どう？　何か感じる？　日景（ひかげ）」
日景と呼ばれた少年はしかしすぐには答えず、ゆっくりと目を閉じてその余波を感じ取っていた。
「……こっちの方向で間違いなさそうだ。さっさと終わらせる」
「……了解」
二人は再び足を動かす。
向かう先にも闇が広がっているだけにしか見えないが、その奥に確かな何かを感じて、二人は歩き続けた。

「……ここだな」
数分ほど歩いて辿り着いた場所は、校舎の裏側の中でもさらに人目につかない一角だった。
暗いばかりで景色はロクに見えたものではないが、実際には二人の目の前には小さな花壇が広がっている。

もっとも、それはかつて花壇として使われていた場所であり、今はもうその中で咲き誇る花の姿は一つもない。
ところどころに雑草が生えているだけで、それは荒れ果てた荒野と何も変わらなかった。
しかしその場所にこそ、封印は施されていた。
力と封印は互いに引き合う。
氷の力を持つ日景と、氷の封印。
その二つがこの場に揃ったことにより、変化は始まる。
「……これは。霧？」
まず最初に、真っ白な霧。
まるで山奥の土地で迎える朝靄のように、その霧は音もなく二人を包み込んだ。
ひんやりと冷気を含んだそれは、かりんの体にわずかながらに寒気を覚えさせた。
「大丈夫か、かりん？　少し離れた方がいいんじゃないのかい？」
腕の中の黒いウサギのぬいぐるみ……クロウサはそう告げた。
「……平気。それに。私じゃないと。赤い碑文は。読み取れない」
「少し下がっていろ、かりん。解放前に力尽きられては話にならない」
「そうそう。ほら、下がった下がった」
日景とクロウサに立て続けに促され、かりんはしぶしぶとその場を離れた。
白い霧はさらにその濃度と密度を増し、ついには日景の体そのものが数メートルの距離越しに完全に隠れてしまった。
「うわ……こりゃすごい冷気の壁だなぁ……」
「……もしかして。クロウサも。寒いの？」
「そんなワケないだろ。オイラは人形なんだから、熱さも寒さも、痛みも何も感じはしないさ」
「……人形……」
「何だよ。急に黙り込んじゃって？」

「……ううん。何でもない。それより。日景が心配」
腕の中のクロウサから視線を外し、かりんは再び白い霧の方を見た。
冷たさはもちろんのこと、その過密さに唖然としてしまう。
まるで世界そのものをその霧で分断してしまっているかのように、例えようのない距離感を感じてしまう。
数歩歩けば踏み入れるはずの場所なのに、それができない。
一足早く真冬の世界に飛び込んでしまったような、そんな妙な錯覚だ。

「ヒカゲのヤツ、大丈夫かなぁ……」
「……心配？」
「そうじゃなくて、オイラが心配なのはかりんの方だよ。もしこのまま開放失敗なんてことになったら、オイラ達じゃ何もできないじゃないか。それどころか、封印が暴走してしまう可能性だってあるんだからさ」
「……それはまた、ずいぶんと……」
と、霧の向こうから声がした。
同時に、空間を隔てていた白い霧が静かに消えていく。
「いらん心労をさせたみたいだな、クロウサ」
そこには、何事もなかった姿のままで日景が立っていた。
「遅いぞヒカゲ。かりんが凍っちゃったらどうするんだ」
「そうならないように、お前がいるんだろ？」
「……フン。まぁ、いいけどさ……」
と、目には分からないがクロウサはやや拗ねてしまっていた。
端から見ればどこか笑えるやり取りも、この状況では微かな笑い声さえも響かない。
「それよりも、続きだ。かりん、碑文を読み上げてくれ」
「……分かった」
晴れた霧の中、そこには変わらずに花壇の残骸が佇んでいた。

しかし、その中心に一つの石碑が姿を現している。
夜の闇の中でやや目立つ、灰色の石碑。
そこに刻まれ、掘り込まれた記号の羅列。
かりんはその窪みを目で読むのではなく、指先で触れて読み始める。
「……我、凍てつく氷河の抱擁を受ける者なり。時の流れさえも凍らせる我が力を求め者よ。我が前にて其の力を示せ。色のない花を咲かせよ。さすれば我は目覚め、汝が力となるだろう」
「色のない花、か……」
わずかに考え、そして日景は迷うことなく力を使った。

その両手に冷気を集中させ、研ぎ澄まされた氷のカケラをいくつも生み出していく。
一つは鋭い切っ先を覗かせる刃にもなり、また一つは丸みを帯びたつぶてにもなる。
そしてそれら全てを、何も咲かない花壇目掛けて打ち付けた。
ザクザクと音を立てながら突き刺さる氷。
しかしそれらは、やはて一つの形を成す。
それは、氷の花。
半透明な結晶体で作られた、バラによく似た氷の花が咲いた。
瞬間、石碑に彫られた記号が赤く染まりあがった。
「……これが。クリムゾン。赤の力……」
呟き、かりんはその輝きに目を伏せた。
閃光のような瞬きはしかし文字通り一瞬で、気がつけば周囲は元の闇色の世界に包まれていた。
「……日景。どう？」
かりんは訊ねる。
対して日景は、その手に新しい力の集合体を具現化させ、答えた。
ヒュンと風切る冷たい刃。
そこに、薄氷の剣が握られていた。

「――ああ。成功だ」

氷の封印は解かれた。

これで、残る封印はあと六つ。

「すでにこちらが二歩リードした。儀式の都合上、封印は最終的に全開放しなくてはならないようだが、どの道こちらの優位には変わりはないか」

「……確かに。そう……」

言いかけたかりんのその体が、グラリと揺れる。

「かりん、しっかりしろ！」

叫ぶクロウサの声も、しかし響くだけ。

腕の中のクロウサに、倒れるかりんの体を支えることはできない。

しかし……。

「っと」

「……ヒカゲ」

倒れかけたかりんの体は、日景がしっかりと支えてくれていた。

「そうだったな。かりんは碑文を読むと、相当の力を消耗するんだったな」

「……ああ。もともとかりんの体は、碑文を解読するだけの反動に耐えられる造りじゃないんだ。そんなの、外見だけ見ても十分納得できるだろ？」

「そうだな。確かにこの小さな体には、負担が大きすぎるだろう。だがしかし、それでもかりんはやると決めたのだろう？」

「……そうさ。かりんが自分で決めたんだ。だからオイラは、もう何も言わない。最後までかりんを見届けるって決めたんだ」

「……そうか。なら俺は何も言わないさ」

それだけ言うと、日景はその背にかりんの小さな体を抱きかかえた。

「……ん」
一言だけそう漏らすと、かりんはそのまま小さな寝息を立てて眠り始めてしまった。
「子供はとっくに寝る時間だからな。今日は俺が送っていってやるさ」
「その言葉、かりんが聞いたら怒るぞ。ヒカゲだって子供じゃないかって、四六時中付きまとわれても知らないからな」
「そうなのか？　だったら、今のは聞かなかったことにしてくれ」
「さーて、どうしようかなぁ……」
とか何とか呟くクロウサの声を聞きながら、日景はその場をあとにした。
「っと、置き土産を忘れるところだったな」
最後のそう一言呟いて、その手に握った氷の剣を、あの花のない花壇に放り投げた。
サクと音を立て、突き刺さる薄氷の剣。
今はただ、それだけ。
やがて、日景達は音もなくその場から姿を消した。
大和達が何も知らぬ間に、封印はまた一つ開放されていく。
そして、翌日。
そのことを嫌でも知ることになるだろう。
――翌日、大和の通う月見沢高校の旧校舎が氷付けになってその姿を現した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４３：侵入

翌日、登校する少し前にその知らせは僕の耳にも飛び込んできた。
普段どおりに身支度を終え、そろそろ出かけようというまさにそのときのことだ。
「大和、今日は学校臨時休校ですってよ」
という母さんの声で、僕はその事実を知ることになった。
「臨時休校？　どうして？」
「さぁ……。詳しくは分からないけど、連絡網でさっき連絡があったのよ。何だか、旧校舎がどうのこうのって……」
「旧校舎……？」
一体何があったというのだろうか？
当日の朝になって連絡網が使われ、なおかつ休校になるくらいなのだからただ事ではないのだろう。
「まぁ、そのうち何があったか連絡が来るとは思うけれどね。とりあえず、何があるか分からないから今日は家の中で大人しくいているようにですって」
「……そう」
小さく僕は頷いて、仕方なく制服に着替えたままの服装で自分の部屋に戻ることにした。
鞄を机の上に置き、床に座り込んでベッドに背を預ける。
まだ起きてから間もないので、もう一度寝ようと思えばいくらで眠れるような感じだった。
しかし、何かこう胸の中でモヤモヤしたものがくすぶっているような感覚がある。
それが何であるか分からないのに、そのことばかりを考えてしまう。
旧校舎で一体、何があったというのだろうか？

火事でも起きたのだろうかとも思ったが、それだったら僕の家からでも火の手が上がっているのは見えるはずだ。
今日は天気も曇りでどこかぐずついているようで、空に青さはなく、一面が灰色に染まっていた。
いつ一雨降ってもおかしくない天候。
それに伴って気温も下がり、こうして部屋の中にいるのに肌寒さを覚えるくらいだ。
「……もしかしたら」
と、僕の脳裏にある仮説が浮かび上がる。
しかし同時に、それはないだろうという否定の声も響く。
そこからはもう水掛け論で、結局自分の思ったことの真偽は確かめようのないものになってしまう。
確かめる方法があるとすれば、それは一つだけだ。
実際に学校まで行き、様子を見てくるしかない。
しかし先ほど母さんにも言われたとおり、学校側は連絡網を通じて生徒の外出を控えるように警告している。
仮にうまく外出できたとしても、学校近辺には何らかの形で警戒網のようなものが作られ、野次馬根性丸出しでやってくる生徒達は真っ先に押し返されてしまうことだろう。
どうしたものだろうか……。

などと僕が悩んでいると、窓の向こうからコンコンとノックの音が聞こえた。
僕は立ち上がり、開け放したカーテンの向こう側を見る。
するとそこには思ったとおり、唯の姿があった。
僕が窓を開けると、それに合わせて唯も窓を開けた。
「おはよ、大和」
「うん。おはよう」
唯も制服の姿でそこに立っていた。
恐らく、僕と同じように出かける直前になって連絡を受けたのだ

ろう。
「学校、休みになっちゃったみたいだね」
「みたいだね。何があったのかは知らないけど」
「普通なら両手を挙げて喜ぶところなのかもしれないけど、何か今日はちょっと不気味。天気のせいかもしれないけど……」
と、唯は曇天の空を見上げて呟いた。
確かに、見ているだけで憂鬱な気分になりそうな空模様だ。
「……何があったんだろ。ちょっと、ただ事じゃないよね、これ」
「……分からないよ。でも、確かにちょっと普通じゃない。ニュースとかでも騒がれてないみたいだし……」
僕達は二人して、学校のある方向の空を見上げていた。
わずかに見えるのは問題の旧校舎ではなく、新校舎の屋上だ。
遠目で見た限り、これといっておかしなところは何もないように見えるのだが……。
と、そんなときだった。
着信を知らせるメロディが鳴り、唯の携帯が音を上げた。
「電話？」
「あ、そうみたい……って、美野里からだ。どうしたんだろ？」
そして唯は着信ボタンを押す。
「あ、もしもし？　うん、おはよー。うん、聞いた聞いた。休校になったって話でしょ？」
どうやら会話の内容も今日の臨時休校に関するもののようだ。
この分だと、僕のほうにも悟や健史から電話の一つくらいかかってくるかもしれない。
「……え？　ウソ、何それ……ホントなの？」
ふいに唯の声のトーンが落ちた。
その言葉からして、何か信じられないようなことを聞いてしまったような、そんな……。
「……うん。いやでも、ちょっと正直、信じられないっていうか…

…」

「……どうかしたの？」

たまらず僕は通話中の唯に話しかける。

「あ、うん。美野里がね、何かすごいものを見たって言うんだけど……」

「すごいもの？」

「あ、ごめん。今大和も一緒なんだ」

一度唯は言葉を区切り、電話の向こうの美野里に状況を説明する。

「ちょっと、美野里と話せるかな？」

「ちょっと待って。うん、今大和に替わるね」

僕は唯の手から携帯を受け取り、耳に当てる。

「もしもし、美野里？　僕だけど」

「あ、うん」

「美野里、何を見たの？　っていうか、どうしたの？　今家にいるんじゃないの？」

「あのね、私今日、委員会の当番の日で、いつもより早く家を出たの。それで、学校に着いたときに……見ちゃったの」

「見たって……何を？」

「それは……」

そこで美野里は一度言葉を区切った。

ためらうような少しの間が流れて、ようやく美野里は再び口を開いた。

「信じてもらえないかもしれないけど、絶対見間違いなんかじゃない。私、本当に見たんだよ。旧校舎が……」

「……旧校舎が？」

スゥと息を吸い込む音。

直後に、美野里はその口からとんでもない言葉を吐き出した。

「――旧校舎全体が、氷漬けになってたの……」

「……っ！」
その言葉を聞いた僕に、電流のような何かが流れた。
不安がまたしても的中してしまった。
氷というその一言が、容易く僕の連想を続けさせる。
「――ああ、ちなみにな。俺の相手は氷使いだったぜ」
あの時の真吾の言葉。
それはつまり、今に繋がっている。
「……美野里、それ、間違いない？」
「間違いないよ。本当にすごかったんだから。そのあとすぐに先生達に帰るように言われて、さっき家に戻ったばかりなの」
「……」
沈黙し、僕は考えた。
おかしい……腑に落ちない。
どうして、こんなことを……。
「もしもし？　大和、どうかした？」
「……ごめん、何でもないよ。唯に戻すね」
僕はそれだけ告げて、唯に電話を戻した。
どうやらのんびりと部屋の中で転がっていることはできないようだ。
唯がまだ美野里と電話している間に、僕は窓を閉めてカーテンを閉めた。
急いで氷室と飛鳥に連絡をしなくてはいかず、しかしその様子を結いに見られたり聞かれたりするわけにはいかないからだ。
薄暗くなった部屋の中で、僕は携帯を操作して発信する。
数回のコール音のあと、電話の向こうに氷室が出る。
僕は事のあらましを簡単に説明し、どうするべきかを訊ねた。
昨日の今日で、恐らく氷室も飛鳥もまだ傷は完全には癒えていないだろう。

しかしだからといって、この異常事態を放置しておくわけにはいかない。
そして、電話越しの氷室が出した結論は……。
「三十分後、この前の夜と同じ場所で」
こうして、僕達の一日は不穏な始まりを告げるのだった。

どうにかこうにか理由をこじつけて家を出ることに成功した僕は、約束の時間の二分ほど前に集合場所へとやってきた。
そして待つこときっかり二分後。
車でやってきた氷室と、後部座席の飛鳥と共に、僕達三人は月見沢高校へと向かった。
だが、真正面から行ったところで門前払いを食らうことは目に見えている。
そこで、僕達はうんと遠回りをし、高校の裏手にある小さな山の一角までやってきていた。
ここから先は山道を進みながら、こっそりと旧校舎の裏手に進入するしかない。
もっとも、この通路も塞がれている可能性はゼロではないのだが。
「さて。封鎖されてなければいんですけどね……」
氷室は呟き、落ち葉の絨毯の上をガサガサと掻き分けながら進んでいく。
僕と飛鳥もその背中に無言で続いた。
いくつもの枯れ木が行く手を阻むように並んでいる。
ほとんどの木々はすでに全ての葉を落とし、どこか寒そうに幹を晒していた。
「二人とも、傷の具合は大丈夫？」
僕は歩きながら聞く。
「まだ満足に回復はしていませんが、そうも言ってられないでしょ

う。もしもこれが私達の知らないだけで封印の一つだとしたら、のんびりと休んでいるわけにもいきませんしね」
「そうそう。ただでさえこっちは出遅れてるんだもの。これ以上遅れを取るわけにはいかないでしょ」
「それは、そうだけど……」
そんなことよりも、僕は二人の体の方が心配だった。
傷の治りきってない体で無理をして、万が一取り返しのつかないことにでもなったりしたら……。
「安心してください、大和」
と、そんな僕の心中を察したのか、氷室は言う。
「仮に戦闘になったとしても、今回は逃げ切ることに全力を注ぎます。さすがに今の状態では、満足な戦闘は荷が重いですからね」
「氷室……」
「それに、今回は戦闘になる可能性は極めて低いでしょう」
「……どうして、そう言い切れるの？」
「簡単です。恐らくですが、もう封印そのものはとっくに開放されているでしょうから」
「……は？」
と、そんな声を上げたのは飛鳥だった。
「ちょっと氷室、だったら私達が今更その場所に出向く意味ってあるの？」
「正確に言えば、出向かされてる……誘われているんですよ、我々は。そうでなければ、こんなに大きな手がかりを残していくわけがないでしょう」
考えてみればそれは当然だった。
僕達少なくとも、自分達が能力者であることを公にされたくない、してはいけないと考えて行動している。
しかしそれに反して、今まで出会った他の能力者達は、そんなことなどお構いなしのようだった。

むしろその途方もない常識外れの力を世間にアピールしているようにも見える。
それは一体どうしてなのだろうか？
こんなことが公になれば、世間は騒がずにはいられないだろう。
そうなれば能力者である僕達のこともいつかは存在が発覚し、ヘタをすれば僕達という存在そのものが世界から危険視されてしまうことになる。
いや、それだけならまだいい。
もしかしたら、それを機に人体実験などの恰好のサンプルとして扱われる可能性だって否定できない。
そんなリスクを負ってまで、他の能力者達は何をしようとしているのだろうか？
そこに意味はあるのか？
あるいは、そうすることによって何か得るものでもあるというのだろうか？
だとしたら、それは何だ？
歩く道の上で、僕はずっとそんなことを考えていた。
グシャグシャと木の葉を踏み砕く音だけが、いつまでの耳の奥にこだまする。
「さぁ、着きましたよ」
氷室の声に、僕は意識を戻される。
すぐ目の前にはフェンスが立ち並び、それは校舎全体を囲っているものと同じものだった。
それは壁というにはあまりにもお粗末なもので、乗り越えようと思えば容易く乗り越えられるもの。
しかしまず、それよりも何よりも……。
「何、これ……」
「これはまぁ、ずいぶんとシャレたオブジェになったものですね……」

飛鳥と氷室は口々にそう言う。
今、僕達の目の前には、文字通りに氷漬けにされた旧校舎の一部が、その姿を覗かせていた。
それは本当に、見る人が見れば芸術と呼べるような代物なのかもしれない。
だが、今の僕にそんなことを感じる余裕などはなかった。
感じるものはただ一つ。
凍てつくほどに冷え切った、極寒の空気だけだった。
白い霧が浮かんでは消える。
まるで旧校舎そのものが蜃気楼であるかのように。
薄氷でデコレーションされたそれは、もはや僕の知る旧校舎の姿ではない。
それはまるで、氷の回廊と呼ぶに相応しい姿だった。
「さて、では行きますか」
言うと、氷室はフェンスに手をかけた。
「虎穴に入らずんば虎子を得ずってやつね」
続いて飛鳥がフェンスに近寄る。
「虎の子なんて、この際欲しくもないけどね」
そして僕も、フェンスに足をかけた。
鬼が出るか、蛇が出るか。
こればっかりは、中に行かなければ分からないことだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４４：また、朝を迎えて

旧校舎全体は氷漬けなので、当然のように入り口らしきものは見えてもそこも氷で塞がれてしまっている。

「……ダメですね。思ったとおり、どの出入り口も完全に氷漬けになってます。これでは中には入りようがない」

溜め息を一つついて、氷室は言う。

「それにしたって、何だってわざわざこんなものを残していったんだろ？　まるで見せしめみたい」

「見せしめ、ですか。言いえて妙ですね、それは。ですが、少なからず理由はあるはずですよ。こうなった以上、ニュースなどで何らかの怪奇現象という形で捉えられる可能性は高い。何の理由もなくそれだけのリスクを負ったとは考えにくい」

僕達は旧校舎裏の敷地を歩きながら、各々にそんなことを考えていた。

学校側が手配し、すでに人払いが済んでいるせいだろうか、旧校舎付近には誰一人の姿も見当たらず、凍てついた冷気だけが広がっている。

吐き出す息も真っ白に濁り、それだけで気温の低さが窺えた。

実際僕も体を小刻みに震わせているし、飛鳥も寒そうに両腕を抱えている。

氷室だけが何ともなさそうな表情を見せてはいるが、実際はどうなのかはよく分からなかった。

「氷室、この後どうするの？」

僕は疑問を投げかけた。

見た感じ、もうここには僕達が求める手がかりのようなものは何一つとして残されていないように思える。

つまりこの氷漬けの旧校舎は、もはや何の意味も持たないものな

のではないだろうか？
　正真正銘の見せしめのような、ただの捨て置かれたものの一つに過ぎないのではないだろうか？
「そうですね……。仮にこれが、私達をこの場におびき寄せるための撒き餌のようなものだとすると、そうする理由は大きく考えて二つあります」
　二本の指を立て、氷室は続ける。
「一つは、この誘い出しそのものが敵方の仕掛けた罠ということ。早い話が、我々を一網打尽にするとか、そういう意味合いです。そしてもう一つは、ただ私達をこの場に居留まらせておくためだけのものです」
「だけって、どういうこと？」
「つまり、何らかの理由で私達をこの場所に拘束させているということ。言い換えれば、私達が揃ってこの場所に居るということは、同時に他の場所の封印から離しておけるということです」
「じゃあ、もしかしたら今頃、別の場所の封印が……？」
「可能性はあります。ですが、そうと分かっても私達は立場が不利です。私達が今知っている残りの封印の場所はあと二ヶ所。それに対して、敵側がいくつまで封印の場所を把握しているのか見当がつきません。闇雲に当たっても、結果として私達が遅れを取るという現状は変わらないでしょう」
「けど、だったらどうしろっていうのよ？」
「……」
　飛鳥の問いに氷室は黙り込んだ。
　やはり後手に回っている上に情報が少ないとなれば、この結果はやむをえないものなのだろうか……。
「……もう少し、辺りを調べてみましょう。とりあえず、ここにあった封印が何の封印だったのか。言わなくても見当はつきますが、念のために確認しておきたい」

そう言うと、氷室は周囲を見渡し始めた。
僕達もそれに続き、周辺を歩き回る。
探し出して数分後、校舎裏のその一角で飛鳥がそれを見つけた。
「ねぇ、これってあれじゃない？　森林公園にも似たようなのがあったやつ」
そう言って指差す飛鳥の前には、灰色の石碑がポツンと佇んでいた。
「失礼、ちょっと見せてください」
氷室はしゃがみこみ、その石碑のあちこちに目を通す。
「……間違いないようです。ここを見てください。前と同じように、何かの窪みのような記号が掘り込まれています」
指差したそこに、確かに掘り込まれた記号の羅列があった。
しかしそこに、以前と同じような強い赤色は残っていない。
「……どうやら、封印が開放されると石碑もただの石に成り下がるようですね。今のここからは、まるで力の余波を感じない」
指先で記号をなぞりながら、氷室は言う。
「……なるほど。今更ですが、やはりここの封印は氷の封印だったようですね」
言って、背後に聳え立つ氷漬けの旧校舎を見上げる。
凍結した氷はどの場所も溶ける様子を見せず、今もなお呼吸するかのように白い霧を吐き出し続けている。
「……これからどうするの？」
「……一度、ここを離れましょう。じきに警察関係者なども駆けつけるかもしれませんし、そうなれば厄介です」
仕方なく僕達は、乗り越えたフェンスをもう一度よじ登り、枯れ葉の道を歩いて車へと戻った。
車に乗り込み、僕達が一般の車道を走り出した頃、どこからかサイレンのような音が聞こえてきた。
その音を耳の端で捉えながら、僕達を乗せた車は氷室の事務所へと向かっていく。

目覚めが悪いのはいつものことだ。
が、今日に限ってそれは例外の悪さだった。
普段なら誰よりも寝坊し、優希の怒鳴り声にも屈さず、しかし暴れ馬のようにまたがる大樹に鬱陶しさを覚えながらしぶしぶと起き上がり、腹いせに大樹の頭を引っぱたく代わりに優希から後頭部を殴られる。
こうして真吾の朝はいつも始まりを迎えるはずだった。
だが、今日は違う。
「……」
ムクリと上体だけを起こす。
辺りはまだ薄暗く、早朝であることが窺えた。
同じ部屋で眠っている大樹を始めとした男子諸君も、今はまだ覚めかけの夢の世界に浸ったまま。
真吾だけがどういうわけか、自分でもおかしいと思うくらいに目を覚ましていた。
しかし目を覚ました時間帯そのものは、決して早すぎるものではない。
すでに新聞配達などとっくに終わっているし、近所の元気なお年寄りの方々ははりきってジョギングに精を出している。
こうしている今だって、少し耳を澄ませば台所から鍋の揺れるコトコトという音と、まな板の上で包丁を叩く音が聞こえてくる。
恐らくは園長が朝食の準備をしているのだろう。
「……何だってんだ、一体」
開口一番、真吾はぼやいた。
頭が重く、疲れがまるで抜けきっていない感じだった。
確かに昨夜は遅くまで子供達の相手をしていて、相当疲れ切っていたのを覚えている。

何しろ相手にする人数が二人や三人ではなく、十人以上なのだから無理もない。

途中何度もとび蹴りをかましてきた者に関しては、まだ整備が終わってない庭の穴の中に投げ捨ててやろうかとも思ったが、実行すればそれはある意味で大事件なのでやめておいた。

とまぁ、そんな昨日までの経緯は正直どうでもいい。

問題は、どうして今日に限ってこうムダに目覚めが早いのかということだ。

疲れは眠気がすっかり消し飛んでいるのならまだいい。

しかし、体のあちこちにくすぶるように残った疲労は隠し切れない。

もう一度眠ってしまおうかとも思ったが、それはそれで面倒くさい気もした。

仕方なく真吾は立ち上がり、とりあえず冷たい水で顔でも洗ってくることにする。

秋と冬のちょうど真ん中に当たる今の時期、早朝の空気は日に日に冷え込みを増していた。

裸足で歩く廊下からは氷のような冷たさがひしひしと伝わってきて、真吾もその冷たさには思わず浮き足になりそうになる。

洗面所で顔を洗い、タオルで顔を拭きながら廊下に顔を出すと、そこでばったり優希とでくわした。

「うわぁっ！」

と、優希はまるでバケモノでも見たかのような顔で数歩ほど飛び退いた。

朝っぱらからこの態度は失礼極まりないものである。

「……おい、何だその反応は。人をバケモノ扱いすんじゃねー」

「だ、だってさ。あー、ビックリした。まさか真吾がこんな早くに起き出してるなんて、夢かと思った」

「勝手に人の夢を見んな。ったく……」

「それで？　どういう風の吹き回しよ。ひょっとして、具合でも悪いの？」
やや顔を覗きこむように、優希は真吾に近づく。
「そんなんじゃねーよ。たまたまだ、たまたま」
と、一応口ではそう返しておく。
だが実際は、当たらずとも遠からずと言ったところだろうか。
先日の氷使いの襲撃以来、今のところは真吾の周囲に異変は見当たらない。
そう、あくまでも、周囲には。
つまり異変は、真吾の内側の部分からは徐々に滲み出しているということだ。
それは絶対に、体調の変化などと違って他人の目で見極められたりするような代物ではない。
ないのだが、どうしてだろうか……。

「……真吾？」
「何だよ、うっせーな……」
そう言いかけて、真吾は押し黙る。
目の前の優希の視線が、なぜだか自分の全てを見透かしているかのような、そんな風に思えて……。
「……ううん、何でもない。気のせいだった」
「……」
アハハと、そう言って小さく笑う優希の姿はいつもと同じものだ。
かれこれ十年以上も同じ場所で育ってきた、言わば兄妹のような関係の人物。
だから、なのだろうか。
時々、何もかもを見透かされているんじゃないだろうかという、そんな視線を感じてしまうのは。
「……チッ、アホクセー」
それは、誰に対して呟いたセリフだったのだろうか。

聞こえるか聞こえないかの小声で呟いたそれは、朝の空気に静かに溶けて消えた。

そして真吾は洗面所をあとにする。

疲れは残ったままだが、眠気はすっかり消えていた。

朝食の準備でも手伝ってやろうかと、真吾は真っ直ぐに食堂へと歩き出す。

その背中を、優希の一言が引きとめた。

「真吾」

「あん？」

「寝癖。カッコ悪いぞ」

そう言って、髪の毛を指差す優希。

触れてみると、頭のてっぺんに一本だけアンテナが立っていた。

真吾はそれをグシグシとてのひらで押し潰して、そのまま無言で廊下を歩き出した。

背中から、微かに優希の笑い声が聞こえた。

その優しい声が、どうしてか……。

少しだけ、痛かった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４５：灰色のセカイ

「で、どうしてこういう展開になるわけよ！」
走りながら飛鳥はグチをこぼしていた。
「どうもこうもないでしょう。喋る暇があったら足を動かしてください」
一足早く先頭を走る氷室が、振り返らずにそう告げた。
「ねぇ、これってやっぱり……」
僕がそう言いかけて、そのあとに続く言葉を氷室が代弁する。
「ええ、恐らくはそうでしょう。月見沢高校に周辺の目を向かせて、その間に他の場所の封印を開放するつもりです。あれだけ目立つ氷のオブジェを野放しにしておけば、嫌でも世間の目はそっちに集中する。そうなれば、他の場所で多少の変化が起きたとしてもまず気付かれる可能性はないですからね」
言いながらも、氷室の走る速度は変わらない。
舌を噛まないでいることに、正直驚いた。

事の発端は、車での移動中に起きた。
氷室の事務所へと向かう途中、車は大通りの交差点で信号に引っかかった。
その信号が垢から青に変わるのを待つ、ほんの数分の間のことだ。
僕達三人はほぼ同時に、その違和感を感じ取った。
それは流出する力の余波で、それはつまりどこかしらで『Ｒｉｎｇ』の力の一部が漏れ出しているということに他ならなかった。
しかもその力の余波は、僕達が向かう事務所とはちょうど真逆の方向から流れ出していた。
すぐさま氷室は大通りを迂回し、進行方向を急遽変更することになった。

向かう先は、僕の住む住宅街の地区よりさらに先。
都市開発計画が途中で中断されたまま、今は広い空き地になってしまった場所。
その場所は僕達にも知ることのできた、三ヶ所の封印のうちの一ヶ所だ。
「私は少し、事態を緩く考えていたのかもしれません」
走る速度をそのままに、氷室は呟く。
「封印という言葉の持つ意味から、無意識のうちに容易く解けるものではないものだと、そう思い込んでいたのかもしれません。しかし、それは大きな間違いでした。これらの封印はあっけなく開放される。言うなれば、ただ紙袋の封を破くくらいに簡単に。そしてそれができるのが、私達のような一部の能力者という存在なのでしょう」
気のせいか、氷室の言葉にはどこか焦りが感じられた。
しかしそれは、まんざら気のせいばかりというわけでもなかった。
落ち着いて考えてみれば分かる。
すでに二つ、封印は開放されている。
そしてそのどちらもが、僕達から見た敵側の戦力を増大させる封印の開放になっているからだ。
最初は炎、次は氷。
どちらも僕達が持つ、風、雷、水とは違うものだ。
だからもしも、今僕達が向かう先の封印が、またしても敵側の戦力を増加させる封印であるとしたら……。
「……」
僕は押し黙る。
同時に思い返す。
あのとき、炎使いの力が格段に上昇していたことを。
その溢れる力の一端は、いともたやすく氷室と飛鳥に大きな傷を負わせていることを。
もう、目の前であんな風に誰かが傷付いていく様を見るのはまっ

ぴらだ。
もしもそうならざるを得ない状況に立ち会ったのなら、僕は……。
――何を犠牲にしても、二人を守ってみせる。

「あー、もう！　いちいちネガティブ思考に走るんじゃないわよ！」
と、ふいに飛鳥が怒鳴る。
僕と氷室は揃ってその方向を振り返り、続く言葉に耳を傾けた。
「黙って聞いてれば悪い方向にばっかり物事を考えて、少しは前向きになりなさいよ氷室。アンタらしくもない」
「飛鳥……」
「……」
その言葉に、氷室は走る速度を落とさずに、そしてどうしてかわずかに微笑んだ。
「……何よ、何がおかしいの？」
「……いえ、おかしくはありません。ただ……いえ、やはりやめておきましょう」
「うー、何よそれ！　何かすっごい気になるんですけど！」
にわかに騒ぎ出す飛鳥。
しかしこんな光景こそが、いつもの僕達を取り巻くものだったような気がしてならなかった。
「……二人とも、お喋りはいいけど、今は急がないと。そうでしょ？」
と、僕は合間を縫ってそう告げる。
「ええ、そうですね。急ぎましょう」
「あ、こら！　話を逸らすな！　氷室！　大和！」
そうして僕達三人は走り抜けていく。
やたら広大な空き地に人気はなく、代わりに乱気流のように乱れた力の余波だけが、僕達を静かに待ち受けていた。

今まさに朝食を胃の中に詰め込んでやろうという、そのときのことだ。

「……あ？」

真吾はその例えようのない違和感を、針で刺された程度の小さな刺激で感じ取った。

「……」

そして訝しげな表情のままで、窓の外の空を見上げる。

天気は曇りで、しかしその他にこれといって目立つ空模様ではない。

遠くに雨雲のような塊は見えるが、真上にやってくるのは恐らく夕方か夜以降のことだろう。

だが、感じ取った違和感はそんなことではなく……。

「……またこの感じか？　最近になってから、これでもう三度目だぞ？」

「シンゴー、どうしたんだー？」

と、隣に座る大樹が真吾の様子に気付いて二の腕を突っついてくる。

「ん？　ああ、何でもねーよ」

一度視線を食卓に戻し、再び箸を持ち茶碗を持つが、どうしてか食べる気が起きない。

後ろ髪引かれるようなそんな思いで、真吾はもう一度背後の空を振り返った。

瞬間、空がグニャリと歪んで見えた。

それと同時に、とんでもない量の力の余波がある一点に集中していることが分かる。

「……おい、まさかこれは、封印が開放されてるんじゃ……」

そう呟きかけたところで、真吾の額にベシリと何かが直撃した。

直撃したそれは、間もなくして顔から剥がれ落ちて膝の上にボトリと落下する。
見ると、それは台布巾だった。
「食事中に余所見するな。それと、ブツブツワケの分からない独り言もしないの」
投げつけたのは対面に座る優希だった。
「テメ……布巾を投げつけるな、布巾を」
「お皿投げられるよりマシでしょ。ほら、黙って食べる」
「……コノヤロ」
しぶしぶ前を向き直る真吾だったが、やはり胸の内では迷いが生じたままだ。
かれこれ、これと同じような力の余波を感じ取ったのはこれで三度目。
過去の二度は、それこそごく最近のことだ。
こう立て続けに同じようなことが連続して起こるということは、やはりそれは単なる偶然の重なりとして処理するわけにもいかない。
一度目は偶然で通じるが、二度三度続けばそれはもはや必然でしかない。
そうである以上、やはり放っておくわけにはいかないだろう。
チラと、真吾は食卓に座る全員の顔を眺めた。
数日前、間接的とはいえ真吾はここにいる全員の命を巻き込みかねない戦いに遭遇している。
そのときは幸い、大事には至らずにはすんだものの、一歩間違えれば大惨事になっていたことは明白だ。
そうなった原因はやはり、真吾の身に宿っているその『Ｒｉｎｇ』の力のせいなのだろう。
変わり者は変わり者を呼び寄せ、力は力を呼び寄せるものだ。
この世界は面白くできていて、珍しいものほど一点に集中していく傾向にある。
もはやそれは説明の領域を超えた一種の摂理であり、誰の手にも

妨害できるようなものではないのだと、真吾はすでに知っている。
だから今、真吾が置かれているこの現状さえも、くだらない運命とやらの暇潰しの一つにしか過ぎないのだ。
それはそれで腹立たしいことこの上ないが、逆らう相手が運命では勝ち目はないと見ていいだろう。
ところが、だ。
勝ち目がないからといって、素直に諦めがつくほど、この男は……。

――緋乃宮真吾という男は、物分りのいい人間ではない。

カチャリと、食卓の上に手付かずのままの茶碗と箸を置く。
その音に気付いて、対面に座る優希がどこか不思議そうに真吾を見ていた。
「……真吾、食べないの？　やっぱりアンタ、どっか具合でも悪いんじゃないの？」
優希のその言葉に、園長の斎も真吾の方を見る。
「どうしたの、真吾君？　食事、全然手付かずのままじゃないの」
口に合わなかったのかしらと、斎はどこか残念そうな表情で呟いた。
「いや、そーゆーんじゃねーけどさ、ちょっと……」
そしてもう一度だけ、真吾は背後の空を振り返る。
歪んだ空は変わらずに、乱れたままでそこに浮いていた。
「……百聞より一見か。都合のいい言葉だが、この場合では真実だな」
「ちょっと、何ブツブツ言って……」
優希の言葉を最後まで聞くよりも早く、真吾は立ち上がる。
「……真吾？」
「悪い。ちょっと急用。出かけてくるわ」
たった一言、簡潔すぎる言葉を残して真吾はその場をあとにする。

「ちょ、ちょっと真吾！」
呼び止める優希の言葉も無視して、廊下を走り抜けて玄関へと向かった。
引き戸を開け放ち、まだ朝の早い空の下に出る。
一見、普段と何も変わらない、ただ曇っただけの空。
しかしそれは、真吾から見れば十分異質なものだった。
「……向こうか。ここからじゃちっと遠いな……間に合うか？」
しかし考える猶予などは最初から用意されていない。
それに、確かめなくてはいけないこともある。
真実を得るためなら、それに見合った労力は当然というものだ。
「……ったく、ホントに面倒くせーことになってやがるな……」
グチをこぼし、走り出す。
「これなら、あのメガネ兄さんがやれやれって繰り返すのも頷けるぜ……ホント、やれやれだな」
靴音がアスファルトの地面を叩く。
曇天によく似た灰色は、どこまでも真っ直ぐに続いていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４６：その背中が近く遠く

だだっ広いだけの空き地の中、ポツンと一つの岩だけが佇んでいる。
それが封印の石碑であることは、僕の目にも明らかだった。
しかし今、僕達はその石碑を目の前にしてまだ触れることにさえ至っていない。
なぜなら……。
「ようやく来たか。待ちくたびれたぞ」
その間に立ちはだかるように、蓮華とかりんの二人が立ち塞がっていたからだ。
「……かりん」
「……」
ふいに呼んだその名前に、しかしかりんは答えなかった。
初めて会ったときと同じ、黒いゴスロリの衣装に実を包み、やはりその腕の中には抱きかかえられたクロウサの姿があった。
しかしそのクロウサも、あの軽快な声を弾ませることはない。
僕達と蓮華たちとの間には、ただ静寂だけが広がっていた。
「……待ちくたびれた、とは？」
その静寂を破ったのは、氷室の一言だった。
「どういう意味ですか？　あなた達は、我々を迎え撃つためにそこに立っているのではないのですか？」
「どうもこうもない。そのままの意味だ。私達の役目は、お前達が無事に封印を開放するその様子を見届けること。妨害することではない」
「開放させる……？」
訝しげに氷室は繰り返す。
それはつまり、僕達に封印を開放させる必要があるということだ

ろうか？
「詮索している余裕があるのか？　それとも、どうしても妨害してほしいのか？　ならばこちらもそれなりの対応を取るまでだが……」
言って、蓮華はその手に握る白い布に包まれた長刀を構える。
場の空気がわずかに重苦しくなり、一触即発にも思える緊迫感が張り詰めた。
「……いくつか聞きたいことがあります」
「……何だ？」
「これはあなた自身の意思ですか？　それとも、あなた達全員の意思の統合ですか？」
「……それを知ってどうする？」
「質問しているのはこちらです。どうなんですか？」
「答える義理はない」
淡々と飛び交う言葉は、目には見えない火花を散らしているようだった。
もしもここで戦いになれば、僕達はずいぶんと不利な状況になってしまう。
人数では勝っていても、氷室も飛鳥もまだ病み上がりの病人のようなものだ。
恐らく、平常時の五割の力も発揮することはできないだろう。
それに加えて、僕にもできることなら戦いたくない気持ちがある。
その原因は……。
僕は視線を移す。
目が合うと、かりんは逸らさずに真っ直ぐに僕のことを見返してきた。
「――……私も。ヤマトとは。戦いたく。なくなった。不思議。こんなことは。今までには。思わなかったこと」
そう言ってくれたかりんの言葉が甦る。

僕だってその気持ちは同じだ。
だけど、それでも……やはり僕達は、相容れることなどできないのだろうか？
敵同士として対立することしか、僕達に道はないのだろうか？
……分かっている。
戦わずに終わらせる戦争など存在しないことは、もう痛いくらいに理解している。
だけど、それでも……。
本当はかりんだって、こんな戦いは望んでいないはずだ。
なぁ、そうだろう？
声には出さず、視線だけで語りかける。
しかし、かりんの色のない瞳はそれを容易く受け流していた。

「……蓮華。やめて」
ポツリと囁くように、かりんは言った。
「……」
その言葉に、蓮華は無言で構えた剣を元に戻す。
それを見届けて、かりんが数歩ほど前に歩み出る。
「……大和。できるなら。あなたとは。こんな形で。会いたくはなかった」
「かりん……」
「……けれど。安心して。今の私達に。あなた達に対して。危害を加える。つもりはない」
そしてかりんは一度だけ短く目を閉じ、そして開いて言葉を続けた。
「……ここは。風の封印。大和。あなたの力。さぁ。開放を」
言うと、かりんはその体を脇にどけて正面の道を開けた。
それに倣って、蓮華もその体を半歩ほど引く。
「……」
正直、僕は状況がまるで飲み込めていなかった。

確かに僕は封印を解放しなくてはならない。
それは僕自身のためでもあり、シルフィアのためでもあり、この戦争を終わらせるためでもある。
だから今の僕に、迷う余裕なんてそれこそあるはずがないのに……。
どうしてか、僕の足は前の進むことを恐れていた。

「……行きましょう、大和」
それを後押ししたのは、氷室の言葉だった。
「……氷室？」
「どの道、私達は封印を解放することでしか先に進めないんです。どういう風の吹き回しか知りませんが、妨害がないのならばそれに越したことはない。少なくとも、封印の開放は全てにおいての通過儀礼に過ぎません」
「それは……そうだけど」
氷室の言っていることは正しい。
疑う余地なんて、それこそこれっぽっちもありはしないはずだ。
……なのに、どうしてだろうか。
この胸の内の妙な引っかかりは、収まることを知らない。
何か……何か見落としているような気が……。
「……行こう、大和」
と、隣にいる飛鳥が呟いた。
「考えるだけ今はムダだよ。それよりも、今できることをやろう。違う？」
「……飛鳥」
……そうだ。
二人の言うとおりじゃないか。
何もしないでいるよりは、できることから始めなくちゃ、終わらせられるものも終わりっこないんだ。
「……分かった。やるよ」

意を決し、僕は進む。
そして岩の形をしたその石碑に触れ、表面に刻まれた記号の羅列を覗き込む。

「――我、大気を舞う風の力を纏いし者なり。時に癒し包み、時に吹き荒ぶその力を求めし者よ。我が前にて力を示せ。流れるまま自由に舞う風を、其の手で掴んで見せよ。さすれば我は目覚め、汝が力となろう……」

石碑に刻まれた一文を読み上げ、僕は一度深呼吸する。
ゆっくりと目を閉じ、そして開く。
全身で微かに流れる風を感じ、それらがしだいに小さな渦を巻いていく様子をイメージする。
最初はゆっくり、徐々に勢いを増し激しくなっていく。
その流れる風の渦を、自分の両手の中に押さえ込むように……。
やがて風は生まれ、僕の体がわずかに宙に浮いた。
地面から爪先を浮き上がらせる程度の、微々たるものだ。
しかし、生まれた風はじゃじゃ馬のように動き回っている。
まるではしゃいでいる子供のようだ。
そして次の瞬間、僕の指の中の『Ｒｉｎｇ』が淡い緑色の光を放ち始めた。
同時に、僕の頭の中にあの赤い記号の羅列が走り書きのように広がった。
何の規則性もないそれを、しかし僕は一瞬の内で理解することができて……。

「――ようやく、全ての力がここに集いました」

そう呟く、シルフィアの声が僕の頭の中に響いた気がした。
「……っ」

ストンと、僕の足は再び地面を踏みしめた。
今までの出来事が幻であったのではないかと疑いたくなるほどに、僕の中の時間の流れは緩やかだった。
「……終わったようだな」
そう呟く蓮華の声に、僕は意識を呼び戻される。
改めて目の前の石碑を見てみると、それはすでにただの灰色の石の塊に成り下がっていた。
表面に刻まれたその一文も、今はただの傷痕にしか見えない。
「風の開放、確かに見届けた。用はもう済んだのだろう。ならば、早々に立ち去るがいい」
言われるがままに、僕は歩いた道を戻って氷室と飛鳥の元へ戻る。
「……あなた達は、まだこの場所に用がおありで？」
氷室が問う。
「お前達が去るのを見届けしだい、我々も立ち去る。何だ？　この期に及んで疑問を捨てきれないか？」
「……」
「疑り深い男だな。冷静といえば聞こえはいいだろうが、時には妥協するのも必要なのではないか？」
「……いいでしょう。今はその言葉、信用に足るということにしておきましょう」
「……フン」
「戻りましょう、二人とも」
僕と飛鳥は無言で頷いた。

ちょっとしたいざこざこそあったものの、とりあえず僕達は全員無事でこの場を離れることができそうだ。
と、その去り行く僕達の背中をかりんの言葉が引き止めた。
「……大和」
僕は振り返り、かりんを見る。
「何？　かりん」

「……」
かりんはすぐには答えなかった。
わずかに間を置いて、その言葉を口にする。
「……封印開放の後には。その力を宿した体に。苦痛が伴う。けれど。それは一時のもの。それを乗り越えて初めて。真なる力はその者のものとなる」
「……苦痛？」
コクンと、かりんは頷いた。
「……あなたが。死なないことを。祈っている。そして。できるなら。次に会うときは……」
そのあとに続く言葉は、なかなか出てこなかった。
「……さぁ、さっさと行け」
結局僕達は蓮華の言葉に追いやられるように、背を向けてその場をあとにした。
そんな僕達……いや、僕の背中をかりんがずっと見つめていたことを、僕は知らなかった。
「……」
「……どうした？　かりん」
蓮華が聞く。
しかしかりんは俯くだけで、答える言葉を持ち合わせていなかった。
「……かりん」
腕の中で、クロウサがポツリと呟いた。
「……大丈夫。何でもない」
「……そうか。ならいいのだが……」
「……」
クロウサは言いかけた言葉を何とか飲み込んだ。
そしてその真っ赤な目で、去り行く背中をぼんやりと眺めていた。
「……やっぱり、重ねて見ているんだね、かりん……」
それはクロウサの独り言。

ウサギの鳴き声は、誰の耳にも届かずに静かに消えていく。

「――ヤマト、君はそっくりだ。何から何まで……ハルヒコそっくりなんだよ……」

その独り言を聞いたのは、誰もいない。

風さえも、聞いてはいなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４７：痛みの中で

「……おいおい、こりゃ一体どーなってやがるんだ？」
路上の上、僕達と向かい合って立つ真吾は開口一番にまずそう口にした。
「急に力の余波を感じなくなったと思ったら、その先からお前達が出てきやがる。ったく、朝っぱらからホントにワケがわかんねー……」
言いながら、真吾は無造作に髪の毛を掻き毟っていた。
やがて大きな溜め息を一つ吐き出すと、真吾は無言の僕達をよそに言葉を続けた。
「……説明しろ。どういうことだ、これは？　何が起きてやがる？」
わずかに苛立ちを募らせ、そう言った。

その後僕達は場所を移し、今はこうして住宅街の片隅にある小さな公園へとやってきていた。
さすがに平日の朝方ともなると人の姿もなく、夕方の子供達の喧騒がまるで嘘のような静けさが広がっている。
さして広くもない公園の、そのさらに片隅の場所で、僕達は人気もないのに声を潜めていた。
「……ようするに、その封印とやらを全部で八つ、開放する必要があるってことか？」
僕達から事のあらましを簡潔に聞かされた真吾はそう聞き返す。
「よくは分からないけど、現状ではそれが僕達にできる唯一のことなのは間違いないよ」
「……」
僕の答えに、真吾は押し黙った。
気のせいだろうか、その表情がどこか疑いを晴らせずにいるよう

な、そんな感じに見えた。
「どうかしましたか？　何か腑に落ちない点でも？」
「……いや、そういうわけじゃ……」
そこまで言いかけて、真吾はふいに顔色を変えた。
「待てよ……封印だと？　だが、そんなことはまずあり得ないはずだ……」
ブツブツと真吾は独り言を繰り返す。
自問自答をいくつも繰り返し、最終的には変わらぬ半信半疑の表情を浮かべていた。
「何よ。急に黙っちゃって……」
その態度が逆に不気味だったのか、口にした飛鳥はわずかに後ずさった。
「……その封印とやらは、全部でいくつだと言った？」
「え？　ああ、全部で八つだと思うけど……それがどうかしたの？」
「本当に八つか？　絶対に間違いはないんだな？」
詰め寄るように真吾は言う。
そこまで強く出られてしまうと、僕も自信を持って言い切ることは少しためらわれた。

「まず間違いないと思いますよ」
しかしそれをものともせずに、氷室はあっさりと言い切った。
「……なぜそう言い切れる？」
「簡単ですよ。今現在の時点で発覚しているだけでも、同じ数の能力者が存在しているからです。私達でまず四人。他に、私達それぞれを個々に襲撃した四人で合計八人。能力者の数だけ属性が存在するのなら、その数だけ封印もあると考えるのが妥当でしょう」
「……なるほどな。確かにそうだ。だが、そうなるとますます……」
納得したのにまだ疑問を打ち消せないようで、真吾は何かを考えていた。
その表情がどこか真剣なのに、その反面ひどく焦っているように

も見える。
「……事情は分かった。で、これで残りの封印とやらはあといくつになったんだ？」
「敵側が二ヶ所、今さっき大和が封印を開放してこれで三ヶ所の開放が終わっています。ですから、残りの封印の場所はあと五ヶ所になりますね」
「……封印の場所は分かっているのか？」
「大方ですが、見当はついています。確証が持てるのはあと一ヶ所ですが、残りの四ヶ所も大体の目星はつけられそうですね」
「……そうか」
それだけ答えると、真吾は無言のままベンチに腰掛けた。
いつもと違いすぎるその態度に、僕は妙な違和感を覚えてしまう。
それは氷室と飛鳥も同じようで、気が付けば僕達は互いに顔を見合わせていた。

「……まぁ、それはさておきとして、どうしたものでしょうかね」
話を切り替え、氷室が言う。
「とにもかくにも、これで残りの封印は残すところ五ヶ所。何だか急に慌しくなったようにも感じますが、そのことをボヤいている暇もあまりないでしょう」
「そりゃそうだけど、だったらどうするってのよ？」
「考えようによっては、これはチャンスです。今まで出遅れていた我々と、敵側が同じラインに立っている。しかも、どうやら封印の開放に限っては、向こうも無闇やたらに手を出せないと見えます。それがどんな理由からなのかは知りませんが、向こうに不利でもこちらに不利ではない限り、こちらの有利ということになります」
「つまり……どういうこと？」
「先手を打ちます。見たところ、敵側もある程度組織だった行動をしているようですが、封印開放に関しては我々と大差がありません。恐らくは我々同様、封印のある場所の見当はついているが、そこが

何の封印であるかまでは分からない、といった状況でしょう。だとすれば、こちらから先に仕掛けて待ち受けることも可能なはずです」
「待ち受けるって……まさか、力ずくで止めるつもり？」
「場合によってはそれが最善になる場合もあるでしょう。覚えてますか？　あの炎使いの力の変化を。封印開放とは名ばかりではなく、本当にすさまじいものです。あのときは正直、脅威でしたよ。殺されることに何の疑いもありませんでした。ま、結果としてこうして生き伸びているから問題はないのですけど」
「そりゃそうだけど……あのときは運がよかったとしか」
「そう。少なくとも、あのときはそうでした。ですが、今はこちらにも同じ条件が揃っている。現に大和はすでに封印を開放したことにより、内在する潜在能力を引き出せる状態にあるはずです。そしてそれは、私にも飛鳥にも同じ可能性が提示されているということですよ」
と、そこまで言いかけて氷室は何かを思い出したように言葉を区切る。
「そういえば大和。体の方に何か変化は？」
「え？　体？」
言われて、僕は体のあちこちを手探りで触れてみる。
しかし、特に変化は見られない。
外見に限らず、気分も何も悪いところは見当たらなかった。
「……別に、何ともないみたいだけど……」
「……妙ですね。あの子は確かに、苦痛がどうとか言っていましたが……」
あの子というのは恐らく、かりんのことだろう。
言われて僕もその言葉を思い返していた。
そう、確かにかりんは言っていた。
封印開放後の体には、苦痛が伴うのだと。
しかし当の僕の体は、どこを見回したところで何の変化も……。

「……あ、れ……？」

ドクンと、急に心臓が跳ね上がるような鼓動が聞こえた気がした。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン。

鼓動は徐々に高くなり、僕だけが地震を体全体で感じ取っているかのようだった。

鼓動が早まり、音がうるさいくらいに高鳴る。

今にも弾けてしまいそうなその鼓動が、しだいに熱を持ち、痛みを覚えて僕の全身を駆け巡り始めた。

「っ、う、あああああっ……！」

たまらずに僕は叫んだ。

悲鳴というよりもそれは絶叫に近いもので、叫んでる僕自身が何を口にしているのか分からなくなるほどだった。

「大和、どうしました？」

「ちょ、ちょっと大和！　しっかり！」

氷室と飛鳥の声が遠くに聞こえる。

僕の肩に触れる指先の感覚さえも、今では不快感にしか感じられない。

「う……っ、ああ、うあああああっ……！」

血液が沸騰し、蒸発してしまいそうなほどの熱を覚える。

体中を巡る全神経が研ぎ澄まされているようで、体内の組織を瞬時に理解してしまったようだ。

血がたぎる。

肉が踊る。

感情が壊れる。

痛覚はすでに遮断され、痛みではない熱さが感覚の全てを支配していた。

その熱に耐え切れず、僕は自分の体を自分で圧迫していってしまう。

ギシギシと骨が鳴り、このまま力を込めれば容易くこの体は折れ

てしまうだろう。
なのに、力は止まらない。
まるで暴走したエンジンのように、血液というガソリンを燃焼させて熱は走り続ける。
ブレーキなんてどこにもなかった。
止まるとすれば、自ら壁に突っ込んで大破するくらいしか手段は思い浮かばない。
「氷室、このままじゃ大和がっ！」
「分かっています！　ですが、このままではどうしようも……！」
焦りを隠せない二人の声をよそに、しかしその声は極めて冷静に言った。

「……雷撃を叩き込め」
ポツリと囁くように、真吾は言った。
「……え？」
しかし慌てている飛鳥には、その声がまるで通じていなかった。
もう一度真吾は言う。
「大和にお前の雷撃を打ち込んで、気絶させろ。そうでもしないと、コイツは自分で自分をバラバラにするぞ」
「わ、分かった！」
スゥと息を吸い込んで、飛鳥はそのてのひらから青白い雷を放ち、それを僕の首筋へとあてがった。
バチンと火花が弾ける音がして、その音を境に僕の意識はプツリと途切れた。
だんだんと意識が遠のいていくのが分かる。
わずかに開いた視界の先に、氷室と飛鳥の顔が見えた気がした。
そして、少し離れたところにある真吾の顔。
その唇が、わずかに揺れて何かを呟いているようだった。
「……やはり、八つの封印はあの封印のことなのか？　だとしたら、完全な予定外だ。こんなにも早く……」

何を言っているのかは聞き取れない。
それでも僕は、その言葉に耳を傾けた。
やがて意識がなくなる寸前に、僕の耳に届いたその言葉は……。

「――エデンズ・ゲートが開くってのか？」

そんな、意味も分からないものだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４８：楽園への迷走

夢を見ていた。
果てしなく広がる、しかし無色な草原の中に、僕は立ち尽くしていた。
草も大地も空もある。
太陽の暖かさを肌で感じもするし、吹く風の涼しさも心地がいいくらいだ。
ただ、そのどれもが色を失っている。
空は青くない。
草は緑ではない。
太陽は輝いていない。
大地は焦がれていない。
全てが無色。
まるで絵画の下書きのような場所。
真っ白な紙の上、線画だけで彩られた世界のような……。

「……ここは？」
ふいに僕は呟いた。
独り言がやけに響いて、耳の奥まで透き通るように抜けていった。
辺りを見回す。
だが、どこもかしこも色のない世界が広がっているだけだ。
本当なら僕が立つこの場所は、果てしなく広がる大草原の真っ只中だというのに。
「僕は、どうして……」
記憶の糸を手繰り寄せる。
どうして僕は、こんな場所にいるのだろう。
思い返す最後の記憶は、得体の知れない激しい痛みが覚えていた。

「そうだ、確かあの後僕は、気を失って……」
倒れこんで意識を失ってしまったんだ。
そこまで思い返したところで、僕はもう一度自分とその周囲を見回してみた。
だが、そこには何もない。
いや、何もないというのは表現がおかしいだろうか。
確かにここは草原のど真ん中なのに、色の無い世界を見ているせいで何もないように感じてしまうのだ。
風は吹き、日差しも確かに降り注いでいるというのに、この場所は無色そのものだった。
色の無い世界……もしかしたら、目の見えない人が見る世界というのは真っ暗な暗闇ではなく、こんな世界なのかもしれないと、僕はなぜかそう思ってしまった。
「ここは一体、どこなんだ？　それに、氷室や飛鳥、それに真吾はどこに……」
もちろん、僕の周囲に人影など一つもない。
それどころか、空を飛ぶ鳥の姿も、大地を駆ける獣の姿も、草木に留まる虫の姿さえもない。
本当に、一体この場所は何なのだろうか？
僕は一体、どんなところに迷い込んでしまったというのだろう？

そのとき、ふいに温かい風が吹いた。
僕の体に触れるように優しく、スゥと溶けるような心地よい風。
そしてその風に呼応するかのように、指の中の『Ｒｉｎｇ』が淡い光を放ち始めた。
やがてその光の中から、唯一色を持ったシルフィアの姿が浮かび上がり、僕の目の前に現れた。
「御前を失礼します、我が主よ」
と、シルフィアは丁寧に呟き、小さく頭を下げた。
「シルフィア？　どうして君がここに……いや、それよりも、一体

ここはどこなんだ？　君はここがどこだか知ってるのか？」
「はい、存じています。そして、主がここにいる理由は、私が主をこの場所に呼んだからです」
「……呼んだ？　シルフィアが、僕を？」
「はい」
澄んだ瞳と流れる髪で、シルフィアはそう答えた。
風になびくその長い緑の髪は、さながらに風そのものをイメージさせるほど美しかった。
「……シルフィア、答えて。ここは……どこなんだ？」
一拍の間が流れる。
また、優しい風が一つ、僕とシルフィアの間を音もなくそっとすり抜けた。

「――ここはかつて、楽園と呼ばれていた場所の記憶。ロストカラーガーデンと呼ばれていた、世界にあってなかった場所」

詠うように、それでいてどこか懐かしむようにシルフィアは言った。
「主よ」
その言葉に、僕は顔を上げる。
「私が貴方をこの場所へと導いたのは、貴方に語るべきことがあるからなのです」
「僕に……語るべきこと？」
「はい」
答えて、シルフィアは頷いた。
「主は見事、私の封印を解放してくださった。これで我が風の『Ｒｉｎｇ』は、本来の力を取り戻すことができました。ですが……」
一度目を閉じ、静かに開く。
「それだけでは、全てが終わったわけではないのです。封印の開放には、まだ最後にやらねばいけないことが残っている」

「やらなければ、いけないこと？」
シルフィアは首を縦に振る。
そしてまた一拍の間を置いて、言葉を続けた。

「――主よ。今から貴方に、私の記憶に触れてもらいます。そして、私と私が生きていた世界を知ってください。そうすることによって初めて、『Ｒｉｎｇ』は精霊と契約者を一つに繋げるのです」

「記憶に……触れる？　ちょっと待って、それってどういう……」
「……真実は、貴方の手と、そしてその目で見極めてください。これは契約に基づいた、最後の通過儀礼なのです」
そう呟いたシルフィアの目は、どこか悲しそうな色をしていた。
「無事を祈ります。貴方ならきっと、全てを知ってなお立ち向かう強さを持っているはず……」
「……シルフィ……」
僕の声はそこで途切れた。
代わりに僕の目の前に、いつのまにか大きな扉が一つ、立ちはだかっていた。
「さぁ、扉の向こうへ。そこに、全ての答えがあります」
そう言うシルフィアの声は聞こえても、姿はすでにどこにもなくなっていた。
「試練の扉よ。我が主を、楽園の記憶の果てへと誘いたまえ……」
そんなシルフィアの声が聞こえて、僕の目の前の扉はゴトンと音を立てた。
ギィと軋んだ音を立て、錆付いた扉が静かに開く。
扉の中は黒い闇。
無色の世界に不釣合いなほどの、常闇を思わせるほどの漆黒。
思わず後ずさりさえしたくなるその光景を目にしてなお、どうしてか僕の体は自然とその中へと引き込まれていった。
闇に溶ける体。

キィンという耳鳴りが一瞬したと思うと、ふいに体が軽くなる。
そして僕は、五感を失った。
闇が僕を包む。
そのまま、奈落の底へと続く螺旋階段を下るように、僕の意識は闇の深奥へと堕ちていった。

「風の封印は無事に開放できたみたいだね」
「ああ。抜かりはない」
蓮華は答える。
彼女の目の向く先には、明らかに自分よりも年下の、まだ幼さを残す少年が一人立っていた。
日中だというのに、陽の光のカケラさえも届かないここ、取り壊されたビルの地下の一室。
崩れ落ちたコンクリートの瓦礫の山の上に静かに佇んで、その少年は見た目の年齢そのままを思わせる笑みを見せた。
「うん。これで残りは後五つ。順調に事は進んでるよ」
「残りの場所については、引き続きかりんが調べている。見つかるのも時間の問題だろう」
「そう。そういえば、赤穂と真田はどう?」
「……相変わらずだ。まるで死んだように眠ったままの状態が続いている。あのままで大丈夫なのか?」
「心配は要らないよ。あれは一種の通過点なんだから。次に目が覚めたときが、本当の意味での覚醒に繋がることを、あの二人は今身を持って体験しているんだ」
「……にわかには信じ難いが、お前がそう言うのならそうなのだろうな」
「じきに君にも、乗り越えてもらう試練だ。怖いかい?」
「……それは、死が怖いかと、そういうことか?」

「……」

少年は答えない。

その顔に変わらぬままの笑みをたたえて、ただ蓮華を見返していた。

「……死は怖くない。本当に怖いのは、志半ばで目的を達成できなかったときのことだ」

「君らしい考え方だと思うよ、蓮華」

「……聞きたいことがある」

「何だい？」

「私達は、正しいのか？　それとも、間違っているのか？」

「正しくもなく、間違ってもいない。そもそも正義や悪といった概念は、個々の人間によって千差万別なものだよ。僕にとっての正義が、同時に君にとっての正義になるとは限らないし、もしかしたら悪になるかもしれない」

「そんなことは分かっている。私が聞きたいのは、最終的にこの戦いが終わったとき、私達が立つ地面は確かなものなのかということだ」

「……今はもう、不安定かい？」

「……どうだろうな。もしかしたらとっくに、雲の上を歩くような感覚にとらわれていたのかもしれないな」

「そこまで分かっているのなら、恐れることはない」

立ち上がり、少年は言う。

「不安定な足場にいると自覚できるんだ。だったら何が起きても対処できるだろう」

「……もう一つだけ答えろ」

「……どうぞ」

一呼吸置いて、蓮華は問う。

「――この先に、描いた物語は用意されているのか？」

真っ直ぐに少年の目を見つめ、言った。
その眼差しを受けて、少年は変わらぬ笑みをたたえて答える。
「――そう信じたからこそ、君はこうしてこの場所に立っているんだろう？」
それだけ告げて、ただでさえ薄暗い地下の道をさらに奥へと進んでいった。
一人残された蓮華は、静かに目を閉じた。
静寂に包まれる。
一筋だけ差し込んだ陽の光が、やけに眩しかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４８：楽園への迷走（後書き）

こうして後書きに触れるのもずいぶんと久しぶりになります。
こんにちは、このたび、及びいつも拝読ありがとうございます。
作者のやくもと申します。
自作ＬｉｎｋＲｉｎｇも早いもので連載開始から三ヶ月を迎えることになりました。
これもひとえに愛読してくださる皆様のおかげです。
この場を借りて改めて御礼申し上げます。
さて、今回の話を区切りとして、次回からは少し時代風景が代わって過去の話に移行する予定です。
あんまりダラダラと引っ張るつもりはなかったのですが、どうしても書いておきたい部分ということもあって書かせていただくことにしました。
言ってみればこの４８話までが第一部分といった感じになるのだと思います。
ですので、次回からはようやく第二部分の開始ということになります。
時代風景が変わり、少し読みづらくなってしまうかもしれませんが、素人なりに工夫してがんばっていきますので、なにとぞよろしくお願いします。
それでは長くなりましたが、今後とも自作、ＬｉｎｋＲｉｎｇをどうぞよろしくお願いいたします。
感想や意見など、短文でも構いません。
必ずお返事させていただきますので、一言いただければ幸いです。
それでは、これにて失礼を。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４９：若き女王の勅命

この世界はたった一本の巨大な世界樹によって支えられている。
その樹は何よりも高く、何よりも強く、何よりも尊い。
ゆえにその樹には名はなく、誰もが世界樹と称して呼んでいる。
遠い遠い、太古の昔より聳え立つ大樹。
決して枯れず、決して倒れず、決して滅びぬその樹は、この世界の象徴でもあり、世界そのものでもあった。
人が二本の足で地面を歩くよりも、獣が四本の足で地を駆けるよりも、鳥が自由に空を飛ぶよりも早く、大樹は生まれ、休むことなく成長を続け、ついには世界の根となった。
たった一本の樹は、この広い世界を支えるにはあまりにも不安定で、しかしそれ以上に力強かった。
天まで届くその枝葉は、常に瑞々しい緑に染まり、どれだけの雨風をその身に受けても傾くことさえしない。
それは人々から見れば、ありとあらゆる意味での希望だった。
だが……。
そんな考え方こそが、浅はかなものだったのかもしれない。
考えても見ればいい。
永遠など、世界のどこにも存在はしないのだ。
人に限らず、命あるものが生まれたその瞬間から死を背負うように、大樹もれっきとした一つの命である。
ただその寿命が、比べ物にならないほどに長いだけの話であって、決して永遠ではない。
そして命ある限り、常に危険はその身にまとわり付く。
そんな簡単なことに、誰も気付かない。
いや、気付いているのにそうではないフリをしているだけなのかもしれない。

世界だって、命があること。
世界だって、生まれたこと。
生まれた以上、いつか必ず死を迎えること。
それは日々の流れと同じことだ。
朝を迎え、昼を経て、夜に至る。
当たり前すぎるそんなことだからこそ、誰も気付かないのだろう。
世界は確実に、終わりへの道を歩んでいるということ。
それは、この世界でさえも神話やおとぎ話としてしか認知されていない、遠い昔の一説。
光が生まれ、闇が生まれた。
世界も生まれ、やがて終わる。

――ワールドエンド。

生まれたら死ぬ、それだけの自然の摂理。
それは、この世界にも当てはまるという、ただ、それだけのことに過ぎなかった……。

「……、……ください、……」
「……ん？」
軽く肩を揺すられているその感覚に、私は浅いまどろみを押し殺しながら唸った。
「起きてください、隊長」
「……ああ。何だ？」
「ああ、何だ？　じゃありません。こんなところでうたた寝していると、またトール様から怒鳴られてしまいますよ？」
「……ああ」
「ですから……」

呆れたような顔をして、私の目の前にいる騎士……トライは頭を抱えていた。
「……また眠ってしまっていたのか。トライ、私はどのくらい眠っていた？」
「一時間ほどです。正確に言えば、一時間四分二十六秒になりますが……」
「ああ、分かった。もういい」
毎度の事ながら、トライは几帳面すぎるというか神経が細すぎる男だ。
もう少し大雑把に物事を捉えてもいいのではないだろうか？
見ているこちらが気疲れを感じてしまう。
「……と、もう正午か。ん？　確か今日は、正午から会議が入っていなかったか？」
「ですから、そのことで起こしにきたのです。急がないと、本当にトール様の雷が落ちますよ」
「それはいかん。急がねば。ではま、トライ。ああ、資料は私の私室の机の上に置いておいてくれ」
会議に遅刻だけはするわけにはいかない。
私は騎士の鎧に身をまとったまま、城内の中央に位置する会議室へと向かった。
鉄の匂いが染み付いたこの鎧も、いつのまにか重さを感じなくなっていた。
思い返せば、ほんの少し前まではこの銀の鎧も真っ赤な血の色で染まり返っていたというのに……。
「ファ……」
私は急ぎながら、あくびを一つ噛み殺した。
これは一種の平和ボケ、なのかもしれない。
ふと、城内の広い廊下から城下の街並みを覗き見る。
天気はよく、街並みはいつもと変わらずに賑やかな空気を見せている。

これが、平和というものなのだろう。
「っと、いかんいかん。急がなくては」
そう呟いて私……シルフィア・ウィンドガードは、城内の廊下を急ぎ足で走った。

私が会議室の扉を押し開けるとほぼ同時に、正午を知らせる大時計の鐘の音が城内に響き渡った。
ギィと、重く大きな扉を私は押し開ける。
中にはすでに主要人物の姿がずらりと揃っており、どうやら私は遅刻をギリギリのところで免れたようだった。
ふと目が合ったトールが何やら不服そうな顔をしていたが、今は黙って何も言わないでおこう。
所定の席に着き、しばし無言の沈黙が流れる。
広い部屋なのだが、集められた人物は私を含めてわずかに三人しかいない。
その私達三人は、上座の席を残した位置に三角形になるように座っている。
私の正面に座るのが、城内の騎士団を一手にまとめる総団長、トール・ライトニングガード。
そして私とトールからちょうと等距離に座る物静かな男が、私と同じく騎士団長を勤めるアクエリアス・アクアガードである。
ちなみに私達の名前に付くウィンドガード、ライトニングガード、アクアガードというのは当然ながら本名ではない。
これらはいわゆる二つ名のようなものであって、その由来は今から数年ほど前に起きた二大陸間の戦争にある。
結論から言えば、その戦争は今から三年ほど前に締結している。
そのとき、戦争の中で功績を残したものに送られる、いわば称号のようなものとして授けられたのがこの二つ名である。
しかし、功績を認められて送られた称号といってもあまりいい気分はしない。

あの戦争で、私もトールもアクエリアスも、数え切れないほどの命を奪ってきた。
また、同じ数だけ死線を越えてきた。
目を閉じれば今だって鮮明に思い出すことができる。
轟々と燃え盛る大地の中、互いに返り血を浴び続けて腐食した鎧を身にまとい、金属同士がぶつかりあう音だけに意識を研ぎ澄ましたあの、地獄のような日々が……。
「皆さん、お待たせして申し訳ありませんでした」
と、私の思考はそこで一度中断する。
その声を合図に、私達三人は同時に席を立ち、今やってきたその人物に目を向け、右手を胸に添え、深く一礼をする。
白いドレスに身を包んだその人物は、まだ十七歳という若さにしてこの国、クリムゾニアを統治する女王。
その名を、アークティア・クリムゾンという。

「お待ちしていました、女王陛下」
私達を代表し、トールが答える。
「トール……その、女王陛下というのはどうにかなりませんか？確かに私は立場上、そういう位置に座してはいますが、どうにも実感が沸かないというか……」
「それでしたら、せめて姫と呼ぶことをお許しください」
「普通に、アークティアと名前で呼ぶわけには……」
「それはなりません。恐れ多くも、姫はこの国を背負って立つ女王なのですから」
「……はぁ。相変わらず真面目なのですね、トールは」
そんなやりとりを見届けていると、ふいにアクエリアスが口を開いた。
「恐れながら姫。今日は一体どのようなご用件で、我ら騎士団長をお呼び立てになったのですか？」
「あ、はい。そうでした。では、今からそのことについてお話しま

す。お座りになってください」
姫の言葉に従い、私達は再び腰を下ろす。
「クレイオ、礼の資料を皆さんに配ってあげてください」
「かしこまりました」
クレイオと呼ばれる男は、姫の側近を勤める秘書だ。
戦争があった頃は参謀として前線に立っていたが、その戦争の最中で傷を負い、戦争締結と共に騎士団を退役した。
その後はこうして姫の側近を勤め、身の回りの世話や補助を中心に活動している。

「それでは皆様、お手元の資料をご覧ください」
姫の代言として、クレイオが言う。
私達は言われたとおり、手元に配られた資料に目を通した。
「……クレイオ、これは？」
「はい。ご覧の通り、近年になってからの我が国とその近辺の街などで、相次いで行方不明者が続出しています」
「行方不明者だと？」
「はい。民の多くは、自給自足か城への奉公、あるいは個人で狩りや傭兵などをして生計を立てているものがほとんどです。中には騎士団に所属している青年達や、聖堂教会に所属している女性達もいるのですが……」
ピラリと一枚資料をめくり、クレイオは続けた。
「その中でも、特に個人で狩を行っている者達が相次いで行方不明になっているという通達が届いています。多くの者はいつもと変わらずに狩りへ出かけ、そして数日経ってもそのまま帰ってこないとのことです」
「……それはまた、妙ですね……」
アクエリアスが呟く。
「どういうことだ？　アクエリアス」
すぐさまトールが聞き返した。

「この辺りで狩りをするとなると、東にあるゲルトの森が主要な場所となるでしょう。あの森では工芸品や衣類の材料として多く使われる猪の毛皮がよく取れます。また、猪の肉は主食や非常食としても優れているので、一度の狩りで効率よく稼ぎを得ることができるのです」

「その通りです。兵に聞き込みをさせたところ、城下で暮らす多くの狩人達もゲルトの森を主要狩場としていることが分かりました」

「だが、それと行方不明者とどういう繋がりがあるというのだ？」

「……場所か。そうだな？　アクエリアス」

私がそう聞き返すと、アクエリアスは静かに頷いた。

「ええ、そうです。ゲルトの森はここから歩いても三十分ほどで辿り着く距離にあります。加えて、その道のりには危険な場所は何一つ存在しない。ということは、少なくともゲルトの森の中では誰一人として行方不明者が出てはいないということです」

「どういうことだ？　現に何人もの行方不明者が出ているのだぞ？」

「つまり、ゲルトの森以外の場所でその者達は行方をくらましていると、そういうことなのだろう？　アクエリアス」

「その通り。そしてこの付近にそんな場所は、一ヶ所しかありません」

言われて、誰もが同時に頭の中でその場所を思い描いた。

「――狼王の住処です」

と、姫は呟くようにその場所を口にした。

狼王の住処とは、ここから北西に位置する場所にある山脈地帯を越えた向こうにある、霧深い密林のことだ。

気候の影響で、年中のほとんどを深い霧に包まれていると聞いている。

そしてその森には、その名のごとく多くの狼が生息しているらしい。

そしてその狼達を統率し、密林そのものを支配しているのが、フェンリルと呼ばれる狼である。

一説によると、フェンリルはこの世界が誕生した際にいち早く生を受けた狼であり、精霊の加護を受け人語を理解し話すこともできるのだという。

もっとも、今までに確かめた人間は誰一人としていないのだが。

「狼王の住処とは、また厄介なところに足を向ける者もいたものだな」

「ええ。それなのですが、あの密林の奥には様々な病気に効能を発揮する万能薬、オリビアの花が育つという話を聞いたことがあります」

「オリビアの花？　あの、聖書にも出てくる特効薬のことですか？　それが本当だとすれば、確かに危険を承知で採取に行く可能性はあるかもしれませんね……」

「なるほど。確かにそれは好奇心を騒ぎ立てられるのも無理はなかろう。だが、結果として命を落とすようなことでは元も子もないな」

「そこで、皆さんをお呼びしたわけなのです」

クレイオがそこで言葉を区切り、続く言葉を姫が受け継いだ。

「狼王の住処へ赴いて、真偽を確かめてほしいのです。そして、行方不明となった人々を助けてもらいたいのです」

「……姫、お言葉ですが、狼王の住処は熟練の狩人でも滅多に足を踏み入れない、まさに魔境と呼ぶに相応しい場所です。最悪の場合を想定すると、行方不明者達はすでに命を落としている可能性もあります」

「……そうだとしたら、なおさらです。遺族のためにも、ちゃんと墓を作って弔ってあげるべきです」

「……分かりました。引き受けましょうぞ」

「ええ。そうですね」

「心得ました。必ずやご期待に沿える結果を」

私達三人は揃って姫の言葉を承諾した。

「ありがとうございます、皆さん。では、改めて……」
一呼吸置き、姫は告げた。
「――騎士団長各位に命じます。明朝、各部隊を率いて狼王の住処へと向かってください。行方不明者の救助を最優先するものとし、それと同時に各々の命の重さを忘れずに行動すること。よろしいですね？」
「その命、しかと承りました」
「御意のままに」
「クリムゾンの名において」
私達三人は、各々の鎧の左胸に記された真紅の炎の刻印に右手を添え、誓った。
「貴殿らに、赤の宝珠の加護があらんことを……」
最後にクレイオがそう結び、この日の会議は終わりを迎えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４９：若き女王の勅命（後書き）

さて、勢いで始まった回想編の第一回目です。
いつも拝読ありがとうございます、作者のやくもです、こんにちは。
結論から言って、多少読みづらくなってしまうところはやはりあるかと思います。
その点に関しては読者の皆様に迷惑になってしまうことを、あらかじめお詫びしておきます。
もともと私もファンタジーの時代背景やキャラクター設定は好んでやっていたことあったのですが、当時はどうしてもそれを物語りに組み込むことが敵いませんでした。
だからというわけではありませんが、この物語の中でそんな世界観が少しでも表現できればいいなと思って書いています。
正直、私のワガママです。
それでも付き合ってやるか、仕方ないな。
乗りかかった船だ、最後まで目は通してやろうという皆様、どぞお付き合いのほどを。
それでは、時代背景の変わった回想編をお楽しみくださいませ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５０：手に入れた景色

日はゆっくりと、慌てず急がずに流れていく。
城内の一角から眺める西の空にも、うっすらと赤みを帯びた夕暮れが見て取れた。
その強くも弱くもない逆光が、私の銀の鎧をわずかに緋色に変えていく。
ふと、一瞬だけ自分の鎧が今でも返り血にまみれているような錯覚を覚えた。
そっと指先で触れてみる。
鉄の鎧は冷たさだけを保ち、無機質な感触だけを私に伝えていた。
「……」
なぞった指の腹を見返す。
当然、そこには何も付いてはいない。
真っ赤な血の色がべっとりとこびりついているなどということは、それこそ夢幻の話に過ぎないのだ。
それはもう、今と成っては遠い昔に思える頃に去った日々。
勝つための戦い、生きるための戦い、存亡をかけた戦い。
口ではいくらでも理由らしい言葉を吐き出すことができた。
言い訳に過ぎない屁理屈も、戦いという一点に置いては正当な理由に思えた。
自分達が正しいと、そう信じて戦い続けて、顔も名前も知らない、男か女かもわからない、少年か老婆かもわからない人々を殺した。
殺し続けた。
剣を振り下ろすたびに、不快で耳障りな音と感触が、指先から腕を流れて脳に伝わった。
苦痛にまみれる声、届かない叫び、次第に止まっていく呼吸の音をこの耳で聞いた。

そのたびに歯を食いしばり、唇を噛み締め、目を背けながら命を奪った。
この手と、この手の握るその剣で。
何人殺したかなんて覚えていない。
いちいち数えているほど狂信ではないし、覚えていたいとも思わなかった。
振り返るだけで、そこに死体の山が見える時期があった。
おぞましい光景だった。
しかしその全ては、私が自らの正義を掲げて奪ったもの。
受け入れ、背負って生きていくしかなかった。
生きるということがこんなにも地獄に感じたのは、生まれて初めてのことだったかもしれない……。

「……三年、か。一日でさえこんなに長く感じるのに、三年というのはあっという間なのだな……」
空を見上げ、私は呟いた。
少しだけ風が出ていた。
冷たくも温くもない、心地よい風だった。
「何をたそがれているのだ」
無骨なその声は、ふいに背後から聞こえた。
「……トールか。驚かせるな」
「ふむ。別に驚かせるつもりはなかったのだがな」
女の私と比較して一回りほど巨大な体格のトールは、やはりその体に見合った重苦しそうな鎧に身を包んで私の隣へと歩み寄ってきた。
「どうした？　センチメンタルを感じる歳でもあるまい」
「……トール、私だからいいが、他の女性にそういう話の振り方をしたら嫌われるぞ？」
「そういうものか？」
「そういうものだ。普通の女性はな」

「……まるで、自分は女であることを捨てたような言い方だな」
「……戦いの前線に立った……いや、騎士になったときから、私は私が女であることなどとうに捨てている。それに、騎士に性別など関係あるものか。必要なのは強さと、騎士道に背くことのない精神、そして国と姫に対する忠誠心だけだ」
「ふむ。まぁもっともだな。騎士たるもの、老若男女を問わず騎士として生き、やがて騎士として死ぬのみ。それが我らの進むべき道であり、選んだ道だ」
「分かっているなら聞くな。全く……」
「何、少し気になったのでな」
「……何がだ？」
「自分では気付いていないのか？」
「だから、何のことだ？」
「……やれやれ。疲労が目に見えて顔に表れているぞ。睡眠はしっかりととっているか？」
言われて、私は反射的に目元に手を当てた。
「疲れている？　私がか？」
「他に誰がいる？」
「……」
しばし考え込み、私は目を閉じた。
「……いや、特には問題ないはずだ。睡眠はしっかりとっているし、食事だって……」
「だとしたらその疲労は、肉体的なものではなく精神的なものなのだろう」
「精神的……」
「……三年前の夢は、まだ見るのか？」
その言葉に、私は思わず心臓を鷲掴みにされたような感覚を覚えた。
三年前……つまり、あの戦争が最終局面を迎えた頃のことだ。

あの、何もかもが赤一色に塗りつくされた世界の中、私は戦っていた。
血を流し、流され、傷付け、傷を負い。
……ダメだ。
思い出すだけで吐き気がしてくる。
「……っ！」
わずかに体がよろめくが、足に踏ん張りをきかせてどうにか耐える。
「……すまない。余計な詮索だったか」
「……いや、いい。お前が気にすることではない……」
呼吸がわずかばかり早まるが、さしたる問題ではない。
チクリと痛む頭痛も、奥歯を噛めばすぐに消え去った。

「……我々は多くの人を殺してきた」
ふいにトールは呟いた。
「百ある命のうち、八十は救うことができた。百ある命のうち、五十は助けを求めて叫んだ。百ある命のうち、全ての命をできることなら奪うことなどしたくはなかった……」
言って、トールは静かに目を閉じた。
「当時の俺は思った。俺は、命を奪うために騎士になったのではない、と。むしろ逆だった。騎士になり、この目に映る救いを求める人々を一人でも多く救いたかった。理想論だとは分かっていても、実現させるつもりだった」
「……トール」
「だが、実際にはそうはいかなかった。口にした理想がいかに実現し難いものなのか、嫌というほどに理解させられた」
ゆっくりとトールは目を開ける。
その目に差し込む夕陽の逆光を、少しだけ眩しそうにしかめながら。
「だが俺は、諦めたわけではない。戦争が終わった今だからこそ、

俺は改めて志を高く持てる」
スッと、トールは城下の街並みを指差した。
「見ろ。ようやく当たり前になった光景を。俺達はこの当たり前の景色を誰よりもこの目に焼き付けて、末永く守り抜かなくてはならないのだ」
「……」
見下ろす城下の街並みには、昼間とは少し違う賑わいがあった。
時間的に、どの家でももう間もなく夕食が始まる頃だろうか。
親子連れの姿も珍しくはない。

「忘れろとは言わん」
トールの言葉に私は振り返る。
「むしろ、忘れてはならんのだ。いいか？　新しい時代を築くのは、その時代を生きる者達にしかできない。そして新しい時代を生きる者達とはすなわち、過去を背負った者だけだ。歴史はそれを繰り返し、いくつもの時代を刻む。そしていつの時代にも、過去に傷を負った者がいる。そんな傷を負った者達こそが、次の時代に先頭を切って歩いていけるとは思わんか？」
トールの言葉を受け、私は一度視線を外した。
そしてもう一度、城下の街並みに目を向ける。
今こうして、この目に映るこの景色こそが、私達の得た平和という一つの形。
そこに至るには、数え切れないほどの命が奪い奪われてきた。
それらを礎にして、この平和は成り立っている。
無駄なものなんて何もない。
あの日あの時、私が奪ったあの命も、きっと今というこの平和の時代の墓の下に眠っている。
ただ、できるなら……できることなら、この時代を生きて欲しかった。
生きて、笑って、泣いて、怒って、そんな風に当たり前に、同じ

時代を……。
「……そう、だな……」
少し枯れた声で、私は答えた。

「――そういう現実的な理想なら、私にも追いかけることくらいはできそうだ」

「……ふん。立ち止まってぐずぐずしていると、構わずに置いていくまでだ。さっさと先頭まで追い上げてくるのだな」
そんな憎まれ口にも似た言葉を吐くトールだったが、その表情はどこか満足そうに笑みを浮かべていた。
「さて、そろそろ訓練の終わる頃だな。明日の朝は早いのだから、早いうちに部隊の編成をしておくことだ」
「……ああ。そうしよう」
そう言って、トールは私に背を向けて歩き出した。
少しだけ遠目に見るその背中は、いつか見たときよりもずっと大きく広くなっているように思えた。
逆立った赤い髪がわずかに揺れ、屈強な体とそれを包む銀の鎧が輝いていた。
「っと、そうそう。いい忘れていた」
と、トールは立ち止まり、振り返って告げた。
「どうかしたか？」
「アクエリアスのやつからな、伝言というか誘いを頼まれていてな」
「誘い？」
聞き返す私に、もう一度トールは小さな笑みを浮かべ、続けた。
「久しぶりにうまい酒が手に入ったそうだ。夕食後、三人で一杯どうか？　とな」
その思わぬ誘いのないように、私は一瞬だけ呆気に取られてしまった。
しかしすぐに、正体の分からない小さな笑いがこみ上げて……。

「……そうか。ならば、私に断る理由はないな」
その答えに満足したのか、トールも同じように笑みを浮かべた。
「では、そのように伝えておこう。集まる場所は分かっているな？」
「ああ、問題ない」
私の答えを受け、トールは再び背を向ける。
私はその背中に向けてか、それとも単なる独り言のつもりなのか、ふいに呟いていた。

「――十一時に、中庭で……」

風が出てきた。
仄かに甘い香りを運ぶそれは、私の口元を緩ませるには十分なものだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５１：前夜

夜の帳が落ち、城内はにわかに静けさを保つようになる。
見回りの兵士などの持つロウソクが照らす明かりと、廊下に並ぶ松明の明かりを覗けば、月明かりと星明かりだけが煌々と冷たい地面を照らし出していた。
「ふと思ったのだが……」
私が口を開くと、トールとアクエリアスの二人は揃って振り返った。
「早朝を控えているのに酒をたしなむなど、私達は何をしているのだろうな」
「まぁ、いいじゃないですかたまには。こういう息抜きも、時には必要ですよシルフィア？」
「アクエリアスの言う通りだ。それに、まさか昼間から酒を飲み交わすわけにもいかんだろう。そうなれば自然と夜中に飲み交わすことになるのが必然というものだ」
私と同じ透明なグラスを片手に、二人は揃ってそう口にした。
「まぁ、それはそうなのだがな……」
しぶしぶ相槌を打つ私のグラスの中に、コポコポと音を立てて紫色の液体が注がれた。
仄かに香るブドウの酸味と甘味が鼻腔をくすぐり、その香りに私は妙な安心感を覚えていた。
注がれた液体はワインで、原材料はこのクリムゾニア地方でよく採れるパープルブラッドと呼ばれる赤みを帯びたブドウだ。
名前は少々物騒ではあるが、見た目も味もとてもよく、なおかつ採取量が豊富なので、多くの人々に親しまれている酒だ。
もちろんワインというだけあって、熟成を重ねればその味は一味も二味も深まっていく。

中でも五十年以上熟成させたものはとても高価な値段が付き、ワイン好きの間でも高値で取引されたり、あるいは祭典か何かの行事の際に皇族への贈り物として使われる場合も少なくはない。

「それにしても、よくこんないい酒が手に入ったものだな？」

酒豪とまではいかないものの、人並以上に酒を好むトールが言う。

私はトールほど舌が肥えているわけではないので何とも言えないが、確かに美味だった。

トールがいい酒と言うことは、やはりそれ相当にいいものなのだろう。

「私の知人が、ワイン製造の仕事をしていましてね。つい先日、急に送りつけてきたのですよ」

グラスの液体を一口飲み干し、アクエリアスは続けた。

「これはちょうど、熟成させてから二十五年ほどのものだそうです」

「二十五年か……ずいぶんと長いな。ちょうど私達が生まれた頃に、同じくして採取されたのだろうな」

「ええ。このワインは、私が生まれたその年に作られたものだそうです。それで気を利かせた知人が、先日の私の二十五歳の誕生日に重ねて送りつけてきたのですよ」

「おお、そうか。そういえばアクエリアスは先日で二十五になったのだったな」

「……トール、数日前のことをもう忘れたのか？　あの日は騎士団を上げて、盛大に飲み食いを楽しんだだろうに」

「そう言うな。楽しいことはいつでも一瞬だ。忘れていないだけいいだろう」

そう言って、トールはグラスのワインを一気に飲み干した。

普段は冷静沈着な男なのだが、時々それが嘘のように見える一瞬がある。

それがこのトールという男であって、とてもじゃないが私やアクエリアスよりも十も長生きしている人間とは思えない。

「お二方とも、明日の部隊の編成は終わりましたか？」
グラスをテーブルに置き、アクエリアスが聞く。
「ああ、問題ない。だが、少々不安も残るな。大部隊で行くわけにもいかんし、とりあえずは小隊を一つ整えたのだが……」
「仮にも狼王の住処と呼ばれるその場所は、普段なら人の手が入らない魔境や秘境といっても過言ではないだろう。確かにそのような場所に向かうのに、小隊一つというのは些か心細い気もしなくはないが……」
「そうですね……ですが、あまり目立ってしまっても民に不安を覚えさせるだけです。できる限りの少人数かつ、精鋭の部隊で臨むのがいいでしょう。我々の目的はあくまでも行方不明者の救助及び発見であり、戦いに赴くわけではないのですからね」
「そう……だな」
頷き返しはしたものの、私はなぜか胸の奥に小さな不安を抱えているような感覚だった。
息を吹きかければそれだけで飛び散ってしまいそうな、まるでホコリのような不安。
なのに、まるで落ちにくい汚れのようにこびりついてなかなか取れないような、そんな……。
「どうかしたか、シルフィア？」
「……え？」
トールの声に、私は意識を引き戻される。
「……ああ、いや……すまない、ちょっと考え事をしていた」
「そうか？　ならいいのだが……」
「シルフィア、やはり疲れがたまっているのではないですか？　少し顔色がよくないように見えますが……？」
「そうか？　そんなことはないのだがな……夜のせいだろう。暗がりの中では人の顔も暗く見えるものだ」
言って、私はワインを飲み干した。
甘味と酸味が程よく混ざり合う、その美味な味わいの液体が一瞬

……ほんの、一瞬だけ。

――鉄の匂いの混じる、血の味に感じてしまった。

「……っ！」

わずかばかりの嘔吐感を覚えながらも、私は無理矢理にワインを胃の中へと流し込んだ。

もはや味わっている余裕などはなかった。

コトンと音を立て、グラスをテーブルの上に置く。

妙な疲労感を覚えた。

二本の足で大地の上に立つことは、こんなにも不安定なことだっただろうか？

鎧を脱いだ体は、こんなにも揺らぎやすいものだっただろうか？

今の私は、まるで風に吹かれる綿毛そのものだ。

抗うこともできず、ただ吹かれ揺れるだけ。

やがて一瞬の強い風に、あえなく吹き飛ばされてしまうような……。

「……シルフィア？」

「おい、どうした？」

トールとアクエリアスが揃って声をかける。

しかしどうしてだろうか？

その声さえも、今ではただうるさいと感じてしまう。

ザーザーと、雨降りの日に響くあの音。

灰色の記憶の中に残る、微かなノイズ。

鬱陶しい。

邪魔以外の何者でもない。

私にその映像を……音を見せるな。

重いとは裏腹に、飲み干したはずの血の味が逆流しかけてくる。

血の味。

鉄の味。
響く音。
耳障りな手応えと感触。
消えていく誰かの声。
助けて、と。
苦しい、と。
痛い、と。
その一つ一つの声に私は、その手に握る剣の切っ先を真っ直ぐに振り下ろし、湧き水のように噴出す真っ赤な鮮血にその身を濡らした。
ザーザーと、雨が降っていた。
灰色の雨は、しかし私の鎧と顔に付いた真っ赤な血をこれっぽっちも洗い流してはくれなかった。
凍えるような冷たい雨の中で。
かじかむ指先を震わせながら、私は剣を握り締めていた。
切っ先からは赤い雫が零れ落ち、雨とは別に赤い水溜りを描いていった。
私が立っているのは大地などではない。
そこにあるのは、手にかけて奪った命……屍の山だ。
救えない命は一つとしてなかった。
奪うべき命も一つとしてなかった。
ただそれは、結果だった。
自分の中の騎士の正義のために掲げた剣を振るった、その結果だ。

「シルフィア、おい、しっかりしろシルフィア！」
「……え？」
気が付くと私は、トールに肩を揺すられていた。
「……何だ？　どうかしたのか？」
「どうかしたのかって、お前……」
私の言葉を受け、トールはただ呆然としていた。

「……今夜はそろそろお開きにしましょう。明日も早いことですし」
「う、うむ……」
「……」
私はまだ頭がボーっとしていた。
アクエリアスの声はしっかり聞こえるが、声の方向がわからないようだった。
「シルフィア」
「……何だ？　アクエリアス」
「……いえ。しっかりと休息を取って、明日に備えてください。明日は長い一日になりそうな予感がします」
「……ああ、そうだな」
空のグラスとワインボトルを抱え、アクエリアスは一足先に中庭をあとにした。
数歩ほど遅れて、私とトールがそれに続く。
足はしっかりと、大地を踏みしめていた。
だが、それでいて……どうしようもなく、不安定だった。

夜の大地のどこか。
見上げる空の上には、散りばめられたような星のカケラと銀の月。
すでに暗がりが佇む大地の上で、彼はただぼんやりとその夜空を見上げていた。
深々とかぶった三角帽子、夜の暗さにも負けず劣らずの黒いマント。
さらにはその脇に抱えた弦楽器のハープが、彼を旅の吟遊詩人であることを物語っていた。
「……夜が荒れている」
見上げたまま、彼は呟いた。
「こんなざわついた夜空は、あのとき以来だ……」

彼は一度視線を戻し、地平線の高さで辺りを見た。
シンと静まり返る夜の中でも、彼にとっては世界は変わらない。
朝も昼も夜も、全ては同じように世界を包むカーテンに過ぎないことを、彼は知っているからだ。
普通の人の目に映る世界と、彼の目に映る世界は少し違う。
彼には世界の揺れが見える。
それは変化という言葉に置き換えてもいいだろう。
言わば、静と動の境目が、彼には見えているのだ。
そしてまさに今、この瞬間。
静を保ち続けていたこの世界に、動の機が訪れ始めていた。
「……世界が、揺れている。何て悲しい声……」
呟き、彼は悲しそうに目を伏せる。
「また、世界が涙を流すことになる。終わったはずなのに、枯れ果てたはずなのに……」
小声すぎるその声は、響くこともせずに夜の中へと溶けて消える。
「けれど、それが歴史。繰り返すことによって、世界は時を超えていく。悲しみも辛みも、痛みも切なさも、全て抱いて還っていく」
そしてもう一度、夜空を見上げる。
「人がそれを運命というのなら、従えばいい。僕はただ、それを見ているだけ。だが……」
彼は静かに目を閉じた。

「――それでも僕は、願わずにはいられない。誰か、この世界の進む先を示してくれないか？　希望を与えてくれとは言わない。ただ、指先で指し示すだけでいい。予め決められた未来ではない、全く別の新たな道を……」

そこで彼は言葉を区切り、ゆっくりと目を開けた。
「……世界は君の揺り籠。君を乗せ、どこまでも往く。ただ、覚えておいてほしい。君にも僕にも、この世界を歩むことのできる二本

の足があることを。この世界を見る、二つの目があることを。もしも君が、この世界でそのことを忘れずに歩んでいけるのなら……」

彼は告げる。

誰かへの……いや、世界へのメッセージを。

「――空を仰ぎ、大地を踏みしめろ。踊り出した心が止まらぬように……」

そして彼は、世界に溶けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５２：小さな追跡者

まだ朝靄の少し残る中、私達はそれぞれに編成した少数の部隊を引き連れて道の上を歩いていた。
王都を出て歩き始めて、もう間もなく一時間ほどの時間が経とうとしている。
目的地である狼王の住処まではもう少しといったところだろうか。
「霧が深くなってきているな。隊列を乱さぬように警戒しろ」
先頭を歩くトールが、後に続く私とアクエリアスの部隊に向けて告げた。
早朝ということを除いても、この霧の深さは尋常ではない。
幾重にも重なり合った空気の層は、質感のない壁を突き破るような感覚だった。
そのくせに、やけに肌にまとわり付いて曖昧な重さを感じさせてくる。
一言で言えば不気味だった。
一年の大半を深く濃い霧に包まれ、それゆえに人々はおろか他の動物たちさえも滅多なことでは近づくことさえしない、クリムゾニアの国土に残された現存する数少ない生きた魔境。
噂ばかりが一人歩きしたものとばかり思っていたが、この様子を目の当たりにしてはそれも認めざるを得ないだろう。
「トール、もうすぐ森の入り口だ。一度部隊の確認をしたほうがいいだろう」
「うむ、そうだな。森の入り口手前にある岩場で再編成を行うとしよう」
「了解です」
そして私達は霧の中、一休みできそうな岩場で各部隊の隊員の有

無を確認し、細心の注意を払って部隊の再編成を行った。
と、そんなときだった。
「誰だ！　そこのいるのは！」
私の部隊の兵が一人、霧の奥に向けてそう叫んだ。
「どうした？　何があった？」
すぐさま立ち上がった私に続き、多くの兵が武器を構えて立ち上がる。
それを私は片手で制止させ、今来た霧の道の向こうへと目を凝らした。
「どうかしたか？　エルド？」
呼ばれた若い騎士は、私の部隊に所属するエルドという青年だ。
「隊長、すぐ近くに誰かいるようです。足音を耳にしました」
「……よし。分かった、下がれ。私が行こう」
「はっ……」
私は静かに歩みを進め、腰に携えた鞘から剣の柄をわずかに引き上げ、前へ出た。
「そこにいるのは誰だ？　姿を見せろ」
しかし、霧の向こうから返事はない。
どれだけ目を凝らしても、霧が深すぎるためにそこには人影すらも確認することはできなかった。
「……隊長、自分の空耳だったのでしょうか……？」
「……いや、違うな。確かにいる」
私は確かに、その霧の向こうから気配を感じ取った。
長い間戦いの中で培った経験と勘だ、間違いはない。
そして感じたその気配には、まるで敵意や悪意というものは感じられなかった。
むしろ逆で、怯えている小動物のようなそれによく似ているものだった。
私はそれを確認し、握っていた剣の柄を離した。

カシャンと、刃が鞘の中に収まる。
「出てきなさい。何も取って食おうというわけじゃなのだ。そちらもこちらに対して、争うつもりはないのだろう？」
もしもこうして話しかけてる相手が人ではなく動物だったら、そもそも言葉も通じないだろう。
しかしこの気配は、明らかに人独特のものだ。
そもそも野生動物の類であれば、最初のエルドの声を聞いた時点で一目散に走り去っているだろう。
つまりこの相手は人であり、私達に対して敵意はなく、それどころか私達の後を付いてきたようなものなのだ。
「さぁ、出てきなさい。そちらが何もしなければ、こちらも何もしはしない」
私はできるだけ諭すような言葉を選んで言った。
するとようやく、その気配がわずかに動いた。
ジャリと、砂地の地面を踏む音が聞こえる。
霧の幕をゆっくりと掻き分けながら、徐々にその姿が私達の目の前へとやってきた。

「……な？」
「これは、どういうことだ？」
「おやおや、迷子……にしては、ちょっと違うようですけど」
私達は三人揃って驚愕の声を上げた。
声を出さずとも、多くの兵達も霧の中から出てきたその人物……いや、正確に言えばその人物の幼さに驚いていた。
「……」
ひょっこりと姿を現したのは、まだ外見からして七、八歳ほどの少女の姿だった。
「子供？　どうしてこんなところに？」
「まさか迷子というわけではなかろう？　仮にもここは魔境の入り口だぞ？」

「近くに町や村、集落もありませんし、そうなるとやはりこの子は……」

「……君は、まさか王都からずっと私達の後を付いてきたのか？」

私が優しく聞くと、その少女は口には出さずに小さく頷いた。

少女はまだ少し怯えている様子で、しかしなぜかその表情とは裏腹に確固たる意思のようなものが目に見えた。

「……一体どうして、私達の後をつけてきたんだ？　ここは危険な場所だ、すぐに帰ったほうがいい」

「おい、誰かあの子を王都まで送り届けてやれ」

トールが言うと、部隊の兵士の何人かが率先してその役目を引き受けた。

「さぁ、我々と一緒に帰ろう」

「心配は要らない。必ず無事に家まで送り届けるから」

「……だ、め……」

「……ダメ？」

か細い声で、しかし確かに少女はそう言った。

「わがままを言うものではない。ここは危険な場所なのだぞ？」

「さぁ、行こう。家に帰るんだ」

「……ダメ！　帰らない！　私は、お花を取りに来たの！　それがないと、お母さんが……」

「こら、いい加減にしないか……！」

「待て」

やや呆れ果てて兵が怒声を出しそうになるのを、私は手で制止させた。

「シルフィア騎士団長……」

「……」

少女は大声を出したかと思ったら、またしおしおと声を失ってしまっている。

だが、どうやら何かわけありのようなのは確かだ。

「花を取りに来た、そう言ったね？」
答えず、少女は頷いた。
「どういうことだい？　それに、お母さんがというのは？」
「……病気、なの……」
そして少女は、ようやく口を開いた。
「私のお母さん、病気なの。色んなお薬を使っても、全然治らないの。だから私、狼の森に咲く、どんな病気も治すことができるお花を取って、お母さんを助けるの」
「……花。それはもしかして、オリビアの花のことですか？」
「オリビアの花？　そういえば昨日の会議の中でも、そんな話を聞いた覚えがあるな」
「ええ。オリビアの花は、別名世界樹の種とも呼ばれています。煎じて飲むことによって、どんな難病や大怪我もたちまち回復するという、まさしく万能な薬として史上に名が残されています」
「しかしそれは、噂だけではなかったのではないか？　現に市場では、そんなものは出回っていないではないか」
「無理もないでしょう。文献などの中にも、正確な生息地は何一つ記されていないのです。天候、気候、温度、湿度、他にも様々な条件があり、それらが偶然重なってできた場所にのみ、花は咲くと言われています」
「確かそれが、狼王の住処にあるという噂があったのだな？」
「ええ。真偽は分かりませんが、狼王の住処ほどの魔境ならばあっても不思議ではないかもしれません。もとより人の手が届かないところに、そういった伝説上のものは生息するものですから」
なるほど、アクエリアスの言い分には納得できるものがある。
確かに真偽のほどは不明だが、可能性は決してゼロではなさそうだ。
「とはいえ、子供一人でやってくる場所でもなかろう。やはり王都へ戻した方が懸命ではないのか？」
トールの言い分はもっともだ。

私も一人の騎士として、民をわざわざ危険の中に飛び込ませるのを黙って見ているわけにはいかない。
「……」
トールの言葉に、少女は静かに頭をうなだれた。
恐らく、自分でも無茶をしでかしていることは少なからず自覚があるのだろう。
ましてやこんな早朝の時間、我々に気付かれぬようにこっそりと後を付いてくるほどだ。
逆に言えば、それだけ真剣ということでもある。
さてさて、困ったものだが……。

わずかに私は考え込み、そしてトールとアクエリアスに振り返った。
「トール、アクエリアス、頼みがある」
「……やはり、そうなるのだな」
「言わずもがな、ですね」
言う前から、二人はすでに溜め息をついたり呆れた顔をしたりしていた。
「……すまない。感謝する」
ようするに、だ。
「あなた、名前は？」
「……え？」
ふいにかけられた言葉に、少女はぼんやりとしていた。
「名前だよ。あなたの名前」
「あ……アリス……」
「アリス、か。確か、どこかの国のおとぎ話でそんな姫の名前があったな」
「おやおや。それでは、丁重におもてなしをしないといけませんね」
「ふむ。異国の姫の名に一時の忠誠を誓うのも、まぁ悪くはなかろう」

そう言って、二人は小さく笑った。
そして私はもう一度アリスと名乗った少女に向き直り、その頭を軽く撫でながら言う。

「――私達と一緒にきなさい。大丈夫。あなたのことは私が必ず守ってみせる。この剣にかけて」

その言葉に、少女は最初ポカンと口を開けたままでいた。
だが、ようやくその言葉の意味が理解できたのだろう。
「ありがとう、お姉ちゃん！」
そう言うなり、私の胸に勢いよく飛び込んで満面の笑顔を見せた。
いや、それよりも何よりも私が気になっているのは……。
ゆっくりと後ろを振り返る。
案の定、私よりも二人の方が驚いた顔をしていた。
「……聞いたか？　アクエリアス？」
「……お姉ちゃん、ですか。いえ、別に珍しくも何ともない言葉なのですが……」
二人の視線が私を見る。
「……な、何が言いたい？」
「いえ、別に……」
「ふむ、言いえて妙とはこのことか……」
などと、各自勝手に納得している様子だった。
ああ、もう。
好きにしてくれ。
何だかんだで、一番恥ずかしいのは面と向かって呼ばれた私自身なのだから……。
深い霧の中、それとはまた違ったおかしな空気が流れていた。
幼すぎる姫を加え、そして我々は森の中へと進むことになる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５３：狼王

森の入り口は、一段と深く濃い霧によって行く手を阻まれていた。
何もしていないのに、その場に居合わせるだけで呼吸が苦しくなるような錯覚さえ覚えるほどだ。
「ここか、入り口は」
「そのはずです。この森の入り口はここ一ヶ所しかないと、文献にも記されていましたからね」
「……やはり、魔境と呼ばれるだけあって圧巻だな」
私達は口々に率直な感想を口にし、改めてその森の入り口を凝視した。
しかしそうしたところで、深い霧は一寸先さえもまともに映し出してはくれない。
この霧深い森の中には、数多くの狼が生息していると言われている。
一般の森の中に生息する狼も数多いが、この森にはその中でもさらに頭のいい、統率の取れた種類が生息しているらしい。
そしてそれらの狼達全てを統べる、王と呼ぶに相応しい存在。
身の丈も通常の狼の五倍以上、知能も極めて高く、戦闘能力もそれにひけを取らない。
さらに何より、この世界が創造された頃より生き続けているとされる不死に近いその生命力。
精霊と神の加護を受け、人語までも理解し口にすることができるという、もはや神話上の聖なる獣。
――深き森の主、狼王……フェンリル。
ゴクリと、兵達が息を呑む音がやけに鮮明に聞こえた。

彼らの誰もが、この例えようのない圧迫された空気に気付かれぬうちに気圧されているのだろう。
ここに集う兵は皆、騎士団の中でもその実力を認められた精鋭ぞろいにもかかわらず、だ。
しかしそれも無理もないことだろう。
実際、こうして面と向かって森を前にして立つ私も不気味さを感じずにはいられないのだ。
目には見えない重圧感が、体全体を押し潰すかのように向かってくるのが感じられる。
「……行こう」
まずはトールが先頭を切り、部隊を率いて一歩前に踏み出した。
その後に続き、アクエリアスの部隊が続き、私の部隊は隊列の殿を務めることになった。
覆い隠された霧を突き破り、我々はとうとう、魔境と呼ばれる狼王の住処へと足を踏み入れた。
「……アリス、大丈夫か？」
ふと私は、その場に間違いなくそぐわない少女に声をかけた。
「う、うん……平気……」
口ではそう言うが、半ば私の足にしがみつくように寄り添うその姿は、よほどの恐怖を体感しているのだということは明らかだった。
「大丈夫だ。あなたのことは私達が必ず守る。安心しなさい」
「……うん」
私がそう言うと、アリスは少しだけ安心したようにホッと胸を撫で下ろし、小さな笑顔を見せた。
森の中はまさしく、天然の迷宮と化していた。
陽の光さえも遮断するほどに茂る木々は、まさしく密林そのものだ。
空と地面の境など、すでに分からなくなってしまっている。
唯一つ確かなはずの踏みしめる地面も、まるでぬかるみのように

どこか不安定だ。
知らぬ間に底なし沼の中へと導かれているのではないかと、疑念を抱かずにはいられない。
「……むぅ」
歩き始めてもう間もなく三十分ほどが経とうとしていた。
幸い、これまでの間に狼に襲撃されたりなどということはなかった。
一度だけアリスが足を転ばせ、多少膝を擦り剥いた程度のことはあったが、それ以外は至って平和なものだ。
もっとも、平和という言葉がこれ以上に似つかわしくない景色ではあるが。
「妙だな……」
先頭を歩くトールが一度立ち止まり、そう呟いた。
「隊長、思うのですがこれは……」
「うむ。お前も気付いたか」
兵の問いに頷いて、トールは一度後ろを振り返った。
「アクエリアス、お前も気付いているだろう？」
「……どうやら、気のせいではなかったようですね」
「どうした？　何があった？」
最後尾の私は、すぐに二人の元へと駆け寄った。
「魔境の名は伊達ではないな。この森はさしずめ迷宮と言ったところか」
私は一瞬、トールの言葉の意味がよく分からなかった。
「気付きませんか？　シルフィア。私達は先ほどから、何度も同じ道の上を歩き続けているということに」
「な……」
本当かと聞き返すよりも早く、トールが指差した方向を私は振り返った。
「これは……？」

するとそこには、一本の木があった。
その幹の中腹に、何か切り傷のようなものが横一線に刻み込まれている。
「その傷はな、俺が剣でつけておいたものだ。最初にこの道を通ったときにな」
そうしてさらに周囲を注意深く見てみると、我々の周囲の木々にはどれも似たような傷痕が刻み込まれていた。
傷の付き具合からして、これもみなトールの剣によるものと見て間違いないだろう。
「……なるほどな。迷宮とは、そういう意味か」
私は改めて、この地の恐ろしさを思い知らされた。
「しかし、これでは動きようがない。アクエリアス、何か案はないか？」
「……正直、難しいですね。これは仮説ですが、恐らくこの森全体に幻惑の魔術が施されているのだと思います。侵入者を迷わせるためにね。加えて、天候や方位を当てにすることも無理でしょう。方向感覚も失われつつあるようです」
「この深い霧の前では、人間の視力程度は何の役にも立ちはしないだろう。闇雲に歩き回ったところで、体力を消耗するだけか……」
八方ふさがりと言わんばかりに、トールとアクエリアスはその場に立ち尽くした。
周囲の兵達も、さすがにこの事態の異常さににわかに騒ぎ出している。
それでもどうにかパニックにならずに冷静さを保てているのはさすがといったところか。
だがしかし、現状を打破できなくては全く意味がない。
かといって、迂闊には動くこともできない。
手当たりしだいに動き回れば、それは新たに行方不明者を増やすことに一役買ってしまうだろう。
だが、だとしたらどうすればいい？

この密林の迷宮の中、視覚も聴覚も全く当てにならない魔境の中心で、我々は何を頼りにどこへ進めばいいというのだ？

……いや、考えろ。

思考を停止させるな。

何か、何かあるはずだ。

私は静かに目を閉じ、全神経を集中させる。

周囲の雑音をすべて消去。

耳鳴りを感じるほどの静寂に身を置いて、五感の中から何かを探し出すかのように……。

と、しかしその声はふいに、私のすぐ側から聞こえた。

「……いい匂い」

「……え？」

私はその声に目を開けた。

私だけではない。

静寂に包まれていたその場に、そんな一言が漏れたのをきっかけに、周囲の視線が一点に集中する。

そう、私の隣で静かに立ち尽くしたアリスの元に。

「匂い？　どういうことだ、アリス？」

私は身を屈め、アリスと同じ目線の高さで聞く。

「あのね、いい匂いがするの。甘くて、果物みたいな香り」

「……なるほど。そういうことですか」

一足早く理解が及んだアクエリアスが言う。

「どういうことだ？」

トールがすぐさま聞き返した。

「その前に、一つ確認を。アリス、あなたの家は、どんなお仕事をしているのですか？」

「あのね、私の家はお花屋さんなの。私とお兄ちゃんと、お母さんでお店をやってるの」

「……そうか。そういうことか」

ようやく私も理解が及んだ。
つまりアリスは、花屋で家の手伝いなどをしていることが少なくないのだろう。
そしてそうこうしているうちに、様々な花の香りを覚えてきたのだ。
嗅覚の異常発達とまで大げさなものではないが、それでも常人に比べてはるかに優れた嗅覚を持ち合わせているのだ。
そのアリスの嗅覚が、何かの匂いを感じ取ったのだ。
「アリス、その匂いの方向は分かりますか？」
「大体だけど、分かるよ」
「では、私達をその方向に案内してください」
「大丈夫なのか？　アクエリアス」
「文献によると、オリビアの花も強い甘味のような香りを発していたと記されています。ですから、匂いの先を辿ればそこにオリビアの花が咲いている可能性は十分あります」
「なるほどな。よし、全員でその場所に向かうぞ。行方不明者が求めていたものもオリビアの花だとすると、その場所に何か手がかりが残されているかもしれん」
「アリス、案内を頼めますか？」
「うん」
こうして我々は、アリスの嗅覚を頼りに森の奥へとさらに歩みを進める。

そうしてさらに十数分ほど歩いた頃、徐々に我々を包む深い霧が薄くなってきたように思えた。
視界が少しずつ開け、あの重苦しさのようなものもしだいに感じなくなっていった。
さらに歩くと、霧はもうほとんどないも同然に晴れてくる。
目の前がやけに明るくなり、わずかだが上空から差し込む陽の光も浴びることができた。

「こっち。もうちょっとだよ」
そう言って、アリスは一人先に駆け出した。
「あ、こらアリス！」
「オリビアの花があればアリスの母親も助かるだろうから、嬉しいのだろう。はしゃぐのも仕方あるまい」
「まぁ、それもそうか……」
などと、私とトールは楽観的にその背中を見送っていた。
だが、一瞬後。

「――止まりなさいアリス！　無闇に花に近付いてはいけません！」

そう怒鳴ったのは、アクエリアスだった。
「え？」
その声に驚き、ピタリと足を止めて振り返るアリス。
そのアリスの体を覆い隠すほどの、巨大な影。
アリスはその影に気付いていない。
振りかざされた刃の爪。
銀の体毛がなびきながら、牙を剥き出しにして音もなく吼えた。
そして爪は空を裂いた。
それだけで、地面を根こそぎ抉り取るかのような一撃で。
「ぐっ！」
私は地面の上を転がり、木にぶつかってようやく止まった。
その腕の中には、しっかりと抱きかかえたアリスの無事な姿がある。
とりあえずはホッと胸を撫で下ろしたが、安心できる状況ではない。
「ついに姿を現したか……」
言って、トールは大剣を引き抜いて構えた。
「まさか本当に、実在しているとは……」

驚きの言葉を呟きながらも、アクエリアスもその手に槍を構える。
そして私も立ち上がる。
「アリス、怪我はないか？」
「う、うん。大丈夫……」
「そうか、ならいい。少しの間、木陰に隠れていなさい」
「うん……でも、お姉ちゃんは？」
「私か？　私なら心配いらない。それに……」
私は剣を抜き、その巨大な影に向き直って言う。

「――この森の主に、聞きたいことがあるのでな」

対して向かい合うは、全身を美しいまでの銀の毛並みに覆った巨大な狼。
全身銀色の中、その瞳だけに真っ赤な緋色が宿っていた。
「ぶしつけで申し訳ないが、一つ聞こう」
私の言葉に、緋色の瞳がわずかに揺れた。
「この森の王、フェンリルとお見受けするが？」
「いかにも。我はフェンリル。狼王フェンリルなり」
そしてそのフェンリルは確かに、人語で私の言葉に答えた。
「ならば我からも問おう。汝ら、何ゆえに我が森へと足を踏み入れた？」
「国内で多発している行方不明者の捜索と、オリビアの花を求めてきた」
「なるほど。世界樹の種子を求める輩は、まだ後を絶たぬということか」
そしてフェンリルは一度目を閉じ、静かに開いた。
「立ち去れ。あれは世界の生まれし時より、我が守護を授かった精霊と神の遺産なり。何人たりとも触れることは赦されぬ」
「そうはいかない。我々にも使命がある、それに何より、人一人の命がかかっているのだ」

「……愚かな。我と戦うつもりか？」
「それしか方法がないのならば、な……」
剣を構え直し、間合いを計る。
その様子で我々が本気だということを悟ったのか、フェンリルは周囲をゆっくりと一瞥した。
「……よかろう」
という一言の後、狼王は剥き出しの牙を光らせて大きく吼えた。

「――人の子よ、汝らの力を見せてみろ。我も全力で応えよう」

地を蹴ったのはどちらが先だったか。
私達は、神の使いに刃を向けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５４：戦う理由

まず聞こえたのは、風を切り裂く音だった。
薙ぐように、そして払うように、かつ暴虐に、容赦のない狼王の爪痕は軽々と地面を抉り取った。
「くっ！」
衝撃で体後と吹き飛ばされそうになるのを、後ろに飛び退くことで相殺する。
が、体勢を崩されたことには変わりはない。
そこを狙い済ましたように、フェンリルはその大きな体躯の重さをまるで感じさせない速さで地を蹴り、突進してきた。
雄叫びのような声が響き、その牙を剥き出しにして噛み砕かんと言わんばかりに襲いくる。
私は剣を構えたまま、体を大きく横に転ばせた。
へたに体勢を維持したまま回避するより、いっそのこと転がってしまった方がはるかにかわしやすいと判断したからだ。
私が地面を数回転がり、起き上がるまでの間、フェンリルの側面からは大剣を構えたトールが大きく振りかぶった。
「食らえ！」
フェンリルの爪と及ばずながらも、風を切る轟音を響かせながら大剣が振り下ろされる。
重さも相当なものであり、扱うには常人の数倍の筋力がなくては無理といわれる大剣、クレイモア。
クリムゾニアの騎士団の中でも、トールほどに大剣を使いこなす者は他にいないだろう。
剣の重さと筋力の強さ、加えて振り下ろす際の速度による加重。
これだけの攻撃力を兼ね備えた一撃は、たとえ大木の幹であろうとあっさりと両断するだろう。

が、その重い一撃さえも、フェンリルに言わせれば大したものではなかった。
「ふむ」
頷くようにそう呟き、フェンリルはその爪であっさりと一撃を受け止めてしまった。
まるで鉄の塊でも切り付けたかのような、金属同士がぶつかりあう音がした。
音は波紋のように共鳴をし、耳鳴りさえ覚えるほどのものだ。
「ぐぅっ！」
一撃をあっさりと弾かれたトールが、わずかばかりによろめいた。
「いい一撃だ」
と、それを賞賛するかのようにフェンリルは語る。
「だが、人の子にしてはの話に過ぎん」
そして弾いた爪を、今度はトールの鎧目掛けて大きく振り抜いた。
ガゴンという鈍い金属音がして、直後にトールの体はまるで球のように宙を舞っていた。
「トール！」
咄嗟に私は叫んだが、とても助けに回れる距離ではない。
このまま頭から落下すれば、怪我どころの話ではすまない。
しかし空中という領域では、人のみならず多くの生物があまりにも無抵抗だ。

緩やかな放物線を描き、トールの体が静かに地面へ向けて落下する、その刹那。
「大地の流動よ、此処に集え」
詠うような言葉。
それは、呪文だった。
「アースクラフト！」
アクエリアスがそう叫ぶと同時に、目の前の地面がまるで噴水のように隆起した。

そしてそれは、落下するトールの体をしっかりと受け止め、やがて砂のようにゆっくりと崩れて消えていった。
「ほぅ、魔術も使えるか」
これまた感心したように、フェンリルはその様子を覗いながら呟いた。
「すまんアクエリアス、助かったぞ」
「礼は後回しで結構。さぁ、構えてください」
言われるがまま、トールは再び大剣を構えなおしてフェンリルに向き直る。
と、そのときになって気付いた。
トールの鎧の表面には、フェンリルの爪によって何本かの切り裂かれた痕がくっきりと残っていた。
鋼鉄を何重にも編み込んで作られた特殊な鎧を、いともかんたんに引き裂く寸前まで追い詰めている。
もしもこの鎧が身を守っていなければ、今頃トールの体は肉を引き裂き骨を砕かれ、見るも無残な死体と成り果てていたことだろう。
「……っ！」
考えただけで背筋に悪寒が走る。
私はこのとき、ようやく理解した。
目の前のこのフェンリルという存在は、人間とか獣とか、そういう言葉でくくりきれるようなものではないのだと。
これは確かに、精霊と神の加護を受け、世界誕生のそのときから、永きに渡ってこの大地に生を司られた崇高なる存在。
言い換えれば、もはや神の化身と言っても過言ではないだろう。
それほどの強さと、威圧感、存在感を持ち合わせている。
「ふむ」
そしてまた一つ、フェンリルは小さく頷いた。
「肉体、精神、共によく鍛えられた者達のようだ。人の子でありながらそれほどの力を身に宿すとは、驚嘆に値する」
そしてフェンリルは一度、構えを解いた。

「なおのこと、後の世界にお前達のような者はなくてはならぬ存在となろう。引くがよい。命までは取るまい」

それは遠回しながらも、フェンリルが我々の力を認めたということに他ならなかった。

だからこそ、無益な命の奪い合いをせずに、大人しく引き上げろと、そう言っているのだ。

残念だが、実際にそのほうが懸命な判断だったのは間違いない。

私も含め、多くの者はすでに騎士として十分な強さを持っている。が、その力をいくつまとめてぶつけたところで、恐らくこの狼王の前では赤子同然の扱いを受けることだろう。

面と向かい、その目を見たから分かる。

これはもう、強さや力の次元が違う。

言葉どおり、それはまさに神と人との差にも等しいほどのものだった。

勝ち目などという、そんな甘い希望は何一つ見当たらない。

逃がしてくれるというのなら、その言葉に素直に従わない理由も見当たらない。

だが、仮にそうだとしてもだ。

「……恐縮な言葉ではあるが」

「……ええ。確かにその通りですが……」

「……そこで素直に引き下がれるほど、騎士という称号は安いものではないのでな」

私達は三人揃って、再び武器を構えた。

「……口で言っても無駄ならば、止むを得まい。その命、賭す覚悟で闘うがいい」

やや腰を落とし、フェンリルも迎撃の態勢を取る。

かたや我々は三人がかりとはいえ、優劣の差はあまりにも明らかだ。

こんな急場では策も練りようがないし、正直八方ふさがりもいい

ところである。
だが、そうだとしてもだ。
「……」
私は一度だけ、背中を振り返った。
「あ……」
背後の木の陰に、兵と共に身を隠すアリスの姿が見えた。
不安げな色を隠せないその目に向けて、私は小さく微笑んで、すぐに向き直った。

「狼王、フェンリルよ」
私の言葉に、フェンリルが耳を傾ける。
「私達は、少なくとも貴方と争うためにここにいるわけではない。行方不明の者達の消息を追い、オリビアの花を採取しにきただけだ」
「そちらの事情など、我には関係のないこと。ここは我が森。魔境にして聖域なり。そこに許可なく踏み入ることは、それ相当の覚悟が必要という、ただそれだけのこと」
「だが、そうも言ってられないのだ」
剣先を向け、私は続ける。
「少なくとも今、こうしている間にも失われるかもしれない一つの命が確かにあるのだ。それを黙って見過ごすことなど、私にはできない」
「……」
フェンリルは答えない。
ただ、その視線が私を超えてその後方に佇むアリスの姿を端に捉えているような気がした。
「無理にでも押し通る。この判断に変わりはない」
「……ならば、その力で押し進んで見せよ」
「言われるまでも……」
私は剣を構え、一直線に地を蹴った。
踏み込むその足に、ありったけの力と、もう一つの魔力を注ぎ込

んで。
「な……」
それは、狼王が漏らした初めての驚愕の言葉だったのかもしれない。
それのそのはずだろう。
フェンリルの正面に立ち、確かに地を蹴ったはずの私の姿は今、すでにそこにはない。
ただ、そこには確かに地を蹴った靴跡が残っていた。
では、私は今、どこにいるのか？
「……この速さ、まさか……！」
そう言いながら背後を振り返るフェンリルの視界に飛び込んだのは、剣を掲げて振りかぶる私の姿に他ならなかった。
「ないっ！」
そして振り抜いた斬撃は、狼王の背中を切り付けた。
「ぐ……っ！」
わずかに苦痛に歪む声。
剣先にはわずかだが赤い血が付着し、今の一撃が多少なりともダメージを負わせたことを物語っている。
「むぅ……」
目つきを鋭くし、フェンリルは威嚇のような眼差しで私を睨みつけていた。
その目には、驚愕のほかに疑問の色も見て取ることができる。
その目に向けて、私は今一度剣先を向けて言う。
「――人の子をあまりなめてもらっては困るな、狼王よ」
これは死闘ではなく、私闘である。
ただ、そこにあるゆずれない理由と、木陰で見守る少女の想いだけは、ただ一つの確かなものだった。

「……なるほど。やはりお前達は、加護の欠片を受け継ぎし者だったか」

フェンリルは言う。

負った傷は浅く、身体能力に関して大きな影響を及ぼすほどのものではなさそうだ。

「……よかろう」

そしてフェンリルは、雄々しいその目で私達を見渡す。

「――人の子らよ。その力に敬意を評し、我も真の力で戦わせてもらおう」

そして、周囲にわずかな変化が起き始めていた。

あれほど奇麗に晴れた霧が、また少しずつ集まりつつある。

そのことに、私達は全く気付いてはいなかった。

少なくとも、このときは、まだ……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５５：力の差

変化は突然だった。
それは天気が晴れから曇りに変わるような、そんな自然さとはまるで別物で、明らかに人為的な変化だった。
「……何だ？」
最初に気付いたのは、その一つの出来事だった。
戦い始めてしばらく経過し、ようやく体がフェンリルの素早い身のこなしにどうにかついていくようになった頃だ。
私は眼前に繰り出されたその爪の一撃を、間違いなくギリギリ間合いの外へ飛び退くことで回避した……はずだった。
だが。
「ぐあっ！」
実際はそうではなく、それもまさに紙一重の差ではあったが、フェンリルの一撃は私の鎧の胸部をなぞるように削り、衝撃で私の体はあえなく後方へと吹き飛ばされてしまう。
「シルフィア！」
反対側からトールの声が響く。
「……大丈夫だ、心配ない」
呻き声を押し殺しながら、私はわずかにふらつきながら立ち上がる。
かすっただけの一撃だというのに、衝撃は鎧を突き抜けて肉体まで十分に届いていた。
致命傷と呼ぶのは程遠いものではあったが、ジクジクとくすぶるような鈍痛が私の胸には残っていた。
さすがは狼王と呼ばれ、聖獣と称されるだけのことはある。
そもそもこうして神の使いである存在と相対するなどと、私はこれまでの人生の中で夢にも思ったことはなかった。

それがこうして、今まさに現実として目の前で繰り広げられている。

それは光栄極まりないものなのかもしれないが、反面、実に恐ろしいことなのかもしれない。

……いや、よそう。

少なくとも今は、そんなことを考えている余裕などはこれっぽっちもありはしない。

かすっただけでこの威力、直撃すれば間違いなく絶命に至る傷は避けられそうもない。

「……っ！」

再び剣を構え、私はフェンルに向き直る。

対するフェンリルは私を正面に見据えながらも、左右に位置するトールとアクエリアスにも警戒を怠ってはいない。

特に、魔術を使用するアクエリアスに関しては細心の注意を払いながら、自らの攻撃の間合いのちょうど一歩ほど外の距離を保ち続けている。

その証拠に、アクエリアスは先ほどから得意とする魔術を一切使用できないでいた。

その理由が、両者の間合いだ。

どのような魔術であれ、術を行使するには詠唱という時間を伴う。

その間、術者は極めて無防備な状態になることは必至だ。

つまり、どれほど強力な魔術を体得した者でも、結果としてその魔術が発動に至らなければそれは恐れるに足りない。

熟練の魔術師や、稀代の天才とも呼ばれる者になれば、その詠唱という過程をゼロに、あるいは限りなくゼロに近い状態で術式を発動させることは決して不可能ではない。

しかしそれは、数十年という気の遠くなるような歳月の中、自らの生涯全てを魔術に捧げることと同等であり、なおかつ生まれ持った天賦の才を加えて初めて実行可能となると言っていい。

残念だが、アクエリアスにそこまで大きな技術は備わってはいない。

それでも、槍における戦術と魔術の組み合わせによる戦法は、確かにずば抜けた効果をもたらすものではある。

そのアクエリアスでさえ、今だけは詠唱に意識を集中することさえできはしない。

鋭く刺すようなフェンリルの視線が、常に警戒の色を発していたからだ。

「は、ぁっ！」

ならばこちらから仕掛けてやるまでだ。

私は一足飛びで間合いを詰め、フェンリルの額目掛けて真っ直ぐに剣を振り下ろす。

かたやフェンリルは、それを迎え撃つかのように一瞬腰を屈めたが、すぐにその動きを停止して、わずかに横合いへと身を寄せた。

それというのも、タイミングをほぼ同じにしてトールが横方向から切りかかっていたからだ。

わずかでも警戒心を解いていれば、恐らくトールの動きには反応できなかっただろう。

私とトールの仕掛けたタイミングはまっさに絶妙で、二方向同時からの斬撃を同時に回避することは容易ではなかった。

だが、それでもフェンリルはその身のこなしでそれを成し遂げていただろう。

少なくとも、この場にアクエリアスがいなければそうなっていたはずだ。

それをしなかったのは、腸外トールの二方向同時攻撃に反応を集中させてしまえば、その分だけアクエリアスに魔術詠唱の猶予を与えてしまうことになるからだ。

単純な肉体面での基礎体力、瞬発力では、私達はフェンリルの足元にも及ばないだろう。

だがその反面、魔術による攻撃は効果的だ。
魔術とは元来より、精霊の力の一部を借りて行うものである。
精霊、つまり神の使者ともいうべき、人を超えた存在に当たる者。
それらの力を一部とはいえ受け、行使する魔術の威力は半端なものではない。
単純な威力の面で見ても、それは剣で切り伏せる一撃の重さの数十倍以上のものになる。
フェンリルとて、精霊の加護を受けた神の使いだ。
魔術の恐ろしさはよく理解しているだろう。
だからこそ、こうして今もアクエリアスに警戒の目を向けながら、なおかつ私とトールの一撃を回避しようと無理な体勢に陥っているのだ。
「はぁっ！」
まず最初に、横薙ぎのトールの一撃が空を裂いた。
が、惜しくもその一撃はフェンリルの銀の体毛をいくばくか切り飛ばしたに過ぎない。
手応えのなさに歯噛みするトールだが、しかしそれは決して無駄なことにはならない。
その一撃のおかげで、フェンリルはわずかながらにもその体勢を崩したのだ。
そして今なお、アクエリアスに対する警戒は解くわけにはいかない。

それを逆手に取り、今度はアクエリアスが仕掛けた。
魔術の詠唱を始めるかと思わせ、全くの予想外である槍による中距離からの物理攻撃。
「はっ！」
真っ直ぐに射抜くように突き出した矛先は、しかしフェンリルの背を浅く切り裂いただけに留まった。
「むぅ……」

が、その連続の攻めによってフェンリルはわずかに唸りを上げた。
傷そのものは大したことではない。
もっとも重要なのは、この最後の上空からの私の一撃だ。
「もらった！」
滞空時間を終え、重力に引き寄せられるままに私の体は落下する。
同時に、両手で握るその剣をただ真っ直ぐに、大木を真っ二つに切り裂くかのように振り下ろす。
狙いはフェンリルの額。
だが、恐らくこれほどまで崩れた体勢でもフェンリルはその体を動かすだろう。
しかしそれでもいい。
額への一撃を免れたとしても、今はその巨大な体が的として大きすぎるのが災いだ。
首筋か肩口か、どちらにしても深手を負わせることはできる。
「食らえ、フェンリ……」
その振り下ろす一撃を確信して、私がそう口にしかけたときだった。
「な……」
突然、目の前がぼやけた。
いや、それは少し表現が正しくないかもしれない。
正確に言えば、目の前にいるはずのフェンリルとの距離感が、全くつかめなくなってしまったのだ。
迷いを隠せないまま、しかしそれでも私の振り下ろす剣は止まることを知らない。
剣先が下り、もうあと少しでフェンリルの額を切り裂く。
という、まさにその瞬間だった。
今度という今度こそ、その変化は起きた。
――私の目の前から、フェンリルの姿が煙のように消えてなくなった。

「……っ！」

その目の前で起きた出来事に、私は剣を振り下ろすことを忘れてそのまま地面へと着地した。

「な、何が起こったというのだ？」

私は目の前を向き直る。

しかしそこには、やはりフェンリルの姿がない。

いや、それだけではなかった。

決して遠くない場所にいたはずのトールとアクエリアスの姿までもが、いつの間にかどこにもいなくなっていた。

「これは、一体……」

わけがわからなくなる。

何が起こったというのだろう？

と、考え込み始めたその直後、目の前を漂う灰色のそれに私は気付いた。

「……これは、まさか……霧か？」

その通りだった。

いつの間にか、私の周囲全体を包み隠すほどの膨大な量の霧が立ち込めていた。

深く濃く、どこか冷たさと息苦しささえも覚えさせるような灰色の霧。

この森の周囲の立ち込めていたものと比較しても、その密度は計り知れないほどに大きい。

「……なぜだ？　なぜ今頃になって、こんな霧が……」

一人呟く私の耳に、答えるようにその声は響いた。

「勘違いをしているようだな、人の子達よ」

「……フェンリルか？　くそっ、どこだ！　どこにいる！」

周囲を見回すが、分厚い霧に包まれたそこはもはや隔絶された別の空間のようだった。

森の中だったはずなのに、周囲にはもう木の一本も見えはしない。
自分の体さえも、満足に視認することはできない状態だ。
「霧に隠れて戦うつもりか？　卑怯者め、姿を見せろ！」
「何度も言わせるな。それが勘違いだといっているのだ」
「勘違い……だと？」
「……どうやら、気付くには至らなかったようだな」
フェンリルはどこか穏やかな口調でそう呟き、言葉を続けた。
「思い出してみるがいい。我が森がなぜ、狼王の住処と呼ばれ、常に深い霧を携えているのかを」
「……なぜ、だと？　この森は気候や天候、湿度やその他の様々な条件が揃って偶発的にできた、天然の迷宮ではないのか？」
「それが勘違いだと言っているのだ。そもそも、この世界に偶然というものは何一つ存在しない。例えどのような結果であろうと、結果が形となったからにはその出来事は必然なのだ。ゆえに、我が森が霧に包まれ続けているのも偶然が重なってのことではない。全ては必然の上に成り立つのだ」
「……っ、何が言いたい、フェンリル……」
「まだ分からぬか」
そう嘲るように言い放ち、そして途端に空気がわずかに変わった。
「この森が霧に包まれ続けていることも、今こうして主の前に霧が立ち込めているのも、全ては必然なのだ。しかし、それは必然を通り越して当然のこと。なぜなら……」

そして私は、わずかに背後から隙間風のようなものを感じた。
壁にある亀裂のように細い隙間を、風が通り過ぎるような微かな音。
それがまるで、誰かの弱々しい息遣いのように思えて……。
ゆっくりと、私は背後を振り返った。
そこに。
「気付いたか？　だが、やや遅い」

銀の体毛をなびかせた、フェンリルが立ちはだかっていた。
私は急いで剣を強く握り締め、構えようとした。
しかしその動作の倍は早く、フェンリルの言葉が耳に届く。

「――我が力は、霧を操る力。言い換えれば、我こそ霧そのもの。ゆえに、霧に切るも裂くも貫くも通じはせぬ。これこそが、世界創世の頃より神と精霊に与えられり我が真の力なり」

その言葉を言い終えるか否か、はたまた同時か。
自ら生み出した霧さえもまとめて切り裂くように、音もなく繰り出された爪が私の体を襲った。
痛みを忘れるほどの衝撃。
自分の体が吹き飛ばされているのだと気付くのに、どれだけ時間が掛かっただろうか。
次に襲ってきた衝撃は、背骨がギシと鳴る不快な音と、胃の中からこみ上げてきてたまらずに吐き出した鉄の味だけだった。
木の幹に勢いよく叩きつけられた私は、激痛の中で閉じかけた瞳の奥に、改めて銀の聖獣の姿を見ていた。
霧が集束していく。
煙が一点に吸い込まれていくように、全ての霧がフェンリルへと戻っていく。
すでに薄れ掛けた意識の中、私は激痛に抗っていた。
そして、否が応でも思い知る。
これが、人と聖獣との、いかんともしがたいほどの力の差であることを……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５５：力の差（後書き）

どうも、お久しぶりです。
作者のやくもです、こんんちは。
先週からお盆を利用して里帰りしていたため、更新の時間が大きく開いてしまいました。
まずはそのことについて、この場を借りてお詫びいたします。
楽しみにしてくださっていた皆さん、どうも申し訳ありません。
今後はいつもどおり、大体２．３日置きの更新をメドに通常連載をしていきますので、今後もよろしくお願いいたします。
残暑が厳しくなってきました、夏バテなどしないように、皆さんもお気をつけて。
それでは、これで失礼します。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５６：価値観

深い霧の中、アリスはふいにそんな声を聞いたような気がした。
「……お姉ちゃん……？」
ポツリと、独り言のように呟く。
目の前にははっきりと分かるほどに厚く、濃い霧の壁が立ちはだかっていた。
灰色一色に染まった視界の中では、体は正体不明の悪寒さえも感じ始めてしまうほど。
木陰にそっと身を潜めたまま。アリスは少しだけ背伸びをして、霧の向こう側を覗いてみる。
が、やはりそこにも分厚い霧の壁が往生し、一寸先の景色さえまともに映し出してはくれなかった。
「……」
しだいにアリスの中で、不安めいた何かが大きくなっていく。
今しがたに聞こえた、半ば幻聴かとも思えるようなその小さな……悲鳴のような叫びは、今もはっきりと耳の奥にその残響を残している。
「おい、これは一体どうなっているんだ？」
「分からん。だが、こう霧が深い状態では、隊長達の様子もロクに確認できんぞ」
「まさか、隊長達に何かあったんじゃ……？」
「バカを言うな。あの人達に限って、そんな万が一など起こるはずは……」
横合いでは、何人かの兵達が沈黙に耐え切れなくなってそんな会話を繰り返し始めていた。
その会話は、否が応でもアリスの耳に届いてしまう。
難しいことは一切分からない。

けれど、それを通り越すほどに簡単なことは分かる。
「お姉ちゃんたちが、危ない……？」
それは予感か、それとも確信か。
どちらでも構いはしない。
ただ、一度考え始めてしまえば、事態が最悪の展開に辿り着くことを想像するのは非常に容易かった。
ギュッと、アリスは無言でその小さな手を握り締め、口をつぐんだ。
イヤだ、イヤだ、イヤだ。
お姉ちゃんたちが傷付いてしまうなんて。
イヤだ、イヤだ、イヤだ。
だって、約束したんだもの。
イヤだ、イヤだ、イヤだ。
怖いのはイヤだ。
苦しいのはイヤだ。
けどそれ以上に、一人になるのはもっとイヤだ。
約束したのに……。
守ってくれるって、約束したのに……。
だけど、きっと自分には何もできない。
もしかしたらこうして迷っている今も、お姉ちゃん達はとてもひどいケガをして、苦しんでいるかもしれないというのに。
何も、できない……。
「……っ」

幼さゆえに、アリスが感じる無力感は人一倍強いものだった。
自分が無力だから、病気のお母さんを助けることもできない。
傍にいたって、きっと何もできることはない。
逆に、傍にいればいるほど苦しさが伝わってきて、泣き出してしまいそうになる。
そんな自分は、とても無力だ。

嫌いだ、大嫌いだ。
グッと目を閉じた。
結局できることといえば、こうして手を重ねて祈ることくらいのもの。
「お姉ちゃん、お願い……死なないで……」
声にならない声で、呟く。
心のどこかで、分かっていた。
先ほど耳に届いた声は、間違いなく苦痛を思わせる悲鳴だったこと。
きっとお姉ちゃん達は今頃、ひどいケガをしているに違いない。
だけど、それが分かったところで何ができるの？
この深い霧の迷路を抜けて、仮に合流できたとして、きっとそこまでだ。
誰かを守る力も、誰かを癒す力も、ありはしない。
あまりにも無力な自分。
その事実に、涙が出そうになる。
さらに強く瞳を閉じた。
奥歯を噛み締めて、悔しさと歯がゆさで溢れる感情を無理矢理に押し殺して、それでもやはり祈ることだけは続けながら……。

と、ふいにアリスは目を開けた。
「……あ……」
ポツリと呟く。
それは、微かに吹いた風に乗って運ばれた、甘い果物のような香り。
それは、どんな難病や大怪我もたちまち治してくれるという万能薬、オリビアの花の香り。
「……」
その匂いが確かにあった。
こんな霧深い迷路の真っ只中でも、香りだけは偽りなくその場所

をアリスに教えてくれていた。
「……そうだ。あのお花があれば、お姉ちゃん達を……」
助けることができるかもしれない。
そしてそれはきっと、今の自分にできる一番のことに違いない。
アリスはそう思い立ち、そして決意した。
幸い、周囲の兵達の姿も霧に遮られて互いに認識するのは難しい。
少々の足音を立てても、恐らく気付かれることはないだろう。
ゴクリと、アリスは一つだけ息を呑んだ。
やれることがあった。
できることがあった。
そしてそれは、きっと誰かを救うことに繋がる。
そう、信じて……。

――幼すぎる少女は一人、霧の向こう側を目指して静かに走り出した。

血の味が口の中一杯に広がっている。
吐き出しても吐き出しても、胃の奥底からマグマのようにこみ上げてくる。
気持ちが悪い。
吐き気がする。
痛覚を通り越して、不快感だけが体の至るところを支配していた。
まだ、目は閉じてはいない。
しかし開いているというのは、あまりにも無残、かつ無様なものだろう。
今の私は、こうして木の幹に体を寄り添わせることでどうにか大地の上に立っているのだから。
自分でも信じられないほどにこの体は弱々しく、あちこちが小刻

みに震え出してるのがよく分かった。
体はすでにほとんど言うことを聞かない状態だ。
身を包む鎧の大部分は砕け、爪痕が刻印のようにくっきりと刻み付けられている。
「……は、あ……っ、はぁ、はぁ……っ……！」
絶え絶えになる呼吸。
本当に酸素を取り込んでいるかどうかすら怪しいところである。
ガクガクと膝が哂い、かろうじて握り締めた剣も、すでに手の中から零れ落ちそうになっている。
ただでさえ霧の中で視界は最悪だというのに、負ったダメージが後押しするかのように、さらに視界を狭くする。
グラグラと揺れる視界。
意識は朦朧として、空と大地の境界すら分からなくなり、大地は崩れ、空は今にも落ちてきそう。

「……まだ立ち上がるか」
そんな私を見据えながら、銀の体毛を携えた聖獣は静かに口を開いた。
「……」
しかし、私に返す言葉はない。
間隔の狭い呼吸を繰り返しながら、ぼやけた視界の先に映るその巨大な体躯を見返すのが精一杯だった。
「もうよい。斃れろ。主らはよく戦った。人の子でありながら、よもや我にこれほどの苦戦を強いるとは、その力は賞賛に値する。そのまま斃れるのならば、命までは取るまい。次に目覚めたときには、今までに起こったこと全てを忘れているであろう」
「……」
その言葉さえも、途切れ途切れにしか私の耳には届かなかった。
それでもどうにか理解できたのは、やはりフェンリルとて神と精霊の加護を受けた、言うなればこの大地の守り神とも言うべき存在。

そうである以上、無益な殺生は好むところではないのだろう。
それが自愛なのか慈悲なのかは分からないが、人を超えた存在である以上、その力を持て余すことは必然だったのだろう。
そしてその力は、想像以上のものだったことは言うまでもない。
この身に刻まれた痛みと傷が、それを鮮明に物語っていた。
すでに、トールとアクエリアスはやや離れたところで意識を失い倒れている。
死んではいない。
が、放っておけばそれも時間の問題だろう。
私は……私達は、決して弱くなどはなかった。
だが、それは強さと呼ぶには恐らく、あまりにもお粗末なものだったのだろう。
少なくとも、聖獣であるフェンリルから見ればそれは、赤子の手をひねるほどに簡単なこと。
そんなことに気付かなかったわけではない。
ただ、力の差を明らかに測り損ねてしまっていた。
勝てない。
結論はとっくに導き出されていた。
しかしその言葉は、決して口には出せなかった。
それはもう、騎士としての誇りとか、意地とか、そんなものなど一切の関係もなく。
ただ、理由があるとすればそれはたった一つ。
たった一つの、小さな約束。

「――私が、お母さんを助けるの！」

そう言った、幼すぎた少女。
裏表のない目で、ただ真っ直ぐに私の目を見て。
その約束を破ることなど、誰ができようか。
だから、私はまだ……。

――倒れるわけには、いかない……。

「……人とは、どうしてここまで悲しい生き物なのか」

悲しげにフェンリルは呟いた。

「先に起こった二国間の戦争もそうだ。誰一人として同じ朝陽を迎えることなどなかったであろう。顔も声も知らぬ者に、ある日突然殺される現実。朝に生まれ、夜に死ぬ。そんな理不尽極まりない世界で虚しく生きるくらいならば、いっそ滅んでしまおうとは思わぬのか？」

「……」

答えは出なかった。

フェンリルの言葉は、一つの現実の受け入れ方として間違っていない。

現に私は、今でも当時の血生臭い悪夢にうなされることだってある。

そうすると、真夜中に唐突に目が覚める。

背中は寝汗で濡れ、それが肌にまとわり付く感触が、まるで返り血を浴びているかのように不快で仕方がない。

爪を立て、自らこの体をズタズタに引き裂いてしまいたいと思ったことだってある。

だけどそれは、結局はただの逃げ口上にしかならないのだ。

「……フェンリル、よ。貴方の言うことは、きっと……正しいのだろう」

途切れ途切れの言葉で私は言う。

「……人は……私も含め、先の戦争で多くの命を奪い、そして奪われた。私とて、例外では……ない。私がこうして生きていることが、私が他の数多の命を切り伏せてきたという、何よりの証拠だ……」

「……」

「そうやって……無益な奪い合いがようやく終わって、この世界にも平和の兆しが見え始めたのは、本当に最近のことだ。無論、今も各地で戦争の名残はいくらでも残っている。こうしている今も、どこかで誰かが命を落としているかもしれない。真の意味での平和など、もしかしたら永遠にやってくることはないのかもしれない……」

私は支えにしていた木の幹から手を離し、自分でも驚くほどにおぼつかない足取りで一歩前に出た。

「けれども……」

剣を地面に突き刺し、私は続ける。

「そんな犠牲の上にようやく築き始めた……平和には程遠い、こんな世界の中でも、平和に生きようとする人達は大勢いる。今を生きる彼らのその多くは、先の戦争で消えない傷を負った者ばかりだろう」

剣を引き抜き、震える手でそれを握り締めた。

「そんな者達の間に、新たな命が生まれた。戦争という言葉さえ知らない、無垢な命達だ。取り戻しかけた平和の中でその子らは育ち、やがてこの世界の中心になっていく。間違えることもあるだろう。失敗の連続など、今からすでに見えている分かりきったことだ。だが、そうだとしても……」

引き抜いた剣の切っ先を、砕けかけた腕に渾身の力を込めて掲げる。

「――目の前でただ一言、『助けて』と、そう叫ぶ声を、私は絶対に見過ごすことはできない……！」

「……それが、主の導き出した答えなのだな？　その言葉は、未来永劫、その体が朽ち果てるまで変わることはないのだな？」

「無論だ」

私は即答した。

腕が震え、指先が震え、剣が震える。

「……」

フェンリルは静かに目を閉じた。

何かを考え込むかのように、ゆっくりと。

長く短い沈黙が終わり、フェンリルは目を開けた。

そして、何事かを口にしようとしたその瞬間。

「――――っ！」

そんな、声にならない確かな悲鳴が、森の中にこだました。

どこかで聞き覚えのある、幼い少女の悲鳴が……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５７：光の射す方へ

森の奥。
深い霧を超えたそこに、淡く光る場所があった。
暖かく、そして仄かに甘い香り。
「あ……」
アリスは立ち止まり、わずかに口を開いた。
その視線の先に、白く輝く花が咲いていた。
その輝きは、太陽の明るさにも星の明るさにも、月の明るさにも似ていない。
ぼんやりと、今にでも消えてしまうほどに淡くはかないその光はしかし決して消えず、ろうそくの炎のように静かに揺れていた。
「このお花があれば、お母さんは……」
助かるに違いないと、アリスはそう思った。
そして止まった足を再び動かし、深く広い森の中で唯一の光が集うその場所……聖域の中へ、足を踏み入れた。
それは、たった一つの小さな願いのため。
母親を助けたいと願う、幼い少女の祈り。
だが。
たったそれだけのことも、古の契約には反するものだった。
聖域への侵入は、即ち神の領域へ足を踏み入れることを意味する。
侵入を拒む力が作用した。
古き時代の、神と精霊の間に繋がれた盟約の鎖により、聖域は今一度その牙を向く。
たとえその行き先が、どれだけ幼い少女であったとしても。
動き出した牙は、止まることを知らない。
そうとは知らず、アリスはさらに歩みを進める。
目と鼻の先に、探し求めていたものがあるのだ。

そしてそれさえあれば、母親を救うことができる。
希望しか見えていなかった。
時を同じくして、その身に襲い掛かるであろう神罰のことなど、知る由もなかった……。

「あの光、まさか……」
やや遠くに見えるその光の柱を見ながら、フェンリルは呟いた。
その声色はどこかくぐもっているようで、不測の事態に対するわずかな動揺を表しているかのようだ。
「馬鹿な、あの聖域に踏み込めば、ただですむはずがない」
「……？」
よろめきながら、私はその声に耳を傾けた。
フェンリルと同じ視線でその方角を見ると、確かにそこには神秘的と言わざるを得ない光の柱が、真っ直ぐに天に向けて立ち上っているのが目に入った。
それはこうして遠くから見る限りでは、ひどく美しく幻想的なものに見えた。
淡くはかなく立ち上るその白の光は、見るものの意識を奪い去ってしまうほどのものだ。
事実、わずかばかりだが私も見とれた。
体中の痛みを一時的に忘却し、意識を奪われていた。
が、それも一時のこと。
すぐに我に返ると、耳の奥に残ったあの悲鳴の残響が思い出される。
「……あの声、まさか……」
嫌な予感が脳裏をよぎった。
湧き上がった不安は次々と最悪の結末をまくし立てて、全ての物事を悪い方向へと流していく。

聞き間違いなんかじゃない。
空耳なんかじゃない。
たった今、この耳の奥に響くほどに届いたあの声は、間違いなく……。
「アリス……」
その名を呟き、衝動的に私はその体を走らせた。
全身を裂くような痛みが走るが、そんなものに構っている余裕はない。
一秒でも早く、あの光の柱の元へ行かなくてはいけない。
さもなくば、私はまた大切な何かを失うことになるような、そんな気がして……。
「アリスッ！」
再びその名を叫んで、私は走り出した。
正面にフェンリルが立ちはだかるように立っていたことなど、もはや忘れて。
そして案の定、フェンリルはその巨大な体を壁にするように私の行く手を塞いだ。
「待て！　どこへ行く？」
「どけ！　お前に構っている暇などない！　早くしないと、アリスが……！」
「……アリス、だと？」
フェンリルの返答など、もはや私の耳には届いていなかった。
焦りと不安だけが募り、手遅れという言葉が私のそれをさらに増幅させた。
急げ、急げ、急げ。
走れ、走れ、走れ。
また、失うのか？
また、守れないのか？
誓ったはずだろう。

必ず守って見せると、誓ったはずだろう。
所詮それは口約束程度のものなのか？
ああ、口では何とでも言えるだろうさ。
根も葉もない偽りだらけの言葉なんて、吐いて捨てるほどあるさ。
「どけ！　どいてくれフェンリル！　手遅れになる前に……！」
いつしか私は叫んでいた。
目の前で起きている事態に、冷静さは全く残っていなかった。
ただ、思い出すのはいつかの日々の赤い記憶。
自分の中の正義を押し通して、罪も罰もない、顔も声も知らない誰かの命を切り伏せ続けた頃。
ソレガワタシノセイギダ。
誰かの命を奪うことが？
ソレガワタシノセイギダ。
奪う理由なんてどこにもないのに？
ソレガワタシノ、セイギダ……。
そうやって奪い続けて、何を得たの？
ソレガ、ワタシノ、セイギ、ダ……。
奪ったのは温もり。
得たのは哀しみ。
誰も救えず、誰にも救われず、ただただ剣を振るうだけの繰り返し。
肉を切り、骨を断ち、血を浴び。
むせ返るような戦火の中、何を思っていたの？
ワタシ……ハ、ワタシハ、タダ……。
燃え盛る荒野の中心で、返り血を浴びた鎧は炎のように赤く映え、剣先から滴り落ちる赤い雫を見つめながら、色のないその瞳は、一体何を映し出していたの？
……ワタシハ、マチガッテナド……イナイ。
……本当に？
……ワタ、シハ……。

ならどうして、その瞳からは……。

――止まることを知らぬ、透明な雫が流れ続けているの……？

「……どけ、フェンリル」

静かに私は告げた。

自分でも恐ろしいほどに思える、低く暗い、冷たい声色だった。

「……」

フェンリルは答えない。

それぱかりか、どこうともしない。

ただ、何か見通すかのようなそんな視線で、私のことを見返しているだけだった。

時間がない。

このままでは、私は確実に一つの命を見殺しにしてしまう。

それはできない。

それだけは、絶対に。

例え何を犠牲にしても、守りきらなくてはいけない。

失う痛みは、もううんざりだ。

「――どけぇぇぇぇっ！」

叫び、届かないと知ってなお、剣を振るった。

そして……。

ズブリ、と。

肉を突き破るその耳障りな音と感触が、私の意識を引き戻した。

「……な」

見ると、私の突き出した剣はフェンリルの腹部に突き刺さっていた。

真っ赤な血が剣を伝って流れ、柄を握る私の両手をわずかに赤く染め上げた。

「……なぜ、だ……？」
自分で言っておきながら、その問いにわけがわからなくなる。
「なぜ、避けなかった？」
「……」
フェンリルは痛みのせいか、それとも別の理由か、一度だけどこか辛そうに目を閉じた。
そしてそのまま、静かに口を開く。

「主は、これまでにどれだけの人を切った？」
「……な、に？」
私はわずかに怯んだ。
その問いが、何もかもを見透かしているかのような気がして……。
「……覚えていないな。数え切れないほど、だろう……」
「……そうか」
フェンリルは一度言葉を区切り、目を開けた。
「数え切れぬほどの命を奪っておきながら、今この場でどうしてたった一つの命のためにその身を犠牲にできる？」
「……それは……」
こうしている間にも時間は過ぎていく。
一刻も早く走り出さなくてはいけないはずなのに、どういうわけか私は冷静さを取り戻していた。
「……私はきっと、ずっと許されたいと思っていたのだろう」
剣を握る手を離す。
ズルリと、フェンリルの腹部から剣先が抜け落ち、血に染まった刃はカランと音を立てて地面に落ちた。
「ずっと、許されたいと思っていた。何度も自分に言い聞かせもした。戦争だったのだ、仕方がなかったのだ、と。そうすることが、逃げることだと分かっていても、そうする他なかった……」
「……」
「今でも夢に見る。燃え盛る荒野に立ち、名ばかりの正義を振りか

ざして誰かの命を奪うあの景色。忘れたいと願うほどに、その光景は色鮮やかな極彩色を見せる」

膝が折れる。

痛みのせいではない。

得体の知れない疲労が、不意に体を襲っていた。

「楽になりたかったのだろう。誰かに許しを乞えば、そして許されれば、この身が犯した罪も罰も、洗い流されると思っていたのかもしれない。決して消えない傷痕だと分かっていても、受け入れる力が私にはなかった」

地面に付いた両手が、土を掻き毟る。

「だからせめて、平和の兆しが見え始めたこの世界では、一人でも多くの人々を救おうと決めた。せめて、この目に映る誰かだけでも救うことができたのなら、それはきっと過去の罪を消し去ってくれると……」

「……実に、身勝手な言い訳だな。偽善と言われても仕方がないほどに、な……」

「……ああ、その通りだ」

「だが……」

そしてフェンリルはなぜか、表情から険しさを取り払って続けた。

「――そのような偽善者も、今の時代には必要なのかもしれんな」

「……フェンリル？」

「我はずっと、この世界を見てきた。人を、獣を、鳥を、自然を。見守ることが、我に課せられた使命だったからだ」

どこか遠くの空を見つめるように、フェンリルは言う。

「見守るということは、言い換えれば見殺しにするということでもある。事実我は、数え切れぬほどの災厄を見て、しかし一切手を出すことはなかった。その点で言えば、我も主もあまり大差はないのかもしれん」

「……」

「課せられた使命は絶対だった。そのために生まれ、これからも永遠に近い生を続けるのだろうと、そう思っていた。しかし……」

フェンリルは視線を戻す。

跪くように地に伏した私を真っ直ぐに見据え、言った。

「――我も待つことに、些か飽いていたようだ。主の意思が、それを教えてくれた……」

「……フェン……」

私が言い終えるよりも早く、フェンリルは続けた。

「立て。人の子よ。そして行くがいい。主の意思が動くままに。我に、人の力とやらを見せてみろ」

フェンリルの巨大な体が、塞いでいた行く手を静かに開いた。

しばし私は呆然とし、しかし何かが吹っ切れたような、そんな感覚に捉われて……。

――落ちた剣を拾い上げ、一気にその道の上を駆け抜けた。

「……神よ、そして精霊よ」

走り出すその背中を見送って、フェンリルは一人呟く。

「人とは、なんとも哀しいものだ。過ちを繰り返し、それを省みずにまた繰り返す。どうしようもなく身勝手で、わがままな生き物だ。だがそれ故に、見えてくるものもあるのやもしれん……」

見送った背中がどんどん遠ざかっていく。

まるでその後姿は、一陣の風のようだった。

「我は今しばらく、人の力を見てみたくなった。この世界を導いていくであろう、無限の可能性のあるその力を……」

どうか、見守ってやってほしい。

と、フェンリルは祈った。

その身に生を与えた、顔も知らぬ神に向けて……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５８：白の女神

光の柱を見上げる。
天を貫くほどに聳え立つそれは、もはや人智をはるかに凌駕した神の遺産だ。
その、光の柱の中。
静かに横たわる、小さな小さな人影一つ。
「アリスッ！」
叫び、私は一度止めた足を再び走らせた。
筋肉が、骨が、神経が悲鳴をあげ、今にも引き裂けそうになる。
だが、それがどうした。
痛みなど、気力でいくらでも振り払うことができる。
そんなことよりも今は、一秒でも早くアリスのもとへと急がなくては……。
「な……」
しかし、それはいとも簡単に阻まれた。
天に連なる光の柱。
それはまるで、外敵の進入を拒むかのように、見えない壁を作り出して内部と外部を完全に遮断していた。
そしてどういうわけか、弾かれる私の体とは別に、横たわったまま動かないアリスの体は光の柱の内部にあった。
「……っ、くそっ！」
理由を詮索する暇はない。
この壁を破壊してでも中へ進まなければ。
が、それは実に虚しい願いだった。
どれだけ叩きつけても、殴りつけても、見えない壁はヒビはおろか軋む音さえ響かせない。
そればかりか、打ち付けた衝撃はそのまま私の体へと反射するか

のように跳ね返ってきていた。
殴りつけた両手の拳がジクジクと痛み、思わず私は顔をしかめた。
「開けろ！　ここを開けろ！」
無駄だと知っていても叫ばずにはいられない。
すでに痛み以外の感覚は残っていない拳を振り上げて、何度も何度も叩きつける。
骨が砕けるかと思うほどに、痛みを忘れて拳を振るった。
皮膚が切れ、血が滲んだ。
痛みはある。
痛覚は未だにしっかりと残っている。
だが、他に何ができる？

「……くそっ、くそ……っ！」
どうしようもないほどの無力感が押し寄せてくる。
目の前にいるのに。
助けるべき者が、こうして目の前で横たわっているというのに。
その近すぎる距離が、どれだけ手を伸ばしても届かない。
「く、そ……っ……」
打ち付ける拳から力が抜けていく。
目の前に立ちはだかる壁には、真っ赤な私の血が飛び散っていた。
私はそのままその場に崩れ落ち、だらしなく両膝を付いた。
全身から力が抜けていくようだった。
改めてみれば、全身至るところに裂傷の跡が残っている。
出血の量も決して少ないわけではない。
加えてこの消耗しきった体では、体力は著しく低下している。
今頃になって体温が失われていくことに気付いた。
わずかに寒気を覚え、その反面、自分の体から流れていく血の暖かさに心地よさを覚えてしまう。
目の前が霞む。
景色がグラリと揺れ、うなだれるように頭が下がった。

呼吸を繰り返すことでさえ、すでに難しくなっていた。
「……っ、はぁ、は……あっ……」
剣を抜き、地面に刺す。
それを支えにして、どうにか私は立ち上がる。
が、それは文字通り、ただ立ち上がっただけだ。
体が小刻みに震え、まるで言うことを聞いてくれない。
寒さだけが増していくようで、足元には真っ赤な血の水溜りがその輪を少しずつ広げていた。
この感覚は、決して初めて覚えたものではない。
今までも幾度となく、同じ感覚を味わい、そして乗り越えてきた。
これは間違いなく……死の感覚。
徐々に近づきつつある、絶望の色が鮮明になっていく。

目の前には白い光。
足元には赤い血溜まり。
支える刃は銀色。
何一つ美しくない世界の中で、私の命は確実に終わりの時を迎えようとしている。
もう体が言うことを聞いてはくれない。
この体も長くは持たないだろうと、直感的に理解した。
しかし、だとしたらなおのこと、最後に成し遂げなくてはならない。
せめて、目の前で倒れている一人の少女を救ってあげたい。
その想いだけが、かろうじて私の意識を取り留めていた。
「……う、くっ……」
柄を握り、地面に刺した剣を引き抜く。
それだけの動作にどれほどの時間をかけただろうか。
常日頃から振るっているはずの剣が、まるで得体の知れない重さを持っているように感じる。
指先が痺れてきた。

感覚はすでになくなりつつある。
痛みに痛みが上書きされて、傷に傷が上塗りされる。
だからきっとこれが、正真正銘の最後になるだろう。
剣を構え、静かに目を閉じた。
その閉じた瞳を、私はもう一度開かなくてはいけない。
暗黒に包まれる。
何もない世界が目の前に広がった。
その永遠まで続く闇の中に、吸い込まれそうになる。
しかし、それでも。
重く閉じたその瞳を、もう一度だけ強く開いて。
目の前の壁を打ち砕けるだけの最強の一撃を、今、ここで。

風が生まれる。
足元から、指先から、背中から、そして全身から。
この身に宿る、精霊の加護を受けたその力を全て解放。
生まれた風は連なり、渦を巻く。
その力を、全て剣に集束させる。
銀の刀身は淡い緑色の光に包まれ、無限の刃を生み出す。
風が共鳴する。
耳鳴りさえ覚えそうになるその音は、最後の最後で私の意識をしっかりと奮い立たせてくれた。
「……アリス、待っていろ。今……助ける……」
そして、剣を天にかざす。
目を開ける。
紡ぐ。
その、最強の一撃の名を。

「――砕け。エターナル・エア！」

渾身の力を込めて放たれた、最強の一撃。

地面を削り取りながら、集束した風の刃が乱れ飛ぶ。
目にも止まらぬ速さで風の刃は突き進み、目の前にある光の壁に吸い込まれるように激突した。
すさまじい激突の衝撃波が生まれる。
白い火花を散らし、風と光が互いを削りあった。
だが、その光景を最後まで見届ける力は、すでに私には残されていなかった。
膝が折れ、体が力なく放り出される。
やけにゆっくりと、重力に引かれているように感じた。
……頼む。
その壁を、壊してくれ……。
声にならない声で、そう願った。
……私には、もう……立ち上がる力は……ない……。
ドサリと、私の体は地面に横たわった。
それとほぼ同時だろうか。
何かこう、ガラスが割れるような、そんな音が耳の奥に響いたような気がして……。
かろうじて見えた視界の先で、光が崩れ落ちていく光景を、確かに見た。

……ああ。
よかった、これでもう……大丈夫だ……。
……あとは、誰かが……アリスを、助けてくれれば……。
そう思ったところで、意識は急速に遠ざかり始めた。
体が冷たさに覆われていく。
指先さえ動かすことができない。
かろうじて開いていた目も、間もなく閉じるだろう。
そしてもう二度と、開くことはない。
……すまない、アリス。
私は……嘘つき、だ……。

意識が落ちた。
次に待っていたのは、ただの闇。
永遠よりも深く遠い、死という名の闇だけだった。

……あれ？
ここは、どこだろう？
目覚め、アリスは思った。
そこは、真っ白な場所だった。
前も後ろも、右も左も、上も下も、全部が真っ白。
私、どうしちゃったんだろ……。
呟き、思い出す。
……あ。
そうだ、お母さんの病気のお薬になるお花を探して、それを見つけたんだった。
早く持って帰らないと……。
……あれ？
でも、お花がどこにもない。
おかしいなぁ……。
さっきまで、ちゃんと咲いてたのに……。
アリスは思い出す。
ついさっきまで森の道を歩いていて、そこで白く輝く小さな花壇のような場所を見つけたこと。
そこは薄暗い森の中なのにとても明るく、ほんのりと暖かい匂いがしていたこと。
花を見つけ、それを摘み取ろうと走り出したこと。
間近で見たその花は、今まで見てきた他のどんな花よりも真っ白で、微かに甘い香りがしていたこと。

そして、その花を摘もうと手を伸ばしたら……。
……そうだ。
お花に触ったら、急に眠くなっちゃったんだ。
そしてアリスは、そのまま意識を失った。
だがこうして気が付いた今、いる場所はどこもかしこも真っ白に覆われている不思議な場所。
起き上がり、立たせた体もどこか不安定。
地面に立っているはずなのに、どこか地に足が着いていない感覚だ。
……ここ、どこだろ？
私、迷っちゃったのかなぁ……。
アリスは辺りの様子を覗う。
しかし、景色はどこまでもただ真っ白で、何も見えはしない。
途方に暮れるように立ち尽くしていると、わずかに体が揺れた。
わ……。
思わずアリスは声をあげ、揺れた体を持ち直させる。
な、何だろ？
地震かな？
しかしそれは少し違うように思えた。
今の揺れは、大地が振動しているような揺れではなく、もっとどこか、優しく揺れたような……。
そう、例えるなら、道端に咲いた草や花が、そよ風に揺られたような、そんな感覚だった。
ぼんやりと、空を見上げる。
といっても、真っ白なだけの空ではあるが……。

「こんにちは」
ふと、そんな声がアリスの耳に届いた。
「え？　わ……」
気が付いてアリスが振り返ると、いつの間にかそこには一人の女

性が立っていた。
真っ白なこの場所に溶けてしまいそうな真っ白な服。
けれど、確かな存在感を滲み出しているような、美しい女性。
「こんにちは」
もう一度その女性は、優しい声でそう言った。
「……え、あ、は、はい。こ……こんにちは……」
何が何だか分からず、アリスは慌てて返事をする。
直後にまじまじとその女性を見返して、思わず溜め息をついた。
奇麗な人だなぁ……。
口には出さず、思わず見とれていた。
と、その様子にも女性は優しく微笑んで答えてくれた。
……あ、そうだ。
思い立ったように、アリスは口を開いた。
「あ、あのっ！」
緊張のせいだろうか、やや声がうわずってしまっている。
「はい。何でしょう？」
しかし女性は本当に優しく丁寧に、膝を折ってアリスと同じ目線で聞いてくれた。
「ここ、どこだか分かりますか？」
アリスは真っ直ぐにそう聞いた。
そして女性もまた、真っ直ぐに答えた。
「ここは、箱庭です」
「……箱、庭……？」
アリスにとって、それは初めて聞く言葉だった。
「そう、箱庭」
やはり微笑んだままで、女性はもう一度繰り返した。
「……えっと、箱庭って、何……？」
再びアリスは聞く。
「箱庭というのは、何もない場所。全ての物語の始まりの場所。全ての記憶の始まりの場所。そして、全ての世界の始まりの場所」

アリスはその答えに、首をかしげた。
難しいことはよく分からない。
「……えっと、じゃあ」
だから、質問を変えてみることにした。
「お姉さんは、誰ですか？　ここで、何してるんですか？」
その問いに、女性は一度だけ静かに目を閉じ、立ち上がる。
そして片手をその胸の前に添え、何かを慈しむように目を開け、
そして告げた。

「――私は、この世界の全ての原点となった世界樹の記憶。あらゆる命を生み、そして放った、いわば神。そして幾千の時を経た今もな
お、この世界を見つめることが私の役目」

静かに、そして暖かく包み込むように、その声が音もなく響き渡った。
白に白が溶ける。
不思議そうに小首をかしげる少女に向けて、女神は優しく微笑んだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５９：決壊

「……神様？」
繰り返すようにアリスは呟く。
それに頷き返す代わりに、目の前の真っ白な女性は小さく微笑んだ。
「私からも、一つ聞いてもいいですか？」
と、白い女性は優しい声で言う。
コクンと頷き、アリスは次の言葉を待つ。
「あなたはどうして、こんなところにいるの？」
「えっと……」
答える前に一瞬だけ戸惑いのようなものを感じたが、すぐにその迷いは晴れた。
「私、お花を探しにきたの。どんな病気やケガも、あっという間に直してくれるお花を」
「花？　それはもしかして、オリビアの花のことかしら？」
アリスは頷く。
「そう……」
としかし、なぜか女性はもの悲しそうな表情を浮かべている。
どうしてそんな悲しい顔をするのか、アリスには全く分からなかった。
「この地もついに、人の足が踏み入る場所になってしまったのね。かつて楽園と呼ばれた、聖域であるこの場所も……」
独り言のように女性は言う。
楽園とか聖域とかの言葉を聞いても、やはりアリスにその言葉の意味は分からないままだ。
やがて一拍の間を置いて、女性は続けた。
「あなたはどうして、オリビアの花が必要なの？」

「あのね、私のお母さんが、病気なの。色んなお薬を試したけど、全然治らなくて、それで……」

まるで今にも泣き出しそうなアリスの顔を見つめながら、女性は言葉を聞いた。

「そう。それで、オリビアの花なら病気を治せると思ったのね？」

「……うん」

暗い面持ちのまま、アリスはそう呟く。

「あの、ここにお花はないんですか？　私、さっきは確かに見たんです。真っ白なお花が、いっぱい咲いてたのを」

すがるような想いでアリスは聞く。

幼いながらも、その懸命な様子は女性にもしっかり伝わっていた。

しかし、それでも女性の表情はなぜか芳しくない。

「……確かに、この場所にはオリビアの花は咲いているわ。でもね、それは決して、人の手に渡してはならないという約束があるの」

「……約束？」

「そう、約束。遠い遠い昔、この世界を生み出した神様が、動物を生み、人を生んで、光を生んだ頃の約束」

それは、過去という言葉でくくるには遠すぎるもの。

神が全ての始まりを与え終えたとき、同時に神は後悔した。

数多の命で満たされた世界には、すでに楽園と呼ばれる場所の未来は映し出されていなかった。

神は嘆き、哀れに思った。

自らが創造した世界の行く末には、一つの楽園も残る希望が残されていないことに絶望すら覚えた。

そして神は、ある一つの手段を用いた。

誰の目にも触れぬ、誰の手も届かぬ、誰の足も踏み入れられぬ小さな小さなたった一つの楽園を、一本の巨大な大樹の足元に描いた。

それが、聖域。

同じ世界に確かに在りながら、決してその存在を明かされること

のない、歴史から見失われた聖なる領域。
ゆえにその聖域に名はなく、全ての色が失われた。
あるとき、その存在を知ってしまった一人の人間がいた。
しかし彼は、聖域の存在を知りながらも、ついにその場所を見つけ、踏み入ることはなかった。
そして彼は、あるはずのないその聖域に、せめてもと名を付けた。
失われた色の行き着く先、汚れを知らぬ無色の聖なる箱庭。

――ロストカラー・ガーデン、と。

「じゃあ、お花は取っちゃいけないの？」
暗い面持ちのまま、アリスは女性の目を見て問う。
「……ごめんなさい。これは、私の大切な約束なの。もしも私がこの約束を破れば、この世界は破滅への道を歩み出すことになる……」
女性の表情が曇る。
「……少しだけでいいんです。そのお花がないと、お母さんは、お母さんは……」
アリスの声に涙がくぐもる。
いつしかアリスは女性の真っ白な服にすがりより、小さな手を強く握り締めて懇願していた。
目の端にはすでに涙の珠が浮かび、堪え切れない雫がゆっくりと頬を伝っていた。

「……」
女性は何も言い返すことができない。
胸が痛む。
しがみつくアリスの必死さは、いやというほどに伝わっていた。
救いたい。
できることなら、この少女の母親の命を救ってあげたい。
事実、オリビアの花であれば如何なる難病や大怪我であろうと、

瞬く間に完治させることが可能だろう。
しかしそれは、女性が与えられた使命を、約束を破ることに繋がってしまう。
はるか昔、女性が神と交わした約束はたった一つ。
この花を、人の手に渡してはならない。
そして今日までの、それこそ気が遠くなるほどの歳月の中、女性はその約束を頑なに守り続けてきた。
時に何らかの拍子で偶然に偶然が重なり、人がこの場所を訪れることは何度かあった。
だが、それらの人全てを女性は受け入れることはなかった。
部分的な記憶を操作し、この聖域の場所を記憶の中から取り除くことで対処した。
しかしそれでも完全ではなく、部分的な記憶は残ってしまった。
現在に至るまでに、過去の書物や文献にオリビアの花のことが多少なりとも明記されているのはそのせいだろう。
ギュッと、女性の衣服の裾を掴む小さな手に力が加わった。
決心が鈍りそうになる。
誰かの悲しみに触れることは、こんなにも胸の奥が締め付けられるほどに苦しいことだったろうか。
いたたまれない思いが、女性の胸の内で渦を巻く。
だがしかし、それでも……。
例外は何一つ認められない。
女性がわずかでも優しさを見せれば、その瞬間にこの世界は破滅への道を歩き出す。
世界は神の怒りに触れることになる。

……だから、ごめんなさい。
そう、言葉には出さずに女性は呟いた。
例えそれが本音ではないのだとしても、女性の言動一つでこの世界が丸ごと滅ぶか否かが決定される。

一つの命と数多の命。
秤にかければ、どちらに傾くかなどということは、説明する必要さえ感じない。
足元ですがりつく小さな少女が、さらに小さく見える。
枯れることのない涙が、今もなお流れ続けている。
本当に、この少女は……。
ただ、自分の母親の命を救いたいという、その一心だけで。
あるかどうかも分からない、空想の中の花を探して、こんな深い森の中へやってきたのだ。
自らの命さえ失う危険を省みず、ただ、大好きな人を助けたいという、それだけの気持ちで足を動かして……。
「……っ！」
奥歯を噛み締める。
そんな想いだけで今この場にいる少女を突き放すことさえも、神の意思に従うということなのだろうか？
神の使者である者の、することなのだろうか？
再び迷いが生まれる。
どちらが正しく、どちらが間違っているのだろう。
女性はそっと、その手を伸ばす。
すがりついて泣き続ける少女の髪に、優しく振れる。
少女の体は震えていた。
ただでさえ小さな体が、さらに一回りも二回りも小さく見えてくる。

……私、は……。
私のしていることは、本当に正しいのだろうか……？
考えるまでもないはずだった。
一つの命と無数の命。
どちらが重いかなんて、考えるまでもない。
少なくとも、今まではそうだった。

神の意思に従うことは、同時にこの世界の存続に繋がることだった。

否、従うことが当たり前だったのだ。

私は神の意思によって生まれ、その意思を授かってこの地に降り立った。

人でも動物でもない、ただ一つの神の化身として。

そのことに迷いや疑問を抱くことはなかった。

ただ、使命を全うすることだけを考え、気の遠くなるような時間の中を、老いることも死ぬこともなく生き続けてきた。

始まりも終わりも知ることのない私は、永遠そのものだった。

もしも私が終わるとすれば、それはこの世界が終わりを迎えるときだろう。

だが、今はどうだ？

私は今初めて、迷いというものを抱いている。

なんてことはない。

世界の存続を願うなら、目の前の少女をほんの少し押しのければそれでいい。

それで世界は破滅の道を逃れられる。

楽園には程遠いが、平穏に近いものは今までどおり保たれるだろう。

そう。

それが真実。

それが真理。

それが摂理。

それだけが、唯一の理想。

……だった。

そう、その瞬間。

――まるで、そんな言葉だけで象られた壁など木っ端微塵に粉砕するほどの衝撃が、この場所と世界を隔てる光の壁を突き破った。

「……これ、は……？」

女性の目の前で、光の壁はガラガラと砕けたガラスのように崩落していく。

光の粒子が舞い、淡く光る。

そして見えた、光の霧のその向こう側に……。

――たった一人の騎士が、立っていた。

Ｅｐｓｉｏｄｅ６０：女神の意思

「これは、何が……」

目の前で起こった事実に、女性は思わずそう呟く。

あり得ない。

あり得てはいけないことが起こっていた。

空間と空間との間を完全に隔絶しているはずの、あの光の障壁が、音を立てて崩れ去っている。

力の領域を超えた、意思によるその壁を、破壊された。

それはいかなる強力な力であろうとも、消して人道的な力では破ることのできないとされたものだ。

神が唯一、地上に残した楽園と呼ばれる聖域への進入を、何人にも許さぬが故に作られた絶対の障壁。

だが、しかし。

こともあろうか、それは今こうして、目の前でガラガラと音を立てて崩れ去っているではないか。

そしてさらに信じられないことに、その崩れた壁の向こうには、たった一人の騎士が……すなわち、人間が立ち尽くしていたのだ。

その手に一本の剣を強く強く握り締め、まさしく渾身の力を込めて一撃を見舞った直後という感じだった。

遠目から見ても、その騎士の体はすでにボロボロだった。

足元に広がる黒ずんだ染みは、騎士の体から流れ出すおびただしいほどの量の血液だろう。

むせ返るような鉄の匂いが、女性の鼻腔にもわずかに届いた。

「……」

あまりの出来事に事態の把握ができない。

まずは落ち着け、現状を把握しろ。

そう自分に言い聞かせ、女性が徐々に冷静さを取り戻していく、

そんな最中。
グラリと、壁の向こうに立ち尽くしていた騎士の体が揺らめいた。
直後、ドサリと音を立て、そのボロボロの体が地面に転がる。
カランと音を立て、手の中の剣が零れ落ちる。
だらしなく四肢を放り出し、そして騎士は微動だにすら動かなかった。
ただ、倒れたその瞬間、微かに揺れた唇が何か言葉を紡いでいたような、そんな気がした。
再び女性は意識を奪われる。
横たわり、動くことのなくなった騎士の体。
何かに引き付けられるように、女性は一歩踏み出す。
しがみついて泣いたままのアリスを、そっと引き剥がして。

数歩ほど歩み寄る。
足元で横たわっている騎士は、やはりもうピクリともその体を動かすことはなかった。
死んではいない。
かろうじてだが、まだ呼吸をする音がする。
が、このままでは死を迎えることは明らかに時間の問題だろう。
今もなお止まることを知らず、騎士の体からは血が流れ続けている。
今となってはその凄惨なほどに傷付いた騎士の体を見下ろしながら、女性は思う。
一体何が、彼女をこうまでして駆り立てたのだろうか、と。
理解ができない。
こんなになるまで自分を痛めつけて、その先に何があるというのだろう?
彼女はその拳で、幾度この壁を殴りつけたのだろう?
皮膚が破れ、血が滲み、骨が軋んでも、それでも拳を振るい続けた理由は何なのだろう?

……分からない。
人ではないものに、人の気持ちなどは分からないということなのだろうか。
こんなにも自分を傷付けて、痛みの中に追い詰めたその果てに、何があるというのだろう？
その先でこの騎士は、何を手に入れられたのだろう？
分からない。
分かるわけがない。
当たり前だ、女性は騎士ではないのだから。
それ以前に、人ですらない。
女性は、言うなれば神。
正確に言えば、神が生んだその分身。
この聖域の守り手にして、世界の監視者。
監視とはすなわち、見守り、そして見捨てること。
介入をしてはならない。
それは歪む世界を生み出す最初の一歩になってしまうから。
「……」
もう一度、足元に横たわる騎士を見下ろす。
まだ、息はある。
本当にかろうじてだが、生と死の境を彷徨っているようだ。
だが、どうすることもできはしない。
生かすことも死なすことも、それを決める決定権さえも、女性は持ち合わせてはいないのだから。
できることといえば……そう、例えば。
ガラにもないと知りながら、神に祈ることくらいだろうか……。
「……お姉ちゃん……？」
と、か細い声が聞こえる。
女性がその声に背後を振り返ると、そこには泣きはらした顔のままのアリスが立ち尽くし、ジッと騎士の姿を見ていた。

「うそ……どう、して？　どうして、お姉ちゃんが……？」
繋がらない言葉を呟きながら、おぼつかない足取りで前へと進む。
一歩一歩、横たわる騎士の元へ。
「……お姉ちゃん？　ねぇ、お姉ちゃんってば……」
その小さな手で、騎士の鎧に触れ、軽く揺する。
しかし、沈んだ騎士の体はわずかに揺れるだけで、答えはない。
ゆさゆさと、体を揺する。
動かない。
微動だに、しない。
「お姉ちゃん……お姉ちゃん……？」
呼びかける。
答えがないと分かっていながらも、呼びかけずにはいられない。
一度は止まったはずの涙が、再び堰を切ったように溢れ出す。
「ねぇ、返事してよ、お姉ちゃん……お姉ちゃん、お姉ちゃん……お願い、だか、ら……」
言葉が続かなくなる。
アリスの手は、すでに真っ赤な血の色で染まりかえっていた。
皮肉にも、その血が妙に暖かい。
まるで晴れた春の日、木漏れ日の中で佇んでいるかのような温もり。
思わず笑顔がほころびそうになるはずのその温かさが、今はこんなにも冷たい。
指先で触れるその体は、体温をずいぶんと失っていた。
閉じたままの騎士の瞳。
だらしなく投げ出され、そして血の色に染まっている両手。
身に着けた鎧はズタズタに引き裂かれ、その奥にある衣服もわずかに血の色に染まっていた。
「お姉、ちゃ……」
声にならない悲鳴が止まる。
どれだけ体を揺すったところで、騎士は目覚めることはなかった。

まるで最後の最後に、許してくれとそう告げたような、そんな曖昧な表情だけを浮かべて、騎士は間もなく二度と覚めることのない永遠の眠りに落ちようとしている。

「……イヤだ、イヤだよ、こんなの……」

アリスは悲痛な声で叫ぶ。

「どうして？　どうしてお母さんだけじゃなく、お姉ちゃんまで傷付いちゃうの？　こんなの……こんなのおかしいよ……」

叫び、騎士の胸に顔を埋めた。

すでに温もりが失われつつあるその場所で、暖かい涙を流し続けた。

そんな光景を目の当たりにして、女性はわずかに悩んでいた。

間もなく、この騎士は死を迎えるのだろう。

しかしどのような命であろうと、この世に生を受けたその瞬間から、死はいつも隣り合わせにあるものだ。

もしも運命というものが実在するのならば、全ての生命は生まれたその瞬間に死の瞬間までもが決定付けられていることになる。

例えば、ある男は四十歳を迎えた夏にガケから落ちて命を失うとか。

例えば、ある女は十六歳という若さで病に伏せ、帰らぬ人になるとか。

それらは全て、運命というレールに乗せられた逃れようのないものなのだろう。

だから仮に、この場でこの騎士が命を失うことになったとしても、それはきっとこの騎士に与えられ、定められていた運命が終わりの時を迎えたという、ただそれだけのことに過ぎないのだ。

もしかしたらその運命とやらは、神が決めたことなのかもしれない。

しかし、例え神であっても、自ら生んだ全ての命に終わりのときを刻み込むというのはどこかおかしい話だ。

神は最初、楽園を望んでいた。
そして数多の命を地上にばら撒いた結果、その世界の未来に楽園はないと知った。
だから、そこに全ての生命に終わりのときを刻み込んだとしても、それはおかしくはない。
だが、その先はどうだろう？
つまり、ばら撒かれた最初の命が育む、次の時代への新たな命のことだ。
これに関しては、神はもはや関与をしていない。
人であれ動物であれ、子孫を残すためにやがて交わる。
そでなくては、今の世界は存在すらしていないはずなのだから。
「……神よ、貴方は、どう描いたのですか？」
女性はふいに天を仰ぎ、自らを生み落とした絶対の存在に問う。
「……誰しも、始まりを選ぶことはできない。それはつまり、終わりも決められていないということではないのですか？」
返る答えはないと知ってなお、天に語る。
「私にも、始まりというものはなかった。そして何より、私には終わりさえ用意されてはいない。未来永劫、この場所でこの世界を見守り続け、そして見捨て続ける。それだけが、私がここに存在する唯一の理由……」

視線を戻す。
目の前には、一人の騎士と一人の少女。
失われつつある命。
見捨てるのか？
課せられた使命は、見守ること。
見捨てるのか？
見守るとはすなわち、見捨てること。
見捨てるのか？
今までずっとそうしてきた。

そして、きっとこれからも……。
……本当に、それでいいのか？
それは誰の声だったか。
ふいに湧き上がる、誰かの声。
わずかに女性は狼狽した。
自問自答など、そもそも初めてのことではないだろうか。
しかし、その声は続ける。
まるで、ずっと前からそう思い続けていたかのように……。

――そこに、意思はあるのか？　他でもない、自身の意思はあるのか？

「……私、は……」
神の化身。
聖域の守り手にして、世界の監視者。
世界を見守るということは。
世界を見捨てるということと同意であり。
そんなことはとうの昔に分かっていたことだ。
何人たりとも聖域への侵入を許してはいけない。
人の手に世界樹の種を渡してはならない。
人と関わりを持ってはいけない。
例外はない。
ただ、与えられた使命を、行使し続けるだけ。
それは、まるで、糸の見えないだけの、操り人形と、同じではないのか？
そこに自身の意思はなく。
あるのはただ、神の意思だけであり。
今までずっとそうしてきた。
疑問すら感じず、それが与えられた使命なのだからと。
だがそれは、本当に……。

――自身が望んで、自らの意思でそうしてきたことだったのだろうか？

「……」

勘違いをしていたのかもしれない。

神がばら撒いた数多の命。

それとは別に、監視し守るものとして生み出されたこの命の中に、意思などというものは存在しないものなのだと、そう決め付けていただけなのかもしれない。

もはや、それは理屈ではなく。

現にこうして、意思が芽生えてしまっているのだ。

たった一つの、小さな願い。

例えそれが、この世界の行く末に破滅を招くために引き金になることだとしても。

「私は……」

もう一度、強く想う。

それは、神ではない、独立した個の存在としての、意思。

「――私は、この者達を助けます。例えそれが、この世界に対するどれほどの冒涜であったとしても、それが私の意思が選んだ答えなのだから……」

胸の前で手を交わす。

瞬間、淡く白い光が輝いた。

眩ささえ覚えるその輝きに、アリスは静かに顔を上げる。

そこには。

「大丈夫。貴方達も、貴方の母親も、私が必ず助けます」

そう言って、柔らかく微笑む名もなき女神が佇んでいた。

その目の端に、理由の分からない一滴だけの涙を浮かべて……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６１：帰還の夜

「……」

目覚めると、そこは真っ暗な闇の中だった。

最初、それも当然だと私は思った。

天国や地獄、冥界などというものを根強く信仰しているわけではないが、一番最近の記憶の糸を手繰り寄せれば、私の行き着く場所はそのくらいしか候補がなかったからだ。

死闘……と呼ぶには、あまりにも一方的だったフェンリルとの戦いの後、慢心創痍の体で渾身の一撃を放ち、文字通り私は身も心もボロボロの状態になった。

そしてそのまま意識を失った私が、例え死後の世界などというあるかどうかも分からないそんな場所にいたとしても、決して不思議なことではないだろう。

だが、どうやらそれは私の勘違いだったようだ。

「……ここ、は……」

底知れぬ闇ではなく、限りある闇の中で少しずつ目が慣れてきた。

真っ暗な部屋の中に、ロウソクの揺らめく明かりだけがわずかに灯っていた。

ゆっくりと顔を横に向けてみると、締め切られたガラス戸の向こう側には、深い夜の色に染まった一面の夜空が広がっていた。

瞬く星は数えるほどで、代わりに美しい満月だけが、地上を淡い光で照らし出している。

ガラス越しに差し込む微弱な月明かりが、細い糸のように室内を横切っていた。

「……っ、うあっ……！」

体を起こそうとして、私は全身に走る激痛に思わず声を漏らしてしまった。

体中のあちこちが痛みを覚えており、指先を少し動かすだけでも全身が引き裂かれそうなほどの激痛が走る。
ベッドの沈んだこの体は、どうがんばっても上半身すら起こせそうにはなかった。
「……っ、ダメだ。まるで力が入らない……」
起きることを諦め、仕方なく私は沈む体を大人しくベッドに預けることにする。
起きたばかりだからだろうか、まだまどろみのような眠気が後を引いており、静かに目を閉じればそれだけで再び寝入ってしまうことができそうだ。
しかし私は目を閉じず、夜の静寂の中で静かに耳を傾けた。
虫の鳴き声も、鳥のさえずりも、人々の喧騒も聞こえない。
こんな夜中だ、無理もないだろう。
静謐さを感じさせる夜の静穏は、今の私にとってはどうしてか心地よく感じてしまうものだった。

それにしても……。
「……やはり、ここは確かに……」
改めて暗がりの中、見慣れた部屋の中をもう一度見回した。
どこをどう見ても、私が今こうして寝かされているこの部屋は、王都の城内にある自室だった。
だが、私はどういった経緯で自分の体がこうして寝かされているのか、その経過を全く知らなかった。
あのとき、行く手をさえぎる光の壁に向けて最後の力を振り絞る思いで渾身の一撃を叩きつけ、そこからはもう何も覚えいない。
体が崩れ、だらしなく地面に膝を付いたのは覚えている。
意識を失うその瞬間、最後に見えたのは、ガラガラと音を立てて崩れ落ちるあの光の障壁と、その向こうにあった小さな少女の人影だけだった……。
「……そうだ、アリスは……！」

思い出し、勢いよく起き上がる。
が……。
「……っ！」
全身を引き裂く痛みが数分程度で治るわけもなく、私はそれでもどうにか勢いだけで起き上がった上半身を自分で抱きかかえるようにして、その痛みに耐えていた。
「……っ、こんなところで寝ている場合ではない。アリスはどうなった？　それに、オリビアの花は見つかったのか？」
自問を繰り返し、答えがないことに気付いた私は、痛み以外の感覚のない体を無理矢理に動かして、ベッドから立ち上がる。
だが、そこまでだった。
立ち上がるどころか、二本の足を膝から曲げることさえかなわない。
動くだけで筋肉は悲鳴をあげ、骨が軋むようだった。
体中の血管が今にも引き千切れてしまうようで、私はやむなくベッドの中に体を戻す。
「くそっ、立って歩くことさえもできないのか……」
私とて、今の自分の体がどれだけ重症なのかくらいは分かっているつもりだ。
しかし、だからといってこのままではいてもたってもいられないのだ。
せめて、アリスの安否だけでも確認したい。
ベッドからドアまではほんの数メートルの距離しかないというのに、今ではその距離が絶望的なまでに遠く感じる。
と、そんな風に途方に暮れていると、わずかに廊下から足音が聞こえてきた。
コツコツと床石を叩く足音が、少しずつ近づいてくる。
案の定、足音は私の部屋の前で止まり、それから間もなくして控え目なノックの音が扉を叩いた。

「入りますよ、シルフィア？」
一声あって、扉が静かに押し開けられる。
ギィという音が、静かすぎる夜の闇を切り裂くように響いた。
そして部屋の中を覗くなり、声の主であるクレイオはやや驚いたように目を丸くした。
「シルフィア、目が覚めていましたか」
「……ああ。とはいっても、つい今さっき起きたばかりだがな」
私の返答を受け取ると、クレイオは静かに扉を閉め、ベッドの横にやってくる。
「気分はどうですか？　全身痛みだらけでそれどころではないとは思いますが……」
「全くその通りだ。情けない、立ち上がって歩くこともできないんだ」
私は自身を嘲るような乾いた声で笑った。
「無理もないでしょう。あなたの負った傷は、並大抵のものではない。ケガのレベルなどとうに通り越した、まさしく生死の境を彷徨うほどの重症でしたから」
「そうだろうな。痛みを覚えている私が、誰よりも実感しているさ」
「……体の表面の傷などは、細部を残して大方塞がったそうです。聖堂教会の方々ががんばってくれたおかげです。ですが、彼女達の癒しの力を以ってしても、体の内部の損傷までは完全に治療することができませんでした」
言われて見てみると、確かに体のあちこちに包帯やガーゼが巻かれたり張られたりはしているが、目に見える傷痕などはほとんど残っていなかった。
だがその反面、体の内部のあちこちから痛みが溢れ出ているのも確かだ。
先ほどもそうだったように、無理に体を動かせば、筋肉や血管が簡単に引き千切れてしまうような状態なのだろう
「どちらにしても、数日間は絶対安静の必要があるそうです。とは

いっても、その体では動くこともままならないでしょうけど」
「……全くだ。こんな傷を負うのは、あの日以来だな……」
「あの日？　ああ、そうでしたね。確かあれは、戦争最後の……」
言いかけて、クレイオは続く言葉を無理矢理に呑み込んだ。
「……失礼。あまり口に出すことではないですね」
「……すまない」
どちらからともなく気まずくなってしまい、その後わずかだけ沈黙の時間が流れた。
蒼く、そして暗い闇がそっと見守る中、心地よさを感じる微かな風が頬を撫でた。

「クレイオ、聞きたいことがある」
「何ですか？」
「私は一体、どうして助かったのだ？」
「……覚えて、いないのですか？」
「ああ。全く覚えてないんだ。狼王の住処であるあの森の深奥で、意識を失ってからのことは、何一つ……」
「……私は現地に赴いたわけではありませんから、一部始終しか分かりませんが、よろしいですか？」
「構わない。教えてくれ」
「……今日の夕暮れ近く、私は兵の報告を聞きつけて正門前に向かいました。そこに待っていたのは、早朝から部隊を編成して狼王の住処へと向かっていた兵達でした。ほとんどの兵は軽い傷程度のものでしたが、その中でもひどかったのが貴方を含めた隊長達三人でした。得にシルフィア、貴方はその中でもずば抜けて危険な状態でした。一目見たときは、死んでしまっているのではないかと我が目を疑ってしまったほどです」
「……」
無理もないだろうと、私は胸の中で反芻した。
狼王によって打ち付けられ、切り裂かれた肉体は、もはやボロボ

ロだった。
鋭く空を裂く爪痕は、鋼の鎧さえも易々と引き裂いていたのだ。
我ながら、よくあれだけの打撃を受けて生きていたものだと思う。
「……それで、トールとアクエリアスの二人は……」
「彼らも無事です。それなりの深手は負っていましたが、貴方に比べればずいぶんとマシなものです。もう立ち歩くくらいのことはできていましたよ」
「……そうか、よかった……。クレイオ、それともう一つ確認したい。あの、少女は……」
「アリスという少女のことですか？　それも心配要りません。あちこちにかすり傷はありましたが、命に関わる大きなケガはしていませんでした。兵達が付き添い、無事に彼女の自宅まで送り届けました。花の採取も成功したようで、彼女の母親も順調に回復へ向かっているそうです」
「……そう、か……」
「……どうかしましたか？　あまり嬉しそうには見えませんけど……」
「いや、そんなことはない。ただ、な……」
「……？」

クレイオから視線を外し、私は窓の外を眺めた。
相変わらず空は深い蒼色で、それとは対照的なほどに金色の満月が輝いていた。
アリスも、その母親も、この月明かりの下で今は何もかもを忘れてぐっすりと眠っているのだろうか？
……いや、よそう。
とにもかくにも、アリスもその母親も無事だった。
今はそのことを喜ぼう。
悔いることはいつでもできる。
いつまでも終わった過去に縛られていては、見える先も霞んでし

まうだろう。
「……少し、疲れたな」
「……もう一眠りするといいでしょう。なんだかんだで、貴方が一番の満身創痍だということは明白だ」
「ああ、そうさせてもらうよ……」
「では、私もそろそろおいとまします。ゆっくり休んでください」
「世話をかけたな、クレイオ」
「何を言ってるんですか、今更改まって」
小さく笑い返しながら、クレイオは扉を引き開けた。
「おやすみなさい、シルフィア」
「ああ、おやすみ」
扉が閉じる。
クレイオの足音が遠ざかるのを聞きながら、私は再び体をベッドの中へと委ねた。
自然とまぶたが落ちる。
睡魔はすぐにやってきた。
明日になったら、花を買いに行こう。
少女のいる花屋に……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６２：陽の下を歩いて

長く短い夜が明けた。
すでに太陽は真上にまで登り、起き抜けの体にさえ更なる眠気を与えるようなうららかな日差しが降り注いでいた。
「……っ」
一夜明けたばかりでは、さすがに体のあちこちに痛みはまだ残ったままだった。
それでも夜中に比べればずいぶんとマシになたことだろう。
現にこうして、私はすでに自分の足で立って歩くことができるようになっているのだから。
もっとも、それも支えに松葉杖があるおかげなのだが。
「……いい天気だな」
城内の長い廊下をゆっくりと歩きながら、私は城下の街並みと青い空を交互に見た。
まるで全てが一夜限りの悪夢だった。
と、そう思えるくらいに長くて短い一日が終わり、何事もなく迎えた新しい今日という日は、確かな何かを感じさせてくれる。
カツ、カツ。
松葉杖が床石を叩く音が何度も響く。
まぁ、真昼のこの時間だから誰の迷惑にもなることはないだろう。
と、そんなことを思いながら廊下を歩いていると、階段手前に差し掛かったところで、ちょうどアクエリアスが顔を覗かせた。
「おや、もう大丈夫なのですか？」
開口一番、アクエリアスは少し驚いたような口調でそう言った。
「ああ、何とかな。もっとも、歩くことで精一杯だよ」
「ハハハ、無理もないでしょう。そうは言っても、私も実際似たり寄ったりなのですけどね」

どこかおどけて笑うアクエリアスだったが、なるほど。
確かに彼の体のあちこちにも、まだ真新しいと思われる包帯やガーゼの姿が見て取れる。
「まぁ、何はともあれ、お互い無事に生還できてよかったです」
「ああ、全くだ。それにしても、よく無事でいられたものだ」
「それもお互い様でしょう？　フェンリルと一騎打ちをして生還を果たすなんて、それこそ奇跡と呼ばずにどう呼びますか？」
「……それも、そうだな」

ふと思い返す。
たった一日前の出来事だというのに、それはもう遠い昔の……昔日の出来事のように思えて仕方がなかった。
だがそれは、決して夢なんかじゃない。
紛れもなく、間違いもなく、現実として私自身がこの目で見て、この手で剣を振るい、この体で傷を受けたことなのだ。
実感はあまりない。
が、この体のあちこちに走る痛みが、嫌でもそれを現実だと言い聞かせてくれる。
……ああ、そうか。
あれは、夢でも幻でもなかったのか。
体はこんなにも間違えようのない痛みを伝えてくれるのに、気持ちだけがどこか浮ついたままだった。
「……どうかしましたか？」
「……ん？　ああ、いや、どうというわけではないんだが……」
曖昧に返事をして、もう一度空を見上げる。
日差しが少し貧しい。
長い夜の中に居たせいだろう。
「……少し、街を歩いてくるよ」
「そうですか。それもいいでしょう。気分転換も必要でしょうからね。特に、昨日みたいな日の翌日には、ね」

そう答えると、アクエリアスは小さく微笑んだ。
「では、また後でな」
私はアクエリアスにそれだけ告げて、松葉杖を突きながら階段の手すりを握り……。
そこでふいに、手すりの反対側から差し伸べられた手に気付く。
言うまでもなく、それはアクエリアスのものだ。
突然のことに私が呆けていると、また一つ、小さく微笑んでアクエリアスは言った。
「その体では、階段を下るのも一苦労でしょう？　肩を貸しますよ」

城門から街へと続く、アーチの架かった橋を渡る。
途中、警備中の兵の何人かに声をかけられた。
ケガは大丈夫ですかとか、ご苦労様ですとか、そんな他愛のない会話を済ませ、私は真昼の街並みの真ん中に立つ。
日中というだけあって、街の至るところが活気付いていた。
これが夕方から夜になれば、また別の賑わいを見せることになる。
今の時間は比較的に見て、子供や親子連れの姿も多く見て取れる。
夜に近づくに連れて、この足並みが大人びたものに近づいていくことだろう。
久しぶりに身軽な普段着に身を包んでいる私は、特に当てもなくブラブラと道の上を歩いた。
商店が軒を連ねている、中でも特に人通りの多い道は、当然のように大勢の人でごった返しになっていた。
まともに前に歩くことさえもやや困難に感じながらも、鈍痛の残る体を引きずって私は歩いた。
多くの人々の声が交差する。
日々の喧騒とでも言うのだろうか。
決して珍しいはずのものではないのに、ずいぶんと久しぶりな気がした。
そういえば、こうして街の中を歩き回るのも久しぶりかもしれな

い。

以前は時間さえあれば足を伸ばし、武器などを扱っている店にも顔を出していたのだが……。

「……いつから、今のようになってしまったのだろうな」

思わず私はそう口に出していた。

幸い、その独り言は賑やか過ぎる喧騒の中にかき消され、誰の耳に届くこともなかった。

そうして気がつくと、私は人々の行き交う道の真ん中で立ち尽くしていた。

さすがにこのままでは通行の邪魔以外の何物にもなりえないので、道を外れて脇へとそれた。

と、ちょうどそのとき、視界の端にその看板が入った。

文字は何も書かれていないが、その図柄でその店がパン屋だということはすぐに分かった。

そういえば、何だかんだで昨日の夜中に目を覚ましてから……いや、正確にはもっと前からだろうか。

私は何も食事をしていないことに気付いた。

今更ながらに急な空腹感を覚え、そこにちょうどよく焼き立ての仄かに甘いパンの香りが漂ってしまえば、さすがに私の足も自然とそちらの方向に向かわざるを得ないだろう。

まるでお待ちしてましたと言わんばかりに、店の前に小さなテーブルと椅子がいくつか並べられ、お召し上がりくださいの感じまであればなおさらだ。

念のため小銭を少々持ち合わせていてよかった。

私は迷うことなく、休憩も兼ねてそのパン屋の軒先へと足を向けた。

「……おいしい」

またもや私は無意識のうちに呟いていた。

と、どうやら今度はその声が店の主人に聞こえてしまったようで、

ふと目が合った私に対し、恰幅のいい店の旦那は気分よさそうに微笑んだ。
私は少しの気恥ずかしさを覚えながらも、軽く会釈して笑みを返しておく。
そうしてまた、手の中の焼き立てのパンを一口頬張る。
サクッという歯応えに、焼き立てであることの証明でもあるキツネ色の表面、そして味付けはしてないはずなのに微かにある甘味。
この感覚もまた、ずいぶんと久しぶりに味わうもののようだった。
いや、実際久しぶりなのだろう。
どのくらい久しぶりなのかは詳しく思い出せはしないが、とにかく久しぶりだ。
空腹も後押しし、私はものの数分でパンを胃の中へと押し込み、今は一緒に注文した赤ブドウの果肉が入った飲み物を口にしていた。
嫌にならない上品な甘さと、その中にあるわずかな渋みと酸味がよく、のど越しも後味もさっぱりとしていた。
およそ丸一日振りの食事を簡単に済ませ、私は店の前の休憩場所をあとにする。
去り際に、店の旦那がこちらを見て小さく頭を下げた。
また来てくださいという、そんな感じの意思表示だろう。
私もそれに合わせて、同じように軽く頭を下げておく。
再び雑踏の中に戻ると、今度こそ本当に当てがなくなった。
いや、もともと目的はあったのだが、その前に少し町の様子を見て回るつもりだったのだ。
だったのだが、どうやら空腹が満たされたことによって、私は満足してしまったようだ。
人も多いし、何よりこの体では真っ直ぐ歩くこともまだ難しい。
少し早いが、そろそろ目的の場所を探すことにしよう。
店伝いに話を聞いていけば、すぐに見つかるだろう。
そうして歩き出した矢先のことだった。

「きゃっ！」
「わ……」
肩の辺りに軽い衝撃。
誰かとぶつかったのだと、そう理解するのに時間はかからなかった。
「あ、す、すいません！　急いでいたもので……」
「いえ、大丈夫ですから……」
言いかけて、ぶつかったその女性に目を向ける。
すると、彼女はなにやら目を丸くして驚いていた。
「あ……その、お体の方は大丈夫ですか？」
ああ、なるほど、そういうことか。
まぁ、確かに多少は痛みも走ったが……。
「お気になさらず。大したものではないですから……」
とはいえ、さすがにまだ包帯の取れない体であることも確かか。
ぶつかった相手が怪我人だったら、多少は慌てても仕方ないだろう。
としかし、どうやらこの場合に限って、女性が驚く要素はケガ以外にもう一つあったようだ。
「あ、服が……」
「……服？」
言われて私は服を見てみると、ちょうど私の服の胸の真ん中辺りに赤い染みのようなものが付いていた。
一方、女性はその胸に両手一杯の花束を抱えている。
何という名前の花なのかは分からないが、その花の花弁と花粉も同様に赤かった。
これは、もしかしなくてもそうだろう。
「す、すいません！　私ったら、ホント何してるんだか……！」
よりいっそう慌て方に拍車をかけて、女性は半ば取り乱した。
「ああ、いいですよこのくらい。洗えばすぐに落ちるでしょうし……」

とりあえず落ち着いてもらおう。
さすがに人通りの多いこの道の上では、こうした些細なやり取りも通行人の目に止まる。
「いえ、そういうわけにはいきません！　すぐに落としますから、すいませんけど一緒に来てください！」
言うや否や、私の返答を待たずして女性は私の手を引き、強引にその方向へと歩き出していた。
松葉杖必須な今の私としては、こうして無理矢理手を引かれるほうが大変なのだが……。
「あの、ちょっと……」
女性は聞いていないようだった。
「まぁ、いいか……」
時間はまだあるし、用が済んだらこの人に道を尋ねてみるとしよう。

そうして私が連れてこられたのは、街の大通りから少し外れた横道にある花屋だった。
そしてこの場所まで私を引っ張ってきた女性は、染みの付いた私の上着を持って店の中へと入っていってしまった。
どちらかというとこじんまりとした感じの花屋の中に、私だけが取り残されている。
周囲を見渡せば、当たり前だが花屋なので、大小様々な花が植木鉢やら束にされたりして並んでいる。
わずかに甘い花の香りが流れ、どこか心地よかった。
ほとんどが見たこともない、名前も知らないような花ばかりで、待っている間私は、ぐるりと店の中を歩き回っていた。
赤、白、黄色、紫。
様々な色の花が咲き、見た目にも色鮮やかに並んでいる。
思えば、こうして花を眺めるということは初めてかもしれない。
ずっと昔、それこそ幼すぎた頃の遠い昔には似たような記憶もあ

ったのかもしれないが、今では思い出すことはできない。
忘れてしまったのか、覚えていたくないだけなのか。
どちらにせよ、あまり縁のない話だとは思う。
そんな風にぼんやりと店の中を歩き回っていると、今度は腰の辺りに何かがぶつかる軽い衝撃を感じた。
植木鉢を乗せてある台の角にでもぶつかったのかと思ったが、それは違ったようだ。
「きゃ……」
そもそも台は喋ったりしないだろう。
そしてそれがまた誰かにぶつかったのだということに気付き、私は足元を見下ろした。
するとそこには、膝を折って植木鉢を並べている小さな女の子の後姿があった。
「ああ、すまない。大丈夫かい？」
私はわずかに腰を折り、前屈みにその少女に聞いた。
「あ、はい。大丈夫です」
と、その少女の声が、どこかで……聞いたような、気がして……。
我が目を疑う間もなく、少女は振り返った。
目が合い、一瞬だけお互いに沈黙した。
お互いがお互いを知っていた。
いや、知らないはずなどない。
なぜならその少女は、一日前の悪い夢のようなその時間を、共に過ごした小さな姫だったのだから。
「……アリ、ス……？」
「……騎士の……お姉、ちゃん……？」
片言で言い合いながら、再び少しだけ時間が止まる。
優しい香りが流れる、小さな花屋の中で……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６３：微笑の傷痕

「そうだったんですか。あなたがアリスの言っていた騎士の方だったんですね」

台所でカチャカチャと食器類の音を立てながら、先ほど私とぶつかった女性……アリスの姉である彼女、エルクは言った。

「ええ、まぁ……」

と、私は曖昧な返事だけを返して、目の前に差し出された紅茶の入ったカップをゆっくりと持ち上げ、一口含んだ。

店先でばったりとアシルと再会を果たしてしまった私は、ことのあらましをアルクに対して簡単に説明した。

昨日の今日ということで、エルクもまだあまり詳しい事情を知らないようではあったが、それでもアリスの言葉から察するに、話の中に出ていた騎士が私であるということは理解してもらえたようだった。

そうして二言三言交わすうちに、立ち話もなんだからまずは中に上がってくれないかと言われたのだ。

確かに、立ち話を続けるにしたって店の中では迷惑になってしまうだろう。

それにもともと、私はアリスの花屋を訊ねる目的でこうして外出しているわけであって。

断る理由はなく、私はエルクの言葉に促され、お邪魔させてもらうことにした。

それに、何より。

彼女……エルクには、知る権利がある。

昨日という長すぎた一日の中で、一体何が起こっていたのか。

結果として、何がどうなったのか。

全てを語るべきだろう。

言葉にすれば短い、しかし信じられないようなその出来事の発端、そして結末を……。

さて、どこから話せばいいものだろうか。

わずかに緊張の走る沈黙を前にして、私とエルクは静かに向かい合っていた。

一方アリスは、何も知らずに店先で花の世話をしている。

もちろんアリスも当事者の一人ではあるのだが、まだ幼いアリスには少し難しく、込み入った話になってしまうことだろう。

気を利かせたというわけではないだろうが、エルクはアリスに店番を頼むことで、人払いのようなことをしていた。

「エルクさん、あなたは昨日の事について、どこまでご存知ですか？」

まず私は聞いてみる。

もしも昨日、アリスを送り届けた兵から簡単にでも事の一部始終を聞かされているのなら、同じ説明を繰り返す必要もないだろう。

としかし、聞いた直後に私は思った。

結局のところ、アリスを最後に目にしたのも私自身だ。

いくらフェンリルに遭遇した時点で全員が一緒だったとしても、兵達の多くはその後何が起こったかまでは知るはずもないだろう。

「私が聞かされたのは、アリスが無理矢理に皆さんと一緒に、薬草となる花を採りに行っていたということくらいです」

「なるほど。では、そうなるに至った原因には、心当たりは？」

「……それは……ないわけではありません。シルフィアさんももうアリスに聞かされているとは思いますが、私達の母の容態のことはご存知ですよね？」

「…ええ。アリスから聞かされています」

「だとすれば、原因はきっとそれなのでしょう。あの病気、というか症状は、過去にもほとんど例を見ないほどの難病で、一種の呪いではないのかと囁かれているほどのものです。どうして母がそんな

病に伏せてしまったのか、その原因は未だに分からずじまいですが、それを知ったとき、正直私は絶望的でした。アリスには難しすぎた話でしたが、それでもあの子なりに、母が苦しんでいて、それが医者の手にかかっても治すことのできないものだということくらいは分かったようです……」

エルクは視線を動かす。

その先には、せっせと店先で動くアリスの姿があった。

花に水をやり、棚の上を掃除し、どこか嬉しそうな笑みを浮かべている。

そんな表情を見ていると、こっちまでつられて微笑んでしまいそうになってくる。

幸いなことに、アリスのケガは大事に至るものではなかったらしい。

膝の辺りに小さく包帯を巻いてこそいるものの、あれも転んだ際の擦り傷程度のもののようだ。

本当によかったと、改めて私は胸を撫で下ろした。

「症状が極めて特殊だと分かって、私達も八方手を尽くしました」

エルクは視線を戻し、話を再開する。

「街中の医者を駆け回って、似たような症状に対する薬も処方してもらいましたが、効果は全くと言っていいほどありませんでした。聖堂教会の知人を頼って、治癒術を施してももらいましたが、こちらも全く……。薬も治癒も利かないのでは、もう手の打ちようがありませんでした。それでも何かないかと、私は様々な薬草を洗いざらいに調べました。アリスは、それを一緒に手伝ってくれてたんです」

これがその資料ですと、エルクはテーブルの上にその分厚い本を何冊も積み上げた。

ざっと見るだけでも相当の量が見て取れる。

一冊一冊が厚さ五センチ近いような、そんな資料だ。

「正直、望みはかなり薄かったです。藁にもすがるというのは、あのときの私達のようなことを言うのでしょう。それでも諦めるわけにはいかず、必死で目を通しました。作業は夜を徹し、気付いたら私は日中の疲労と重なって、寝入ってしまっていたんです」

パラパラと、エルクはその中の資料の一冊を取り上げ、次々にページをめくっていく。

「夢に決まってる。悪い夢に違いないと、そう願わずに入られませんでした。目が覚めたら全てが嘘で、母はきっと何事もなかったかのように、いつもと変わらない朝食を用意してくれているんじゃないかって……逃避ですよね、こんなの……」

「……そんなことは」

かける言葉が見つからず、口から出たのはそんなありきたりな言葉だった。

それさえも最後までは綴られることなく、私は力なく言葉を区切ってしまう。

「……でも、そうじゃなかった」

ページをめくり続けていたエルクの手がふいに止まる。

そしてその分厚い資料の一つのページを、エルクは私に差し出すように見せた。

「これは……」

そこに載っていたのは、間違いなくあの伝説の上のものとされていた花……オリビアの花だった。

純白を超える白さを放つ、女神が愛した光の花。

その香りは全ての傷を癒し、その露はあらゆるものに活力をもたらすだろう。

「朝目覚めたら、私の背中には毛布が一枚かけてありました。そしてテーブルの上に散らばったいくつもの資料の中で、この本のこのページだけが大きく見開かれて、そしてアリスの姿がどこにもいなくなっていたんです」

なるほど、そういうことだったのか……。

「起き抜けの働かない頭でも、すぐに分かりました。アリスは……あの子きっと、この花を探して家を飛び出して行ったのだろうと。私もすぐに追いかけるべきでした。だけど、母をそのままにしていくわけにはいかなかった。お店は休むことができるけど、母の傍を離れることはできなかったんです……」

エルクにとって、それは苦渋の選択だったのだろう。

アリスを連れ戻さなくてはいけないという感情と、母の傍を離れるわけにはいかないという二つの感情が競り合ったのだ。

どちらに傾いても、どちらかを危険に置き去りにすることになる。

かといって、どちらにも手を伸ばすことはできない。

二兎を追うものは一途をも得ずとは、まさにこのことなのだろう。

「そんなときでした。たまたま私は、早朝から騎士団の方達が遠出をするという話を耳にしたんです。その行き先が、偶然オリビアの花の生息地とされている霧深い森……狼王の住処だと知って、私はその偶然の一致に望みを託すしかできなかった」

エルクにとって、その偶然こそが後の奇跡に繋がる一歩だったのかもしれない。

事実として、私達騎士団は道の途中でアリスと出会い、事のあらましを聞くことができた。

恐らく、ここまではアルクの望みが果たされていたのだろう。

が、問題はまさにその後のことだった。

伝説は、現実となって我々に襲い掛かってきたのだから。

できるだけ詳しく、私はこの目で見たことをエルクへと伝えた。

最初は半信半疑だった彼女も、話の内容と実際の私のこのケガを見て、話を信じないわけにはいかなくなっていた。

「……これが、あの森で起こった私の中の最後の記憶です」

「……そう、だったんですか……」

どれだけの時間を費やしたのだろうか。

ずいぶんと長く感じるが、その割にはカップの中の紅茶はまだ完全には冷め切っていないようだ。
「……」
「……」
やや長い沈黙。
やがてエルクは、見開かれた本を手元へと引き寄せ、静かに白い花のページを閉じた。
「……私は」
その微かな物音を合図にするように、私は口を開く。
「私は、あなた達に謝らなくてはいけません」
答えず、エルクは黙って先を促した。
「私は、アリスを守ると誓った。にも関わらず、私は斃れた。目の前に、あの子の影を見ていたのに、斃れたのです。騎士にとって、誓いは絶対にして唯一のもの。それを果たせなかった時点で、すでに私に騎士を名乗る資格などは、もうないのです……」
両膝に手を添え、静かに頭を下げる。
「謝って済む問題ではないと分かっています。しかし、今の私にはこうすることでしか自分の罪を償うことができない。本当に申し訳なく思っています……」
――剣に掲げた誓いは、何を犠牲にしても守り通せ。
私が騎士を志したとき、目標としていたその人が言っていた言葉だ。
だが、どうやら私はそれを果たせなかったようだ。
やむをえない状況だったかもしれない。
どうしようもない展開だったのかもしれない。
しかしそれを口にしてしまえば、それだけで私は逃げたことになる。
例え騎士であることを捨てるときがあっても、逃げるわけにはい

かない。
逃げればそれは、今日までの自分と、今日までの自分を支え続けてきてくれた全ての人達を裏切ってしまうことになるから。
両手の拳を強く握り締めた。
傷付いた拳は、ズキズキと頭に響く痛みを発する。
奥歯を噛み締める。
傷よりも、今は心が痛い。
だが、それでも。
「……何を謝ることがあるのですか？」
エルクは言ってくれた。
憎しみや悲観など、微塵も感じさせないほどの優しい笑みを浮かべて、言ってくれた。

「顔を上げてください、シルフィアさん。あなたがそんなにも傷付いて守ってくれた命に、もっと誇りを持ってください。これから先、あの子は昨日の思いを胸に秘めて生きていくんですよ？　私には、命の恩人である素敵な騎士の人がいるんだって」

そしてエルクは、視線だけで促した。
私は振り返る。
そこにある、小さな小さな少女の笑顔。
間違いもなく、紛れもなく、疑いようもなく、それは……。

「――……目を開けて、今を見てください。そこにあるものは、きっとあなたが誇れる未来に繋がっているはずですから……」

アリスが振り向き、目と目が合う。
そして少女は、本当に嬉しそうに、楽しそうに、そして優しく。
まるで、天使のような笑顔で微笑んでくれた。
「……ええ、本当に……」

目の端が途端に熱くなる。
ああ、しまった。
うっかりしていたが、もうどうにもならないな。
胸の奥でそう呟く。
間もなくして、透明な雫は音もなく静かに私の頬を流れ落ちた。

うららかな日差しの、よく晴れた日の午後のことだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６４：遠く近い夕暮れ

「では、そろそろ私は失礼します」
松葉杖をついて、私は花屋の前に立つ。
「えー、お姉ちゃんもう帰っちゃうの？」
としかし、アリスはどこか不満気なそんな声を漏らした。
「すまないな、アリス。私にもやらなくてはいけないことがあるし、それに今は、しっかりと休養をとっておかなくてはいけないんだ」
腰ほどの高さにあるその頭を軽く撫でながら、私は言った。
「アリス、無理を言っちゃダメよ。シルフィアさんだって、無理してわざわざ尋ねてきてくれたんだから」
「はーい……」
口ではそう返事をしてはいるものの、アリスはやはりどこか納得いかない様子だった。
小さく口を尖らせ、残念そうに肩を落としている。
「そうむくれるな、アリス。同じ街で暮らしているんだ、これからはいつでも会えるさ」
「……うん」
「……そうだ。アリスに一つ、お願いがあるんだが、いいかな？」
「……何？」
お願いという言葉を聞いて、アリスの目の色が変わる。
「実は、今度部屋に花を飾ろうと思っているんだが、どんなものがいいかなと思ってね。アリスが好きな花とか、気に入ってるものでもいい。選んでくれないかな？」
「うん、いいよ」
そう返事をするアリスは、いくらか機嫌を直して笑顔を見せてくれるようになっていた。
そうさ。

小さな街ではないけれど、同じ場所で暮らしているんだ。
一般市民が城の中に入る機会は中々ないだろうが、そのときは私が足を伸ばせばいいだけの話だ。
今度来るときは、あのパン屋のパンをみやげに持ってこよう。
きっと紅茶とよく合うはずだ。

「じゃあ、私はこれで」
「あ、はい。お構いもしませんで、すいません」
「いえ、こちらこそ。突然押しかけるようになってしまって」
「そんなことないですよ。それに、元はといえば、私がシルフィアさんにぶつかってしまったことが原因ですから」
小さく苦笑いするエルク。
先ほど汚れてしまった上着も、すっかり染み抜きされて元通りになっている。
まぁ、さほど気にすることでもなかったのだが。
「お姉ちゃん、次はいつ来るの？」
「こら、アリス」
私の手を引き、催促するようにアリスは言う。
「そうだな……。具体的にいつ、とははっきり言えないけど、そんなに遠い日のことではないよ。だから、素敵な花を選んでおいてね？」
「うん。任せて」
そう答えるアリスは、本当に嬉しそうな笑みをたたえていた。
「では、私はこれで……と、そういえば、お母さんの容態はどうなのですか？」
「母は今、安静のために聖堂教会の方でお世話になっています。大丈夫ですよ。心配しなくても、病気はすっかりよくなっています。オリビアの花から作った秘薬のおかげだそうです」
「そうですか、よかった……」
それを聞いて安心した。

今度はぜひ、二人の母親だというその人にも会ってみたいものだ。
そして私は店先をあとにした。
大通りに突き当たるまでの細い道の後ろでは、アリスが私の背中が見えなくなるまでずっと手を振っていた。
どうやらこれは、近いうちに顔を出さないと大目玉を食らうことになりそうだ。

城内に戻り、上り階段にやや苦戦を強いられていると、ここでもふいに助力があった。
「思ったより調子はいいようだな」
隣に目を向けると、そこにはトールの姿があった。
「トール……お前こそ、傷の具合は大丈夫なのか？」
「まぁ、大声で平気だとは言えんが、お前に比べればずいぶんとマシだ」
トールの顔にも、まだ何ヶ所かには包帯が見て取れたが、確かに思ったほどの重症ではないようだ。
その証拠に、すでにトールはいつもどおりの重苦しい鎧に身を包んでいるのだから。
「トール、その、傷に響かないのか？　療養中くらいは、鎧を外してもいいと思うのだが……」
「む？　何を言うか。騎士たる者、常に戦いの中に身を置く覚悟で臨むべきだ。この程度の傷で鎧を脱ぎ捨てるなど、それこそ俺の騎士道に反する……」
言いかけたトールの肩に、私は軽く手を置いた。
「……っ！」
と、それだけでトールの表情が明らかな苦痛の色に変わっていく。
それを無理矢理に、やせ我慢でどうにかしようとしているのが目に見えている。
「こ、これしきのこと、で……」
「……トール、一ついいことを教えてやろう」

「……な、何だ？」
私は小さく溜め息を一つついて、言葉を続けた。
「日常生活さえやせ我慢なしにできないようでは、いざというとき実戦の中で命を落とすことになるぞ？」
そして今度は二回ほど、同じ肩を軽く叩く。
「……いっ！」
さすがにやりすぎただろうか。
そうは思いながらも、反省はせずに階段を一段上がる。
「お前はもう少し、気楽に構えるべきだ。少なくとも、今はそのときだとは思うぞ」
「……う、む。考えておくことにしよう……」
痛みを堪えながら、結局私もトールの肩を借りて上階へと続く階段を上がっていった。

私室に戻った頃には、ちょうど窓の外に広がる空の向こう側が、ほんのりと赤く染まり始めていた頃だった。
思った以上に時間は過ぎていたらしい。
「ふぅ……」
ベッドの横に松葉杖を立てかけ、私はベッドに腰掛けた。
体はまだ痛むが、一時に比べればずいぶんと楽になったほうだろう。
聞いた話によると、どうやら私やトール、アクエリアスの傷の治癒にもオリビアの花から製薬した飛躍が使われたらしい。
恐らく、普通に治療や治癒を施しただけではこれほどの短時間に回復することはなかっただろう。
それどころか、一歩間違えれば命を落としかねなかったに違いないだろう。
トールやアクエリアスはまだしも、私は間違いなく死んでいたに違いない。
自分でもしっかりと覚えている。

フェンリルから受けた打撃の裂傷及び、その際に生じた傷口からの出血。

骨折の何ヶ所かは自分でも覚悟していたが、運がよかったのか、秘薬とやらのおかげだろうか、幸いにしてそれは免れたようだ。

とはいっても、やはり体の内側の部分は相当ボロボロになっているようだ。

血管はあちこち千切れかけになっているだろうし、骨にもヒビくらいは入っているかもしれない。

さらに付け加えれば、そんなズタボロの状態だったにも関わらず、私はあの時力を消耗しすぎてしまった。

それが傷の深さに追い討ちをしたと言ってもいい。

もともとあの力の解放は、五体満足の状態でこそ使いこなせるものであって、ただでさえ肉体的及び精神的に余裕のないあの状況で力を開放したことは、まさしく自殺行為に他ならなかった。

しかしそれでも、あの時の私はそうすることしかできなかった。

無我夢中、そういえば聞こえはいいのかもしれない。

けど、結局は自分の命というものを軽んじて見ていたことに変わりはなく、それはやはり愚行といえば愚行なのだろう。

しかしまぁ、それでも。

「……終わりよければ全てよし、か……そういう簡単な言葉でくくれるものではないのだがな……」

結果として、誰一人として犠牲者を出さずに済んだことは奇跡的と言えるだろう。

編成した部隊の兵達も、誰一人欠けることなく無事に生還できたという報告も受けている。

結局、当初の目的であった行方不明者の発見に繋がる手がかりなどは何一つ入手できなかったが、事態が事態だったからやむをえないだろう。

この報告に関して、姫は我々の生還に安堵の息をつくと共に、別の方向から捜索を続けるための手はずを整えているそうだ。

本来ならば私達もその話し合いに加わるべきなのだが、今はまず体を癒すことを先決にするようにと、これも姫からの命令だった。
まぁ、クレイオがついているから大丈夫だろう。

ベッドに仰向けに倒れる。
体がわずかに痛んだが、さほどは気にもならない。
ふいに、睡魔が襲ってきた。
疲れるほど長い距離を歩いたわけでもないというのに……。
もしかしたら、ここ最近の張り詰めた空気から一時的に開放されたことで、今まで見えていなかった疲労がここぞとばかりに押し寄せているのかもしれない。
「無理もない、か……」
呟き、見上げたのは白い天井。
少し視線を横に逸らせば、先ほどよりわずかに赤い空が迫っていた。
夕暮れは近い。
もう一眠りするのもいいかもしれない。
こんなにも気が休まるのは、本当に久しぶりだ。
戦争が終わり、それでも戦争の爪痕は今でも世界の各地に残っている。
三年という月日では、全てを元通りにすることはできなかった。
おかしな話だ。
戦争に費やした時間はほんの数ヶ月だというのに、その何倍もの時間を費やしても全てが元通りにはならないなんて。
破壊は容易く、再生は至難。
積み上げた石は、そよ風で崩れ去る。
世界は何とも脆い構造をしているのだろう。
人間だってそれは同じことだ。
ナイフを手にし、それを少しひねるだけで誰かの命をあっさりと奪うことができる。

あの戦争はそれを、ただ大きな規模にしただけ。
言ってしまえば戦争とは、国同士の喧嘩なのだから。
ただ、その被害はあまりにも膨大で。
何一つ失わずに済む人なんて、きっといないのだろう。
……やはり、おかしな話だ。
失うことが怖くて力を求め、騎士になったというのに。
そうして得た力は、確実に誰かの何かを奪うために振るわれた。
矛盾だらけ。
どこから道を踏み外していたのだろうか？
踏み外したその足は修正することができるのだろうか？
幾度となく繰り返し続けた問い。
今でも、答えは見つからない。
だけど、それでも私は……。

――今だけは、このまどろみのような平和の中に体を埋めていたい。

睡魔が後押しする。
まぶたが落ち、目を閉じた。
暗転する世界。
視界の先は暗黒。
それでも、一人の夜よりは怖くはない。
近いうち、この殺風景な部屋に花を飾ろう。
あの子が選んでくれる、きれいな花を……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６５：祭りの夜

浅い眠りが終わりを告げる。

「……ん」

薄く開いた視界の先、蒼い闇が静かに佇んでいた。

開け放たれたままのカーテンの向こう側から覗くのは、銀の星と金の月。

注ぐようなその淡い光が、いくつもの細い線になって私の体を囲むように絡み付いていた。

「……」

目元をこすりながら、私は体を起こした。

どれくらいの間眠っていたのだろうか？

頭の隅にまだ微かに残る眠気を押し殺して、ベッドから降り立つ。

松葉杖を持って、私は部屋の扉を押し開けた。

瞬間、涼しい夜風が頬を撫でながら、長い廊下の奥へと過ぎ去っていく。

いたずらのような風は私の頬を軽く冷やし、髪をなびかせた。

しかしそれは決して不快なものなどではなく、むしろ心地よさを覚えてしまうほどのものだった。

おかげで眠気も消し飛び、ようやくまともに頭が回り出したようだ。

廊下を進み、城下の景色に目を向ける。

すると、まだ多くの灯りが目立ち、どうやら夜はまだ始まったばかりであることを私は知らされる。

昼間の喧騒とはまた違う、別に賑やかさと華やかさが集う街並み。

さすがに子供の姿はほとんど見えないが、それを補って余りあるほどの大人達の姿が目に付いた。

もっぱら繁盛しているのは、やはり酒場なのだろう。

遠目に見ても、狩人や冒険者といった姿の人々が多く目立つ。
私は胸元を探り、そこから小さな懐中時計を取り出す。
ロケットペンダントにもなっているその蓋を指で軽く弾くと、中から文字盤が顔を覗かせた。
時刻はもう間もなく夜の九時を指し示そうとしていた。
ということは、私は大体五時間ほども寝入っていたということになる。
「……すっかり眠りこけてしまっていたのか」
我ながら、夜中にあれだけ寝ておいてよくもまぁさらに眠ることができたと思う。
まぁ、体が睡眠を欲しがっているということは、それだけ回復の傾向に向かっているということなのかもしれないのだが……。

しばらくそのまま、当てもなく城下の景色に目を落としていると、ふいに夜風に乗ったその音は聞こえてきた。
「……これは……？」
笛の音だろうか？
微かにだけ聞こえたその音は、すぐに目下の喧騒にかき消されるようにして消えてしまう。
ほんの一瞬の出来事だったが、奇麗な音色だった。
聞くだけで疲れが癒えていくような、心が洗われるような、そんな不思議な音。
ともあれ、いつまでもこうして景色ばかりを眺めているのもどこか退屈だ。
怪我人が退屈などと、それは言語道断なのかもしれないが、事実として暇を持て余しているのだから仕方ない。
広間に行けば誰かいるだろうと、勝手に決め付けて私は廊下を歩き出した。
カツカツと、松葉杖が床石を叩く。
昼間に比べて、体の痛みもだいぶ引いてはきているが、もうしば

らく松葉杖の世話になることになりそうだ。
そうなると、普段何気なく上り下りしている城内の階段が、今だけは鬱陶しくて仕方がない。
怪我人のわがままだなと割り切って、私は下り階段相手に悪戦苦闘するのだった。

広間に向かったはずの私は、結局そのまま外へと足を伸ばしていた。
結論から言えば、広間には誰もいなかったのだ。
ただ、たまたまその場にやってきた騎士団所属の兵に話を聞いたところ、どうやら今夜はちょっとした祭りが行われているという話を耳に挟んだのだ。
何でも、収穫祭の一興のようなものが行われているとのことだった。
言われて見れば、季節的にももうそんな時期になっていてもおかしくはなかった。
毎年のように行われている恒例の行事にもかかわらず、すっかりそのことを忘れているとは、やはり気付かないだけで相当の疲れが溜まっていたのかもしれない。
話を聞いたところによると、トールやアクエリアスも街へと出向き、今は祭りを楽しんでいるとのことだった。
ほとんど人の出払った城内に残ってもそれはそれですることがないので、私もこうして街の中へとやってきたというわけだ。
ところが城内から見た以上に街は賑わいを見せていた。
昼間の人ごみなど比べ物にならないくらいに、大通りには人が密集している。
この大人数の中でトールやアクエリアスを探し出すのは一苦労しそうだ。
なので、私は早々に二人を探し出すことを諦め、できるだけ人気の少ない静かな場所を求めて歩き出した。

途中で露店に立ち寄って、パープルブラッドのワインだけを買う。
「ふぅ……」
街のちょうど端っこの方にある、小さな休憩場所へとやってくる。
ここも多くの人で賑わっていると思ったのだが、予想外に無人だった。
私はベンチに腰を下ろし、手にしたワインを一口だけ口に含んだ。
カップをベンチに置き、遠くに聞こえる喧騒を眺めながら、夜の静寂の中に耳を澄ます。
流れるように風が吹く。
わずかに掻いた寝汗を乾かすかのように、それはひどく心地いいものだった。
目を閉じれば、またすぐにでも眠ることができてしまいそうなほどに。

夜風を全身で感じながら、静かに空を仰ぐ。
雲一つない晴れた夜空に、無数の銀の星と一つの金の月。
澄み切った夜空は過去に見たことがないほどに美しく、思わず感嘆してしまうほどだ。
ぼんやりとそんな景色に見とれていると、再び私の耳に届く音が一つ。
それは、先ほども城内の廊下で微かに聞き取れた、笛の音のような音だった。
その音は私が腰掛けるベンチからそう遠くない場所から、時折吹く夜風に乗って届いているようだった。
ふいに私はベンチから立ち上がり、音の出所を探すべく周囲を歩き出す。
松葉杖が砂利道の地面を突き、中途半端な足音が夜の闇を振るわせた。
歩くことほんの数十秒。
私が座っていたベンチから少し離れた別のベンチに、その音はい

た。

正確には、ハーモニカを口にした小柄な体躯の……恐らくは少年だろうか。

その少年が、ただでさえ小柄なその体をよりいっそう縮ませるかのように体を折り、ハーモニカを吹いていた。

頭には、顔を覆い隠すほどに大きな三角帽子をかぶり、体はだぶだぶのマントで覆っている。

一見して、それはひどく不釣合いな恰好だった。

だが、そのミスマッチが逆に少年の存在感というものを際立たせているようにも見えた。

つばの広い三角帽子に隠れて、少年の表情は見えない。

一方少年は、すぐ近くに私が立っていることになど気付く様子もなく、黙々とただハーモニカを吹き続けていた。

その音色は、ひどく奇麗な反面、どこか悲しい音を含ませているように私は感じた。

泣けない誰かのために、代わりに泣いてあげているような、そんな……。

そうして演奏に聞き入っていると、やがてハーモニカの音が静かに消えていった。

視線を向けると、ちょうど少年はハーモニカから口を離し、その大きな帽子のつばをつまんで、隣に立つ私を覗くように見上げていた。

その視線に、私は一瞬だけ緊張してしまう。

盗み聞きならまだしも、こうして同道と立ち聞きしたという事実は無礼なことかもしれない。

しかしそんな私の考えをよそに、少年は小さく微笑んで言った。

「こんばんは」

「……え？　あ、ああ……こんばんは……」

最初、その言葉が私に向けられたものだと気付けなかった。

が、よくよく考えてみればこの場に居合わせているのは私だけであって、つまるところ少年は私に対してその言葉を口にしているわけである。
「その……すまなかった。立ち聞きするつもりはなかったのだが」
「いえ、構いませんよ。詩を届けることが、僕らの役目ですから」
と、嫌な顔一つせずに少年は微笑んだ。
その言葉が少しだけ気になり、私は聞いてみる。
「……もしかして君は、あれか？　吟遊詩人というやつなのか？」
「はい、一応は。まだまだ見習いなんですけどね」
小さく苦笑いし、少年はその大きすぎる三角帽子を取る。
「アルって言います。以後、お見知りおきを」
立ち上がり、その小さな体をくの字に曲げて、礼儀正しくアルは言った。
「私はシルフィア。一応、この国の騎士をつとめている」
言って、私が手を差し出すと、アルもそれに答えてくれた。
軽く握手を交わし、私達は揃ってベンチに腰を下ろす。

「騎士なんですか？　すごいですね、女性なのに……って、すいません。差別するわけじゃないんです」
「いや、構わないよ。事実、女性の騎士というものはずいぶんと珍しいものだからね。恐らく国全体で数えても、もしかしたら私くらいしかいないかもしれないな」
ところでと、私は話を切り替える。
「さっきアルが演奏していた曲は、何と言う曲なんだ？　とても奇麗な曲だったが、私は聞いたことがないものだったよ」
「ああ、今の曲ですか？　うーん、何と言う曲と聞かれると、答えに困るなぁ……」
「ああ、すまない。答えにくいことを聞いてしまったか？」
「あ、いえ。そういうわけじゃないんですけど……」
言いながら、アルはしばしの間言葉を探すような間を置いた。

「うーん……言ってみれば、あの曲に名前なんてないんですよ。なぜなら、あれは僕が作ったものですから」
「……自作、ということか？」
「……まぁ、一応は……」
「すごいじゃないか。そういえば、吟遊詩人はそれぞれに見つけるべき詩があると聞くが、もしかしたらさっきの曲はアルにとってのそれなのか？」
「いえ、そんな大したものじゃないんです。あれはただ、今あるこの世界が紡げない言葉を、僕が代わりに紡いだだけで……」
言いかけて、アルはふと罰の悪そうな顔をする。
「……すいません、変なこと言って。忘れてください」
アハハと、乾いた小さな笑いが響く。
やや疑問にも思ったが、さして気にするほどのことでもないのだろう。

「……僕ら吟遊詩人にとっての見つけるべき詩というのは、一つの場所に留まっているものではないんですよ」
「と、いうと？」
「……うまく言葉にはできないんですけど、色んな土地を歩いて、色んな人と出会って。この目で見た景色や、この耳で聞いた音や、この鼻で嗅いだ匂いとか、そういう全ての記憶がようやく形を成せるときになって、初めて完成するものだと言われてます。だから、最終的に僕らが紡ぐ詩は決して同じ形を持つことはなく、同じ旋律を奏でることもない。全ての吟遊詩人にとって、見つけ出す詩は全く別のものになるんです」
「……それはまた、ずいぶんと先の見えない話なのだな」
「……ええ、本当に……」
遠くを見るように、アルは夜空を見上げる。
「……だけど」
そして、静かに言葉を続ける。

「本当はそんなこと、どうだっていいんです」
「……え？」
思わず私は聞き返した。
どうだっていいとはどういうことなのだろう？
そんな、まるで自分の存在すら全否定するような言葉……。
「どうだっていいんですよ、そんなこと。僕が詩を見つけようと見つけまいと、それ以前にこの世界はすでに泣いているんだから」
「……どうだっていいって……それに、どういうことだ？　世界が泣いている……？」
私にはさっぱり意味が分からなかった。
けれど、アルの表情はこれ以上ないくらいに悲しい色に染まり果てていた。
夜空の蒼さを簡単に呑み込んでしまうほどの、まるで絶望のような闇色に。
「……すいません。僕はこれで失礼します」
立ち上がり、アルは大きな三角帽子を被った。
「……アル？」
声をかける。
自分でも驚くくらいに、声が乾いていた。
「……どうか」
振り返らずにそう言って、直後にアルはわずかばかり振り返った。
そして、続ける。

「――どうか、貴方は啼かないで。例えこの世界の終わりがすでに始まっているとしても、最後まで啼かないで。終わりは等しく、そして一瞬。貴方は全ての始まりに繋がり、そして全ての終わりに繋がる。そのことを、忘れないで……」

そんな言葉だけを残して、アルは去っていく。
小さすぎるその背中が、徐々に夜の闇に紛れて消えていく。

まるで、最初からそこには何もなかったかのように。
名残も余韻すらも残さず、小さな吟遊詩人は何処へと消えた。
「……どういう、こと……？」
そう私が口にしたのは、アルの姿がどこにも見えなくなってからのことだった。
星が瞬き、月が輝く空の下。
確かな混沌が、静かに渦を巻き始めていた。
今はただ、誰もそれに気付けないだけ。
そして気付いたときには、きっと何もかもが手遅れ。
そんな、例えようのない不安だけが増していく中、賑やかな夜だけは、確実に更けていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６６：夢の始まり

あれから数日が過ぎた。
これといって、何事かと騒ぎ立てるような出来事は何も起こらず、平坦といえばただそれだけの、しかし間違いなく平和の色を覚えた日々が流れていた。
久しぶりにゆっくりと療養できたこともあり、体はすっかり本調子へと戻っている。
目に見える範囲での傷はほとんどがきれいに塞がり、内に残る痛みも微々たるものだ。
が、ほんの数日だというのに鎧の重さを忘れていたようで、数日振りに身に着けた鎧はどこか重苦しく感じてしまう。
まぁ、じきに慣れるだろう。
もしかしたら、体力が落ちているのかもしれない。
いくら療養中の身とはいえ、思い返してみても訓練らしいものは何一つしていなかった。
とはいえ、無茶をすればそれはそれで姫から直々にお説教をいただくことになるのだが……。
「ん……っ、ふぁ……」
中庭にやってきた私は、今日も今日とてよく晴れた青空に向けて思い切り背を伸ばした。
思わずあくびがこみ上げてくるので、だらしなく口が開いてしまう。
誰かに見られないようにとわずかに緊張しながら、伸ばした両腕をゆっくりと下ろした。
「ふぅ……今日もいい天気だな」
ぼんやりと空を見上げ、ふとそんなことを呟く。
もう間もなくで正午を迎えようとするこの時間、今私がいる中庭

から少し離れた訓練所では、今でも多くの兵達が実戦の模擬訓練に精を出しているようで、そこら中から掛け声が響いていた。
私も久しぶりに素振りや基礎体力の反復でもしておこうかと、中庭を横切って歩き始める。

心地よい風が吹いている。
ちょうど季節の繋ぎ目である今の時期は、毎年のようにこんな風が吹いてくる。
思わず目を閉じて、立ち尽くしたままでその風の感触を肌で感じていたくなるような、そんな風が。
「あれ？　隊長じゃないですか」
ふと聞こえたその声に背中を振り返ると、そこにはトライが立っていた。
「何だ。誰かと思えばトライか」
「何だ、ってのはひどいですよ。それよりも、もうお体の方は大丈夫なんですか？」
「ああ、お蔭様でゆっくり休ませてもらったよ。休みすぎて体がなまってしまったくらいだ」
「そうですか。ま、調子が戻られたのならそれはそれでよかったです。今日はこの後、どうなさるおつもりで？」
「いや、特には何も考えていないな。何だ？　用事でもあったか？」
「いえ、特には。ただ、絵に描いたような平和がここ最近続いているので、ちょっと……」
ああ、なるほど。
何となくだが、私にもトライの言いたいことは分かる気がする。
平和であることは願ったり叶ったりなのだが、そんな平凡な日常の中に何かこう……物足りなさのようなものを感じてしまうのだろう。
もちろん、平和に越したことはない。
きっとそんなことは、誰もが当たり前のように思っていることな

のだろう。
　平和ボケと言うほど平和に慣れているわけではないが、やはり我々は騎士なのだ。
　騎士とはつまり、戦いの中にしか生きることができないような存在だと言い換えてもいい。
　過言かもしれないが、強さを求める先とはやはりそういう場所にしか辿り着くことがないのだ。
　その追い求める強さが自分のためのものか、他人のためのものか、あるいはもっと別の何かなのかは千差万別。
　誰だって何らかの想いがあって、想いがあるから強くなろうとするのだ。
　結果として得た力は、争いごとの場でしか活かされることがないと知っても。
　それでも人は、どこかで強さを追い求めずにはいられない。
　そういう生き物なのだ。
　だから、人は懸命で、しかし時としてどうしようもなく哀れに映る。
　弱さが罪だとは言わない。
　しかし、弱さを庇う気もない。
　強さを求めるのは、そこに弱い自分があったから。
　または、あることを知っているから。
　動機も理由もやはりバラバラで、中には不純なものだって混ざるときがある。
　偉そうなことを言っている私だって、結局のところそうなのだ。
　私が強くなりたいと願い、そして女であることさえ気にも留めずに騎士の道を目指した理由、それは……。
　……あれ？
　……私は、どうして……？
　どうして私は……騎士になろうと思ったのだろう……？

「……隊長？　どうしたんですか、隊長？」
「……」
「隊長、もしもし？　聞いてますか？　隊長ってば」
肩を揺すられるその衝動で、私は丸で夢から覚めて跳ね起きたように意識を取り戻した。
「……な、何だ？　どうかしたのか？」
「それはこっちのセリフですよ。どうしたんです？　いきなりボーっとして、何回呼んでも返事してくれないじゃないですか」
「え……あ、ああ、すまない。ちょっと、考え事をしていた……」
「はぁ……それなら別にいいんですけど、やっぱりまだ、調子悪いんじゃないですか？」
「何を言うんだ。そんなにヤワな体ではないぞ、私は……」
「いえ、そうじゃなくてですね。肉体的な疲労ではなく、精神的な疲労とかじゃないんですか？　こういう言い方もちょっとアレですけど、最近の隊長、前にも増してボーッとしてる時間が増えてる気がしますよ？」
「前にも増してというのが気になるが……まぁいいか。それにしても、そうか？　そんなに私はボーっとしているように見えるのか？」
「いえ、見えるんじゃなく、してるんです。ボーっと。そりゃもう、遠目から見たらアホ……じゃない、まるで自分の世界に入り込んでるような、ジッと何かを考え込んでいるような……」
「……私がか？」
「はい」
「……」
そうなのだろうか？
自分ではよく分からない。
そもそも私は、そんなに何かを考え込むような素振りをしていたのか？
確かに立ち止まり、ぼんやり空や景色を眺めることはよくあったとは思う。

その様子が、他人の目には何かを考え込んでいるように、もしくはボーっとしているように映っているということだろうか？

……分からない。

やはりまだ体の方が本調子ではないのだろうか？

普通に生活する分には、もう何も苦労することはないのだが……。

「ほら、今だって」

言われて、私はハッと我に返る。

「今のは違うだろう。これはお前が指摘したことを考えていただけであって……」

「じゃあ聞きますけど、今俺が何回隊長のこと呼んだか覚えてますか？」

「……呼んだのか？」

「はい。四回ほど」

「……」

全く気がつかなかった。

これは本当にトライが言うように、精神的な疲労がまだ残ったままなのかもしれない。

「……まぁ、隊長が平気ならいいんですよ、俺は。差し出がましいこと言ってすいませんでした」

「……ああ。いや、いい。気にするな。お前なりに私の身を案じてくれているのは分かっているつもりだからな」

そう返しながら、やはり私はまた別のことを考えていた。

思い当たる節は特に何もない。

体の調子だって、万全とまではいかなくてもかなりいいはずだ。

傷の痛みも、もうほとんど何も感じないくらいにまで回復している。

不調を感じさせる要因を探す方が、今の私にとっては難しいくらいなのだが……。

「……そう、だな。確かに、まだ気付かないところで疲れが蓄積さ

れているのかもしれん。余計な心配をかけたな」
「あ、いえ。大丈夫ならいいんですよ、それで」
慌てて取り繕うように、トライは早口に答える。
「……私はそろそろ戻ることにする。兵達のこと、任せたぞ」
「あ、はい」
「ではな」
それだけ告げて、私は中庭をあとにした。
足取りがどこか重苦しい。
念のため、午後になる前に聖堂の方で体を看てもらったほうがいいかもしれないな……。

去り行く背中を、トライは見えなくなるまで見届ける。
その背中が小さくなって、横道に隠れて見えなくなった頃に、彼はふと呟いた。
「……呼んでないですよ、隊長」
不安げな眼差しのまま、見えなくなった背中を追いかけ彷徨うような視線を巡らせて。
「四回どころか、一回だって呼んでないです……」
その言葉はもう、届かないと知って。
それでも不安の色は募る。
濃く深く、まるで流れた血の赤がしだいに黒ずんでいくかのように。
「どうしちゃったんですか、隊長……」
届かない。
心地いいはずの風が、今は胸の中の不安を煽る要素にしかならなかった。

「安心してください。どこもおかしなところは見られません」

「……そうか」
衣服を着直し、私は再び鎧を体にくぐらせた。
「体内にあちこちあった損傷も、もうほとんど癒えています。秘薬のおかげもありますが、それを差し引いても素晴らしい回復力ですよ」
教会の医務室に所属しているシスターである彼女……ルイは微笑みながらそう言った。
この医務室は、騎士団の実戦訓練などでケガをした者達にも使われている施設で、私もルイとは顔なじみ程度には言葉を交わしたことがある。
しかし、こうして一人で医務室を訪れたことは初めてかもしれない。
病気を始めとして、風邪の類すら幼い頃からほとんどかかった記憶がなく、健康に関して私は今まで何も問題はなかった。
やはり考え過ぎだったのだろうか。
トライにあんな風に立て続けに言葉を重ねられたので、何となくそうではないかと思い込んでしまっただけなのだろう。
「手間を取らせてすまなかった」
「あ、いえ。どうせ暇でしたから」
シスターなのに暇なのはどうだろうなどとも思いながら、微笑むルイに私も小さく笑い返しておく。
「では、失礼するよ」
「はい……あ」
「ん？　何か？」
何か言いたそうなルイに、私は肩越しに振り返って聞く。
「いえ、大したことではないんですけど……」
「構わないよ。続けてくれ」
「えっと……何か、悩んだりしていることとかはありませんか？気になって仕方がないこととか。そういうことが、知らぬ間に精神的に自分を追い詰めている場合って、少なくないんです。だから、

ひょっとしたら……」

「気になっていること、か……」

あえてあるとすれば、他人の目に映る自分がそんなに心配されそうなほどの顔や雰囲気をしているのかどうか、ということだろうか。

いやしかし、これを言っては本末転倒だろう。

ようは、私がしっかりしていればいいだけの話なのだから。

「……いや、特には……」

そこまで言いかけて、ふい頭の片隅にその言葉が甦る。

「――本当はそんなこと、どうだっていいんです」

蒼い空に銀の星と金の月。

祭りの夜に出会った、小さな吟遊詩人はそう言った。

「――この世界はすでに泣いているんだから」

目に見えるこの世界を否定するような、悲しい言葉。

「――どうか、貴方は啼かないで」

その目は、悲しげに、しかし真っ直ぐに私を捉えて離さずに。

「――最後まで啼かないで」

何を想って、そう呟いたのだろうか？

「――貴方は全ての始まりに繋がり、そして全ての終わりに繋がる。そのことを、忘れないで……」

そうして、静かに消えた吟遊詩人。

短い詩を私に残し、何処へと。

「……どうか、しましたか？」

ルイがどこか心配そうに顔を覗きこんでくる。

「……いや、何でもないよ」

片手で制し、私は背中を向けた。

「……何もないんだ。不安も悩みも、何もね」

「……そうですか。なら、いいんですけど……」

「では、失礼」

パタンと、扉が閉じる。

ドクン。

心臓がわずかに跳ねた。

不安？

恐れ？

悩み？

そんなものはないはずだ。

……ないはず、なのに……。

「……っ」

あの時の言葉が……私だけが知る、吟遊詩人の詩が胸を締め付ける。

何かが始まろうとしていた。

いや、すでに始まっていたのかもしれない。

私が気付けないだけで、とっくに始まっていたのかもしれない。

始まる。

終わるために、始まる。

動き出した時の歯車は、もう誰にも止めることなどできない……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６７：静から動へ

「本当なのですか、それは？」
にわかには信じ難いという表情で、姫はすぐさま聞き返す。
「はい、事実です。すでにいくつかは、活動を開始しているとのことです。国境検問所の警備兵からの通達ですから、まず間違いないと思われます」
しかし冷静に、アクエリアスは繰り返すようにその言葉を肯定した。
時刻は昼と夕方のちょうど中間、場所は城内の謁見の間。
集められた人数はわずか十人にも満たない少数ではあるが、揃った顔ぶれはどれもがいわゆるお偉方の面々だった。
逆に言えば、そんな場所に私を含めた三人の騎士団長達が居合わせることが場違いにも見えてくる。
が、どうやら事は急を要するようなので、そんな細かいことにはいちいち構っている余裕はない。
私達がこの場所に集められたのは、アクエリアスによる召集の声があったからだ。
至急、姫を含めて耳に入れておきたいことがある。
そんな鶴の一声で、我々はこうして集まった。
そしてアクエリアスは、単刀直入に用件を口にした。
誰の頭でも至極簡単に理解できるような、しかしあまりに大それたその事実を。

「――国境検問所付近にある死火山群の一部が、活動を再開しました」

言葉にすればそれだけのこと。

しかし、その言葉が意味するところは多大なる危機を我々に対して告げるものでもあった。

「バカな！」

すぐに姫の側近を務めるクレイオが声を上げた。

「国境付近の火山群といえば、恐らくディオル渓谷一帯のものでしょう？　あの辺りの火山は確かに、過去にはいくつもの活火山が連なる危険な場所として知られていましたが、それも今から何百年も前の話です。その頃にちょうどやってきた国土全体の異常気象に伴い、全ての活火山は活動を停止し、そのまま死火山となっているはずだ。それが今になって、活動を再開したなどと……！」

「クレイオ、認めたくないのは分かります。私だってこの報告書に目を通し、あなたと同じ事を思いもしました。ですが、これは紛れもない事実なのです。すでに活動を再開した火山の一部からは溶岩が溢れ出し、山の斜面をゆっくりと下る様子が見て取れたそうです」

「……そ、そんな……」

愕然とするクレイオ。

それは無理もないことだ。

そして同時に、それは我々に対して規模の把握できない大惨事が近づいていることを意味している。

もしもこのまま火山活動が激しさを増し、さらに多くの死火山が連鎖的に活動を再開することになれば、大変なことになる。

この王都クリムゾニアは、地形で言えばちょうどすりばちの底の部分に当たる地形に位置している。

そこに流れ出した溶岩がとめどなく押し寄せれば、どうなるかは明白だろう。

もちろん、今すぐにどうこうということはないだろうが、それでも不安の色は残る。

自然の力とはそこまでに底が知れず、際限のないものなのだ。

無論、溶岩とて地表に出れば気温が冷えたことによって固まってはいくだろう。

なので、今も恐らく山の斜面を流れ続けているであろう溶岩が、そのまま固まって岩にでもなってくれればなんということはない。
が、それだけで済むとは思えない。
長い間……それも数百年単位で活動を停止していた死火山が息を吹き返したのだ。
これは憶測だが、その間に溜め込まれていたエネルギーの総量は、恐らくちょっとやそっとのものでは説明がつかない。
山一つを動かすほどの力なのだ、それも当然だろう。

「何とかならないのでしょうか？」
姫が懇願するように、アクエリアスの顔を覗う。
「……残念ですが、今は打つ手がありません。私達が太刀打ちできる範囲の相手ではないのです。戦争ならば敵兵を倒せばいい。ですが、今の敵は自然そのものです。どれほど兵の戦力をつぎ込んだとしても……いえ、恐らく人の手でどうこうできる範囲のものではないでしょう」
淡々とアクエリアスは言葉を述べる。
冷酷な言葉かもしれないが、それは紛れもない事実だ。
人間の力がどれだけ集まったところで、自然の力の強大さには手も足も出ない。
自然とはつまり、神に次ぐ精霊に次いでこの世界で強大な力を持つ、言わばあまりにも身近すぎるほどの敵なのだから。
「しかし、だからといって……」
やりきれないという表情で姫は困惑する。
何もできないと分かっていても、何もせずにはいられない。
分かっている。
姫に限ったことではなく、それが人間というものの考え方なのだ。
「とにもかくにも、今は落ち着いて今後の対策を考えるしかないでしょう」
後ろで控えていたトールがそう口にし、一歩前に出る。

「こうして手をこまねいていたところで、何かが起こるわけでもありますまい。奇跡を起こす神が都合よくいるのならばいくらでも祈りましょうが、どうやらそこには期待できないようです。我々にできることに最善の力を注ぐ。これが唯一の打開策では？」

「……私もトールに同感です。何もしないでいるよりは、何か行動を起こした方がずっといい」

私とトールの言葉を受けて、アクエリアスが頷く。

「そうですね。遅かれ早かれ、民もこのことに嫌でも気付かされるでしょう。もしかしたらすでに噂として広がっているかもしれません。そうなれば、街は混乱に陥ります」

「……民には、このことを勧告した方がよろしいのでしょうか？」

控え目に姫が聞く。

「……止むを得ませんね。本来なら余計な混乱を避けるべく、逆に気持ちを落ち着かせるべきなのですが、そうも言ってられません。人道的な動きなら予測は可能ですが、自然とはあまりにも気まぐれです。今は大丈夫でも、次の瞬間にはすぎに顔色を変えて襲ってくるやもしれません。それならば、事前勧告をして少しでも万が一に備えての非難の準備をさせておくべきでしょう」

「……分かりました。私はこれから勧告文を作成します。クレイオ、手伝ってくれますか？」

「承知いたしました」

「他の者は、このことを城内の者に伝達して事の重大さを認識させてください。騎士団長各位は、それぞれの部隊の兵に事情を説明後、速やかに兵を使って街全域にこのことを通達すること。ただし、決して騒ぎを大きくしないように。くれぐれもこれは注意を呼びかける程度のものにしておいてください」

アクエリアスの言葉にその場の全員が無言で頷き、静かに、しかし慌しくいくつもの足音が散開していく。

私達三人も足早に部屋を後にし、急ぎ足で各々の部隊の詰め所へ

と向かうことになった。
城内の廊下を走るたびに、いくつかの足音が急かすように交差する。
鎧の重さも忘れて、足を動かした。
走りながら、横目に城下の街並みに目を向ける。
そこは、まだ何も起こっていない……何も知らないありふれた日常が、当たり前のように広がっていた。
だが、数秒の後にその景色が、見る見る惨劇の色に染まり果てるかもしれない。
考えただけで寒気がする。
まだ何も手遅れになっていないというのに、何だろうこの焦りと憔悴は……。
「……くそっ、何だと言うんだ……！」
内に残る不安を無理矢理に振り払って、私は足を動かした。
階段を何段も飛ばしながら下り、中庭へ続く扉を乱暴押し開ける。
そのけたたましい音に、訓練中だった多くの兵の視線が私に集中した。
ああ、これならちょうどいい。
嫌でも私に視線が集まるから、集合させる手間が省けた。
「隊長、どうしたんですか……？」
肩で息を切らしながらそんなことを考えていると、トライはそんな声を漏らした。
答えず、私は大急ぎで呼吸を整える。
そして顔を上げ、今し方知ったばかりのことをその場にいる兵に伝えようと、口を開きかけたところで……。
――何の予兆もなしに、大地が咆哮した。
「な……」
「うわ……っ」

「な、何だ？」
「地震か？」
揺れを感じた多くの兵が、口々にそんな言葉を漏らす。
だが、そんな余裕もすぐに消えてなくなることになる。
揺れの勢いが、弱まるどころかさらに激しさを増していく。
最初は微弱な横揺れだけだったのが、今は縦も含めた全方向からの振動に切り替わっていた。
何か支えになるものがなければ、二本の足だけで大地に立つことなど不可能なくらいに、その揺れは大きくなっていた。
あまりに大きなその揺れに、すでに多くの兵が地面に組み伏せられたかのように倒れていた。
こうなると、地面にしがみつくくらいしか頼りになるものはない。
が、それさえもやすやすと打ち破るように、吼えた大地は雄叫びを上げる。
ビシリという亀裂音。
まさかと思いながらも地面に目を向けると、地面にはすでにいくつもの裂け目が生まれているところだった。
土色の地面の上だけではなく、亀裂は石畳の地面にもいくつも生まれ、岩盤を砕くかのようにその亀裂をどんどん枝分かれさせて走らせていく。
私もついには、肩膝をついて倒れてしまいそうになっていた。
剣を支えにどうにか堪えはするが、そう長くは持たないかもしれない。
これほど大きな地震の揺れは、生まれてこの方感じたことがない。
よもや、地面に裂け目を作るほどのものなんて……。
そこまで思い返して、私はハッと気付かされる。
同時に、わずかに耳に届いた新しい亀裂の音。
しかしそれは、足元の地面からではなく。
もっとこう……はるか上空、上方向から聞こえてきたもので……。
振り返るように天を仰ぐと、そこには。

――この揺れによって剥がれ落ちた城壁の一部の岩盤が、今まさに落下しようというところだった。

その大きさは、楽に十人以上を押し潰すことができるくらいの面を持っていて。

とてもじゃないが、今から逃げろと叫んだところで、体勢を崩した兵達は気づくことが精一杯だろう。

パラパラと、岩盤の一部が零れ落ちる。

そして、一瞬の間を置いて、岩盤は重力から解き放たれた。

直感する。

無事ではすまないと、本能が告げた。

「逃げろぉぉぉっ！」

無駄だと分かっていても、やはり私は叫んでいた。

そして思ったとおり、多くの兵はその声に気付かされ、ゆっくりと天を仰ぐことしかできず……。

何が起こったか理解する頃には、岩盤の下敷きになって血まみれになっているに違いない。

間に合え、間に合ってくれ……っ！

願い、不安定な大地の上にもう一度二本の足で立つ。

支えの剣を引き抜き、無我夢中でその剣先に全神経を集中させた。

風が生まれる。

すでに剣は振るわれている。

下から上へ、切り上げるように素早く、力強く。

「間に合えぇぇぇっ！」

風の開放。

剣先から解き放たれた紺碧の光は弾となり、落下してくる岩盤に向けて正面から激突した。

そして、爆音。

大砲が壁を突き破るような、そんな爆音を響かせながら、粉々に

砕かれた城壁の欠片がそこら中にパラパラと落ちてきた。
粉塵が舞う中、何が起こったのか理解できていない兵も多い。
しかしどうやら、誰一人として大きなケガは負わずにすんだようだ。
「……っ、う……」
グラリと、私の体が遅れて重力に引き寄せられる。
「た、隊長！」
その体を支えてくれたのは、隣にいたトライだった。
「大丈夫ですか？」
「……ああ、平気だ。少し、張り切りすぎただけだ……」
本来、この力を解放するには一定時間の溜めのようなものが必要なのだ。
今回に限り、それを全く無視して力を解放してしまったため、それだけ体に跳ね返る負担も大きかった。

揺れは今もまだ続いている。
一時に比べればずいぶんと弱まってはいるものの、それでも油断はできない。
「一体、何が……」
トライのその言葉に、私は思い出したように告げた。
「……トライ、緊急事態だ。天変地異か何かかは知らないが、今この国そのものが不安定な状態にある。もしかしたら、この地震もその影響かもしれない。すぐに兵達にその旨を伝えて、街の民にも注意をするように促すんだ。そのあとは、今の地震で被害が出ていないかどうかを調べろ。いいな……」
「ちょ、隊長？　どこ行くんですか？」
「私は一足先に、街の様子を見てくる。お前も後から続け。任せたぞ……」
ふらつく体に鞭打って、私は急いで城下への道を走る。
「副隊長、これは一体？」

「何が起こってるというんですか？」
背中でそんな兵達の声を聞きながら、私は急いだ。
気がかりで仕方がないことが、一つだけあった。
「……アリス」
少女の顔が浮かぶ。
「無事で、いてくれ……」
約束はまだ、果たせてない。
いや、果たせなくなるかもしれない。
そんな不安さえも振り払って、走る。

青い空は、もうどこにもなくなっていた。
まるでいくつもの絵の具が混ざり合ったように、不気味な混沌を思わせる色が、空には広がっていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６８：ワールドエンド

目の前の光景に思わず目を疑う。
何だ、これは？
思わずそう呟きたくなるほどの光景が、実際に目の前に広がっていた。
ひび割れた地面、倒壊したいくつもの家屋や店先、そして路上に倒れる人々の姿。
舞い上がる砂煙はまるで砂漠のようで、あれほど賑やかだった街並みはすでにどこにも見当たりはしなかった。
わずかに聞こえるのは、苦悶を思わせる人々の呻き声と、今もなお地響きを続ける大地の咆哮だけ。
不安定すぎる地面の上、私は呆然とその光景を見ていることしかできなかった。
が、ほどなくして我に返る。
目の前の状況を把握するよりも早く、助けなくてはいけないという思考が働いた。
「くっ……！」
駆け出す。
城門から一般道へと続くこの架け橋も、ずいぶんと亀裂が生じており、正直言って走ることなど言語道断だ。
だが、それでも急がずにはいられない。
こうしている間にも、またどこかで建物が倒壊し、誰かがその下敷きになって命を落とすかもしれないのだから。
「大丈夫か？　しっかりしろ。すぐに助けが来る」
すでに多くの騎士団兵が住民の救助に当たっており、私の不安もわずかばかりに軽くなる。
間もなく聖堂教会のシスター達もやってくるようであり、怪我人

の手当てはそちらに任せたほうが無難だろう。
今はまず、一人でも多くの人々を救わなくてはならない。
倒壊した建物の破片がそこらじゅうに散らばり、思った以上に道は歩き辛い。
立ち込める砂煙は依然として残ったままで、視界も悪い。
加えて、大小様々な亀裂が地面を引き裂いているので、そこに足をつまずかせてしまう危険もある。
細心の注意を払いながら、それでもできる限りの急ぎ足で私は走った。
向かう場所は一つ、大通りから少し外れた路地裏の小さな花屋。
「……っはっ、はぁ……」
息が切れる。
砂埃を丸ごと肺の中に吸い込んでいるようで、ひどく気分が悪い。
だが、なりふり構ってはいられない。
少しでも早く、無事な姿をこの目に刻み付けるまでは……。
記憶を頼りに路地を曲がる。
一転して、視界が開けた。
どうやらこの通りは、まだ建物などの倒壊などには至っていないようだ。
比較的整然とした街並みが広がり、惨事が起こっていることなどまるで気付かせないほど。
そんな一角に、小さな花屋は無事な姿のまま佇んでいた。
屋根も潰れていなければ、壁も壊れ落ちていない。
よかった、無事のようだ。
内心で安堵の息をついて、私は歩調を緩めかけ……。
「……？」
視界の端に映るその景色に、目を疑う。
それは、わずかな違和感。
普段なら鉢植えが置かれている木の棚。
その、下の辺りから。

何か、こう……あってはならないような、そんなものが覗いていたような気がして……。

「……っ」

見れば見るほどに、それは不可解なもので。

緩めた歩調を再び急かせるよりも早く、心臓の鼓動が跳ねた。

ドクン、と、大きく一つ。

それは。

小さな手。

それは。

微動だにしない五本の指。

それは。

広がる赤い水溜り。

あっては、ならないもの。

「……っ、アリスッ！」

叫んだ。

駆け出したのが先か、叫んだのが先だったか。

いや、もはやそんなことはどうでもいいことだ。

この目で、確かめなくてはならない。

そこにあるものが、夢幻のものか、残酷な現実なのか。

前者であってほしいと、願わずにはいられなかった。

それはもちろん、アリスではなく、彼女の姉のエルクであってもだめだ。

だからこれは、きっと私の見間違い。

悪い夢でも見ているんだと、そう思いたかった。

足音が地面を打つ。

ずいぶんと乱暴な足音だった。

焦りが、不安が、恐れが。

ありのままに形となって現れていた。

そして、覗き込んだ視界の先に広がるそれは……。

刹那、地鳴りがした。
大地がいっそう激しく揺れ出し、あちこちで小さな悲鳴が連続した。
まともに立っていることもままならず、多くの人々は転び、膝をついた。
そんな中で。
私だけが、やけに自然体のままで立ち尽くしていた。
しっかりと二本の足で地面を踏みしめて、微動だにせずに。
ただ、見ていた。
この目に映る、紛れもない現実を。
「……ウソ、だ……」
呟く。
「ウソだ……」
呟く。
何度も、何度でも。
誰かがこの言葉に続き、嘘だと認めてくれるまで。
「そん、な……ウソだ……」
地鳴りが止んだのに、私の膝は軽々と折れた。
ガクンと体が沈み、鎧の重さがそれを後押しするように両肩にのしかかった。
「どう、して……」
片言の言葉しか出てこない。
否定することだけを繰り返して、目の前の現実を受け入れることができない。
受け入れられるわけがないだろう。
どうしてこんなことになってしまったんだろう。
誰でもいい、嘘だと言ってくれ。
……まだなんだ。
まだ、花を選んでもらってないんだ。

一緒にお見舞いに行く約束もしたんだ。
全部、果たせてないんだ。
……なぁ、だから。

――嘘だと、言ってくれ……アリス……ッ！

横たわる小さな少女の体。
四肢は力なく地に伏せ、その顔も瓦礫の山に埋もれて見ることができない。
唯一、その瓦礫の山から這い出るように伸びた右腕が、その先にある小さな鉢植に必死で手を伸ばしているようで……。
その先にある鉢植えは、無残にも砕け散り、土は零れ、花は地面に転がっていた。
真っ白な花だった。
まるで、あのオリビアの花のように白く美しい、光のような花だった。
「うあああああ……っ！」
叫んだ。
叫び声さえ、地鳴りに巻き込まれて消えていく。
どこで何を間違えてしまったのだろう。
間違いの始まりはいつからだったのだろう。
巻き戻れ、時間。
そう願わずにはいられなかった。

砂埃に身を包まれ、私は街外れへとやってきていた。
どこをどう歩いたかなんてもう覚えていない。
人々の救助に当たることさえも忘れて、木の幹に背中を預ける。
ズルズルと背中を引きずって、腰を折った。
途端に訪れる虚無感。
がらんどうな大穴が開いてしまったかのよう。

その穴は底なしに深く、永遠よりも暗い。
奈落というものが本当にあるのだとすれば、それはこのようなものなのかもしれない。
「……」
言葉が出ない。
何かを考えようとすれば、ついさっき目の当たりにした光景が鮮明に甦ってくる。
瓦礫をどかしたその下からは、無残な少女の姿が出てきた。
本当にひどい有様だった。
言葉で形容するだけで、私は憤慨にもにた感情を沸き立たせてしまうだろう。
それでも顔には傷痕が少なかったことが、せめてもの幸いだろうか。
アリスの瞳は硬く閉じられ、もう二度と開くことはない。
目の端に涙の流れた跡があった。
痛みに負けて流れたものなのか、それとも、こない助けを待ち続けて流したものなのか。
そのどちらだとしても、私は結局間に合わなかったのだ。
痛みを和らげることも、駆けつけてもう大丈夫だと声をかけてやることもできなかった。
本当に、呆れるほどに無力だ。
どれだけ力があっても、その力は人一人さえ救うことができず。
すでに事切れた亡骸を前にして、私は何もできなかった。
アリスは一体、何を思って最後の時を迎えたのだろう。
あの子の手が伸ばした先に、何があったのだろう。
あの花は、誰に向けて……。

何度も胸の中で繰り返す。
そのたびに、答えはいつも同じことを教えてくれる。
きっとあの白い花が、アリスの選んだ花だった。

殺風景だった私の部屋を飾る花になるはずだった。
どんな想いで、その花を選んでいたのだろうか。
あれこれと試行錯誤し、悩んでいたのかもしれない。
次に私がやってくる日を待って、わずかに胸を躍らせながら。
喜んでくれるだろうか、とか。
笑ってくれるだろうか、とか。
そんなことを思いながら、選んでくれた花なのだろう。
手を開く。
真っ白な花弁が、砂埃に汚れて静かに揺れた。
「……何で……」
いっそのこと、力任せにその花を握り潰してしまえばいい。
「どうして、お前が……」
手が震える。
何も怖くないというのに。
震えが、止まらない。
「……っ、どう、して……っ！」
両手でその花弁を包み込む。
今更になって、どうしようも悲しくて仕方がなくなって。
遅すぎた感情の昂ぶりが限界を超えて、涙となって私の頬を伝った。
心が冷たい。
なのに、涙はこんなにも暖かい。
わけが分からない。
心はすっかりからっぽになっているようなのに、どうして涙はこんなにも暖かいんだろう。
どれだけ泣いても。
どれだけ叫んでも。
どれだけ喚いても、過ぎた時間はもう戻らないというのに。
こうしてこの花を握って、アリスのことを思うだけで、自然と心が軽くなる。

見えない腕に包まれているよう。
もううろ覚え程度にしか覚えていない、母親の腕の中によく似ている。
頬を伝う涙が乾いていく。
それを後押しするように、優しい風が一つ、私の隣を通り抜けた。
そして……。

「――啼かないで」

その声は聞こえた。
私はゆっくりと顔を上げ、目の前に向き直る。
そこに。
彼は、いた。
大きすぎるぶかぶかの三角帽子を被り、真っ黒な外套に身を包み、なぜかとても悲しそうな目をしてそこに立っていた。
祭りの夜に出会った、アルと名乗った吟遊詩人の少年が、そこにいた。
「……どうか、啼かないで。世界が泣いて、貴方が啼いて、それじゃあきっと未来まで泣いてしまうから」
相変わらず、彼の言葉はどこか意味が分からないままだった。
しかし、それでも。
なぜだろう。
今ならその言葉の意味が、分かる気がした。
分かる気がしたんだ……。
「残酷かもしれないけれど、この世界はもうすぐ終わる。何もなかったことになる。誰に記憶にも残らず、誰の過去にもならない。そして誰の未来にもなれず、朽ち果てていく」
「……」
「もうたくさんだ。こんな結末を、僕は幾度と泣く繰り返してきた。もう見たくもない。絶望すら感じている」

彼の言葉に耳を傾ける。
語るように詠うように、言葉の一つ一つが溶けていく。
「だけど僕は、希望を信じずにはいられない。たとえ同じ基盤を持つ世界だとしても、その運命さえも捻じ曲げて変えていく、そんな世界があることを期待してしまうんだ」
彼は帽子を取り、手に持つ。
「誰だって、望んで生まれてくるわけじゃない。なのに、生まれたら死という終わりが付きまとう。そんな理不尽の中で、それでも懸命に生きて、明日を見て、昨日を見て、今日を歩いていく。だから、きっと……」
そして最後に、ほんの微かにだけ微笑んで、言った。
「――次こそは、どのレールの上も走らない運命があらんことを祈って……」
そう告げて、彼の姿は静かにその場から姿を消した。
まるで最初から何もなかったかのように、忽然と。
その言葉を、私はどこまで聞いて覚えていたのだろうか。
遠くでまた悲鳴が聞こえる中、そのまま私は意識を失っていった。
木の幹に寄りかかり、眠りにつくように。
そして、本能的に分かっていた。
――もう、目覚めは訪れはしないだろう、と。
少なくとも、この世界では……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６９：そして記憶は時を超え

ここはどこだ？
誰かが聞いた。
ここはどこでもない場所だよ。
別の誰かが答えた。
二人……というには、お互いの姿も何も見えていないこの場所で、それらのやりとりは会話と呼ぶにはほとほと縁が遠いものだったかもしれない。
しかしそれでも、一つの問いに対して一つの答えが返ってくる以上、とりあえずの会話としては機能を果たしているようだ。
暗い暗い、まるで澱んだ水の底のように暗い場所。
暗いだけであって、そこはきっと黒い場所ではない。
ずっと目を閉じているから色が見えないだけで、本当はまぶたの裏に微かな光を感じていた。
眩しいなと思いながらも、その目を開くことはできない。
手で逆光を遮れば問題はないはずなのに……。
どうして、目を開けることができないんだろう？
それは、あなたがそうすることを恐れているから。
また、誰かが答えた。
口にしたわけでもない問いに、その声はやけに正確に答えを返してくれる。
……恐れている？
何を、恐れているんだ？
この際、声の主が誰であるかなんてもうどうでもいいことだった。
どうせ姿は見えやしないのだから、大きな変化はないだろう。
だから問い続ける。
今を知るために、ここを知るために。

君が恐れているのは、全て。
と、あっさりと別の誰かは答えてくれた。
だが、その答えが意味するところがよく分からない。
全てだって？
全てって、一体どれだけのことなんだ？
全ては全てだよ。
やはりあっさりと、その別の誰かは答える。
目に見える景色、耳に届く音、鼻に届く香り、肌で感じる風や日差し、二本の足で立つ大地、仰ぎ見る空。
その全てが、君にとっての大きな恐れ。
目を開けたときに、あまりにも不安定な現実がそこにあるのではないかと、君は無意識のうちにずっと恐れている。
ずっとずっと、永い間……。
……。
すぐに反論することはできなかった。
そんなはずはないと、笑い飛ばしてしまうことができなかった。
それはきっと、その言葉が少なからず真実の的を射ていたからなのだろう。
実際、その別の誰かの声は適切な答えを返してくれてはいるが、その正体は明らかではない。
未知の物に対する恐怖を、すでに持ち合わせてしまっていた。
確かに聞き取れるその声が、ここまで不安の色を濃く募らせるものになろうとは……。
……そう、なのかもしれないな。
何がだい？
いや、君の言うことが正しいんだろうなって、そういうことだよ。
本当は怖くてたまらないんだと思う。
ただそれを、正直に感情に表すことができていないだけで、本当は手足が震え、歯の音が合わないくらいに体は怯えているのかもし

れない。
でもそれを、実感することもできないんだ。
それは多分、恐れることまでも恐れてしまっているから。
素直に怖いと思うことさえ、できなくなっているんだと思うんだ。
……そうだね。
一拍の間を置いて、別の誰かは答えてくれた。
さっきまでとは少し違う、どこか寂しげで悲しげな声で。

君は、何でだと思う？
何でって、何がだい？
別の誰かの問いに、聞き返す。
どうしてこんなところにいるんだろうって、そう思わないかい？
本来ならお互いに住む世界があるはずなのに、こんな得体の知れない場所にいるなんて、おかしいとは思わない？
……ああ、確かに。
言われて初めて気がついたよ。
アハハと、小さく笑っておく。
本当に言われるまで気がつかなかった。
どうしてだろう？
まるでこの何もないような場所が、自分の居場所だと思っていたようだ。
だって、何もないから。
自分がいるべき世界、いるべき場所の記憶なんて、いくら探したところで見つかりはしなかったから。
だからきっと、そう呼べる場所はもうどこにもなくて。
一人彷徨って、迷い込んでしまったのだろう。
入り口も出口もない、この迷路のような暗がりの中へ。
……それは違うよ。
……え？
その声に思わず聞き返す。

誰だって、望んでこんなところへやってくることなんてできない。
だってここは、どこでもない場所だから。
そこにあって、そこにない場所なのだから。
……。
その言い回しがひどく曖昧なのに、言葉にはやけに説得力があった。
それはきっと真実なのだろうと、無意識のうちに信じ込んでしまえる。
……だったら、一つだけ教えてくれないか？
……何？
ここは、一体どこなんだ？
その問いに、やはり一拍だけの間を置いて、別の誰かは答えた。

――ここは、箱庭。

ポツリと、一言。
そして詠うように続ける。
どの世界にもない、だけどどの世界にも繋がる場所。
記憶と記憶を結び、どこかに繋げる場所。
ここが始発駅で、同時に終着駅でもある。
けれど、レールなんてものはどこにもない。
それらは全部、誰かが歩いた足跡の上に残るものだから。

じゃあ、どうしてそんなところにいるんだ？
君が、それを望んだから。
……望んだ？
覚えていないのかい？
……。
君は望んだんだ。
どこでもない、どこにもない場所を求めたんだよ。

正義も悪もない、肯定も否定もない、過去も未来もない、この場所を。

……分からない。

本当に、そんなことを望んだのだろうか？

気付けなくても、それは仕方のないことだと思う。

だって君は、全てに絶望していたから。

崩れ行く世界の中で、君の心もまた同じように崩壊しようとしていた。

あのままだったら、間違いなく君の存在そのものも崩壊に呑み込まれ、記憶にも残ることはなかった。

だけど君は、絶望の中で微かに望んでいたんだ。

やるせない、悔しいと。

歯がゆささえ感じながら、そして君は無意識のうちに願った。

もしもまた似た局面に遭遇することがあれば、そのときこそ何かを変えることができるだろうか、と。

何かを、変える……。

呟いて、何かが光った。

心の奥底で、灯火のような小さな光が瞬いた。

何かを思い出そうとしている。

何かが思い出されようとしている。

……変わる、世界、何か、別の……。

それらはまるで、一つ一つが星屑のように瞬いて。

月も夜空もないのに、銀色に輝いていた。

どこかで見たその景色。

そうだ、あれは確か……。

何かが甦る。

あの日、あの時、あの場所で。

確かに見上げた、銀の星と金の月と、蒼く澄んだ夜空の広さ。

……そう、か。

私は、あの時に……。
フッと、途端に心が軽くなる。
重力から開放され、自由に空の海を泳いでいる。
……思い出したかい？
その声にも、どこか聞き覚えがあった。
ああ、思い出した。
思い出せたよ。
大切なことを、思い出すことができた。
ゆっくりと目を開く。
そこには、闇なんて何一つとして広がっていなかった。
あったのは、眩しいくらいにどこまでも広がる、白い光の空間。
上も下も、右も左もありはしない。
一面が真っ白。
まるで、これから作り上げられていく白地図のよう。
そこに、いた。
顔は確かに微笑んでいるのに、どうしてか目の端に溢れんばかりの涙を携えた少年が。
彼は小柄なその体には不釣合いなくらいにつばの大きな三角帽子を被り、体はダブダブに大きいマントで覆われている。
……ごめんね。
その、彼が言う。
僕には、こんなことしかできないけど……。
そう言って、また泣きながら微笑んだ。
……信じているよ。
貴方が次の世界で、きっと価値ある未来を作り出してくれることを……。
それだけ言って、彼はその手を広げた。
そこには、何の変哲もない銀色の小さな指輪が一つ握られていた。
差し出されたそれを、私は受け取る。

僕には、貴方を転生させるだけの力はない。
けれど、貴方の魂を次の世界に繋ぎとめておくことくらいはできる。
これが僕にできる、最初で最後の、最大の譲歩。
私の手の中で、冴えない色の指輪が共鳴するかのように微かに光る。
そして私はその指輪を、指へと導く。
瞬間、体全体が光に包まれる。
ものすごい力で吸い込まれるような感覚。
大丈夫。
彼は言う。
その指輪が、貴方と次の世界を繋ぐから。
それは『Ｒｉｎｇ』と呼ばれる、記憶を超える遺産。
必ず貴方の魂を、無事に運び届けてくれる。
体全体が光に覆いつくされ、私という存在そのものが光に溶け込んでいくようだ。
……僕は、裏切られることには慣れたつもりだった。
けれど、何度繰り返しても心が痛むんだ。
もう終わりにしようと誓ったはずなのに……どうにも諦めが悪くてね。
アハハと、彼は自嘲気味に笑う。
そんな笑みが私は、どうしてもがまんできなくて、ついつい口を挟んでしまうんだ。
「……啼くな」
その言葉に、彼はハッとなって顔を上げる。
「もう啼くな」
私は繰り返す。
「どれが正しいか、どれが間違いかなんて、私には分からない。だけど、これだけは約束する」
真っ直ぐに目を見て、言うんだ。

「――運命なんて、いくらでも書き換えてみせる。だからもう……諦くな」

その言葉が、彼にはどう届いたのかは定かではない。

直後に私の体は、とうとう光の粒子の一つとなって音もなく消失した。

どこにあるかも分からない、ここから始まり、繋がる世界を求めて旅立った。

しかし、その最後の瞬間。

微かに聞こえた、その消え入りそうな言葉を。

私は、絶対に忘れない。

――ありがとう……。

その言葉を、絶対に……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６９：そして記憶は時を超え（後書き）

お久しぶりになります。
作者のやくもです、こんにちは。
本作ＬｉｎｋＲｉｎｇの第二部とも言うべき過去回想編も今回で終わり、次回からはまた物語の舞台である現代編へと話が移行します。
時代をいったりきたりで読みにくいということもあるとは思いますが、どうかお許しを。
とはいえ、純正なファンタジーに比べて見劣りするような文章力しか持ち合わせておらず、お恥ずかしい限りです。
ともあれ、物語り全体としてはもうそろそろ折り返し地点の付近までやってきていると思います。
ここまで読んでくださった方々に改めて感謝の言葉を送りつつ、どうか最後までお付き合い願えればと思います。
それでは長文ですが、今回はこの辺で。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７０：一つの提案

気が付くと……いや、そもそも気を失っていたのかそうでないのかさえ定かではなかったが、今この瞬間には間違いなく、僕の意識は現実の中へと引き戻されていた。

目を開ける。

すると、僕の周囲を取り囲むように、ただどこまでも真っ白なだけの空間がそこにはあった。

どこまで続くかも分からない地面の先には、地平線と呼ぶべきものさえも映らない。

ここが世界の果てなのか、はたまた中心なのか。

と、そんないらない詮索を始めるよりも早く、嫌でも目に付くものが一つ。

僕の目の前には、立ち塞がるかのような一つの扉が立っていた。

どこか古めかしくて、よく見ればあちこちが錆付いて変色しており、その割には金属の質感をまるで感じさせない。

そんな扉ではあったが、僕は確かに見覚えがあった。

どれだけ過去のことかは分からないけど、僕はこれと似たような扉をくぐり、その先にある奈落のような闇の中に吸い込まれるようにして意識を失ったのだ。

そう。

記憶に触れてくれという、彼女の言葉と共に。

夢から覚めたような感覚がまだ残っている。

だが、僕の頭の中にはなかったはずの映像や言葉、記憶といったものが多く詰め込まれていた。

それらは全てがバラバラのように見えて、実はちゃんと全てが一つの物語として繋がっている。

結論から言うと、それはひどく悲しい物語だ。
かつて、世界のどこかに確かにあったはずの国の話。
その世界で起こった、平凡な日常から始まり、やがて回避できない破滅へと続いていく物語。
目を閉じ、耳を塞がれ、ただイメージだけを無理矢理頭の中に流し込まされたような、そんな感覚。
感想を聞かれても答えることはできないだろう。
けどその反面、受けた印象はあまりにもリアルだった。
忘れろと言われて忘れることはできないと思う。
僕はそんな鮮明すぎるイメージを思い返しながら、指に収まったままの『Ｒｉｎｇ』へと目を落とす。
そこからは今、何の光も感じられはしない。
指の中のそれは、どこからどう見てもただの冴えない銀色の指輪に過ぎず、その中に一つの意思が存在しているなどとは誰も想像できないだろう。
だが、それでも。
彼女は、そこにいる。
そこにいて、僕に全てを見せてくれた。
痛みも悲しみも、嬉しさも楽しさも。
全部全部、そこにある。
決して夢幻なんかじゃない。
だから、全てを知った今、僕は戻るべきなんだと思う。
他でもない、僕がいるべき世界へと。
そしてこの扉は、僕の世界とこの場所を結ぶ唯一のもの。
……還ろう。
まだ、何も終わってはいないのだから。
終わらせるために、還ろう。
その先にある未来が、価値あるものになることを信じて。
そう、それは例えるなら……。

――いつの日か見た、銀の星と金の月が浮かぶ蒼い空に、変わらぬ明日を願っていた頃のように……。

還ろう。
僕は、僕の世界を……僕の時代を歩く。
きっと、誰かが傷付くだろう。
きっと、誰かを傷付けるだろう。
きっと、僕も傷付くだろう。
だけどそれは、確かな今を生きる証になるから。
いつか彼女が願っていた、繰り返される過ちを止めることができる未来が、今ならば。

――それまでに過ごした孤独な時間も、やがて優しい記憶に変わるかもしれないから……。

扉に手を触れ、軽く押す。
ギィと音を立て、いとも簡単に扉は開いた。
扉の向こう側から、白い光が溢れる。
眩さに目を閉じて、そのまま足を踏み出した。
ふと、軽くなる体。
重力から開放されて、微かに浮かぶ。
そしてこれが、長かった夢の終わり。
次に目を覚ませば、そこはもとの世界。
また、今日が始まる。

目を覚ます。
見慣れない天井が映った。
少なくとも、自分の部屋のものではない。

何度か瞬きを繰り返し、首から上だけを動かして辺りを見回す。
部屋の中は灯りが消され薄暗かったが、カーテンの向こう側からはオレンジ色の光がわずかに差し込んでいた。
体を起こそうとしたが、思うように体が動かない。
全身が鉛にように重く、気のせいかどこか息苦しささえ覚える。
「……っ」
どうにかこうにか上半身だけを起こして、前のめりに転がりそうな頭を手で抑えた。
少し頭痛がする。
風邪を引いたときの症状によく似ている。
しばらくの間そのままジッとしていると、徐々に痛みは引いていった。
「ふぅ……」
重い溜め息を一つ吐き出して、僕はのそのそと二本の足で立ち上がる。
体全体がまだどこか不安定で、ふらふらと揺れた。
危なっかしいなと自分でも思いながら、壁を支えにしながらカーテンを開け、そのまま引き戸を開けた。
ガラガラと音を立て引き戸が移動する。
次の瞬間、思わず目を閉じたくなるような眩しい光が目に飛び込んだ。
それが夕陽の逆光だと気付くのに大した時間はかからなかったが、眩しさが後押しして頭痛が少し戻ってきてしまう。
少しずつ目が慣れてくるのを待って、僕はそのまま廊下へと出る。
改めて景色を見てみると、外はすっかり夕暮れ色に染まり返っていた。
僕の目の前に広がる砂地の地面の上には、長く伸びた木の影が迫っていた。
あちこちの地面にまだ新しい穴の跡のようなものがあり、それを見て僕はふと思い返す。

ここは一体どこなのだろう、と。

しかしそれを口に出して問いとするよりも早く、廊下の向こう側から現れた人物の声によって僕は理解させられる。

「よぉ。気分はどうだ？」

振り返るとそこに、真吾の姿があった。

「……真吾？」

確かめるように僕は呟く。

同時に頭が重くなり、思わずその場に膝を付いて崩れ落ちてしまった。

「っと、無理すんなって。まだ体の方が本調子に戻ってねーんだからよ。本当なら、二、三日意識を失ったままでもおかしくないんだからな」

真吾の肩を借り、僕は立ち上がる。

「とりあえず、目が覚めたんならあいつらに顔見せてこいよ。ずいぶん心配してたみたいだぜ？」

「……あいつら？」

言われて僕は気付く。

いや、ようやく思い出したといったほうがいいだろうか。

僕は……もとい僕達は、今朝方に風の封印を解放したばかりであり、その直後に僕は体に異変を覚えたのだ。

間もなくして僕はそのまま意識を失ってしまったが、それからどれくらい時間が経っているのだろうか？

真吾の言葉と実際の夕暮れから思うに、あれから今までの間ずっと意識を失っていたようではあるが……。

「……二人は、どこにいるの？」

「向こうの客間だ。いってこいよ」

言われて、僕はまだどこかおぼつかない足取りで廊下を進む。

少し遠くで、子供達のはしゃぐような声が聞こえた。

日常の中、さほど珍しくもないその光景が、ひどく懐かしく思え

た。

「……ふぅ」

そんな僕の背中で、真吾が意味深な溜め息を吐き出していたことを僕は知らなかった。

「どうやら、もう止まることはないか……」

諦めたような、面倒くさそうな、そんな溜め息。

茜色に染まった遠くの空を見て、呟く。

「――凍りついたままの時の歯車が、今になって動き出した、か……」

どこかでカラスが鳴いていた。

カァーと、相変わらず誰かをバカにしたような声で。

「……ウルセェよ、バーカ……」

空に吐き捨てて、真吾ももと来た道を引き返した。

引き戸を開けると、そこにはちょっと予想もできない光景が広がっていた。

ワイワイと騒ぐ子供達は、その二人にやたらと懐いているようで、腕を引っ張ったり背中によじ登ったりしている。

もちろん、その二人というのは氷室と飛鳥に他ならない。

「……」

入り口でしばし呆然と立ち尽くし、僕は何度かまばたきを繰り返す。

「あ」

「おや」

と、二人も僕の姿に気付いたようで、そんな呑気な一声を返してくる。

「大和、よかった。もう大丈夫なの……って、こら、腕引っ張らな

いの。痛い、痛いってば……」
「まだ少し疲れているようですが、無理は禁物ですよ……だから、眼鏡が壊れるからいじらないでくださいと何度言えば……」
間違いなく僕を心配してくれているのだけれど、言葉と言動が全く一致していない。
すでに飛鳥は何人もの子供達、特に女の子の多くに質問責めにされ、氷室に至ってはその物静かな態度がかえって災いしたかのように、からかうような態度で男の子達が絡んでいるように見える。
なんというか、実に平和な風景がそこには広がっていた。
とはいえ、当の二人はすっかり疲弊しているようであり、その顔にはすでに疲れたという言葉が何度も上書きされているようだ。
「こらこら、お客さんに皆何してるの。もうすぐ夕飯の時間なんだから、それまで部屋で大人しく遊んでなさい」
奥からやってきてパンパンと手を叩き、子供達を静めたのは見た目三十代半ばほどの女性だった。
その声に子供達はーいと間延びした返事をし、わらわらと群がって廊下へと出て行く。
ドタバタという足音がいくつも繋がって、大家族を養う狭い家を思わせるようだった。
「……はぁ、助かった」
心底疲れ切った声で飛鳥が言う。
「……だらしないですよ、と言いたいところですが、今回ばかりは同感です。最近の子供は部屋の中でゲームばかりしてるかと思っていましたが、どうしてこんなにパワフルなんでしょうかね」
ずれるというよりはどこか曲がってしまったような眼鏡を直しながら、氷室も溜め息交じりでそう呟いた。
「どうもすいません。どうにも人見知りしない子ばかりで。悪いことじゃないんですけど、限度がないというか……」
困り果てた母親の表情を見せながら、女性は言った。
実際、彼女はあの多くの子供達の母親と同じようなものなのだろ

う。

前に真吾に聞いた話だと、ここは孤児院のはずだ。

つまり、何らかの理由によって親を失ってしまったり、親戚などに受け入れられなかったりした子供達が集まる場所。

そう言っていた真吾本人はどうなのか知らないけど、ここで暮らしているということはそういうことなのかもしれない。

まぁ、必要以上の詮索はしないでおこう。

「まぁ、何はともあれ意識が戻ってよかったですよ」

テーブルを挟み、僕達三人は向かい合って座る。

「どうですか？　まだどこか痛むところとかはありますか？」

「ん、今は平気。まだ体があちこちだるいけど、そのうちマシになるとは思う」

「そうですか。てっきり、飛鳥の電撃が思った以上に強くて、心臓麻痺でも起こしてしまったのかと……」

「ちょ、ちょっと！　そんなヘマしないわよ。そりゃ、あのときはちょっと焦ってたけどさ……」

「……どういうこと？」

「ああ、大和は覚えていませんか。実は、あなたが意識を失う前に、痛みに苦しんでいましたよね？　そこまでは覚えてますか？」

「うん、何となくだけど……」

思い出そうとすると痛みまで戻ってきそうなので思い出したくはないが、確かに言葉では表現できないような痛みが全身を走っていたのを覚えている。

「そのいわゆる、発作状態に近いものを止めるために、やむなく飛鳥の力で電撃を叩き込みました。ようするに電気ショックを与えて気絶させたわけです」

「ああ、そういうことだったんだ……」

「ちゃ、ちゃんと加減したわよ？　ほら、実際に大和だってこうして起き上がってきたわけだし……」

「結果論でしかないですが、まぁよしとしましょうか。終わりよければ全てよしという言葉もありますからね」
「な、なんか納得いかない……それに、そもそもそうするように促したのはアイツでしょ？」
「……アイツって？」
僕が聞き返すと、飛鳥が答える代わりにその当人が部屋の中へとやってきた。
「そりゃ俺のことか？」
引き戸に対して背中を向けていた飛鳥が、驚いてわずかに跳ね上がる。
「わぁっ！」
「……オイ、その人をバケモノ扱いするようなリアクションをまずどうにかしろ。俺の知る限り、同じリアクションをするヤツが少なくともこの孤児院の中にもう一人いるんだからな。同じ反応はソイツだけで十分だ」
言いながら部屋を横切り、真吾は僕の隣へと座る。
「い、いきなり背後から声をかけられたら驚くに決まってるじゃないの！」
「別に驚かそうと思ってやったわけじゃねーだろーが。そういう反応は、後ろめたい事実があるやつが取る態度だろーに」
「う……」
事実として確かに話題が真吾の方に流れていたので、飛鳥としても頭ごなしに否定することはできなかったようだ。
何か言いたそうなのを堪え、尻すぼみに口を閉じていく。
「ま、どうでもいいけどよ。もうこっちは慣れっこだしな」
溜め息を一つ吐き出し、真吾は間を置いた。
そして直後に、あっさりと話題を変える。
「……で、これからどーすんだよ、お前ら？」
「……」

「……」
「……」
僕達は三人揃って口を閉ざしてしまう。
分かってはいたことだった。
こうして束の間の休息を楽しむ暇など、それこそ全く残されてはいないということ。
ただ、目に見える打開策がわるわけでもなく、つまるところは手詰まりに近い状態には変わりない。
いや、確かに打つ手がないというわけではないのだが……。
「……さて、どうしますかね」
としかし、氷室は冷静に言葉を返す。
表情はすっかり落ち着きを取り戻し、場の空気をその一言だけで冷却させているかのようだ。
「あなたは、どうするつもりで？」
今度は氷室が聞き返す。
もちろん、真吾に対して。
「……さぁ、な。俺は俺のやりたいようにやるさ」
「つまり、私達とあなたはこのまま敵同士の関係である、と？」
「敵も味方もあるかよ。そもそもこれは戦争だ。信じれば裏切られる。だったら、最初から誰も信じず、終始一人で戦い抜くに越したことはない」
「その論理は正しい。ですが、それはあなたの本音ではない。違いますか？」
「……」
真吾は押し黙った。
否定しないということは、肯定ということなのだろう。
「……だったらどうする？　何か提案でもあるのかよ？」
「ま、これも戦争ではありきたりなものですけどね」
眼鏡を押し上げ、氷室は言葉を続ける。
まさしく文字通り、子供のけんかから国家レベルの戦争まで幅広

く使われる、その言葉を。

「――共同戦線、というのはどうです？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ７１：夕焼けとカレー

「……よかったのかな、これで……」
帰り道、振り返りながら僕は呟く。
夕陽は半分ほど沈みかけたところで、背後の地面には長く伸びた影が続いている。
「ま、どうあっても結論を出すのは彼自身ですからね。私達がとやかく介入することではないですよ」
ずれた眼鏡を押し上げながら、氷室は言う。
「それはそうだけど……」
もう一度立ち止まらずに振り返り、僕は思う。
孤児院の正門前に、すでに真吾の姿はなくなっていた。
「……」
何かこう、うやむやな気持ちが後を引いている。
それが顔に出ていたのだろうか、隣を歩く飛鳥が言った。
「……気にしても仕方ないって。氷室の言うとおり、答えを出すのはアシツなんだからさ」
「うん……」
分かってはいるんだ。
僕がどう考えたところで、結局のところ最終的な答えを導き出すことは真吾にしかできない。
いくら悩んだところで、それはきっと何の解決にも繋がることはないのだ。
「それよりも大和」
と、同じく隣を歩く氷室が言う。
「あなたはまず、隊長を万全に戻すことを考えてください。無事に意識を取り戻したとはいえ、こんな短時間で肉体的、及び精神的疲労が完治されたとは思えません。恐らく、今となっては今朝の騒ぎ

も街中に広がっているでしょう。だとすると、学校もしばらくは休校になるはず。いいことではないですが、この時間を体の回復に使わせてもらわない手はありません」

「うん、分かってる……」

歩きながら、僕は手をとじたり開いたり、肩や腰の関節を動かしてみる。

筋肉痛のような痛みがまだ残ってはいるが、さほど苦にはならないような感じだ。

実際にこうして歩いてる分にも問題はないし、氷室が言うほど深刻な状態ではないのかもしれない。

ただなんというか……精神的とでも言えばいいのだろうか。

恐らく今の状態で『Ｒｉｎｇ』による力の解放をしたら、僕の体は壊れてしまうかもしれない。

壊れるというのは表現が少しおかしいかもしれないが、決して間違ってはいないだろう。

力を使うこと自体は可能だと思う。

だが、使った後の反動が危険すぎる。

五体満足な体でさえ、力の解放後には膨大な量の体力を消耗する。

それは多分、僕がまだ完全に力をコントロールしきれていないからなのだからだろうけど、それを差し引いても、だ。

満足な状態でさえ反動が大きい力を、病み上がりの状態で使いこなせるわけがない。

当然そうなれば、僕の体は力を使ったことによるリバウンドを受け、結果として肉体に大きなダメージを受けてしまうだろう。

極端な話をすれば、最悪の場合は死ぬ可能性だってゼロではないのだ。

氷室の言うとおり、しばらくはこの壊れかけの体を落ち着かせ、通常時の体力を取り戻すことは最優先事項だろう。

しかし反面、そんなにゆっくりと構えている時間も残されてはい

ないはずだ。
僕は今日の一日の大半を意識を失って過ごしていたわけだが、その間にもかりん達は別の封印をさらに解放していたのかもしれない。
氷室と飛鳥がそのことについて語っていないということは、そういうことはなかったのかもしれない。
が、それがイコール今後もしばらく停滞が続くという保障にはならない。
今こうして僕達が揃って歩いているときにも、どこか別の封印が開放されようとしているのかもしれないのだ。
残された封印はあと五つ。
その中で、僕達の追い風になる封印は二つある。
つまり、氷室の水と飛鳥の雷の封印だ。
どういうわけか分からないけど、この封印の開放という儀式めいたものに関しては、かりん達も妨害をするつもりはなかったようだ。
だが考えても見ればそれは実におかしな話だ。
『Ｒｉｎｇ』はそれ単体だけでもものすごい力を秘めている。
それは能力者となった僕だからこそ、よく分かる。
そして能力者達は戦争を起こす。
戦争の末、最後まで勝ち残った能力者は願いが叶うと言われている。
これらが全て真実だと仮定すると、能力者達は必ず同じ事を思うはずだ。
誰だって当然、願いが叶うなら勝ち残りたいに決まっている。
だが、勝つためには戦いは避けられない。
勝ち抜く力が必要になる。
そんな中、封印の開放という一つの儀式が見えてくる。
開放はすなわち、力の増幅を意味すること。
ならばいち早く自らの封印を見つけそれを開放し、その増幅した力を以ってして他の能力者達を倒すべきだ。

そうすれば、勝ち残る確率はずっと高くなるはず。
それは僕も理解できるし、かりん達だって絶対に分かっているはずだ。
だが。
なぜか、その単純な法則を無視してかりん達は解放を続けている。
今朝のことだって、本来なら敵側である僕の封印の場所で出会えば、真っ先に妨害しておかしくない場面だったのに。
一体、どうして……。
「……どうかしましたか、大和？」
「……え？　あ、何？」
ずいぶんと考え込んでいたせいか、呼ばれたことに気付くのに時間かかってしまう。
「何か考え事でも？」
「……いや、そんな大したことじゃないんだけどさ」
「……あんまりボーっとしていると、電柱に頭をぶつけますよ？　もしくは、何もないところでつまずいてしまうとか」
「何それ？　そんなマンガみたいに間の抜けたやつなんているわないじゃな……」
言いかけた飛鳥の声が、次の瞬間ゴンという鈍い音にかき消された。
見ると、飛鳥はその場で膝を折り、声を押し殺しながら必死で額を両手で押さえている。
そしてその正面には、キャッチセールスのチラシがいくつも貼り付けられている一本の電柱が立っていた。
「おや、こんなところに」
「……いたね」
乾いた笑いを浮かべながら、僕と氷室は揃って肩を落とした。
その後、夕暮れの路上に飛鳥の怒鳴り声が響いたのは言うまでもないだろう……。

廊下を歩きながら、真吾は鼻先を掠めたその匂いを嗅ぎ取った。
む、今夜はカレーだな？
とか、そんなことを考えて廊下の突き当りを曲がり、部屋へ入る。
ついさっきまで子供達が騒ぎ合っていた部屋も、夕食を前にした今はシンと静まり返っている。
が、少し耳を澄ませば反対側の部屋からは相変わらず賑やかな騒ぎ声が聞こえてくる。
夕食までの短い待ち時間でも、遊び盛りの子供達にとっては退屈で、ありあまるエネルギーを発散させるべくして騒いでいるのだろう。
そんなことを考えながら、来客用に出していた茶碗とお茶請けの皿を手に取る。
一応さっきの来客は知り合いでもあるわけで、それ以前に誰の客だと言われたらそれは間違いなく真吾の客なので、後片付けくらいは自分でやっておくべきだろう。
妙なところで律儀な正確の真吾は、内心でやれやれとか面倒くさそうに呟きながらも、流し台で蛇口をひねって水を出した。
ちょうどそんなときだ。
ガラガラと、一度閉めたはずの引き戸が再び開いたのは。
誰だと思って振り返ると、そこには優希の姿があった。
「ん？　どうした？　何か用か？」
一度だけ優希の顔を見て、すぐに手の中の茶碗に視線を戻し、水洗いしながら真吾は言う。
「あの人達、帰ったの？」
「ああ、今さっきな。げ、茶請けの羊羹一個も残ってねーでやんの。クソ、どうせあの女がバクバクがっついたんだろうな」
手早く水洗いして、食器類をかごの中へと立てかけていく。
水道を止め、手に付いた水を軽く振り落とす。

「で、どうした？」
振り返り、もう一度聞く。
優希は変わらずに入り口のところに立ったままだったが、真吾の言葉に促されるようにして引き戸を閉めた。
カラカラ、カタン。
古びた音を残し、引き戸が閉まる。
「あの人達、真吾の知り合いなの？」
「知り合いっつーか、何っつーか……」
正直答えにくい質問だ。
別に挨拶を交わす程度に親しいわけでもないし、しかし目が合ったら殴りかかるくらいに毛嫌いなわけでもない。

……いや待て。
大和とあのメガネ兄さんはいいとして、あの女はどうもそりが合わない気がするな。
そういや、あの二人の名前、まだ知らねーままだな……。
「……正直、ビミョー」
「……何それ？」
「いや、別にトモダチっつーほど仲良しなわけじゃないし、かといって因縁がわるわけでも……」
言いかけて、真吾はふと気付く。
「因縁、か……ま、確かに言い換えてみればこりゃどーゆー因果の巡り合わせかとは、思いたくもなるけどな……」
「……え？　何？」
「……いや、何でもねーわ」
後ろ髪を掻きながら、真吾は床に座った。
「とにかくさ、別に怪しい連中じゃねーんだ。それくらいお前だって分かるだろ？」
「……まぁ、子供達の面倒も見てくれてたし、正直助かったけど……」

「だろ？　ま、人畜無害とまではいかなくても、有害な毒ガスとかよりはずっとマシだな」
影口とはこういうことを言うのだろう。
「……」
としかし、その答えに優希はしばし黙り込む。
「……どうした？　具合でも悪いか？」
「ううん、そうじゃない。そうじゃないけど……」
優希の目はどこか不安な色をしていた。

それに気付き、真吾はわずかばかりに後悔する。
もともとこの戦争の中に、施設の人を巻き込むつもりはなかった。
が、いつぞやのように真昼から襲撃を受けてしまっては、それも無理というものだった。
あの日あの瞬間から、隠し通すことは難しくなっていた。
いつ問い詰められてもおかしくない日々が続いていたのだ。
だから今、たとえ次の瞬間でも。
優希にそのことを問われれば、真吾はそれを無視することはできない。
ごまかしきることもできなくはないだろう。
だけどそれでは、何も解決していないのと同じだ。
嘘はいつかばれる。
ばれない嘘なんてない。
だけど、限りなくばれにくい嘘はつける。
話すことの中に、九割の嘘を、一割の真実を紛れ込ませれば、信憑性はグッと高くなるのだから。
だがそれでも、完璧ではない。
完璧なもの、こと、存在なんて、この世のどこにもあるわけがない。
どれもこれもが不完全。
誰も彼もが不完全。

きっとこの世界そのものが不完全であって、その世界を生み出したといわれている神だって、きっと不完全だったに違いない。
そこに例外はなく。
きっと、その嘘を突き通し続けている真吾本人さえも、不完全存在に変わりはないのだから。

「ねぇ、真吾……」
言いかけた言葉を遮って、しかし真吾は口を開いた。
その後に続く言葉は何となく分かっている。
その言葉を聞けば、きっと何かが壊れ始めることも分かっている。
壊れることは怖くない。
崩れることは怖くない。
いつかそうなると分かっていて、求めたその場所がここだから。
後悔はない。
けど、少しだけ、寂しくて、悲しい。
きっと、そのせいだろう。
この口が勝手に動いたのは。
くだらない言葉を紡いだのは。
そうだ。
きっと、そうに決まっている。

「――あー、腹減った」

「……え？」
そんな言葉を聞いて、優希はキョトンと目を丸くする。
「もう限界。俺は食堂に乗り込むぞ」
「え、あ、ちょ、ちょっと真吾……」
立ち上がり引き戸を開け放つ真吾に続き、優希も慌てて立ち上がる。
「真吾ってば……！」

引き止めようと伸ばしたその手が肩に触れるよりも早く、真吾は立ち止まり、振り返ってビシッと指を立てた。
思わず優希の足が止まる。
「問題」
と、笑みを浮かべながら言う真吾。
わけも分からず、優希は息を呑んだ。
「俺の好物は何でしょう？」
「……え？　え？」
目の前に指を立てられ、いきなり問いを投げられる。
優希はその空気に呑まれ、いつしか胸の中に秘めていた言葉をすっかり忘れてしまった。
そして廊下を秋風が通り抜ける。
少し肌寒い、でも優しい風だった。
その風が、匂いを運んだ。
グツグツと煮立っている、その匂いを。
「……カレー？」
戸惑いながら、しかも疑問形で優希は答えた。
それを聞くなり、真吾はさらにニヤリと笑って言う。
「正解」
そして言うや否や、優希の手を引っ張って廊下を歩き出す。
「わ……」
「あー、腹減った腹減った」
「し、真吾？」
「あ？　何だ？」
振り返らずに真吾は聞き返す。
あれ、と、優希は思い出す。
私、何を聞こうとしてたんだっけ……？
一瞬思い出そうとするが、なぜかすぐにどうでもよくなってしまう。
どうしてだろう。

それは、きっと。

「――ううん、やっぱ何でもない」

きっと、カレーの匂いのせいだ。

そして、匂いにつられたのはどうやら二人だけではなかったようで。

バタバタと廊下を走るいくつもの足音が、オレンジ色に染まった庭に響き渡った。

嘘には二種類あるらしい。

一つは、人を不幸にしたり、悲しませたり、傷付けたりするもの。

もう一つは、逆に誰かを幸せにしたり、悲しませたりせずにするための嘘。

悲しい嘘と、優しい嘘。

同じ嘘なのに、鏡に映ったように正反対。

どっちがホンモノ？

どっちがニセモノ？

きっと、どっちもホンモノでもニセモノでもない。

だって、この世界は不完全だから。

きっとホンモノも不完全で、ニセモノも不完全。

でも今は、そんなことを気にせずに……。

「おかわり！」

子供達のひとりが叫んだ。

負けじと、別の子供が次々におかわりを連呼する。

そのたびに優希は皿にご飯をよそい、ルーをかけて盛り付けていく。

一日で一番忙しいのは、間違いなくご飯時だ。

平和な食卓の風景。

ひとりぼっちでも、集まればきっとひとりぼっちじゃなくなるよと。

いつか、誰かが教えてくれた言葉。

遠い遠い、オレンジの日。

二つの影が、並んで歩いてた。

「真吾、あんたは？」

「おう、もらうわ」

差し出される白い皿。

ご飯を盛って、ルーをかける。

「はい」

「ん、サンキュ」

ま、いっか。

胸の中、優希は一人呟いた。

きっと……うん、きっと、カレーがおいしいからだ。

最後に、そう一言だけ付け加えて……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７２：光と闇と雨のメロディ

土砂降りの雨が降っている。
夜の八時くらいから、唐突に降り出した冷たい雨。
窓を閉めて、カーテンを閉めても、雨粒が屋根や地面を強く打ちつけるバラバラという音が耳に響いた。
黒い夜の中に降りしきる透明な雨。
雨粒の一つ一つを目で確認することはできず、まるで鋭い矢が天高い場所から射落とされているかのよう。
「……」
室内に流れる音楽はない。
雨音もどうやら、眠気を誘う子守唄と呼ぶには程遠いようだ。
帰宅して、まず母さんに色々と聞かれた。
朝早くから今まで、一体どこをほっつき歩いていたのかとか。
超常現象みたいなことが起こっているから、むやみやたらに外出しないようにしなさいとか。
明日も引き続き、学校は臨時休校という体勢をとることになったとか。
他にも何か言われたような気がしたけど、正直あまりよく覚えていない。
どっと押し寄せてきたような疲れが体中に渦巻いてて、僕は支えなしでは真っ直ぐに歩くことさえもままならない状態だった。
それが本当にただの疲れなのか、それとも『Ｒｉｎｇ』の力による何らかの影響を及ぼす症状なのか、今の僕には分からない。
ただ一つ言えることは、こんなにも体は睡眠を求めているというのに、雨音が落ち着き始めた記憶をかき乱し、全く寝付くことができないということだ。
「……眠れないな」
一人呟く。

ベッドの上で仰向けに寝転がり、視線の先にあるのは証明に照らされてわずかに黄ばむ天井。
灯りを消せば少しはマシになるだろうか。
そう思い、僕は重い体を起こし、灯りを一番小さなオレンジのものにしようと紐を掴んで……。

――カツン。

と、そんな音を聞いた。
うるさいくらいに鳴り止まない雨音の中に、まるで小石が地面を転がるようなその音は、不気味なほどにはっきりと耳に届いた。
ゆっくりと部屋の中を見回す。
が、当たり前のようにその音の出所は見つからない。
部屋の真ん中で立ち尽くしながら、もう一度耳を澄ます。
ザァザァと、まるでテレビのノイズのような雨音の中、意識を耳へと集中させた。
カツン。
また聞こえた。
幻聴ではなく、間違いなくその音が聞こえた。
その音の出所は、部屋の窓からだった。
カーテンを閉め切った、今はもう雨粒に濡れているだけの冷たくなった窓ガラス。
そこに、僕は近づく。
カーテンの隙間から外を覗く。
が、真向かいにある唯の部屋は同じようにカーテンが閉め切られたままだ。
てっきり唯が音の出所だと思っていたのだが、どうやらそうではないらしい。

だとしたら、一体なんだというのだろう?

こんな土砂降りの雨の、しかも夜遅くに、まるで何かの合図のようなその物音は、僕をどこに連れて行こうとしているのだろう？

少し大きくカーテンを開ける。

窓ガラスの外側は、思ったとおり雨粒で一面が濡れていた。

閉め切っているにもかかわらず、外気の冷たさがはっきりと伝わってくる。

僕は窓の外、視界の悪い夜の道に目を向ける。

窓にへばりついた雨粒が邪魔で、あまりよく見えない。

もともとここいらの住宅街は、夜になると人通りはともかくとして車などの通行料は激減する。

通行人にしたって、あちこちに見て取れるわけではない。

むしろ、目に付く方が珍しいというものだ。

しかも今日はそれに加えてこの悪天候。

こんなんじゃ、たとえ歩いて五分の距離にコンビニがあっても出歩きたくなくなるというものだ。

一通り目を凝らして周囲を見てみたが、やはりそれらしいものは影も形も見当たらなかった。

さっきに音は空耳か、あるいは雨粒の当たり方でそんな風に聞こえたのだろう。

決め込んで、僕は窓の外から視線を外し、再びカーテンを閉め切ろうとして……。

瞬間、視界の端に映りこんだその映像に寒気を覚えた。

ゾッと、全身が凍りつくような悪寒。

伸びきったゴムが縮むように、僕は慌てて視線を外へと戻す。

そこに、いた。

彼女は、立っていた。

土砂降りの冷たい雨の中、傘も差さず、ただ空虚なその双眸を空へと向けて、その小さな体をずぶ濡れにしながら、僕を見ていた。

――鈴代かりんが、そこにいた。

夜の暗さの中でもはっきりと見分けることができるかりんの目は、夜以上に暗く深い蒼さを含んでいた。
その目が、しっかりと僕を捉えている。
何かを訴えるかのように、ただジッと、口を結んだまま、僕を見ていた。
その蒼い目はどこまでも見透かしているようで。
しかしその反面、どうしようもない悲しさと苦しさを押し殺しているようで。
とにもかくにも僕は、衝動的に体を動かしていた。
今の時間、母さんは風呂に入っているはずだ。
乱暴に部屋の扉を押し開けた。
バタンという音に、ドタバタという僕の足音が階段を下る。
大急ぎで靴を履いて、また乱暴に玄関の扉を押し開けた。
雨に濡れたアスファルトを靴音が叩く。
たったこれだけの距離を移動しただけなのに、もう息が上がっている。
冬はまだ遠いはずなのに、吐き出す息は真っ白で。
冷える体から逃げていく体温に目もくれず、僕は雨の中で立ち尽くした。
たった数歩歩いただけなのに、ズボンの膝くらいまで水がはねている。
冷たく強い雨が僕の体を打ちつける。
確かな寒気は感じているのに、不思議と体は震えることを知らなかった。
土砂降りの雨が降っている。
暗い夜の、暗い空の下。
冷たい雨の中で、僕達はただ無言で向き合った。
それは沈黙と呼ぶには短すぎる時間だったかもしれないけど、僕にはまるで永遠のような時間に感じられた。

そんな凍りついた世界の中で、ようやくかりんは口を開く。

「――こんばんは」

と、たった一言。

ずぶ濡れの黒い少女は、色の無い声でそう告げた。

目覚めを感じ取ったのだろうか、その視線が泳ぐように動く。

その目の動きを追って、蓮華も同じ方向に目を移した。

「……起きたか」

その視線の先には、今の今まで死んだように眠り、意識を失っていたはずの二人の男の姿があった。

赤穂宗一（あこう そういち）と真藤日景（しんどう ひかげ）である。

二人はそれぞれに炎と氷の力を司る『Ｒｉｎｇ』の契約者であり、およそ三十六時間ほど前から原因不明の意識不明状態に陥っていた。

だがそれも、どうやら『Ｒｉｎｇ』の及ぼす影響の一つらしい。

らしいというのは、こればかりは蓮華自身にも分からないからだ。

そう教えたのは、今こうして蓮華と揃って二人の目覚めを見届けた、もう一人の少年である。

蓮華は彼の名を知らない。

蓮華だけでなく、今起きた赤穂と日景、今はこの場に居合わせていないかりんさえも、彼の名を知らなかった。

知らないのは名ばかりではない。

年齢も何もかも、少年の素性はまるで闇の中に葬られたように何も分かっていない。

だがそれは、蓮華達にとってさして大きな問題ではなかった。

結局のところ、この五人は仲間なのかと聞かれればそうではない。

が、目的や考え方、そういう最終的な意見の一致という点では、

仲間というよりは運命共同体という表現がもっとも適切なようにも思える。
もっとも、そういう認識をしている人物がいるかどうかがまず疑問なのだが。

「おはよう、二人とも。具合はどうだい？」
そんな蓮華の思考をよそに、少年は普段と変わらない何気ない口調で声をかけた。
その言葉を受け、しばしの沈黙の後、まず日景が答えた。
「……ああ、問題ない。むしろ、妙に落ち着いたような気分だ」
両手を握ったり開いたりを繰り返しながら、日景は軽く体を動かしている。
一方赤穂は、体中に蔓延するけだるさを押し出すように背伸びし、静かに息を吐き出している。
「……なるほどな。これが、開放ってやつか」
そう呟き、口の端を小さく歪めて不気味に笑った。
「悪くねぇな。むしろすこぶる調子がいいくらいだ」
「それは何よりだよ。君達を信じた甲斐があった」
少年は微笑んで答える。
その笑みは端から見れば、汚れを知らない純粋な少年のようなそれに見えるだろう。
だがその横顔が、蓮華は時々どうしようもなく不気味に見えて身震いしてしまいそうになる。
何かこう、次元そのものを超越した存在のように感じ取ってしまうのだ。
自分は確かに此処にいて、彼も確かに此処にいる。
なのに、手を伸ばせば簡単に届くその距離なのに、きっとその手は永遠に触れることさえも叶わないような。
言い換えてみれば、存在する定義そのものが違いすぎる……かけ離れすぎているような、そんな感覚。

自分でも馬鹿げた妄想だと笑い飛ばしたくなる。
が、決して度外視できない圧倒的なその存在感が彼にあることもまた事実。
感じ取っているのは私だけかもしれないが、それは言うなれば見えない圧力……プレッシャーのようなものだ。
同じ重力を受けて同じ濃度の空気を吸っているはずなのに、そこに圧倒的な存在感という壁が立ちはだかっている。
さらに分かりやすく言うならば、オーラとか雰囲気とか、そんな言葉が適切だろうか。
どちらにしても、同じ定義の上で存在しているとは到底思うことができない。
思い込むこともできない。
無理にそう思い込めば、三日三晩に渡って悪夢を見てしまいそうだ。

「置きぬけ早々に悪いが、今の状況はどうなっている？」
そんな日景の言葉で、蓮華の思考は一旦停止した。
前触れもなくテレビの電源を切られたように、プツンという電子音が頭の中で小さく弾けた。
「あ、ああ……お前達が眠っている間に、もう一つの封印を開放した。開放したのは風の封印で、今回は敵側の戦力強化という形になってしまったがな」
「……そうか。まぁ、順調ではあるんだな？」
答えずに、蓮華は視線を移す。
その視線を受けて、少年は答える。
「極めて順調だよ。残り五つの封印も、同じように一つずつ開放していけばいい。慌てる必要も、焦る必要もない。全ては予定調和の上に組み上げられた、価値ある未来への足跡になるんだから……」
「……だ、そうだ」
答えを受けて、日景はとりあえず納得した。

「それにしたってよぉ……」
と、続けて赤穂が口を開く。
「一体何が理由で、わざわざ敵側の戦力まで強化するのを見届けなくちゃいけねぇんだ？　今のうちに皆殺しにしちまえば、後々の妨害もクソもないだろうが」
手の中で炎を弄びながら、赤穂はわずかな苛立ちを含んで聞く。
「それが必要なことだから、だよ。ねぇ赤穂、数学だって、公式を知っているのとそうでないのでは、解ける方程式と解けない方程式が出てくるだろう？　それと同じさ。八つの封印、その全ての開放は言わば絶対に必要な公式であって、それなくしては繋がる世界の扉は開かれることはない」
「……理屈では分かっちゃいるんだがよ」
不服そうな赤穂の表情を見て、少年は小さく笑った。
「考え方を少し変えてみるといい。別の言い方をすれば、僕達はパズルのピースなんだ。当然、パズルは一つでも足りないピースがあれば完成しない。誰欠けてしまっても、そこに出来上がるのは不完全な、欠落した出来損ないのような未来なんだよ」

言って、少年はわずかに目を伏せる。
「……そう、出来損ないなんだ。僕も、君達も、彼等も、この世界も。全てが不完全。一度はしっかりと繋がった鎖だったけれど、時の流れはしだいに鎖を錆付かせ、それでもなお数多の世界を繋ぎとめようとした。その結果、ついに鎖は悲鳴を上げた。一つが二つに、二つが四つに、四つが八つにと無数に砕け散り、全ての世界はカケラになった。それはまるで、あれもこれもと欲張った結果、何一つとして欲しいものを手に入れられなかった子供のよう……」
淡々と綴られる言葉。
その言葉一つ一つが色を持たず、温度を持たなかった。
古びたカセットテープからの録音音声を再生しているかのよう。
「全てのカケラを取り戻すことはできない。だからせめて、僕は僕

がいるこの世界を、価値ある未来へと繋がる完全なる世界へと昇華させる。此処を始まりに、此処より遥か、永遠まで……」

その詩のような言葉を、誰もが無言で聞いていた。

恐らく、外は強い雨が降りしきっているだろう。

しかしその雨音も、地下の薄暗いこの場所までは届かない。

深淵とも奈落とも呼べない、浅すぎる地の底。

いつかこの暗がりさえも明るく照らすような、そんな価値ある未来とやらが確かにあるというのなら。

――其処に繋がる鎖となることを選んだ者達が、此処に集う。

暗闇にいたんだ。

闇に飲まれそうなほどの、暗闇に。

光を探したんだ。

闇を払ってくれるほどの、光を。

光を見つけたんだ。

闇色に輝く、希望の光を……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７３：サヨナラ

一秒ごとに体温が失われていく。
土砂降りの雨は勢いを弱めることなく、ただ引力に導かれるがままに地上を打ち付ける。
僕の体もしかり、かりんの体もまたしかり。
「……かりん？」
雨音にかき消されそうな小声で、僕は呟いた。
髪の毛はすでに風呂上がり以上に濡れ、雨粒を吸い込んだ衣服はまるで鉄のように重苦しい。
体調が不完全なことがそれをさらに後押しして、一歩でも足を動かせば体が崩れ落ちてしまいそう。
「……」
答えずに、かりんは小さく首を縦に振った。
「どうしたの、こんな夜遅くに……それに、こんな雨の中、傘も差さないで……」
「……大和に。会いに来た」
ポツリと零すように、かりんは答える。
相変わらずのゴスロリの黒い衣装が、雨を吸い込んでさらに黒い色に映えている。
それは黒という色の領域を超えて、すでに闇色に染まっていた。
放っておけば、夜の暗さに紛れて溶けてしまいそうな、そんなイメージ。
「僕に？　……とりあえず、中に入ろうよ。話はそこで聞くからさ……」
僕はまず、家の中に上がることをかりんにすすめた。
しかし……。
「……いい。その必要は。ない」

今度は首を横に振りながら、かりんは断った。
「だけど、こんな雨だしさ……風邪、引くよ……？」
もう一度声をかけるが、やはりかりんは無言で首を横に振った。
「……話があるの」
「だから、それなら家の中で……」
「……ここでいい。話というよりは。これは。質問に近いものだから」

その言葉と同時に、わずかにかりんの目の色が変わる。
その変化を、僕は具体的に口に出して説明することはできないだろう。
それはきっと、日常の中で日々確実に変わっている些細な変化のようなものであって。
たとえばそれは、空の色だったり。
たとえばそれは、雲の形だったり。
確かに変わっていると感じているのに、具体的にどういう変化を遂げているのかはわからないといったような、そんな感覚。
今の場合もそれと同じことだ。
ただ、しいて言うのならば、変わったのは目の色や声色などではなく……空気、あるいは存在感のようなものだろうか。
かりんの蒼い双眸が僕を見上げる。
雨に濡れた長い前髪が、目の下の頬にへばりつくように垂れていた。
わずかな妖艶ささえ思わせるその視線に、僕の心臓は一度跳ねた。
ドクン、と、緊迫した空気を思わせるかのように。
「……大和」
呼ばれる。
それは僕の名前だ。
が、返事が出ない。
うん、とも、何、とも、単純なその一言を聞き返すことができな

い。
魅入られている。
その蒼い目に、金縛りにされているかのよう。
動けない。
動かない。
呼吸さえも止まりそうになる。
今更になって寒さを思い出す。
指先が震えて、背筋が凍った。
それは恐怖にも似た、しかしなんだかよくわからない、未知の感覚だった。

「――……選んで。このままでいるか。それとも。私達と。共に歩むか……」

それは問いというよりは、選択肢だった。
「……それって、どういう……」
どういうことなのと聞き返すよりも早く、かりんはさらに言葉を続ける。
「……後者を選ぶのなら。全てが終わるまで。大和の身の安全は。保障する」
そこで一度言葉が途切れ、その隙間に割り込むように僕はのどの奥から言葉を探し出す。
そしてもう一度、聞こうと思った。
それは一体、どういう意味なのか、と。
だが、まるでそのタイミングを見計らったかのようにかりんのことばが続く。
「……だけど」
声のトーンが落ちた。
悲しさや寂しさを含んだような、か細い声に変わる。

が、それも幻と思えるほどの一瞬。
一度は逸らした視線を再び戻し、かりんは真っ直ぐに僕の目を見据えて、言葉を続けた。
……そう。
決して聞きたくなかった、聞くことがないはずだったその言葉を……。

「――……前者を選ぶのなら。私は。あなたを……殺さなくてはいけなくなる……」

その言葉を聞き終えるか否かというときに、遠くの空で音もなく光が瞬いた。
遠雷。
黒い夜空の片隅に、閃光が走る。
「……選んで。大和……」
迫られるその言葉が、なぜかその遠雷よりも遠いところから語りかけられているように思える。
「……選んで」
だって、嘘みたいなんだ。
「……私達と。共にあるか」
もう、戦う必要なんてなくなったのだと、そう思っていたから。
「……それとも。違う道を往くのか」
そう、信じていたから。
「……選んで。大和」
……それなのに。
「……何だよ、それ……」
一体、どうして……。

「……待ってよ、かりん。何だよ、それ？　おかしいだろ、そんなの？　あの時、言ってたじゃないか！　かりんだってもう、戦いた

くなんかないって、そう言ってたじゃないか！　どうしちゃったんだよ？　何があったんだよ！」

雨音のノイズをかき消して、僕は夜の真ん中で叫んだ。

自分よりもずっと小さなかりんに向けて、まるでわがままだけを吐き捨てるように叫んだ。

そのくらい、納得できないことだった。

「……」

しかし、かりんは一言も答えない。

ただ下を俯いて、変わらぬ冷たい雨に打たれている。

「どうしてだよ？　どうして……」

僕もわけが分からなくなり、同様に下を俯いて両手を強く握り締めた。

てのひらに爪が食い込み、肉が破けてしまうのではないかというくらいに、強く、強く。

しかし、いくらそうしたところで、耳の奥に残った言葉は決して消えない。

聞きたくなかった言葉。

聞いてはならなかった言葉。

その言葉こそ、嘘であると言ってほしい。

だって、そうだろ？

あの日、言っていたじゃないか。

かりんは、言っていたじゃないか。

「――……私も。ヤマトとは。戦いたく。なくなった。不思議。こんなことは。今までには。思わなかったこと」

その言葉が。

「……どう、して……」

素直に、嬉しかった。

もともとこんな戦いを、僕は望んだわけではなかったから。

誰が望んだわけでもないはずだと、そう信じていたから。
だって、おかしいじゃないか。
仮に本当に願いが叶うにしたって、そのために他人の命をどうこうしなくちゃいけなくて、それさえもただの通過点に過ぎないだなんてさ……。
おかしいだろ？
おかしい以上に、悲しいだろ？
戦いたくなんてなかった。
逃げ出してしまえるのなら、そうしたかった。
だけどそこで逃げたら、きっと別の誰かが確実に不幸になるだろう。
それを知って知らないふりをしながら生きていくなんて……僕は嫌だった。
だから今になって、逃げ出そうとは思わない。
この無益で無意味な戦争を終わらせるという僕の意思に、変わりはない。
……だけど。
それでも。
あの時は正直に、嬉しかったんだ。
同じ立場で、同じ気持ちの人が他にもいるって分かったから。
甘い考えだと分かっていても、嬉しかった。
誰も傷付かないですむのなら、それがきっと一番いいはずだから。
……なのに。
それなのに。
一体、どうして……。

「……何で、そんなことを聞くんだよ……かりん……」
「……」
僕達は互いに、冷たい雨に打たれながら下を俯いていた。
雨粒が頭を、肩を、背中を、容赦なく打ち付けていく。

ああ、寒いな。
ああ、痛いな。
でもそれはきっと、この雨のせいなんかじゃないんだよな。
もっともっと、別のことが寒くて痛くて……そうしようもないくらいに苦しいんだ……。
「……分かった」
ポツリと、かりんが呟く。
「……もういい。今のことは。忘れて」
「……かりん？」
「……ごめんなさい。私は。自分のことしか。考えていなくて。大和の。気持ちを。理解していなかった」
ふと、かりんの小さな体が一歩動く。
「……忘れて。全部。なかったことにして」
一歩、また一歩。
僕に向かい、かりんの体が揺れるように近づく。
二人の距離が、しだいにゼロに近づく。
僕はそっと、かりんの頭に手を置いた。
ひどく冷たかった。
体温はとっくに失われ、まるで氷のよう。
「……私が。間違っていた。だから。今夜のことは。忘れて。今夜は。何もなかった」
「……かりん」
そっと頭を撫でる。
冷たさ以外の感覚は伝わってこなかった。
湿り気を帯びた長い黒髪に、僕はそっと指を通し……。

「……ごめん、なさい……」
ふいに聞こえたその声が、今までのものとは全く別物のように感じて。
「……かりん？　どうし……」

直後に、衝撃。
最後まで言葉を続ける前に、別の感覚が僕の体を貫いた。
「……かり、ん……？」
言葉が虚ろになる。
ズルリと、何かが何かを抉る感触。
ポツリ。
ポツリ、ポツリ。
雨ではない、赤い雫が地面を濡らす。
僕は視線を落とす。
そこに、映る。
銀色に輝くナイフを握り、僕に倒れ込むかりんの姿を……。

「――……サヨナラ……」

そんな声が聞こえて。
何かが、音を立てて崩れ落ちて。
スルリと、引き抜くような感触が伝わって。
僕の膝が折れ、ズボンの生地越しに濡れたアスファルトと水溜りの冷たさが伝わって。
僕の体はそのまま、沈むように横たわった。
意識が途切れていく。
視界が揺れる。
雨粒が邪魔をして、見えるものも見えなくなっていく。
ただ一つ。
間違いなく、見えたものは。
銀に輝くナイフに付着した、真紅に染まる血の色だけだった……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７４：覚えてますか？

気が付くとそこにはまた、見慣れた天井があった。

「……」

首から上だけで周囲を見回す。

ほどなくして、ここが間違いなく僕の部屋であり、僕はベッドの上に寝かされていることを理解した。

ふと、額の上に何かが置かれていることに気付く。

手で取ってみると、わずかに体温を含んで暖かくなっている濡れタオルだった。

ベッドの脇の棚の上には、替えの水を汲んだ洗面器が置かれている。

言うまでもなく、風邪を引いたときにはどこかしらで見かけるような光景である。

「……っ」

僕は寝たままの体を起こす。

が、途端に猛烈な疲れが全身を駆け巡った。

頭を初め、全身が鉄の塊にでもなってしまったかのように重苦しい。

加えて、視界がどこか虚ろで体全体が熱っぽさを帯びているようだ。

どうやらこれは、正真正銘の風邪の症状そのもののようだ。

「ん……」

と、そのとき僕ではない誰か別の声が聞こえた。

それも、よく聞き覚えのある声だ。

そして今更ながらに部屋の隅っこに目を向けてみると、そこには壁を背にして膝を崩し、寝るにはずいぶんと辛そうな体勢のまま、しかしスゥスゥと小さな寝息を立てている唯の姿があった。

一応体に厚手の毛布をくるんではいるが、あんな恰好では風邪を引いてしまうのではないだろうか？

などと、実際に風邪を引いている容態の僕が思ったところで説得力も何もないだろう。

唯はまだ眠っているようで、その手には白いタオルがしっかりと握られていた。

もしかしてと僕が思っているところで、ガチャリとドアノブが回る音がし、母さんが部屋に入ってきた。

「あら、起きてたの？」

「あ、うん。ちょうど今起きたとこ……」

「そ。まぁ、思ったよりは顔色も悪くないし、もう心配なさそうね」

言いながら、母さんは洗濯物を洋服ダンスの中へと手早くしまいこんでいく。

「あら、唯ちゃんったら、結局あのまま寝ちゃったの？　ちゃんとお布団も用意してあったのに」

壁を背にして寝息を立てる唯を見て、母さんは半ば呆れながら、しかしなぜか小さく笑いながらそんなことを呟いた。

「それで、具合はどう？　どこか痛むところは？　食欲はある？」

「特に痛むところはないけど、食欲はまだあんまり。体中がだるくて仕方がない感じ……」

「何言ってるの、当たり前でしょうが。あんな土砂降りの雨の中で、傘も差さずに何十分も突っ立って、挙句に気を失って地面の上で寝転がってれば、風邪引いて当然よ」

呆れたものねと付け加え、母さんは唯の毛布の上にもう一枚のタオルケットをかぶせた。

そして僕は、今の母さんの言葉の中に、言いようのない違和感を感じていた。

そしてハッとなり、慌てて自分の腹部に手を当てる。

「……え？」

気付く。
そこには、傷らしいものは何一つなく、さらには微々たる痛みさえも感じることはなかった。
「そんな、どうして……」
呟き、まともに働かない頭を駆使して必死に記憶を遡る。
昨夜の、冷たい雨の中で起きた出来事を思い返す。
写真のように映像を一つ一つ切り抜いて、真実を繋いでいく。
そして、思い出す。
意識が途絶える最後の瞬間、垣間見た強烈で鮮明なイメージを。
それは、銀のナイフにまとわりつく真っ赤な血の色。
さらに思い出すのは、耳障りな音と感触。
ズブリと、筋肉の幕を突き破り、血管を引きちぎりながら体内へと進入する刃。
湧き水のように赤い血が流れ出す。
僕はその感覚を、実際に味わった……はずだ。
少なくとも僕は、そう思っていた。
かりんは銀のナイフを握り、僕にもたれかかるように体を倒し、そのままその勢いを利用して……。

「……っ！」
思い出し、ふいに頭痛が始まった。
思い出したくないイメージに限って、嫌というほどに脳裏にまとわりつく。
いや、思い出したくないというよりは、信じたくないと言い換えた方がいいだろう。
正直今だって、僕は昨夜の出来事が悪い夢か何かであったのではないかと思ってしまう。
実際に、刺されたはずの傷痕はどこにもなく、僕はこうして無事なのだから。
そうだ、きっと夢に違いない。

なかなか寝付けないでいたけど、きっといつの間にか僕は寝入ってしまっていて、その日の疲れから悪い夢を見せられていたんだ。
そう、信じてしまいたい。
……だが。
その想いとは裏腹に、記憶の中にある映像は焼け付くほどに鮮明だ。
この記憶が夢であるはずがない。
反面、夢であってほしいという思いが強くなる。
相容れない思考がぶつかり合って、頭痛は激しさを増していった。
「ちょっと、大丈夫なの大和？」
母さんが異変に気付き、僕の傍へとやってくる。
「……うん、平気。ちょっと、頭が痛くなっただけだから……」
「そう？　ならいいけど……仕方ないから、病院はまた後日にしたほうがいいかしら。しばらくは寝かせて様子を見ないとね。ただの風邪だとは思うけど……」
言って、母さんは僕の手からタオルを受け取り、棚の上の洗面器を抱えた。
「本当は何か食べたほうがいいんだけど、まだ無理でしょ？　もうしばらくは大人しく寝ておくこと。何かあったら呼びなさいな」
「うん、そうするよ……」
頭痛は徐々に治まりつつある。
が、決してなくなることはない。
チクチクと針で刺されるような不快な痛みが、頭の芯でくすぶっている感じだ。
「あとで、何か飲み物をもってくるわ。それと、そこに体温計あるから、あとで熱を測っておきなさい」
「ん、分かった」
母さんは洗面器を抱え、そのまま部屋を跡にしようとドアノブに手をかけたところで、思い出したように振り返った。

「ああ、それと」
「ん、何？」
僕が聞き返すと、母さんは視線だけで目配せした。
そこには、まだ小さな寝息を立てて眠ったままの唯がいる。
「あんたが起きてるうちに起きたら、ちゃんとお礼言っておきなさいよ？　徹夜で看病してくれてたみたいよ？」
と、なぜか微笑ましそうな、それでいてからかうような笑みを浮かべ、母さんはそそくさと部屋を出て行った。
何となくその笑みの意味合いを理解した僕は、溜め息を一つ吐き出す。
それにしたって、母さんだってもうほとんど確信犯のようなものだろう。
年頃の男女……いくら幼馴染とはいえ、何も唯を僕の部屋で寝かすことはないだろうに……。
「……」
そう考えると、途端に僕は恥ずかしくなってきた。
気のせいか、体温が上がっているような気もする。
……いや、違う違う。
これはきっと……そう、風邪のせいだ。
そうさ、風邪のせいだ、そうに決まっている。
と、いくらそう自分に言い聞かせようとしたところで、なかなか体と心は納得してくれないようで。
「……恨むよ、母さん……」
結局僕は泣き言のようにそう呟いて、再びベッドに体を預けるのだった。

「……」
「……」

気まずい空気が流れている。
事の発端は、僕がトイレに立って部屋に戻った際、うっかり扉の前でつまずきかけ、その音で唯が目を覚ましてしまったことだ。
しばしの間目元を軽くこすりながら、唯は周囲を見回していた。
が、さすがに気付いたようで、扉の前で方膝をついている僕を見るなりばっちり目が覚めたようで……。

「……熱、まだ高いの？」
「……ん、もうだいぶ下がった」
「食欲は？」
「あるともないともいえないけど、自分から進んで食べようって気分じゃないかな」
「……そっか」
「……うん」
「……」
「……」
こんな感じで、お互いに二言三言言葉を交わしては沈黙というパターンが続いている。
僕の場合は単純に気恥ずかしさを感じているからなのだが、恐らく唯は違うのだろう。
あのあと母さんから聞いた話だと、どうやら雨の中で倒れた僕を真っ先に見つけてくれたのは、母さんではなく唯だったらしい。
昨夜、母さんが入浴を終えて雑誌に目を通していたときに、いきなり玄関の扉が開け放たれたらしい。
最初母さんは、それが空き巣か何かと勘違いしたようだが、すぐに落ち着いて考え直した。
こんなあからさまに派手な登場をする空き巣がどこにいるのかと言われれば、それも当然だろう。
そして直後に、唯が母さんを呼ぶ声が聞こえたのだという。
そして玄関まで出向いてみれば、そこには全身ずぶ濡れになった

唯が、さらにずぶ濡れになった僕の体を背負っていたという。
もちろん、僕にそのときの記憶はない。
そのあとは何だかんだと騒ぐよりも早く、母さんが色々と対処をしてくれたようだ。

「……あのさ、唯」
「……ん、何？」
「その、母さんから聞いたんだけど……唯が、僕を運んでくれたんでしょ？」
「……まぁ、一応は、ね……」
「そっか……その、ありがと」
「あ、あらたまって何よ。いいよ、別にそんなの……」
「それでも、さ。やっぱ、ありがと」
「……うん」
「……」
「……」
そしてまた沈黙。
わずかに空気が重い。
けれど、息苦しさは感じない。
「……ねぇ、大和？」
「何？」
「あのさ、覚えてるかな？　まだ私達が、小学校に入る少し前くらいのこと……」
言われて、僕は過去を振り返る。
時間にして、およそ十年ほど前。
「……うん、覚えてる。多分、あのときのことでしょ？」
答えずに、唯は小さく首を縦に振った。
同時に僕は、少し不思議に思った。
唯が言うあのときのこととは、僕にとってはともかく、唯にとっては決して言い思い出とは言えないものだったからだ。

もちろん、僕にとってもいいものかと聞かれれば、素直にうなずくことはできないかもしれない。
けど、僕はそのときのとこをちゃんと覚えている。
そしてこれからも、きっと忘れることはないだろと思っている。
そう、あれは今から十年とちょっと昔の話。
昔話にしては近くもなく、かといって遠くもない、そんなあの頃。
そして、それは。
まだ幼かった僕達にとって、初めて遭遇した大きな事件だったのかもしれない……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７５：昔日の想い

空が遠ざかっていく。
手を伸ばしても、その手は青い空にも、白い雲にも、輝く太陽にも届かない。
それでも手を伸ばす。
窓から身を乗り出し、両目一杯に涙をためた彼女が、精一杯伸ばすその腕に。
届かない。
体は引力に引かれるがままに、落下という行動を続ける。
空なんて飛べるわけがないと、分かっていた。
だって、僕の背中には大空を自由に飛ぶ鳥のような羽は、いくら探しても見当たらなかったから。
空が遠ざかっていく。
落下の衝撃まで、あと何秒？
数える間もなく、僕の体は叩きつけられる衝撃を受けた。
空が、消えた。

それは多分、ただの悪ふざけだったと思う。
幼い僕達はまだ、危険と楽しみの境界線を自分たちで引くことができなくて。
一見不可能と思える物事にこそ、大きな興味を持ってしまっていたのかもしれない。
それはきっと、ごくごく自然なことだ。
決して珍しくはないことだ。
誰だって一度は、空を飛べたらと思うことがあったように。

誰だって一度は、願い事が叶えばいいなと思ったように。
そんな、何も難しくないこと。
ただ、心の中でイメージを膨らませているだけ。
だけど、それが。
僕達に、最初の悲劇を見せることになった。
何てことはない。
それは本当に幼い頃なら、誰もが一度は経験したことがあるような些細な出来事だ。
結論から言おう。
木登りをしている途中に、足を滑らせて落下した。
口で説明すれば、たったこれだけ。
ただのそのときは何というか……やはり、運が悪かったとしかいいようがないと思う。
他ならぬ僕自身がそう思っているし、他の誰がこの話を聞けばそう思うはずだ。
ただ、一人を除いては……。
その一人とはつまり、言うまでもなく……。

僕は視線を横に向ける。
相変わらず唯は毛布に包まったままで、ベッドの上の僕と向き合う位置に膝を抱えて座っている。
その視線がどこか悲しげで、どこを見つめているのか分からない。
下を俯いているようで、壁の向こう側を眺めているようにも見える。
物思いにふける、そんな表現が正しいような気がしてきた。
どうしたのと、そう声をかけようとして、唯の声がそれを遮った。
「……あの時さ」
「……え？」
「……あの時、大和は後ろを振り返らなくてもよかったんだよね」
「あの時って……」

考えるよりも早く、唯は言葉を続ける。
「……みんなが木登りをできたのに、私だけがどうしても苦手でできなかった。高いところが苦手なわけでもなかったのに、どうしてもできなかったんだ……」
「……唯？」
「それでも皆、別に私のことをばかにしたりとか、そんなことはなかった。木登りができない女の子は他にもいっぱいいたし、別に恥ずかしいほどのことでもなかった。だけどね、私、本当は悔しかったんだ……」
「悔しい？」
答えずに一つだけ頷いて、唯は続ける。
「……だって、私はいつも大和の背中ばっかり追いかけて、それでいて、いつまで経っても隣に並んで歩くことができなかったから……」
唯はさらに膝を抱え込んだ。
膝の間に顔を埋めるようにすると、長い髪の毛がさらりと揺れる。
「……本当はね、自分でも背伸びしてるなぁって分かってた。でも、ずっと追いつきたかった。追いついて、並びたかった。私だってこのくらいできるんだぞって、胸を張って言って、大和に認めてもらいたかったんだと思う」
「……」
「自分でもさ、よくわかんないんだよね。何であんなにまでして、意地になって大和の背中を追いかけてたのか。大和は大和、私は私って、割り切ることができていればよかったんだけど……それができるくらい、あの頃の私は心が育ってなかったのかな……」
淡々と唯は語る。
思い出話であるはずなのに、声のトーンは低く、もの悲しい。
その理由を、僕も何となく分かっていた。
きっと、あの事件がそうさせているんだろう。

事件というのは大げさな表現かもしれないけど、まだ幼かった僕達にとっては、あれは大事件だったことは間違いない。
誰かの家が火事になったわけでもない。
誰かが誘拐されたわけでもない。
誰かが殺されたわけでもない。
それでも、その小さな大事件は、確かに起きた。
少なくとも、幼い心に大きな傷痕を刻み付けてしまうほどに、それは衝撃的な出来事だった。
「……あの時」
繰り返し、唯は呟く。
その先に続く言葉を、僕は知っている。
けれど、唯の言葉を遮る言葉が見つからない。
もういいよ、と、その一言だけで済んでしまうかもしれないけれど。
それでは、いけない気がした。
「あの時、私が無理して大和の背中を追いかけていなければ……」
もういい、もういいんだ。
口には出さず、心の中で僕は繰り返した。
しかし、言葉は口にしなければ決して誰にも届くことはない。
それは、僕も例外ではなく。
絞り出すように、唯は続く言葉を吐きだした。

「――大和は、あんな傷を負うことはなかったのに……」

まるでその一言に反応するかのように、僕の左肩の裏側がズキンと痛んだ。
痛みは一瞬で、後を引く様子もなく、すぐに煙のように消え去った。
だけど。
その場所には、今もまだうっすらと消えずに残る傷痕が確かにあ

る。
あの日、僕の背中を追いかけて同じ木を登っていた唯が足を滑らせて。
それに気付いた僕が、慌てて手を差し伸べて。
それが、引き鉄となった。
逆にバランスを崩した僕の体は、重力の中へと開放されて。
ゆっくりと、まるでスロー再生の映画のワンシーンみたいに、ゆっくりと落下していった。
最初に見えたのは、空。
次に太陽、そして雲。
茂る葉が、伸びた枝が徐々に遠ざかり……。
最後に、両目一杯に涙を流す唯の顔が見えて、僕の体は衝撃の中に沈んだ。
その衝撃の一端が、僕の左肩を貫いた。

運が悪かったのだ。
たまたま植え込みの中に落下した僕の体を、たまたま太く鋭い枝が貫いた。
ただ、それだけのこと。
それだけのことだと、僕は思ってた。
事件が起きた次の日も、昨日も、今日も。
ずっと、そう思ってた。
……けれど。
唯は、違った。
ずっとずっと、まるで自責の念に押し潰されるかのようにしながら、今日までを過ごしてきたのだろう。
傷は時間が癒すという言葉があるが、それは正しいのだろうか？
肉体的な傷は、確かに時間の経過と共に回復に向かうだろう。
では、心の傷はどうか？
僕は当時のことを何とも思っていない。

誰の目から見たってあれはただの事故で、責任を責める相手はどこにもいない。

……はずなのに。

百人が百人そうだと、その言葉を後押ししても。

きっと唯だけが、それを認めない。

幼い頃の傷ゆえに、根強く刻み込まれてしまっている。

それは一種のトラウマに近いものかもしれない。

この傷はきっと、時間では癒すことはできないものなのだろう。

「……ねぇ、大和」

「……ん？」

「大和さ、私に隠してること、あるでしょ？」

「……え？」

「それはきっと、私には関係のないことなんだと思う。だから、私がこんなことを聞くのはおかしいことだって分かってる。でもね……」

俯いていた顔をゆっくりと上げ、唯は僕を見る。

その目が、赤く泣きはらしたように潤んでいた。

「……怖いんだよ。また、大和が傷付いちゃうんじゃないかなって、怖くて仕方ないんだよ……」

「……それは、唯のせいじゃ……」

「分かってる、分かってるよ？　でもね、自分でもよくわからないの。別に隠し事のことをどうとか、そういうんじゃないの。ただ私は、大和にこれ以上傷付いてほしくないだけなの……」

「唯……」

「……昔っから、大和はそうだった。友達のためだったら、自分のことなんていくらでも犠牲にしてきた。大げさな言い方かもしれないけど、ずっとそうだった。大和は、自分のことを大切にしてないんだよ。すぐに自分の価値を軽く見て、他人を優先する。それは優しさかもしれないけど、それだったら、大和の幸せとか喜びは、一

体どこにあるの？」

堰を切ったように流れる言葉。

怒鳴るわけでもなく、喚くわけでもなく、唯はただ涙ながらに静かに叫んでいた。

「……最近ね、嫌な夢ばっかり見るの」

「夢？」

「……いつもみたいにね、私と大和、それに、美野里に悟に健史の五人で帰り道を歩いて、どうでもいい話で笑ったり、ふざけたりして」

「……」

「けどね、路地を曲がって、ふと振り返ると、大和の姿がどこにもいないの。どんなに周りを見渡しても、どこにもいないんだよ？なのに、悟も健史も美野里も、何事もなかったみたいに三人で歩き続けてて、私だけがその場に立ち尽くして、取り残されて……見えない大和の姿を、ずっと探してる。ずっとずっと、日が暮れて、辺りが真っ暗な夜に染まっても、ずっと……」

それは、どれだけの絶望を孕んだ悪夢なのだろうか。

いるはずの、いることが当たり前の誰かが一人いないだけで、雰囲気はがらりと変わる。

そんなことが続けば、きっと誰もが不安になる。

「……嫌、だよ……」

「……唯」

「嫌だよ、私……」

もう、涙は止まらない。

張り詰めていた気持ちがプツリと切れて、唯の中にある薄いガラスが音もなく砕けた。

「――夢なら、覚めてよ……」

そして唯は、再び膝に顔を埋めて静かに涙を流した。

泣いて、泣きつかれて眠って、また唯は悪夢を繰り返すのだろうか？

僕にできることといえば……。

「――ごめん、唯。でも、ありがとう……」

隣に座り、そっと背中に手を当て、そんな言葉をかけることくらいしかなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７６：違い

周囲の木々がザァと揺れ、カラスの群れが鳴きながら何処へと飛び立った。
そんな景色を、飛鳥は食い入るように見上げている。
「どうしました？」
と、一足先を歩く氷室が立ち止まった飛鳥に気付き、振り返って聞く。
「あ、ううん、別に……何でもない」
そうは答えるが、どこか上の空といったような表情をしている。
もっとも、飛鳥はそのことに自分では気付いていないだろうが。
「……大和のことが心配ですか？」
「……え？」
「さっきから、どこかボーっとしていますよ。考え事でもしていたんじゃないかと思いましてね」
「あ、うん。まぁ、そんなとこ、かな……」
いつもとは違い、飛鳥はどこか曖昧な返事を返す。
が、氷室もそのことに関しては必要以上に深い追求を求めることはない。
世話焼きとお節介の境界線を、氷室はわきまえているつもりだ。
「それよりさ、本当によかったの？」
「何がです？」
再び足を動かしながら、二人は話す。
「封印開放のこと。やっぱり、大和が回復するまで待ってた方がよかったんじゃない？」
ガサガサと、二人の足元では地に落ちた木の葉が擦れ合う音がこだまする。
二人は今、残された五ヶ所の封印のあるうちの、まず間違いなく

ここだと言いきれるその一ヶ所へとやってきていた。
しかし、封印の施されている場所は分かっても、そこが何の封印であるかまでは現地を赴いてみないことには分からない。
もしかしたら今こうして向かっている場所は、敵側の能力者に関する封印なのかもしれない。
「……確かに、今の私達では戦力的には見劣りはするでしょう」
木の葉の積もった山道を進みながら、氷室は言う。
「とはいえ、このまま黙って傍観しているのが最適な判断とは思いません。均衡を破るには、先手を打つことでそれが奇襲になることもあります」
「それはそうだけどさ……」

飛鳥の不安はもっともだ。
今のところ、全部で八ヶ所ある封印の三ヶ所までが開放されている。
そのうちの二つは敵側の戦力を強化することになった、炎と氷の封印。
一方こちら側は、唯一風邪の封印を開放できた大和のみが戦力を強化できている。
が、その大和もつい先日の疲労のせいで、まだとてもじゃないが満足な状態ではない。
万が一戦うことになることを考えると、確かに大和の戦力があるかないかでは大きな差が生じるだろう。
しかし、今の大和では本来の力の三割程度も発揮できない。
肉体的な疲労はもちろんとして、この『Ｒｉｎｇ』がもたらす影響力は、常識の枠をとうに超えているものだ。
それこそ、病み上がりの体で無理矢理力を使おうものならば、どんなしっぺ返しが起こるか予想もつかないのだ。
氷室はその反動を、最悪の場合能力者本人の絶命に繋がる可能性も捨て切れないと考えている。

もともと人智を遥かに超えた力なのだから、その程度のことはリスクとしては十分に起こりうる話だ。
「機を覗うことも重要ですが、傍観しすぎて肝心なことを見落としてしまっては意味がありません。ま、口で言うのは簡単なんですがね」
「……要するに、実行に移すのは難しいてことね」
「まさしく。ま、とにもかくにもここまできたんです。手ぶらで帰るのもあれでしょう？」
「まぁ、ね。はぁ……何もなければいいんだけど……」
「変な期待は持たないことですよ。予感とは、面倒なことほど的中するようにできているんですからね」
「……すごい説得力だわ」

そして二人は山道を進んでいく。
緩やかな傾斜が続くが、少なくとも現時点で視界の先に変わったものは何も見えない。
時刻は間もなく、午前八時を迎えようとしているまだ早朝のこと。ただでさえ人気のない山道なのに、これではまるで遭難しているような感覚を覚えてしまう。
ほとんど無言であるき続けるだけの二人がふいに立ち止まらざるをえなくなったのは、それから数分後のことだ。
道が開け、わずかに広い空間に躍り出る。
そして今までのように、その場所にはポツンと佇む大岩のようなものがあった。
石碑と呼ぶにはずいぶんとみすぼらしく、墓石と呼ぶにはあまりにも大きい。
ただの岩の塊と表現するのが一番適切であり、事実それは遠目ではただの岩だった。
だが。
その岩の前に、これまた立ちはだかるかのように、一人の少年が

立っていた。
それを見れば、この岩こそが碑文を刻んだ石碑であると理解することに、時間はかからない。
「……最悪。予感って、役立たずね……」
「……同感、ですね」
緊迫した空気が流れ始めた。
秋の日の早朝ということを差し引いても、空気は驚くほどに冷却されている。
まるで冷凍庫の中に入っているかのようだ。
「来たか」
一言、彼は呟いた。
外見だけで見れば、年齢は恐らく飛鳥や大和と同じくらい。
どこにでもいる学生のような風貌だ。
ただ、その瞳の色だけがやけに冷たく、凍てついた薄氷のような青白さを浮かべている。
真藤日景は、自らが吹雪の中心に立つかのごとく、澄んだ冷気をまとってそこにいた。

「……あなたは？」
まず氷室が口を開き、聞いた。
「……答えなくては分からないほど、アンタは馬鹿じゃないだろう」
目の色を変えず、低い声で日景は答える。
たったそれだけで会話は終了し、空気は再び凍てついた緊迫の中に戻される。
「警戒する必要はない。蓮華達がそうだったように、俺も解放を見届けるためにこの場所にいるだけだ。この場所で、今現在お前達と交戦する理由はない」
そう言うと、日景は体を横に動かし、阻んでいた進路を開いた。
「さぁ、開放するがいい」
氷室達の警戒心を解くためか、日景はさらに数歩ほど横へ移動す

る。
　その手にも武器の類は握られておらず、何よりも今の日景からはまるで殺気や闘争心のようなものが感じられなかった。
　開放を見届けるだけという言葉は、先日の蓮華と同様で本当のことなのだろう。
「……どうやら、そうするしかないようですかね」
「ってことは、ここは私か氷室のどっちかってこと？」
　言いかけて、飛鳥はふいに自分の周囲の異変に気付いた。
「あれ……？」
「どうしました？」
「いや、何か……体のあちこちが軽く痺れるような、ピリピリした空気が……」
「……ということは、ここはどうやら飛鳥の出番のようですね」
「私の出番？　ってことは、ここが……」
「そう、雷の封印だ」
　と、最後に日景が言葉をかぶせる。

　飛鳥は一歩前に出て、目の前の岩を見上げる。
　なんてことはない、それは探せば見つかるようなただの岩だ。
　だが、そこには確かに刻まれている。
　文字でも言語でもない、不明瞭な記号の羅列が、永い永い時を待ち続けて。
　このときを、待っていたのかもしれない。
「……」
　さらに数歩歩み寄り、飛鳥はそっとその岩肌に手で触れた。
　瞬間、バチッと電気が弾ける。
　指先に軽い痺れを感じながら、飛鳥は岩肌にてのひらを押し当てる。
　そして、にわかに岩が淡く光り始めた。
　まるで岩の内部が空洞で、その中からものすごい量の光が溢れ出

そうとしているかのよう。
その湧き上がる光が、岩肌に刻まれたそれらの羅列を浮かび上げる。
血のように深い赤で刻まれた、その羅列を。

「――……我、紫電の瞬きを抱いてここに眠る者なり。我が雷の力を求め者あれば、其の資格をここで示せ。さすれば我は、天地を駆ける龍が如く、汝の内にて秘めたる力を示さん……」

読み終えて、飛鳥は気付く。
岩肌に触れた手が、まるで磁石のように引き合い、すごい吸引力を発生させていることに。
それは、目には見えない巨大な磁場の結界だった。
その中では方向感覚が狂い、人体の感覚器も以上をきたし始める。
その中心に位置する飛鳥は、すでに感覚が壊れ始めている。
目に見える世界はうねるように歪曲し、上も下もわからなくなりつつある。
だが同時に、その手を伝って何かが体の中に流れ込んでくるのが分かった。
いわば、飛鳥と石碑は電源装置のようなものだ。
正確に配線を繋げば力はよどみなく流れるが、配線を間違えれば力は狂った流れを起こす。
そしておかしくなりかけた意識の中で、飛鳥は本能的に理解する。
イメージを形作る。
体内の血管が岩肌の中から流れる力と連結し、よどみなく全身を巡るような。
線と線を繋いで、全てを受け入れるように。
正しく流れるように。
「……っ！」
全てが繋がった。

行き所を失いかけた力は流れを覚え、体内を循環する酸素や血液の流れに混ざり、全てを緩やかに運ぶ。
それと同時に、光る岩肌がしだいにその光を弱めていった。
ほどなくして光は静かに集束し、音もなく消える。
「……飛鳥、大丈夫ですか？」
「……うん、何とか……」
言いながら、しかし体はゆらりと傾ぐ。
「っと」
もたれかかる飛鳥の体を、氷室が支える。
光が完全に消え去り、何もかもが元に戻った。
目の前の石碑は、今度こそ本当にただの岩の塊へと成り下がった。

「雷の開放、確かに見届けた。あとはどこへでも好きに行くがいい。どの道、いずれまた別の封印の場所で会うことになるのだからな」
それだけを告げると、日景はさきほど氷室達がやってきたのとは別の方向へと歩き去っていく。
「待ってください」
その背中を、氷室は呼び止めた。
振り返らずに、日景は足だけを止めた。
「あなたも、何かを望んで能力者であることを受け入れたのですか？」
「……それを聞いてどうする？」
言いながら振り返り、さらに日景は続ける。
「逆に聞こう。なぜアンタは、こうあることを選んだんだ？」
「……」
氷室は答えなかった。
答えられなかった、という方が正しいのかもしれない。
「そうだろう？　同じさ、アンタとな。ただ、俺達とアンタ達は同じだけど、決定的に違う。ただ、それだけのことだ……」
そしてまた背を向ける。

「では質問を変えます。あなた達を統率し、率いているのは誰なんですか？　その人物の目的は？」
「答える義理はない」
日景は歩き出す。
同じだと言い放った氷室達に背を向けて、結局最初から最後まで相容れることはないのだと、そう態度で示して。
「……そんなことより、そいつの心配でもしたらどうだ？」
最後にその言葉を聞いて、氷室は支えている飛鳥に視線を戻す。
「……う」
顔色が悪く、苦痛にまみれた表情の飛鳥がそこにいた。
それは、必ず起こる通過儀礼。
開放に伴う苦痛は、すでに始まっていた。
そうこうしている間に、日景の背中はどんどん遠ざかっていく。
まだ聞きたいことはあるが、飛鳥をこのままにしておくわけにはいかない。
「く……！」
氷室は飛鳥を抱きかかえると、早足で元来た道を引き返した。
今はそんなことよりも、一刻も早く飛鳥を安静にさせる必要がある。

とにもかくにも、これで全体の半分の開放が終わった。
残る封印は、あと四つ。
そして全ての封印を開放した後に、何かが起こる。
具体的なことは、まだ何一つ分かってはいない。
全ては深い闇の中。
しかし、闇の中で輝く欠片があったこともまた事実。
真実の輪郭は、ゆっくりと現れ始めている。
今はまだ、誰もその輪郭に触れることすらできない。
そう……。
ただ、一人を除いては……。

「――……あと、四つ……」

そう呟いて、闇の中、彼は静かに微笑んだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７７：ウサギの願い事

「……ん？」

ふと、視界の端に映ったそれを見て、蓮華はそんな声を漏らす。

陽の光さえも全くと言っていいほど届かない、ずいぶんと昔に倒壊したまま放置されているビルの地下の空間。

朝は明けたばかりだというのに、相変わらずこの場所に届く日差しはない。

そんな、朝か夜かも区別が付かないその場所に、これまた似つかわしくないにもほどがある、黒いウサギのぬいぐりみがポツンと佇んでいた。

「……」

当然のように、その黒いウサギはどこを見ているかも分からないような視線でそこに座っていた。

全身真っ黒なのに、両耳に結わえ付けられたリボンだけが白く、その白とは対照的に目と口は赤い色を帯びていた。

「どうかしたか？」

と、蓮華はふいにそんな言葉を投げかける。

他でもない、そのウサギのぬいぐるみに対して、だ。

もちろん、本来ならそんなことをしたところで返事の一つもかえってくるはずがない。

返ってくるとすれば、それは腹話術を利用してそう見せているか、もしくは本当に呪われているかだろう。

「……ん？　ああ、レンゲか。どうかしたのかい？」

としかし、まるで当たり前のようにその黒いウサギのぬいぐるみ……クロウサは平然と言葉を発して答える。

付け加えておくが、今この場には人間は蓮華一人しかいない。

さらに言えば、蓮華は腹話術などはできない。

つまりこの一人と一匹の会話は、れっきとした会話として成り立っているものなのだ。

「聞いているのはこちらだ。人形に表情の変化をどうこう言うのもおかしな話だが、何となく雰囲気で私には分かる」

「む、失敬な。確かにオイラはぬいぐるみだけど、それ以上の人間らしさを持ち合わせていると自負しているよ」

「まぁ、それは認めよう。確かに、ここまでお喋りな人形は世界中探したところでお前くらいのものだろうからな」

小さく笑いながら、蓮華はクロウサか壁に背をもたれかかる岩盤のすぐ隣に腰を下ろした。

「それで、どうかしたか？　かりんのことか？」

「……どうかしたかと聞く割には、しっかりと的を射ることを口にするよな、レンゲは……」

「別に、私に限ったことではないさ。お前がそんな風に悩んだ空気を流しているときは、九割九分かりんのことを考えているときだろう」

「うわ、オイラってそんなに分かりやすいのか？　これでもポーカーフェイスを気取っているんだけどなぁ」

「……まぁ、あえて追求はしないでおこう」

「あ、バレタ？　アハハハ、まぁ聞き流してくれよ」

そんな風に一人と一匹の会話は続く。

静けさだけが漂うこの場所には、およそ不釣合いなほどの小さな笑い声だった。

「……それで、実際のところどうなんだ？」

「……うん、まぁ……かりんはさ、何でもないって言うから。じゃあきっと、何でもないんだとは思うけど……」

ふと、クロウサの視線が動いたような気がした。

もちろん、ぬいぐるみであるクロウサのその仕草を見極めることなどはできない。

それでも視線は、確かにその方向に向いていた。
閉ざされた扉の向こう側。
そこは、簡単な仮眠室のようなつくりになっている。
恐らくこの建物がまだ機能していた頃は、警備員などの給湯室のような使われ方をしていた場所だろう。
中には簡素だが、何人かが寝て起きるだけの生活をするくらいの設備は整っている。
そして今、その扉の向こう側にある部屋の中で、かりんは静かに眠っている。
「……かりんは、何と言っていた？」
「……何でもないの一点張りだよ。何をいくら聞いても、何でもない何でもない、クロウサには関係のないこと。この繰り返しさ」
「そうか……」
「……かりんはあんなに強情になるってことは、何かあったんだとは思う。けれど、話してくれないならオイラはそれを分かち合うことはできない。それに、あの手の傷。どこで付けてきたのかも気になるし……」
「傷？　ケガをしているのか？」
「うん。それも、ごく最近のものだよ。まるで刃物か何かで刺されたような傷だった。こう、手のひらの真ん中を突き刺されたような」
「治療はしたのか？」
「うん、自分でしたみたい。けど、おかしいんだ。かりんの力なら、傷痕の一つも残さずにきれいに癒せるはずなのに、かりんはまだ手に包帯を巻いたままなんだ。つまり、治りが悪いってことなのかもしれない」
「ふむ……」
一つ頷き、蓮華は一度だけその扉を見る。
かりんの身の回りに何があったのかは知らない。
そしてそれは、知る必要のないことなのだとは理解している。

しかしそれでも、多少は気になってしまう部分がある。
特にかりんの場合、蓮華達の中でももっとも幼く、およそ戦いなどということに巻き込まれるべきではないような人間だ。
心も体も未発達で、傷付けあったりとか、殺しあったりとか、奪い合ったりとか、そんな血生臭いことを目の前で知らされるのは一見むごたらしくも思える。
かといって、蓮華は自分のことをすでに完成した人間だとは思わない。
いや、そもそも完成した人間など、この世のどこを探したところで決して見つかるわけがないと思っている。
完成した人間、それは即ち、神だ。
全知全能にして、命を与え奪うことさえも許されたという神。
聖書の中を覗けば、そこには確かに神の存在が記されている。
そしてまず最初に、アダムとイヴという二人の人間を生み出したということも。
しかしその神話を信じる人間が、どれだけいるだろうか？
正直、信じている人間は少なくない。
いや、むしろ多いといっていいだろう。
なぜかといえば、その説が一番人々の心の中に浸透し、理解を促す効果を持っているからだと蓮華は考える。
真偽などは半ばどうでもよく、生命の誕生というその未知の領域に関してどれだけ人々を納得、説得させるだけのいわゆる表現力がそこに存在するのか。
聖書とはつまり、言い換えれば魔術書である。
内容を読み、その過程で意識を引きずり込み、結果としてその事実を納得させる。

例えば、ここに一人の魔術師がいたとしよう。
その人物は生まれながらにして、とても才能に恵まれていた。
だがいくら才能があったところで、魔術という術を実際に行うに

は、その原理を知らなくては話にならない。
ならばどうするか？
簡単だ。
魔術の説明書とも言うべき、魔術書を読み、理解し、その上で魔術を習得すればいいのだ。
そうして魔術書を読み、読むことで原理を理解し、理解することによって初めて魔術は使用可能となる。
しかし。
本当にそれだけが、万人に共通する真実と言い切ることができるのだろうか？
どれだけ優れた才能を持って生まれても、人間誰でも得手不得手というものがある。
性に合わないとか、好みじゃないとか、本能的に嫌悪感を覚えるとか。
誰だって一度は経験したことがあるはずだ。
そうなると、それはもはや不完全であるとしかいえなくなってしまうのではないだろうか？
才能があり、それを開花させるための分野もある。
しかし、そのレールに乗れない人間だって大勢いる。
話がそれてしまったが、早い話がかりんもそのレールから外れた人間の一人ということだ。
それも、あまりに幼くして脱線してしまっている。
その間違いを正してくれる人もいなく。
あとはもう、流されるがまま。
その身に降りかかった運命さえも、本能的にかりんは受け入れてしまった。
結果、能力者として覚醒することになる。
かりんはまだ知らない。
抗うことを知らないのだ。
意思はあるだろう。

しかし、根底的な部分があまりにも弱々しい。
ほんのちょっとしたことで心は大きく揺れ、感情は行き場を失って崩れ去る。
その結果が、今のかりんなのだろう。
表情の変化すらほとんど見分けることができず、まるでかりんそのものが人形のようになってしまっている。

「何かあったのなら、オイラに話してくれればいいのに……」
どこか悲しそうに、クロウサは呟く。
常日頃からかりんと一緒に過ごしてきて、知らないことなど何もないと豪語できるだけに、クロウサは少し悲しい。
「仕方あるまい。言わないということは、つまり言えない、言いたくない理由があるということだ。心配も度が過ぎれば、と言うしな」
「……まぁ、そうなんだけどさ」
不本意ながらも、クロウサは蓮華の言葉に納得する。
これがもしも、クロウサもちゃんとした一人の人間だったのなら。
いつも一緒にいてあげることができる、そんな存在だったのなら。

「――そうすれば、かりんも話してくれたのかな……」

ポツリ、呟く。
「ん？　何か言ったか？」
「……いや、何でもないよ」
……あれ？
そういえば……。
ふと、クロウサは思い出す。
アイツが言ってたっけ。
この戦争が終わるときになれば、かりん達の望みも全て叶うだろうって。
それって、オイラにも何かを望む権利があるってことなのかな？

む、でもオイラ、別にかりんみたいに能力者ってわけでもないし、戦えるわけでもないからなぁ……。

……うーん。

ま、いっか。

オイラなんかが望むことなんて、あってないようなものだしな。

それよりも、かりんの望みを叶えてあげたいもんな。

もっとも、かりんの望みはもうオイラにはなんとなく分かっているんだけどさ。

……でも、もしそれがオイラの思っているものと同じだとしたら、それは……。

……いや、よそう、こんなことを考えるのは。

かりんが選んだ道なんだ、それでいいじゃないか。

そうさ。

オイラはクロウサ。

黒いウサギだから、クロウサ。

かりんにもらった名前だ。

正直、最初は何だそれって思う名前だった。

ネーミングセンスはゼロだなって思った。

けど今は、そう呼ばれることがどこか嬉しいんだ。

名前があるってことは、そこに存在があるってこと。

それはきっと、とても嬉しいことなんだ。

……オイラはただのぬいぐるみだけど。

それでもかりんと一緒にいられるのなら、何だっていいんだ。

もしもかりんが望むなら、オイラは喜んで剣にも盾にもなろう。

そして、そうだな……。

もしも……本当に、もしもだけど。

オイラの望みも、叶うんだとしたら。

オイラは、何を願おう……？

そんなの、決まってるじゃないか。

――オイラは、人間になりたい。

そう。

かりんにこの名をもらったときから、そう決めていた。

叶わない願いだと分かっていたけれど。

諦めたことはなかったよ。

「……ずっと」

クロウサはもう一度呟く。

誰にも聞こえないように、心に響かせるように。

「――ずっとずっと、君の傍にいるよ……かりん」

Ｅｐｉｓｏｄｅ７８：雲隠れの真実達

泣き疲れてしまったのだろうか、気が付けば唯は再び小さな寝息を立てていた。
母さんの話によると、唯は夜遅くまで僕の看病をしてくれていたらしく、満足な睡眠も取れていないはずだ。
なので、ここはそっとしておいて寝かせておくべきだろう。
ずれ落ちた毛布をかけなおし、僕は静かに部屋をあとにした。
足元はまだ少しふらつくが、大分マシになってきたとは思う。
わずかだが食欲も出てきたので、何か胃の中に収めておこうかなと、僕はリビングへと向かった。
階段を下りると、ソファでは母さんが週刊誌を読みふけっているところだった。
「あら？」
と、やってきた僕に気付いたのか、読みかけの週刊誌を見開きのままソファに置き、母さんはおもむろに立ち上がった。
「もう大丈夫なの？」
「ん、まぁ少しは」
「何か食べれる？　リンゴでも剥こうか？」
「じゃあ、お願いする」
交代で僕がソファに腰を下ろし、母さんはキッチンへと向かう。
テーブルの上のバスケットからリンゴを一つ摘み上げ、慣れた手つきで手早く皮を剥いていった。
「そういえば、唯ちゃんは？」
「まだ寝てる。起こしちゃ悪いから、そのままにしといた」
「そう。まぁ、夜中遅くまでがんばってくれたみたいだったものね」
「うん……」
頷き、僕はわずかにうしろめたい気持ちになる。

結局のところ、僕は唯に対して何も真実を話すことができていないのだから。
だが仮に話したところでどうなるというのだろう？
むしろ、話すことによって危険に巻き込んだり、余計な心配をかけることになってしまう。
それはきっと、控えた方がいい。

話せば唯は、突拍子のないこんなことでも信じてくれるかもしれない。
だが反面、絶対に僕のしていることを止めようとするはずだ。
それは、できない。
唯が善意からそう言ってくれるであろうことはもちろん分かっている。
身を案じてくれているのだということも分かる。
しかしそれでも、もう今更後に引くことなんてできないんだ。
今こうしている間だって、事態は刻一刻と何かしらの進展を遂げているに違いない。
それが僕達にとっての進展であるかどうかは別として、結末はしだいに形となって僕達の周囲を覆い尽くそうとしているのは確かだ。
だから僕も、いくら病み上がりの体とはいってもいつまでも呑気に休んでいる暇はない。
正直、学校が休校な今は好都合だ。
今にして思えば、あの旧校舎が凍結するという原因不明の怪事件も、僕達を動かしやすくするために誰かが意図的にそうさせたことという可能性もありえない話ではない。
とにかくまずは、氷室や飛鳥と合流した方がいいかもしれない。
一人でいくら想像を巡らせたところで、それには限界がある。
外出なんて許してもらえそうにもないけど、病院に行くと言えば十分な理由にはなるだろう。
「母さん、やっぱり今日のうちに病院へ行ってくるよ」

「えぇ？　あんた、本当に大丈夫なの？　途中でへばって倒れたりとかしない？」
「そこまでひどい状態じゃないよ。それに、ちょうど学校も休みだし、平日の早い時間なら空いてると思うし」
「まぁ、あんたがいいならそれでいいけど……くれぐれも気をつけてね？　何か最近になって、妙に物騒な空気が流れてるみたいな感じがするから」
「うん、分かってる」
僕は素直に頷いておく。
きっと、母さんは夢にも思わないだろう。
その物騒事の中心に、僕が介入しているだなんて……。

私服に着替え、普段より少しだけ厚着をして身支度を済ませる。
近所に小さな内科の病院がないので、僕は駅前からバスに乗って市の中央病院へと向かうことになった。
もちろんそれは、表向きの理由に過ぎない。
が、怪しまれないためにも一応は診察を受け、領収書などを受け取っておかないと母さんは怪しむかもしれないので、結局は病院にも行く羽目になるのだが。
「じゃ、いってくるね」
「ええ、気をつけて」
「あ、それと、さ……」
「ん？　何、忘れ物？」
「いや、そうじゃないんだけど……」
ふと僕は二階の部屋を見上げて、言葉を探す。
「……唯が起きたら、言っておいてくれないかな？　ありがとう。それと……ごめんって」
「……いいけど、そんなの自分で言えばいいじゃない？」
「うん、まぁ……そうなんだけど」
「……ま、いいわ。伝えておいてあげる」

「……じゃあ、行ってくる」

扉を押し開け、僕は外に出た。
空はすっかり晴れている。
天気でいえば間違いなく快晴だ。
まだ地面のあちこちには、昨夜遅くまで降り続けた雨の名残の水溜りがいくつも残っていたが、そのほとんどがすでに乾きつつある。
雨上がり独特のあの妙な匂いの空気もすっかりと消え去り、気持ちのいい天気だ。
けれど。
僕の耳の奥では、まだあの音が響いている。
降り止まない冷たい雨のノイズ。
壊れたテレビの雑音のように、ザーザーと鳴り続ける。
思い出し、体が内側から震え上がった。
爪先から頭の先まで、一気に寒気が駆け上がる。
恐怖にも似た悪寒を覚えた僕は、いつの間にか重くなった足取りで一歩踏み出した。
そして同時に思い返す。
昨夜の出来事は、どこまでが夢でどこまでが現実なのだろう？
いや、本能では分かっている。
あれは全て、現実の世の中で起こったことなのだ、と。
しかしだとすると、おかしいことがある。
どうして僕の腹部に、刺された傷痕が残っていないのだろう？

昨夜。
僕は確かに、この場所でかりんと会って話をした。
それは会話と呼ぶには崩れすぎたやりとりだったかもしれないけど、紛れもない事実だ。
そしてその会話の最中、かりんは僕に選択を迫った。
かりん達と共に歩むか、今までのように別々の道を歩むか。

そしてこうも言った。
前者を選ぶのなら、かりんは僕を殺さなくてはならない、と。
その言葉が耳に届いた瞬間、何かが崩れた感覚を僕は覚えている。
苦労して高く積み上げた積み木細工ほど、壊すのは容易いという。
もっと時代を遡れば、それは人々が神に近づこうと築き上げたあの、バベルの塔のような。
僕は困惑した。
いや、自我を失いかけたといってもいい。
それくらいに、かりんの選択肢はショックが大きいものだった。
そしてその問いに僕が答えるよりも早く、かりんはもう忘れてと、そう言った。
その直後だ。
かりんがフラフラとした足取りで僕に近づき、その一瞬後に、あの感覚。
鋭い刃物が肉を突き破り、奥へ奥へと侵入する、あの不気味な感触が僕に伝わってきた。
そして僕は、そのまま意識を失った。
最後の瞬間、雨の中でかりんは呟くように言っていた。
サヨナラ、と。
それが僕の見た、昨夜の最後の記憶だ。

もう一度僕は自分の腹部に触れてみる。
痛みはない。
服を捲り上げ、肌を見る。
傷痕はない。
では一体、昨夜のあの感覚は、何だったと言うのだろうか……。
「……かりん、君は、一体……」
考えれば考えるほど坩堝にはまっていくような気がして、僕はそこで一度思考を中断した。
氷室達に会おう。

会って話そう。
そうすれば、何か分かるかもしれない。
そう考えを切り替え、ようやく二歩目を踏み出したその先の地面に。
僕は、それを見た。
水溜りではない……いや、普通の水溜りではない、まだ赤みを帯びた不思議な水溜りを。
その赤さは、時間経過によって今はすでに黒ずんだ色をしている。
水溜りというほど大きいものではなく、小さな斑点がいくつも点々としている様子だ。
が、僕は一瞬でそれが何であるかを理解できた。
そこは間違いなく、昨夜の僕とかりんの立ち位置であり。
地面に染み付いたその赤さは、昨夜垣間見た銀のナイフにまとわりついたあの赤さと、全く同じものだったから。
「……かりんは、一体誰を……何を……」
刺し、傷付けたというのだろう？
木枯らしが一つ、悲しい音を立てて横を通り過ぎた。
何があった？
何が起こっている？
何が、起きようとしている……？
それらの答えが導き出されるのは、まだ早い。
しかし、そう遠い未来ではないのではないだろうかと、僕はそんな予感を胸に抱いてしまっていた。

今日もいつもと変わらぬ朝を迎えたはずなのに、どうも胸のどこかに引っかかりを覚える。
いや、この感覚は今に始まったことじゃない。
元を正せば、いつかやってくると分かっていたことだ。

だから今、自分が置かれているこの状況も、周囲で起こっている異変も、全ては予定通りといってしまえばそれまでのこと。

少なくとも、真吾はそう理解している。

今目の前にあるこの現実は、気が遠くなるほどの過去にもうすでに定められ、決められていた結末に向けて動いているだけのものなのだと、理解している。

しかし、理解と納得は全くの別物である。

世界は数学のように、常に定められた解しか導き出されないような、そんな単純な構造でできているわけではない。

あらかじめ定められた終末があったとして、そこへただひたすらに歩かされているだけの未来など、誰が好き好んで歩むというのだろうか。

誰だってそんなことは嫌なはずだ。

しかし、そんなことは本当にどうでもいいことなのだ。

なぜなら、どう足掻いたところで、結局訪れる結末は予め定められたものになるのだから。

それはただ一つの間違いもなく。

一見、どこかで歯車が狂ったようにその目に映っていたとしても。

それさえも全て、計算づくのことなのだ。

「その通りだとすると、もう終わりは見え始めてくる頃、か……」

誰に呟くわけでもなく、真吾は小さく口にした。

その目にある色は諦めなのか、それとも呆れなのか、はたまた絶望なのか。

「ま、今更騒いだところでどうしようもねーよな。もともと俺は、そういう運命の下に存在するためだけにここにいるんだからな」

そうさ。

今更、自分に存在価値を求めてどうする？

最初から何もなかっただろう。

最後にも何も残りはしないだろう。

緋乃宮真吾という人間は、そういう存在なのだ。
所詮それは、世界を構成する数多ある歯車の中のたった一つに過ぎない。
なくなれば確かに不都合だが、そのときは新たな歯車を作ればいい。
代わりはいくらでもあるのだから。
そう。
代わりはいくらでもある。
壊れたと分かれば、すぐに取り替えれば言いだけの話。
だから肝心なのは、壊れているのに壊れていないように見せかけること。
一見正常に動作しながら、実はすでに壊れているというのが一番の狂いになるはずだから。
「まだ、時間はある。絶望的なほどに少ないが、それはきっと絶望じゃない」
その胸の内に、何を思うのか。

「――全部が全部、思い通りに行くと思ったら大間違いだ。残された時間で、それを教えてやるよ。なぁ……気紛れの支配者？」

言葉は木枯らしに溶け、寒空のどこかへと運ばれた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７９：昼が夜に変わる頃

とりあえず、飛鳥は無事に眠りに付いたようだ。
ようやく安堵の溜め息を吐き出して、氷室は仮眠室の扉を静かに閉じる。
「さて、と……」
一息つくと、ちょうど沸かしていたやかんが音を上げた。
戸棚の中からカップを取り出し、氷室はインスタントコーヒーの粉末の中にお湯を注いでいく。
コポコポと音を立て、独特の香りが室内に漂い始めた。
砂糖もミルクも入れず、苦味が十分に残る黒い液体を氷室は一口ほど飲み干した。
「ふぅ……」
もう一つ、大きな溜め息を吐き出す。
ソファに腰を下ろし、ぼんやりと天井を見上げる。
「これでようやく折り返し地点ですか。全く、気が遠くなるようにも思えるのに、拍子抜けするほどにあっさりと事が運ばれていますね」
ずれた眼鏡を押し上げながら、愚痴のように零す。
恐らく、飛鳥も大和と同様にしばらくの間はああして眠り続けるだろう。
原因は不明だが、言葉を借りればそれは通過儀礼に過ぎないものらしい。
が、やはり個人差というものも少なからずあるはずだ。
大和はおよそ半日ほどで意識を回復したが、だからといって飛鳥もそうだとは限らない。
少なくとも、今の飛鳥は絶対安静。
大和に至っても、まだ戦えるほどに体が回復しているとは思えない。

となると、現状でこちら側の戦力として計算できるのは氷室ただ一人のみだ。

正直言って、これは相当に不利な状況に追い込まれているといっていい。

それでも恐らく、一対一という限られた状況ならば、相手を倒すには至らずとも、逃げ切るくらいのことはできるかもしれない。

だが、間違っても撃退することなどはできないだろう。

仮に刺し違える覚悟で真っ向からぶつかっても不可能だ。

唯一勝機があるとすれば、罠の類でも張り巡らせ、綿密に計画を立てた上で行動する必要がある。

しかし、そんな時間的余裕もあるとは思えない。

逆に言えばそれは、相手側の奇襲の可能性もほぼ全否定できるというわけではある。

そもそも奇襲を仕掛けるのならば、今こうして落ち着いてコーヒーなどを飲ませる余裕を相手側が与えるはずがないのだから。

これは推測に過ぎないが、相手側の面々は恐らく、今は封印の解放にのみ力をつぎ込んでいるのだろう。

そして向こうの出方を見ているからに、いくつか分かったこともある。

恐らく相手側は、八つある封印の場所の全部、あるいはほぼ全ての場所を把握していると思われる。

にもかかわらずこちらに対して大きなリードを保てないでいるのは、封印開放の特殊なしきたりのようなものに阻まれているからだということが考えられる。

即ち、特定の封印は特定の能力者でなくては開放することができないという、この法則のおかげだ。

火は火で、水は水で、風は風で。

いわば神経衰弱のように、組み合わさるパーツ同士が同等の属性で引き合わない限り、封印の開放は成立しないと考えられる。

こちらの戦力が四に対し、向こう側も同じく四。
最初に炎と氷が開放され、向こうは大きく二歩リードした。
本来ならそこで、こちら側に対して奇襲を仕掛ける絶好の機会だったはずだ。
それをしなかった理由は、恐らく二つ。
一つは炎と氷の能力者の両名が、通過儀礼のため行動を起こすことが不可能な状態だったということ。
そうなると、実質向こう側の戦力は残る二つのみ。
対するこちらは倍の四で迎え撃つことができるので、どう見ても状況は不利に傾いてしまう。
もう一つは……どちらかというと、氷室はこちらの意味合いが大きいのではないかと考えている。
それはつまり、全ての封印開放を成し遂げる前に、一人でも能力者を欠かすことができないのではないかということ。
前述の通り、封印開放にはそれぞれ見合った能力者が必要だ。
だがここで、例えば氷室が死んでしまったらどうなるだろう？
水の封印は水の能力者がいなくては開放できない。
ゆえに、能力者が死んでしまえば開放は不可能である。
もちろん、『Ｒｉｎｇ』だけをあらかじめ奪い取り、その上で能力者を消し、新たに能力者を探すことも不可能ではないだろう。
だが、それではあまりにも不確定要素が大きすぎる。
再度適合する能力者が、そうそう都合よく現れるとは思えないからだ。
したがって、能力者は誰一人としてかけることは許されない。
無論、相手側も同じことだ。

するとここで、新たに疑問が生まれることになる。
能力者が欠けることは許されないということは理解できる。
では、そうする理由は何か？
決まっている。

八つの封印が全て開放されることにより、初めてそこに何かの条件が達成されるからだ。

それが何であるかはまだ分からない。

が、少なくとも相手側はその何かに固執しているのは間違いない。

最初、これは戦争だと思っていた。

だが、その時点で見当はずれだったのかもしれないと、氷室は今に至って考えを改める。

そもそもこの戦争には、勝者も敗者もないのではないだろうか？

兎にも角にも八つの封印を開放させることが優先するべき目的であり、戦争の勝者……つまり最後の一人になるまで殺し合い、その勝者には望みを叶える権利が与えられるとか、そういうのは全てただの建前に過ぎないのではないだろうか？

本当に重要なのは、そのさらに奥。

仮初の真実の裏にある、誰も気付かない隠蔽された黒い真実があるのではないだろうか？

そしてそれこそが、相手側の四人を統率しているであろう、まだ見ぬ誰かの真の意図。

言い換えれば、向こうの四人もそれに気付かされずに操られている可能性がある。

いや、恐らくある程度までは事実を教えられてはいるのだろう。

そうでなくては、全ての封印開放まで奇襲を行わないという意見を納得させることが難しいはずだ。

つまり相手側は、こちらの知らない何かを知っている。

この部分でも出遅れは隠せない。

もしもその隠された何か、その真実を暴くことができたのならば、この戦いをそこで静かに終わらせることができるかもしれない。

もうこれ以上誰も苦しまず、誰も傷付かずに、静かに幕引きを行えるかもしれない。

だが……。

「それは、無理な相談なのでしょうね、きっと……」
静かに氷室は呟いた。
誰に向けての言葉だったのだろう、自分でもよく分からない。
自分自身に言い聞かせたようでもあるし、隣室で眠る飛鳥にかけた言葉かもしれないし、敵側の四人に送った言葉なのかもしれない。
「最終的に、望みが叶う。あの四人を縛っている原動力はこの言葉なのでしょう。それを打破するだけの論理を、今の私は持ち合わせていない。説得することで幕を引けるなら、どれだけ楽なことか……」
言いながら、もう一口だけコーヒーを口に含む。
「……何も失わず、何も傷付けずに何かを無に還すことはできない。そう考えることがあるのならば、それはただの傲慢だ、か……」
いつか、誰かから教わったその言葉がふいに口をついて出た。
「……ん？」
ふと、氷室は思い返す。
確か、このあとにもう一言くらい何か続く言葉があったような気がするのだが……。
「……忘れてしまいましたね、ずいぶんと昔のことですから」
ソファから立ち上がり、窓の外の景色を眺める。
空は青く、晴れている。
時計を見れば、まだ正午にもなっていない。
見下ろす街並みはいつもと変わらぬ平和の色を示している。
それが逆に、どうしようもなく怖くなるときがある。
あと、四つ。
ゼロになるとき、きっと何かが変わって何かが終わる。
それでも、ゼロに向かうしかない。
今の自分達には、明日の空模様を思う余裕すら残されていないのだから。

「ふぁぁぁーっ……」
気の抜けたような大あくびをして、長椅子の上で寝転がっていた竹上は目を覚ました。
「竹上さん、寝不足っすか？」
そんな起き抜けの竹上に缶コーヒーを差し出したのは、彼の部下でもある万代である。
「ん？　ああ、まぁそんなとこだ」
缶コーヒーを受け取り、竹上は蓋を押し開けてゴクゴクと液体を飲み干していく。
「で、捜査の方はどうなってる？」
「どうもこうもないっすよ。進展どころか、ますます迷宮入りって感じですね」
竹上の問いかけに、万代は呆れかえるように答える。
「そもそもおかしいですよ。森林公園の大火事から日も経たないうちに、今度は高校の旧校舎が氷漬けですよ？　事件性もへったくれもあったもんじゃないですよ」
「ま、お前の言うことはもっともだな」
飲み干した空き缶を放り投げる。
放物線を描き、空き缶はガコンとゴミ箱の中へと着地した。
「上のお偉いさん方も、対応に困ってるみたいです。さすがにこれだけ大騒ぎになると、マスコミ関係もうるさくなってきますから」
「とはいえ、どうしようもないだろうが。俺達警察の仕事は事件の解決だが、原因が不明のうちは事件にすらなりゃしねぇ。動機も犯人像も手がかりもなしに、捜査の進めようがないだろう」
「ですよね……」
やれやれと立ち上がって、竹上はグッと背を伸ばす。
長椅子に寝転がっていた時間はそう長くないはずだが、体のあちこちが痛い気がする。
歳はとりたくないもんだなと、竹上は内心で呟いた。

「で、結局上はどういう結論を出したんだ？」
「しばらくはまた様子見だそうです。でもまぁ、仕方ないっすよこればっかりは」
「馬鹿ヤロウ。仕方ないで済んだら警察はいらねぇんだよ」
「そりゃそうですけど……」

とはいえ、実際に仕方ないのだから本当に仕方ない。
短い期間で二つの事件が連続して起こっているから、第三の何かが起きることくらいまでは想定ができる。
だが、予測ができてもそれを食い止めることができなくては本末転倒だ。
警察とは決して万能な機関ではない。
そもそも刑事だって人間なのだ、完璧を求めるほうがどうかしている。
そんな完璧な人間がいるのなら、そもそも事件は事件として発生する前に片付いてしまうのだから。
「……さすがにこればっかりは、あの名探偵も出る幕じゃねぇわな」
ポツリと、竹上は呟く。
……いや、待て。
そういえば……。
思い返し、竹上はしばし思考した。
あの日、血まみれの氷室達を送り届けたときのこと。
思えばあれも、何かの事件に巻き込まれているんじゃないだろうか、と。
長年の刑事の勘が何かを告げていた。
だが、結局はそれだけだ。
だがもしも、次に何かが起こるとして、その周囲にまた氷室達が何らかの形で関わっているのだとすれば、それは……。
「……おいおい、やめてくれよそんなことは」
「え？　何ですか、竹上さん？」

「……いや、何でもねぇよ」
それだけ言って、竹上は署内の静かな廊下を歩き去っていく。
「あ、待ってくださいよ」
そのあとを万代が追う。
一日はまだ半分ほども過ぎていない。
事件にしたって、起こるのは日が落ちて闇が迫る頃と相場は決まっている。
そう。
何かが起こるとすれば、これからなのだから。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８０：水と炎、再び

事務所の明かりは消えていた。
留守かと思ったが、考えてみれば真昼から明かりをつける必要もないだろうと僕は思い、二階へと続く階段を上り始めた。
コンコンと扉をノックする。
そのまましばらく中からの応答を待っていたが、返事は返ってこなかった。
失礼だと分かっていたが、試しにドアノブを握って扉を引いてみる。
が、鍵がかかっているようで扉は少しも開かない。
どうやら氷室は留守らしい。
「どこに行ったんだろう……」
呟き、同時に僕は思った。
もしかしたら、すでに次の封印の開放に向かっているのではないだろうか？
それは十分にありうる可能性だった。
だとしたら、飛鳥も一緒だろうか？
それ以上考えるよりも先に、僕は携帯を取り出して氷室の番号へと発信する。
電話の向こうでコール音が連続する。
しかし、ふと僕は違和感を覚える。
そのコール音が、電話の向こうからとさらにもう一つ。
そう、ここ、氷室の事務所の中から同じ音が聞こえてきたのだ。
「え？」
どういうことだ？
氷室は携帯を置き忘れてどこかへ出かけてしまったのだろうか？
そうだ、氷室の車は……？

僕輪急いで階段を駆け下り、氷室の車が駐車してある場所を覗きに行った。
「あれ？」
しかし、予想とは外れて車はそこにしっかりと残されていた。
つまり、氷室は出かけたにしてもそこまで遠出しているわけではないと考えられる。
だがそれにしたって、携帯を置き忘れていくなんてどこか氷室らしくないような気がする。
何かあればすぐ連絡をするようにと、そう口をすっぱくして教えてくれたのは他ならぬ氷室だ。

途端に嫌な空気が背中にまとわり付く。
また、何かが起きそうな、そんな予感がする。
こういう予感は嫌というほどに的中することを、僕はもう身を持って教えられている。
だが、だからといって何ができる？
もしかしたら氷室は本当に、近所のコンビニかどこかで買い物でもしているのかもしれない。
だとしたら何も心配することはないのだが、一概にそうだと言いきることもできない。
不安の目は限りなく摘み取っておくに越したことはない。
そうしたいのは山々なのだが……。
「飛鳥なら、何か知ってるかも」
僕は携帯を一度切り、改めて今度は飛鳥の番号へと発信する。
だが。
「……ダメだ、繋がらない」
電話の向こうから聞こえてきたのは、電波の届かないところにいるか電源が入っていませんというお決まりのメッセージだけだった。
これでもう、二人に対する連絡手段は途絶えたことになる。
「二人とも、一体どうしたんだろ……」

不安が色濃く僕の胸の内を支配していく。
気のせいか、それに合わせて空模様までくだり気味になっているように感じる。
何もないことを祈りたい。
しかしそれがどれだけ難しいことなのか、やはり僕は嫌というほどに理解させられていた。
何もないことなんてない。
何かが起きている以上、それは何かの始まりに繋がるからだ。
この状況下で、新たに起こりうる何か。
そんなもの、考えるまでもない。
「氷室、飛鳥……」
呟き、空を見上げる。
空はまだ青い。
しかしそれは、今はまだ青いという、ただそれだけのこと。
僕には分かっていた。
もう間もなく、この空模様は一面の暗黙模様に変わっていくということが……。

大和が氷室の事務所を訪ねるほんの数分前に話は遡る。

扉をノックする音に、氷室は応待すべく扉を開けた。
するとそこにいたのは、思いがけない人物だった。
「おや、珍しいお客ですね」
「悪かったな、突然の訪問者でよ」
目の前にいる人物は、真吾だった。
「それで、どうしたんですか？」
「一応、この前の提案の返事をしておこうと思ってな。これから少しいいか？」

「それは構いませんが……イエスかノーで答えるだけなのですから、時間などかからないでしょう？」
「……その他にも、いくつか話しておくことがあるんだよ。手間は取らせないが、なるべく人目につきたくない」
「……そうですか。ま、いいでしょう。それで、どこで話します？」
「……道なりに説明する。まずは俺についてきてくれ」
言うだけ言って、真吾は一足先に歩道へと戻っていった。
わずかばかりの疑問を抱えながらも、氷室はとりあえずそのあとを追うことにした。
事務所の鍵を締め、真吾の背中を追いかける。

そうして歩くことおよそ二十分。
真吾と氷室の二人は、相変わらず立ち入り禁止区域に指定されたままの森林公園跡地までやってきていた。
「どこまで行くんです？」
数歩後ろを歩く氷室が聞く。
「……まぁ、このあたりならいいか」
答えて、前を歩いていた真吾が歩みを止めた。
「何を考えているのか知りませんが、内緒話一つするのにこんなとこまでやってくる必要性は感じられませんよ？」
「そう言うなよ。こっちにだって事情ってもんがるんだ」
軽く返しながら、真吾は氷室を振り返る。
「じゃ、まずは結論から言わせてもらう。アンタの提案、乗ってやるよ。共同戦線だ」
驚くほどあっさりと、真吾は言い放った。
「そうですか、それはどうも……と、言いたいところですが」
氷室は一度ずれかけた眼鏡を押し上げ、続ける。
「それだけじゃないのでしょう？　わざわざこんなところまでやってきた理由というのは」
「……」

その聞き返しに、真吾は黙り込んだ。
ということはつまり、まだ何かあるということだ。
共同戦線の提案は受け入れる。
だからその代わりに……のような、何か条件付けのようなものが。
「……まぁ、アンタ相手に騙しあいをしても分が悪いからな。それに俺自身、嘘をつくのがヘタなみたいなんでな。そのせいでガキの頃から色々と苦労してるんだ」
「それはお気の毒ですね。ですが、話を逸らすのもこれくらいにしましょう。前置きはいいですから、本題を。何かあるのでしょう？その、交換条件のようなものが」
「察しが早くて助かる。何、難しいことじゃないさ」
スゥと小さく息を吸い込んで、真吾は一度目を閉じる。
閉じた目を直後に開け、そして言った。
あまりにもあっさりと、しかし聞き流すことができないその一言を。

「――俺を殺してほしい」

その言葉に、ある程度の想像を働かせていた氷室さえも硬直した。
確かにその一言は、前置きの通り何一つ難しいことではなかった。
だが、反面にあまりにも信じられない、聞き捨てならない重い一言だった。
「……何を、言って……」
ふざけているだろうかと、思わず氷室も聞き返す。
だが、続く言葉を遮って真吾は続ける。
「冗談でも何でもねぇんだ。こっちは真剣に頼んでるんだよ。そっちの提案を受け入れる代わりに、俺を殺せ」
顔色一つ変えず、再び真吾は言い切った。
「……意味が分かりませんよ」
腕組みし、氷室は聞き返す。

「共同戦線を結んだ相手を殺すことが交換条件？　そんな滅茶苦茶なことがあっていいはずがないでしょう？　根底の部分から矛盾しているじゃないですか」
「問題でもあるか？」
さらりと真吾は言い返す。
やはり、顔色には何の変化も見られない。
「……っ、確かに、一つの交換条件としてその要望は間違いとは言いませんよ。ですが、その提案は受け入れられません」
「なぜ？」
「なぜって、当然でしょう？　私にはあなたを殺す理由なんてこれっぽっちも……」
「だったら……」
低い声で真吾は言う。
わずかに声色が変わり、それに伴って表情にも変化が起きたようにも見える。

「――アンタが俺を殺さない限り、俺が大和とあの女を殺す。そう言ったらどうする？」

「な……」
「分かってるんだぜ？　大和とアイツは、今封印開放の直後でまともに力を使うことができないってことくらいな。そんな状態のやつらなら、例え二対一でも俺が負けるとは思わないがな」
「正気ですか？　自分が何を言っているのか、分かって……」
「分かってるさ」
静かに低く、真吾は告げる。
「俺の言葉は狂気を孕んでいるかもしれないが、俺そのものは至って冷静だ。言うなれば、俺は真剣に狂ってるんだよ」
「……っ！」
確かに、こうして面と向かって話す真吾の様子はふざけているも

のには見えない。
ふざけているようならば、あんな重い口調で話せるはずがない。
これは演技ではない。
正真正銘、心の底からの声なのだ。
「で、どうする？　アンタは俺を殺してくれるのか？」
「……お断りですよ、そんなことは」
「だとしても、俺があいつらに手を出すとしたら、アンタはそれでも黙って見ていられるのか？」
「……っ」
「……まぁ、アンタにはできないだろうさ。だからこそ、俺はアンタに俺を殺すように頼んでるんだ。大和でもあの女でも、きっと俺を殺せないだろうからな」
「……なぜですか？　どうしてそこまでして、死に急ぐ必要があるというのです？」
「もっともな疑問だが、それに答えてやる義理はないな。誰にだって共有したくない秘密の一つくらいあるだろ？」
「……」
「……ま、納得できないならそれでいいさ。だが、俺は有言実行するぜ？　アンタが俺を殺さないというのなら、不本意ではあるが俺があいつらを殺すまでだ」
「……本気、みたいですね」
「俺はいつだって本気さ」

「……やれやれ、どうしてこうなるんでしょうかね」
溜め息を吐き出し、氷室は頭を切り替える。
理由はどうあれ、二人に危害を及ぼすわけにはいかない。
ならばこちらとしても不本意ではあるが、迎え撃つことしか手段はない。
その手に力を集中させる。
空気中の水分が凝縮され、水の粒となり、粒子はやがて一本の槍

へとその姿を変える。
「……悪いな。もう、時間がねぇんだよ」
聞こえないようにそう呟いて、真吾もまたその手に力を集中させる。
炎が両手を包み、飛び散る火の粉の一つ一つが刃となって宙に浮かぶ。
「……一つ、訂正しておきましょう」
「……何だ？」
「こちらから持ちかけておいてなんですが、共同戦線の話、なかったことにさせてもらいますよ」
「……ああ。こっちとしても、その方がやりやすい」
そして一瞬の静寂。
直後に、大地が弾けた。
望まぬ戦いがこうしてまた一つ、音もなく交差を始めた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８１：嵐のうねり

結局僕は目的を見失い、建前のままに病院へとやってきていた。
平日の朝方ということもあって、思った以上に来客の姿は少なく、僕もさほど長い時間を待たされることなく診察室へと名前を呼ばれることになった。
問診を受け、聴診器を当てられ、簡単な検査を受けて診察を終え、僕は今広間のロビーで再び名前が呼ばれるのを待っているところだ。
縦に長い黒の椅子には、まばらではあるが来客の姿が見て取れる。
ロビー中央には大型のテレビが備え付けられ、画面の中では朝のニュースが次から次へと足早に流れているところだった。
と、その中に嫌でも目立つ内容のものがいくつかあった。
それは近日中に起きている、あの森林公園の火災と僕の通う高校の旧校舎が一夜にして氷漬けで発見されるという、奇怪な事件の連続に関することだった。
ダイジェストのように流れる画面では、その二つの事件は簡単にしか説明はされていない。
しかしその反面、全くの原因不明ということでちょっとした騒ぎになっていることも事実だ。
言われてみて気付くが、確かに以前までと比べて街並みやそこを歩く足並みが違ってきているようにも思える。
恐らく、誰もがわけの分からないままに多少の不安を抱えており、それが色濃くなって空気の中に溶け込んでいるのかもしれない。
噂ばかりで真相は闇の中。
原因不明というその言葉が、よりいっそう人々の不安をあおっているようだ。
この二つの奇怪な事件は何らかの共通点があるのではないのだろうか？

二つの事件は同一犯、もしくは同一犯行グループによる、愉快犯目的の仕業なのだろうか？

などなど、テレビの中ではそんな討論が専門の学者達を交えて展開されている。

僕はただジッと、一言も発さずにその画面に見入っていた。

違う。

そんなんじゃないと、内心で何度も呟きながら。

やがてロビーにアナウンスが流れた。

「十二番の番号札でお待ちの黒栖大和様、会計カウンターの方までお越しください」

名前を呼ばれ、僕は椅子から立ち上がる。

会計へ向かい、そこで処方された風邪薬の用法などを簡単に説明され、会計を済ませる。

渡された薬袋をコートの内ポケットにしまい込んで、僕はそのままロビーをあとにした。

自動ドアをくぐりぬけ、青空の下に出る。

日差しは強くも弱くもなく、気温も高くも低くもない、典型的な秋晴れの空だ。

ただ、やはり風邪を引いているせいだろうか、わずかばかりの肌寒さを抱えながら、僕は歩き出す。

本当ならこのまま真っ直ぐ家に帰宅するのが正しいのだけど、ここまでで僕の目的はまだ半分ほどしか達成されていない。

つまり、氷室と会って話をしていないということだ。

病院にやってくる前に事務所を立ち寄ったが、どうやら氷室は留守のようだった。

病院での待ち時間でも、一度メールを送ってみたのだけど、まだ返事は返ってこない。

やはり携帯を事務所に置きっぱなしにして、どこかへ出かけているようだ。

だが、だとしたらどこに出かけたのだろう？
買い物一つ済ませるにしたって、もうかれこれ一時間以上が経っている。
さすがに事務所へ戻っていてもおかしくないと思うのだが……。
そう考えたところで、しかし考えは全くまとまらず、ぼんやりと考え事をしながら足を動かすだけ。
やがて交差点の信号にぶつかり、僕はしばしの足止めを食らう。
その間も頭の中ではいろいろなことを考えていた。
考えすぎて何もかもがまとまらず、最終的には何を考えていたのか自分でも分からなくなってしまっていた。

ちょうどそのときになって、信号が赤から青へと変わる。
先行く人々の足音に僕は意識を戻されて、人波に呑まれるようにして横断歩道を渡り終えた。
さて、これからどうしようか。
やはりもう一度事務所を訪ねてみて、それでもまだ氷室がいなければ少し待ってみることも考えよう。
場合によっては飛鳥にももう一度連絡をとって、事情を話して……。
そんなことを考えながら、僕は途中で一軒のコンビニに立ち寄った。
体が冷えていたので、温かいコーヒーの一つでも買っておこうと思ったのだ。
自動ドアをくぐり、店内へ。
店員のいらっしゃいませの声を適当に聞き流しながら、缶コーヒーの陳列してある奥の棚に向かう。
が、その途中で。
「あれ、大和？」
と、そんな声が背中からふいに聞こえ、僕は思わず振り返った。
そこに、飛鳥がいた。

本日発売の週刊誌を立ち読みしている飛鳥の姿が、そこにあった。
「あ、飛鳥？」
思わず僕は聞き返す。
どうしてこんなところにいるのと、そう聞くよりも早く、他に聞きたいことがいくつも、今頃になって思い出せた。
「ここに住んでるの？」
「うん」
一足先を案内されやってきた僕は、目の前のマンションを見上げて呟いた。
「一人で？」
「そ。一人で」
「……へぇ」
どうしてと、聞くのはなぜだかはばかられた。
玄関部分に当たる大きなガラス張りのドアを押し開けて、僕達はエレベーターホールへと進む。
ボタンを押し、上のフロアからエレベーターガやってくるのを待つ。
やがて電子レンジのような音を立ててドアが開き、僕達は乗り込む。
飛鳥は七階のボタンを押し、ドアを閉めた。
ゴゥンゴゥンという機械音と共に、僕達は上昇を続けていく。
時間にすれば大したものではなかったが、僕達は終始無言だった。
僕は何か言うべきかと迷い、飛鳥は僕が何か言うのを待っていたのかもしれない。
もちろん、真偽のほどは分からないけれど。
再び電子音を鳴らし、ドアが開く。
七階に到着した僕は、先を歩く飛鳥の背中を追って廊下を歩いた。
マンションは十八階建てで、各階の部屋数は十二から十八までとなっている。

飛鳥の部屋は七階の端の方、七百二号室の部屋だった。
上着のポケットから鍵を取り出し、飛鳥は扉を開ける。
「さ、入って。何もないけどね」
「あ、うん。おじゃまします……」
促されるまま、僕は玄関口に体を滑り込ませた。

パッと見て、間取りはごく普通の広さだった。
それらしい言葉で言うなら３ＤＫと言ったところだろうか。
最初から思っていたことだが、とても同い年の人間が一人で生活するような空間ではないように思える。
物件を買ったのか、それとも月ごとに家賃を払っているのかは分からないが、経済的に負担はないのだろうか？
などと、僕がそんなことを考えていると、飛鳥はさっさと僕の横を通り抜けて家の中へといってしまう。
玄関で棒立ちしていた僕も、靴を脱いでそのあとに続いた。
「あ、その辺に適当に座ってて。お茶とコーヒー、どっちがいい？」
「あ、えっと……じゃあ、コーヒーをお願い」
「オッケー」
そう答え、飛鳥は戸棚の中からカップを二つにインスタントコーヒーの瓶などを取り出し、手際よく作業を進めていく。
その間僕は、あまりいい意味で捉えられることではないが、部屋のあちこちを見回していた。
一言で言ってしまえば、片付いているというよりもどこか殺風景な印象だった。
まぁ、それも当然といえば当然だろう。
３ＤＫという間取りは、一人で暮らしていく上では必要以上に広すぎる空間だ。
キッチン周りも、最低限の生活必需品だけを敷き詰めたような図柄に見える。
逆にゴチャゴチャしているよりはずっといいのだけど、どこか寂

しげな空気が流れているようだった。
「はい、お待たせ」
そんなことを考えていると、ちょうど隣にカップを手にした飛鳥がやってきていた。
「熱いから気をつけて」
「あ、うん。ありがと」
とりあえずカップを受け取り、僕は一口ほど口に含んだ。
特に何の感慨も沸かない、至って普通のコーヒーの味が広がる。
一方飛鳥も、僕の隣に腰掛けて同じようにコーヒーをすすっている。
しばらくの間……といっても数分のことだが、僕達は互いにコーヒーを飲み続けているだけだった。

「……あのさ」
と、僕は飛鳥に声をかけた。
「ん、何？」
ずっとここで一人で暮らしてるの？
と、そう聞くつもりだったのに、やはり寸前でブレーキがかかってしまう。
何かこう、踏み込んじゃいけない場所に土足で踏み入ってしまうような気がして……。
「……えっと、それでさ、氷室のことなんだけど」
僕は話題をかえ、本題である話を持ちかけることにした。
「来る途中も話したように、連絡が全然つかないんだ。色々と相談したいこともあったんだけど、飛鳥は心当たりとかないかな？」
「電話にも出ないんだっけ？　だったらその辺で買い物でもしてるんじゃないのかな？」
「うん、僕もそう思ったんだけどさ。さすがにもう二時間近くも反応がないと、ちょっとね」
「んー……私も氷室と特に付き合い長いってワケじゃないし、行動

パターンとかは全然わかんないよ。けど、確かに氷室は黙ったまま行方をくらますような人間ではないと思う」

「そう、だよね。じゃあやっぱり、考えすぎなのかな？　携帯を事務所に置き忘れたのもたまたまで、本当にどこか近所で買い物とかでもしてるのかな……」

「え？　ちょっと待って。どういうこと？　氷室の携帯は事務所にあるって、何で分かるの？」

「最初に事務所を尋ねたときに、中から返事がなかったから、その場で電話をしてみたんだよ。そしたら、事務所の中から携帯のコール音が聞こえたんだ」

「ってことは、別に氷室は出かけたとかじゃなくて、疲れて熟睡でもしてるんじゃないの？」

「でも、何回か扉をノックしたけど、何の反応のなかったんだ。寝てたにしても、氷室なら応対しそうだけど……」

「そりゃまぁ、確かに……」

互いに小さくうなりながら、さらに考え込む。

余計な心配とかいらぬ世話とか、氷室に限って万が一なんてあるとは思わない。

けど、あってしまったらそれはそれで大変なことだ。

仮に今のこの状況が、連絡を取れないのではなく、連絡を取ることができないのだとしたら。

それはきっと、何かしらの悪い状況に事態が進んでいることを示しているからだ。

「……ちょっと、マズイかもね」

わずかに不安の色を見せながら、飛鳥は言った。

「……嫌な予感がするんだ。何か、大変なことが起きるような気がして……」

それは予感か。

それとも、すでに始まってしまっているのか。

それさえも分からないことが、さらに不安の色を濃く染めていく。

僕達は無言のままもう一口ずつコーヒーを口に含んだ。
そして小さな溜め息と共に、カップをテーブルの上に置き、コトンと音を立てたその直後に。
「……っ！」
「……！」
僕達は揃って顔を上げ、過敏なくらいの反応を示した。
「飛鳥、これって……」
「うん、間違いない……」
にわかに緊張が走る。
その気配を手探りではなく、第六感のような感覚で探り当てる。
そして、確信した。
「……これ、もしかしたら」
「……氷室だ」
同時に立ち上がり、ベランダへと躍り出た。
目の前には青く晴れた秋晴れの空と、町の景色が広がっている。
目下には米粒のように小さな人影や、右往左往する車の影。
そんないつもと変わらない街並みの一点に、不穏な気配は確かに集約していた。
「飛鳥、あそこって確か……」
「森林公園？　でも、どうしてそんなところに……」
「……行こう！」
考えている暇はない。
僕達が揃って感じ取ったのは、紛れもなく『Ｒｉｎｇ』の力による余波だったのだから。
それが感じられるということは、つまり能力者が能力を使っているということ。
そしてその反応は、二つ。
イコール、戦闘している可能性があるということだった。
その二つのうちの一つにでも、氷室の可能性があるのならば、放

っておくわけにはいかない。
「アイツ、一体何考えてんのよ！」
靴を履き、乱暴に鍵を締めて僕達は走り出す。
真昼の空の下、そこだけが暗雲を巻き起こしているその場所に向けて。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８２：子供な大人

前方から迫り来るのは炎の短剣。
炎であるが故にそれらに実体はなく、しかしその鋭さは実際の刃物をはるかに超越した残酷な切れ味を持っている。
命中すれば、即座に傷口気斬ると同時に焼くその刃を、氷室は最小限の動作で紙一重で全て回避する。
「はっ！」
回避の直後、反撃の一撃を見舞う。
手にした三又の槍が空を裂き、突くと斬るを同時に併せ持つ切っ先が振り抜かれた。
「……」
しかし真吾もその一撃をあっさりとかわす。
後退しながらも常に目線は氷室から外さず、休む間もなく新しい短剣を生み出していく。
一見して、一進一退にも見えるこの状況。
だが、外からはそう見えても当時者達はどうだろうか？
少なくとも、氷室はもう感じ取っている。
言いようのないその、違和感を。
「……どうしたんです？　本気でやったらどうなんですか？」
突き出したままの槍を袂へ引き戻し、氷室は言う。
「けしかけたのはそっちでしょう。それとも、今になって心変わりでもしたんですか？」
「まさか」
としかし、真吾は氷室の言葉をあっさりと否定する。
「相手の手の内も分からないのに、最初から全力でやるわけないだろ。それに、本気を出してないのはアンタも同じだろう？」
「……」

答えずに、氷室は眼鏡を押し上げた。
……違う。
やはり、何かが違う。
氷室は思う。
得体の知れない違和感が確かに存在しているのに、その正体が何なのか分からないでいた。
ふと思い出したことを口にしようとして、他の誰かが話題を変え、気が付くと何を思い出していたのかを忘れてしまっているような、そんな感覚だ。
もう少し強く言うのならば、何かが頭の奥に引っかかっている。
真吾が本気を出していないことがそうではないのだろうかと、最初は思った。
が、真吾の言うとおり、氷室もまだ本気を出さずに様子見程度の力具合で戦っていることも事実だ。

「――俺を殺してくれ」

やはり一番引っかかるのはこの言葉。
だが、そう言ったときの真吾の表情はとてもじゃないが、ふざけているようには見えなかった。
使い方は間違っているかもしれないが、真剣そのものだった。
なぜ、なのだろう……？
今になり、氷室はもう一度考えを改める。
殺してほしいというその考えは、納得こそできないものの理解できないわけではない。
自分を殺してほしいと思う人間も、決して多くはないが存在はするだろう。
そこに存在する理由も千差万別ではあるが、共通するのは苦しみから解放されたいというその一念に尽きると言っても過言ではない。
人は誰だって、心のいくつかの傷を背負って生きている。

浅い傷、深い傷、傷痕の消えた傷、傷痕の消えない傷。
それは決して珍しいことじゃない。
むしろ当たり前のことだ。
だとすると、今の場合はどうなのだろうか？
目の前の真吾は、一体その胸のうちにどんな傷を負っているのだろうか？
その胸の内にある、逃れたい苦しみとは、一体何だ？
何がそこまで死を急がせているのだろう。
生きることが苦痛だと感じる人は少なくない。
だけど、その気持ちを全て汲んで、理解してあげることはできない。
生きることが苦痛だと思いつつも、人はその苦痛の日々を今もこうして生きている。
例外はない。
それはもちろん、氷室にも言えることである。

「……やはり、どうにも理解できませんね。最近の若者は、一体何を考えているんだか……」
やれやれと溜め息を吐いて、氷室は呟いた。
「理由はどうあれ、せっかく生まれたその命を大事にしようとは思わないんですか？　言ってしまえば、命なんてものは軽くもないし重くもない。そもそも重さなんてないものです。ですが、あなたや私がこうして生まれたことは、ただの偶然の過ぎないんですよ。無数にあったはずの中の一つの精子と一つの卵子が受精して、その結果として私達という人間が生まれた。ほんの少しでもズレがあれば、きっとそこから生まれてきた私達は、今の私達には成り得なかったはずです」
「生物学上は、確かにそうなのかもな。あいにく、生命の誕生の神秘さは認めるが、興味はないんでね」
どうでもいいと吐き捨てて、真吾は答える。

「そんなに難しく考えるなよ。今を見ようぜ？　簡単だろ？　アンタが俺を殺せばそれで終わり。殺せなかったら、俺が大和と女を殺してそれでも終わり。どっちに転んでも俺に有利に働くし、もうこの際どっちでもいいんだけどな。が、アンタは後者を選ばせるわけにはいかない。だからこうして戦ってるんだろう？」

「……ええ、確かに」

槍を構え直し、氷室は続ける。

「ですが、どうにも理解できません」

「何度も言わせるな。理由なんて詮索する暇があったら、さっさと俺を殺せ……」

「だったら」

そこで一度、氷室は言葉を区切る。

続くはずだった真吾の言葉をかき消した一言が、沈黙を生む。

「――だったら最初から、自殺でも何でもしてしまえばいいでしょう？　なぜそれをわざわざ、私に頼む必要があるんです？」

その言葉に。

「……」

真吾は返す言葉を持たなかった。

そうだ。

考えてみれば、それは当然の疑問だったのだ。

真吾が死を求める理由は、正直なところ分からない。

けれど、それは悪ふざけや冗談の類ではなく、確固たる意思を持って言っているということは確かだ。

命を捨ててまで成し遂げたい何かがある。

あるいは、成し遂げるためには命を捨ててしまわなくてはいけない。

そう解釈したとき、真っ先に浮かぶのは……そう、自殺だ。

想像したくもないが、それが一番手っ取り早い上に、リスクが少

ない。
だが真吾は、それをしなかった。
こともあろうか、わざわざ氷室の事務所を訪ねて人気のないこんな場所にまでやってきたその上で、後から取ってつけたような選択肢を与え、殺すことを強制させているのだ。
それはつまり、真吾に精神的余裕がなかったことを示している。
逆に言えば、それだけ追い詰められているということになる。
だとしたら、それは一体何だ？
決まっている。
そこにある理由には必ず、『Ｒｉｎｇ』が関わっているに違いない。
そうだ、思い出せ。
この場所にやってきた真吾が言った、あの言葉を。

「だからこそ、俺はアンタに俺を殺すように頼んでるんだ。大和でもあの女でも、きっと俺を殺せないだろうからな」

きっと、殺せない。
……殺せない？
そう、それはつまり。
力量的に殺す殺せないとか、そういう意味ではなく。
もっとこう、単純な理由が絡んでいるだけで。
殺せない。
それはつまり、殺すことができないということ。
なぜか？
それはきっと……。

――あの二人は、きっと氷室以上に優しすぎるから……。

だからあの二人には、きっと真吾を殺せない。

同じ選択肢を与えればどうなるか分からないけど、それでもきっと殺せない。

だから、氷室なのだ。

三人の中で、唯一心も体も満足に大人へと成長していて、道理よりも本能で考えて動ける人物だったから。

無理に理解しようとせず、あるべきことをあるがままに受け入れること。

言葉で言うのは簡単だが、それはとても難しいことだ。

人間には道徳というものがある。

ある日突然、私を殺してくださいと懇願する人物が目の前に現れたとして、それを素直に分かりましたと実行できる人間がどれだけいるだろうか？

正直、一人としていてほしくはないと思う。

もしかしたら数えるほどはいるかもしれない。

その数えるほどの一握りは、何を思ってそうするのだろうか。

それはきっと、誰にも理解することができないだろう。

それと同じで、氷室には真吾の意図が理解できない。

ただ分かることは、真吾は何かに追い詰められているということ。

目には見えない、それは言わばプレッシャーのようなものなのかもしれない。

それも、死を選ばざるを得なくするほどのものすごい重圧だ。

恐らく、真吾自身にもまだ迷いはあるはずだ。

だが、その迷いと向き合う余裕さえも奪われた。

時間がない。

ただ、それだけの理由で。

「……アンタが気にするようなことじゃないさ。アンタはただ、今この場で、俺を殺すことだけを考えて戦えばいい」

「……そうですか」

そして氷室はまた溜め息をついた。

やれやれと、内心でで何度も何度も呟いておく。
「それで、結局理由は話さずじまいですか？」
「言う必要はない。言ったところで何も変わりはしない」
「そうですか。でしたら、こっちも少し趣向を変えさせてもらうことにします」
「何？」
もう一度しっかりと槍を構えなおし、氷室は臨戦態勢に入る。
だが、先ほどまでとは違う。
殺すとか殺さないとか、そんなことはもう関係ない。
そもそも、忘れてもらっては困る。
氷室だって、誰一人犠牲を出さずにこの戦争を終わらせるそのために、戦うことを決めたのだから。

「――殺す殺さないは二の次です。まずはその堅い口、無理矢理にでもこじ開けさせてもらいましょうか」

それはつまり、徹底的に懲らしめてやるという意味で。
「お前、何言って……」
あまりに唐突なその態度に、真吾も呆気に取られるしかなく。
そんな表情を見て、氷室は微かに笑うのだった。
きっとこれで、殺し合いは終わったのだろう。
きっとここから、ただのケンカが始まるのだろう。
「一つ、忠告しておきましょう」
氷室はもう一度眼鏡を押し上げ、相変わらずの笑みを浮かべたまま言った。

「――子供はもう少し、大人の言うことを聞くべきですよ」

もう一度だけ言おう。
今、ただのケンカが始まった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８３：繋ぎ止められた世界達

「で」
開口一番、飛鳥はそう呟いた。
「……何があったのか、分かりやすく説明してもらえる？」
半ば頭を抱えながら、飛鳥は言った。
一方その隣で、僕も何がなんだか分からないままに呆然と立ち尽くしているのである。
目の前には息を切らしながらへたりこむ氷室と真吾の姿。
なぜか二人とも汗だくで、服はそこら中が土汚れにまみれ、あちこちをすりむいたような傷まで付いている。
「……っ、ったく、アンタ、ちょっとは、加減ってものを、考えやがれ……」
「……っ、殺せとかどうとか、言ってた割には、支離滅裂も、いいところですよ、その発言は……」
当の二人はこちらの質問などまるで意にも介さずに、途切れ途切れの言葉でそう繰り返している。
なんだかこの様子だと、まるで仲の悪い兄弟が大喧嘩を終えた後のような光景だ。
「ちょっと氷室、聞いてる？」
「え？　ああ、はい。聞こえてますよ。ですが、もう少し待ってください。酸素の供給が追いつきませんから……」
「真吾、何してるの？」
「……いや、何と言われても……正直、答え方に困るな……」
どうやら本当に体力をスッカラカンになるくらいに消耗しているようなので、しばしの間僕と飛鳥は二人の呼吸が整うのを待つことしかできなかった。
そして五分ほどの時間が過ぎ、ようやく二人の呼吸が落ち着いて

きたところで、僕と飛鳥は再度同じ問いを繰り返した。
「……そのことですが……」
答える前に、氷室は横目で隣の真吾の顔を覗った。
視線を受け、真吾はわずかに表情を強張らせ、しかし何も言い返すことはなかった。
「……実はですね」
としかし、氷室がそう言いかけたところで真吾は口を挟む。
「待った」
残った僕達三人の視線が真吾に集まる。
そして真吾は一瞬だけためらいがちな様子を見せ、しかしそれも一瞬で消し、溜め息を吐き出すような重い口調で言った。
「……俺から話そう。こうなった以上、どうやらアンタもただで引き下がりそうもないからな」
真吾は氷室を見返し、そう言った。
「場所を変えようぜ。ここも十分人目につかないが、一応は立ち入り禁止区域だ。面倒に巻き込まれると厄介だからな」
真吾の提案により、僕達は一度この場を離れることになる。
一路、再び氷室の事務所へと移動する。

時刻は間もなく正午を示そうとしている。
そろそろ小腹も空いてきて、何か軽い昼食でも食べながら話をするという選択肢もあったが、どうもそういう空気の流れではない。
決して広くもない事務所の一室、ソファには僕と真吾と飛鳥の三人が座り、氷室だけがデスクに寄りかかっている。
「さて、と。どこから話せばいいかな……」
そう言って、真吾は口火を切る。
気のせいか、空気が重苦しく感じられる。
少なくともこの場の雰囲気からして、これから話される内容はいい意味での話ではないだろうということは予想できた。
「まず私が聞きたいのは、あんた達が揃ってあんな場所で何してた

のかってこと」
向かいに座る飛鳥が言う。
もちろん、それは僕も気になっていたことだった。
そもそも、氷室と真吾というこの取り合わせというか組み合わせがまず信じ難い。
言ってみれば二人は犬猿の仲のような感じだったし、はいそうですかと相容れるような性格でもないはずだ。
「それに関しては、私から説明しますよ」
と、以外にも割って入ったのは氷室だった。
見ようによっては、これは助け舟のようにも見えなくはない。
「構わないでしょう？」
「……ああ」
念のため確認を取って、氷室は眼鏡を押し上げる。
そして次の瞬間、あっさりと、しかしとんでもないことを言ってのけた。

「――彼に頼まれたんですよ。自分を殺してほしい、とね」

「な……」
「な、何考えてんのあんた……？」
僕と飛鳥は同時に絶句しかけた。
言葉の意味が全く理解できなかったからだ。
殺してほしい？
真吾が、そう頼んだ？
氷室に？
どうして？
疑問ばかりが浮かび上がる。
正面を向いても、そこにある真吾の表情は何一つ色を変えていない。
無言であることが、そのことをそのまま肯定していた。

「真吾、どうして……」
僕の問いに、真吾はわずかに視線を外す。
「……っていうか、氷室。あんたもあんたよ。まさか、そんな馬鹿げた提案を受け入れたわけ……」
「はい、受け入れました」
「……！」
再び飛鳥は絶句した。
同時に、混乱の中でわずかに怒りのようなものが見え始めてくる。

「あんた、何考えて……！」
「やめろ。メガネの兄さんは悪くねぇんだ。そうせざるをえないようにに、俺がちょっとそそのかしたんだよ」
氷室に対して怒鳴りかけた飛鳥を、しかし引きとめたのは真吾の言葉だった。
「……そそのかした？」
「ああ。俺を殺さないのなら、俺が大和とお前を殺す。そう持ちかけた」
「な……」
「……っ」
三度絶句。
何でこう、次から次へととんでもない言葉ばかりが飛び出してくるのだろうか。
「だから兄さんは、俺を殺さざるを得なかった。お前達を守る意味も含めてな」
「……氷室」
「……その通りですよ。残念ですが、彼の言葉は真実でした。私が選択を間違えれば、本当に二人に危害を加えたでしょうね」
「……」
「……でも、どうして……どうしてそんなことを」
僕は素直に思ったことを口に出す。

真吾と氷室の対話を見る限り、信じられないことだが全て事実なのだろう。

真吾が自分を殺してほしいと迫り、できないのならば代わりに僕と飛鳥を殺すと言ったことも、全て事実なのだろう。

過ぎたことを追いかけても仕方がない。

問題は、なぜ真吾がそんな強硬手段のようなものに打って出る必要があったのか、だ。

「それに関しては、私も聞きたいところですね。つまるところ、そこなのでしょう？　そうせざるを得なかった理由を、あなたはまだ言葉にしてはいない。違いますか？」

「……そうだな。あんたの言うとおりだ」

小さく溜め息を吐き出し、どこか諦めたような素振りを見せながら真吾は顔を上げた。

「……話してもらいますよ。もとい、その意思があるからこそわざわざ場所を移したのでしょうけどね」

「……ああ。俺はどうやら、本当に隠し事をするのがヘタなタイプらしいからな」

嘲笑のように小さく笑って、真吾は一度目を閉じる。

そしてゆっくりと目を開け、僕を、飛鳥を、そして氷室を見て、その重い口を開いた。

「――むかしむかしあるところに、神様がいました……」

まるで昔話のような決まり文句から、それは始まる。

時間の流れを忘れさせる言葉。

それは、途方もない始まりの物語への入り口。

信じる信じないは人それぞれだ。

ただ、一つだけ言えることがある。

真吾は決してふざけ半分で、こんな言葉を口にしているわけではない。

その表情を見れば、そんなことは一目瞭然だった。
目の前にいるはずの真吾の存在感が、途端に希薄になった気がする。
ここにいるのにここにいない。
まるで、ほんのわずかにだけすれた空間に溶け込んでしまっているかのように。
「……おいおい、ツッコミはなしか？　いいのかよ、このまま俺に昔話をさせちまっても」
「……茶化さないでよ。そんなの、あんたの目を見れば嫌でも分かるわよ」
「……うん」
「……続けてください。興味がありますね、その昔話」
「……やれやれ。それじゃ、続けるか」
乾いた笑いを吐き出して、真吾はぼんやりと部屋の天井を仰ぎ見る。
白か灰色か、よく分からないそれを眺めながら、ポツリポツリと、まるで振り出した雨のように途切れ途切れの言葉を繋げていく。

むかしむかし、あるところに、神様がいました。
神様は何もないその場所に、生命に満ち溢れた青く澄んだ一つの星を創りました。
青い星は、主に海と陸の二つに分けられました。
次に神様は、海と陸のそれぞれに、新たにいくつかの命を生み出しました。
陸には木を、草を、動物を。
海には魚を、貝を、海草を。
生まれた星は瞬く間に無数の命で溢れ返り、平穏無事なまま永い永い時が流れました。

あるとき神様は、その星に優れた知能を持つ生命を創りました。
それがヒト……即ち、人間の祖先でもある存在です。
人間と動物は時の流れの中で互いに交わり、繁殖することを知り、後の世に数多の子孫を残すことになります。
そうしてまた気が遠くなるほどの永い時が流れた頃。
神様はふと、あることに気付きました。
命あるものはいつか必ず滅びの時を迎える。
生と死は常に隣り合わせであり、それは万物に共通する始まりと終わりである。
そう思ったとき、神様はとても悲しく思ったそうです。
自ら生み出したいくつもの命達は、すでに終わりの時を迎えて等しく無に還っていました。
しかしその反面、そうして消えた命は、後の世界により多くの命を残してくれました。
そう。
悲しいけど、それが命というものの巡り方。
生まれて最初にその命に付きまとうもの。
それが、死。
それはまさに逃れようのない運命。
法則と言い換えてもいいでしょう。
命の始まりから終わりまでは、まるで一環する輪のようなもの。
生まれたときはただの点。
生きる過程でその点は線となり、緩やかに円を描き始める。
やがて、その線が始発点へと戻ってくるとき。
そこは同時に、その命の終点にもなる。
それが、一つの命の終わる時。
そしてそれが、この世界で唯一、覆ることのない、優しくて、悲しい法則。
そう。
この世界、では……。

またあるとき、神様は思いました。
もう一つの世界を創ってみよう、と……。
終わりのない世界を創ってみよう。
しかし、終わりのない世界はそれだけで牢獄のようでした。
これでは悲しみは繰り返すだけです。
そしてまたあるとき、神様は思いました。
いくつもの世界を創り、一つの世界で終わりを迎えるたびに、別の世界で新しく生まれ変わればいいのだ、と。
そのためには、沢山の世界が必要でした。
十でも百でも足りません。
千でも万でも足りません。
しかしいくら多くの世界を創っても、それらが全て離れ離れになってしまってはやはり意味がありません。
神様は考えます。
そして、至ります。
全ての世界を繋ぐことに。
命の始まりから終わりは一環の輪のよう。
ならば、世界一つ一つも輪にしてしまおう。
そうしてできた無数の輪を、全て繋ぎ合わせていこう。
輪と輪を繋ごう。
鎖のように、繋いでいこう。
全ての世界がどこかで繋がるように。
全ての輪がどこかで繋がるように。
輪（ＲＩＮＧ）を、繋ぐ（ＬＩＮＫ）。
これで世界は終わらない。
どこまでも続く。
時代も、場所も。
何もかもが変わっても、また次の始まりが待っていてくれる。
それが、神様の考えた幸せの論理。

思うにそれは、単なる気紛れだったのかもしれません。
しかし、それでも……。
あなたが今いるこの世界も、きっとどこかで別の世界に繋がっている。
難しいことは何もない。
一言で言えば、たったこれだけのことなのだから。

――世界は、一つじゃない……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８３：繋ぎ止められた世界達（後書き）

後書きというほどのものではないのですが、この場を借りて一つ皆様にお礼を。
今月に入った頃に、本作ＬｉｎｋＲｉｎｇの読者数（アクセス数）が合計で一万人を突破することができました。
連載当初からもう半年も経つわけで、自分でも結構驚いているところです。
何はともあれ、このような長期連載及びアクセス数を記録できたことも、ひとえに読者の皆さんのおかげです。
この場を借りて改めて御礼申し上げます。
本当にありがとうございます。
物語そのものはまだ続きますが、無事に完結できる日を目指してがんばっていきますので、どうか長い目で見守ってやってくれると幸いです。
それでは長くなりましたが、この辺で失礼させていただきます。

やくも

Ｅｐｉｓｏｄｅ８４：記憶が還る場所

「……いくつもの世界を……」

「創った……？」

繰り返すように呟いて、僕達はわずかに息を呑んだ。

それはまるで、現実から遠く離れたファンタジーの世界ならではの話だった。

いや、頭ごなしに全てを否定するつもりではない。

僕達の住むこの地球という惑星が誕生したのは、宇宙でビッグバンと呼ばれる現象が起きたことがきっかけだと言われている。

ビッグバンとは極端に言い換えてしまえば、大爆発ということだ。

その衝撃で大小無数の星があちこちへと飛び散り、宇宙全体に広まったとされている。

その中でも環境や条件が整った惑星は、今あるこの地球のように永い時間をかけて育ち、成長していくことになる。

それこそ、気が遠くなるような年月をかけて……。

「信じられるか？　いや、信じられないだろうな。何より、俺自身がそうだった」

僕達の答えを待たずに、真吾は静かに語る。

「だが、あるとき俺は気付いた……いや、気付かされた、と言うべきか……」

「……」

「……」

「……」

僕達は無言で先を促した。

空気がさらに一際温度を下げる。

がら空きの背中に冷たい刃物をピタリと添えられたような、悪寒さえ覚えそうな感覚だ。

「……俺の中にはな、俺が今の俺である以前の俺であるときの記憶が、何一つ欠けることなく残ってるんだ。これがどういう意味か、分かるか？」

「……記憶が残ってる？」

「真吾が、真吾である前の……？」

それは一体、どういう意味のものなのか。

疑問に思うことしかできない僕と飛鳥の傍らで、しかし氷室だけが怪訝そうな表情で眼鏡を押し上げていた。

そして、言った。

「――それはつまり、あなたがそうだということですか？　今言った尽きることのない、神が哀れに思って終わることのない命分け与えた存在。それが、あなただと、そういうことなんですか？」

氷室の言葉に、僕と飛鳥は言葉を失った。

対する真吾は、何も答えずにわずかに目を伏せている。

「……嘘、でしょ？」

枯れた声で飛鳥が呟く。

「だって、そんなのありえないじゃない。それが本当だったら、こいつはもうどれだけの時間を生きてきたっていうの？」

「それこそ、気が遠くなるほど、なのでしょうね。宇宙の誕生はおよそ四十六億年前と言われていますから、そっくりそのままなのか、あるいはその神様とやらが実在したのならば、さらに長いかもしれません」

それは、本当に……どこまでも途方のない過去の話なのだろうか。

「……ま、そんなことは別にこの際、どうだっていいんだよ。俺の出生のどうこうなんてのは置いておこうぜ」

話を区切り、真吾が顔を上げた。

「本題はそっちじゃないだろ？　んじゃま、一つずつ順に説明して

いくか」
　小さく息を吐き出し、真吾は続ける。
「まず、目の前の疑問点からだな。俺がなぜ、そこの兄さんに俺を殺してくれるように頼んだのか。結論から言うとだな、時間がないからだ」
「時間がない？」
「時間って、何の時間よ？」
「今あるこの世界が、この世界としての形を保っていられるだけの、残された時間のことだ」
「……何よ、それ。まるでこの世界が滅びてしまうような言い方じゃ……」
「ような言い方じゃない。事実、この世界は滅びに向けてすでに歩み始めてるんだよ」
　あっさりと、しかしとんでもないことを真吾は言ってのけた。
「滅びるって……つまり、消えてなくなっちゃうってこと？　大昔に隕石が落ちて恐竜が滅んだみたいに……」
　慌てふためく飛鳥をよそに、真吾は冷静に答える。
「いや、そういう外部からの干渉を受けてどうこうの問題じゃない。正真正銘、消滅するんだ。それは物理的な意味合いじゃなく……どう言えばいいんだろうな。どの言葉を選んでも正しくないかもしれないが……なかったことになる。全てなかったことになるんだ」
「なかったことになる？」
「つまりだな、この世界がどれだけ進化を遂げたとか、どれだけの人や動物が生きていたとか、栄えたものは何だったかとか。そういった、本来なら後の世に歴史として記し残されることさえもなく、全くの無に還るんだ。最初からこの世界も、この世界にいる人も動物も、この世界が今まで刻んできた歴史も何もかも、全て白紙に戻る。ゼロになる」
「……何、それ……」
「そんな……」

「……」

もはやスケールが大きすぎて、何がなんだか分からない。

頭で無理に理解しようとすればするほど、逆に混乱ばかりがこみ上げてくる。

「……理解が追いつかないだろうが、話を続けるぞ。でだな、当然今現在そういう事態に陥っているということは、過去にそうなる要因があったってことになる。全ての事象には原因と結果があり、そのどちらか一方でも書ける場合は事象として成り立たない。万物に共通する論理だ。では、一体何が今の状況を作り出した原因なのか。これはもう、言わなくても察しが付いてるんじゃねぇのか？」

言って、真吾は僕達を軽く見回した。

まさかと思い、僕は半ば反射的に視線を落とした。

その、自らの指の中に収まった古代の遺産……『Ｒｉｎｇ』へと。

「まさか……」

不安が声になる。

返る言葉は……。

「ご名答」

偽りのない、肯定。

「俺達が持つこの『Ｒｉｎｇ』の力が、神様の創った連鎖する世界に影響を与えてやがる。さっきの昔話でも例えたが、神様は無数の世界それぞれを一つ一つの輪と見立て、それを鎖のように連結させたんだ。だがな、鎖だって所詮は金属だ。時間が経てば錆付き、色は剥がれ落ち、強度は劣化する。神が生み出したものだからといって万能じゃねぇんだよ。事実、人間は欠陥だらけの生き物だろう？　神の力を以ってしても、完全なる存在は創ることができなかったんだよ」

「……つまり」

氷室がその後に言葉を続ける。

「今はまさに、その鎖が外れかかっている状態ということですか」
「そういうことだ。これは仮説だが、封印開放に伴ってしだいに連結の力が弱くなっていると考えられる。もともと自然に弱まりつつはあったんだろうけどな、それに拍車がかかった。ブレーキが壊れてる車が、下り坂を転がり始めたような感じだ」
「……単刀直入に聞きます。打開策は？」
「……残念だが、俺には思い浮かばない。仮にここで封印開放の手順の一切をやめたとしても、もう手遅れだ。遅かれ早かれ、やはりこの世界は消滅する」
またも簡単に真吾は言い切った。
「だが」
と、さらに言葉を続ける。
「全く手立てがないってわけでもない」
「でしょうね。そうでなくては、結局あなたがなぜ死に急いでいたのか、その説明が付きませんからね」
「あ……」
僕は今更になってそのことに気付いた。
話されること全てが大きすぎて、話の本題をすっかり見失っていた。

「何か関係があるのでしょう？　あなたが死を求める理由と、この世界の衰退との間には……」
「……ああ、そうだ」
もう一度目を伏せ、真吾はその後に絞り出すように口を開いた。
「今も言ったが、この世界が滅んでいく原因はこの『Ｒｉｎｇ』の影響にある。だったら、その根源の部分をなくしちまえば問題はそれで解決するはずだ」
確かに、それは分かる。
分かるが、やはり分からない。
それと真吾が死に急ぐことと、何の関連性があるというのだろう？

「……『Ｒｉｎｇ』ってのは結局、契約者がいなければただの骨董品に過ぎない。だったら、契約者を全て殺してしまえばいい」
「……っ！」
残酷だが、それは確かに一つの事実だ。
だがそれでも、まだ疑問は残る。
その方法だと、真吾も含めて全部で八人の契約者が命を落とさない限り、全ての契約は破棄されないことになる。
「最初のうちは、確かにそれが一番手っ取り早い方法だった。だが、もう遅い。すでに流れは安定し、後はその流れに乗るだけでこの世界はいずれ滅びる。そうなる前に何か手を打つ必要があった。そのためには、俺はここで命を落とす必要がある」
「……どうして？」
「……俺が消えれば、アイツも消える。俺と同じ、不確定存在者であるアイツが消えれば、異変は止まる」
「……アイツ？　誰よ、そのアイツって……」
そう言いかけた飛鳥の言葉を遮って、氷室が割って入る。
「……あなたはもしかして、敵側にいる黒幕が誰であるか、知っているのでは？」
「……」
その問いに対する無言が肯定以外のなにものでもなにことは、一目瞭然だった。

「……アイツは、本当なら生まれることがなかったはずなんだ……」
真吾の声のトーンが落ちる。
「だけど、アイツは生まれた。いや、アイツが生まれるはずだった場所を俺が奪って、アイツは不安定な存在として中途半端に生まれちまったんだよ……」
「……その、アイツって一体誰なのよ？」
飛鳥の問いに、場に静寂が満ちる。
数十秒だろうか、それとも数分だろうか。

長くも短くもない、そんな時間が過ぎた頃になっても、真吾の口は動かない。

「……真吾」

と、沈黙に耐えられずに僕がそう口にしたときのことだ。

「……もう、その名前で俺を呼ぶな、大和」

「え……？」

「……違うんだよ、大和」

「違うって、何が……」

「……いないんだよ、そんなやつは」

「……いない？」

真吾は何を言っているのか、僕には理解できなかった。

「どういう……」

そう聞き返す僕の言葉を、真吾の冷たい言葉が遮った。

「緋乃宮真吾なんて人間は、この世界のどこにもいない……存在しない人間だ。だから俺は、その名前で呼ばれる資格はないんだ」

「……あなたは、一体……」

氷室が聞く。

一拍の間を置いて、どこか寂しそうな、悲しそうなそんな表情を一瞬だけ見せて……彼は答えた。

「――俺は、神によって創られた世界の監視者。全ての世界で生を受け、全ての世界で死を抱いて、また別の世界へと生まれ変わる、ただそれだけの名も無き存在……記憶超越者だ」

そしてまた、沈黙が場を支配した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８５：涙の理由

場がひとまずの区切りを迎えたのは、それから十数分後のことだった。

その間は誰もが終始無言で、言葉が出ないというよりは見つからないといった感じだった。

今、事務所の中には飛鳥と氷室だけが残っている。

飛鳥は変わらずにソファに座ったままおぼつかない視線を彷徨わせ、氷室は腕を組んで壁に背中を預けている。

当然のように会話らしいものは何一つなく、ただ時計の秒針が規則正しく時を刻むその音だけがこだましている。

あの後、真吾は一足先に事務所をあとにした。

「俺が消えない限り、何も終わりはしない。けれど俺は、自らの意思で命を絶つことができない。結局、誰かの手で殺されることでしか俺は消えることができないんだよ。それも、普通の人間の力じゃだめだ。神に創られた俺は、普通の人間の力をはるかに超越した存在ってことになっちまってる。その俺を殺すことができるとしたら、それは神に最も近い存在である精霊か、あるいはその力を受け継いだ一握りだけの人間……つまり、能力者として覚醒したお前達しかいない。……もしもお前達に、全てを終わらせたいと願う気持ちがあるのなら、そろそろ心を決めるときだ。断言する。他に方法は、ない」

それが去り際に真吾の残した、回りくどい決別の言葉だった。

恐らく、次に相対することがあるとすれば、そのときは間違いなく命の取り合いになるだろう。

仮に飛鳥や氷室に戦う意思がなくても、真吾は殺すつもりで挑んでくる。

自分を殺さざるを得ない状況を強引に作り出してでも、死ぬこと

を求めるだろう。
誰がどう見ても、それはすごく悲しいことだ。
死ぬことでしか終わらせられない物語があって。
けれど、終わりを迎えるために誰が喜んで犠牲になることができようか。
それではまるで、死ぬために生まれてきたと言っているようなものではないのだろうか。
例えそれが、どれだけ望まぬ生だったとしても。
神という絶対の存在の、たった一つの気紛れの中で生まれたものだとしても。
そんな理不尽がまかり通っていいはずがない。
そんなことは分かっているのだ。
ただ、分かっているだけではもはやどうすることもできず。
目にも見えず、手で触れることも叶わず、言葉を交わすこともできないそんな存在にいくら毒づいたところで、意味はなく。
結局のところ、それも一つの運命なのだと割り切り、受け入れるという選択肢しか与えられない不自由。
一つしかない選択肢はその時点で、すでに選択の余地など与えられていないことと同じだ。
それでも真吾は、選んだ。
たった一つしかないその選択肢を、分岐のない道を、それだけが自分の生まれた意味なのだと知っているから。

カップの中の冷め切ったコーヒーを、氷室は一口ほど口に含む。
ひどくまずい。
苦いだけの薬の原液を飲み干したようで、途端に吐き出してしまいたくなる。
「……ねぇ」
苦いだけの黒い液体を飲み干したところで、飛鳥の小さな声が響いた。

「……死ぬためだけに生きるってことは、どんな気持ちなのかな……」

「……さぁ、どうなんでしょうね。少なくとも、楽な道ではないと思いますが」

「辛くないのかな？　悲しくないのかな？　寂しくないのかな？　死にたくないって、そう思ったりすることは……ないのかな？」

「……誰だって死は怖いですよ。辛いし悲しいし、寂しくもなるでしょう。ですが、それは所詮一般論です。この世界の中には、死ぬことが本当に救われることに繋がっていると、心の底から本当に信じて止まない人間だっているんです。そういった人達から言わせれば、死が怖いと言っている私たちのほうがおかしくて仕方がなく映るのかもしれません……」

「……氷室は、さ」

「……」

「……怖い？　死ぬことは、やっぱり怖い……よね？」

「……怖いかどうかは別として、死にたいとは思いませんね。少なくとも今は、の話ですが」

「怖くはないの？」

「……どうなんでしょう。私自身、よく分からないのかもしれませんね。極論を言ってしまえば、生きているということはすなわち、いつかは死ぬということと同じです。ただ、その死を迎えるときというのが一体いつなのか。明日なのか、一ヵ月後なのか、一年先なのか十年先なのか。死んだ原因は事故なのか、病気なのか、寿命なのか。そんなことは死ぬそのときにならないと分からないことです」

「……そっか。うん、そうだよね、確かにそうだよ……」

答え、飛鳥はソファの上で膝を抱えた。

両足を抱きかかえ、膝の上に顔を埋める。

「……私のお母さんね、私を生んだときに死んじゃったんだ」

「……」

唐突に切り出されたその話にも、氷室はあまり驚いた様子を見せ

ずに無言で耳を傾けた。

「お母さんはさ、ずっと病気だったんだって。だから、私を生むって決めたときも、出産の手術に体が耐えられるかどうかすごく不安定な状態で……それでも、お母さんは手術を受けることを決めたんだって」

顔を上げ、ぼんやりと飛鳥は灰色の天井を見上げる。

「……手術は、無事に成功。私は生まれた。生まれたときのことなんて何一つ覚えてないけどね。本当に危ない手術だったんだって。手術の最中にも、お母さんは幾度となく危険な状態になって、途中で断念せざるを得ない場面もあったんだって。けどね、おかしいんだ。危険だと判断した先生が手術を中断しようとするたびに、麻酔で完全に感覚を失っているはずのお母さんの手がね、先生の服の裾を掴んで離さなかったんだって。やめないでくれって、この子を取り上げてくれって、そう言ってるみたいに……」

「……」

「散々迷ったみたいだけど、どうにか手術は続行。十時間以上にも及ぶ危険な手術を終えて、私が取り上げられて、母さんが痛みと嬉しさの混じった涙を流しながら生まれたばかりの私をその両腕で抱いて……」

「飛鳥……」

「……無事に生まれたそのことを、看護婦さんがお婆ちゃんに知らせにいったんだって。少しして、お婆ちゃんがやってきた。だけど、もうそのときには母さんの意識は完全になくなってたんだって。涙を流したまま、腕の中で泣いてる私を抱きしめたまま……死んじゃってたんだって」

「……」

氷室はかける言葉を持っていなかった。

ありきたりな慰めの言葉なら、いくらでも口に出すことはできただろう。

だけど、きっとそれは何にもならない。
そう知っていたからこそ、あえて無言でいた。
「……全部、お婆ちゃんから聞かされた話だけどね」
言って、飛鳥は抱えていた足を崩す。

「……何でなんだろ」
「……何がですか？」
「……どうしてお母さんは、自分が死んじゃうかもしれないって知ってたはずなのに、手術を受けたんだろ。死ぬことが怖くなかったのかな……」
「そうだったとも言えるし、そうじゃなかったとも言えるでしょう」
「そうだけど……だけど、やっぱりおかしいよ。死ぬって分かってて、どうしてその選択肢を選ぶことができるの？　誰だって死にたくないよ。お母さんだって、きっと生きたかったはず。私を生むことを諦めてれば……私なんか、生まれてこなければ……！」
「飛鳥っ！」
氷室は怒鳴った。
その怒声に、飛鳥は思わず全身を震わせ、続く言葉を失った。
「……あなたは今、絶対に口にしてはいけないことを口にした。分かっていますね？」
「……っ、だけ、ど……」
「……ええ、そうでしょうね。もしもあなたのお母さんが自分の命を真っ先に優先したのならば、今も生きて健在だったかもしれません。そうなれば飛鳥、あなたは今こうしてこの場で呼吸することもなかったでしょう」
「それは……っ」
「死に繋がる選択肢を自ら選んだ？　何を馬鹿なことを言ってるんですかあなたは。あなたのお母さんは、あなたを生み、自らも生きる可能性を信じてその選択をしたんです。その結果は悲しいものだったかもしれませんが、それでもあなたはこうして生まれ、生きて

いるじゃないですか。それを生まれてこなければよかった？　出産を諦めればよかった？　死者への冒涜もはなはだしいですよ。そもそもあなたがそう考えることができるということは、あなたがこうして生まれたからでしょう？　あなたのお母さんは、あなたにそんな思いをさせるためにあなたを生んだんじゃない。そんなはずがないんです。死を覚悟してなお選んだ道の果てに、あなたが生まれたんです。それを蔑むような、後悔するような言い草は許されることではありません。違いますか？」

「……っ」

「……生まれたことに罪はないんです。誰だって望んで生まれてくることはできない。親が子を選ぶことができないように、子も親を選ぶことはできない。それでもこうして生まれてきたことを、生まれることができたという事実を……例えそれがどれだけの偶然が重なり合ったものだとしても、幸せなことだと思えないんですか」

「……」

「……私なんかがこんなことを言ってもなんの説得力もないかもしれませんが、これだけは覚えておいてください。あなたのお母さんは、あなたに幸せになってほしいと心の底から願っていたからあなたを生んだんです。そしてできるなら、共に歩み、あなたが育っていく姿を誰よりも近くで見ていたいと、そう願っていた。これだけは、絶対です」

「……そう、かな……？　本当に、そうかな……？」

「ええ、絶対に」

「……うん、うん……」

確かめるように、飛鳥は二度頷いた。

そしてまた膝を抱えて、静かに涙を流した。

ずっと抱えていたことだったのだろう。

自分自身に問いただすにはあまりにも怖すぎて、誰かに話すことも恐ろしかった。

それをどうして氷室に話すことができたのか、それは定かではない。

真吾のことがあって、気持ちが少しだけ緩んでいたこともあったかもしれない。

ずっと抱え込んでいくつもりだった。

考えないようにしている方が、自分に都合がよくて楽だと知っていたから。

だけど、それでも。

言葉にすることで伝わること、理解できること、見つめなおせることがある。

きっと、ある。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８６：新世界で

隣を歩いているはずなのに、ありえない距離感を感じている。
耳の奥に届く音は二人分の足音。
リズムと呼ぶにはあまりにも無機質で、しかし一定間隔で繰り返すそれは確かな波を起こしていた。
「……」
「……」
僕は氷室の事務所を真吾とともに出て、今はこうして道なりに歩いていた。
建前とした理由の通院も済ませたことだし、このあとはこのまま家に帰ることになるだろう。
と、今更になって思い出した。
何だかんだで、結局氷室に相談したかったことを何一つとして打ち明けていないではないか。
だがまぁ、それも無理もないだろう。
話の路線は予想外に大きく脱線し、今でもその余韻が胸の中で渦を巻いているくらいだ。

「――俺は緋乃宮真吾という人間じゃない」

一番重くのしかかるのは、やはりその一言だった。
人間じゃない。
それは完全なる否定の言葉。
嘘も冗談もカケラも混じらない、純粋な刃のような言葉だった。
その言葉を口にした真吾本人は、一体どんな気分なのだろうか？
いや、そもそも自分という存在があまりにも不安定で、なおかつ予め定められた未来を歩かされていると知ったとき、どんな気持ち

だったのだろうか。
確かに命を与えられて生まれたはずなのに、それは全て作り物で。
言ってしまえば、誰かの手のひらの上でいいように動かされるだけの、便利な駒。
そのことに気付いたとき、何を思ったのだろう。
きっと僕だったら、正気ではいられない。
目の前にある現実も、どこまでが本物でどこからが偽者なのか。
見上げた空は現実なのか、それとも仮初なのか。
前も後ろも右も左も、上も下も分からない世界で、何を頼りにどこへ向かえばいいというのだろうか。
本当の意味でそれは、無限に続く地獄のような道のりだったのではないだろうか……。

「……驚いたか？」
ふと、真吾が口を開く。
突然のことに僕は思わず心臓が跳ね、答えを返すのに一拍の間を必要とした。
「……うん。正直、まだ全部が全部信じられないって感じだけど……」
「ま、そりゃそうだな。いきなりあんなこと言われたら、まずは言った本人を精神病院に直行させるのが普通だ」
などと、妙に茶化したような言い草で真吾は笑った。
「けど、本当……なんでしょ？」
「……ああ、そうだな」
歩くペースをわずかに緩めて、真吾はまだ青いままの空を見上げながら続ける。
「ホント、気が狂いそうになってるはずなんだけどな……」
同じように僕も空を見上げる。
小鳥の群れが雲と雲の合間をすり抜けるように飛んでいった。
遠くに浮かぶ分厚い雲が、どこかウサギのように見える。

「……性格とか性別とか、生い立ちは全部バラバラなくせによ、記憶だけは一貫して継続されてやがんの。別に思い出したくもないようなどうでもいいことまで、俺のココには全部残ってる」

こめかみのあたりを人差し指で小突きながら、真吾は言う。

「すげーんだぜ、ホントに。いくつ前の世界でどんな風に生まれて、どんな環境で育って、どんな死を迎えたかまで、事細かく覚えてる。人間の脳ってのは大半が眠ったままで機能してないって話だが、俺の脳に限っては常時フル稼働だな。おかげで忘れることを忘れちまってるくらいだ」

「……」

僕にはこれまでに真吾が……いや、今現在真吾としてここにいる彼が、どれだけの世界でどれだけの記憶を受け継いできたのかは分からない。

けれど、それはきっと苦しみばかりの道のりだったんじゃないかと思う。

一つ一つの世界で見れば、きっと幸せなこともあったのだろう。

けれど、その世界で終わりを迎えることは決して叶わず。

どれだけ安らぎを求めても。

どれだけ運命を拒んでも。

それはきっと、悲しすぎるほどに無意味で。

「……」

「っと、悪い。別にグチるつもりじゃなかったんだけどな」

「あ、そんなんじゃないけど……」

けど、何だ。

言葉が全然見つからない。

何を言えばいいのだろう。

何を言ってもそれは不正解な気がした。

言葉で拭いきれるものなんて、きっと大したものじゃないんだ。

どれだけよさげな言葉を選んで口にしても、きっと僕は真吾を理

解できないだろう。
だったらいっそのこと、何も言わずに沈黙を守っていればいい。
いい……はずなのに。
……どうしてだろう。
「……何か、ないの？」
こんな言葉が出てくるのは、どうしてなんだろう？
「何か方法はないの？　全部は理解できないけど、僕達がいるこの世界が危険な状態にあるっていうことは分かった。だけど、そのために真吾が死ぬ……消える必要なんてないじゃないか」
「大和……」
「……ごめん、無茶苦茶言ってるのは分かってるんだけど……でも、そんな終わらせ方は僕は納得できない」
「……いや、お前の言うことはきっと正しいんだろうよ。俺だって別に、納得してるわけじゃない。ただ、納得することでしか自分自身を妥協できねーんだよ。俺の置かれたこの境遇が、全て神様とやらの単なる気紛れに過ぎないなんて、もちろん俺も納得できねー。けどな、もう俺は抗うことには疲れたんだ。どういう理屈か知らねーが、これぱっかりはもう本当にどうしようもねーんだよ」
「それは……っ、そうかもしれないけど……」
僕の言葉はそれ以上続かなかった。
がんばることでどうにかなる範囲の問題なら、きっと真吾はとっくの昔にどうにかしているに違いない。
「……まぁいいさ。とりあえず、今の俺もこの世界が滅びるのを黙って見ているのは納得いかないんでな。できる範囲で抵抗はさせてもらうさ。どういう結果になるかまでは分からねーけどな」
「それってやっぱり……最後には、消えるってこと……？」
「……どう、だろうな。好き好んで消えようとは思わないかもしれない。が、それしか方法がないなら、そうするかもしれない」
「……っ」
未来は変わらない。

遠回しだけど、真吾がそう言っている気がしてならなかった。

歩みを止める。

どれだけ歩いたのだろうか、振り返れば道の上に人気はなく、ウサギの雲が少し近くに流れてきていた。

「さて、と」

視線を戻し、真吾は言う。

「ま、なるようにしかならねーよ、結局のところな」

「……真吾」

「おいおい、そんな顔すんなよ。まだどうなるか決まったわけじゃねーんだからよ。もしかしたらとんでもない秘策が思い浮かぶかもしれねーし、今からそんな沈んだ顔してんじゃねーっての」

つとめて明るく、普段通りの調子で真吾が言う。

それが今は逆に違和感みたいで、少し痛かった。

「……そう、だね。まだ、何も終わってないもんね」

「ああ、終わってない。このまま終わらせてたまるかよ」

そして真吾はなにやら自信ありげに胸を張り、自分の境遇など全て振り払ったかのように言った。

それでも、きっと……。

運命は変わらないのだろうと、僕は何となく分かっていた。

でも今はそれを口にはしない。

わずかでもいい。

消えかけた希望の火が灯るのなら、僕はそれを消す風ではなく、焔に育てる風でありたかったから……。

昔話の続きをしようか。

幾千の生と死を繰り返す記憶は、生まれ変わるたびに新しい一つの生命体として生まれ、それまでの記憶を継承する。
このとき、すでに何回目の継承だったかは定かではない。
記憶は彷徨い、世界の中へと迷い込んだ。
次なるはこの世界、生まれるはどの場所か。
そのとき、記憶はそれを見た。
季節は冬、吹雪で一寸先さえも見えない夜の闇の中。
置き去りにされたそれは、極寒の中で間もなくその命を絶やさんとしていた。
外見は赤子。
すでにその体はとうに冷え切り、しかし抗うにも赤子は泣き喚くこともできない。
死が迫る。
刻一刻、確実な死が迫る。
命の火が、消え行く。
その、刹那。
記憶は介入を試みる。
今まさに死を迎えんとする赤子の体を、この世界での器に選んだ。
かくして、器の赤子に記憶は乗り移る。
命の火は消えず、静かに焔に変わった。
明けて翌日。
幸いにしてか、赤子の捨てられた場所は孤児院の目の前だった。
誰かの足音が近づく。
足音は徐々に早まり、吐き出す白い息がその誰かの慌てた様子を思わせた。
誰かが別の誰かを呼んだ。
足音が増える。
その頃になってようやく、記憶はその体へと無事に定着を済ませた。
自分の力でゆっくりと目を開けた。

細く狭い視界の先、誰かの顔が見えた。
そのはるか向こうに、輝く太陽が記憶を見下ろしていた。
これより記憶は、この世界で観察を始める。

後日、記憶に名が与えられた。
置き去りにされたかごの中に、名前が書かれた衣類があり、そこに書かれていたものだそうだ。

――名を、緋乃宮真吾という。

新しい世界の幕開けは、太陽に反射した雪の照り返しが眩しく告げた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８７：気持ちの在り処

夕刻が迫る頃、月代市一帯を震度三強の地震が襲った。
さすがにそのくらいでは建物の倒壊や地割れなどの大きな災害まで進展することはなかったが、ここ数日の間に連続して起こっている不可解な出来事に後押しされ、街を歩く人々も不安の言葉を漏らさずにはいられなかった。
とはいっても、結局のところ地震は地震でしかないないわけであり、揺れが収まってしばらくした頃には、そんな不安の色も一日の終わりに向けて静かに消えつつあった。
だが、実際はそうではない。
限られた一握りの人間だけが、この異変をただの地震ではないものだと理解していた。
それは、開放であると。
理解しながらも、僕達はそれをただ見届けることくらいしかできなかった。

僕がその感覚を覚えて間もなく、すぐに携帯に着信があった。
発信者の名前は氷室。
間髪いれずに僕は通話ボタンを押した。
「もしもし、氷室？」
「その様子だと、大和も分かったみたいですね」
「うん。これってやっぱり……」
「ええ。間違いなく、またどこかで開放が行われているのでしょう」
「……どうする？　今から急げばまだ間に合うかも……」
「……いえ、残念ですが今回は見送りです」
「え、どうして？」
通話口の向こうで一拍の間を置いて、氷室は続けた。

「先ほどの地震から察するに、恐らく開放されつつある封印は地の封印だと思われます。ですが、それがこの現実世界に与える影響は極めて大きいと考えられるからです」
「……それって、どういう……」
「いいですか、大和？　あなたが風の封印を開放したとき、その影響で嵐や台風が起こったりしましたか？」
「いや、そんなことはなかったけど……」
「同様に、飛鳥が雷の封印を開放したときも、落雷などの異変は起こらなかった。ですが、敵側の封印である炎、氷、そして今回の地に関していえば、全てにおいて何らかの異変が起こっているんです」
言われて思い返し、僕は気付いた。
確かにそのとおりだ。
まず炎の封印で森林公園が焼け、氷の封印で旧校舎が氷漬けになった。
そして今回の地震とくれば、これはもはやただの偶然で片付けられるはずがない。

「どういう理屈か知りませんが、相手側の持つ『Ｒｉｎｇ』の開放は全て、何らかの影響を現実世界に引き起こしています。それが単純に属性のせいなのか、そうでないのかはまだ分かりません。ですが、そうである可能性がある以上、このあとにさらに大きな地震が起こることも十分に考えられます。そういうわけで、今は外出を極力控えるべきです」
「……分かった。けど、それじゃ……」
そこに続く言葉をあらかじめ分かっていたかのように、氷室は言葉を続けた。
「……色々と思うところもあるとは思います。ですが、私達だって能力者である前に一人の人間なんです。災害に巻き込まれでもすれば、ただでは済むはずがない。堪えてください。今は動くときではありません」

「……うん。分かったよ」
氷室の言うことはもっともだったし、何より遠回しだけれど僕の身を案じてくれているのはよく分かった。
「助かります。さて、あとは同じことを飛鳥に伝えて、素直に納得してくれればそれで助かるんですがね……」
やれやれと、口にしていないのにそんな言葉が聞こえるくらいに、氷室は疲れた声で言った。
「飛鳥だって、言えば分かってくれるよ。そこまで無茶な真似はしないと思うし……」
「……大和、本気でそう思いますか？」
「……う」
そう念を押されるように聞かれると、僕としても多少自信がなくなってくる。
「……多分、いや、きっと……」
「……ま、そういうことですよ」
今度こそハァと、氷室は小さく溜め息を吐き出した。
「と、時間をとらせてしまってすいません。用件はそれだけです」
「あ、うん。わざわざありがと。多分、この電話がなかったら、僕は家を飛び出してたかもしれない」
「ええ。そう思ったので、先に大和に電話をかけさせてもらいましたから」
それはつまり、僕のほうが飛鳥よりも無茶をしそうだったということだろうか？
「それでは、これで失礼しますね」
「うん……あ」
と、今まさに通話が切れそうな瞬間に、僕は思い出したように声を上げた。
「どうかしましたか？」
幸い電話はまだ切れておらず、かろうじて氷室の声が聞き取れた。

「ごめん氷室。実はちょっと、話しておきたいことがあるんだけど……」

それは、僕が体感した昨夜の不思議な出来事のことだった。

冷たい雨が降り注ぐ夜の中、傘も差さずにやってきたかりん。

体をずぶ濡れにしながらも、指先一つ震わせず、ただ僕のことを見ていた。

そしてその手には、銀色のナイフ。

その見えない切っ先が、僕の腹部に突き刺さり……。

そこまでイメージを思い出して、反射的に僕は腹部を押さえていた。

当たり前だが、痛みは何もない。

服を捲り、皮膚に触れてみてもそこには傷痕の一つさえ残っていない。

だから僕は、それを夢か何かの出来事だと思っていた。

そう、少なくとも、午前中に家を出る直前までは……。

「少し長くなるかもしれないけど、いいかな？」

「……分かりました。ですが、とりあえずは飛鳥を言いくるめておくことが先決です。一度切って、またこちらからかけ直しますので、少し待っていてもらっていいですか？」

「うん、構わないよ」

「分かりました。では、またかけ直します」

そこで通話は一度途切れた。

プツッという電子音が耳の奥に響き、ツーツーという音だけが連続でこだまする。

僕は一度携帯を折りたたみ、机の上に置いた。

氷室からの電話を心のどこかで待ち遠しく思いながらも、頭に浮かぶのは困惑の色だけだった。

一体どこからどこまでが夢で、どこからどこまでが現実なのだろうか。

いや、そもそもこんな考え自体が間違っているのかもしれない。
真吾の言葉を借りるのならば、僕達が今いるこの世界さえ、神様という存在が作り上げた決められた未来へと歩く一つの輪に過ぎないのだから。
そう。
ここは迷路……いや、迷宮だ。
入り口はある。
しかし、出口があるかどうかは分からない。
その上、入ったその瞬間に入り口が消える。
必然的に僕達は閉じ込められ、道なりに進むことしか許されなくなる。
その先にあるものが、全てはすでに決められた未来だと知って……。

数分後、再び氷室から電話がかかってきた。
僕はその通話の中で、昨夜体感したその夢か幻か現実かさえも曖昧な出来事を話した。
話を聞く間、氷室は終始無言のままだった。
どれだけの時間、僕が一方的に話し続けていたのかは覚えていないが、その時間はやけに長く感じられた。
そして一通りの話を終えて、僕は言葉を区切る。
相変わらず氷室も無言のままだったが、間もなくしてその口が開かれた。
「大和、あなたはどう思っているんです？」
「どうって……？」
「あなた自身は、その出来事を夢か幻だったと思っているんですか？　それとも、実際に起こったことだと思っているんですか？」
「僕は……」
改めて問われ、僕はしばし考える。

だが、至る結論はやはり同じ。
「……夢だったんじゃないかって、そう思ってる。何より、確かに刺されたはずの腹部には何の傷痕も残ってないし、もし本当に刺されてたなら、今頃僕は病院に担ぎ込まれててもおかしくないはずだよ」
「……なるほど。確かにそうですね」
肯定し、氷室が頷く。
「……ですが」
と、間を置かずに氷室は言葉を続ける。
「本当にそうでしょうか？」
「え？」
その言葉の意味が、僕には分からなかった。
「本当にって、氷室、どういう……」
「ああ、すいません。少し紛らわしい言い方でした。私が気になっているのはですね……」
そして氷室の口から、僕の想像を超えた言葉が囁かれた。

「――本当にかりんは、あなたの腹部を刺したのか、ということですよ」

「な……」
思わず僕は反す言葉を失う。
「いくらなんでも、腹部を刃物で刺されればそれなりの痛みを覚えるはずです。ですが、先ほどの大和の話の中に、あなた自身が痛みを覚えたというその瞬間がすっぽり抜け落ちているんです。当然ですが、刺されなければ痛みなんて感じるわけがありません」
「……それって、つまり……」
「刺されていない。もしくは、刺されたように感じた感触は、実は全く別のものを貫いていた感触で、それを大和が自分の体に加えられた衝撃だと勘違いしていた可能性があります」

「で、でも！」
わずかに声を荒げ、僕は氷室に聞き返す。
「だったら、一体何だったのさ？　僕は確かに感じたんだ。刃物が皮膚を突き破るようなあの……不気味な感触を」
「ですから、それ自体は間違いではないのでしょう。ただ、刺されたのは間違いなくあなたの体ではなく、別のものだったということになります」
「そんな……だってあのとき、僕以外にはその場に誰一人も……」
言いかけて、僕はその事実に思い当たる。
言葉を失い、携帯を持つ手が小刻みに震えているのがよく分かる。
……そうだ。
いたじゃないか、もう一人。
僕以外に、もう一人いたじゃないか……。
冷たい雨の降りしきる夜の中に、傘も差さずにその小さな体をずぶ濡れにしたまま立ち尽くす、一人の少女がちゃんといたじゃないか。
「……まさか、かりんが、自分で……？」
「……あくまでも、可能性の話ですがね」

思い返す。
昨夜のその光景を。
雨で視界は悪かった。
冷たい雨が全身を打ち付けて、僕の衣服と髪は瞬く間に水分を吸収していく。
二言三言、会話をした。
雨の音がノイズになって、音声が正確には再生されない。
どちらが先に沈黙を破り、また先に沈黙を守ったのか。
やがてかりんはこう言った。
忘れて、と。
一歩、僕に向けて歩む。

一歩、また一歩。
そして、その距離が限りなくゼロに近づいたその瞬間、衝撃は訪れた。
ズブリと、鋭い何かが幕を突き破るような、不気味な感触。
だが、そこに。
僕の体から発する痛みは、微塵もなく。
それでいて、雨に濡れた地面には、赤い水溜りが小さく広がり。
また、かりんの声が聞こえたんだ。
サヨナラ、と。
その一言をきっかけにして、僕の体は糸の切れた操り人形のように自由を失い、膝から崩れ落ちていった。
濡れた地面に横たわる。
わずかに開いた視界の先に、夜の闇を振り払うような銀色が見えた。
それは研ぎ澄まされた刃の刀身であり。
その切っ先の部分は、誰かが流した血で赤く赤く染まり返っていた。
その時。
僕は確かに、見ていたんだ。
ナイフを握ったかりんの右手。
それとは反対の左手の甲の辺りから、なぜか……。

――真っ赤な血が流れ落ち、足元に赤い小さな水溜りを作り上げていたことを。

「……どう、して……」
僕は無意識のうちに呟いた。
電話の向こうから聞こえる氷室の言葉も、今は耳に全く入らない。
考えれば考えるほど、分からなくなっていく。
真実はどこにある？

誰でもいいから教えてほしい。
そう、例えそれが……。
――気紛ればかりの、神であっても……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８８：遠回りなお節介

「……っ」

視界が揺らぎ、足元がふらつく。

少し力を使いすぎただろうか。

蓮華は壁に背中を預け、そのまま引きずりおろされるように地面に座り込む。

体中が熱い。

血液の中に熱湯を注ぎこまれているかのようだ。

痛みよりも苦しみが先行し、気が狂いそうになる。

よろよろと立ち上がり、それでもどうにか前進を続ける。

分かっていたことではあったが、実際に体感するのと想像するのとではこうも大差があるものなのか。

目の前は霧がかかったようにぼやけ、前に進んでいるかどうかすらも怪しくなってきた。

と、ふいに体重が前のめりに傾いた。

「う……」

今まさに倒れようとする体だが、足に踏ん張りを利かせるだけの余裕もすでに残っていない。

そのままうつ伏せに、冷たいコンクリートの地面に叩きつけられるかというその瞬間。

「……っ？」

ふいに体は別の力に支えられ、中途半端な体勢で崩れることを止めていた。

「……日景、か？」

「無理をするな。すでに反動が始まっているのだろう？」

日景は蓮華の横に並び、倒れかけた体に腕をすりこませ、その体を支えていた。

「歩けるか？」
「……ああ、何とか、な……」
日景の肩を借り、蓮華は少しずつ前に歩き出す。
「……何てザマだ。開放の反動で、まさかここまで体が言うことをきかなくなるとはな……」
「卑下にすることでもない。俺だって同じだ。いいから、今は眠れ。じきに体が力の流れに慣れ始める」
「……そう、させてもらうか……」

扉を押し開け、二人は部屋の中に入る。
部屋の間取りは狭く、人一人がただ寝て起きるくらいの生活をするくらいの、最低限の設備しかない。
ベッドの上に蓮華は体を滑り込ませる。
痛みはすでになくなり、全て熱に変換されていた。
呼吸が荒くなり、心臓が苦しい。
吐き出す息は気温の低さを別に考えても驚くほどに白く、まるで沸騰したままのやかんを放置しているかのようだ。
しばらくの間、蓮華は額に汗の珠を浮かべながら苦しむ様子を見せていた。
だが、あるときを境にその苦しみがピタリと止まる。
落ち着きを取り戻したような体は静かな眠りの中へと落ち、部屋の中にはまた静けさが戻る。
その様子を見届け、日景は静かに部屋を出る。
少なくともあと半日ほどは、蓮華が目を覚ますことはないだろう。
開放による反動で、能力者の体はその後一時的な仮死状態に追い込まれる。
言ってみればこれは冬眠のようなもので、その間は体内で解放した力と肉体との適合処理が行われているのだという。
個人の肉体によって適応に要する時間は差があるが、早くても半日、長くても丸一日ほどの時間で適応は完了するとのことだ。

ただし、その間は絶対安静を余儀なくされる。
無理に体を動かしたり、意識を戻したりすれば、体の中で開放によって増幅された力が暴走を起こし、肉体もろとも破壊するほどの勢いで外側に逆流する。
そうなればもちろん、能力者本人の命の保障はできない。
力とはつまり空気であり、能力者の体はそれを留めておくための風船のようなものだ。
超過した空気が吹き込まれれば、風船は破裂する。
器には必ず限界があるのだ。
コップに水を注ぐのとは少し違う。
百の容量を受け入れられるコップがあったとしよう。
そこに百二十の液体を注ぎ込んでも、超過した二十の分は溢れて外側に零れ落ちてしまうだろう。
そう、零れ落ちるだけならまだいいのだ。
溢れた液体は確かにコップの中には入れないが、それでコップが壊れてしまうわけではない。
だが、風船はそうもいかない。
コップとは違い、風船の中に吹き込まれる空気には溢れたときに逃げていく道がないのだ。
結局許容の限界を超え、器を破壊して外に逃げ出すことになる。
その内側と外側の力のバランスを整え、能力者の肉体を力を使うのに適した状態へと変化させるために、この仮死状態の時間がある。
とはいえ、素人目に見ればそのときの姿は死体と何ら変わりがないものだ。
脈拍や心音も限りなく小さくなり、体温も急激に低下する。
触れてみれば、すでに事切れて冷たくなった死体と同じである。

「……かりんか？」

部屋の出ると、そこにはポツンと黒い人影が立ち尽くしていた。
相変わらず全身を真っ黒なゴスロリの衣装に包み、両腕でこれま

た黒いウサギのぬいぐるみ……通称クロウサを抱えている。
「……蓮華の具合は？」
「大丈夫だ、今眠った。しばらくは安静にしておく必要があるがな」
「……そう」
それだけ言うと、かりんはまたどこか遠くを見るような視線を向けた。
毎度のことだが、何を考えているのかよく分からない。
こうして一緒に行動するようになってからの時間はまだ長いものではないが、時々かりんはこんな表情を見せるときがある。
それが悲しみの色なのか、寂しさの色なのか、はたまたもっと別のものなのか。
正直、日景には理解できなかった。
他人をあまり寄せ付けない雰囲気という点では似ている部分もあったが、日景とかりんはどこかもっと根本的な部分で違う気がする。
日景はそっと覗き込むようにその表情を見てみるが、やはりよく分からない。
もともと他人を理解しようなどとは思っていないが、気が付くと自然に気になることというのがある。
それはきっとどうでもいいような、本人から言わせれば余計なお世話以外のなにものでもないことなのだろうとは思う。
だが、だから、なのだろう。
明らかに年端もいかない、見るからに幼すぎるかりんのような人間が、自分達と同じ境遇の上に立っているなどとは……。
「……何？」
ふと目が合って、かりんは呟いた。
日景の視線が気になったのかもしれない。
「……いや、何でもない……」
と、言いかけて日景は気付いた。
クロウサを抱きかかえているかりんの両手の左手。
その部分に、真新しい包帯が巻かれていることに。

「……かりん、その手はどうした？　ケガか？」
言われて、わずかにかりんの目の色が変わった。
指摘された手の傷を一瞬だけジッと見つめ、その間だけ表情が苦しみに満ち、奥歯を噛み締めているようだった。
「……別に。何でもない。少し。擦り剥いただけ」
一拍の間を置いて、かりんはそう答えた。
「……そう、か……」

日景もとりあえずはそう合わせて答えておくが、それが嘘であることを見抜くのは簡単なことだった。
かりんの手に巻かれた包帯からは、じんわりと血の色が滲み出している。
ただの擦り傷や切り傷程度で、そこまでひどい出血があるわけがない。
しかし、ここでそのことを追求したところでどうなるわけでもない。
余計な詮索はしない。
必要以上に他人の中に踏み込まないというルールは、日景が自分で決めて勝手にこれまで守り続けてきたことだ。
今になってもそれを破る気はない。
結局のところ、他人なのだ。
今はこうして同じ目的のために行動を共にしているが、終われば またバラバラに散っていくだろう。
そうだ。
必要以上に他人の内側に踏み込もうとするな。
それは日景自身、そうされることを何よりも嫌っているからだ。
自分は自分、他人は他人。
同調なんてできるはずもなく、同情とは所詮哀れみの延長上にある、強者から弱者に対しての一方的な優越感のあり方をきれいな言葉に置き換えただけのものだ。

誰だって自分以上の自分にはなれない。
理想と現実との間にある差は、口で言うほど簡単に埋めることができるものじゃない。
目標があり、そこの至るための道もある。
それがイコール、到達できるということではない。
わき道にそれることもあるだろう。
道を踏み外すこともあるだろう。
そんな道、最初から歩きたくないと思うこともあるだろう。
それでも、歩かされている。
どうして誰も、そんな簡単なことに気付かない？
気が付けない？
踊らされているんだ。
いいように使われているんだ。
早く気付け。
そして、気付いたら、抗え。
用意された道の果てに、何があるっていうんだ？
そんな道は望んじゃいない。
そんな未来は望んじゃいない。
だからこうして、自ら間違った道をあることを決めた。
間違いでもいいじゃないか。
自分で選んで間違った道なら、きっと後悔はない。
少なくとも、あらかじめ用意された、舗装された奇麗な道を靴を履いて歩くよりは……。

――砂利だらけの荒れ道を裸足で歩き、傷だらけになった方が、きっと……。

「……かりん」
「……何？」
わずかな沈黙。

一拍の後、日景は呟くように言う。
「傷を見せてみろ。ちょっとしかケガでも、化膿すれば面倒なことになるからな」
「……大丈夫……」
「それに」
まだ何か言いそうだったかりんの言葉を遮って、日景は続ける。
「包帯がほどけているぞ。片手で巻きなおすのは手間だろう？」
見ると、確かにかりんの左手の包帯が緩み、ほどけて地面を軽く引きずっていた。
「……」
しばらくの間、かりんはジッとほどけて垂れ下がった包帯を見つめていた。
「いいじゃないか、かりん」
「……クロウサ」
ふいにクロウサが喋り出す。
「オイラじゃ包帯は巻いて上げられないし、ここはヒカゲの手を借りておきなよ。な？」
「……」
そしてもう一度かりんは黙り込んだが、しばらくして静かにほどけた包帯のまま左手を差し出した。
そんな様子を見て、なぜだか日景は小さく笑ってしまうのだった。
「……何がおかしいの？」
その様子に気付いてか、かりんが問う。
「いや、何でもない」
かりんに背を向け、日景は歩き出す。
「道具を持ってくる。ここにいろ」
そう言って去り行く背中を、かりんは不思議そうに首をかしげて見送るのだった。
腕の中で、クロウサだけが日景とかりんを交互に見やりながら、やはり小さく笑っていた。

だが、その笑みもすぐに消える。
かりんの手にできた傷を見る。
それは意味こそ違うものの、ためらい傷であることを、クロウサは知っていた。
自ら失うことを選んだ強がりな女の子が、土壇場で失うことを怖がって、けれど手にした刃は止まらなくて。
交錯する想いの中で、咄嗟に前に出たのはその左手。
失うことを決めた、しかしそれを恐れた、罰の痛み。
どこまでいけば痛みはなくなるのだろうか。
クロウサは考える。
正しいとか間違ってるとか、もうそういうレベルの問題じゃない。
事態はとっくに安全圏を突破している。
あとはもう、このまま流れるだけ。
けれど、まだ終わっていない。
流れは止まる。
些細なきっかけで止まるのだ。
ただ、おそらくそのきっかけにすら自分はなれないだろうと、クロウサは思う。
だから、また密かに悔しい思いをする。
もしも自分が人間だったら、かりんを止めることができただろうか。
今となってはもう遅いことなのかもしれないけれど、せめて、せめて……。
この手が自由に動くのなら。
この足で自由に歩けるのなら。
何かを変えることが、できるのだろうか？
……いや、やめよう。
考えるだけ時間の無駄だ。
だけど……。

もしも、もしもだけど……。
今、アイツがいたら……生きていてくれたなら……。
「……きっと、変わったんだろうな……」
「……クロウサ？　何か言った？」
「ん、ああ、いや。何でもないよ」
「……そう？」
なぁ、なんでいなくなっちゃったんだ？
なんで、死んでしまったんだよ……。
なぁ、ハルヒコ……。
暗い空を見上げて、クロウサは祈るように呟く。

「――何でいないんだよ、こんなときにさ……」

答えはない。
鈴代春彦（すずしろはるひこ）……かりんの兄は、もうこの世のどこにも……いない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８９：黄昏を往く闇

携帯電話を閉じ、それをテーブルの上に置いて飛鳥はソファに身を沈めた。
電話の相手は氷室だった。
言われなくても何となく気がついていたことだけど、やはりさっきの地震は自然に起こったものではないらしい。
「これで残りがあと三つか……」
呟き、ぼんやりと天井を眺める。
ここにきて飛鳥は、今更ながらに思うことがあった。
八つの封印全てが開放されたら、一体どんなことが起こるのだろうか？
最初から頭の中に疑問としてはあったのだが、いつの間にか疑惑が薄れていってしまっていた。
今にして思うと、そのことがやたら気になって仕方がない。
真吾も言っていたように、結果というものは原因があるからあらわれるものだ。
ということは、八つの封印全てを開放するということ、まずこのことが何らかの原因に当たる部分のはずなのだ。
当然、原因があれば結果が出てくるはずである。
この場合、その結果というものが全く見えてこないわけだが……。

「……何でもないはずがないよね」
そう、何でもないはずなどあるわけがない。
これだけ大掛かりな封印という形で、しかもそれをこの大きくもない街に八つも施してあるのだ。
これで何もないわけがない。
天変地異が起こるのか、はたまた神様は魔王が降臨でもするのだ

ろうか。

何にしてもまともな未来が予想できるはずもない。

しかし、だ。

そういう不安の色が濃く見える未来に向かって、自分達はこともあろうか進んでいるのだ。

もしかしたら本当にこの世界そのものが消えてなくなるくらいの大惨事が待ち受けているのかもしれないというのに。

端から見ればそれは愚行以外のなにものでもなく、言ってみれば自ら谷底へ続く道を走っているようなもの。

それはなぜか？

一言で言えば、分からないからだ。

仮にそういう不安の色を映す残酷な未来があるとしても、逆にそこには理想的な別の未来があるかもしれない。

つまり、可能性の問題だ。

おそらくああなるだろう、しかしこうなるかもしれないという、自分の中で起こる終わりのない水掛け論が、迷いながらも自分達を先へ先へと歩かせているのだ。

誰だって悪い未来よりはいい未来を求めたいに決まっている。

確率からして、例えいい未来の可能性がどれだけ低かったとしても、それがゼロでない限りは追い求めてしまうのだ。

それこそ、奇跡が起こることさえも信じて。

反面、奇跡なんて起こるわけがないだろうと、罵っている自分をその瞬間だけ都合よく切り捨てて。

頼り、すがってしまう。

冷静に考えれば、もしかしたら別の道も見えていたかもしれないのに……。

そうだ。

冷静に考えれば考えるほど、それこそ現状はおかしいことこの上ない。

しかしそれを話し始めると、この身につけた『Ｒｉｎｇ』やその影響で授かった力さえも全て否定することから始まってしまうので、それはできない。
これが偶然だとは思う。
いや、そう思っていた。
少なくとも飛鳥は、自分がこうして能力者の一人として選ばれたことに運命的なものは何一つとして感じていなかった。
マンガやゲームの世界では、何かしらの因果めいた理由付けもあるのかもしれない。
だが、ここは現実だ。
そんなものに心当たりはないし覚えもない。
ないからこそ、逆に運命的なのだと誰かは言うかもしれない。
それでも飛鳥はそんなものなど信じない。
正直、こんな力はただの重荷だとさえ思っている。
それはきっと、大和や氷室だって例外ではないはずだ。
だから、この力を手放すことに変な執着はない。
なくなるならなくなるで、さっさとなくなってもらって構わない。
元に戻るだけなのだから。
そう、そのはずだった。
どこからか聞こえてきた、そんな根も葉もないような噂が耳に入るまでは。

――封印開放の戦争の勝者には、望みを叶える権利が与えられる。

これもファンタジーならではのお決まりの設定の一つと言える。
願いが叶う？
ばかばかしい。
と、簡単に吐き捨てられるはずなのだ。
少なくとも、代わらぬ現実の中に浸っていた限りは。
しかし、今はどうだろうか。

どんな偶然か知らないが、飛鳥はこうして能力者として選ばれ、大きな力を手に入れている。

そうである以上、例えその噂がどれだけばかげたものであっても、バカらしいと簡単に吐き捨てることなどできなかった。

「……」

視線を移す。

小さな棚の上に置かれた写真立てに目が移る。

もうずいぶんとホコリをかぶって、中の写真も色褪せてしまったけれど。

そこには写真でしか知らない母親の若い頃の笑顔が、しっかりと残っている。

「……お母さん」

死んだ者は二度と甦ることはない。

それは人間に限らず、命ある全ての生き物に共通する大自然の法則の一つだ。

分かっている。

分かっている、そんなことは。

……だけど。

もしも……もしも本当に、どんな願いも叶うのだとしたら、それは……。

――不可能を可能にする事だって、できるんじゃないだろうか？

例えばそれは、人類が月を歩くことなど不可能だと言われていたことが実現したように。

例えばそれは、原因不明な難病に対するワクチンが偶発的に開発されたり。

例えば、それは……。

――もうこの世にいない、死んでしまった何よりも大切な人を甦

らせることだったり……。

「……だめだよ。できるわけないじゃん、そんなの……」

心の中で言いかけた言葉を、飛鳥は無理矢理呑み込んだ。

チクリと、胸の奥を針で刺されたような痛みが走る。

でもとか、それでもとか、だけどとか。

そんな諦めの悪い言葉だけが、いくつもこみ上げてくる。

「……痛いな、もう……」

ソファに体を横たわらせる。

少し眠ろう。

一度に色んなことを考えすぎたみたいだ。

大丈夫。

目が覚めれば、きっと嫌なことは忘れてる。

そう、信じて……。

間もなく日が暮れる。

長いようで短い一日も、また一つ終わりに向けてたそがれていく。

昼が終わり、夜を出迎えるこの時間帯が、氷室はどこか好きになれなかった。

黄昏時。

その時間帯は、何か起こるべくして起こることが一番都合のいい時間帯だからだ。

常に誰かの目に留まりながらも、しかし密やかに事を運ぶことができる魔の時間。

光でもなければ闇でもない。

白でもなければ黒でもない。

灰色の影に染まりながら、しかし確実に蠢いている何かがある。

感覚的にそう捉えている氷室にとって、夜眠ることに恐怖を覚え

ることはなくとも、今はこうして景色を眺めているだけで鳥肌が立ちそうなほどの寒気を感じていた。

事務所の窓ガラス越しに見る目下の街並みには、まばらな数の人々が忙しくない程度の足並みで右往左往している。

誰かは買い物に向かう途中だったり、別の誰かは塾に向かうところだったり。

一見してそれは何も変わらないただの人波に過ぎないものだった。

それこそ、毎日見比べたとしても大きな変化はないほどの、ありふれた風景の一つ。

「……っ！」

だが、そこに。

例えようのない違和感を、氷室は感じた。

それを見た瞬間、正真正銘に背筋が凍りつく感覚を覚えた。

温度のない空気に背中を舐め回されるような、不快感を通り越した怖気を覚える。

「……っ、何が……？」

気が付けば氷室は両膝を折り、床に跪くようにしゃがみこんでいた。

寒気がこみ上げ、指先の震えが止まらない。

嫌な汗が前進から噴出してくるようで、ひどく気持ちが悪い。

「ぐっ……」

しかし氷室は笑う膝で強引に立ち上がり、壁を支えにしてもう一度窓の外へと目を向けた。

乗り物酔いを起こしたときのように世界がぐるぐると回り、平衡感覚が麻痺しているかのようだった。

半ば這うように、氷室は窓にへばりつく。

街並みは先ほどと何も変わらず、ただただゆったりと時間を浪費しているだけだった。

だが、その中のわずか一部に。

「……っ、あれは……！」
何かこう、言葉で表現できる限界を超えたような、そんなもの……いや、それをものと形容することさえ怪しいものが、確かに……。
「……何だ、あれは……っ？」
いた。
そこを、歩いていた。
それは一見して、誰の目から見ても少年の姿に映るだろう。
だが、見るものが見ればすぐに分かるはずだ。

――それは、人間ではなく、ヒトの形をした別の何かであるということが……。

「……」
氷室はその人の形をした何かを目で追いかける。
歩みは早くも遅くもなく、それは雑踏の中に溶け込むようにしてゆっくりと視界から遠ざかっていく。
瞬間、本能が叫んだ。
あれをこのまま放っておいてはいけない。
あれはおかしい。
あれは、あってはならないものだ。
危険だと告げる本能と、追うべきだという本能が激突する。
結局押し切ったのは、追いかけろという本能だった。
震えはいつの間にかなくなっていた。
氷室は急いで事務所を後にし、街並みの中へ躍り出る。
どこかへと続く道。
その道のはるか向こうに、それを視認した。
それはやはり、人ではない。
人の形をしてはいるが、絶対に人ではない。
こんな曖昧な表現はしたくないが、これぐらいしか適切な表現がないので仕方なしに使わせてもらうことにする。

――あれは、バケモノだ。

その一点だけ、気温がなかった。
その一点だけ、空気がなかった。
その人の形をした人ではない何かは、自分以外にもう一つのものを連れ歩いていた。
それは、闇だった。
ズルズルとひきずるような音。
実際にそんな音は聞こえないが、見ているだけでその音が耳の奥にこだまする。
闇を引きずる人ならざるもの。
どこへ行く？
無、と。
そう答えられても、納得せざるをえないかもしれない……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９０：九人目

尾行をするのはずいぶんと久しく感じる。
探偵家業ということもあり、過去にも素行調査などで経験したことはあるものの、何度経験してもあまり好ましいものではないことは確かだ。
思えば、独学で学んだ尾行に関してアドバイスをくれたのは他ならぬ刑事の竹上さんだった。
さすがに現役の刑事ともなれば場数を踏んでいるだけあって、当時素人同然だった氷室から見て、その様子は驚きの連続であった。
とまぁ、過去の経緯はこの際置いておくとしよう。
目標が十字路を左折するのを視界の端で確認する。
およそ十数メートルの距離を保ちつつ、氷室は足音はおろか気配すらも殺してあとをつける。
額や首筋には嫌な汗が流れ、殺した足音の変わり自分の心音がやたらと高鳴っている。
緊張なのか恐怖なのか、あるいその両方が織り交ざっているのだろうか。
定かではないが、呼吸するだけのことに必要以上の配慮をなしてしまうことは確かだった。
十字路を左折する。
相変わらずの等距離を保った位置に、目標の背中はあった。
恐らく感づかれてはいない……と、思う。
尾行というものはそのあたりの確認が実に難しい。
頭のいい目標であれば、尾行を察知しながらも気付かないふりをして歩き続けたりもする。
あるいは、逆手にとって人気のないところへ誘導し、返り討ちにあわせるなどということも考えられなくもない。

まぁ、後者は刑事ドラマの見すぎだろうとは思うが。

「……」

だが事実として、判断はきわめて難しい。

通常であれば気付かれた場合、目標の方にまず何らかの変化が生じる場合が多い。

それは普通に見ているだけでは見落としてしまいそうなくらいに小さい、些細な素振りや動き。

無理に自然体を装うとして、逆そこに引き起こされる不自然さ。

そういうものを目で捉えて、尾行者は尾行の断念か続行かを判断する。

今のところ、目標の素振りなどにこれといった変化はない。

だから恐らく、この尾行は気付かれてはいない……はずなのだ。

少なくとも、常人が相手なら誰もがそう思うだろう。

しかし。

それはあくまでも、常人が相手ならの話であって。

目の前を歩くその目標は、その存在そのものがすでに人間という生命体のレベルをとうに通り越していることは、氷室の目には明白であった。

「……何なんです？　あれは……」

決して誰にも届かないほどの小声で、氷室は呟く。

十数メートル前方を歩くその背中を見るたびに、全身が正体不明の寒気と怖気に襲われる。

外見は間違いなく人間の少年の姿をしているのに、その恐ろしいほどの存在感の威圧に、これだけの距離をもってしても押し潰されそうになる。

前述したとおり、この程度の距離が氷室にとって尾行しやすい距離感であることは嘘ではない。

だが付け加えるなら、これ以上近づけないのだ。

言葉にはしにくいその威圧感というか圧迫感のようなものが、本

能に信号を送る。
離れろ、危険だ、と。
「……っ」
離脱を考える。
危険を承知で飛び込むのは勇気ではなく無謀だと、冷静な氷室ならそう判断できたかもしれない。
だが、一度でもこの威圧感を覚えてしまったら、冷静でなんかいられない。
虎穴に入らずんば虎子を得ず。
しかし目に見えているその穴が、果たして本当にただの虎の住処なのだろうか？
確かめる必要がある。
確かめるためには、そう。
「……行くしかないみたいですね」
無謀だと理解してなお、飛び込む決断が必要不可欠である。

幾度目かの曲がり角を曲がり、歩いた距離もそれなりに長くなってきていた。
歩く道のうえはいつしか人波をはずれ、どこか静かな雰囲気のする方向へと変わる。
ここにきて、氷室の中にある不安の色が徐々に濃くなり始めていた。
やられたかと、内心で呟く。
もしかしたら尾行していることはとっくにばれており、それでもなおその気付いた仕草を表に出さない目標に誘われ、まんまと今いるこの場所までおびきだされているのかもしれない。
だとしたら尾行は失敗だ。
速やかに場を離れ、距離を置く必要がある。
だが一方で、まだばれていないという可能性も十分にあった。
結局その判断が難しく、ずるずるとひきずるように氷室は尾行を

続けている。
すでに周囲の人気はなく、黄昏が目の前に迫る空模様がよりいっそう不安を後押ししているようだ。
これは花と虫だ。
花の撒き散らす香りに誘われた虫が、まんまと罠にかかるかのような様子。
だがそれも無理はない。
この場合の花……つまり目標は、あまりに不気味すぎる気配を発しすぎている。
普通はまず気付かないであろうが、似た匂いを持つ氷室はこれを感じ取ってしまった。
つまり、普通では考えられない、異能の力を持つ者同士として引き合うような関係にあるのかもしれない。
それはさておき、前を行く背中はさらに人気のない場所へと進んでいく。
しかしここまできて離脱することなどできそうにもない。
もしも今追いかけている目標が、今回のこの戦争の中に一枚噛んでいるのだとしたら。
それは大きな確率で、相対する敵側の黒幕である可能性が高い。
聞きだすべきことはいくつもあるし、場合によってはこの場で戦うこともあるだろう。
もっとも、敵の能力はあまりにも未知数だ。
同じ人間としての立場ならともかく、少なくとも目標は人間ではない。
それはただ人の形をまとっているだけで、中身は全くの別物だ。
少なくとも、同一次元上に共存しているはずがない存在。
ゆえに、それを一言で形容する言葉は一つしか存在しない。
――それは、間違いなくバケモノだ。

「……っ！」

息を殺し、氷室は物陰に身を隠して立ち止まった。

目標が歩みを止めたからである。

そっとその様子を覗うと、目標はその場で静かに立ち尽くし、その目の前に聳え立つ巨大な樹を見上げていた。

その樹はこの月代市のほぼ中心の孤立して聳え立つ、一本の巨大な樹である。

樹齢が何百年、あるいは何千年といわれているその樹は、過去に幾度の天災に見舞われても決して崩れ落ちることなく、確固としてその場所に根を生やし生き残っている。

その様子はまさに永遠の命を思わせることから、人々はこの樹を永久の樹と呼ぶ。

もともと観光名所などないに等しかったこの地にも、この樹を見るためだけに観光客が訪れることも近年では珍しくない光景だ。

何でも、永遠を案じさせるこの樹に、発展やご利益を重ねているらしい。

言ってみれば神社の代わりに近いものだろうか。

そんなありがたみがありそうな樹を見上げたまま、目標はただ何をするわけでもなく立ち尽くしていた。

五分が過ぎ、間もなく十分が経とうとしても、目標はその場を微動だにしない。

食い入るように様子を覗っていた氷室も、この様子に疑問を思い始める。

「……一体何をしているんです？　こんな場所に、何があると……」

小声で口にした途端、脳裏にイメージが甦る。

弾けた光が閃光のように瞬いて、一瞬のあとに集束した。

「まさか……」

今の今まで、どうしてこんな大事なことを忘れていたのだろう。

今いるこの場所は、ちょうど街の真ん中……中心に位置する場所だ。

思い出せ。

八つの封印のほかに、もう一つ大和が光を見た場所があっただろう。

それは白い紙の上に描かれた正八角形を位置する点の、ちょうど中心部。

この街の地図に照らし合わせれば、町の中心を示すその場所に合ったということ。

それはつまり、この場所だ。

「まさか……いやしかし、封印は全部で八つのはず。なら、一体この場所は何のために？　もしや、封印は本当は九つあり、その最後の場所がここだということですか？　いや、だとしたら封印の数に比例し、能力者の数も増えるはず。今所在が割れている能力者は私を含めてちょうど八人。これでは数が合わない……」

もしやと、さらに氷室は思考を巡らせる。

追ってきたあの目標がもしも九人目の能力者だとすれば、とりあえずの辻褄は合う。

が、それはない。

能力者同士であれば、ある程度離れていても互いを察知できるからだ。

それは別に力を使っていても使っていなくても同じことである。

独特の感覚が働くのだ。

だが今、目標に対してそのセンサーは音を潜めたまま反応を示そうとはしない。

つまり、目標は能力者ではない。

だがそれでも、何かしら『Ｒｉｎｇ』に関わりを持つ存在であることは間違いないだろう。

どちらにしても、目標がこの場所にやってきていると言う目の前の現実は確かなものであり、そこには必ず何かしらの理由が存在するはずである。

その理由というのが見当もつかないが、どうでもいいと吐き捨てるわけにはいかない。
もうそろそろ様子を覗うのも限界だろうか。
どうする？
こちらからかまをかけてみるか、それともう少し様子を見るか？
そんな選択を内心で迫られている氷室をよそに、目標に動きがある。

「――もう……、……この世界は……。あなたが……、……になりつつある……」

その囁きは独り言のようで、微かにしか聞き取ることはできなかった。
だが間違いなく、目標は目の前の樹に向けてその言葉を発しているようだ。
その言葉が意味するものは何なのか？
そして彼は一体、どういった存在なのか？
疑問ばかりがこみ上げて、何一つ解決に至らない。
嘲笑うかのように、そんな氷室を木枯らしが冷たく打ち付ける。
が、そのおかげで届いた。
彼の声が、風に乗って。

「――哀れな神よ。貴方が生んで貴方が愛した輪廻の輪を、もうすぐ僕が破壊する。全てをゼロに還し、全てをゼロから創り上げる。かつて貴方が望み、そして実行に移せなかった連鎖崩壊を、今度は僕が引き起こす。全ての世界は仮初で、全ての世界は偽りだ。だから、僕が新しく創る。痛みも悲しみもない、誰もが救われる安らぎの世界。皮肉だね。貴方ができなかった理想を、貴方によって生み出された僕が実現させる。ずいぶんと時間がかかったけれど、それももうすぐ終わる。八つの封印の開放と、ここに眠る記憶があれば、

世界は痛みのない再生を始める……」

詠うように、流れるように彼は言った。
一つ一つが不明瞭なその言葉でも、繋がればどうにか理解に及ぶ。
破壊。
還元。
創造。
それらが意味することは、決して小さな規模のことではない。
やはり彼は、何かを知っている。
そしてこの戦争の舞台裏の観客として、何かを成し遂げようとしている。
これは大きな収穫だ。
恐らくこれ以上の情報を入手することは、今は不可能だろう。
もとい、危険が高すぎる。
今は一刻も早くこの場を離れ、落ち着いて考察をする必要がある。
氷室は離脱のため、慎重に気配を殺してその場を去る。
足音など立てず、空気に溶けるように静かに、速やかに。
だが。
それでも彼は言う。
まるで、全てを見透かしたような、汚れを知らない無垢な少年の声色で言うのだ。

「――あなたも、そう思いませんか？」

一度も振り返らず、彼は言った。
命の気配を感じさせない声が響く。
それだけで、氷室の足はは停止する。
氷の手で心臓を鷲掴みにされたような感覚が全身を襲う。
そしてそんな様子を、やはり一度も振り返らずに彼は見ていた。
そして最後に、クスリと。

無邪気な子供が見せるような笑い声を、静かに響かせた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９１：守るものへの誓い

今まで生きてきた人生は二十数年。
人間の平均寿命を八十前後と考えるのなら、それはきっと短い時間にしか過ぎないのだろう。
そんな二十数年の中で、金縛りという現象を自覚した経験は数えるほどしかない。
夜寝ていて、突然体全体が痺れたように動かなくなるというあれだ。
だがそれもしばらくたてば自然と元に戻り、何事もなかったかのように体は平常の機能を取り戻す。
だが、今はどうだ。
蛇ににらまれた蛙という表現が一番近いものかもしれない。
氷室はその少年の外見をした何かが振り返り、その視線を正面から受けたたったそれだけのことで、金縛りにあったときとまったく同じように体を動かすことさえできなくなってしまっていた。
「……っ、体が……」
かろうじて呼吸もでき、口も動くので言葉も話せる。
だが、それだけだ。
足はまるで木の根にでもなって地面と一体化したかのように動かず、開いた手のひらを拳に握ることすらできない。
まるで全身が石の塊にでもなってしまったかのようだ。
と、そんな氷室を正面に見据えながら、彼は相変わらずの笑みを浮かべながら数歩ほど歩み寄る。
「く……」
体が反射的に防衛反応を示すが、やはり体は動かない。
どれだけ力を込めても硬直は解けず、まるで呪いか何かの類を全身に降りかけられたかのようだ。

そんな苦痛を覚える氷室を目の前にして、彼は言う。
「ああ、安心してください。今はまだ殺しませんから」
と、たった一言。
その顔はさわやかとも見れるくらいに笑みを浮かべているが、吐き出されたその言葉には極寒の冷たさしか感じられなかった。
ゾクリと、その言葉を受けると同時に氷室の全身に感じたことのないほどの寒気が走る。
あれほど力を込めても動かなかった手足が、今は小刻みに震えている。
「あなたにはまだ、やってもらわなくちゃいけないことが残ってますからね」
「……何なんですか……」
「ん？」
氷室の問いに、彼はわずかに首を傾げる。
「何、というと？」
「……あなたは……いや……お前は、何だ？」
敵意の満ちた視線で問う。
疑問と恐怖が織り交ざって、もはや意識が混濁しかけている。
「何だ、か……」
聞かれて、彼は考え込むように軽く腕を組む。
「……うん。その聞き方が一番適切かもしれないね。誰だ、ではなく、何だ、か。つまりあなたはもう、僕が俗に言う普通の人間と同じ存在ではないと、気付いているんだね？」
「……」
無言は肯定に等しい。
それを彼も理解したのか、ふと小さく笑みを見せる。
「そのとおり。僕は人間ではないよ。けれど、少なくともこの世界では人間として生きている。普通の人間から見れば、僕の姿はやはり普通の人間のそれに映るからね。その差を見分けることができる

のは、つまり人ならざる力を手に入れた選ばれし一握りの存在達だけ。なるほど。思ったとおり、あなたも能力者の一人のようだ」

そう言って彼はにこやかに微笑んだ。

普通に見れば普通の笑顔なのだが、氷室の目にはそれが悪魔じみた魔性の笑みに映って仕方がない。

「……っ、お前は、一体……」

「それはまだ知るべきことじゃないよ。いずれ全てが明らかになる。時が解決するとか、人間はよくそういう言葉を使うよね？　それはただの逃げ口上だけど、今の状況に関して言えば真実に近いのかもしれないね」

「どういうつもりです？　何を企んで……」

「言ったはずだよ」

わずかにトーンの上がった声に、氷室は言葉を失った。

「いずれ全てが明らかになる。今はただ余計な詮索をせずに、成すべきことを成せばそれでいい。そうすれば全てが分かるときが来る。もっとも、それはつまり何かが終わって何かが始まるということなのだけれどね」

「……っ！」

反論を許さないようなその言葉に、氷室は気おされる。

こうしてただ向かい合っているだけで、生気を吸い取られていくようだ。

「……あなたは本当に頭の回転が速い。ある種の天才とも言えるほどにね。だけど、それは時として我が身を滅ぼすことに繋がってしまう。真実を追究するあまり、周りのことが何も目に入らなくなる。触れてはならない、触れなくてもいいはずの世界の闇の部分に足を踏み入れてしまう。それは悪いことではないのかもしれない。好奇心がそうさせているのかもしれない。だけど……」

一度言葉を区切り、彼は続ける。

笑みを消し、冷たい氷の言葉を。

「――覚えておくことだね。怖いもの知らずほど、怖いものはないということを」

「……」

「……聞いたことくらいあるだろう？　イカロスはロウで作った翼で空を目指した。しかし、ロウで作った翼で空を舞うことはできても、照りつける太陽の熱を遮ることはできなかった。翼は溶け、イカロスは大地へと堕ちていく。踏み込んでいい領域とそうでない領域。その境界線を自分の中に明確にしておかない限り、どれだけあがいたところでロウの翼では空に至ることはできないんだ。空は神の領域。神によって生み出された命がいくらがんばったところで、その手は決して空を掴むことはできない」

「……何が言いたいんです？」

「あなたほどの人ならもう分かっているでしょう？　ようするにこれは、バベルの塔なんだ。互いに住む世界があるのに、領域を超えようと欲を出せば、塔もろとも崩れ去って大地に堕ちていく。まるでそれが、神の怒りに触れたかのようにね」

「……黙って聞いていれば、まるであなたが神にでもなったかのような言い草じゃ……」

そこまで口にして、氷室はあることを思い出す。

真吾は言っていた。

自分と同じ、記憶超越者とされる存在がもう一人この世界にいること。

記憶超越者。

それは数多ある世界を監視するために神によって創られた、記憶を継承する無限の生命。

そう。

神によって、創られた。

言い換えればそれは、もっとも神に近い存在ということになる。
「……まさか、あなたは……」
「……驚いた。もうそこまで理解が及んでいるなんて……」
まるで見透かしたように、彼はわずかに目を丸くした。
「けれど、分かったところでもう遅いよ。流れはもう構築されている。あとは何もせずとも、おのずと世界はゼロに向かって歩み始める」
「あなたは本当に……何を企んで」
「何度も言わせないでほしい」
一度目を閉じ、直後に開く。
「いずれ分かるときが来る。そのときまで、ただ待てばいい。大丈夫。そう遠くない未来のことだよ」
言って、彼はそっとその手を開いて氷室の目の前で広げた。
瞬間、氷室の意識が闇に堕ちる。
痛みも苦しみも感じず、まるで催眠術にでもかかったかのように意識が途絶え、金縛りも同時に溶け、両膝がガクンと折れて地面に横たわった。
「おやすみ、水の継承者。あなたも含めて、全ての封印が開放されれば、あなたの求めている答えも見つかるだろう」
告げて、彼は静かにその場を歩き去る。
足音も立てず、代わりにズルズルと闇の塊を引きずりながら……。

縁側から見ると、ちょうど夕焼けの日差しが目の中に飛び込んでくる。
今日もまた一日が終わりに近づいたことを何となく感じながら、真吾はうっとうしいはずの夕陽を手で払うこともせず、ただジッと見返すように座っていた。
こうしている間にも、時間だけが虚しく、しかし刻一刻と過ぎ去

っていく。
だが、いくら頭を働かせたところで相変わらず妙案の一つも浮かびはしない。
もともとそんなものに望みを繋ごうと思ってもいなかったが、何もせずに諦めるというのもどこか気に食わない終わり方でもある。
抗う術があるなら最後まで抗うし、どれほど絶望的な可能性であっても、ゼロでない以上は試す価値があるだろう。
認めなくもないが、どこぞの神様が創り上げたこの連鎖する世界の輪というシステムはこれ異常ないくらいに完璧だった。
完全無欠と言い換えてもいい。
しかしだからこそ、どこかに小さな欠陥があるのではないだろうか？
どれほど優れた機械製品であっても、必ず不良品や初期出荷不良などは出てくるものだ。
完璧なものなんてない。
それは人にも物にも言えること。
ならば、きっと神だってどこかで間違いを犯しているはずだ。
恐らく自身でも気付かない、本当に些細な間違いかもしれない。
だが可能性があるならば、今はそれにすがりたい。
抗って、しがみついて、地を這って、泥の味を覚えてでもいい。
いつまでも誰かの手のひらの上で弄ばれる運命なんて、それこそあんまりじゃないか。
「……分かってるさ。分かっちゃいるんだよな……」
照りつける夕陽にグチをこぼすように呟く。
「けれど、これ以上何ができる？　何をできる？　すでに終わりが決まっていて、全てはそこに辿り着くようにあらかじめ仕組まれた運命なんだぞ？　それに気付き、抵抗することさえも計算づく。抵抗することに疲れ、諦めることも計算づく。何もかもが始まったときに終わっている運命だ。そんなデタラメなレールを走らされている俺達が、今更何をどうできるっていうんだ……？」

わずかに拳を握る。
悔しさでも歯がゆさでもない。
あえて言うならそれはきっと、情けなさなのだろう。
監視者として世界に放たれた自分が、誰よりも神の絶対性を信じて止まない存在なのだ。
にもかかわらず、こうして今抗う術を一つでも見つけようとしている、この矛盾。
あるはずのないものをいくら探したところで、そんなものが見つかるわけがないのだ。
闇の中、手探りで自分の影を探したところで、誰に見つけることができる？

手遅れというわけじゃない。
たとえどのタイミングで誰が同じことに思い至ったとしても、何一つ揺らぐものはない。
始まりの点がある。
終わりの点がある。
一直線に線を結ぶ。
それが最短距離であって、他に最短距離は存在しない。
全ての世界はそれに倣うように、始まりと終わりが予め定められている。
この場合、それが直線ではなく円を描く曲線だったという、それだけのこと。
何も変わらない。
何一つ変わりはしない。
全ては予定調和。
運命の終着駅はたった一つしかない。
理不尽な話だ。
数学でさえ、プラスとマイナスの二つの解を持ち合わせることがあるというのに……。

「クソ……恨むぜ、自分の生みの親をよ……」
恨んだところでそれは形にすらならないだろう。
なにせよ相手は神なのだから。

「あ、こんなところにいた」
と、そんな声に真吾の意識は現実に引き戻される。
振り返ると、そこに優希がいた。
夕飯の支度を終えたところだろうか、腕には折りたたまれたエプロンがぶら下がっている。
「何だよ。何か用か？」
「もうじき晩御飯だから、呼んでこいって」
「……悪い。食欲ねーわ」
「は？　食欲がない？　真吾が？　うっそ、信じらんない……」
優希はまるで珍獣でも見るかのような視線で、わずかに後ずさりながらそんなことを言う。
「なになに、どっか具合でも悪いの？」
「別に……」
「じゃあ、拾い食いでもした？」
「おい、俺は犬か……」
「何言ってるのよ。しつけの悪さだったらアンタの方が数倍手がかかるじゃないの」
「……」
相変わらずだが、何だろうこの扱いは。
「あー、うっせーなぁ。俺だってたまには悩んだり考えたりするんだよ！」
思わず怒鳴り、その拍子で立ち上がる。
「……だったらさ」
としかし、怒鳴られたはずの優希は妙に静かな物腰で言葉を続ける。

「――どうして、何でも一人で抱え込んでるの？　誰かに相談しようとか、そういう風に考えたこと、ないの？」

静かに、しかしそれは間違いなく真実だった。

「……」

その言葉に真吾は何も言い返せなかった。

言われて見ればそれは当たり前のことだった。

分からないことがある。

自力で調べるには限界がある。

そんなときどうすればいい？

簡単だ。

実に簡単だ。

簡単すぎて、バカらしくて、笑いがこみ上げてくる。

ただそれは、あくまで常識の範囲内で考えられることの話であって。

とてもじゃないが、軽々しく打ち明けることができることではなかった。

少なくとも、本来ここでこうして呼吸するはずのなかったこの、緋乃宮真吾という人間を今まで、そしてこれからも家族として変わらぬ

ように接し続けてくれるであろう人達には……。

「……ごめん。偉そうなこと言っちゃったかな……」

「……いいよ。気にすんな。それに、お前の言葉がまんざら的外れってわけじゃないしな……」

そう。

それは確かに一つの真実。

ただそれが、たった一つの真実なのか、数多ある真実の中の一つに過ぎないのか。

それはきっと、誰にも分からない。

それでも、いい。

少しだけ迷いが晴れた気がした。
まぁ、とりあえず今は……。
「……腹減った。飯だ飯」
「あ、ちょ、ちょっと！　食欲ないんじゃないの？」
「……誰かさんのお節介のおかげで、どうでもよくなっちまったよ」
「あ……」
「……早くしろよ。お前の分まで食っちまうぞ？」
「あ、待ちなさいよ！　それだけは許さないからね！」

……そうさ。
こんな俺を受け入れてくれた場所。
育ててくれた人の手。
同じ時間を過ごした仲間達。
この世界が、もうすぐ終わる。
そんなこと、あってはいけない。
たとえ何を犠牲にしても、守ってみせる。
生きる意味を忘れかけた心に、初めて宿った気持ち。
何も難しいことはない。
ただ、単純に……。

――この、心の底から大切だと思える人達が生きる世界を、失いたくない。

ただ、それだけ。
名を持たないはずだった一つの命が、新しい世界で唯一願って止まなかったこと。

――明日もまた、同じ陽だまりの中で……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９２：そして、夜

意識を失っていた時間はどれほどだっただろうか。

「……う」

呻き声を漏らしながら、氷室はあすふぁるとのうえにうつ伏せになっている自分の体をゆっくりと起こした。

全身にあちこちにまだ痺れるような感覚が残っており、さらに重力が自分とその周囲だけ強くなっているのではないかと疑うほど、体は鉄の塊のように重苦しかった。

自身の体重を支えながら立ち上がるだけのことがこんなにも辛いのは、恐らく生まれて初めての体験だろう。

「っ、私は、何を……」

重苦しいままの頭で、現在の状況を整理する。

脳までもが鉄球のように重苦しかったが、間もなくして思考は普段どおりに活動を再開した。

「……そうだ、やつは……」

思い出したように周囲に視線を這わせる。

が、街外れの一角には人気どころか猫の仔一匹さえもその姿を見せず、とうに夕暮れを迎えた秋の寒い木枯らしだけが、行き場を失った迷子のように吹いていた。

「くっ……！」

いくら不意をつかれたとはいえ、これは大きな失態だった。

せめてもう少しでも早くこの場を離脱できていれば、こうはならなかったはず。

……いや、だがあのとき冷静にこの場を離れようとしたところで、恐らく彼がそれを黙って見過ごしていたとは考えにくい。

もとより彼に戦う意思はなかったのだろうが、それでも恐らく同

じ目に遭っていただろう。
あれが催眠術の一種なのか、それとも何かしらの魔術めいた力なのかは分からない。
だが、どちらにしても常識で考えられる範囲のものではないことは確かだ。
『Ｒｉｎｇ』によって氷室達も人知を超えた力を手にしているので、そこを疑うことはない。
しかし、あれはそんな似たような力でありながら、何かが絶対的に異なるものであると氷室は理解する。
面と向かってみて初めて分かる。
恐怖でも不安でもない。
危機感でも絶望感でもない。
あらゆる負の感情が凝縮され、それを引き連れて歩くあの姿は、やはりバケモノとしか形容することができない。
しかしバケモノとはいっても、今の氷室達も一般常識から見れば同じ部類のはずだ。
常識では考えられない、ありえないとされるはずの力を手に入れている時点で、バケモノに一歩近づいていることは間違いない。
それでも氷室は断定する。
自分達とあれは、違う。
決定的に違う。
同じ一本のラインに並んでいる中で、あれだけが直線を乱している。
整然とした図形の中に歪な図形が一つだけあれば、誰もが不審に思うだろう。
それと同じだ。
過程をすっ飛ばして、今こうして成り立っているという点では同類だ。
だが、根本的な部分があまりにも違いすぎる。

言い換えるならそれは、生い立ちと言ってもいい。
人間の子供が母親の胎内から何ヶ月も時間をかけて出てくるところを、あれだけが自分から母親の体を突き破って這いずり出てくるようなものだ。
本来ならそれは未熟児として死を迎えるところ、あれは生き延びている。
生まれたときから狂っているのではない。
生まれる前から狂っているのだ。
それも、極めて冷静に、なおかつ真剣に狂っている。
聞こえが悪い言い方をすれば、自分がその世界の中心に位置しているという思考で動いている。
だがそれは、あれの場合に限って言えば決して間違っていることではないのだ。
現時点でこれはまだ推測に過ぎないが、もしもあれが真吾の話していた、自分の分身に当たる存在だとしよう。
そうすると、あれもまた神によって創られ、そして世界を監視するために放たれた存在ということになる。
神の分身。
それはつまり、神と同等の力を持っていたとしても不思議ではない。
分身とはつまり、鏡に映るもう一人の自分のことだ。
鏡に手を触れたところで、その手は表面に触れるだけ。
無理に力を入れれば鏡は砕け、触れた手は血に染まるだけだろう。
しかし神は違った。
触れ、その奥から、引きずり出す。
その身の写し身を引きずり出す。
それはまさに、完全なる複製。
神であって神ではない、しかし神と等しい力を持つ存在。
本来それは、一つの世界に一つだけ放たれるはずだった。
しかし偶然の果ての運命の中で、この世界には二つの神の化身が

放たれた。
一人は真吾。
そしてもう一人がさっきのあれではないかと、氷室は考える。

何をしようとしていると問い、あれは答えた。
じきに分かるときが来る、今はただ待てばいい、と。
「……待てばいいというのは恐らく、全ての封印の開放のことと見て間違いないはず。全てが開放されると、何かが起こるということなのか、それとも、それさえもまだ何かの過程に過ぎないということなのか……」
しばし考えをめぐらせるが、やはり現段階でははっきりと分かる答えは浮かんでこない。
結局はこのまま、あれの言うとおりに待つしかないということなのだろうか？
現状維持ほど不満に繋がるものはない。
「……もう少し、何かあと一つでも、手がかりになることがあれば、何かが見えてきそうですが……」
その何かが、今は見えない。
その目が曇っているわけではなく、真実とは常に闇の中で呼吸するものだからだ。
闇。
それはつまり、あれが引きずっていたもの。
あの中に、隠蔽された真実があるのかもしれない。
そうだとして、ではどうする？
あの闇の中に、手を突っ込んで引きずり出してみようか？
……冗談じゃない。
氷室は内心で呟いた。
あの闇は普通の闇とはわけが違う。
手を突っ込むどころか、触れることさえも敵いはしないだろう。
触れるより先に、近づくだけで精神が灰になりそうなプレッシャ

ーだった。
万が一、その闇に触れることができたとしても。
それはそれで、もう終わりだ。
触れれば最後、跡形も残さずにその闇自身に全てを喰らい尽くされるだろう。
「……戻りますか。ここは、冷えますね……」
誰に呟くわけでもなく、そう一言口にして、氷室は重いままの体を引きずって歩き出す。
黄昏は一面の空に広がり渡っていた。
間もなく、夕闇が闇へと姿を変える。
何かが起こるなら、これからだ……。

クロウサはぼんやりと空を見上げていた。
いや、空というにはその景色はあまりにも殺風景なものだった。
雲もなければ太陽もなく、星もなければ月もない。
なんとなく時間の感覚で、今が夕方と夜の間なのだということは分かっているが、それだけだ。
上を見るということが空を見るということならば、きっと今のクロウサは上を見ているだけなのだろう。
瓦礫の下にできたこの場所からでは、外に出ないことには本当の空模様を見ることはできない。
壁際に座らせられ、自由に動かせない手足をだらりとぶら下げて、ぼんやりと上を見る。
昼過ぎに、蓮華が戻ってきた。
言葉は交わさなかったけれど、ずいぶんと疲労した様子だったところを見るからに、封印の開放を終えたのだろうと思った。
これで残りはあと三つ。
そういえば、かりんの持つ音の封印もまだ開放していないなぁと、

クロウサは思った。
もしも開放したら、やはり他の人と同じように苦痛に耐えなくてはいけなくなるのだろう。
自分で言うのもなんだが、幼いかりんにそれを耐え、乗り切ることができるのだろうか？
心配の種は他にもいくつかあったけど、今一番大きな割合を占めているのはそのことだった。
本音を言うと、封印開放なんて真似はしなくてもいいと思う。
だけど、そう言ったところでかりんは考えを改めることはないだろう。
過去にも何度か似たような話を持ちかけたことはあったけど、答えはいつもノーだった。
かりんが追い求めている望みを思えば、それも当然のことだろうとは思う。
だけど、オイラは今でも信じられない。
何でも望みが叶うだなんて、そんなことがあるわけない。
もしもそれが事実なら、今あるこの世界は途端にバランスを崩してしまうことになる。
能力者として選ばれなかった人間達が、我先にと『Ｒｉｎｇ』の元へ集まるだろう。
富を求め、地位を求め、力を求め、永遠を求める。
そして世界は間違いなく崩壊する。
本当の意味で戦争が起こることになるだろう。

「……」
表情は変わらないが、クロウサは実際のところ少し迷っていた。
かりんと共に歩むことを決めたのは自分自身だけど、その道が正しいかどうかなんてそのときは疑わなかった。
たとえ間違っていても一緒に行くと決めたし、反面、本当に間違っているときは必ず止めてあげようとも心に決めていた。

けれど、徐々にだけど、オイラの言葉はかりんに届かなくなっている。
もうすぐ全てに区切りがつくと知って、かりんは少なからず喜んでいる。
無理もないだろう、願いが叶う瞬間がもう少しというところまできているのだ。
かりんでなくたって、喜びを隠せないはず。
けれど、オイラは違う。
その区切りが近づくにつれて、オイラの中の不安はどんどん大きく溢れてくる。
これでもかというくらいに押し寄せて、おいらは押し潰されそうになってしまう。
だけどそんなこと、かりんには言えない。
あんなに必死になっている姿を見たら、言えるわけがない。
もうやめてくれ、なんて。
諦めよう、なんて。
言えるわけ……ないだろ……。
「かりん……」
上を見て、その名を呼ぶ。
返事はない。
オイラは思う。
多分この道は、間違いなんだ。
でも、それでもオイラは……最後までかりんと共に、歩いていくことを選ぶと思う。
例えこの先が、暗闇だらけの未来でも。
与えられた希望が、みせかけだけのものだとしても。
どこまでも行こう。
けれど、もし……もしも、かりんが間違いに気付くことができた、そのときは……。

「――大丈夫さ、かりん。必ずオイラが、助けてあげるから……」

そう、一言。

上ではなく、見えない空に呟いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９２：そして、夜（後書き）

更新が途絶えてしまってすいませんでした。
先月末から風邪をこじらせてしまい、今もまだちょっと完治とは言いがたい状況です。
寝たきりで数日過ごしていたので、そのせいもあってすっかり続きを執筆できませんでした。
どうも申し訳ありません。
とりあえずは動けるくらいに回復しましたので、ややスローペースではありますが、執筆の方も再開していきたいと思います。
ご迷惑をおかけしました。
今後もよろしくお願いします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９３：闇、動く

胸の中のどこかに不安を抱えながらも、今日という一日はまた何事もなかったように過ぎ去ろうとしていた。

時刻はすでに夜の九時を回り、昼間や夕方でさえあまり賑やかにならない住宅街の一角は、すでに眠りについてしまったかのように静まり返っている。

もちろん、実際に寝静まっているわけではない。

窓の外を見れば、周囲の家々はまだ明かりに包まれており、喧騒こそ聞こえないものの、賑やかさを感じさせる。

普段と変わらぬ夕食を済ませ、僕は部屋のベッドの上で寝転がっていた。

思っていたよりも食欲も出てきて、体の調子もいくらかマシになっているように思う。

とはいえ、まだまだ病み上がりの体には変わりないので、もうしばらくは大人しく休んでいる必要があるだろう。

もっとも、大人しく休ませてくれるような状況がいつまで続くかも分からない今は、あまり悠長に構えている余裕もないのだが。

「……ふぅ」

溜め息を吐き出し、ポケットの中から携帯を引っ張り出す。

ほんの十数分前に、氷室から一通のメールが届いていた。

通話じゃなかったのは、氷室なりの気遣いなのかもしれない。

僕はもう一度そのメールのないように目を通す。

というよりも、メールは夕飯の途中に届いたものだったので、まだ僕もその全文に目を通したわけではなかったのだ。

食事中に携帯をいじったりしているのを母さんはあまりよく思っていないので、僕は食事の席ではそのままにしておいた。

画面を操作し、受信フォルダのトレイを開く。

新着メールが一通。
開き、内容に目を通す。
ピッ、という聞き慣れた電子音。
直後に、僕は寝転がっていた体を跳ね起こした。
ただごとではないとは思っていたが、昼過ぎのあの地震がこんな形で関与していたなんて……。
メールの内容は簡潔なものだった。
が、決して楽観できるものでもなかった。

――五つ目の封印が開放された。

その冒頭部分だけで、僕の目を釘付けにするには十分だった。
だがそれだけではない。
その後にしばらく今後の動き方や、真吾との連絡などについての提案や憶測が述べられ、もっとも目を引かれたのはその最後の部分だ。
これも予測にしか過ぎませんが……という出だしで、その言葉は書かれていた。

――九人目の能力者が存在している可能性があります。

画面を操作していた指が凍りついたように止まる。
「九人目って……そんな……？」
思わず僕はそう口にしていた。
そんなことがあるはずがない。
そう思いながらも、僕は続きを読んだ。
すると、それを後押しするような言葉がそこには書かれていた。
今日の夕方、氷室が何者かと接触し、間接的ではあるが危害を加えられたこと。
危害といっても、身体的なケガなどは何もなく、ただ意識を失わ

されたとのことだった。
それはそれで十分脅威な気もするが、今はそのことを気にかけているときではない。
さらに氷室はこう書いている。
その何者かは、少なくとも人間ではない。
かといって、能力者として覚醒した自分達と同じ境遇というわけでもない。
一言で表現するのならば、それはバケモノという言葉でしか例えることができないものだと。

「……人間じゃ、ない？」
人間じゃないというのも恐らく氷室の憶測なのかもしれないが、逆に言えば氷室が相手の正体を見誤っているとは考えにくい。
となると、やはりその何者かは、一般常識の観点から見たところの人間という枠では捉えきれない存在ということになるのだろう。
そしてその何者かこそが、以前真吾の言っていた自分の分身なのではないかと、氷室は仮説を立てている。
僕もその話を覚えているが、まだその全てに納得をしたわけではなかった。
もしもこの内容が真実ならば、その何者かは真吾と同じ存在の定義を持つということになる。
記憶超越者。
神が世界を生み、その世界を監視させるために送り込んだ自らの分身。
それらは数多ある全ての世界に送られ、一つの世界に一つの監視者が割り当てられるという。
だが、今僕達がいるこの世界だけが例外であって、何らかの理由によって監視者が二人送り込まれる形になってしまった。
その一人が真吾であり、もう一人の所在は今まで不明とされていた。

だが、もしもそのもう一人に当たる存在が、今日氷室が遭遇したその何者かだとしたら、これほど奇縁なものはない。

この広い世界の、数ある国の中の一つのそのまた一つ、決して大きくもない月代という市の中に、二人の監視者がひしめいている。

これが偶然で片付けられるはずがない。

もしかしたら、この『Ｒｉｎｇ』に関わる全ての始まりが、その偶然に起因しているのかもしれない。

そう考えると、今まで不明瞭だったままの問題にもいくつかの仮説を組み立てることができるようになるからだ。

と、それについてはひとまず置いておくことにする。

僕の知らないところでも何かしらの動きがあったようではあるが、とりあえずは氷室も無事だということに胸を撫で下ろす。

そしてこれで、残る封印はあと三つということになるわけだ。

だが、ここでやはり疑問が浮かぶ。

仮に氷室の仮説が正しいとして話を進めると、人間ではないにしてもその何者かは間違いなく僕達と同じ何らかの能力者としての能力を保持していることになる。

となると、必然的にあるものが浮かび上がってくる。

そう、対応すべき封印だ。

今のところ存在が明らかになっているのは八ヶ所。

そのうちすでに五ヶ所は、対応すべき能力者の手によって開放されている。

残る三人は、氷室、真吾、そしてかりんのはずだ。

しかしここに新しい九人目が介在してくると、当然それに対応すべき封印もなくてはならないことになる。

恐らくこのことには氷室もすでに気付いているのだろうけど、メールの内容にはそのことに触れている記述は一つもなかった。

それが今はまだ触れるべきではないという意味のものなのか、それともまだ気付いていないだけなのか、僕には判断しかねる。

結局のところ、氷室も同じなのかもしれない。
何だかんだと推測を並べ立てたところで。パズルは完成するまでどんな形に組みあがるか分からないものだから。
たった八つのピースなのに、こんなにも組み上げるのは難しい。
だがそれも、もうすぐ完成する。
出来上がったその形がどんな形なのか。
誰にでも優しく、丸みを帯びたものなのか。
歪に広がり、刃を剥き出しにしたものなのか。
今の時点では予想もつかない。
だから、現状維持しか案がない。
八つの封印、その全てを開放すれば、おのずと形は見えてくるはず。
分かっている。
分かっているんだ、それは。
だけど……。
本当に、それは……。

――間違ってない道の上を歩いているということなのだろうか？

思い返してみれば、どこかおかしい。
もともとこれは最初、戦争になるはずの戦いだった。
誰しもが望まずに能力者として覚醒し、その上で戦争に巻き込まれるという理不尽なルールの上に立たされた。
が、戦争ということは即ち、勝者が出れば敗者も出るということだ。
古今東西、戦争に置いての敗者とは例外なく死者に他ならない。
勝ち残れば望みを叶える権利を得て、一度でも負ければ死に往くだけ。
それが戦争。
歴史の中で、人類が幾度となく繰り返してきた反発と衝突の集大

成。
だが、誰しもが戦いを望むわけではない。
氷室と飛鳥がそれだった。
どういう理由で選ばれたのかを今更詮索しようとは思わない。
ただ二人は、静かにこの戦争を終わらせるために戦っていた。
始まる前に終わらせれば、誰も傷付かずにすむのだから。
戦いを戦争に昇華させず、内乱程度に抑えること。
その考え方に僕も同意だった。
それでも今までに少なからずの被害は出ているけれど、無関係な人は誰一人として巻き込んではいないはずだ。
まだこれは戦いから戦争へと昇華されていない。
となれば、このまま静かに幕を下ろすことも可能なはずだ。
そのために僕達は動いているのだから。
そして問題点はここだ。

――もしも本当に、戦争が起こらなかったらどうなる？

少し話を戻そう。
僕達がいるこの世界は、神によって創られた数多ある世界の一つにしか過ぎないものである。
まずはこれを認めることから始まるのだが、とりあえず仮にこれを認めることにしよう。
そして全ての世界、そこに生きる全ての人間を含めた生物の未来及び結末は、すでに決定付けられている。
僕達はあらかじめ用意されたレールの上をただ歩くだけの、操り人形なのだ。
それこそが神が絶対である力の啓示であり、僕達が言うところの逆らえない運命というものだ。
だとすると。
この『Ｒｉｎｇ』を巡る戦いが戦争へと昇華しないことさえも、

神が定めた予定のうちのものか？
それとも、ここにきて運命の歯車は狂い始めているのか？
真吾は言っていた。
自分が死ねば、もう一人の分身も消える。
それが唯一、神に逆らえるささやかな抵抗なのだと。
つまり、真吾が自ら死ぬことを選ばず、能力者の一人として戦争に参加することが、神の描いた未来予想図のはずだ。
総じて言えば、この世界を創った神とやらは、その時点では戦争を起こさせるつもりだったのだ。
いや、起こるように全てを仕向けていたはずだ。
しかし、その戦争のキーとも言える能力者に真吾が選ばれたこと。
その真吾本人が運命に抗っていること。
氷室や飛鳥や僕のように、戦争を回避するために戦うものがいること。
これらは全て、本当に神の描いた未来にあった図式なのだろうか？
……もしも。
もしも今の状況が、何か……たった一つでも、定められていた未来と違う形を保つことができたのなら、それは……。

――運命は、変えることができるかもしれない。

いや、実際すでに変わりつつあるのではないかと僕は思う。
現に監視者であるはずの真吾が、僕達にこんなことを話している時点で、何かが変わり始めているはずなのだ。
変われる。
変えられる。
変えていくんだ。
他の誰でもない、僕達が変えていく。
誰にも気付かれないままでいい。
功績や名を残したいわけじゃない。

僕達はただ、例え他の誰かに結末を決められた道であっても、自分の意思で歩き続けていきたいだけなのだから。
平穏は望まない。
日常を返してほしいだけ。
そのためなら僕達は、きっと。

――もう少しくらい、戦っていけるはず。

……しかし。
そんな僕の想いはよそに、今日が終わりを告げる頃にそれは始まった。
時計が告げる二十四時。
闇は静かに、蠢き始めた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９４：ようこそ、現実の狭間へ

夜の闇の中を走っている。
肌寒い風が身を裂いて、目も半ば閉じながら足を動かし続ける。
吐き出す息は真っ白で、まるで車の排気ガスみたいに背中へと流れていった。
寝静まりかけていた住宅街の外れに、一人分の足音だけがうるさいくらいに響いていた。
「っと……」
突き当たりで僕は一度足を止め、白い息を何度も吐き出しながらわずかに気配を探る。
時間にすれば三秒ほどだったろうか。
その間に乱れた呼吸を少しでも安定させ、直後に僕はまた走り出す。
「こっちだ」
突き当りを左折。
国道沿いにどこまでも長く伸びる道は、今の時間では横切る車の数も数えるほどしかない。
時折対向車線から照りつけるトラックのヘッドライトを鬱陶しく思いながら、それでも走る足は止まることを知らない。
時刻はちょうど、日付を変えて間もない頃だ。
零時七分。
草木も眠る丑三つ時、というにはまだ些か早すぎる時間帯ではあるが、闇が支配する時としては十分だった。
「……何なんだ、これ……」
まともに肺まで酸素が行き渡らない中、僕は呟くように吐き出した。
胸の真ん中がやけにもやもやして、思わず掻き毟りたくなるくら

いに気持ちが悪い。
めまいと吐き気と腹痛が、全部同時に襲ってきたみたいな感覚だ。
こみ上げる嘔吐感をどうにか堪えながら、できる限りの全力疾走で僕は走る。

ふと、暗がりの中で前方に何かが見えた。
気がつけば、一人分の足音がいつしか二人分の足音になっていた。
もう一つの足音の正体は、わずかに前方を走る見えない人影のものだった。
と、どうやらそのもう一人も僕の足音に気付いたらしく、闇の中でふとこちらを振り返った。
ちょうどそのとき、まばらに立ち並ぶ街灯がその姿を照らし出した。
「あ……」
僕がそう呟くのと同時に、向こうも同じように小さく口を開いていた。
「大和？」
走る速度を落としそう呟いたのは、他でもない飛鳥だった。
「飛鳥、どうして……」
隣に並びそのまま走りながら、僕は聞く。
「どうしたもこうしたも、こんだけ嫌な空気感じ取ったら、おちおち寝ていられないじゃない」
「……だよね」
僕達は並走しながら、そんなことを口にした。
「……ねぇ、正直これ、どう思う？」
「どうって言われても困るけど……良し悪しでいえば、悪い方だと思う」
「同感。この感じ、すっごい胸焼けに感じるもの。離れていてこれだけ嫌になるってことは、近づいたら相当やばいかも」
二人分の足音が焦るように地面を叩く。

近づきたくないという本能とは逆に、行かなくてはいけないという何かが体を動かしている。
「たぶん、氷室も来ると思う。いや、アイツのことだから、もう着いてるかもしれないけど」
「これってさ、やっぱり……」
「……うん。多分、間違いない。半信半疑だったけど、これで信じるしかなくなった」
氷室からのメールに記されていた、九人目の存在。
恐らく、今感じている気配の主がそれだ。
同じだけど同じじゃない存在。
見た目だけが人間の形をしていて、中身は得体の知れないバケモノ。
神によって世界に放たれた、監視者。
そして、真吾の分身。

「今度は何をしでかそうってのよ、まったく……」
「……」
毒づく飛鳥に、僕は答えられなかった。
何が起ころうとしているのかは分からない。
けれど、何かが起きようとしているのは分かる。
それもきっと、よくないことが起きるような気がする。
予感とも、直感とも言い換えてもいい。
根拠は何もないのに、胸のうちの不安だけがどんどん大きく膨らんでいく。
何もせずとも、もうすぐ破裂してしまいそうなほどに、大きく……。
「……急ごう。何か、すごい嫌な予感がする」
「……そうね」
会話を一時中断し、僕達はわずかに走る速度を上げた。
と、そのときふいに背中を照らす車のヘッドライトに気付く。

すぐ横の道路を一台の車が通過したかと思ったら、僕らの前方十メートルほどの距離で停車した。
暗がりだったが、どこか見覚えのある車だった。
そして案の定、次の瞬間運転席から顔を覗かせたのは氷室だった。
「二人とも、早く乗ってください」
僕達はその言葉に従い、急いで後部座席のドアを開けた。
流れ込むように車内に入りドアを閉めるや否や、車は有無を言わさずに急発進した。
「うわ……」
「ちょ、氷室、安全運転しなさいよ」
「ああ、すいません。ですが、悠長に構えている余裕もないでしょう。悪いですが、制限速度は無視させてもらいますよ」
車は徐々に速度を上げていく。
すれ違う車もまばらな中、僕達を乗せた車だけが夜の闇の中を疾走していた。
シンと静まり返る車内。
わずかに緊張が生まれ、僕は空気の塊を呑み込んだ。
あれだけ寒い夜空の下を走っても震えなかった手が、今頃になって震え始めていた。
寒さのせいじゃない。
これはきっと、得体の知れないものに近づいているという、確かな恐怖からくるものだ。
ドクン。
心臓の鼓動が高鳴る。
掻き毟りたいほどの胸焼けはどこかへと消え去り、代わりに体全体が冷たく冷え切っていた。
薄氷の服を着ているみたいな感覚。
寒いのではなく、冷たい。
ギュッと拳を握り、震えを紛らわす。
強がりでいい。

虚勢でも張っていなければ、この先にあるものには立ち向かえそうになかったから……。

車は静かに停車した。

エンジン音が消え、車内も車外も張り詰めたような静寂に包まれる。

「……降りましょう」

氷室の一声で、僕達はそれぞれにドアを開けて外に立った。

車内の暖房のせいもあって、外気の冷え込みはいっそう激しく感じられる。

身を裂くような冷えた空気が、立ち尽くしているだけの僕達を容赦なく切り刻んでいく。

ドクン。

また一つ、心臓が高鳴った。

収まったはずの気持ち悪さが、少しずつ腹の底から滲み出してくる。

胃液が逆流し、胃の中のもの全てをこの場に吐き出してしまいそうになる。

無意識のうちに手が胸を鷲掴みにしていた。

苦しいのかそうでないのか、自分自身でもよく分からない。

ドクン、ドクン。

鼓動はさらに高鳴る。

そっと周囲に視線を巡らせるが、夜の闇はなにもかもを隠してしまっていた。

微かに捉えられるのは、廃棄された建物の輪郭と、その近くに散らばったままのコンクリートの塊だけ。

まばらに立つ木々も、その枝に数えるほどの葉しかなく、寒そうな肢体を晒していた。

「……なるべく離れないように。一塊になって動きましょう」

無言で僕と飛鳥は頷いた。

多分、氷室のその一言がなければ、この足はこの場に根を生やしたように動かせなかっただろう。
それくらいにこの場所は陰湿で、悪意に満ちた空間に変容していた。
近づくことを本能は拒否している。
だが、それ以上に働きかける別の何かが足を動かす。
先に進まなければ、何も変わらない。
理屈では分かっていた。
だが、分かることと実行することはまったくの別問題である。

足取りは重い。
一歩踏み出すごとに、靴の裏が砂利を踏み砕く。
その音だけで、体は見えないプレッシャーに押しつぶされそうになる。
肉が縮み、骨が軋んだ。
少しずつ僕達は、哂いながら待ち構える闇に近づく。
一歩、また一歩。
そしてさらに踏み出し、ある一線を越えたそのとき。
「……え?」
そんな、不思議な感覚に捉われたのは僕だけではなかったはずだ。
その一瞬だけ、体から寒さが消えた。
吹き付ける風が止んだ。
時間さえも止まったように感じた。
そしてふと気がつくと、僕達は同じ地面の上に立ちつくしていた。
いや、同じではなかった。
些細だが、しかし明らかにそれは異変と呼ぶに相応しい変化だった。
「これは、一体……」
氷室が声を漏らす。
「うそ、何で……」

続けて飛鳥が呟く。
僕はただ無言で、正面を見据えることしかできなかった。
すぐ隣に、氷室の車があった。
僕達が乗ってきたものだ。
それは別におかしくはない。
だが。
そこから降りて、間違いなく歩を進めて歩いたはずの僕達は、どういうわけか……。

――気がつくとまた、車の隣に立ち尽くしているのだ。

まるでドラマや映画のワンシーンを巻き戻したみたいだ。
距離にすればわずか数メートルほどだが、僕達は確かに前へと進んだのだ。
なのに、またこうして車から降りたその場所に立っている。
時間が巻き戻っているかのようだった。
あの一瞬。
何も感じなくなったあの一瞬に、僕達の中だけ時間が止まり、そして巻き戻され、また動き出す。
何なんだ、これは？
何が起こったというのだ？
僕はふと、足元に転がっていた拳大ほどの石を拾い上げた。
そしてその石を、放物線を描くように軽く前へと放り投げた。
放られた石は最高点まで達すると、そのまま重力に引かれて地面の上へと転がり落ちる……はずだった。
しかし石は、落下を始めたあたりでふと、音もなく姿を消した。
正真正銘、消えた。
さらに、直後。
コトン、と。
足元に、そんな音。

見ればそこに、今投げた石と似たような……いや、同じものが転がっていた。
間違いなく、僕の足元にあった拳大の石はあれ一つしかなかったはずなのに……。
そして、否が応でも理解させられた。
この先は、異空間。
恐らく、普通の方法では入ることのできない場所。
現実から隔絶された、闇の領域。
その壁は、驚くほどに薄く。
しかし、決して安易に破ることができるものではない。
なびくことのない夜のカーテンは、それでも静かに揺れている。
何もできない僕達を見下ろし、微かに哂うような声を風に乗せて……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９５：月明かりの下で

「さて、と……」

辺り一面は暗がりに包まれている。

黒という黒が密集した、闇だけが支配する空間。

方角もまともに分からないこんな場所では、常人ならまず間違いなくものの数分で気が狂ってしまうことだろう。

「少し、急いだほうがいいかな。範疇の内とはいえ、思った以上に頭の回る人がいたからね」

と、闇の中で闇が呟いた。

その姿は闇に包まれて輪郭さえも捉えることはできないが、声の感じから察するにまだ少年のそれを思わせるものだった。

そして事実として、声の主の外見もまた、どこにでもいるような少年のそれだった。

だが、一つだけ他と違うことがある。

それは少年の姿を成し、少年の声色を発してはいても、決して人間という枠では捉えきることができない異質な存在だからだ。

もう少し分かりやすく言い換えるのならば、それはコンピューターの中に突如として発生したバグのようなもの。

整然と並びたてられた図形の集合の中に、一つだけ混ざる歪な輪郭を見れば、誰しもがそこに違和感を抱くだろう。

それの存在はまさにそれだ。

そしてそれは、この深淵のような闇の中でもなお、同じ違和感を保ち続けている。

それの周囲だけ、闇がざわめいていた。

まるで、闇自身がそれに対して恐怖を抱いて震えているかのように。

そんなことは意にも介さず、それはヒタヒタと聞こえない足音を

鳴らしながら、一寸先さえも見えない闇の中を歩き出す。
ズルリ、ズルリと、それが歩いた後の地面を何かを引きずる音がした。
その何かは、今は姿を見せないままでいる。
しかし、確かにそれはそこにいた。
そこにいて、確かに息づいていた。
凍りつくような吐息と、深い闇色に染まった双眸。
呼吸も瞬きもしてはいないけれど、確かにそれはそこにいる。
深淵の名を与えられた、生きた闇がそこにいた。

ピタリと、それはその場で歩みを止める。
相変わらず周囲は闇に囲まれていて、踏みしめる地面も、辺りの景色さえも何一つ明確なものはない。
けれどそこには、あるものがあった。
それは普通の景色の中に置いては、ただの岩の塊にしか人の目には映らないだろう。
しかしそれは、ただの岩の塊ではない。
封印が施された、石碑の一つだった。
「やれやれ。まさか僕自身の手で、この封印を解き明かすことになるとはね」
どこか溜め息のようなものを一つ吐き出して、しれは呟く。
「とはいえ、そうも言ってられないか。彼があの調子じゃ、ここの開放には期待できそうにもないし、そうなった以上は僕が手を下すしかないか……」
言って、静かに石碑の上に手を触れる。
冷たい岩肌の感覚がてのひらを伝い、直後に微弱な電流のようなものがそれの体内に流れた。
同調完了。
何の変哲もなかった岩肌の一部がガラリと崩れ落ち、むき出しになった表面から赤い記号の羅列が顔を覗かせた。

それらは一見文字のようにも見えるが、現存する世界の歴史に置いて、いつの時代のどの場所にも記録されていないものだ。
暗闇の中で嫌でも目立つほどの真紅の記号は怪しく光り、同時に血を思わせる不気味さを見る者に与えるだろう。
この記号をの羅列の意味を理解したとき、この場に契約は完了する。
封印は開放され、対応すべき『Ｒｉｎｇ』へと本来の力が戻るという。
だがしかし、その肝心要の対応すべき『Ｒｉｎｇ』という古代の遺産を、それは所持していなかった。
なぜか？
答えは簡単だ。
それは、契約者ではないのだから。
ではなぜ、契約者ではないそれが開放を行えるのか？
答えは簡単ではないが、実に単純だった。
同じだからだ。

本来の契約者である存在と、今この場にいてこうして開放を行おうとしているそれは、全く同じ定義の上で存在している。
ゆえに、Ａにできることはにも可能で、その逆もまた然り。
どちらがＡでどちらがＢだとか、そんなことはこの際どうでもいいことなのだ。
重要なのは、Ａに契約者としての資格があれば、自動的にＢもそれを受け継ぐということ。
そのあまりにも単純明快なメカニズムは、しかし応用の仕方によっては双方にとんでもない悪影響を及ぼすこともある。
Ａが望んでないことであろうとも、Ｂが望み無理矢理にでも実行に移せばそれでおしまいだ。
ちょうど今、その瞬間だ。
本来の契約者であるＡは、開放を望まなかった。

その気持ちは今後も変わることはないことを、Bは知っている。
AとBが同じだから、知ることができる。
ならば、開放を望むBは無理矢理にでも行動を起こしてしまえばいい。
AとBは全くの同一存在なのだから、実行することは非常に容易い。
「さて、手早く済ませてしまおうかな。あらかじめ仕掛けた細工も、そう長い時間は持続できないしね。勘のいい彼らのことだから、すでにそこまでやってきているかもしれない」
赤く光る記号に目を落とし、読めない文字の中にある真の意味を理解する。
それは計算で成し得ることではない。
本能の奥で理解する必要がある。
人智を超越した、あるはずのない言葉。
そこに刻まれた真実の意味。
その目に焼きつけろ。
記憶へと刻み込め。
真実を理解しろ。
「……よし。これで……」
瞬間、世界に亀裂。
「……っ！」
それはまるで、ガラス張りのドームが頂点から一気に崩れ落ちるような。
しかし闇の中に響く音はなく、あくまでも静かに、静寂に包まれたままで崩壊していく。
天上から闇が徐々に切り裂かれていく。
覗いたのは闇色ではない、夜色の空。
わずかに輝く星と、金色に光る下弦の月。
闇のカーテンは今、音もなく切り裂かれ、落とされた。
白日の下、というにはあまりにも深くなった夜の中、それの姿は

石碑と共に浮かび上がった。
それは振り返る。
崩れ落ちるガラスの向こう側に、人影が見えた。
四人分の、人影が。

一つの影が動き出す。
闇が消えて夜の中、月明かりだけでも十分なほどに足元を照らし出してくれる。
動く影の顔はまだ見えない。
斜めに射す光が、ちょうどよく首から上を影に覆っていた。
そして数歩。
月光の下に、その姿が露になる。
「こうなるだろうと思ったぜ。きっとな」
浮かび上がった人影……真吾は静かにそう語る。
「……奇遇だね。僕も全く同じことを予想していたんだ」
立ち尽くす闇、それは静かにそう返す。
「君がここに来たということは、どうあっても僕のジャマをするということで間違いないのかな？」
「いちいち聞かなきゃ分からねーのか？　聞く必要なんてないだろうが」
「……どうして分からないかな？　同じ定義の上で生まれた僕と君なのに、こんなにも考え方が違ってくるなんて。苛立ちや憤りを超えて、虚しさすら感じてくるよ」
「同じ親から生まれた双子が、全く同じ性格や趣味を共有すると思うか？」
「それは正論だろう。けれど、僕らの生みの親はこともあろうか神という絶対の存在だ。その意思によって生み出され……創られた僕達は、全てを統一されて生まれたと考えるべきだろう」
「だったらなんで、お前はその神の意思に反することをしでかしてるんだよ？」

「……」
「神は世界の終わりがやってこないよう、複数の世界その全てを輪で繋げた。だが、お前のしている行為はその原理を打ち壊すことそのものだろうが。それで神の子を語るとは、よく言えたもんだよな？」
「……どう言われようと構わないさ。僕は僕だ。たとえ監視者としてのためだけに生まれた存在であっても、僕の意思は他の誰のものでもない、僕だけのものだ」
「その部分には同感だ。だから、なおのことお前を見逃しておくわけにはいかねぇ。無理矢理にでも止めるぜ」
「無駄だよ」
「知るかよ」

会話が途切れ、わずかな沈黙が流れる。
その会話を、僕達三人は少し離れたところで聞いていた。
夜風が目の前を吹きぬける。
寒さには慣れてきているのに、微弱な震えだけがいつまでも止まらない。
間もなく、始まる。
そう感じていた僕達は、張り詰めた空気を目の当たりにして動くことができなくなっていた。
正反対の意見を持つ二人がいる。
それぞれの意思はとても確固たるもので、互いにそうあることを心の底から望んでいる。
いわばそれは、祈りであって願いであった。
けれど二人は、祈ることも願うこともしようとはしなかった。
祈るべき、あるいは願うべき存在である神が、どれほど頼りなく、万能ではない存在であるかを誰よりも知っていたからだ。
それでも自分の意思を無理矢理に押し通そうとすれば、こうなることは火を見るより明らかだった。

最初から分かっていたことだった。
衝突は避けられないのだ、と。
だから……戦う。

風が一瞬だけ止んだ。
それを合図にするかのように、地面の上で小さな火花が二つ弾ける。
二人分の影が、地を蹴って休息に接近する。
交錯まで一秒もかかりはしないだろう。
ほんの一回だけ、まばたきを繰り返した次の瞬間。
とてつもない質量の力と力がぶつかり合った衝撃が、辺り一面に突風を巻き起こした。
下弦の月が薄く哂うその下で、譲れない戦いが舞うように始まった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９６：一筋の光

こうなることは当然の結果であると、分かりきっていたことだった。

二つはそれぞれが、同じ神の手によって創られた、寸分の狂いも生じることのない同一の存在。

その世界を監視する、そのためだけに創られた、しかし人間という枠をはるかに超越した力を持ち、それでもなお人間として生きて、その中で世界を監視する。

決して望んで生まれた命ではない。

言ってみれば、不足な部分を補うための応急処置に似たような。

「あああああぁぁぁっ！」

「っ、どうして、気付くことができないっ！」

何度目になるかも分からない振り上げた拳は、やはり虚しく夜の空気を切り裂くだけで終わる。

「君だって分かっているはずだ！　いいように創られただけの世界に、誰もが望む幸せな結末なんてありっこない！」

決して手は出さずにいたそれも、言葉という武器で迎え撃つ。

「神とて万能じゃない。事実として、僕と君が同時に存在していることが何よりの証拠じゃないか！　失敗作なんだよ、君も僕も。そして、この世界も、この世界と繋がる他の全ての世界も！」

「だから壊すのか？　他の部分には見向きもしないで、たった一つの間違いを見つけただけで全部壊そうってのかよ！」

「っ、組み上げ方を間違ったパズルを正しく組み直すには、一度全てをバラバラにしなくてはいけないだろう！　そんなことも分からないのか！」

「だからって、お前にその間違えだらけのパズルを崩す権利はどこにもねーだろうがっ！」

殴りつけた拳が、確かな手ごたえを感じた。
「ぐ……っ」
直撃はしていない。
しっかりと腕でガードされている。
ダメージらしいものはほとんど与えていないだろうし、有利不利が傾くほどの効果を持つものでもない。
それなのに、その拳は不思議と重みを帯びていた。
石を握り締めているわけでもない。
能力によって強化されているわけでもない。
正真正銘、開けばカラッポの手のひらが顔を覗かせるだけの拳。
けれどそこには、目には見えない重さがずっしりと乗っかっていた。
それは石のように硬くはないだろう。
だが、目には見えないそれは何よりもかけがえのないものになったのだろう。

思えばそれは、わずかに十六年という時間の流れ。
緋乃宮真吾という、吹雪の夜に置き去られた赤ん坊の体に、別の意思が宿った日。
その日から真吾は、人間になった。
監視すべき世界の中で、周囲と同じように普通に育ち、普通に生きてきた。
過去にどんな世界で生を受け、その世界で何を見て、何を知り、誰と出会い、どこを歩いたか。
その全てを覚えている。
忘れることなんてできない。
監視者の役目は、記憶を継承することだから。
たとえどれだけ生と死を繰り返しても、記憶だけは繋がっている。
忘れたくても忘れられない、忘れることさえ許されない、そんな記憶。

今までずっと背負ってきた。
それが当たり前なのだと、無理矢理に理解させた。
逃げ口上で構わなかった。
もとよりこの迷路には、出口など用意されていなかったのだから。
延々と繰り返す。
何度も何度も、何度も何度も何度も何度も……。
そしてある日、気が付くと。
そんな日常を、悪くないと思える自分がそこにいた。
やがて、そんな想いは少しずつだが変化していく。
変わらない日常。
ありふれた風景。
聞き飽きた台詞。
そんな些細ものに、こんなにも安らぎを感じられることに。
機械のように生きることに、慣れたつもりだった。
でも、そうじゃない。
本当はそうじゃない。
いつも願ってたことなんだ。
心の奥、深い深い奥底で、声を殺して願ってた。
普通の幸せを感じたい。
ただ、それだけを願ってた。
笑い話さ。
願っていたものは、いつもすぐ傍にあったんだから。

「……お前が何を考えているのかなんて、知りたくもねーよ。けどな、もしもその結果を求める過程の中で、俺の大切なものに少しでも危害が及ぶようなら、俺は全力でお前を止めてやる」
「……それがどれだけ、愚かな行為か分かっているのか？」
「そんなものは関係ない。俺はただ、今のままの居心地が好きなだけだ」
「……」

二人の間を縫うように、冷たい風が悲しく吹きぬけた。
鏡なのに、映し出された二つの姿はこんなにも正反対だ。
相容れることは、もうない。

「――俺はもう、誰のレールの上も走らない。この足で、自由に歩く」

「戯言を……」
そして二人は向かい合う。
互いに譲れないものがある。
だから、衝突は避けられない。
ただ、それだけのこと。

「けれど実際、君はどうするつもりなのかな？」
「……何？」
つとめて冷静な声で、それは語る。
「君が僕を止める、それはまぁいいとしよう。だが、どうやって止めるつもりだい？　手っ取り早く、僕を殺すかい？」
「……」
「できないさ、できないだろうね。力の強弱関係で可能不可能というのではなく、君と僕の位置づけがすでに、それを不可能にしているんだから」
その言葉は確かに正論だった。
だから真吾も、返す言葉を持たなかった。
神の化身である自分には、自分で自分を殺すことができない。
それはつまり、全く同じ存在定義を持つものも、殺すことができないということだ。
「僕達は自殺はおろか、互いに殺しあうこともできやしない。どちらか一方だけが消滅することなんて、それこそ不可能だ。どちらかが消えるときは、残るどちらかも同時に消える。そしてそれを自由

に操れるのは恐らく、僕達を創った神のみに可能なことなんだ」
「……そうとも限らないさ。確かに俺達は互いに死ぬことは楽じゃないが、それはあくまでも俺達がぶつかり合った場合のことだろ？　他のやつらなら、やろうと思えばいくらでも俺達を殺すことができるさ」
「……いや、それでも君にはその選択を選ぶことはできないよ」
「何だと？」
「奇しくも、君が自分で口にした言葉だろう？　君は、今の居心地が大切なんだ。だから、自らそれを手放す選択なんて、君には絶対にできっこない」
「……っ」
「君は生きたいと願っている。できることなら自分に課せられた運命を全て投げ捨てて、普通に生きて行きたいと願っている。あの陽だまりのような温もりの中で、当たり前のように泣いて笑って、家族や兄弟よりも深い絆を築き上げた人達と、この先も変わらずに、当たり前の日々を過ごしたいとね」
「……くだらねぇ」
「本当にそう思っているのかな？　だとしたら、今の君はどうして僕の前に立つ？　言葉でいくら壁を作ったところで、所詮は薄い氷の膜に過ぎないんだ。指先で触れるだけで、いとも容易く壊すことができるよ」
「っ、うるせぇ……」
「逃げるな」
「っ！」

「現実から目を背けるな。現実を望んだのは他ならぬ君自身だ。ならば、今も目の前の現実を見ろ。叶えたい願いがあるのなら、この戦争の最後の一人に勝ち残れ。望みを叶えるのはいつだって勝者の権利だ。敗者には望む権利すら与えられない。負ければそこで全てが終わるんだ。どうしてそんな簡単なことに気付かない？　いや、

気付いてないフリをいつまで続けるつもりだ？」

「……黙れ、黙れっ……」

「隠せるわけがない。だって、僕と君は同じなのだから。どれだけ表面上を取り繕ったところで、心の中で君はいつも叫んでる。出口のない迷路に迷い込んで、暗闇の中で一人啼いている。救われないと、助けなど来ないと分かっているのに……」

「……っ」

「僕のしようとしていることが、ある意味では全てにおいて正しいことであると、君はもうとっくに理解しているはずだ。繰り返すが、組み上げ方を間違えたパズルを正しく配置し直すには、一度全てを元に戻さなくてはならないんだ。いい加減に、認めたらどうだい？　どれだけ否定を繰り返しても、真実は常に正しい位置にあるものなんだから……」

その言葉を、否定できない。

どんな言葉で迎え撃っても、真実は決してその形を変えたりはしない。

何一つ変わりはしない。

この先の未来永劫、何も。

「……君にはできないだろう。だから、僕が手を下す。協力しろとは言わない。ただ、見ていてくれればいい。余計な手出しもしないでほしい。きっとこれしか、何もかもを覆す方法は残されていないから……」

「くっ……」

握った拳から少しずつ力が抜けていく。

言い返せない。

耳の奥にまで響くその言葉の一つ一つが、間違えようのない真実の的を射抜いていた。

そうさ。

本当は分かっていたんだ。

この世界の仕組みそのものをひっくり返すには、一度何もかもを消滅させなくてはいけないなんてことは。
とっくの昔に、気付いていたことだったんだ。
この世界で生まれるより以前に、分かっていた。
その前の世界でも、そのさらに前の世界でも、しかし抗おうとは思わなかった。
無駄だと分かっていたから。
抵抗したところで、結局運命は変えられない。
変わるものはきっと運命ですらない。
では、抗うことを覚えたのはいつからだったろうか？
思うに、それはきっと……。

屈することで開ける道もあるだろうか？
その問いに対する答えが、真吾の中ではまだ出ていない。
それでも握った拳からは、もう力がすっかり抜けていた。
言葉だけでは何も変えられない。
結果はいつだって、行動したあとについてくるものなのだから。
抗うことを忘れてしまおうか。
そんな言葉が頭を横切りかけた、その瞬間。

――二人の間を裂くようにして、闇夜の中心を紫電の雷光が駆け抜けた。

電影を思わせる粒子が雪のように舞い、青白い閃光の欠片が糸を引いている。
雷の矢が通り過ぎた地面の上は一直線に抉り取られ、小さな堀のように二人を分かつ。
真吾は振り返る。
そこに、ずっと立ち尽くしたままだったはずの三人分の人影があった。

その中の一人の少女が、矢を放ち終えた構えでこちらを見ていた。
言いたいことが山ほどあるような、不満と怒りを満載にした表情で。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９７：解放

雷鳴の残響が消える。
代わりに近づいてくるのは、三人分の足音。
夜の地面を踏みしめて、やってきた。
「らしくないんじゃないの？」
開口一番、唖然とした表情の真吾に飛鳥は告げた。
「え……」
その言葉に、真吾は一瞬だけ緊張を忘れる。
「ずいぶんと悩んでるみたいだけどさ、本当はもうとっくに、自分の中で答えは見つかってるんじゃないの？」
「そうでなくては、この場に立つことはできなかったでしょうに。全く、私達とは比べ物にならないほどの時を過ごしている割には、ここ一番の決断力には欠けるみたいですね」
畳み掛けるように氷室が言葉を続ける。
「いちいち相手の言葉に惑わされて、見てるこっちが危なっかしくて仕方ないわよ。揺らぐ程度の覚悟なんていらない。そんなもの、全部捨ててくるべきじゃない？」
「お前ら……」

「無理にきれいな輪郭をなぞろうとしなくてもいいと思うよ、真吾」
「……大和」
「真吾がした決断は、真吾自身が何度も悩んで、迷って、否定を繰り返した末に辿り着いたものでしょ？　だったら、それは他の誰にも否定できやしないよ。誰がなんと言おうと、自分で決めたっていうそれだけのことが、たった一つの真実になると思うから」
「……ああ、そうだな。お前らの言う通りだ」
静かに目を閉じ、真吾は呟く。

「……ちゃんとそう決めたはずだったんだけどな。どれだけ否定されても、自分の意思だけは最後の最後まで突き通してやるってよ。けど、いざこうして自分の分身と向き合ってみて思ったんだ。アイツだって、俺と同じように自分の意思を突き通しているから、こうしてこの場所に立っているんだなってさ。他人じゃないだけに、よく分かるんだ。もしも俺とアイツの立場が真逆だとしたら、やっぱり俺も同じようにしていたと思う」

「……僕達はさ、真吾達みたいに、特別な理由の上で生きているわけじゃない。何かの使命を受けて、それに従って生きているわけでもない。だから、全部を全部理解してあげることはできないと思うけれど、たった一つだけ、同じことがある」

「少なくとも私達は、今いるこの世界を身勝手一つで変えられることをよしとは思っていません。これがもし、何の抵抗も許されない星の下の運命だとしたら、諦めることもあったかもしれません。ですが、そうではない」

「今の私達には、抗うための力がある。それは決して望んで得たものではないけど、得た以上はいつかきっと使う場面がやってくるからだと思うの。そしてきっと、今がその時。まだ間に合う。何も終わってなんかいない。終わらせてなんかやらないんだから」

そして、全員の視線が動く。

その先で、闇を引き連れたそれは静かに佇んでいた。

「話し合いは終わったのかな？」

と、それはまるで待ちくたびれたと言わんばかりに口を開いた。

「悪いけど、こちらにもあまり時間的余裕があるわけじゃないのでね。手っ取り早く聞こう」

スゥと夜の空気を一口吸い込んで、闇は問うた。

「――君達は僕の敵か？　否か？」

答えは言葉では返ることはなかった。

その問いを聞いて一瞬の後、風が荒び、雷が瞬き、水が弾け、炎が吼えた。
地を蹴って夜の中を走る、四人分の人影。
示し合わせたわけでもなく、しかし四人は同時に叫んだ。
夜の大気が、自らの冷たさに今頃気付いて身震いするかのように、わずかに揺れる。

「「「「――お前を止める！」」」」

「交渉決裂、だね」
それさえも見透かしたように、闇は口元だけで薄く哂った。

「当たれぇっ！」
跳躍し、飛鳥は空中から何本もの矢を放つ。
放たれた矢は最初は一本。
が、加速する中で矢は二つに、そして三つに分かれて別々の方向からそれを射抜くべく襲い掛かる。
時間差で三本の矢がわずかにタイミングをずらしながら地面に突き刺さる。
しかし、そこに地面を抉る以外の手応えは感じられない。
土煙が舞う中、それは無傷のまま横合いへと身を逸らせていた。
そして置き去りにされたままの廃墟の壁を蹴ってさらに空中へと跳躍し、目には見えない何かをその手中に構え、飛鳥へと向かって突進していく。
「っ！」
飛鳥は迎撃のための矢を生み出し、急いで構えるが、落下中の体では動作が思うようにいかない。
その間にもそれは距離を縮めて迫る。
手の中に握られたそれは、まるで闇を凝縮させた塊のような不気味な球体。

少なくとも、触れればただで済むとは思えない。
「爆ぜろ」
ゾクリと、背筋が凍るような声色でそれは呟き、手のひらの中のそれを押し付けるように伸ばして……。
瞬間、両者の間に第三者が割り込んだ。
いや、それは第三者という言葉では表現できても、人間ではない。
竜巻のように渦を巻いた風の壁が、両者を裂くようにして巻き起こった。
「大和！」
地上を見下ろし、目下にいるその姿を確認して飛鳥は叫ぶ。
「飛鳥、今のうちに！」
「ありがとっ！」
「……風か」
どこか忌々しそうに、それは地上の大和に視線を向けた。
直接的な攻撃にはなっていないが、妨害としては申し分ない成果を発揮できたといえる。

その隙に飛鳥は地上へと着地し、その際の衝撃を最小限に留めて受け流す。
素早く弓矢を構え、今度は逆に空中で無防備になったその背中目掛けて、威力を重視した一撃を見舞う。
「行けっ！」
先ほどの矢よりも高速で放たれた矢は、遠くの空から見れば流星にすら見えたかもしれない。
音速と光速、その狭間の速度で向かう矢を、無防備な空中で回避できるはずがない。
だが。
「消えろ」
迎い来るその矢に自らの手を突き出し、そう一言。
そしてその言葉の通り、その手に触れたその瞬間には雷の矢が跡

形もなく消え去っていた。
「な……」
矢を放った飛鳥の表情が驚愕のものに変わる。
全くの予想外ではないとはいえ、まさか消滅させられるとは……。
「これなら……」
間髪入れず、地上の大和が追撃を試みる。
今し方生み出した竜巻に更に力を加え、風を刃と化してその矛先を向ける。
「どうだっ！」
目には捉えきれない無数の刃が、風切る音だけを響かせて宙を舞う。
カマイタチと言い換えれば少しは分かるだろうか。
襲い来る方向は一方からではなく、それを取り囲むかのように全方位から迫った。
しかしそれでも、それはまるで動じる様子も見せず、低い声でこう呟くのだ。
「消えろ」
そしてその通りになる。
あれだけ勢いよく吹き荒んでいた風が、まるで過ぎた台風のあとのようにピタリと止んでしまう。
「そんな……」
一度ならず二度目までも。
これはもはや偶然やまぐれで片付けられる出来事ではない。

「無駄なことを……」
それは呟く。
全てをその冷え切った目で見下ろして、哀れむように、蔑むように。
「還れ。闇の彼方に」
呟き、その両手に黒い球体が浮かぶ。

夜よりも黒く深く、どこまでも暗く遠く。
静かに鼓動を繰り返す闇が今、確かに牙をむいた。
標的となったのは大和だった。
空中に浮いたままのそれは狙い定めるように目下を見下ろし、そしてその両手に生んだ闇の塊を一つに合わせ、降下を始める。
「くっ……」
回避はできるだろうか？
いや、それはかなり難しい。
この距離でどの方向に逃げたところで、容易く追撃されてしまう。
ギリギリまでひきつけて回避すればそれも可能かもしれないが、万が一に掠ることも許されない一撃だ。
できないことを試すには分が悪すぎる。
「大和っ！」
「避けろっ！」
飛鳥と真吾が相次いで叫んだ。
が、それがどれだけ難しいことか、もちろん叫んだ二人も嫌というほどに理解していた。
そんなやり取りが一瞬に思えるように、直後にそれの手の中の球体が大和の体を消失させた。
胸元を中心に全身が抉り取られ……いや、吸い取られたかのように消え去り、一滴の血も流さずにその場から消滅した。
「……！」
かのように思えた。

直後に、それは真横からやってきた新たな攻撃に反応し、地を蹴って距離を取った。
そこには、生み出した三又の槍を突き出した氷室が立っていた。
そしてその背中には、五体満足の姿で大和が膝をついていた。
「ありがとう、氷室……」
「いえ、間に合ってよかった。かなりきわどかったですけどね」

そんな会話のやり取りを遠目で見て、それは今起きたことを瞬時に理解する。

「……なるほど。水蒸気の幻影とは、やられたね」

確かに消滅させたはずのそれは、氷室によって生み出された身代わり羊だった。

砂漠で見える幻の景色、蜃気楼と似たようなものだ。

「それにしても……」

確実に仕留めたと思った一撃だったからこそ、氷室は舌打ちをせざるをえない。

やはり自分だけ、まだ封印解放に至らずに真の力を得られていないことが、ここでは足枷となっているのかもしれない。

「……正直、厳しいですねこれは」

人数では四対一と有利なはずが、現実は劣勢を余儀なくされている。

相手はこちらの力をあっさりと無効化できる上に、文字通り必殺とも呼べる力をその身に宿している。

十が四つ集まっても百には遠く及ばないのと同じで、レベルそのものにまだ差がありすぎるのだ。

「さて。そんな小細工もどこまで続くのかな？」

言って、再びその両手に黒い球体を生み出す。

音もなく鼓動を繰り返すそれは、まさしく闇の慟哭。

触れるだけで全てを消滅させるそれには、どんな力も対抗する勢力には当てはまらない。

が、それでも打破することが不可能というわけではない。

「そういうセリフは、小細工全部防ぎきってから言うんだな」

「っ！」

いつの間に距離を詰めたのか、真吾が仕掛けていた。

炎をまとった無数の短剣を壁にして、それとは別の短剣を握って切りつける。

短剣を握った手が切りつけるたびに、飛び散った火花が夜の背景に蛍のように浮かんで消える。
休むことなく両手で繰り出される攻撃に、それが身にまとっている暗黒色の外套が徐々に切り裂かれていった。
「はぁっ！」
闇夜ごと一閃する斬撃。
そしてその一撃が、ついに確かな手ごたえを捉えた。
「ぐ……」
浅手ではあるが、確かに短剣はそれの肩口を切り裂いた。
いくら神の化身であるとはいえ、この世界で存在するために与えられたその体はあくまで人間と同じものだ。
鋼のような強度を誇るわけでもなければ、痛みを感じないわけでもない。
「っ……」
肩口を抑え、それの表情がわずかに苦痛に走る。
切り裂いた肩口からはわずかだが出血が見られ、抑える手もしだいに血の色に濡れていく。
「いくらお前でも、手負いで俺達四人相手じゃ分が悪いだろ」
「……確かに。だが、こちらの不利がそのままそちらの有利に変わると思ったら大間違いだ」
「何だと？」
そう言って、それは傷口にあてがった手をそっと放した。
てのひらはすっかり血の色にまみれ、その赤さは夜の闇の中でも映えるほどだった。
「遊びはここまでにしよう」
そう告げた口は、今はもう咽ってはいない。
本能的な危険を感じ、真吾はわずかにあとずさる。
何かが起ころうとしている。
今、この瞬間、目の前で。

「お前、何を……」
「正直、予定外だったよ。しかし、考えてみれば当たり前のことだったのかもしれないね。予定とはつまり未定。狂うことまで含めて、予定と呼ぶのだろう」
闇の密度が一段と濃くなった。
体中がざわつく。
確かな恐怖が、目の前にある。
「――解放」
闇は言った。
己の内にある、真の闇を解き放った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９８：消え行く命の灯を

それは風だっただろうか。
いや、少なくとも僕の中にあるイメージとしての風ではない。
では、嵐か？
それも違うだろう。
そもそもそれは、風ではなく、闇だ。
全てを呑み込むという、宇宙にあるブラックホールのような。
「……何よ、これ」
乾いた声で飛鳥が言う。
足が動かない。
竦んでしまったのだろうか？
それとはどこか違う。
影が地面に縫い合わされてしまったような感覚。
震えたくても震えられない。
確実な恐怖を、こんなにも近くに感じているのに。
「……こんな……まさか、これほどまでとは……」
氷室の声もどこか苦しい様子を思わせる。
僕達はまだ何もされてはいない。
ただ僕達の目の前に、渦を巻くようにして蠢く凝縮した闇の塊が現れただけ。
現れただけで、この威圧感。
呼吸さえ忘れて、その姿から目が離せなくなる。
「……っ」
声が、出ない。
本能は告げる。
逃げろ。
体が動かない。
再度告げる。

逃げろ。

――死ぬぞ？

「っ！　皆っ！」

途端に金縛りが解けたように、僕の体は自由を取り戻した。

その様子を、蠢く闇はまるで見逃しているかのように視界の端で捉え、薄気味悪く哂っていた。

ケタケタ、ケタケタ。

擬音で表すとすればそんな声だろう。

ゆっくりと、本当にゆっくりと闇が動き始める。

形を変え、歪に蠢く。

もともと原型そのものはないとはいえ、これは常軌を逸している。

何かが来る。

絶対に巻き込まれてはいけない何かが、近づいている。

「逃げろっ！」

続けざまに僕は叫んだ。

まるでその言葉を合図に待っていたかのように、闇が闇を吐き出した。

それの言葉を鍵として、力の片鱗が矛先を向く。

「――喰らえ、悪食の牢獄」

闇が、闇を生んだ。

剣でも銃でも、もはや武器でも凶器でもない。

純粋な恐怖の思念が、襲い掛かる。

誰もがすでに走り出している。

それを追う闇。

無限に伸びる、その今にも腐り落ちてしまいそうな腐蝕の腕で、生けるものを握り潰すかのように。

地を這うその腕が、草を、土を、石を、無尽蔵に呑み込んでいく。
その様は、まるで大地震のあとに襲ってくる津波のよう。
呑み込まれればそれが最後、跡形も残さずに消し飛ばしてしまうだろう。
全力で走りながら、見える範囲で僕は皆の様子を覗った。
氷室と真吾は無事に攻撃の手から逃れ、地面の上に転がっている姿が見えた。
飛鳥は……よし、何とか大丈夫そうだ。
あとは僕自身が振り切れば、それで……。
そう、少しだけでも安心したのが間違いだったのだろう。

「……な」
気付けば、僕の頭上にはすでに五指では足りぬくらいに手を広げた闇が迫っていた。
その事態に、一瞬だけ足が止まりかける。
構わずに駆け抜けてしまえば、あるいは振り切れたかもしれない。
が、もう遅い。
掴まれる。
その黒き腕に。
奪われる。
何もかもを。
消えて、なくなる。
「「「大和っ！」」」
三人分の叫びが、どこか遠い世界からの声に聞こえた。
間に合え。
そう願って、最後の力を振り絞るつもりで地面を蹴り、地面に抱きつくように体を捨てた。
目の前に土色の地面が迫る。
あとはどこまで転がってでも逃げ切らなくてはならない。
体が衝撃を感じたら、すぐさま体を転がせ。

本能に命令する。
一秒がやけに長い。
体はすでに倒れこみ、目と鼻の先には冷たい夜の地面が待ち受けて……いた。
そう、ほんの一瞬前までは。
「……っ！」
そこに。
待ち構えたように、闇の欠片が出迎えた。
ドロリと溶けて、形が崩れる。
グニャリと蠢き、形を成す。
見たのは、鋭い漆黒の刃。
真っ直ぐに、僕の胸に狙いを定めている。
避ける？
これを？
……無理だ。
舌打ちさえ間に合うことはなく、一瞬の沈黙が途切れた頃。
――静かに、そして不気味に、闇の剣が僕の胸を貫いた。
「……」
悲鳴はなかった、と思う。
それどころか、痛みらしい痛みさえ感じることはなかった。
ただ、うまく言葉にできない気持ち悪さだけは残っている。
グサリともズブリとも、胸を貫く刃は音を立てなかった。
なのに……。
なのに、どうしてだろう。
「……あ、う……」
穴の開いた胸からは、温かく赤い血が、とめどなく流れている。
口の端からも血が伝い、すでに広がりつつある足元の血溜まりにその雫が落ち、音と共に波紋を広げていた。

直後に、僕の体は重力にひきずられて崩れ落ちた。
ぬるりとした何かが胸の中から抜けて、気持ち悪さが消える。
「……」
地面に横たわる。
声が出ない。
体が寒い。
確実に体力が失われていく。

「大和っ！」
飛鳥の叫ぶ声が聞こえて、それに続くようにして三人分の足音が近づいてきた。
「大和、しっかりしなさい！」
氷室の声で怒鳴られて、上半身を抱き起こされた。
「っ……」
が、そこで言葉が途絶える。
飛鳥は両手で口元や頬を押さえ、目の前の光景を信じられないような表情をしていた。
傷口そのものは大きいものではないし、そういう意味でも気持ち悪さは感じてはいないだろう。
だから、飛鳥が怯えているのはそのおびただしい出血の量。
一体人間の体のどこにこれだけの血液が蓄えてあるのかというくらい、今の僕はひどい出血をしていた。
「ぐっ、出血がひどすぎる。このままでは……！」
その先に続く言葉を、誰もが瞬時に理解した。
「……何とか、何とかならないの？　このままじゃ大和が……」
「くそっ！　俺達じゃ治療系の能力が足りなすぎる！」
言葉ばかりが飛び交って、時間も共に過ぎていく。
ただ、流れ出す血液だけがその勢いを止めず、刻一刻と僕の体を確実な死に向けて運んでいく。
目が霞む。

意識はすでに朦朧として、三人の言葉を聞き分けるだけでも精一杯だった。

……死、ぬ？

僕は……死ぬのか？

……嫌、だ。

……死に、たく……ない……っ！

「無駄だよ」

と、そんな祈りさえも容易く打ち破ってその声は響いた。

「その出血量じゃ、もう助からない。仮に止血できたとしても助かりはしない。なぜなら、彼の心臓はもう消滅したから」

「……何、だと？」

「悪食の牢獄によって喰われたあらゆるものは、万物における還元の過程を無視して消滅へと至る。例外なく、ね」

背中に蠢く闇を飼いならし、それは言った。

「……全く、本当に予定外だった。まぁいいさ。これで残りの封印はあと一つ。能力者が一人くらい消えたところで、後に大した影響はないだろうしね」

言うと、それは石碑に手をかざし、間もなくして赤い文字が浮かび、一瞬の後に星も月もない夜空に音もなく消えた。

「さて。じゃあ僕は失礼するよ。最後の封印も、すぐに開放されるだろう。ねぇ、水使い？」

小さく哂い、それは夜の中に溶けるように消えた。

氷室も、飛鳥も、真吾も、誰もその背中を追おうとは思えなかった。

目の前で、一つの命がもうすぐ終わろうとしていることを知っていたから。

「どうすれば……どうすればいいのよっ！」

無力さに怒り、飛鳥は膝を折って地面を叩いた。

誰も、それ以上何も言えなかった。

静かに、そして確かに命を失っていく瞬間を見届けるしか、なかった……。

……はずだった。

ふいに輝き始めた、その『Ｒｉｎｇ』に気付くまでは。

「……」

何かに気付いたように、かりんは目を覚ました。

「……何。これは……」

「どうしたんだ、かりん？」

目を覚ましたかりんの言葉を聞き、枕元に置かれたクロウサが声をかける。

「何だ、まだ真夜中じゃないか。早起きにすらならないぞ、こんな時間じゃ……」

「……」

「って、どうしたんだかりん？　気分でも悪いのか？」

クロウサが声をかけても、かりんはどこか上の空といった感じで虚空を見つめている。

「……消えていく。誰かの命が。なくなっていく」

「……かりん、何を言って……」

「……どこか。悲しい。けど。どこか。懐かしい。覚えてる。前にも。どこかで……」

独り言を繰り返す中、そしてかりんはふと気付く。

何かが消えてなくなるとき。

それは、とても悲しい音がする。

かりんは過去に一度だけ、その音を目の前で聞いてしまったことがある。

最愛の兄、春彦がその命を失ってしまったその瞬間のことだ。

それと同じ感覚が、今も流れている。

けど、春彦はもういない。
同じ音は聞こえないはずだ。
じゃあ、この音は、一体誰の……。
「……っ！　まさか……」
気付き、体より先に心がざわめいた。
「うわっ！」
強引にクロウサを抱きかかえ、かりんは部屋を飛び出した。
「お、おいかりん、何なんだ？　どうしたっていうんだよ？」
クロウサの言葉にもかりんは答えない。
ただ、全速力で走り続ける。
夜の暗さも冷たさも、今感じた悲しさに比べたら気にもならない。
真っ白な息を吐き出す。
苦しい、酸素が足りない。
それでも急げ。
自分に言い聞かせ、夜の中を走る。
「……っ。大和。大和っ……」
その人の名を呼び続けながら。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９９：別離の刻

……死にたくない。
そんな思いとは裏腹に、体中のいたるところから力が抜け落ちていく。
もう、指先を震わすことも、唇を揺らすことも、まぶたを閉じることさえもできない。
呼吸を繰り返しているかすら怪しい。
もうダメなのだと、頭ではとっくに理解していた。
生命の鼓動を示す大事な器官が、すでにこの体にはないのだから。
助かるわけがない。
足掻くだけムダだ。
ならばいっそのこと、もうこの目を閉じてしまえばいい。
何も難しいことはないさ。

「……」
分かってた。
そんなことは分かってたんだ。
けれど、目を閉じることができない。
完全に聞こえなくなっているはずの耳が、はるか遠くからの声をかろうじて捉えていたから。
いや、それはきっと遠くなんかじゃない。
触れるくらいに近い場所で、しかも大声で叫ばれているような声なのだろう。
よく、知っている声だ。
一緒にいた時間はごく最近からでしかないけれど、ずいぶんと昔から言葉を交わしていたような気がする。
その声の主達が、今も叫んでいる。

しっかりしろと、目を開けろと。
ちゃんと聞こえている。
でも……ごめん。
本当にもう、体が動かないんだ。
声も出ないんだ。
だから、その言葉に対してどう答えることも僕にはできない。
できない、けど……。
それでも、僕は……まだ、死にたくなんかない……！

その言葉が、あるいは祈りか願いか。
通じたのかどうかは定かではない。
が、そう思った次の瞬間、全ての機能を停止寸前に追い込まれているはずのこの体に、一つの熱を感じた。
暖かさとも、温もりとも言い換えてもいい。
とにかく、あったかかった。
まるで誰かに守られているような……。

「――主よ、聞こえますか？」

その声は、確かに僕を呼んでいた。
知っている。
その声の主を、知っている。
僕が所持する『Ｒｉｎｇ』の中に封じられていた、遠い過去の世界の意思。
「……シ、ルフィ……」
かろうじて声が出た。
けどそれは、きっと誰の耳にも届くことのないような声だろう。
だからそれはきっと、僕が僕の中に吐いた言葉。
他でもない、自分の中にいるもう一人に向けた言葉。

「よかった、まだ意識が残っていたのですね」
「……シルフィア。どうして……」
「あなたを救うためです。あなたにはまだ、やらねばならないことがある。そのためにも、ここで死なせはしません」
「……ありがとう。でも、無理だよ。僕の体はもう、とっくに限界だ。分かるだろ？」
「それでも、私はあなたを死なせない。死なせるわけにはいかない」
「だけど、どうやったって……」
生物の生死を自由にどうこうするなんて、できっこない。
特に、死んだものを甦らせるなんてことは、この先どれだけの科学技術が発達したところできっと不可能だろう。
……もしも。
もしも、そんな奇跡めいたことが自由自在にできるものがいるとしたら、それはまさしく神以外に他ならない。
けど、それでも無理だ。
なぜならこの世界は、神の分身の手によって消滅させられようとしているのだから。
そんな見放されたここに、どんな希望を持てばいい？
どんな奇跡を待てばいい？
「……主よ、今から私が言うことを、よく聞いてください」
「……え？」
「これより、私の命をあなたに捧げます」
「な……」
一瞬、理解することに時間がかかった。
命を捧げる？
何を、言って……
「シルフィア、何を……」
言葉を返そうとしたが、向き合うその目は真剣な眼差しだった。
とてもこの場しのぎや慰め、冗談の類のようには思えなかった。
「……私も一応、神に最も近い存在である精霊の力、その片鱗を授

かった存在ですから。全能力を駆使すれば、不可能ではないはずです」

「けど、それじゃ……」

仮にそんなことができたとして、当のシルフィア本人は一体どうなってしまうのだろう？

いや、聞くまでもなく答えは出ていた。

ただ、それを口にすることが恐ろしかっただけで。

「そんなことをしたら、シルフィアは……」

「……ええ、消滅します」

ためらいなく、シルフィアは告げた。

「っ、そんなの……」

「ダメだと？　まぁ、あなたならきっとそう言うと思っていました。ですが、これ以外に主を蘇生させる方法はありません」

「そうかも、しれないけど……」

その選択を容易に選ぶことは、僕にはできなかった。

他人の命を貰い受けることなんて、そう易々と受け入れられるわけがないじゃないか。

ドナーによる臓器提供の話じゃないんだ。

命そのものを、別のものに移し変える。

はいそうですかで終わらせられるわけがない。

「……時間がありません。さすがにもうこれ以上は、主に肉体そのものが維持できないでしょう。完全に機能が停止してしまってからでは、手遅れになってしまいます」

「……できないよ、そんなの。いくらなんでも、自分がが生き延びる代わりに君を犠牲にすることは、僕には……っ！」

「……主に言いたいことは分かります。こんな不確定存在である私にまで、そのような感情を抱いてくれたことも素直に嬉しく思います。ですが……お願いです。もうこれ以上、私を困らせないでください……」

「……シルフィア」
「気にしないでください。元々私は、偶発的に生まれた存在なのですから。その証拠に、主と同じ他の能力者の『Ｒｉｎｇ』に、似たような存在は確認できなかった。それでも私は、こうして生まれた自分を奇跡だと信じたい。そのおかげで私は、過去に受けたものと同じ傷痕が刻まれようとしているこの世界を。無理矢理な運命の上で弄ばれているだけの、だけどそれを受け入れ、正しい方向に導こうと行動することができる人に……あなたに出会うことができた。かつて私も同じように悩んだ道。私は道を選ぶことさえできず、その場で倒れた。でも、あなたは違う。今からでも遅くない。変えてください、運命を。打ち砕いてください、現実を。掴み取ってください、未来を。あなたには、そうできるだけの力がある。そしてそうできるだけの、仲間がいるはずです」
「……」
「私の意思が消えても、『Ｒｉｎｇ』の力は消えることはありません。私は消える代わりに、私の力を置いていきます。どうかそれを、正しい方向に使ってください。間違えてもいい。最後にあなたが立つその大地が、誰もが当たり前だと思えるものであるのならば……」
「……シルフィア、僕は……」
「……これからあなたは、何度も壁に突き当たるでしょう。全てを正面から壊して進めとは言いません。回り道をしてもいい。時には立ち止まり、逃げ出したいと思ってもいい。ただ、後悔だけはしてほしくない」
「……うん」
「色々と偉そうに話しましたが、そろそろ本当に時間切れです」
そう言うと、シルフィアは少しだけ悲しげに、しかし柔らかく微笑んだ。
「――さようなら、大和。どうかこの世界で、あなたは自分の現実を掴み取ってください。私はいつも、すぐ傍にいますから……」

シルフィアの体が、淡い光を放ち始める。
体が少しずつ光に溶け、まるで雪のように舞い始めた。
その欠片が一つ、また一つと、横たわる僕の体に降り積もる。
落ちて、消えて、僕の中に溶けていく。
一つ一つがすごく暖かくて、優しかった。
止まったはずの鼓動が、そっと動き始めていた。
指先が動く。
そっとてのひらを上に向けると、光の雪がゆらりと落ちた。
それをギュッと握り締めて、消え往くその横顔に向けて、僕は言った。

「――さようなら、シルフィア。僕は……僕は必ず、この世界を……」

最後の言葉を全て聞き終える前に、シルフィアの体は光の粒子へと変わった。
ただ、その横顔が。
最後の瞬間、優しく微笑んでこっちを振り返ってくれていたその景色を、僕はきっと忘れることはないだろう。
世界が白に包まれていく。
目もくらむような眩い光の中で、僕は誰かの腕に抱かれているような気がした。
やがて光が全てを埋め尽くし、僕の意識はそこで途絶えた。

「……大和？」
目が覚めて最初に聞こえたのは、なぜかかりんの声だった。
僕は冷たい地面の上に仰向けに横たわり、真っ暗な夜空をぼんや

りと眺めていた。
「……あ、れ？　かりん……？」
「……大和？　嘘、だって、だって……」
どこか慌てた様子の飛鳥の声。
次に、僕の胸に誰かの手が触れる感覚。
視線を移すと、それが氷室の手だと分かった。
「……心臓が、動いています。これは一体……」
「……本当に、大和なのか？」
驚きを隠せないその声は、横で立つ真吾のものだった。
「ねぇ、平気なの？」
耳元で飛鳥が聞く。
「ん……多分、大丈夫。まだちょっと、思うように体が動かないけど……」
起き上がろうとして、思ったとおり僕の体は右に左にふらついた。
当たり前だけど、僕の服は血まみれだった。
寝ていた地面の土にも、まだ乾いてない血溜まりが広がっている。
傷口である胸に触れてみると、すでに痛みは完全に引いていた。
が、傷口自体はまだ完全に塞がってるわけではないようだ。
「大和、一体何があったんです？　いくらあなたの力でも、この傷を自力で治癒することは無理なはずです。いえ、それどころか、さっきまでのあなたでは、そもそもそんな力は残されていなかったはずだ」
「……うん。僕も正直、もうダメだって思ったよ。でも、助けてくれたんだ彼女が……」
「彼女？」
「……」
不思議そうな目を向ける氷室をよそに、僕はもう一度夜空を見上げた。
月も星も出ていない、真っ暗な夜。
ありがとう、と。

改めて、どこかにいるであろう人に呟いた。

「よくは分からないが、とりあえずはここを離れたほうがいいんじゃねぇか？」

真吾が言った。

「もしもアイツがこのことに気付いたら、もう一度俺らを殺しに来るぜ。アイツももう手段を選びはしないだろう」

「……そうですね。詳しいことは、まずこの場を離れてからにしましょうか」

誰もが事情を飲み込めていなかったが、まずはこの場を離れることに合意する。

「車に戻りましょう。話は中で」

僕は氷室と真吾の肩を借りて立ち上がる。

「あ……」

と、今更に僕は思い出す。

「……かりん」

「……」

その呼びかけに、かりんは答えなかった。

腕の中にいるクロウサも、何も言うことはなかった。

「……私も行く」

と、ふいにかりんが呟いた。

「……確かめたい。ことがある」

「……構いませんよ。少なくとも、今のあなたから敵意は感じませんしね」

氷室はその申し出を承諾。

僕達は揃って、氷室の車へと歩く。

長い夜は、まだ続く。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１００：操り人形達の談義

こんな夜中じゃ営業している店も限られている。
なので、結局僕達は氷室の事務所へと集まる形になった。
とはいえ、真夜中に事務所の明かりがついているのもそれはそれで目立つので、以前使った地下の区域に僕達は身を潜めることにした。
高校のグラウンドほどはあろうかというその空間に、計五人が集う。
「とりあえず、ここならしばらくは安全でしょう。絶対の保障はできませんが」
「……一体どうなってんだ、あんたの周囲は。事務所の地下にこんな場所を確保してるなんて」
「今はそんなことどうだっていいじゃない。それよりも……」
疑問を口にした真吾を、飛鳥があっさりと切り捨てる。
「大和、体の方はどうですか？」
「……うん、大分楽になったみたい。とりあえず、今は痛みはもう感じないよ」
僕がそう答えると、誰からともなく安堵の溜め息が漏れる。
まとわりついていた緊迫感のようなものが、ようやく少しだけ薄れてきた感じだ。
僕は自分の手で、そっと自分の胸の辺りに手を置く。
傷痕もすっかり塞がって、ついさっきまで穴が開いていたとは思えないほどだった。
それに何より、しっかりと自分の心臓の鼓動が手を伝って感じ取ることができた。
生きている。
そう確信すると共に、そこにある命をくれたシルフィアに、もう

一度胸の中でありがとうと呟いた。
指の中の『Ｒｉｎｇ』は、もう以前のように語りかけてくることはない。
そこにあった魂は、還るべき場所に還ったのだろうか？
分からないとは知りつつも、僕はふとそんなことを考える。

「それで」
と、話を区切るように真吾が言う。
「これからどうするつもりだ？」
その言葉に、まずは一同沈黙。
誰しもがどうするべきかを考えるべく、わずかな間が流れる。
「……今のままでは、何度挑んだところで同じ結果しか得られないでしょうね」
まず氷室が答える。
「目で見ただけでも十分に理解できました。私達ではあれに勝つことなど到底叶わない。それどころか、対等の条件で向き合うことさえ不可能に近いでしょう。力のレベル、次元そのものがあまりに違いすぎる。仮に数に任せて挑んだところで、結果は変わらないでしょうね」
淡々としたその答えに、しかし誰も口を挟むことはない。
誰もが痛感しているから、それも当たり前のことだった。
そしてこの中で唯一、直にその攻撃の矛先を受けた僕が、誰よりもその差を実感しているのだから。
「……大和」
「ん、何？」
氷室の呼びかけに僕は顔を上げる。
「こんなことを聞くのは空気が読めていないと思われるかもしれませんが……実際、あれと対峙してどうでしたか？　面と向かってみて、どういう印象を受けましたか？」
「……ちょっと氷室、大和はついさっき殺されかけたのに……」

「分かっています。ですが、実際に攻撃を受けたのは大和だけだ。今は少しでも情報がほしいんです。どんなわずかなことでも、些細なことであったとしても、もしかしたらそれが意外な糸口になるのかもしれないのですから」

「それは、そうかもしれないけど……」

「……いいよ、僕は大丈夫。とりあえずは、こうして生きているしね」

「……どうですか、大和？」

氷室の問いに少しだけ間を置いて、僕ははっきりと答える。

「……正直、何もできなかった。実際に目を見たわけでも、言葉で圧力をかけられたわけでもない。あの腕みたいに伸びた闇のほんの一部に触れられそうになっただけで、今まで感じたことがないくらいの寒気がした。冷たいとか、そういんじゃなくて、もっとこう……本能的な恐怖感を感じた。胸を貫かれたときも、痛みなんてまるで感じなかった。貫くっていうよりは、隙間を通り抜けたっていうような、そんな感じ……」

曖昧な言葉しか並べられないけど、これが僕が素直に受けた印象だ。

もはやあれは、力の強弱ですらくくることができないものだ。

言葉どおりに、触れたものを全て消滅させるという、それだけを忠実に実行する兵器と言ってもいい。

本体から離れた箇所までも、意思一つで遠隔操作できるような。

「……私も似たような感覚を覚えました。とにかくあの力は、仮に『Ｒｉｎｇ』によってもたらされたものだとしても群を抜いている。まともな方法じゃ、本体であるあれに触れることはおろか、近づくことさえできやしません」

つまり、お手上げだ。

遠回しでなくても、一度その目であの光景を見てしまえば誰もがそう思う。

「加えて、あれは七つ目の封印まで開放してしまった。本来ならそれは真吾に該当したものだったはずですが……どうなんです？　こういう場合、開放によって得られるはずの力はどっちに受け継がれるんですか？」

「……どうだろうな。まさか俺も、法則無視してこんなことになるなんて考えても見なかった。だが、実際今の俺には前以上の力があるとは思えないし、そんな感じも受けていない。法則を無視したんだから、開放された力は霧散してしまったと考えたいところだが……」

その先を言わずとも、誰もが続く言葉を理解できた。

もしも開放による力が、適合を無視して開放した者に宿るとすれば、あれはさらに力を増幅させたということになる。

ただでさえ縮まらないほどの差が、また一歩広がってしまったことになるのだ。

この場にいる誰もがそれを知っている。

だから、何も言葉が出てこない。

気休め程度の言葉をいくら積み上げたところで、歴然とした差はこれっぽっちも縮まりやしない。

どうにかしなくちゃいけないと思うほど、坩堝にはまって身動きが取れなくなる。

かといって、時間が全てを解決するなんて、そんな戯言に頼ってしまっては本末転倒だ。

結局何も変わりはしない。

けれど、確実に世界は変わろうと……終わることで変わろうとしている。

組み間違えたパズルを正しく組み直すには、一度全てを壊してから出なくては意味がない。

その理屈自体は、決して間違っていることじゃない。

途中で迷って、最初からやり直すことで成功を収めることはいく

らでもあるからだ。
ただそれは、あくまでもその過程で力と時間を費やすのが当人一人だけであればという話であって。
そう望まない存在を巻き込むことがあるのならば、それはただの独裁にしかなりえない。
「……どうなるんだろ、これから……」
小さく飛鳥が呟く。
「……」
誰も、何も言い返すことはできない。
そんな中で、僕はふと気付く。
「……かりん？」
さっきからずっと黙ったまま、下を俯いているその姿に目が向いた。
気のせいか、体は小刻みに震え、表情も苦しそうに見える。
地下だから、気温が低いのは仕方がない。
それを差し引いても、かりんの様子はどこかおかしかった。
それは寒さに打ち震えているというよりは、恐怖に怯えて身を竦ませているようにしか見えない。
ただ、震える両腕で強く強く、クロウサを抱きしめていた。
「……どう、して……」
と、震えた小声でかりんは呟いた。
その声に、誰もが視線を移す。
「……こんな。こんなはずじゃ……なかった……」
その言葉が意味するところが何なのか。
このときはまだ、誰も知る由はない。
「……こんなはずって……どういうこと？」
飛鳥が聞き返す。
小さな体をさらに縮ませ、震えを堪えてかりんは静かに答える。
「……誰も。誰も傷付かずに。全て終わるはずだった。戦争という

のも。表面上の建前。ありえない力が複数あって。それを一つに束ねるとすれば。自然とお互いを。敵対視しなくてはならなくなるから」

その理屈は間違っていない。

かりんはさらに続ける。

「……戦うことになれば。更なる力を求めることも。不思議ではない。封印の開放は。あくまでもそのために。後付されたルール」

「後付ですって？」

その言葉に氷室が反応を示す。

「ということは、最初は封印開放というシステムさえ、用意されていなかったということですか？」

かりんは無言のまま、静かに首を縦に振った。

その場にいる全員が息を呑んだ。

驚愕の事実であると同時に、頭の中が混乱をし始める。

「ちょ、ちょっと待って。それが本当だとしたら、最初はそもそも封印なんてものがなかったってことでしょ？　でも私達は実際に、いくつもの封印を解いて、その結果として力を強めてきてる。それをどう説明するの？」

「それだけじゃない。仮に後付できたとして、その必要性は何だ？後付したってことは、何かしらの計画を進めていく上で何らかの支障が出て、それを不自然じゃない形で改善する手段としてやむをえず用いたってことだ。そのぶつかった障害とやらが何であるかってことだ」

飛鳥の言葉に続き、真吾が意見を口にする。

そしてまた、全員の視線がかりんに移る。

「……もともと。封印と呼べるものは。一つだった。けれど。その封印に用いられた力は。あまりにも強力なもの。彼の力を持ってしても。開放に至ることはできなかった。だから彼は。封印を分割することを考え付いた」

「封印の……」

「分割……？」
　また一つ頷き、かりんは続ける。
「……一ヶ所に留まった。封印の力を。いくつかに分割し。別々に一つずつ。開放することで。遠回りではあるけれど。確実に。開放に至ることができる。封印の数が。八つだったことは。ただの偶然に過ぎない」
「……なるほど。一応の筋は通ってます。百の力に五十で挑んでも敵いやしませんが、百を十の十に分けてしまい、それを一つずつ潰していけば、いつかは百に至る……」
「……封印が八つに分離して。あとは確固を開放していけば。それでいいはずだった。けれど。彼はその開放に。力の大半を費やしたから。個々の封印を開放する力すら。残らなかった。だから。偶然この地に眠っていた。古代の遺産をうまく使って。自分以外に。八人の能力
者を生み出すことにした」
「それが、僕達ってこと……？」
「……八つの封印の。一つが開放されるたびに。費やした彼の力の一部も、比例して彼に戻っていく。八つの封印全てを。開放すれば。彼は元通りの力を手にする」
「……それってつまり、能力者全員がアイツの手駒ってこと？」
「……どう聞いてもそうとしか聞こえないな」
「……そうして全てが。順調に進めば。全ては静かに。幕を下ろすはずだった。ただ一つの。例外がなければ……」
「例外？」
「……なるほど。真吾の存在ですね？」
　言われ、かりんは真吾に視線を向ける。
「……彼にとっても。まさか自分の分身が。選ばれるとは思っていなかった。選ばれれば。お互いに気付かされる。何が起こっているか。起こそうとしているか。だからあなたは。いち早く動けたはず」

「……ああ、その通りだ」
少しずつだけど、見えない部分が見えてきた。
最初から全ては仕組まれていたということ。
本来なら、こんな『Ｒｉｎｇ』などというシステムはなかったということ。
そして。
開放のたびに、あれは力を取り戻すということ。
それはつまり。
今でさえ、あの力は不完全なものであって。
残された封印は、もうあと一つしか残されていなくて。
後にも先にも動けないような、そんな状況にいつの間にか立たされていることを、実感せざるを得なかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０１：断裁の日常

「……で、結局これからどうする？」
一度は降りた沈黙を破り、真吾が口を開く。
「そうですね……何にしても、残された封印はあと一つだけ。こちらから開放することは、むざむざ相手の思惑通りに動くことにもなりますが……」
「逆に言えば、恰好のエサにもなる。そういうことでしょ？」
氷室の言葉を飛鳥が継ぐ。
「その通りです。あれは、全ての開放に相当執着している。すでに私達なんて目ではないだけの強大な力を手に入れているにもかかわらず、です。それはつまり、どうあっても全ての力を取り戻す必要があるということでしょう。理由は分かりませんけどね」
「かといって、バカ正直に開放しちまえばそれこそ水の泡だしな。どうにかして向こうを出し抜いたりでもしないと、どうにもならない」
真正面から渡り合ったところで、多対一でも勝ちの目がないのは明白だった。
残された封印を開放し、氷室が更なる力を手にし、その結果としての総力を以ってして挑んだところでも、だ。
「……時間がないわけではないですが、余裕があるわけでもありませんしね。どちらにせよ、決断を急ぐ必要がありそうです」
「……なんとかならないのかな。こんなの、あんまりじゃない……」
「……」
表情が沈む。
迫られた選択肢は二つ。
そのどちらもが、希望に繋がる線にしてはあまりに細く、脆すぎた。

「……傷は平気？」
「ん？　ああ、うん。もう大丈夫だよ」
三人がまだ地下で話をしているとき、僕はかりんと事務所のソファーに隣り合って座っていた。
会話らしい会話はほとんどない。
僕が問い、かりんが答えるか、かりんが問い、僕が答えることの繰り返し。
腕の中に抱かれたクロウサも、いつものような軽い調子で声を発することはなく、大人しく抱かれているだけだった。
「……」
「……」
互いにかける言葉は多く持ち合わせていない。
少し手を伸ばせば触れられるくらいの距離なのに、その距離が途方もなく遠くに感じる。
僕は横目でそっとかりんの様子を覗う。
不安の色に満ちたその双眸は、わずかに揺らぎながらここではないどこか遠くを見据えていた。
その小さな体が、今もなお小刻みに震えている。
寒さか、それとも恐怖か。
真意は分からなかったけど、僕は自然と上着を脱ぎ、それをかりんの背中にかぶせていた。
「風邪、引くといけないから」
「……」
答えず、かりんは小さく頷いてそれを受け入れた。
と、そのときになって僕は気付いた。
かりんがクロウサを抱きかかえるその両手の片方に、白い包帯の姿が見て取れた。
「かりん、どうしたの？　その手」
「……あ」

指摘すると、罰が悪そうにかりんはその手を引っ込めてしまう。
悪いことを聞いてしまっただろうかと、僕は少し後悔する。
「ごめん、聞かない方がよかった？」
「……」
答えず、今度は首を横に振って否定する。
「……少し。擦り剥いただけ。今はもう。ほとんど治りかけ」
「……そっか」
そしてまた沈黙。
互いに膝を抱え、ぼんやりと視線を彷徨わせる。

「……これから。どうするの？」
と、ふいにかりんが聞いた。
「……分からない。けど、アイツを止めなくちゃ。このままじゃ本当に、僕達が今いるこの世界が消えてなくなってしまうから」
「……大和は」
「ん？」
「……大和は。今のこの世界が。好きなの？」
「どう、かな。好きとか嫌いとか、そういう言い方だとうまく言えないけど……消えてほしくはないと思ってる。それに、僕だってまだ死にたくないから」
「……死んでしまうことは。怖い？」
「……怖いよ。多分、僕だけじゃなく皆そうだと思う。飛鳥も氷室も、死に急いでた真吾だって、本当は死ぬことは他のどんなことよりも怖くて仕方ないんだと思う。それでも、表面上だけは言葉や態度で虚勢を張って、必死に無理してるんだと思う」
「……」
「逆に僕は、そういうことができないからさ。例えば僕が明日死んでしまうとして、それはもう逃れられない運命で、諦めて死を受け入れることしか選択肢に残されていないとしたら、多分僕は、素直にそれを受け入れてしまうと思う」

「……え？」

「矛盾してるだろ？　自分でも、よく分からないんだ。面と向かってそう言われたら、普通は何言ってるんだろうって笑い飛ばすはずなのにさ。死にたくないのに、死ぬんだと言われたらそれを鵜呑みにしてしまいそうで……」

「……じゃあどうして。今は目の前の運命を。素直に受け入れず。抗おうとするの？」

「……どうしてだろう。やっぱり、よく分からない。でも多分……いや、もしかしたら、だけど」

「……」

「僕自身が行動することで、まだ何かが変わる可能性が少しでも残っているから、かもしれない。もちろん、どうやっても動かないからこそ、運命っていうのかもしれないけど」

「……その途中で。大和自身が。命を失ってしまうかもしれないのに？」

「うん。だから、やっぱり怖いことは怖いんだよ。死にたくないって思う。でも、何もしないまま終わりを迎えて、終わってから実はあのときこうしていれば何かが変わったんじゃないかって後悔するのは、もっと嫌だから」

「……一つ。聞かせて」

「……何？」

「……もしも。もしも変えられるとしたら。どうする？」

「……え？」

「……最後の最後。ほんの少しの。ささやかな抵抗で。目の前にあるこの運命を。打ち砕くことができるとしたら……」

「……」

「……大和。あなたはそれを……望む？」

「……うん。望むよ」

僕ははっきりと答える。

そのためにこうして、今までできうることをしてきたのだから。
「……分かった」
かりんは答え、立ち上がる。
「……私も。できることを。やってみる。だから。お願いがあるの」
「お願い？」
かりんは頷く。
「……もしものときは。きっと私が何とかするから。だから。そのときは……」
一瞬の間。
やがてかりんは俯いていた顔を上げ、僕の目を真っ直ぐに見て言った。

「――きっと。笑っていて。きっと。私も笑うから」

「……かりん？」
「……じゃあね。大和」
羽織ったコートを僕に手渡し、かりんはゆっくりと歩いて去っていった。
事務所の扉を押し開け、そのまま出ていく。
その背中が、更に小さく遠くに見えて。
そのままどこかに、いなくなってしまうんじゃないかと……そんな印象を僕に与えていた。
パタン。
音を立て、扉が閉まる。
僕だけを取り残して、かりんが去っていく。
まるで今生の別れのように。
遠く、遠く。
消え往く背中を追うこともせずに。
立ち尽くすことしか、僕にはできなかった。

しばらくして、三人が事務所内に戻ってきた。
「あれ？　大和、あの子は？」
「……あ、かりんなら、少し前に戻ったよ」
「そう……」
「っと、もうこんな時間ですか。どうりで明るくなってきたと思ったら」
言われて時計を見てみると、時刻は朝の四時半を示そうとしていた。
「さすがにそろそろ戻らないと、俺もまずいな」
「結局徹夜だったしね。私も少し、眠気が……」
「そうですね。一度解散しましょうか。今後のことは、追ってまた連絡するとして、今は休息が必要です」
「ああ、一応携帯の番号教えておく」
「そうですね、助かります」
氷室達の会話を聞きながら、僕の意識は半分ほどしか残っていなかった。
疲労ではない……と思う。
確かに少しは眠気もあるけど、それとはまた少し違うものだ。
塞がったはずの胸の傷が、今頃になって軋むように痛んだ。
分かってる。
これはきっと……不安だ。
どうしようもない、しかし確たる証拠もない不安が、胸の中に蔓延している。
全ては想像に過ぎない。
予感と言い換えてもいいだろう。
何かよくないことが起こりそうな……すでに起こり始めているような、そんな気がしてならない。
「……大和、大丈夫？」
「……え？」
「何か、ずっと考え込んでるみたいだったから」

「あ、うん。大丈夫、何でもないよ。僕も少し、疲れてるみたい」
飛鳥の言葉に、僕はそんな適当な言い訳を並べて返す。
「心配は要らないと思いますが、大和は特にしっかり休養を取っておいてください。できるだけ外出も控えた方がいいでしょう」
「そう、だね。そうするよ」
「さて。それでは一時解散としましょうか。とりあえず、今夜当たりに一度連絡をしますので」

頷き、この場は散開となった。
事務所を出て、飛鳥と別れて僕と真吾は家路に着く。
会話もほとんどなく、やがて僕と真吾も分かれ道に差し掛かる。
「じゃあな。しっかり休んどけよ」
「……うん。そうする」
「……大和」
「……何？」
「……いや、いい。無理だけはすんな。それだけだ」
それだけ告げて、真吾は朝焼けの中に小走りで去っていった。
その背中を見送って、僕も再び家路を歩き出す。
昇りかけの太陽がまぶしい。
しかしそれ以上に、胸の中は暗い。
濁った水底のようだ。
後戻りができないことは、とっくに理解している。
だからここまできた。
……けれど。
この先に、何がある？
僕はこの朝陽を、あと何度無事に迎えることができるのだろう？
残された時間は、きっと思っているよりもずっと少ないはずだ。
日常は徐々に、しかし間違いなく、見えない何かに削り取られているのだから。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０２：迷走

静かに家の扉をくぐる。
幸い、母さんはまだ寝ているようで、僕は足音を忍ばせながら自室へと戻った。
と、ようやく気が抜けてしまったのだろうか、倒れこむようにベッドに沈むと、どっと疲れが押し寄せてくる。
本当に長い夜だった。
普段、こんなにも長い時間を知らずに眠って過ごしているとは思えないくらいに。
全身が休息を求めている。
すでにまぶたは落ちかかり、目を閉じれば間もなくして眠ることができるだろう。
なおのこと、今は休んだ方がいい。
皆にもそう言われたし、何より僕自身もそう思う。
けれど、まだ胸のうちにある不安は払いきれていない。
封印も残すところあと一つとなった今、言い意味でも悪い意味でも、開放は必要なことになるだろう。
けど、それで全てが終わるわけじゃない。
そのあとに、僕達は彼をなんとしてでも止めなくてはならないからだ。
想像していたよりもずっと早く、僕達の終わりはすぐそこにまで迫っているのかもしれない。
「……少し、眠ろう」
自分にもう一度言い聞かせる。
焦ってもこればかりは仕方がない。
今は来るべきに備えて、少しでも体を回復させておくべきだ。
まぶたが落ちる。

視界が暗転し、暗闇に包まれた。

「……どういうこと？」

かりんは口を開き、問いただす。

「どういうこと、とは？」

対して言葉を返すのは、闇を連れた少年。

「……約束が違う。無関係な人はもちろん。他の能力者にも。危害を加えないという。約束だったはず」

「……どこから仕入れた情報か知らないけど、耳が早いね」

「……ごまかさないで」

口調がわずかに強張る。

視線はしっかりと彼の目を捉え、その眼光もかりんの年頃には考えられないほどに鋭い。

「……大和が。死んでしまうところだった」

「……」

「……ううん。大和に限らず。これ以上。他の誰かを。傷付けるのなら。私はあなたに。従えない」

「……分かった。今回のことはやむを得ずな部分もあったのだけど、僕に非があるのは確かだ。すまなかったね」

「……謝罪はいらない。約束して」

「……絶対、とまでは僕も断言できない。が、できる限りの善処はする。仕方のない場合は、必ず想定しておくべきだから」

「……」

とりあえずはその返答でよしとしたのか、かりんは無言のまま踵を返して部屋へと戻る。

「やれやれ……」

その背中を見ながら、彼が不適な笑みを浮かべていたことを、かりんは知らない。

「……っ」

部屋に戻るなり、急激な脱力感がかりんを襲った。

閉じた扉に背中をこすりつけながら、ずるずると引きずって膝が折れてしまう。

「お、おいかりん、大丈夫か？」

ようやく喋り出したクロウサが、ただ事ではないその様子に思わず口を挟む。

「……大、丈夫……」

そうは言うが、呼吸は見て分かるほどに乱れ、表情も苦痛に歪んでいる。

「どこが大丈夫なんだよ！　ほら、すぐに横になって休まないと……」

と、口ではいくらでも心配事を言えるが、人形であるクロウサにはかりんの体を支えてやることもできない。

壁に手をつきながら、かりんはよろよろと立ち上がる。

見るからに危なっかしい動作だ。

どうにかベッドに倒れこんだまではいいが、見れば見るほど容態は好ましいものではない。

熱が出ているのだろうか、頬にはわずかな赤みがさし、息苦しさを思わせる。

「……う……」

呻き声。

苦しむように胸を押さえ、体をくの字に曲げる。

「かりん、しっかりしろよ、かりん！」

何もできず、言葉だけを送るクロウサ。

それだけでは何の解決にもならないと知りながら、しかしこれぐらいしかできることのないもどかしさに苛立ちさえ覚え始める。

と、そんなときだった。

「どうかしたか？」
扉を軽くノックする音と、そんな蓮華の声が聞こえた。
「あ、蓮華か？」
思わずクロウサはその声に反応する。
「クロウサ？　ということは、中にいるのはかりんか？　どうした、何かあったのか？」
「と、とりあえす入ってくれ。オイラじゃどうしようもないんだ」
クロウサが言うと、扉が押し開かれ、蓮華が中に入ってきた。
「なんだ？　一体どうしたと……」
言いかけて、蓮華の視界にかりんの姿が映りこむ。
「かりん、どうした？」
すぐさまベッドの横に駆け寄り、蓮華は横たわるかりんを見下ろした。
「どういうことだ、クロウサ？　説明しろ」
「オ、オイラにもよくわかんないよ。急に苦しそうになって……でも、オイラじゃ何もできないから」
「……よし。少し待っていろ。気休めかもしれんが、とりあえず薬を持ってくる」
「あ、オイラはどうすれば……」
「いいから、そこにいてやれ。何もできなくても、傍にいるだけで救われることもあるのだからな」
「あ……」
言うや否や、蓮華は足早に部屋を出て行った。
「……いるだけで、救われる、か……」
蓮華に言われた言葉を、クロウサは反芻した。
どう自分に言い聞かせたところで、それは奇麗事や逃げ口上の延長にしかならなかった。
事実として、こうして苦しんでいるかりんに対し、自分は何もできていないのだから。
力になりたい、役に立ちたいと願うほどに、人形であるがゆえの

無力感が痛感される。
何もできない。
……いや、そうじゃないだろう。
何もできないことと、何もしないことはイコールじゃない。
きっと何かあるはずだ。
オイラにしかできない、そんな何かがきっとあるはずだ。
それが何なのか、今はまだ分からないけれど。
見つけるんだ、答えを。
誰にもできない、オイラだけにできる何かを。
誰のためでもない。
かりんだけのために……。

「どうやら、少しは落ち着いたようだな」
「ああ。感謝するよ、蓮華」
蓮華が持ってきてくれた薬が効いたらしく、かりんは今浅い眠りの中についた。
小さな寝息と上下する胸を見て、ようやくクロウサも安堵の息をつく。
「それにしても、一体どうしたというのだ？　疲労ではあるが、肉体的なものより精神的なものが強いように思うが」
「……ちょっと、心に負担がかかることがあったんだ。少なくとも、かりんとしてはね」
「……まぁ、詮索はしないでおこう。しばらく休めば落ち着くだろう」
薬箱を片付け、蓮華もベッドの傍らに腰掛けた。
「……やはり、かりんは相当無理をしているのかもしれんな」
「そう、かもしれない」
「私達も同じことだが、かりんはまだ肉体的にも精神的にも幼すぎる。抱えるもの、背負うもの、その全てが負担にしかなりえないのだろう。そんなことが続けば、まず壊れていくのは体よりも心が先

だ」

「……かりんはさ、こう見えて、何でもかんでも自分の中に抱え込んじゃう癖があるからさ。いいことも悪いことも、外に出さずに中にしまい込んじゃうんだ。アイツがいた頃は、こんなことはなかったんだけど……」

「アイツ？　ああ、前に聞いた、かりんの兄の話か」

「うん。ハルヒコって言ってさ。生きてれば多分、今の蓮華と同じか一つ年上くらいだったかな」

「生きていれば、だと？　まさか、かりんの兄は……」

「……ずいぶん前に、事故で死んだよ。かりんには他に身寄りがいなかったから、ハルヒコだけがたった一人の家族だったんだ。それを事故とはいえ、幼すぎるときに失ったから、ショックは大きかっただろうね……」

「そうだったか……。すまないな、立ち入ったことを聞いてしまった」

「いや、気にすることはないさ。むしろオイラは、蓮華や日景には感謝してるくらいだ。オイラは誰よりもかりんの傍にいられるけど、してあげられることなんて何もないも同然だから。今みたいなときは、本当に助かるよ」

「……まぁ、人形であるお前にこう言うのも酷かもしれんが、そう卑下にするな」

「うん。分かってはいるんだけどね……」

「難しいものだな、立場がどうこうという以前に、な……」

「全くだよ」

聞こえはしないが、クロウサは乾いた笑いでそう言った。

「……立ち入った話ついでに、もう一つ聞いてもいいか？」

「ん、オイラに答えられることならね」

「……かりんがあえて能力者となることを受け入れたのは……自分の兄を、甦らせるためなのか？」

「……そう、だと思う。多分、間違いない。少なくとも、ついこの間まではね」
「どういうことだ？」
「……少しずつだけど、かりんのその気持ちは変わってきてる気がするんだ。多分それは、アイツに……ヤマトに出会ったからなんだと思う」
「あの、風使いのやつのことか？」
「うん。思えば、味方以外で出会った能力者はヤマトが初めてだったんだよね。ヤマトはさ、一言で言えば甘いヤツだよ。同じ能力者として出会った以上、殺し合うことだっておかしくないのにさ。初めて会ったあの時だって、全力で戦ってればかりんは負けてたかもしれないんだ。けど、アイツは戦うことを選ばなかった。かりんが女の子だからとか、幼いからだとか、そんなことよりももっと単純に、何かを得るために他に何かを傷付けるっていう行為そのものが、大嫌いだったんだろうな」
「……確かに、とんでもなく甘い考え方だな」
「だろ？　……けどさ、それがますます似てたんだよ。もともと、何となく顔や雰囲気も似てたこともあったけど、それがとどめになったんだろうな。かりんの中で、ハルヒコとヤマトが重なって見えたんだよ」
「……なるほどな」
「決して、ハルヒコが甦ったわけじゃない。けど、同じ考え方、同じ雰囲気を持つ人間が目の前にいれば、もうかりんは冷酷にはなれやしない。もともと心を閉ざしながら、この道を進むことを決めたん。けど、それは覚悟には程遠い。ほんの些細なきっかけで、ネジは緩んで板が崩れる。今のかりんは、その最盛期なのかもしれない」
「……かといって、手を引かせることも難しいだろう？」
「そりゃ、ね。だからオイラは、もうやめようなんて言い出せない。かりんが自分の意思でこの先のことを決めないと、何の解決にもなりはしないんだ」

「……全く、難儀な道を選んだものだな」
「本当に。今更だけどね……」
「だからこそ、生き延びてほしいものだな。この先の人生で、人一倍幸せになるくらいでないと、かりんもその兄も報われない」
どう言葉を並べ立てたところで、結局未来というやつは誰にも見通すことはできないもの。
だからこそ、願うのだろう。
今日より明日が、明日より明後日が、少しでもいい日になりますように、と。
ただ、今置かれている現実の場合、それすらも至難。
誰かの願いは、きっと別の誰かの願いと相反している。
同じ朝を迎えても、目に映る朝陽はきっと、別々のものだろうから。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０３：廻る景色

浅い眠りから起こされては、また浅い眠りの中へと戻される。
正直、これではまともな睡眠を取れたとは思えなかった。
が、そんなことを何度も繰り返しているうちに日は昇り、昼が過ぎ、空は夕焼け色に包まれる頃になっていた。
「……」
ベッドの上で寝返りを打つ。
しっかりと眠っていられた時間は二時間程度だろうか。
最後に起きたときに見た時計の針は、確か午後の三時を示していたと思う。
疲れは……しっかり取れたとは言いがたい。
むしろ逆に、体の奥のほうに別の疲労が蓄積しているんじゃないかと思うくらいだ。
それでも、どうやらこれ以上は眠ることはできそうにもなかった。
僕は体を起こし、わずかに頭を抱える。
何も食べていないのに、不思議と空腹感は感じなかった。
それどころじゃない、とうのが本音なのだが、少しずつ体のあちこちが壊れかけてきているような気もする。
いや、壊れているのは何も肉体的な部分だけではないだろう。
むしろ、精神的な面で限界が近づいてきているのかもしれない。
現実の中で引き起こされた、現実を壊すための戦争。
今となっては、どこからが始まりでどこまでいけば終わりがあるのかすらままならない。
あの日、僕が学校でこの『Ｒｉｎｇ』を拾ったときが始まりだったのだろうか？
もしもそれがなければ、今の僕はどうなっていたのだろう？
何も知らず普通に生活を続けて、やはりある日突然世界が消えて

いくのと同じように僕も消えていくのだろうか。
何も知らず、何も知らされず。
聞く暇さえ与えられず、抵抗する時間さえ与えられず。
そう考えると、苦しいことはあっても、今こうして少しでも抗っている自分は幸せなのかもしれない。
こういう立場に置かれたことが、果たして義務なのか。
それとも偶然なのか。
はたまた、運命というヤツなのか。
今となってはどうでもいいことだった。
直面している事実から目を背けることができないのは、きっと僕だけじゃないはずだから。
そっと目を閉じる。
すると、それ合図のように携帯が音を上げた。
氷室からの着信だ。
僕は静かに、通話ボタンを押す。
さぁ。
新しい今夜の始まりだ。

集合場所は駅前にある小さな喫茶店だった。
時刻は間もなく、夜の七時を示そうかという頃。
客足がまばらな店内の隅にある四人がけのテーブルに、僕達は揃って顔を合わせていた。
それぞれに手元には注文した飲み物が置かれてはいるが、ほとんどが手付かずのままで冷めようとしている。
静かに流れるジャズの曲も、今はほとんど耳に入らない状態だった。
「ねぇ、本当にそんなことが起きるの？」
口を開いたのは飛鳥だった。
隣に座る氷室が、視線を移さずに答える。
「絶対という自信はありません。ですが、少なからず何かが起こる

ことは間違いないと思いますよ。そうでもしなければ、こんな人通りに面した賑やかな場所の封印を開放するなど、目立たずに行えるわけがないですからね」

こんな場所というのは、つまり今僕達がいるこの喫茶店とその周辺を含んだ駅前通りのことだ。

残された封印はわずか一ヶ所。

その最後の場所は、ちょうどこの辺りにあることになっている。

「でもさ、やっぱりいくらなんでも無理じゃない？　真夜中とかならまだしも、まだ七時過ぎたばっかりだしさ。人通りだって、あんなにあるじゃない」

ガラス窓越しに、飛鳥は指差して言った。

そしてその通りに、周辺の路上には多くの人々が往来している。

会社帰りのサラリーマンやＯＬをはじめとして、学生らしい姿も珍しくない。

ごった返しになるほど込み合っているわけではないが、人だかりという表現が適切であるくらいは賑わいが見えている。

確かに、こんな状況で何かしでかそうものなら、誰の目にも不審に映るに違いない。

騒ぎになれば、警察が駆けつける可能性だってある。

「それでもどうにかするのが、アイツだろ」

コーヒーを一口含み、真吾が言う。

「向こうだって、もう手段とかになりふり構ってるほどの余裕がないんだ。多少無茶で強引な手を使ってでも、どうにかしてくるだろ」

「じゃあ、そのどうにかって具体的にはどうなのよ？」

「そんなもん俺が知るかよ。いくら俺とアイツが同一存在だからって、思考や一挙手一投足まで読めるわけじゃないんだよ」

真吾の言い分ももっともだ。

そんなことができるなら、とっくに何らかの手を打つことができていたはずなのだから。

「とにかく」

と、氷室が仕切りなおす意味で口を開く。
「しばらく待ちましょう。ここからなら、駅前の景色が全て見渡せます。何かおかしなことが起きれば、誰かしら気付くことができるでしょう」
「……なんか、嫌な感じ。何かが起こることまで分かってるのに、結局後手に回ってるのは私達ってことでしょ？」
「そう、だね。確かにそうかも……」
飛鳥の言葉に僕は同意する。
「でも、仕方ないよ。何かが起きてからじゃないと、僕達は動けないんだ」
「……もっとも、動けたとしてもどうなるかは分かりませんが、ね」
「……やれやれ」
誰からともなく吐き出した溜め息。
冷めたコーヒーの湯気よりも、白く濁って溶けて消えた。

それから時間だけが緩やかに流れ、一時間ほどが経過した。
僕達はそれとなく注意を巡らせながら外を見ていたけど、今のところはそれらしい変化は見られない。
もちろん、今夜何かが起こるという根拠さえ何もないのだ。
明日かもしれないし、明後日かもしれないし、深夜ではなく早朝かもしれない。
否定論だけはいくらでも浮かんでくる。
まぁ、無理もない。
何かが起こるかもしれないという、ただそれだけの理由で今の僕達は動いている。
それを否定することはとても簡単で、逆に肯定するには持ち合わせた理論があまりにも未完成過ぎる。
しかしそれでも、できることからやらなくちゃいけない。
何もせずにいて、気がつけば全てが終わっていたでは、あまりにも悔しいからだ。

「……」

僕はガラス越しの通りに目を向ける。

氷室と飛鳥は向かいの席でそれぞれに小説に目を落としている。

僕の隣にいる真吾も、何か考え事をしているらしく下を俯いたままだ。

誰も一言も発さず、壁にかかった時計の秒針が時を刻む音だけが耳の奥にまで響いていた。

行き交う人々。

身近すぎる日常の一ページ。

絵に書くこともないような、そんな当たり前の景色。

ぼんやりと眺めながら、目に映る何かおかしなものはないだろうかと目を凝らす。

が、何もおかしいものはない。

今、サラリーマン風の男性が通過した。

次は女子高生の三人組。

買い物帰りの主婦と、その手を繋ぐ子供の姿。

などなど、あまりにも当たり前すぎる景色。

変化など、まるでどこにも見当たるはずがなかった。

どこもおかしい場所はない。

が、結論を導くにはまだ時間が早い。

九時を回ったばかりの今は、真夜中と呼ぶにはどう見ても早すぎる時間帯。

何か起こるとすれば、もっともっと夜が深まってからのはず。

精神的にきつい状況ではあるが、油断はできない。

もう一度僕は目元をこすり、しっかりと景色を……。

「……え？」

そこで僕は、何か違和感のようなものを感じた気がした。

「どうかしましたか、大和？」

小声が聞こえたのか、気が付いた氷室が声をかけてくる。

それに気付かされ、飛鳥と真吾もそれぞれに顔を上げた。
「あ、いや……ごめん、何でもなかった」
「……そうですか。何かあったら、些細なことでもいいですから教えてください」
「うん、分かった」
場の雰囲気が元に戻る。
僕は変わらずに、目の前の景色の中を見ていた。
一体このどこに、違和感を感じたというのだろう？
「……」
もう一度、食い入るように眺めてみる。
が、やはり分からない。
何かが引っかかっている。
その引っ掛かりの正体は、間違いなく僕の目から見たこの景色の中にあるはずだ。
だが、それが何であるのかが全く分からない。
数式の答えを知っているのに、過程の計算式をすっぽりと忘れてしまったかのよう。
何がおかしい？
何もおかしくないはずなのに。
どこがおかしい？
どこもおかしくないはずなのに。
そうだ。
何も変わっていないじゃないか。
そんな中に、一体何に対する違和感を覚えたと……。

「……同じだ」
僕は呟いていた。
ガタンと音を立て、席を立つ。
その様子に、他の誰もが異常を察知した。
「どうした、大和？」

「何か、見つかったの？」
口々に問われるその言葉を一度は全て無視して、僕はまたガラス窓の向こう側だけを凝視していた。
「……大和、同じとは、何がどう同じなんですか？」
「……」
その問いに答える前に、僕はもう一度景色を眺めておく必要が会った。
偶然ではなく、それを必然に変えるために。
そして、確信する。
変化はあった。
いや、正確にはなかった。
支離滅裂な言葉だけど、この表現が一番近い。
僕が見た、その変化。
それは……。

「――全部、同じなんだ。行き交う人達が、まるでビデオの同じシーンだけを続けて何度も再生してるみたいに……」

その言葉に、全員の視線が移る。
窓の外。
行き交う人々。
その、性別。
その、人相。
その、外見。
全てが一定の間隔を置いて、同じ人物によって繰り返されている。
悪夢のように繰り返す。
それらは全て、作られた人形のように。
同じ笑みしか浮かべず、同じ動作しかせず、同じ道を行き来する。
ぐるぐる、ぐるぐると。
巡り巡って繰り返す。

あらかじめ、役割を決められた人形達。
傀儡の夜の、幕開けだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０４：隔離の夜

店内を駆け出す。
しかし、注意を促す店員の声さえ聞こえない。
もっとも、聞こえたところで僕達は全て無視していただろう。
扉を乱暴に押し開ける。
夜の冷えた空気が頬を打った。
「……これは」
言いかけ、氷室は言葉を失った。
「何だよ、これ……」
「気味が悪い……」
真吾、そして飛鳥が口々にそう告げる。
僕はただ息を呑んで、目の前の光景を眺めることが精一杯だった。
行き来する人々。
彼らはしっかりと、自分の足で歩いている。
ただしそれは、歩いているのではなく、歩かされている。
笑っているのではなく、笑わされている。
自らの意思でそうしているのではなく、見えない糸によって操られているだけなのだ。
そこはすでに、現実から隔離されていた。
もしもこの世界に名を与えるのなら、きっと人形の国が相応しい。
メルヘンのような話なんかじゃない。
恐怖と薄気味悪さだけを如実に語る、暗闇の舞台だ。
「……これも全部、アイツの仕業だっていうの？」
「わからねぇ。わからねぇけど、こんな芸当ができるの、他にいるかよ……」
そんな僕達の会話など意にも介さずに、目の前を行き来する人形達はあまりにも無表情。

人形なのだから当然といえば当然なのだが、その反面どこか残る人間じみたその仕草が、逆にいっそうの恐怖を与えてくる。
「周囲を探しましょう。人形といえど、これだけの数の物体を遠隔操作で長時間に渡って動かせるとは思えません。そう遠くない距離に、ヤツは潜んでいるはずです」
「……よし、手分けして探すぞ。見つけたらまず、大声を出せ。一人で挑もうとするなよ」
僕達は同時に頷き、それぞればらばらの方向へと走り出そうとして……。
それを待っていたかのように、僕達以外の時間が音もなく止まった。

「え……？」
「な、何？」
走り出そうとした僕達の足がピタリと止まる。
止まったのはそれだけに留まらず、僕達に視界に入る全ての人形達もまた、ピタリとその動きを止めていた。
「……止まった？」
「……」
人形たちはピクリとも動かない。
まるで時間の狭間で凍り付いてしまったかのように。
「どうなって……」
そっと僕は、その人形の一つに手を伸ばした。
その指先が、人形に触れるか否かという寸前のところで、今度は人形の体がどろりと溶けた。
「っ！」
思っても見なかったその動作に、僕は反射的に半歩身を引いた。
ゾッとするほどの寒気が背中に走り、冷や汗が湧き出るかのようだった。
粘土細工に水をかけたように、人形はぐにゃりとその形を歪めな

がら、溶けると崩れるを同時に成していく。
見る見るうちにそれは人の形をしていた原型を跡形もないほどに崩し、最後にはどす黒い水溜りへと変わり果てた。
その崩れ去るまでの動作があまりにも奇怪で、見ているだけで吐き気がこみ上げてきそうになる。
事実、飛鳥はずっと両手で口元を押さえていた。
僕だって、胃の中のものが全部逆流してしまうんじゃないかというくらいの吐き気を必死で堪えている。
とてもじゃないが、こんな光景は瞬きせずに見入ることなどできそうにもない。
そして、それはまだ始まりに過ぎなかった。
僕の目の前で崩れ落ちた人形。
それを皮切りに、周囲にあるいくつもの人形達が今のと全く同じ動作で、歪み、蠢き、崩れ始めた。
一つ、また一つと人形が朽ち果てていく。
もはやその様は、直視できるレベルのものではない。

そうしているうちに、どれだけの時間が過ぎたのだろうか。
長くはないはずだが、すでに精神的な疲労は嫌と言うほどに蓄積している。
あれだけあった人形達は皆、崩れ落ちてどす黒い水溜りになって地面に広がっていた。
そこに、腐敗臭などのような悪臭や異臭は微塵もない。
が、それ以上に僕達が受けたイメージは最悪のものだった。
どれだけ新鮮な空気を吸い込んでも、吐き気が収まろうとしない。
それどころか、呼吸することにさえ抵抗を感じずにはいられないほどだ。
こんなおぞましい光景を見せられたのだから、それも当たり前だろう。
だから僕は、それらから視線を外すように横合いを見た。

そして同時に、それを見つけた。
「氷室、あれ……」
呟き、その方向を指差す。
見ると、僕が指差したその方角には空に向けて真っ直ぐに伸びる一筋の光が射していた。
その発生源……すなわち地上には何があるのか、ここからではまだはっきりとは見えない。
「……なぁ、あれが最後の封印なんじゃないのか？」
真吾が言った。
確かに、場所としてもそれは合っている。
「……行って見ましょう」
氷室の言葉を受け、僕達は光の方に向けて歩き出した。
その歩く道の上にも、先ほどの人形の成れの果てである黒い水溜りがいくつも連なっていた。
しかしこの水溜り、不思議なことに踏み込んでもまるで液体の感覚がない。
踏む地面の硬さを示す感覚は伝わるものの、聞こえるはずの水を跳ねた音さえ耳に届かなかった。
まぁ、そんなことを気にしている暇はない。
光に近づくにつれ、僕達は自然と小走りになっていた。
そして辿り着く。
空目指して立ち上る、一筋の光の元へ。

「思ったとおり、ですね」
結論から言えば、それは間違いなく残された最後の封印だった。
氷室が石碑の前に立つと、何もなかったはずの石碑の表面に赤い記号の羅列が浮かび上がる。
間違いはなかった。
これが最後の……八つ目の、水の封印だ。
「……ねぇ、これってさ……やっぱり、開放しないといけないのか

な？」
　飛鳥が疑問を口にする。
　が、それは飛鳥に限らず僕も真吾も、対象者である氷室も感じていたことだった。
「……」
　氷室はすぐには答えなかった。
「どう、なんだろう……」
「さぁな……」
　僕も真吾も、曖昧な言葉しか口にできない。
　八つの封印全てを開放しなくては、最後の封印は姿を現さない。
　しかし、この封印を解くということは、すなわち彼に分散していた全ての力が舞い戻ることを意味する。
　今でさえかけ離れているほどの力の差を、さらに広げることになりかねない。
　とはいえ、このまま何もせずに放っておいたところで、それは束の間の時間稼ぎにしかならない。
　どちらにせよ、今あるこの世界は消滅に向かう。
　遅かれ早かれ、同じ運命を辿ることになってしまう。
「……開放、しましょう」
　しばしの思考を終えて、氷室は呟いた。
「どの道、このままじゃ何も変わらないんです。だったら、少しでもこちらの戦力を底上げして、対抗する力を備えるべきです。もっとも、この開放によって向こうも本来の力を取り戻すことにはなりますがね」
「……ああ、俺も賛成だ」
「……そう、だよね。そうでなきゃ、こうしてここに立ってる理由がないもの」
「……大和、いいですか？」
「……うん。大丈夫、きっと何とかなる。そんな気がするんだ」
　その言葉を受け、氷室は小さく一つ笑い、石碑の上に手を置いた。

光が淡く、青く変化する。
浮かび上がる赤い記号が、相反した光を放ってさらに浮き彫りになる。

「――我、清涼なる命の流れを司る者なり。さらる力を欲するならば、古の盟約において、我が流れをその身に受け入れよ。さすれば我は、汝が求めるものとなろう……」

氷室の持つ『Ｒｉｎｇ』が、呼応するように輝きを増す。
空に伸びていた光は、徐々にその輝きと調和し、静かに集束していく。
空に伸びた光が、だんだんと消えていく。
吸い込まれ、渦を巻き、それらの光はしだいに安定した流れとなって一つに混ざり合った。
「……ふぅ」
深呼吸を一つし、氷室は手を離した。
これで無事、八つの封印のその全てが開放されたことになる。
「……っと」
グラリと、氷室の体が傾いた。
「おい、しっかりしろ」
真吾と僕は両方から肩を支え、氷室はどうにか持ちこたえた。
「……どうやら、例の反動がもう始まっているみたいですね。困りましたね、車を運転できるのは私くらいなんですが……」
言葉そのものはまだはっきりとしているが、その表情は苦しそうだ。
僕も飛鳥も一度経験しているからよくわかる。
「とにかく、どこかで休ませないと……」
「そうはいっても、どこでだ？　駅前どころか、この街全体がすでに現実から隔離されてそうだぞ」
「どこでもいいよ、そんなの。ほら、早く早く」

飛鳥に先導され、僕達は一度その場から離れていく。

が、結局行く当てなどあるわけもなく、また先ほどの喫茶店へと戻ってきたのだった。

当たり前だが、店員も他の客も全て人形だったわけで、店内は人影もなくがらんとしている。

それでも氷室を休ませるには十分なスペースは確保できたので、あとはしばらく様子を見るしかない。

僕や飛鳥は半日ほどで意識を取り戻したようだが、氷室の場合もそうなのだろうか？

これぱっかりは見てみないと分かりそうにもなかった。

とはいえ、どうしたものだろうか。

今いるこの場所が、現実から隔離された空間であるということは分かる。

となると、現実である世界との時間の流れ方はどうなのだろうか？

同じように並行して進んでいるのか、それとも全く別物なのか。

同じ流れだとすると、少なくとも今夜一晩くらいはこの場所で過ごさなくてはならないことになる。

当然、現実世界でも同じ流れで時間が進めば、何かと問題にもなるだろう。

だが、今はそうも言ってられない。

どういう理由でこんな空間に居合わせたのかは分からないが、そうさせたのは間違いなく彼だ。

だとしたら、それにはきっと何かしらの理由があるはず。

だから、次に何かが起こるのもこっち側でのはず。

今はただ、向こうの出方を覗うしかない。

「僕達も、今のうちに少し休んだ方がいいかもしれない」

「……そうだな。少しでいいから仮眠をしておけ。しばらくは俺が起きててやる」

「いいの？　アンタだって、疲れてるんじゃ……」

「そう思うなら、しっかり休んでから交代してくれ。こっちもその方がありがたい」
「分かった。じゃあ、頼んだよ、真吾」
「ああ」
幸い、店の中の暖房はしっかりと効いている。
横に長い椅子をソファ代わりにすれば、足を伸ばして寝ることもできそうだ。
「あ、ちょっと」
と、横になる前に飛鳥が口を開いた。
「寝てることをいいことに、変なことしないでよね」
「……とっとと寝ろ」
呆れ顔の真吾。
僕はわずかに苦笑いしながら、体を横に倒していった。
束の間の休息。
全ての決着をつけるときは、そう遠くない。
そんな気がした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０５：終焉の開幕

眠りは浅かった。
この非常事態な時に、呑気に眠っていられるほど図太い神経は持ち合わせていない。
けど、少し寝てまた起きてを繰り返していたのも確かだった。
そんなことじゃ疲労は抜けるどころか溜まる一方だと分かっていたが、体がまともに言うことを聞いてくれない。
何度目かの目覚めが訪れる。
まぶたが重く、比例して頭と体も重い。
そっと周囲に視線を向けてみると、飛鳥はまだ静かに寝息を立てていた。
氷室も……怖いくらい静かではあるけど、ちゃんと眠っている。
一人、真吾だけはソファに背中を預けて明後日の方角を眺めていた。
僕は緩慢な動作で体を起き上がらせる。
「ん、起きたのか？」
それに気付いて、真吾が口を開く。
「うん」
「どうだ？　少しは眠れたか？」
「……正直、あんまり……」
「ま、それが普通だろうな」
言って、真吾は足を崩す。
「こんな状況で、安心して寝てられる神経のほうがどうかしてる。もっとも……」
視線が移り、飛鳥へと向けられる。
「コイツはどうやら、例外のようだけどな」
「はは……」

僕は小さく笑い返し、改めてソファに座り直した。
壁にかかっている時計に目を向けると、時刻は夜中の一時半を示していた。
もっとも、この時計が現実世界の標準時間と同じ時刻を示しているかどうかは不明ではあるが。
一応、ポケットの中から携帯を取り出して時間を確かめてみた。
その限りでは、時間の流れだけは狂ってはいないらしい。
間違いなく今は夜中の一時半だ。
ここでも、現実の世界でも。

「……何か、あった？」
「いや、今のところは何も」
「そっか……」
「眠気覚ましにコーヒーでも飲むか？」
「コーヒーって……そんなの、どこに？」
「一応ここは喫茶店だしな。どうせ誰もいないから、勝手に作らせてもらった。カウンターにまださっきの残りがあるから、温めて飲むといい」
そう言って、真吾はカウンター席の方を指差した。
確かに、空腹感はまるでないけれど咽喉はからからに渇いていた。
僕は席を立ち、カウンターへと向かう。
と、そのときだった。
ガクンと、片方の膝がその衝撃に耐え切れずに折れかけた。
「わ……」
声にもならないそんな言葉が出かかったところで、床の上に膝を付く。
「じ、地震？」
店の中の椅子やテーブルがガタガタと揺れながらスライドし始める。
天井のランプも振り子のように揺れ、食器やカップはカチャカチ

ャと音を立てている。
「大和、平気か？」
「うん、大丈夫……」
「え？　え？　何これ？　地震？」
と、今の衝撃で目が覚めたのだろうか、飛鳥が慌てた様子で起き上がった。
「落ち着け。その辺にしっかり捕まっておけ」
壁に手を添えて真吾は立ち上がり、体勢を崩さないようにして揺れに耐えている。
僕も手近な壁を支えにし、揺れが収まるのを待つ。
が、揺れはそれ以上強まる様子こそ見せないものの、かといって弱まる様子も見せず、じれったいほどに長々と続く気配だった。
「ちょっと、長くない？」
たまらずに飛鳥がそう漏らす。
確かに揺れの時間が長い。
普通の地震とはどこか違う感じだ。
そのままさらに、二分ほどの時間が流れた。
その頃になり、ようやく長く続いたその揺れは弱まってきた。
間もなくして、揺れはピタリと止まる。

「……収まったみたいだな」
「ふぅ……」
僕達は口々に安堵の息を吐き出し、一塊に集まる。
幸い物が壊れたりランプが落下したりすることはなく、けが一つせずに済んだ。
眠ったままの氷室の様子にも変わったところはなく、またこのまま時間が流れていくのを見守る展開が続くのだろう。
……そう、思っていた。
「……」
「どうかしたの、飛鳥？」

妙に黙り込んだままの飛鳥に、僕は声をかける。
「シッ、ちょっと静かにして……」
耳を澄ますように、飛鳥はその場で目を閉じて集中し始める。
僕と真吾は最初、それが何をしているのか分からなかった。
だが、すぐに気付くことになる。
足の下から徐々に、それを感じ始めたから。
「……おい、これって」
「まさか……」
僕と真吾が互いにそう口にした直後、飛鳥が叫んだ。
「ここから離れないと！　すぐに！」
僕達は無言で頷き、氷室の体を抱えて急いで店を抜け出した。
が、店を抜け出してもまだ安心はできない。
僕達の頭上には、アーケードの屋根が続いている。
そしてそれらはもうすぐ、僕達目掛けて落下してくるだろう。
そうと分かっていたからこそ、急いでその場を駆け抜ける。
出口はそう遠くはないが、氷室を抱えていることもあって走る速度は遅い。
間に合うか？
いや、間に合わなくちゃ死んでしまうかもしれないんだ。

全力で走れ。
踏みしめる地面の下からは、一度は収まったはずのあの揺れが再び襲い掛かってきていた。
それは最初、ほんの小さな微動だった。
しかし、次第にその規模を高め、僕達が走り出したときには先ほどの揺れを上回る大きさになっていた。
地震、いや、すでにこれは地鳴りの領域に達しているかもしれない。
本能的に分かったのは、このままいれば確実に倒壊に巻き込まれてしまうということだった。

走る横で、街路樹がざわつくように揺れている。
店の看板が崩れ落ち、派手な音を立てた。
柱に入るヒビが、遠目からでもはっきりと分かった。
時間がない。
間もなくここは、崩れ去る。
「よし、抜けたっ！」
真吾のその声が響いた直後、それは起こった。
轟というほどの凄まじい物音を立てながら、僕達の背後数メートルの位置にあるアーケード全域が崩れ落ちた。
その衝撃による砂煙や風圧が僕達を襲う。
間一髪のところで物陰に入り込み、その場をやり過ごす。
轟音が続く。
それは爆弾が爆発したような派手な音ではなかったけれど、静かに、そして確実に全てを呑み込み、砕く音だった。
あまりにも静謐なその破壊の光景に、逆に寒気すら感じてしまいそうだ。
やがて、静かなままに倒壊が終わる。
砂煙が蔓延する中、とりあえずの安全を確認して僕達は物陰を出た。
見るとそこは、平地の上に瓦礫の山が積もっただけの場所に成り果てていた。
あまりにも優しすぎる破壊の爪痕。
しかし跡形も残さず、跡に残ったものは何もない。
だが、それ以上に。
「……何、あれ？」
「……」
「あれは……」
僕達の視線は、すでに別のものに向いていた。
崩れ去った瓦礫の山。

その上を舞う、砂煙の残滓。
空まで立ち上りそうなその汚れた蜃気楼の、向こう側に。
今度は文字通り、空を突き抜けて聳え立つそれはあった。
「……樹だ」
「ああ、確かに樹だ。あれは、まさか……」
「……永久の、永久の樹？」
見つめるその先に、巨大な樹が聳え立っていた。
その様はまるで、天へと届くバベルの塔。
傘のように広がる青葉は、空の青と混ざることなく色鮮やかな翼を広げている。
全てを包み込むように。
全てを受け入れるように。
「じゃあ、あれが……」
飛鳥が呟く。
その先に続く言葉を、僕は引き受けた。
「……九つ目の……最後の、封印」
見上げる僕達と、見下ろす大樹。
それはまるで、神と人の差を思わせていた。
今、間違いなく始まった。
世界の終わりが、始まった。

「さぁ」
その手は誰に差し伸べたものなのだろうか。
少なくとも、それの差し出した手の先に、その手を取る別の誰かの姿は見えない。
「始めようか」
小さく、そしてとても愉しそうに笑い、それは言う。
それだけで、それの立つ大地は身震いするように震え、草は裂け

るように凪いだ。
大樹の幹を背にし、それは天を仰ぎ見る。
空を突き抜ける大樹。
遠い昔、ある一つの世界の礎となった一本の苗木。
幾憶の時を経て、苗木は枝葉を広げ、やがて樹となり、大樹になった。
その樹こそが、世界を支える柱だった。
たった一つの、強く儚い、泡沫の夢のような存在。
ゆえに。
それさえ消えてなくなれば、世界を支えるものは他にはない。
もうすぐ。
本当にもうすぐ、あと少しで、望みが叶おうとしていた。
勝利すら確信したその不敵な笑みを浮かべたまま、それは天に告げる。
その先にいるかもしれない、自分を生み出した哀れな神に毒を吐くように。

「――世界の終わりを始めるよ?」

歓声とは似ても似つかない叫びが、それの背中でざわついた。
ケタケタと、闇が哂っていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０６：始祖の足元で

間近で見るそれは、すでに樹というものの大きさをはるかに超越したものだった。
大きさや高さはもちろんのこと、まず感じるのはその正体不明の威圧感。
気圧されるというのはこういうことなのだろうか。
空気の流れではない別の何かが、辺り一面に充満している。
それらはまるで目には見えずにその場でひしめき合い、蠢くように這いずり回っている。
ずるずる、ずるずる。
そんな音が、聴覚を通り越して直接脳の中に響いてくるようだった。
「やぁ、ようこそ」
そんな不穏な空気の中心で、それは囁くようにそう言った。
「どうだい？　これを見た感想は？」
言って、天を仰ぎ見る。
どこまでもどこまでも、本当にどこまでも続くかのように見える幹。
どこが頂点なのか、もはや肉眼では絶対に捕らえきることはできないだろう。
その見えない頂点付近からは、傘のように広範囲に枝葉が広げられている。
確かな新緑を思わせるそれらも、これだけ密集していると黒以外の何色にも見えはしない。
「……っ、こんなもの作って、一体どうしようってのよ」
やっとのことで押し出した声で飛鳥が聞く。
「作る？　それは誤解だよ。この樹はもうずっと前から、この場所

で生を育んでいたのだからね。ただし、あくまでも仮の姿を晒しながらではあったけれど」

「……仮の姿？」

「ところで」

と、それは一度話を区切るように言う。

「どうして君が、生きてこの場に立っているのかな？」

その言葉は間違いなく、僕に向けられたものだった。

「……」

対して、僕は答えなかった。

それで返答と受け取られたのだろうか、それは大した感慨も見せずに話を戻す。

「……まぁいいか。それよりも、もう少し分かりやすく説明しようか。何も知らずに消えていくのも、それはそれで悲しいだろう？」

その表情が不気味な笑みに変わる。

こちらの返答など待たずして、それは再び語り出した。

「もともと、世界が創られた最初の瞬間には何もなかった。これは当たり前のこと。聖書では、神はまず海と大地を分かち、その上に植物を生んだとされている。けれど、この世界ではそうじゃない。何よりもまず最初に生まれたのは、この樹だ。たった一本の、ね」

言って、それはもう一度天を仰ぐ。

そしていとおしむように樹の幹に触れ、静かに目を閉じた。

「海よりも、空よりも、大地よりも先に、この樹が生まれた。そして、この樹がその後に全てを創り出した。海を、空を、大地を、草を。そして人間も含めた、全ての生物の種子を。それからは何も変わりはしない。時の流れと共に、生物は絶滅と再生を繰り返し、そして今に至る。つまり、だ」

目を開け、再び僕達に向き直って続ける。

「この樹さえ失われれば、今ある世界は簡単に崩すことができる。言ってみれば、この樹そのものが世界を支える根なのだから。けれ

ど、頭で理解できても実行に移すことは非常に困難でね。事実、僕の力をもってしても傷一つつけることは叶わなかった。だが」

幹に触れたその手に、力を込める。

すると、その手はずぶりと音を立てて幹の中へ容易く進入していく。

そしてその部分が、黒ずんで腐敗していく。

黒煙が立ち上り、まるで酸か何かで溶かされているかのようだった。

「僕が力の大半を費やして分割した各種の封印を、君達が開放してくれた。おかげで今のこの樹は、かつてのデタラメな防御力をほとんど失った状態にある。これなら破壊することもそう難しくはないはずだ」

幹の中から手が引き抜かれる。

その手の上から、すでに消し炭のように成り果ててしまったものがぼろぼろと落ちていく。

「改めて礼を言うよ。本当に君達は、僕が思った通りに踊ってくれた。ここまで思い通りにいくとは、正直思っていなかったよ」

見下したような笑み。

手のひらの上で踊らされていたという現実を突きつけられる。

「どうだろう？　どうせもうどうにもなりはしないのだから、このまま何せずに傍観してくれないかな？　僕としても、作業に集中したいし、何よりいつまでも相手をしてやるほど暇じゃないんだ」

「……っ」

「っ、アンタって、やつは……」

「……畜生が」

「代わりと言っては何だけど……そうだね、約束しよう。苦痛なくその命を果てさせると」

その表情が不敵に哂う。

背中にまとわり付く闇も、呼応するようにケタケタと哂う。

そして見せしめのように、素手で幹を切り裂いた。

それが合図になった。
立ち尽くすことに限界を感じた僕達は、一斉に地を蹴った。

各々に、その手にはありったけの力を凝縮している。
手加減とか、相手を思いやるような余裕は微塵も残ってなかった。
目の前にいるそれは、危険だ。
本能がそう告げる。
倒せ。
この場で。
潰せ。
この場で。
殺せ。
この場で。
「消えるのは……っ」
「お前だっ！」
放たれる三種の力。
無数の風は渦となり、雷と連なり、炎をまとって一つの光になって駆け抜ける。
その渾身の一撃は、真っ直ぐにそれ目掛けて飛来する。
回避は不可能。
命中は必死。
ならば答えは必死しかない。
が、それさえも嘲笑うかのように、越えられない壁が全てを妨害する。
何かと何かがぶつかり合う衝撃音。
その音は、どんな擬音でも表現できないような音だった。
白い火花を散らしながら、光は突き進む。
それを阻むのは、目には見えない透明な一枚の壁。
標的であるそれの前に張り巡らされた、たった一枚の壁。
そこに阻まれて、光はもうそれ以上先へと進むことができないで

いた。
削りあうような音が響く。
にもかかわらず、見えないその壁にはヒビ一つ入った様子さえない。
「……いけっ！そのまま、突き破れっ！」
真吾が叫ぶ。
だが、その言葉とは裏腹に、光は徐々に削がれ、粒子となって散っていく。
「だったら……」
飛鳥がもう一度、その手に弓矢を構えた。
「もう一発！」
両手に力が凝縮する。
青白い火花をまとって、雷の矢は生み出された。
「これで……」

そして追撃の一撃を引き、今まさに打ち出そうとしたその瞬間。
バチンという音を立てて、一撃目の光が弾けて消えた。
飛び散った粒子は、まるで雪のようにちらちらと宙を舞い、地面に落ちて輝きを失っていく。
残された壁の前、そこには傷一つ残っていない。
無論、壁の向こうにいるそれは無傷のままだ。
「残念だったね。短期間でそこまでの力を使いこなせるようになったことは賞賛に値するけど、その程度じゃ話にならない」
言うと、それは自ら壁を通り抜けて姿を出す。
「っ！」
飛鳥は矢を構えた。
が、その手が小刻みに震えている。
寒さのせいじゃない。
これは……恐怖感だ。
「さて、もういいだろう？」

嘆くようにそれは言う。
飼いならした闇が、歪な形をさらに捻じ曲げながら蠢いた。
その一つ一つが、今間違いなく、牙を持って僕達を見据えて。

「――おやすみ、マリオネット達」

その言葉を受けて、一斉に襲い掛かってきた。

「……う」
氷室が目を覚ますと、そこは屋外だった。
「ここは……」
周囲を見回す。
どうやらここは駅の構内のようで、そこにある長椅子の上に寝かされているらしい。
「……そうだ、大和達は？」
立ち上がり、周囲に目を向ける。
その拍子に、椅子の上に置かれていたであろう携帯が床の上を転がった。
それを拾い上げ、画面を開いた。
するとそこに、メッセージが書かれていた。
樹に向かう、と、一言。
「樹？」
何のことか分からない氷室は、とりあえず外に出る。
直後、理解した。
空一面を多い尽くすほどの黒。
それは夜空ではなく、巨大な枝葉の群れだった。
その足元。
天を貫くように伸びたその樹の、根に当たる部分。

そこから、例えようのない威圧感を感じた。
何もしていないのに押し潰されそうになってしまう。
「そういうことですか……」
携帯を乱暴に仕舞い、氷室は急いで駆け出す。
嫌な予感がする。
というより、嫌な予感しか頭に浮かんでこなかった。
「三人とも、どうか無事でいてくださいよ……！」
振り払えない不安を食いしばることで耐えて、ただ走った。
終わりが始まった、その場所に向けて……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０７：涙、ひとしずく

「……どういうつもりだい？」
「……」
その問いに、何も答えない。
クロウサを抱きかかえたまま、かりんは一人僕達とそれの間に立ちはだかるようにして立っていた。
「……そっちこそ。どういうつもりなの？」
「……」
「……約束のはず。大和達は。危険な目に。遭わせないと」
「……え？」
その言葉に耳を疑う。
どういうことだ？
そんな約束が、この二人の間に交わされていたということか？
「かりん、どういうこと……」
「……」
聞くが、かりんは答えない。
それどころか、背を向けたまま振り返ることさえしなかった。
ただ真っ直ぐに、正面を向き直る。
それを直視する。
「……説明して」
「……説明も何も、これは仕方のないことなんだよ。もちろん僕は、彼らに傍観を勧めた。けれど、彼らはそれじゃ納得しないみたいなんだよ。となると、さすがに僕もお手上げさ。降りかかる火の粉は払わなくてはならないだろう？」
「……」
「さぁ、分かったらそこをどくんだかりん。君にはまだやるべきことが残っているし、何より君が望んだものはこの先にある。違うか

い？」
「……確かに。そうだけど」
かりんの声が、ただでさえ小さな声がさらに低く小さく消え入りそうになる。
何を考えているのだろうか。
一拍の間を置いて、再びかりんは口を開いた。
「……けれど。こんなことを。私は望んでいない。今すぐやめて。でなければ。私はもう何もしない」
「……やれやれ、困ったものだな」
口では困ったと言いはするが、その表情はあの不敵な笑みをそのまま残している。
流れる間は思考のためのものなのか、それとも全く違う別の何かなのか。
どちらにしても空気はさらに重苦しくなっていく。
そしてしばらくの沈黙を経て、それは言った。
「……いいだろう。この場はかりんに免じて、ここまでにしておこう。だが、次もあるようならばそのときは僕も容赦はしない。それでいいね、かりん？」
「……分かった」
かりんの返事を受け、それは闇を退けさせた。
ずるずると地を這い、出来損ないの影がそれの足元へと吸い込まれていく。
「そういうことだ。かりんに感謝することだね」
僕達に向けて言い放つ。
恐らく、殺そうと思えば本当に苦もなく僕達を皆殺しにすることはできたのだろう。
余裕に満ち溢れたその表情はまさしく、強者が弱者を嘲笑う様そのものだった。
「さて、と。それじゃあ僕は、最後の下準備に取り掛かるとしよう。

かりん、この場は君に一任するよ」
返事を待たず、それは樹に向けて振り返る。
そしてその手を幹の前にかざすと、その部分が大きく口を開け、入り口のような空洞が現れた。
そしてそれは、何事もなかったかのようにその中へと入っていく。
「っ、待ちやがれ……」
反射的に真吾が立ち上がり、その背中を追おうとする。
「……やめて」
が、それをかりんの低い声が静止させた。
「……もうやめて。あなた達では。束になっても。彼には勝てない。それを今。実感しているのでしょう？」
「……っ」
その言葉が間違いなく正論なだけに、真吾も言葉を返すことはできなかった。
すでにそれの姿は樹の中へと消え去り、取り残されたように入り口だけがポッカリと口をあけている。
来たければ来い。
だが、それが意味することは分かっているな？
まるでそう告げられているかのように。

「くそ……っ」
その場に膝を崩し、地面に拳を叩きつける。
「……お願いがあるの。もうこれ以上。かかわらないで」
「……かりん、何を言って……」
「……聞いて。最後まで」
何かを決意したようなその眼差しに、僕は気圧されそうになる。
「……このままじゃ。皆死んでしまう。大和も。大和の仲間達も皆。だからもう。やめて」
「やめてって、どういうことよ……」
「……」

「このままアイツの好きにさせろっていうの？　それがどういう意味か分かってる？　アンタが言ってるのは、この世界の消滅を受け入れろって、そういうこと……」
「分かってる！」
かりんが怒鳴った。
その声も決して大声とは呼べないほどのものだったが、その大人しい外見からは想像もできないほどの悲痛な叫びだった。
「……お願いだから。もうこれ以上……」
声が尻すぼみになっていく。
聞き取れないほどに小さく掠れる声。
胸の奥底から、本当に絞り出したような言葉。
「……かりん、教えて」
僕は聞く。
いや、聞かなくてはいけない気がした。
「どうしてかりんは、そこまでしてくれるの？　僕達を死なせたくないから？　そうだとしても、このままじゃ世界そのものが消えて、結局僕達も一緒に消えてしまう」
「……それは違う。確かに一度。全ては無に還るけど。その先には再生が約束されている。その場所で。また全てが元通りに修復される」
「違うよ。そんなの、元通りでも何でもない。今ここにいる僕やかりんが一度消えて、仮に新しい世界で再生されたとしても、それはもう今の僕じゃないし、今のかりんじゃない。全くの別物だよ」
「……それでもいい。そこにしか。私の求めたものはないの。間違いと分かっていても。すがるしかないの。たとえ騙されていてもいい。私はまだ。夢を見ていたいの……」
押し殺した声が響く。
それは願いなのか、望みなのか、祈りなのか。
恐らく、口にしているかりん自身が誰よりもそれを理解できてい

ない。
それでもその思念を曲げない。
すがる価値がそこにあるから。
その価値はきっと、他人から見れば一瞥できるような些細なものかもしれないけど。
かりんにとっては、何物にも変えがたいもので。
何を犠牲にしても手に入れたいもので。
それを成すためなら、あるいは成せる可能性がそこにあるのならば、悪魔に魂を売ってでも追い求めるべきものなのだろう。
間違いと知りながら、その道を歩くこと。
あるものはそれを愚かと罵るだろう。
あるものはそれを無垢だと奉るだろう。
どちらも正解で、同時に不正解でもある。
結局のところ、自分の中の信念というものに限って言えば、外からの言葉は全て否定したくなってしまうものなのだ。
たとえ誰に何を言われようと、信じた道を突き進むこと。
それは潔いことかもしれない。
でも同時に、哀れなことかもしれない。
実現するかどうかも分からない……いや、この場合で言えば夢物語にしか聞こえない言葉。
それでも、かりんはすがりついた。
自分の願いを、現実にするために。

「――……もうこれしか。お兄ちゃんを取り戻す手段は。残っていないの……」

小さな少女は懸命に告げる。
当たり前だった過去が欲しいと。
ただ、ひたすらに。
ただ、真っ直ぐに。

望んだものは、大好きだった人の笑顔。
追いかけたのは、大好きだった人の背中。
手を伸ばしたのは、大好きだった人の手の温もり。
誰がそれを、責められる？
誰がそれを、くだらないと吐き捨てられる？
誰がそれを、諦めろと促せる？
「かりん、もしかして……」
「……そう。彼は約束してくれた。再生された世界で。お兄ちゃんもまた。再生してくれると。それが。私のたった一つの望みだから」
「そんなのっ……アンタを都合よく動かすための嘘に決まって」
「……証明できる？」
「え？」
「……それが嘘だと。間違いなく嘘だと。証明できるの？」
「それ、は……」
「……理由はそれと同じ。嘘か本当か。結局最後まで見届けなければ。どちらの証明にもならない。だから私は。賭けたの。五分の勝負では。ないかもしれないけど。それでも私にとって。彼の言葉は。間違いなく救いだった」
「かりん、そこまでして……」
「……だからお願い。もう何もせず。ただ時を待って。苦痛の中で消えていくより。何も感じずに消える方が……」
「……」

かりんは目を伏せた。
小柄なその体を、さらに縮めて立ち尽くす。
僕は奥歯を噛み締めた。
色々な感情が頭の中を巡って、正しい答えなんて何一つ導き出すことはできそうにない。
けど、それでも。
答えを出さなくちゃいけない。

たとえその結果が、かりんが望むものとは真逆のものだったとしても。

「……かりん、ごめん」

「……」

「その提案は、受け入れることはできない。僕達はまだ、諦めるわけにはいかないんだ」

「……そう」

低く一つ、かりんは答える。

「……私から話すことは。もう何もない。次に向かい合うときは。敵同士。私も容赦はしない」

「……」

「……あなただけは」

「……っ」

「……大和。あなただけは。巻き込みたくなかった。でも。もうここまで。次で本当のおしまい」

「かりん……」

「……私達は。根の奥であなた達を待つ。入り口はここ。覚悟ができたら。この穴をくぐればいい」

かりんはそう言い残し、自らもその穴の中に体を刷り込ませていく。

「……もう。殺し合うことでしか。互いの未来は。掴めないだろうから。だから。本当にこれが。最後」

振り返り、かりんは僕を真っ直ぐに見据える。

その目が。

いつからだろうか。

透明な雫で溢れ返っていたのは、いつからだっただろうか。

その一滴が、音もなく頬を伝い、地面に落ちた。

「――……サヨナラ」

後に残ったのは、やりきれない気持ちを抱えた僕達と……。
はるか頭上で悲しげに枝葉を揺らす、大樹の泣き声だけだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０８：約束

氷室がその場に駆けつけたとき、事態は一応の収集を終えたところだった。
が、誰一人としてその収まり方に納得できていたはずもなく。
無言で、ただただ立ち尽くすばかりで。
やりきれない気持ちは言葉にもならず、示すには奥歯を噛み締めるか、拳を強く握ることしかできなかった。
そんな空気を氷室も肌で感じたのだろうか、すぐには何があったのかと聞くことはなかった。
しばらくそのまま時間だけが流れて、ようやく誰の頭も落ち着きを取り戻しかけた頃に、氷室は口を開いた。
「全員、無事ですか？」
「……うん、平気」
「……ああ」
「何とか、ね……」
大丈夫だと口々に告げる僕達ではあったけど、誰一人として無事なはずがなかった。
それは肉体的に受けた傷が浅いとか深いとか、そういう問題の話ではなく。
全ての終わりが刻一刻と近づくこのときに、目の前で胸の内を明かしたかりんの想いとその言葉に、僕達はただの一つも言葉を返すことさえできなかったのだから。
いや、言葉だけで返すことならできたのかもしれない。
けど、少なくとも僕にはそれができなかった。
たとえどんなにもっともらしい正論を叩きつけても、優しい言葉を並べ立てても、きっと今のかりんに対してそれらは求めている答えには結び付くことのないものなのだろう。

それだけ、かりんの願いは真剣で、儚くて、切ないものだった。
死んだ人は……いや、人に限らず、命あるものはそれを失えば二度と甦ることはない。
それは世界の……万物の法則の一つだ。
時間を遡ることができないように、空間を捻じ曲げることができないように、それはすでに全世界が共通で認める不可能な命題。
誰が決めたわけでもない。
いつの間にかそうなっていたものなのだから。

逆に言えば、だからこそ人は特に願うのだろう。
家族が、友人が、恋人が死に往く最後のときをその目で見ていながら、死なないでくれと願わずにいられないものがほとんどのはずだ。
それでも、死は等しく、いずれなにものの前にも必ず現れる。
生まれたその瞬間、その命は死を背負うのだから。
では、生まれなければいいのではないか？
それは根本的に間違っている。
生まれたからこそ、僕達は生きることができる。
やがて訪れる死であっても、それを回避するために生まれたことを後悔するなんてことは絶対に間違っている。
生まれたことが罪ならば、死に往くことは罰となる。
ならば救いはどこにある？
ならば希望はどこにある？
僕達は一体、何のために生まれてきたというのだろう？
死ぬために生まれる命なんてありえない。
あってはいけないんだ。
たとえそれが、いずれ訪れる決められた最後であっても、恐れてはいけない。
自分だけが背負っているんじゃない。
誰もが当たり前のように背負っているんだ。

ただ、背負うことに気付くのは体も心も大人に近づく頃のこと。
だから、なのかもしれない。
かりんの場合、唯一の家族であった兄を、かりん自身がまだ幼い頃に失ってしまっている。
当然、幼いかりんに兄の死を受け入れることなどできるはずもない。
きっと、しばらくの間眠り続けていても、やがて目を覚ますと思ってしまうだろう。
それでも、心のどこかでは気付き始めているのかもしれない。
死というものの定義。
それが意味すること。
還ること、還らないこと、還れないこと。
気付いていても、それはきっと理解はできない。
納得などできるはずもない。
そんなときに、それは囁いたのだ。

「――君のお兄さんを、元に戻してあげようか？」

その言葉に、すがりつかない理由がない。
言い換えればそれは、なくした大切なものを見つけてあげるよという、親切な言葉なのだから。
だがそれは、現実には絶対にありえないことだ。
死んだ命は二度と還らない。
誰だって分かっている。
そう、かりんだってもう、本当は気付いているはずなんだ。
そんなことは不可能なのだと、知っているはずなんだ。
それでもかりんはすがりついた。
一縷の望みでも、一夜限りの夢でもいい。
その言葉が本当なら、操られるがままの人形になっても構わない。
その結果、世界を一つ崩壊させることになったとしても……。

「……かりん」
呟き、僕はかりんが消えた幹の穴を見据えた。
大きな口を開け、やってくる獲物を呑み込まんとするその黒い入り口は、何かの咆哮のように見えた。
「約束、したよね」
覚えているだろうか？
嫌、もうそれどころじゃなくなってしまったかもしれない。
……けれど。
僕は、ちゃんと覚えているから。
だから、だからきっと……。

「――必ず、君を救うから」

遠くない日の約束。
忘れたのなら、思い出させよう。
自分を押し殺すのは、もう終わりにしよう。
本当の声は、何を求めているの？
本当の声は、何を叫んでいるの？
本当の君は、今、どこにいるの？
全て見つけ出すよ。
そして、必ず。
必ず君を……。

「時は来たり、か」
「……思った以上に早かったがな」
「けっ、どうだっていいだろーがそんなこと。どうせ一度、何もかもぶっ壊れるんだろ？」
赤穂、蓮華、日景の三人は、揃って根の中にいた。

ここがあの大樹の根に当たる部分だということは聞かされていたが、そういわれても実感は沸かない。

確かに足元には、無数に張り巡らされて絶え間なく走る木の根が密集してはいるが、別に違和感を感じるほどのものでもない。

「もう間もなく、か。世界崩壊まで……」

「なんだ、日景。この期に及んで心残りでもあるのか？　この腐りきった偽りだらけの世界に」

「……心残りか。いや、そんなものは何もない……いや、何もなかったはずだった、と言いかえるべきか」

「はん、今更思い残すようなことなら、さぞかしどうでもいいようなことなんだろうよ」

「……案外、そうでもないかもしれない」

「お前、何を考えている？」

「……さて、な。むしろ、何も考えてないのかもしれないな」

「回りくどいぞ。言いたいことがあるのならはっきりと口にしろ」

「そう怒鳴るな。俺の勝手な私情を、お前達に語る道理もないだろう。大丈夫だ、覚悟は決まっている。ここまできてどうこう騒ぐくらいなら、最初から俺はこの立場にいることを選びはしない」

「……相変わらず、おかしなやつだお前は」

「お前が言うなよそれを。ま、俺も含めてだがな」

赤穂は笑いながら言う。

「そもそも世界崩壊なんて馬鹿げた話に便乗してる時点で、どっちもどっちだろーが」

「……ああ、正論だ」

「正論ではあるが、お前に言われると妙に腹立たしいぞ」

「けっ、言ってろ」

大樹の根の、その最深部。

根の中にあるとは思えないほどの広大な空間に、かりんは一人でいた。

いや、正確には一人と一匹だろうか。
「……かりん、大丈夫か？」
「……」
クロウサが話しかけるも、かりんは答えない。
さっきからずっとこの調子のままだ。
何を言っても、かりんはうんともすんとも答えない。
「……オイラは」
それでもクロウサは話しかけ続ける。
「オイラはさ、どんなことがあっても最後までかりんの味方だよ。ずっと傍にいるよ。かりんが信じた道を、一緒に歩くよ」
「……」
「だから、ちゃんとオイラに聞かせてくれよ。今のかりんの気持ちを」
「……気、持ち……？」
「そう、気持ち。こんな形になっちゃったけど、きっとヤマト達はここにやってくることになるだろう。そうすれば、戦うことは絶対に避けられない。望んだものじゃないにしても、もうくるところまできちゃったんだから」
「……」
「だからさ、ちゃんと言葉にしてくれよ。かりんは、ヤマト達と戦って……たとえ殺してしまうことになっても構わない。その覚悟で、今この場にいるんだね？」
「……っ、……」
わずかだが、かりんの体が震えた。
その小刻みな震えは、腕の中にいるクロウサにははっきりと伝わった。
「いいんだね、それで？　それが、かりんの出した答えなんだね？」
「……私……私、は……」
その言葉も震えている。
まるで、冷たい雨の中、傘も差さずに置き去られたように。

「……ない……」
「……かりん？」
「……ないよ。私……」
「……」
「わかん、ないよ……私。もう……わからない……」
「かりん、やっぱり本当は……」
「わかんないよ……どうしたらいいのか。わからないよ……」
ああ、それでいい。
それでいいんだ、かりん。
一度は止まった涙が、再び溢れ出した。
そのひとしずくが、クロウサの頬を打つ。
その感覚を、クロウサはなぜか暖かく感じた。
わからないわからないと繰り返すかりん。
けどそれは、助けてほしいとう叫びの裏返し。
それを、クロウサは誰よりも理解している。
助けてほしいと、かりんは叫んでいる。
それだけで十分だった。
言葉にできないその本音を、しっかりと受け取ることができたから。
悩む必要は、もうなかった。
「大丈夫。大丈夫だよかりん」
「……っ、……」
「必ず、必ず助けてやる。オイラとヤマトが、絶対に助けてあげるから……」
ありがとう、と。
そんな言葉はなかったけれど。
少しだけ、抱きしめる力が強くなって。
それだけで、答えには十分だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０９：分岐

考える時間はほとんど必要じゃなかった。
誰から言い出すわけでもなく、僕達は揃って歩き出し、幹の大穴に身を潜らせた。
穴を抜けるとそこは、不思議な場所だった。
樹の幹の中身がそのままくりぬかれたような空洞になっていて、上を見上げれば何もない空間が際限なく続いている。
巨大な円柱の中に入っていると考えれば分かりやすいかもしれない。
「これが、樹の中なの？」
「改めて実感させられますね。この樹の常軌を逸した大きさというものを……」
「すごい……」
僕は素直に感心してしまった。
そんな落ち着きを見せるほど、心の余裕はないというのに。
「突っ立ってないで、さっさといくぞ。アイツは根で待っているといったんだ。だとすれば、どこかに下に続く順路があるはずだ。手近なところをくまなく探すんだ」
真吾に言われ、僕達は周辺を探索する。
でこぼこに張り巡らされた根の地面の上はやたらと歩きにくく、余所見をすればすぐに足を取られて転びそうになってしまう。
強靭な筋肉のように地を走る根は、コンクリートの地面のように隙間なく敷き詰められているわけではない。
ところどころに手が入りきるくらいの隙間もあり、その中のいくつかには、空いた隙間から新しく芽吹いた若葉や草が顔を覗かせている場所もある。
樹の中にいるとはいえ、やはりこれは正真正銘の植物なのだ。

「ねぇ、ちょっとこっちにきて」
飛鳥の声に呼ばれ、全員でその場に駆け寄る。
「これ、そうじゃないの？」
指差すその方向を見ると、そこには螺旋階段状に地下へと続く道が流れていた。
「間違いないみたいですね」
「そうだな。よし、いくぞ」
そうして僕達は、下へと続く根の道を下り始めた。
残された時間がどれだけのものなのか、それは誰にも分からない。
間に合うのか、仮に間に合ったとしても、防ぐことは叶うのか？
……やめよう。
できるできないじゃなく、やるかやらないかだ。

根の道は緩やかな傾斜で続く。
なるべく一歩一歩を慎重に進みたいところではあるが、精神的な余裕のなさが歩調を速めているのだろう。
かれこれ、下り坂を歩き始めて五分ほどが経過した。
距離にすれば恐らく、四、五百メートルほど進んだ頃だろうか。
変化らしいものは何一つ見えない。
螺旋状に歩いているということもあり、方向感覚もとっくに狂っている。
加えて、下に進むにつれて薄暗さが密度を増していく。
今でもどうにか互いの表情を見ることくらいの明るさは保てているが、前を歩く者と数メートル距離が離れると、もはや背中を追うこと
さえ難しくなってしまう。
密集した状態で僕達は歩く。
光源になるようなものは何もない。
氷室ならライターくらいもっているかもしれないが、こんな樹の中でもしも周囲の根の引火してしまえば、それこそ大惨事になって

しまうことは目に見えている。
いや、そもそも火をつけて燃え尽きる程度のことならば、何も考えず最初からそうしていたかもしれない。
氷室がそのことを口に出さず、しかも行動にさえ移さないということは、それが無意味であることを理解しているからなのだろう。
「……ずいぶんと、深いね」
「歩いた距離はそれなりですが、潜った深さはまだ大したものじゃないですよ。恐らく最初の地点から考えても、十数メートルくらいでしょうね」
「時間稼ぎのつもりか、くそ……」
「……あ、あれ見て」
気付き、僕は声を上げた。
一度全員の足並みが止まり、それを視認した後、早足で駆け寄った。
「分かれ道？」
「厄介ですね、これは……」
僕達の目の前にある道が、そこで分岐されていた。
その数、四通り。
ちょうど僕達全員の人数と同じ数だ。

これはただの偶然では済まされないだろう。
考えられるケースとしてもっとも可能性が高いのは、一つが正解で残り三つは不正解という典型のパターン。
不正解とは即ち、迷路などで言うところの仕掛けやトラップに遭遇して先に進めなくなることを意味する。
本来なら、一つの道に一人ずつを割り当てて、分割して先に進むことが無難だろう。
四人同じ道を選んだ結果、その道が間違ったもので、しかも引き返せないとなってしまっては元も子もないからだ。
が、これは明らかに何かが仕掛けられていると見るべきだ。

そもそも、どれか一つは正しい道だと、そう考える根拠がどこにもない。
全てを不正解の道にしておくことが、もっとも効率よく僕達を排除できる仕掛けなのだから。
とはいえ、これでは永遠に水掛け論だ。
時間だけが無意味に消耗されていく。
それだけはできない。
「……僕は、こっちの道を行くよ」
「大和？」
「待ってよ大和。これって絶対罠だって」
「そうかもしれない。けど、水掛け論を続ける時間なんて僕達にはないはずだよ」
「……そうだな」
頷き、真吾も一つの道を選んでその前に立つ。
「俺はここだ」
「……分かりました。では、私はこっちの道を行きます」
「……分かった。じゃあ私はこの道ね」
それぞれに進む道を決め、その前に立つ。
「では、行きましょう。できることなら、誰一人欠けることなく最深部で」
「うん」
「ああ」
「ええ」
「それともう一つ。どんな境遇であっても、先に進むことを最優先してください。時間は限られています。余計な手間は取られないように祈るばかりです。では、またあとで会いましょう」
その言葉を合図に、僕達はそれぞれ、別々の道を先に進み始めた。
この先に待っているものが何なのか。
そして選んだそれぞれの道は、正しいものだったのか。
全ては先に行けば分かる。

当然、一筋縄ではいかない道だとは分かっていた。
それでも行くしかないんだ。
止めるために。
救うために。
前に、走れ。

「四つの道に分かれたようだね。さて、こちらも迎撃の準備をしておかないといけないかな」
それは独り言を終えると、静かに振り向いた。
そこには、蓮華、赤穂、日景の三人が立っている。
「君達にも色々と面倒をかけてしまった。けれど、これで最後になるだろう。すまないが、彼らの足止めを頼むよ」
「……言われるまでもない」
「はん、どうでもいいけどよ、前みたいに殺すなってのは面倒な話だぜ？　向こうもここまできたら、そりゃ死に物狂いだろうよ」
「ああ、そうだね。だから今回は、君達に全て一存する。殺すも殺さないも、君たちの意思で自由に決めてもらって構わない」
「ここまでくればヤツラもすでに用済みと、そういうことか？」
「もともと、封印の開放が僕の分散した力を取り戻すための手段だったからね。極端な話、開放さえ終わればその場で殺してしまったところで何ら問題はなかったんだよ。けど、君達だって得た力を振るうことなく終わるのは口惜しいだろう？」
「けっ、相変わらず目ざとい性格してやがる」
「……まぁいい。それで？　俺達はどこで誰を待ち受ければいい？」
それと、向こうが四人に対してこちらは三人だ。一人不足しているようだが……まさか、かりんを戦わせるつもりか？」
「そのことなら心配ない。残る一人は僕が相手をするよ。かりんにはまだ、最後の大仕事が残っているからね。今は少しでも休んでも

らう必要がある」
「最後の大仕事？」
「……じきに分かるよ。さぁ、それではすまないが、時間稼ぎを頼むよ」
言うと、それは静かに前へと手をかざす。
次の瞬間、何もなかった根の地面の上に、三つの黒い水面が浮かび上がった。
「それに乗るんだ。あとは自動的に、それぞれに適した相手の場所に辿り着くだろう」
「適した相手、ねぇ。やる前からその顔がはっきりと脳裏に浮かぶぜ」
暴れたいという欲求を丸出しにして、まず赤穂がその中の一つに足を踏み込んだ。
するとそれは、底なし沼のようにその体を呑み込み、音も立てずに赤穂の姿ごと消えた。
「日景、私達も行くぞ」
「……ん？　ああ……」
続き、二人もその水面に足を乗せる。
体は沈み、音もなく消えた。
「……さて、と」
それは再び振り返る。
根の最深部のさらに奥。
この大樹の核となるその部分に、幾重にも重なって張り巡らされた根の壁によって、守られるように安置された一つの棺があった。
「最終段階突入、かな？」
ケタケタと、飼いならす闇が不気味に笑う。
終わりの時は、近い。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１０：愚者

歪み、捻れ、それでも道はとりあえずは先へと続いている。
どの方向に向かって歩き出し、今現在どの方向へ向かって歩いているのか、それはすでに分からなくなっている。
丁寧な道案内など何一つなく、その割には迷路と呼ぶにも相応しくない根の道。
歩くたびに薄暗さを増し、今となってはまさに一寸先は闇だ。
「一体、どこまで続いてるのよ……」
いい加減にうんざりしてきたといった感じで、飛鳥は呟いた。
が、間もなくしてそれにも終わりが見えた。
遠く、道の先がわずかに明るくなっている。
まるで暗い洞窟から、外の明かりを見つけたかのよう。
この際何だってよかった。
ひとまず、この暗闇の中から抜け出せさえすれば、あとはそれから考えればいい。
出口が近づく。
長時間薄暗い場所を歩き続けたせいで、目はすっかり暗闇に慣れてしまい、わずかな光でさえ毒に感じる。
道が終わる。
やや開けた場所に出た。
「……っ」
手をかざし、その光を遮りながら、ゆっくりと目を慣らしていく。
そして目も慣れ、もう一度周囲をぐるりと見回そうとしたところで、その声は聞こえた。
「来たか。待っていたぞ」
反射的に声の方角を振り返る。
「アンタは……」

そこに、蓮華が立っていた。
その手には、初めて出会ったときと同じように、白い布に包まれた一振りの刀が握られている。
「真宮寺飛鳥、だったな？　お前が来るのを待っていた。さぁ、構えろ。雑談をする余裕は、互いにないだろう？」
「……アンタ、この期に及んでまだそんなこと言ってるの？　こんなことしてる場合じゃないことくらい、分かって」
「分かっているさ」
「な……」
迷わず即答したその言葉と気迫に、飛鳥は見えない圧力に押されるように一歩あとずさる。

「分かっていてこうしているのだ。分かったらさっさと構えろ。時間の無駄だ」
「何、言ってんのよ！　ホントに分かってんの？　アンタ……いや、アンタだけじゃない。アンタ達全員、アイツのいいように使われて、動かされてるだけじゃない！　分かってるの？　このままじゃ、この世界そのものが消滅しちゃうんだよ？」
「くどい」
否定の言葉は冷たく、文字通り全てを一刀両断する。
「何度も言わせるな。そんなことは重々承知の上だ。理解した上で、こうしてお前の前に立ち塞がっているのだ」
「……っ、嘘よ、そんなの。アンタ達は何にも分かってなんか」
「自分の中の物差しだけで、全てを計ることができると思うな」
「っ！」
「……正常か、それとも異常かと問われれば、普通に考えればお前達のとっている行動は正常なものだろう。私達のしている行為は、お前達から言わせればただの愚行にしか過ぎないものだろう。それは認めよう。だがな、愚かだと分かっていても、間違いだと分かっていても、その道を選んだ意思は紛れもなく、間違いなく私達自身

の意思によるものだ。これぱかりは、誰に入れ知恵されたわけでも、踊らされているわけでもない」

「……っ、だからって……！」

「くどいと言っている」

言い終えるなり、蓮華は一瞬のうちに抜刀した。

巻きついていた白い布が、天女の羽衣のように宙を舞う。

現れたのは、天地と呼ばれる一振りの刀。

「これが最後だ、もう一度だけ言う。構えろ、そして戦え。戦って、答えを示せ」

蓮華の指が、カチャリと剣と鞘の繋ぎ目を押し上げた。

うっすらと覗く銀色の刃。

もう、後には退けないのだと。

その銀色のきらめきが、全てを物語っていた。

「……こ、の……」

もはや口では何を言っても通じない。

そう悟らされた。

だからもう、こんな手段しか残されていない。

飛鳥は奥歯を噛み締める。

握り締めていた両の拳を開く。

一つは弓を。

もう一つは矢を。

弦を引き、構える。

「……大馬鹿……！」

「……往くぞ」

地を蹴ったわずかな音の直後に、鈴の音の残響のような音が響き渡った。

刃は抜刀され、冷たい切っ先は死を招かんとばかりに襲い掛かってきた。

迎え撃つべくして構えた矢。

が、照準はなかなか定まらない。
「速い……っ！」
とてもじゃないが、ゆっくりと狙いを定める時間なんてない。
駆け出した蓮華は真っ直ぐに向かってきたと思ったら、次の瞬間には瞬時に左右へと移動をしている。
並の瞬発力ではない。
かろうじて目の端で捉えるのが精一杯だ。
「く、そっ！」
狙い済ましたつもりで矢を放っても、その軌道上に蓮華の姿はない。
矢は虚しく空を裂き、あらぬ方向へと飛んでいってしまう。
が、そんなことに構っている余裕はない。
すぐに次の矢を手にし、弓に構えて蓮華の姿を追う。
が、これも簡単なことではない。
明らかに人間の身体能力の限界を超えた速度で移動する蓮華の姿は、もはや残像を生み出すほどの速度にまで加速していた。
飛鳥に捉えきれるのは、その残像を追うことくらいのもの。
当然、残像を射抜いたところで何の意味もないわけで、構えた矢はいつまでも手持ち無沙汰に引きずられるだけだった。
「……ダメだ、目じゃとても追いきれない。何とか気配だけでも本体の位置を掴めないと……」
頭ではそう理解しているが、目はいつまでも残像の後ばかりを追いかけてしまう。
これではダメだ。
思い、飛鳥は危険な賭けと分かりながら、その手段を取るしかなかった。
目を閉じ、全身の神経を張り巡らせる。
視力に頼っていては、いつまで待ったところで捉えきることは不可能だと判断したのだ。
だが、これは同時に無防備な体をそのままさらけ出すことにもな

る。
首でも腹でも、この際どこでも構わない。
蓮華が振るっているのは、間違いなく真剣なのだから、どこを切られても致命傷に繋がるものになってしまうことは間違いない。
肉を切らせて骨を絶つではダメだ。
肉を切らさずに骨を絶たないと、こちらがやられてしまう。

五感を研ぎ澄ます。
注意すべきは、真剣が振るわれたときに空を裂くその音。
聴力に全神経を集中させ、攻撃が来る方向を予測するしかない。
失敗すれば、恐らくは死。
よくて致命傷か、それに近い取り返しのつかない傷を負うことになるだろう。
間違ってもかすり傷ですむことなどありえない。
あらゆる方向から地を蹴る音が届く。
それらは全てまやかしだ。
聞き分けるべき一点は、振るわれた刃が空気の層を切り裂きながら進む、風を切るようなあの音だけ。
「……違う、これも……違う……」
判断を誤れば死は免れない。
嫌な汗が飛鳥の首筋を伝った。
集中を切らせてはいけない、その切れ目が死に直通するのだから。
ふ、と。
その微かな音は、背後から聞こえた。
間違いない。
今、背中から刃は近づいてきている。
しかし焦るな。
距離感を掴め。
できるだけギリギリの間合いで回避して、空振りのところに渾身の一矢を打ち込むべきだ。

背中を浅く切り裂かれる程度の覚悟はしよう。
リスクを負わずに勝てる相手だとは、最初から思っていない。
「まだ遠い……もう少し……」
自分に言い聞かせるように、飛鳥は呟いた。
ひしひしとその感覚が伝わってきている。
背面から忍び寄る殺意。
黙っていれば、肩から腰にかけて斜め一線に切り裂かれる。
「まだ……もう、少し……」
流れた汗が瞬時に乾き、そこを風が吹いて寒気を運ぶ。
その寒気と、背後からやってくる恐怖が重なったその瞬間。

「っ、今！」
体をひねり、後方へと飛び退きながらの体勢で飛鳥は弓矢を構えた。
スローモーションのように景色が動く。
反転したその背中に、痛みは何一つない。
避けきった。
そう確信し、最初で最後の一矢を全力で打つことだけに意識を集中させ……。
「な……」
絶句した。
振り向き、矢を向けたそこには。
蓮華の姿など、どこにもなかったのだから。
「どこ、に……っ」
その言葉を言い終えるよりも早く、答えは姿を現した。
飛鳥の、その背後から。
「……っ！」

「――残念だったな。そして、これで終わりだ」

冷たい言葉と冷たい刃が、同時に視界に飛び込んできて。
あまりに無防備なその体を、確実に切り裂いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１１：最後の一矢

「あ……ぐっ……！」

灼熱のような熱さを覚える肩口を触れると、ぬるりという感触があった。

「……っ」

肩から先にはしっかりと腕は繋がっている。

今にも千切れんばかりにというわけではなく、しっかりと固定されていた。

だが。

「……これでもう、右腕は使い物になるまい」

温度のない声が、飛鳥に耳に突き刺さった。

しかし、そんな言葉をいちいち聞き取っていられるほど、受けた傷は浅くはない。

流れ続ける血は二の腕を伝い、まるで螺旋を描くように肘を通過し、手のひらにまとわりつきながら指の間をすり抜け、一つまた一つと赤い雫を落としている。

飛鳥の右肩は、今の一撃によって一直線に貫かれていた。

穴が見えるわけではないが、肩の中を間違いなくあの刃が行き来したのだ。

心臓の鼓動よりも大きな鼓動が、痛みに変わって襲い掛かる。

飛鳥は奥歯を噛み締め、ひたすらに痛みに耐えることしかできなかった。

命に関わる傷ではないことは分かっている。

が、これでは矢を作り出すことはできても、弓を引くことなどできるわけがない。

それはつまり、戦いの中で唯一の武器を封じられたということだ。

そしてそれは、あっさりと死という一つの結果に繋がるだろう。

「……これ、くらい……っ！」
痛みを堪えて言葉を吐き出すが、体は痛みに正直だった。
だらりとぶら下がるだけに成り果てた右腕は、指先一つを動かすだけで傷口に激痛を呼び寄せた。
「……っ！」
その痛みにうっすらと涙さえ浮かびそうになり、こみ上げてくる悲鳴をそれでもどうにか歯を食いしばって押し殺した。

「ここまでだな。早々で悪いが、勝負を終わらせてもらうぞ」
対して、手負いとなった飛鳥を目の前にし、好機とばかりに蓮華は決着を試みる。
血に染まった刃を軽く振り払い、付着した血を周囲に飛び散らせた。
「苦しませずに死なせることはできない、あいにくだがな。これも運命だ、悪く思うなよ」
先ほどまでの斬撃を思わせる構えとは変わり、切っ先は真っ直ぐに飛鳥の胸の中心を狙い定めていた。
心臓を一突きにするつもりだ。
構え、突進しようとする蓮華を目の前にし、しかし飛鳥も何もしないでいることはできない。
「ん？」
蓮華が目を向けると、飛鳥はその左手に一本の矢を作り出していた。
よく見ると、それは矢ではない。
そもそも雷のエネルギーの集合体であるそれに実体など求めるのがおかしいのだが、よく見ればそれは剣の形をしているように見えなくもない。
だが、蓮華の持つ天地と比べれば、見劣りする以前の問題だ。
なまくら刀もいいところ、強度も切れ味も木刀以下のようなお粗末なものだった。

「……まだ、負けたわけじゃ……ない」
飛鳥の呼吸は荒い。
額にはいくつもの汗の玉を浮かべていることからも、傷口が熱を帯びて猛っていることが分かった。
「……そんな武器で、私と戦うつもりか？」
「……」
飛鳥は答えない。
いや、痛みでそれどころではないというのが本音か。
「大体、私とお前とでは近接戦闘における能力が違いすぎる。そんなことは分かるだろうに、ムダなことを……」
「……っ、ムダかどうか……やってみなくちゃ、分からないじゃない……」
「……愚かな」

それだけ返し、蓮華は静かに目を閉じ、再び開くと同時に勢いよく地を蹴り、飛鳥の懐までの距離を瞬時に詰めた。
真っ直ぐに突き出される切っ先。
本来なら左右のどちらかに動けば、回避は比較的簡単にできるはずだった。
だが、今の飛鳥の傷ではそれさえも難しい。
右腕に限らず、体のどこを動かしても傷口に痛みが響く。
もはや空気に触れるだけで、むき出しの神経が切り裂かれているかのように。
「ぐっ……」
それでもどうにか、痛みを食いしばって体を横に逸らす。
間一髪のところで切っ先から逃れることはできたが、蓮華の攻撃の手がそこで終わるわけがない。
「はっ！」
すぐさま切り返し、再び心臓に狙い定めて突進する。
一方飛鳥は、一撃目を回避できたとはいえ、体勢が悪い。

この二撃目を同様に回避することは、もはや不可能だと本能的に理解した。

「こ、のっ……」

それはもはや苦し紛れだった。

出来損ないの雷の剣をの切っ先を、向かってくる刃の切っ先に向けて勢いよく真逆からぶつけ合った。

ギィンと、まるで真剣同士が打ち合ったときのような音が響き渡る。

「うあっ……」

しかし、力では明らかに押し負けているため、その剣は簡単に手の中から弾き飛ばされ、落下するよりも早く消え失せてしまう。

「く、そ……」

すぐさま同じものを左手の中で生み出し、手に握る。

今の二撃目を弾けたおかげで、蓮華もすぐさま追い討ちを続けることはできなかったようだ。

不幸中の幸いではあったが、そんなことが何度も続くわけもないだろう。

どの道このままでは推し負ける結末が目に見えているのは明白だった。

「っ、あざとい真似を……」

舌打ちし、蓮華はすぐさま剣を構えなおした。

やはり近接戦闘における経験と、単純な力の差が大きすぎる。

加えて言うならば、飛鳥は傷による出血で、体力の消耗が万全の状態に比べて著しく激しい状態にある。

出血は今もまだ止まらず、飛鳥の右腕はいつの間にか、血に染まっていない部分の方が少なくなっているほどだ。

「は、ぁ……っ、はぁ……」

消耗が激しすぎる。

傷自体は致命傷ではないが、出血の量がそろそろ心配になってく

る頃だ。
　このままの状態で動き続ければ、長く続かないうちに貧血で倒れてしまうだろう。
　そうなる前にどうにか勝負を決めたいところではあるが、唯一の武器であった弓矢が封じられてしまった今、勝ちの芽は途方もなく小さいか、あるいはゼロかのどちらかだ。
　左手の剣を握り締めるが、その腕にももはや力がほとんど入らなかった。
　先ほどの激突で、腕全体が痺れてしまっている。
　つまり、もはや両腕ともまともな状態ではないということ。
　ただでさえ勝算が薄い状況に拍車をかけて、もはやこの場を乗り切ることさえも無理に思えてくる。
　だがそれでも、負けるわけにはいかない。
　成すべきことがあるから、こんなところで立ち止まるわけにはいかない。
　その想いだけが、今の飛鳥の体をギリギリのところで動かしていた。
「……負け、られない……止めなきゃ、止めなきゃいけないんだ、私達が……」
「……理解できないな。なぜそこまでしてこんな世界に執着する？」
「……逆に、聞きたいくらいよ。どうしてそこまでして、今の世界を消滅させてしまいたいわけ？」
「……」
「……言えないの？　それとも、言葉にするのもバカらしいくらいの、くだらない理由ってわけ？」
「……お前には分かるまい」
「……分かりたくなんか、ないわよ……」
　沈黙が降りた。
　互いの胸の内を知ることもなく、理由らしい理由も見つからないままに、こうしてぶつかっている今。

分かっていることは一つ。
どちらにも譲れない何かがあって、そのために自分を犠牲にすることもいとわないという、ただそれだけのこと。

けど、二人は決定的に違う。
目的のためなら手段を選ばない者と、その過程にある犠牲を省みることができる者。
限りなく近い実像と虚像。
揺らめいたのは炎か、それとも想いか。
「……お喋りはここまでだ」
声の温度がさらに低下した。
正真正銘、殺すつもりで蓮華は向かってくるだろう。
対して、飛鳥もこの場を何とか切り抜けなくてはいけない。
が、見ての通り状況は圧倒的に不利。
一か八かの策の一つも浮かんでやこない。
「っ、せめて、せめて両腕が使えれば……矢を引くことができれば……」
痛みに耐えて、仮のこの両腕で弓矢を生み出して構えたとしても、恐らく狙いはまともに定まらないだろう。
それでは意味がない。
とにもかくにも、射った矢が標的を貫かなくては、勝ったことにはならないのだから。
どうすればいい。
焦りばかりがこみ上げて、思考もまともに働かない。
絶望的な状況を目前に控え、何をどうするべきかが分からない。
……やはり無理なのか。
もしもこの状況を打開する一撃を見舞うことができるとしても、そのためにはまず矢を射るための弓が、そしてその弓を支える両腕の代わりとなるものが必要なわけであって……。

「……腕の、代わり……？　そう、だ、これなら……っ」
何とかなるかもしれない。
もはやためらう時間はなかった。
賭けるしかない。
咄嗟に浮かんだ、この発想に。
「……行くぞ」
と、ちょうど合図のように蓮華は静かに告げた。
構えられた切っ先は、三度変わらずに飛鳥の心臓を狙い定めている。
そして、動いた。
音はない。
ただ真っ直ぐに、最短距離を問答無用で駆け抜けるだけの突進。
その最前線に、不気味に輝く切っ先が迫っていた。
「こ、のっ！」
飛鳥はその突進に向けて、左手の剣を真っ向から投げつける。
蓮華も突進力が強すぎるせいで、これを方向転換によって回避することはできない。
だが、そもそもそんな必要などなかったのだ。
「はっ！」
さらに少し前に、蓮華は切っ先を押し出す。
空気の層を突き破るその加速度により風圧が生じ、それだけで飛鳥が投じた剣は弾かれていってしまう。
「これで終わりだ……」
勝利を確信し、突進力はさらに加速する。
一秒以内に全てが終わるだろう。
あとはただ、真っ直ぐに駆け抜けるだけでいい。
止まったときに、全ては終わっているだろう。
そう。
終わっていなくては、ならない……はずだった。
「な……」

――目の前に飛鳥がいれば、それで終わっていたはずだった。

そこにもう、飛鳥の姿はない。

突進により視野は狭まっているとはいえ、どう見ても前方百八十度の世界の中に飛鳥の姿はなくなっていた。

「どこに……」

言いかけた蓮華は、そこで気付いた。

自分の頭上を、何かが移動していることを。

影に包まれたことで、初めて実感した。

「まさか、上……」

呟き、視線を向けたときには、飛鳥の姿は頭上を超え、後方に向けて落下していくところだった。

「くっ、さっきの剣を弾いた隙に、そんな真似を……」

失態だった。

失態ではあったが、まだいくらでも修正がきく範囲だ。

一度突進を止め、休む間もなく再度後方へと駆ければ、着地後の体勢を立て直す前にしとめることは十分に可能。

勝利は揺るがない……はずだったのだ。

加速を強制的に中断させ、一瞬の停止。

直後に百八十度向きを変え、同等か、あるいはそれ以上の速度で再度突進した。

「もらった！」

と、そう言葉にしたその目の前に。

「っ！」

それは、待ち構えるようにして矢を引いていた。

地面に二本の矢を突き刺して固定し、それに引っ掛けるようにして弓を固定し、さらにその弦には、最初の目くらましも兼ねて投げつけられ、一度は弾かれたあの出来損ないの剣が、めいっぱいに弦を引いて待ち構えていた。

そう。
真っ直ぐに、突進する蓮華の体を迎え撃つようにして。
飛鳥はまだ痺れが抜け切っていない左腕に、それでも渾身の力を込めて矢を引き、歯を食いしばって狙いを定めた。
即席で作った、矢による弓矢。
正真正銘、最後の一矢。
「いっ、けぇぇぇっ！」
極限まで引いた弦から、手を離す。
放たれた一矢は、尾を引くようにして、固定砲台の役目を果たした二本の矢と弓の力まで根こそぎ吸収し、巨大な槍となって飛来した。

――サジタリウス・グングニール。

「う、あああああっ！」
蓮華の叫び声が聞こえた。
ぶつかり合う双極。
押し潰し、貫き通したのは……。

――紛れもなく、青白い閃光を放つ迅雷の槍だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１２：同一

足元がふらつく。
力を使いすぎ、さらには出血も後押しして、体力はもう限界に達しようとしていた。
「……っと」
よろめきながらも、飛鳥はどうにか自力で立ち上がった。
体全体が疲労の塊に押し潰されそうで、少しでも気を抜けば倒れてしまいそう。
「……」
それらを何とか堪えて、飛鳥はそう遠くない距離に横たわる蓮華の姿を見た。
だらりと投げ出されたその体は、ピクリとも動く様子を見せない。
それもそのはずだ。
全力を込めて放った最後の一矢は、間違いなく蓮華の体を貫いた。
死に至ることはないとしても、しばらくの間は全身が麻痺したように動かせないはずだ。
あの一瞬で、力の加減を考える余裕などは一切なかった。
ただ全力で、渾身の一撃を放った。
だからもしかしたら、本当に蓮華は死んでしまっているかもしれない。
よろよろと足を引きずりながら、飛鳥は前に歩き出す。
わずか数メートルほどの距離が、これほど遠く感じるとは思わなかった。
傍らに立ち、横たわったままの蓮華の顔を見下ろした。
不幸中の幸いだったのか、蓮華の目はうっすらとだが開いていた。
どうやら生きているようだ。
「……平気？」

と、飛鳥はそんな声をかけた。
「……自分でやっておいて、何だその言葉は……」
細く小さな声ではあったが、蓮華は言い返した。
「それは、そうだけどさ……」
そう言い返されると、飛鳥としてももう返す言葉がない。
「……ふん、つくづくお前は甘いやつだ。そんなことでこの世界の消滅を防ぐなど、できるわけがない」
「……そう、かもね……」
「……おかしなヤツだな。皮肉のつもりで言ったんだがな」
「……」

そうは言うが、不思議と蓮華の表情は自然なものだった。
嘲笑うわけでもなく、かといって優しく微笑むようなものでもない。
けど、逆にそれがこの場には似合わないくらいに不釣合いで。
反面、ありのままをさらけ出しているようで。
「っ……！」
体を起こそうとした蓮華が、その表情に苦痛の色を見せた。
「無理して動かない方がいいよ。とてもじゃないけど、動ける状態じゃないでしょ」
「……悔しいが、その通りだな。全身が麻痺している上に、指一本でも動かせば電流が流れるような鋭い痛みが走る。これではもう、戦えないだろうな……」
「……っ」
「お前の勝ちだ。殺すなら殺せ」
「え……」
「何を……迷うことがある？　勝者が敗者の命を奪うことは、もはや鉄則だ。そうするだけの権利が、勝者にはある」
「だからって……」
「……つくづく甘いヤツだな、お前は。ここで私を殺しておかなけ

れば、どうなるか分からんぞ？　寝首をかかれることになるかもしれない」

「……そう、かもしれない……けど、だけど……」

迷いを見せる飛鳥に対し、蓮華は一つ嘆息する。

「分からないな」

「え？」

「全くもって理解できない。戦うということは、相手の命を奪う覚悟があるということ。どの世界でも同じだ。敗者には生きる価値などない。自然界を見てみろ。動物達は本能に忠実に、弱肉強食の理に従って生きているだろう」

確かに、蓮華のその言葉は正しい。

動物に限らず、人間だって歴史を振り返れば、生き残ってきたのは常にその時代で力を手にしていたものばかりだ。

「勝者が敗者のことを考えるな。勝ったのなら、顔を上げろ。前を向け。歩き続けろ。終わったことを振り返るな」

「……」

「敗者への情け？　哀れみ？　自分の中ではそれが優しさのつもりなのだろうがな、そんなものは全部偽りのものだ。勝者は常に前だけを向いていればいいんだ。身勝手な優しさで他人を救えると思うな。そんなものは求めていない、頼んじゃいない。迷惑にしかならない」

蓮華ははっきりとそう言い切った。

負ければそこで終わりなのだと。

全てを失うのだと。

意思も、命も、何もかも。

けれど、それでも飛鳥は。

間違っていないはずの言葉を聞きながらも、その全てを聞き入れることはできなかった。

「――……そう。要するにアンタは、そういうのを言い訳にして、

ずっと逃げ続けてきたってことね」

「……何、だと？」

「私にはそうとしか聞こえない。並べ立てているのは全部正論に聞こえるけど、ようはそれって、ただの逃げ口上じゃないの？」

「ふざけ……」

「言い切れる？」

その言葉に、蓮華は言葉を失った。

「本当にそうじゃないって、言い切れるの？　自分は一度たりとも逃げていない、目を背けていないって言い切れるの？」

「……っ」

「……少なくとも、私はそうじゃない。嫌なことは嫌だし、どう説得されたって受け入れられないものがある。それが世の中ってものだと思うから」

静かに、独り言のように飛鳥は言う。

「けど、それのどこがいけないの？」

「……何？」

「逃げることのどこがいけないの？　目を背けることのどこがいけないの？　そんなの、誰にだって当たり前にあることじゃない。後悔したり迷ったり、悩んだり思いつめたり、そんなの全然おかしくない。普通のことじゃない」

「違う！」

蓮華は叫んだ。

痺れた体の代わりに、口だけを必死に動かして。

「普通だと？　当たり前だと？　お前や一般の価値観だけで全てを語るんじゃない！　そんな普通や当たり前さえも許されない環境というものが、世界にはいくらだって存在するんだ。理不尽で、思い通りになることなんて一つもなくて、ささやかな望みさえ叶わないことなんて、いくらだってあるんだ！」

肩で息をしながら、蓮華は飛鳥を睨み返した。

「何も知らないくせに、全てを知ったような口を利くな！　私とお前は違うんだ。根本的な部分がすでに違うんだ！」
怒鳴り声はむなしく響いた。
もはやその言葉は、飛鳥に対して吐き捨てられているのではなく、どうしようもなくなった感情が一人よがりに暴走しているかのようだった。
だから、言い返さなければよかった。
聞き流してしまえばよかったのだろう。
それでも、飛鳥はやはり、言う。

「――……同じだよ。私もアンタも。一つも違ってなんかいないもの」

「……いい加減にしろっ！　お前と私が同じであるはずが」
「同じだよ」
柔らかく、飛鳥は言い切る。
「生い立ちがどうとか、育った環境がどうとか、そんなのは違いには含まれない。全ての人が同じ条件で生まれ、同じ条件で育つなんて、そんなことがそもそもありえない話だもの。そういう言葉を口にした時点で、それはもう言い訳だよ」
「っ……」
蓮華は言い返すことができなかった。
どういう理由だろうと、今の飛鳥の言葉は確かに正しかったから。
「自分を過小評価することも、他人を過大評価することも、それらを比較することも、悪いことじゃないと思う。けど、それを理由にして逃げ出すことはきっと間違ってる」
「……お前に、何が分かる……」
「分からないよ、何も」
「な、に？」
「私はアンタじゃないし、アンタは私じゃない。他人の気持ちを全

て分かってあげることなんて、きっと誰にもできない。もっともらしい言葉を選んで、分かってあげるフリをすることは簡単。けど、それじゃ私は逃げたことになる。だから私は、アンタの気持ちなんて分からない。自分に嘘をついてまで、分かったフリなんてしたくないから。そんなことじゃ何も変わらないって、そう思うから」

「……」

思ったこと、感じたことの全てを、今の自分が言葉にできるもので飛鳥は言い切った。

共感がほしいわけじゃない。

反発が怖いわけじゃない。

ただ、自分に嘘をついてまで自分を成り立たせていたくないだけ。

言い換えてしまえば、それはただのわがままなのかもしれない。

好きなものを好きと言えること。

嫌いなものを嫌いと言えること。

簡単で、実はすごく難しい。

なぜなら人間は、無意識のうちに嘘をつく生き物だから。

「……ふん、話にならんな」

呆れ返り、蓮華は言葉から覇気を失った。

時間の無駄だと、そう言わんばかりに視線を外す。

「……ま、自分でも分かってるんだけどね。ただのわがままなんじゃないかって」

言って、飛鳥は小さく笑った。

「……さっさと行け。油を売っている暇はないのだろう」

「……アンタは、どうするの？」

「……さぁな。なるようにしかならんさ」

「そっか……」

少しだけ残念そうに飛鳥は呟いた。

先へと続く道は、一つしかない。

その道の先は、暗闇に閉ざされていた。

大きく口を開けた怪物が、獲物が来るのをただ待ち構えているように。
「じゃあ、行くよ」
「……ああ、さっさと行ってしまえ」
視線はそらしたまま、蓮華は告げた。
視線を合わせず、飛鳥はもう一度だけ小さく笑った。
痛んだ肩の傷を押さえながら、先へと歩き出す。
やがて、暗闇の中に呑み込まれた。
どこに続くかも分からない道のり。
それでも先があるのなら、進めばいい。
やらなくてはいけないことが、まだあるから。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１３：青い槍と赤い鎌

予感というものは、当たらなくてもいいとき……あるいは当たってほしくないときに限って的中するものだ。

「ま、何となく想像はできていましたけど」

氷室はそう言うが、その表情から見ても心底うんざりといった感じは拭いきれない。

「はん、そう言うなよ。どの道ここで死ぬんだからよ？」

と、相対する赤穂は相変わらずのにやけた笑みを浮かばせながら、吐き捨てるように答えた。

一見やる気のなさそうな姿勢に見えるが、内心では早く暴れたくて仕方がない。

そんな感情をこれっぽっちも隠すことなく、顔と態度の両方に表して見せることも、ある意味ではなかなかできることではないのかもしれない。

「……一応、聞いておきます。そこを退いてくれませんか？　時間がないんですよ」

「一応、答えておく。そんな呼びかけに素直に応じる相手に見えるのか？　俺が」

「見えませんね、まるで。ですから、一応と先に言っておいたでしょう」

「そうかい。んじゃ、もう喋る必要はないよな？」

シンと、その場が静まり返る。

一瞬の静寂。

それは、文字通り一瞬にして打ち破られた。

双方が眼光を鋭く向け合ったのは同時。

それを合図に、相反する二人は相反する属性の槍をその手の中に生み出した。

青い三又の槍と、赤い鋭利な槍。
貫くか、切り裂くか。
交差の瞬間には、白い蒸気が立ち上った。

「お、らあっ！」
振りかぶり、赤穂は槍の先端部の刃で切りかかる。
もはやそこに槍としての機能……突きという攻撃手段などはなく、ただ本能をむき出しにして標的を殺すことだけを考えた攻撃。
通常、槍を扱うには剣を扱う場合と比較して、三倍近くの技量が要求されるといわれている。
槍は剣に比べてリーチが長く、常に中距離の間合いを取りながら戦える利点がある。
熟練した使い手になれば、自分の間合いをしっかりと把握した上で、自由に戦況を支配することも不可能ではないだろう。
が、もちろん欠点もある。
まずはじめに、傷を負わせるための刃の部分が、剣に比べて少ないということだ。
剣には大雑把に分けて片刃と両刃がある。
片刃はようするに、包丁のようなものだと思えばいい。
切れ味のある面は片面だけということだ。
対して両刃は、両面に切れ味を持つもののことを指す。
ファンタジーなどの世界で扱われる剣は、こちらのほうが多用されているかもしれない。
もともと槍は前述の通り、間合いを取りながら近接戦闘をこなすために作られたものとされており、純粋な殺傷能力では剣に劣ることは珍しいことではない。
だからこそ、槍で剣を迎え撃つには三倍の技量が要求されるとまでに言われているのだ。
頭上から襲い掛かる一撃を、氷室は身をわずかに後退させることで難なく回避する。

赤穂の放つ一撃一撃は、威力としえは申し分はない。
が、その分攻撃速度で見れば大したことはなかった。
今のように、十分に引きつけてから回避行動に転じても、十分に間に合うのだから。
「まだまだぁっ！」
としかし、そんなことはお構いなしに、赤穂は一方的に攻撃を繰り返す。
激しく空を裂く轟音は、耳にうるさいほどだった。
「そんな攻撃じゃ、一生かかっても命中しませんよ」
繰り出される全ての攻撃を冷静に見極め、そして回避する。
氷室も武術の心得はないものの、こんなお粗末な太刀筋の軌道にやられたりするほど間抜けではない。
防御という行動を取らない時点で、相手の力量はたかがしれているということなのだ。

「……時間の無駄です。とっとと寝てしまってください」
直前の一撃を十分に引きつけて回避し、ここで氷室は初めて自ら攻撃に転じた。
地を蹴り、一足飛びで間合いに進入する。
狙いは一点、右肩の付け根。
利き腕さえ殺せば、それで勝負は付いたようなものだ。
「はっ！」
姿勢をわずかに屈め、体重移動と同時に真っ直ぐに矛先を突き出す。
赤穂の右肩までの間に、遮蔽物などは何一つ存在しない。
確実に矛先は、肩口を貫く。
……はずだった。

「――寝るのはお前だよ、バカが」

にやついた笑みを浮かべ、赤穂はそう言い切った。
その言葉をいい終えるか否かという、まさに寸前のところで、氷室は背後にあった何かしらの嫌な気配の正体に気付き、突き出した手を
止め、瞬間的に横合いへと身を移動させた。
「ぐっ……」
赤穂との間合いはゼロにまで近づいたが、再び数メートルの距離をとることになってしまう。
いや、それよりも何よりもまず。
氷室はそっと、自分の首筋に指を這わせる。
ぬるりと、生暖かい感覚がそこにあった。
首筋には、浅く一直線に斬られたあとが残り、そこから微量ではあるが出血していた。
もうあと少しでも反応が遅ければ、確実に頸動脈を傷つけ、取り返しのつかない傷になっていただろう。
だが、今注目すべきことはそんなことではなかった。
一体どうやって、あの状態からこの首筋に向けて一太刀を浴びせられたというのだろうか？
あのとき、赤穂の繰り出した槍の刃先は、間違いなく、氷室に対しては向いていなかったはずだ。
だとしたら、この傷を付けたその凶器は、一体どこから現れたものだと……。
考えかけ、そして氷室はすぐにその答えを知ることになる。
答えはすぐ目の前……赤穂の持つその武器そのものが、示していたのだから。
「……なるほど。そもそもそれは、槍ではなかったのですね……」
「そういうことだ。もっとも、俺はこの武器が槍だなんて、一言も言った記憶はないけどな」
にやつき、赤穂は手にしたその武器を軽々と持ち上げ、肩にかけた。

それは。
柄の部分こそ槍と同様に細く長いものではあったが。
その先にある刃の部分は、歪んだLの形を示しており。
まるで三日月のような……不気味な笑みを思わせる残酷な切っ先が、赤く濁りながら屠っていた。
「見りゃ分かると思うが、一応言っておくか」
赤穂は心底愉快そうに笑って、肩にかけたそれを目の前に大きく振るった。
「俺の武器は槍なんかじゃない。死神殺しの大鎌だよ、バカヤロウ」

赤く焼け、切っ先に焔を灯す巨大な鎌。
死神殺し、その名をデスサイズマーダーと言う。
死神の鎌は、その歪んだ刃の不気味さなどから首を刈るものと思われがちだ。
実際そういう役割も果たすのだろうが、もう一つ言われていることがある。
それは、死者の肉体と魂を切り離すための道具として用いられているというものだ。
死神とは、読んで字のごとく、死を司る神のことだ。
たとえ死神でも神は神。
神話などでも、そこに描かれた力はどれも強大なものばかりだ。
もっとも、今この場に関してだけ言わせてもらうのなら、赤穂の手にある鎌の用途は間違いなく前者のものだ。
即ち、首を刈り取ること。
それは、間違いなく死に繋がる。
「さて、と。続きを始めようぜ。その程度なら、致命傷には程遠いだろ？」
鎌を振りかざし、赤穂は構える。
一方氷室は、まだ片膝をついたままの体勢だ。
いちいちそんなことを聞きなおさずに、ここぞとばかりに切りか

かればいいものを、赤穂はそうはしない。
言わばこれは、狩りなのだ。
狩るものと狩られるもの。
絶対の強弱関係を見せつけ、次はそれを骨身に染みさせて強制的に分からせる。
その上で、愉悦に浸りながら一思いに殺す。
これが赤穂の思考回路であり、性格でもある。
迷惑を通り越して異常とも思えるものだが、それだけの力が今の赤穂に宿っていることもまた事実だ。
有言実行、宣言撤回はない。
殺すと決めてかかり、そうなったら何が何でも殺し通す。
それを止めるにはもはや、殺し返すしか手段はない。

「……おい、いつまでそうやってんだよ？　興醒めすんだろ？」
いつまでたっても立ち上がろうとしない氷室に向け、赤穂はわずかな苛立ちを含めて言う。
「それとも何だ。あれだけのことで、戦意喪失でもしちまったってか？　はん、笑わせんじゃねぇぞ？」
一歩、赤穂は踏み出す。
「だったら、そのまま刻まれて終わっちまえ！」
地を蹴り、切りかかる。
そのときになっても、氷室は微動だにしない。
膝をつき、首筋に指を添えたままの姿勢でぴくりとも動かない。
距離は瞬く間に縮まる。
そして頭上から、死神さえも殺す大鎌が豪快に振り下ろされた。
風を切り裂く轟音。
振るわれた大鎌の切っ先は、一直線に氷室の首を切り落とした。
……が。
「……何だ、これは」
赤穂は疑問を抱いていた。

肉を切り、骨まで断った今の一撃。
にもかかわらず、全くの手ごたえが感じられない。
しかも、目の前にある氷室の体は、確かに切り裂いたはずの首が未だにくっついている。
まるでありもしないものを切らされたような感覚。
ありもしないもの。
そう、例えば……空気とか……水、とか。

「――言葉をそのまま返しますよ」

と、聞こえた声はその背後から。

「っ！」

反射的に振り返ろうとした赤穂だが、その前に目の前にあった氷室の形をした別の何かが、バシャと音を立てて崩れ去った。
それは水となって、地面の上に広がり、流れて赤穂の足元にまとわりつく。
そして次の瞬間、氷室は言った。

「凍れ」

その言葉が合図となり、赤穂の足元の水溜りが一瞬にして凍りついた。
無論、赤穂の足そのものを巻き込んで。

「な……」

冷たさなどまるで感じさせない、まるでガラス細工のような氷に、赤穂の動きは完全に封じられた。

「くっそ、こんなもん溶かして……」

「……ですから」

と、続くであろう言葉を遮って、氷室は続けた。

「そんな暇を、誰が与えてやるというんです？」

三又の槍を水平に構える。
切っ先は透き通るように光り、氷の冷たさを持つそんも刃の強度

はダイヤモンドをはるかに凌駕する。
両手で槍を構え、一点に狙いを定めた。
そして、討つ。

「――もう一度だけいいます。寝なさい」

そして、絶対零度の一撃が放たれた。
かろうじて反応した赤穂が、歪んだ刃の側面で三又の槍の切っ先を防がんとする。
が、それも無駄な抵抗に終わる。
打ち砕き、突き破り、透明な切っ先はその肩口を貫いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１４：霧の中

鮮血が舞った。
氷雨のように降り注ぐ赤い雫は、ヒタヒタという音を立てながら地に落ちる。
やがて、一つの音が崩れた。
膝が折れ、屈する音。
「……が……」
そんな苦痛の色に閉まった声を吐き出して、跪いたのは。
「ふー、危ねぇ危ねぇ……」
赤穂ではなく、氷室だった。
見ると、赤穂の二の腕の辺りからはわずかながらの出血が見られる。
しかし、確実に狙い済ましたはずの肩口の部分には、傷一つつけられていなかった。
足元を釘付けにした氷も、今は溶かされて水溜りへと戻り、それどころか赤穂の周囲から立ち上る膨大な熱量によって蒸発させられてしまっていた。
「な、にが……」
くぐもった声を絞り出し、氷室は向き直る。
「が、ごほっ……」
せきこむと、口の中から鉄の味の赤い液体がむせ返るように広がった。
吐き出した唾の色は、真っ赤に染まりかえっている。
ズキンズキンと、強烈な痛みが全身に響いていた。
押さえた脇腹の辺りからは、おびただしい量の出血が続いている。
紛れもなく、赤穂の鎌によってつけられた傷痕だった。
「ぐ……」

立ち上がることすら満足にできない。
力を入れるだけで、その拍子に体中の血液が傷口から抜け出していってしまいそうだ。

「無様だな、おい」
そんな姿勢の氷室を嘲笑うように、赤穂は一歩近づく。
「何が起きたか分かんねぇって感じだな？　確実に俺を貫いたはずのお前の槍は、かすり傷程度に終わり、なぜか逆に俺の鎌が、お前の体に致命傷を与えている」
「……っ」
「別に難しいことじゃないだろ？　ようするに、お前は俺より弱かった。そして、今から俺に殺される。そんだけのことだろうが」
言って、赤穂は高々と大鎌を振りかざす。
「最後は死神気取りで、その首はね飛ばしてやる。避けれるもんなら避けてみろ」
そして、ふりかぶった大鎌を振り下ろす。
「おらぁっ！」
「ぐっ……」
向かい来る一撃。
もはやこの体では、どこに受けても死は免れない。
痛む体にムチ打って、氷室は崩れたままの姿勢で全力で後ろへ飛び退いた。
首を切り落とす軌道で放たれた一撃を、すえすれのところで回避する。
刈り取られた前髪が数本、宙を舞った。
「何だ、まだ動けるのか。けど、その傷でいつまでもつかな？」
赤穂は詰め寄ってくるが、その足は走ったりすることはしない。
一歩一歩歩いて近づき、じわじわといたぶって死に至らしめるその過程を楽しんでいる。
一撃を回避したとはいえ、刻一刻と氷室には死が迫る。

出血量が多い。
おそらく、常人ならとっくに意識を失っているだろう。
動いても動かなくても、血は流れ出し続ける。
すでに目は霞み始め、体のあちこちから感覚がなくなりつつあった。

「……まずい、ですね……このままじゃ本当に、こんなのと心中する羽目に、なりそうです……」
この状態からの形勢逆転は望めない。
仮にできたとしても、一か八かで刺し違えるのが限界だろうと氷室は考える。
「……考えてる余裕は、なさそうですね。一か八かの賭けなんて、何年ぶりでしょうかね……」
呟き、小さく笑った。
笑えない状況に立つと、人は笑いを堪えられなくなるというのはどうやら本当のようだ。
「っ、ぐ、あ……」
槍を支えに、氷室はその体を強引に立ち上がらせた。
「お？」
その動きに、歩み寄っていた赤穂も一度動きを止める。
「何だよ、まだやんのか？　いい加減に面倒臭いから、大人しく跪けよ」
「……一部だけ、同感ですね」
「あ？」
「……私もいい加減、疲れました。あなたとの会話は、それだけでストレスになる。もういいですから、それ以上喋らないでもらえますか？　空気が汚れる」
「……何だと？」
「聞こえませんでしたか？　空気が汚れるから、黙っていろと言ったんです」

「……殺す」
「三度言わせるな。無能が」
その言葉が合図となり、赤穂は突進した。
ただ本能のままに、目の前の敵を切り刻み、跡形もなく焼き尽くしてしまいたいがために。
かたや、迎え撃つはずの氷室は。
「……」
この局面で、唯一の武器である三又の槍をその手から消し去った。
これでもう、身を守る盾となるものは何一つない。
何もしなければ、このまま四肢をバラバラに引き裂かれて死ぬだけである。

「けっ、何だかんだで結局諦めてんじゃねぇか。ジッとしてろや。痛みを感じる間もなく消し炭にしてやる」
「……ない」
「何をブツブツと……」
構わずに切りかかろうとした赤穂の目に、しかし妙なものが映った。
「な、んだ？」
それは、いつの間にか周囲を覆いつくすほどに立ち上った白い霧だった。
いや、それは正確には霧ではない。
これは……。
「水蒸気か？　ヤロウの消した武器に注がれて多分の水が、俺の炎に反応して気化してやがる……」
「……は、ない」
「何を言って」
瞬間、赤穂の背中に寒気が走った。
目の前にいたのは、あまりにも冷酷で冷たい、そんな目の色をした男だった。

目が合っただけで足が竦みそうになるほどの圧力。
恐怖とは似て非なる何かに、わずかに足が鈍った。
そして、その口からは冷たい言葉が囁かれていた。
さっきから何度も、何度も、何度も。
ただ、こう一言。

「――四度目は、ない」

ゾクリと、凍てつくような寒さが赤穂の全身に走った。
が、時はすでに遅い。
全ての準備は整っていた。
「コイツ、まさか……」
気付いたとき、赤穂はすでに手遅れだと悟った。
氷室は本気で、死なばもろともの覚悟でこんなことを実行していたのだから。
氷室の武器である槍を構成する物質は、基本的に水である。
が、それは全体が水から成り立っているわけではない。
特に先端部の切っ先には、水ではなく液体酸素を固体にしたものを使用している。
液体酸素の凝固点は、マイナス二百度を越える。
武器である槍を消し去ったとき、氷室はこの液体酸素部分を周囲にばら撒いた。
液体酸素は本来、マイナス百八十度付近で沸点を迎えてしまうが、氷室はこれをコントロールして制御し、水と同様に扱った。
結果、液体のまま散らばった液体酸素は、赤穂の炎に反応して一斉に沸騰する。
さて。
水が高温の物質と接触した場合、気化が一気に引き起こるため、ある現象が起こる。
それは、マグマの熱によって地下水が水蒸気となり、蓄えられた

エネルギーが一気に流れ出して火山が噴火することに等しい。
その現象とは、即ち。
「水蒸気、爆発……！」
言葉にしたときには、全てが終わる頃だった。
何の予備動作もなく、大爆発が引き起こされた。
擬音として形容すら難しいその爆音は、赤穂も氷室もまとめて呑み込み、この大樹の内部にさえ轟くほどの振動を引き起こした。

爆音の残響が遠ざかっていく中、その場には間欠泉が吹き上がったような蒸気の名残が蔓延していた。
爆発によって氷室の体も大きく吹き飛ばされ、樹の壁に体を強く打ち付けていた。
「……う」
うめくことが精一杯だった。
とても、赤穂の生死を確認するために動き回る余力などは残っていない。
もはや生きていることが奇跡に等しい。
「……さす、がに……体が言うことを、聞き、ませんね……」
樹の根に背中を預け、座り込むような姿勢で氷室は目を開けた。
視界は蒸気一色に包まれ、数メートル先まで見通すことができない。
どうなったかは分からないが、無事ではすまないだろう。
死んでしまっていてもおかしくないほどの爆発だったのだから。
逆に言えば、そんな爆発に巻き込まれてなおこうしてムダ口を喋るだけの余裕があるということは、よほど悪運が強いのだろうかと、氷室は自嘲気味に笑う。
「……今回ばかりは、参り、ましたね……せめて、この傷がなければ……もう少し、どうにか……」
視界が霞む。
無駄口もここまでか。

「……皆、どうか……無事、で……」

視界が暗転した。

白い霧に包まれながら、氷室は静かに意識を失った。

仲間の身を案じながら、静かに、静かに……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１５：たった一つの

「……っ！　今の音は……」
「どこかしらでまた、決着が付いたのだろう」
「飛鳥、氷室、真吾……」
「……いつまで他人の心配をしている、黒栖大和」
と、いたって冷静な口調で日景は告げた。
「余裕か油断か、どちらにしてもこちらに背中を向けるなど、あまり感心できないことだな」
「っ、何言ってるんだ。戦ってるやつらだって、君の仲間だろ？気にならないのか？」
「ならないな」
日景ははっきりと言い切る。
「それ以前の問題だ。俺があいつらを案じる理由などはなく、同時にあいつらに案じられる理由も何一つない」
言いながら、数歩歩み出る。
「さて。お喋りもこれくらいにしよう。お前達に時間がないように、こちらにもあまり余裕はないのでな」
スゥと、その場の空気が急激に冷え込んだ。
その寒さに身震いすら感じそうになるほどだ。
「迷う暇はやらん。分かったのなら戦う意思を見せろ」
凍てついた空気が一点に凝縮し始める。
その一点とは、日景の右手。
パキ……ピキ……。
透明な粒子が集まり、徐々に型を成していく。
瞬く間にそれは、透き通った氷の刃へと変化した。
「さて、始めるか」
剣を振り、切っ先を向ける。

やむなく、僕も同様にその手に剣を握り締めた。
原型のない、透明な風が渦巻く刃を。

トンと、音もなく日景は地を蹴った。
瞬間、その姿は正面を構えていた大和の視界から消える。
目で追うが、その姿は捉えきれない。
右か左か、背面……それとも上か？
あらゆる方向からの攻撃に反応できるよう、わずかに身を屈める。
だが。
「……っ！」
その一瞬の気配を察知し、僕は大きく後ろへ飛び退いた。
他でもないその気配は、真正面から迫ってきていたのだから。
ヒュンという空を裂く音が響き、日景が姿を現した。
一方、飛び退いて回避を試みた大和ではあったが、鋭い切れ味を持つ氷の剣の切っ先は、わずかに頬を切り裂いていった。
真一文字の傷痕から、うっすらと血の雫が流れ出す。
「……っ、速い。目じゃほとんど追いきれない……」
厳密に言うのならば、それは速さではなく、読みづらさというべきかもしれない。
予想できる範囲の全てのパターンを裏切る……トランプで言うところのジョーカー的存在とも言うべきか。
「いつまで休んでいる？」
と、気が付けば今度はいつの間にか背後を取られている。
「くっ！」
恐らく、その言葉がなければ反応はできなかったかもしれない。
どちらにせよ、ここからの状態ではさっきのように飛び退いてかわすことなど到底不可能だ。
となれば、受けきるしかない。
横一線に振りぬかれる一撃を、僕は剣を縦にして受けた。
キィンという、頭の芯にまで響いてきそうな共鳴。

それは音と言うよりも、すでに音楽に近いような効果音だった。
透明な二つの刃がギリギリと互いの刀身を削りあう。
そこに飛び散る火花はなく、わずかに削り取られた氷が、やけに奇麗に宙を舞った。
恐らく、腕力の差はほどんどない。
こうして受けている立場からでも、それは何となく分かる。
とにかく一度、どうにかして捌いて距離を取った方が……。

「……フン」
と、つまらなそうに日景は鼻を鳴らした。
それに気を取られたのがいけなかった。
ズンと、直後に僕の脇腹に第二の衝撃が走った。
「が、あっ……」
その勢いに、僕の体は吹き飛ばされる。
根の地面の上に何度も体のあちこちを打ちつけながら転がり、ようやく動きを止める。
「げほっ……う、あ……」
口の中に鉄の味が広がっていた。
蹴りを見舞われた右脇腹もズキズキと痛む。
鋭い角度で放たれた蹴りは、僕にガードする暇さえ与えてはくれなかった。
武器として目に見える剣ばかりに気を取られていた結果がこれだ。
思いのほか、ダメージは大きい。
「ぐ……あっ……」
剣を支えにして立ち上がりこそするものの、痛みだらけで頭がまともに回らない。
とはいえ、休み暇などあるわけもない。
空いている左手に力を集中させ、もっともダメージの大きい脇腹にあてがう。
淡い光が瞬いて、患部の痛みが少しずつだが退いていく。

「なるほど。風の力というのはそんなこともできるのか。思った以上に厄介だな」
やや離れたところでそれを見ている日景は、表情も口調も変えずに呟いた。
「どうやら、思った以上に長引きそうだ。いちいち回復されたのでは面倒だからな」
言って、日景はその手の剣を虚空に振った。
ヒュンと音が鳴り、その直後に、氷の剣から白い煙のようなものが立ち上り始めた。
「え……」
その煙のようなものは、尽きることなくどんどんその量を増していく。
そしてやがて、視界全てを埋め尽くした。
冷気を孕む、白いカーテン。
まるで猛吹雪の中にいるかのように、一メートル先の景色さえも見通すことができない。

「――フロストサンクチュアリ」

日景はその名を告げる。
「説明するまでもないだろう。この冷気の霧が、俺の支配する領域だ。お前からは俺の姿は見えないだろうが、俺からはよく見える」
「く、そ……」
前後左右、さらには上空に至るまで、全て真っ白な霧に覆いつくされた。
密閉空間に閉じ込められたわけではないので、動き回ることはできるだろう。
だが、どこから攻撃の手が伸びるか分からないのでは、大した違いなどありはしない。
「……お前に、個人的な恨みなどは何もない」

一歩、日景は歩を進める。
「よって、俺がお前を殺す理由もない。逆もまた然りだろう」
さらに、一歩。
「だが、それでも譲れないものがある。そのために、お前達はやはり障害になる。だから、ここで倒す」
その足が止まる。
「……恨んでもらって構わない。呪ってくれて構わない。来世で殺されても構わない」
氷の剣を、構えて。
「だが、お前はここで倒す。何が何でも、だ」
「……」
「……悪く思うな……終わりだ」
音もなく駆け出す。
冷気の層を突き抜けて、その剣を。
一直線に、振り抜いて……。
しかし、その瞬間に。

「な……」
轟という音と共に、爆風が生まれた。
生まれた風は、周囲を覆いつくしていた冷気の霧をことごとく振り払い、やがて日景の姿を暴き出す。
吹き付ける突風に、日景はたまらず腕で視界を遮った。
この風に紛れて攻撃される可能性は高い。
剣を握る手は、いつでも反応できるように構える。
が、しかし。
「……い、ない……？」
細目で覗いた視界の向こう、ちょうど突風の中心にあたる場所。
そこには、誰の姿もありはしなかった。
ほんの一瞬前まで、そこに標的がいたのは間違いない。
今の一瞬で移動したのか？

だとしたら、一体どこへ……。
考え始め、日景はすぐに気付いた。
いや、気付かされた。
ものすごい重圧の力が、すぐそこに迫っていた。
そう……背後に。
「ぐっ！」
すかさず振り返り、氷の剣で受ける。
が、すさまじいほどの回転速度で放たれたその一撃は、見る見るうちに氷の剣の刀身を削り取っていった。
氷の破片が飛び散る。
剣としての原型が、なくなっていく。
「ぐ……あっ……！」
とうとう、日景はその風の塊に吹き飛ばされた。
十メートル以上も吹き飛ばされ、根の壁に体を直撃させてようやく止まる。
「が、は……」
ダメージは大きい。
できる範囲で威力を削ぎ落としたというのに、それでもなおこの威力。
もしもそのままの威力で直撃を受けていたら、一撃で戦闘不能に陥っていたかもしれない。
「く、そ……」
日景は立ち上がった。
ダメージこそ受けたものの、まだ倒れるには早い。
「……僕も、同じだから」
「……」
「やらなくちゃいけないことがあるから。助けてあげたい人がいるから。だから、譲れない。折れない」
風の剣を掲げ、言う。

「――そのために、君を倒す」

賭けたのは命なんかじゃない。

たった一つ、譲れない思いだけ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１６：心、動いて

衝撃と呼ぶにはあまりに美しすぎる音色が響いた。
ぶつかり合うのは二つの剣。
翠の風と、無色の氷。
「はあっ！」
「はっ！」
キィンと、ぶつかり合い弾かれるたびに、光の粒子が飛び散った。
同時に生じた衝撃で、僕達も弾き飛ばされる。
「く……」
「ぐっ……」
互いにもうずいぶんと息も上がってきている。
度重なる打ち合いで、剣を握る手は痺れ、十分な力が入らない。
少しでも気を抜けば打ち合いで競り負け、武器を飛ばされてしまうだろう。
そうなればもう、決着は付いたようなものだ。
特に僕は、万に一つでもここで力を使い果たして倒れてしまうことは許されない。
進まなければならないんだ、この先へ。
かりんが待つ、最深部に。
「……余所見とは、余裕だな」
そんな僕の視線に気付いたのか、日景はそう呟いた。
「別に、余裕なんかじゃない」
そんな余裕があるくらいなら、全部力に変えて日景を叩き伏せているところだ。
「かりんが気になるか？」
「……っ！」
図星を付かれ、僕はわずかに息を呑んだ。

「……ふん。今死ぬかもしれないというのに、この期に及んで他人の心配か。つくづく甘いヤツだな」
「違う。僕はもとから、かりんを助けるためにここにきたんだ。だから絶対に、君を倒して先に進む」
痺れた腕を奮い立たせ、強く剣を握り締めた。
「……いいだろう。そろそろ幕にしようじゃないか」
対する日景も、その手に握る剣に今まで以上の力を凝縮し始めた。
ただ立っているだけで、ものすごい威圧感と冷気がそこに集中しているのが分かる。
今までの打ち合いの威力とは桁が違う。
正真正銘、勝負をつけるための絶大な一撃が来る。
迎え撃つ……いや、それではせいぜい相打ちまでしか望めない。
僕はここで倒れるわけにはいかないんだ。
かといってこれだけの威力を誇る一撃、回避もこの限られた空間では無理だろう。
ならば。
「……力を、貸してくれ」
今はもういない、しかし確かにそこにいた精霊に、僕は願う。
足元から風が立ち上った。
それらは少しずつ渦を巻き、やがて僕の体をまとう鎧へと変わる。
「風の鎧、か。だが、それでこの一撃を防げるかな」
日景の方はすでに力の充填を終えている。
溢れんばかりの冷気が一本の剣に集められ、白とも無色とも見えるような輝きを放っていた。
準備は整った。
あとはただ、発揮できる力の全てをぶつけ合うだけだ。
「……」
「……」
一瞬の沈黙。

それを解き放つ合図は、互いの視線の衝突だった。

「「――行くぞ！」」

声は同時。

そして、駆け出したのもまた同時だった。

互いに握り締めたその剣に、今持ち得る中の最大の力を込めて、ぶつかり合う。

しかし、衝突までまだ距離があるその間合いで。

「っ！」

氷の剣は、変化した。

刀身が二つに割れる。

割れた二つがさらに割れ、またさらに……と続き、まるで木の枝のように分かれては伸び、こちらに突き進んできた。

「無限の樹氷に喰われてしまえ！」

無数に枝分かれした氷の牙のその全てが、僕の全身目掛けて襲い掛かった。

逃げ場は、なかった。

全ての牙は互いに交錯し、ときに互いの牙を削りあい、削ぎ落としながらも突き進んだ。

それはまるで、檻の中にいたまま、外側から無数の武器で串刺しにされたような光景。

立ち上る冷気の白い霧が、少しずつ晴れていく。

絡み合う氷の牙が、その姿を現した。

その、中に。

「……っ？」

僕の姿は、ない。

「バカ、な……どこに……っ！」

そして日景が振り返った背後。

そこに。
「あああああっ！」
力を使いきって、がら空きになったその体の中心に。
振り抜いた風の剣の腹が、深くめり込んだ。

「が……っ」
一撃を受けた日景の体は、そのままくの字に折れ曲がって吹き飛んだ。
そして、根の壁に激突してぐったりと地面に横たわった。
とはいえ、僕の体も……。
「……っ、はぁ、は、あ……」
全身で息をする。
握った剣が音もなく消え、僕も地面に肩膝をついて体を支えた。
全身から力が抜けていくと同時に、体のあちこちに鋭い痛みが走った。
分かっていたとはいえ、かなりの無茶をやらかした。
この痛みはその反動だろう。
何とか体が持ちこたえてくれたかたよかったものの、失敗すれば僕の体もバラバラに引き裂かれていたかもしれない。
力の制御が思った以上にうまくいったのか、あるいは……。
いや、よそう。
今はそんなことを考えている余裕はないんだ。
一刻も早く、最深部に行かなくちゃ……。
「……行かなくちゃ、いけないのに……」
反動は思った以上に大きい。
崩れかけた体をもう一度立ち上がらせるだけでも、とんでもない苦労を強いられる。
「ぐ、うあ……っ」
全身を駆け抜ける痛みに耐えて、少しずつ体を起こす。
足はすでに棒のようになっていた。

それどころか、この体が自分のものであるということに実感さえ持てなくなりつつある。
「こんなのに、構ってられるか……」
よろよろと歩き出す。

ふと、視界の端に日景の姿が映った。
その体が、呻き声と共にわずかに動く。
大丈夫、生きている。
それだけ確認して、僕はまた体を引きずった。
急げ。
休んでる暇はない。
倒れている暇はない。
道は開かれたんだ。
あとはただ、最後まで突き進めばいいんだ。
……最後まで、進めば……。
「……く、そ……」
頭では分かっていても、体が追いついてくれない。
蓄積したダメージは、確実に体を蝕んでいた。
足が止まる。
目の前がかすんで、ぼやけ始めた。
「……早く、先に……行かな、くちゃ……」
その思いも虚しく。
僕の体は、そこで再び崩れ落ちた。
それでも這いずるように、手を伸ばした。
が、そんなことじゃ到底届かない。
視界が揺らぐ。
そして、暗転。
底なしの沼に沈んでいくように、意識が遠のいていった。

「……大和……？」
「かりん？　どうかしたか？」
「……今。大和の気配が……」
「そうか。あいつらもここに近づいてるってことなんだね。ってことは、どういう形になるか分からないけど、終わりももうすぐそこってことか……」
「……違う」
「え？」
「……近づいてない。これは……少しずつ。遠ざかってる。もしかして……」
途端に、かりんの胸の内に不安がよぎる。
ドクンと、心臓が跳ねた。
……知っている。
この感覚を、知っている。
過去に一度だけ、目の前で味わった痛みのない傷痕。
大切なものが、消えていく感覚。
あの日と同じ、ざわめくような心の音色。
赤い、記憶。
「……大和」
駆け出しそうなその足を、しかしかりんは踏み出せなかった。
決別はもう済ませた。
もう、敵として立ちはだかること以外に会う理由はない。
それに、今ここで駆け出してしまえば、全てなくなってしまう。
望みも、願いも、祈りも、全部。
夢にまで見た理想が、泡沫の夢で終わってしまう。
このままただ、時が過ぎるのを待ち続けていれば、夢は現実となるのだ。
だから、黙っていればいい。
見て見ぬ振りをすればいい。

たったそれだけのことで、夢は叶う。
戻ってくる。
あの頃の日々が、優しい記憶が、暖かいあの人の声と手が。
……それなのに。
そうだと、分かっているのに。
「……っ！」

――どうして心は、留まることをよしとしてはくれないのだろう？

「……っ。大和……！」
そしてかりんは、駆け出した。
もう、自分でも何が何だか分からなかった。
矛盾ばかりを繰り返す胸の中。
どっちが正しいとか、悪いとか、そんなもはもうどうでもよくて。
ただ、単純に。
同じ暖かさをくれた人を、失いたくない。
それだけで、足は動いた。
走り出せたのだから。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１７：偽りの扉を越えて

道に迷ったわけではないと思う。
確かに薄暗くはあるが、ここまで続いてきた道も、この先に続く道も真っ直ぐ一本のみのはずだ。
「……どうなってんだ？　行けども行けども何も見えてきやしない……」
何の進展もないままに歩き続けていた真吾は、たまらずそう口にした。
ただでさえ時間がないというのに、こんなところでもたついているわけにはいかない。
一秒でも早く最深部に向かわなくてはいけないはずが、これでは全く時間の無駄遣いだ。
まさかとは思うが、やはり分かれ道のいくつかは何かしらの罠が仕掛けられていたのだろうか？
例えば、同じところをぐるぐると回り続けるだけの永遠に終わらない道、とか。
そんなものに引っかかってしまったのだとしたら、状況はかなり悪くなる。
もとから不利な前提で始まっているだけに、ここにきての必要以上のタイムロスはもはや致命的ともいえる。
とはいえ、今の段階ではまだ何ともいえない。
もうしばらくは道なりに歩いていくしかないか……。
「……ん？」
ふと、視界の先に明かりが映った。
出口の光だろうか？
いや、それにしてはあまりにも小さく弱々しい光だ。
例えるならそれは、地下通路に灯されたロウソクの炎の揺らめき

のようなものだった。
が、真吾はそれによく見覚えがあった。
なぜなら……。
「くそ、どうやら本当にそうなのかよ……」
その灯りを見下ろして、真吾は吐き捨てた。
足元にある灯り。
それは、真吾が自らの手で生み出した炎をまとった短剣を、道標の代わりに道の上にあらかじめ突き刺してきたものだった。
それがここにあるということは、だ。

「間違いないな。この道は、どこまでいってもループしてやがる」
メビウスの輪という言葉がある。
紐状の紙切れやテープなどを、片側を一度だけひねってくっつけて輪を作った場合、表と裏が同時に存在することになり、いつまでたっても終わることがなくなってしまう。
この道はまさにそのような構造をしているのだろう。
ゆえに、どれだけ歩いたところで終わりが見えてくることはない。
そんな道を歩かされていたんじゃ、最深部なんかに辿り着けるわけがなかった。
「さて、どうするかな。後戻りはもうできそうにもないしな……」
とりあえず、これ以上歩くことはもはや無意味だ。
体力の無駄遣いにしかならない。
どうにかしてここから抜け出したいのはやまやまなのだが、何かいい方法はないものか。
真吾は立ち尽くし、しばし思考する。
「こんな芸当ができるのは、アイツだけだろう。アイツの飼いならしてるあの闇は恐らく、様々なものを喰うことできる。それは物体に限ったことじゃなく、万物の理や定義までも。だからアイツは、この道に対しての道という定義を喰った。つまり、始まりがあって終わりがあるという定義を壊しやがった。だとすると、入り口まで

戻ることもできそうにはないか……」
あらゆる法則性を無視したその力は、強大さを通り越して非常に厄介だ。
定義を壊すということは、理屈が通じない。
早い話が何だってできるということになる。
言葉にする分にはさほど重みも感じない言葉だが、それを有言実行できるとなれば話は別だ。
その力の前では、ありえないことは一切ありえなくなる。
これはないだろうとか、そんなはずがないとか、そんなことを考えた瞬間に喰い殺されてしまう。
もはや油断とか隙とかの時限の話ではない。
ルールは常にそこで作られ続けているのだ。
それも、自分の都合のいいように、だ。

「くそ、認めたくはないが、アイツも神の力を引き継いでるだけあって厄介だな。いや、ヘタをしたらもう神の領域を踏み越えようとしてるんじゃないか……」
定義の分解は、この世の中のバランスを一気に狂わせるものだ。
それだけの影響力を持つ力は、まさしく神のみにしか扱えないとされている。
が、それをこうして現に使っているわけだ。
力が戻ったというのはどうやら本当らしい。
もしもこれがまだ全力でも何でもない、ほんの一部の力にしか過ぎないとしたら。
決着の行方には、暗雲が立ち込めることになる。
「……とにかく、今はここから抜け出さないとな。うまくいくかどうか分からないが、何もしないよりはマシか……」
真吾は呟くと、その手にまた一つの炎をまとう短剣を生み出す。
そしてもう一度、今まで歩いた道の上をなぞるように歩き出した。
しかし、今回はゆっくりと、足元を念入りに確認しながらだ。

「この道がメビウスの輪の定義を孕んでいるとしたら、どこかに……」

あるはずだ。

その、表と裏を繋いで一つにしたはずであろう、隠しきれない繋ぎ目が。

短剣の炎を頼りに、足元を念入りに照らす。

ただでさえ蠢くように重なり合う根の道は、ところどころに隙間があるので見極めにくい。

しかし、現段階でこの状況を打破できる可能性があるとしたらこれくらいしかない。

もちろん、そうさせないようにあらかじめ手を打たれていることも十分に考えられるが……。

「……」

今はやるしかない。

いざとなれば、全力でこの根の道全体に炎をたきつければ焼き尽くすことも可能だろう。

が、それではそこにいる真吾自身も巻き添えを食らう可能性がある。

一か八かで決行するには、あまりに不利だ。

「……さすがにないか。アイツもそこまで油断はしてないってことか」

どうやら本当に一か八かで、周囲一体を焼き尽くす必要が……いや、まだ手がないわけではないが……。

「出し惜しみしてる場合じゃない、か。できるなら、使いたくはなかったんだけどな……」

真吾とて、神によって生み出された存在だ。

それゆえに、その内には強大な力を秘めている。

が、真吾はそれを使うことを自分に対しての禁忌としていた。

緋之宮真吾という一人の人間として生きると決めたその日から、

もう二度と使うまいとして封じ込めてきたものだ。
その気持ちは今でも変わってはいない。
しかし、今に関してはもはや止むを得なかった。
それだけ状況は切羽詰り、一刻を争っているのだから。
「……我、神の名を借りてここに力の片鱗を示さん。我が願うは定義の回帰。幻想の焔よ、その揺らめきで彼の真実を惑わし、ここに……」
スゥと、小さく息を吐き、続けた。
「――偽りの真実を偽造せよ」
言い終えると同時に、真吾の目の前に炎の壁が立ち上った。
しかしそこに熱はなく、それらの炎は全てがまやかしのものでできていた。
炎の壁は、しだいにその中央に穴を広げていく。
それは徐々に広がり、やがて一つの輪になった。
そしてその輪の向こうには、こことは違う密度の闇が佇んでいた。
その炎の輪は、扉だった。
真吾はその力で、この輪の向こうに出口が在るという偽りの真実を偽造し、この空間の定義を無理矢理に捻じ曲げたのだ。
よって、輪の向こうはこのループした空間とは別のところに繋がっている。
恐らく、正規の出口……本来辿り着くであろうその場所に。
「よし」
真吾はそのまま輪をくぐる。
通り抜けると、炎の輪は風にかき消されたかのように静かに消えた。
そして、出た場所は。
「……ここが、最深部か？」

出たところは、やけにがらんどうな広い空間だった。
暗さのせいではっきりとは分からないが、ドーム状のような造りをしているようだ。
周囲を見回してみるが、他には誰の姿も見えない。
どうやら一番乗りしてしまったようだ。
「……どうなってんだ、この場所は」
シンと静まり返っているにもかかわらず、すぐ間近で大きな何かが脈打っているような感覚。
一言で言えば、それはものすごく不気味な感覚だった。
あってはならないものが、すぐ近くにある。
「ん？」
ふと、何かが見えた。
真吾はそちらの方向へと歩く。
やや歩くと、視線の先に何かが見えた。
根の道がそこを境に隆起し始め、傾斜になっている。
その坂道の、一番上。
そこに、ある。
あってはならないものが。
「……何だ、あれは……？」
坂を上りきったその場所に、根で作られた檻のようなものがあった。
球体のような形をするそれは、まるでその中にある何かを守るように見える。
いや、間違いなくあれは何かを守っている。
一体、何を……。

ドクン。
「っ！」
それは、真吾の心臓の鼓動ではなかった。
そんなものとは比べ物にならないほどの、巨大な鼓動。

間違いなくそれは、あの根の檻の中から聞こえていた。
とてつもない威圧感。
何もされていないのに、膝をついてしまいそうになる。
「まさか、あれは……」
見覚えがなく、しかし知識としての記憶だけで真吾は覚えていた。
神がいくつもの世界を生み出したとき、最初に種子を撒いたという。
種は発芽し、成長することによって世界は形を保っていく。
やがて発芽を終えた種は、長い年月をかけて力を蓄えるべく、自らを巨大な繭に包み込むという。
今、それが。
目の前に、あった。
「アイツ、まさかこれをぶっ壊すつもりじゃ……」

「――ご名答」

と、願ってもない答えは、すぐそこから返ってきた。
「……お前」
「君ならもう少し早く気付くと思ったけど、そうでもなかったようだね。まぁいい。どうあろうと……」
わずかに目つきを鋭くし、それは告げる。
「邪魔はさせない。君にはここで果ててもらう」
冷たく暗く、哂って言った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１８：君の隣へ

「しばらくはそこで大人しくしててもらうよ。大事な儀式の邪魔にならないようにね」
「くそ、どうなってんだこれは……」
真吾は苛立ちを含んだ声を吐き捨てた。
「抵抗するのは自由だけど、無駄なことだよ。その檻は、滅多なことじゃ崩れはしない」
「ぐ……」
真吾は今、言葉どおりに檻の中のような空間に閉じ込められていた。
暗い闇のような色合いの柵は、触れることすら許してはくれない。触れたところで、その手はまるで底なしの沼の中に沈むように呑み込まれていく。
実体の掴めない相手に、困惑を隠せないでいた。
どれだけの短剣を振り上げて切り裂いても、その檻は瞬く間に再生を果たしてしまう。
投げつけたところで結果は同じだ。
手応えも何も感じられず、ますすべなく舌打ちを繰り返すばかり。
「無駄だと言っただろう？　そんな力じゃ、僕の檻は破れないよ。その、奈落の鳥籠はね」
まさに文字通り、それは鳥籠に相応しい形をしていた。
だが、その形はどこか歪で、恐怖をあおる寒気を感じさせている。
呼吸を繰り返すだけで、生気まで一緒に吸い取られてしまうかのように。
「さて。僕もいつまでも君に構ってる時間はないんだ。最後の仕上げが待っているからね」
「……最後の仕上げだと？　お前、この期に及んでまだ何かしよう

ってのか？」
「それは君の勘違いだろう。もとより、全てはこれからすることを終えることでようやく完結するんだ。この世界を一度無に返し、そこに新たな世界をゼロから構築する。その新世界はきっと、苦しみも悲しみもない喜びに満ち溢れた楽園のような世界になるだろう」
「……それが、お前の理想とする世界の姿なのか？　本来あるべき姿だと、そう言うのか？」
「もちろんさ。そのために僕はこうして、神の意思に抗いながらここまできたのだから。今更になって、この意思を捻じ曲げたりなんてできるものか」

「……くだらねぇ」
「……何だって？」
「くだらねぇって言ったんだよ。お前の理想か空想か知らないが、そんな身勝手な願望で無関係なヤツラを巻き込んでんじゃねぇよ」
「聞き捨てならないな。僕の追い求めてきた理想の、どこがくだらない？　間違ってるというんだ？」
「……お前、本当に気付いてないのか？　俺なんかに言われなくたって、もう気付いてるんじゃないのか？」
「……何を馬鹿な」
「馬鹿げた？　その言葉をお前が口にするのか？　何よりも馬鹿げているのは、他ならぬお前の理想とやらだろうが」
「それこそ馬鹿げている。君のほうこそ、僕の理想が気に食わないだけで、単に反発しているだけなんじゃないのか？」
「ああ、そうだ。当たり前だろ。嫌なことを嫌ということのどこがおかしい？　どうして他人の敷いたレールの上を歩いていかなくちゃならないんだ？　そんなのどう考えたっておかしいだろうが」
「……」
「分かってねぇなら、いくらでも教えてやる。自分の理想を他人に押し付けるな。自分の考えが全て正しいと思うな。自分が世界の中

心になっていると思うな。俺達は神に生み出されただけのちっぽけな存在かもしれない。けど、何もかもを予め用意してもらわないと歩き出せないほど、俺達は愚かじゃない。俺達は自分の足で歩いて、自分の頭で考えて行動できるんだからな」

「……ふん。そうやって、もっともらしい言葉だけを並べ立てていれば、自分を見失わずにいられるのか？」

それは真吾の言葉を一蹴する。

「そう考えて行動した結果が、間違った結末を招いたらどうする？誰に言われずとも後悔し、自責し、自分で自分を不幸の中に導いていくだけだろう。間違いは正せばいいものじゃない。間違いは犯さないことが真の答えだ」

「だが、間違ったことで学び取るものも沢山ある」

「それが言い訳だといっているんだ。都合のいい後付けで、過ちを正当化するな！」

怒鳴り声がむなしく響く。

双方の考え方は、広い視野で見ればどちらも正しく、そして同時に間違いでもあった。

が、そんな考え方では結局何も変わりはしないのかもしれない。

変えるために行動をした。

その結果が、これだったのだから。

「……時間の無駄だね。いいから君は、大人しくそこで指をくわえて見ていればいい。この世界が生まれ変わる、その瞬間をね」

「……ああ、そうさせてもらうぜ。お前の理想が、現実の中で粉々に打ち砕かれる瞬間をな」

「……う」

僕は呻き声と共に意識を取り戻した。

気を失って倒れていた時間はどのくらいだっただろうか。

はっきりとは覚えていないが、そう長い時間のことではないと思う。
全身のあちこちに残る鈍い痛みが、それを僕に知らしめてくれていた。
「……目が覚めたか」
ふと、そんな声がすぐ隣で聞こえた。
僕は視線だけでその方向を見る。
「……どうして、君が」
そこには、僕と同様に寝の壁に背中を預けて座り込む、日景の姿があった。
「どうしてとは、ずいぶんだな。悶絶しそうな一撃を見舞ってくれたのは、他ならぬお前だろう、黒栖大和」
「あ……」
言われ、僕は少し前の記憶を思い出す。
「……ごめん」
「……謝るな。お前は俺に勝った。俺はお前に負けた。それだけのことだ。そして、それが全てだ」
「日景……」
「……目が覚めたのなら、さっさと行け。待たせている人がいるんだろう？」
「あ、うん……」
そうだ、こんなところで立ち止まってなんかいられない。
早く最深部で、かりんに会ってもう一度話をしないと……。
「……じゃあ、僕は行くよ」
「ああ、さっさと行け」
「……あのさ」
「謝るな。振り返るな。前を見ろ。そして、お前が成すべきことを成せ。そのために、ここにいるんだろう？」
「……うん。行ってくるよ」
「……何度も言わせるな。さっさと行け」

「……うん」
僕は日景に背を向け、ボロボロの体を動かした。
痛みはある。
だが、それでもまだ体は動く。
走ることもできる。
だったらもう、何も悩むことはないだろう。
ただ、真っ直ぐに。
彼女の元へ、急げ。

根の道は次第に入り組み始めていた。
ただでさえ悪い足場がさらにうねるように隆起し、不気味に蠢いているかのようだ。
「かりん、間に合ってくれ……必ず、必ず君を助けるから」
だからそのためにも、まず君の本音を聞かせてほしい。
何を望んでここまできたのか。
何を求めてここまできたのか。
何を願ってここまできたのか。
その胸の中にある、言いたくても言えずにいた本当の言葉を、聞かせてほしいんだ。
他ならぬ、君自身の声で。
君の叫びで。
泣いたっていい。
きっと誰も笑ったりなんかできないから。
どれだけ言葉足らずで、声にならない声だとしても。
それが君の口から出た言葉ならば、それはやはり、きっと。

――何物にも変え難い、たった一つの真実なのだろうから。

だから。
本当の声を聞かせてほしい。

何を願い、何を求め、何を望み、何を思ったのか。
偽りのない、正直な気持ちで。
全てをここに、吐き出して。
のどが枯れるほどに、叫び続けて。
涙が枯れるほどに、泣き続けて。
そすればきっと、そのあとには。
一点の曇りすらない奇麗な気持ちが、そこに残るはずだから。
さぁ、今行くよ。
今から君を、迎えに行くよ。
例え世界中を、敵に回すことになったとしても。
僕は、きっと……。
君の一番、傍にいる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１９：決別

「……そこをどいて」
「どこへ行くんだい？　君が望んだ場所は、もうこちら側ではないだろう？」
「……いいからどいて」
「……彼らが心配かい？　それだったら、ひとまず安心していいよ。誰も彼も、まだ生きているみたいだからね。もちろん、君が心配している風の能力の彼もね」
「……どうして？」
「何がだい？」
「……どうして。皆を戦わせたの？　あなたの力なら。ここへ来させなくすることくらい。簡単だったはず」
「出る杭は打つ。が、出そうな杭も打つのが僕のやり方でね。分かりやすく言えば、念には念をということだよ。それがどうしたっていうんだい？」
「……だからって。こんなの……私は望んでない。こんなことがしたくて。私はあなたに。力を貸すんじゃない」
細く小さな声で、かりんは叫んだ。
「……それはすまなかった。実を言うと、僕も内心では結構焦っていたんだ。このままじゃ大事な計画が狂ってしまうんじゃないかと、不安だったんだ。ここまできてずべてが水の泡に帰すのはごめんだからね」
「……」
「大丈夫、君の言葉は覚えている。無関係な人もそうでない人も、この世界にいる全ての人々の再生。そうだったね？」
聞かれ、かりんは無言のままで頷いた。
「その願いも、もうじき実現する。ここまできたんだ、もう誰にも

邪魔はさせやしない。だからかりん、君には悪いけど、もしもこれ以上邪魔立てをするやつがこの場所までやってきたら、僕は排除に手段を選ばないと思ってくれ」

「……っ」

「分かってほしい。これは君のためでもあるんだ。その理由はもう、言わなくても分かるだろう？」

「……それは……」

わずかにかりんは戸惑った。

頭の中では、理屈としては理解はとっくにできていることだった。

ただ、いざとなると心がそれを拒絶し始める。

結局のところ、これはスケールの大きすぎるわがままなのだ。

あまりに規模が大きすぎて、端から聞いてもピンとこないだけで。

しかしその内容は、世界を造りかえること。

そのためにはまず、全てをゼロに戻さなくてはならない。

それが、虚無への回帰。

この世界は、このたった一本の大樹によって支えられ、成り立っている。

始まりの種が撒かれて幾千年。

無限に思える時の流れを経て、世界は今の形を作り上げた。

滅びと再生を繰り返し、弱肉強食の理を受け継ぎ、やがて辿り着いた現在。

それは確かに、これ以上手を付け加えなくてもいい、一つの完成された世界だった。

だが、かりんにとってこの世界はもう、どうでもいい抜け殻でしかなかった。

大切な人がいない。

大好きな人がいない。

たったそれだけで、かりんの世界は崩れ落ちた。

だからもう、こんな世界に何の未練もないし、執着もない。

……いや、なかった。
少なくともあの日まで……一人の少年と出会った、あの日までは。
「……やま、と……」
かりんは呟く。
自分の中にある何かを変えてくれるきっかけをくれた、少年の名を。
今はもういない、大好きだった兄とよく似た優しさと温もり。
暗闇だらけだった世界に、一筋の光がさした。
けれど、それは。
望んではいけない……起こってはいけない出会いだったと知り。
かりんの中で、葛藤が始まることになる。

こんな世界はもういらないと。
壊れてしまえと空に願って。
けれど、いらないはずの世界には。
懐かしく、そして暖かい面影が残っていて。
ただ、理由はなく。
そう、単純に。
似ているという、それだけのことが。
かりんの心に、ブレーキを踏ませていた。
「……私、は……私は……」
「……かりん、せめて最後くらいは、君がその手で決別をするんだ。望み願うことはいくつあってもいいけれど、叶えるものは一つに絞らなくてはいけない。これが、僕にできる最大の譲歩だ……」
言って、それは身を翻す。
「彼が近づいてきている。きっと、彼は君を止めるだろう。救おうとするだろう。それに対してどうするかは、君次第だ」
「……っ」
「……種の元で待っているよ」
それだけ言い残して、それは静かに歩き去っていく。

無音の足音と、ひきずるような闇の呻き。
笑いもせず、泣きもせず、種の元へと立ち去った。
「……私は……私は。どうすれば……いいの……？」
「かりん……」
クロウサを抱く腕に、わずかに力がこもった。
選択肢がある。
どちらかを選ばなくてはいけない。
けれど、どちらを選んだとしても、それはかりんにとって不幸な結末を招くことにしかならない。
例え、生まれ変わる命だとしても。
奪いたくない。
傷付けたくない。
戦いたくない。
その人とだけは……。
「……」
だが、それでも。
選ばなくてはいけない。
選んだら、進まなくてはいけない。
道とは、そういうものなのだから……。

「は、はぁ……はっ……」
息が苦しい。
もうずいぶんと走り続けているというのに、根の道は終わることを知らないほどに伸び続けている。
すでに上下左右の感覚すらなくなり、僕はひたすら前に走るだけの事を繰り返していた。
「くそっ、急がないと、いけないのに……！」
次第に心は焦りを見せてくる。

焦りはやがて苛立ちに変わり、思考能力は著しく低下していく。
「どこまで、続いてるんだ……」
さすがに疲労が伴って、僕は一度その足を止めた。
いけどもいけども、道の果ては姿を現さない。
他の皆はどうしているだろうか。
無事に最深部へ辿り着いていてくれるといいのだが……。
「……やっぱり、この道も間違ってるのか？　そうすると、他に正しい道があるってことになるけど……」
そう思って周辺を見回しても、暗闇が佇むだけで何もありはしない。
いっそのこと、この闇の中へ飛び込んでしまえば辿り着けるだろうか？
などと、バカな考えすら浮かび始める始末だ。
とはいえ、本当にどうしたらいいのだろうか……。
「……え？」
ふと聞こえたそれは、僕の聞き間違いだったのだろうか？
それは、音だった。
歌でもなければ曲でもなく、楽器の単音が響いたようなものだった。
「何だ、この音……」
何かに引き付けられるように、僕は再び前に足を踏み出す。
少し歩くと、また同じような音が聞こえた。
さっきのに比べると、わずかだが音程が上がっている気がする。

その音に誘われてみる。
ひたすら追いかけて、根の道を往く。
前へ進むたびに、音はだんだんと単音ではなくなり連なり始めた。
単なる音と音の組み合わせが、しだいにに重なり、響き合い、メロディへと変わっていく。
それはまるで、呼び声のようなメロディだった。

こっちへおいでと、見えない誰かに手招きされているかのよう。
不思議とそのメロディは心に溶け、安らぐような気持ちを思い出させてくれる。
聞いたことはないはずなのに、どこか懐かしいと思ってしまうような、そんな不思議なメロディだ。
「……あ、れ？　ここは……」
そしてふと気が付くと、僕はいつの間にか開けた場所にいた。
慌てて後ろを振り返ると、あれほど長く続いていたはずの根の道は、今は忽然とその姿を消していた。
「どうなって……」
そうは思ったが、ともあれ、ここが最深部なのだろうか？
辺りを見回すが、そこに人影は浮かばず、静寂だけが僕を待ち構えていた。
そんな薄暗い闇の向こう。
「……まだ、聞こえる」
先ほどから続く優しいメロディは、僕を誘うように流れ続けていた。
僕はその方向に向けて歩き出す。
一歩近づくたびに、メロディがよりはっきりと聞こえてくる。
音源は近い。
そのまま数十メートルほど進んで、途端にある場所を境にして薄暗さがなくなった。
太陽もないのに、まるで真昼のように明るい。
根の地面を見れば、自分の影が背中にくっついてきていた。

「ここは、一体……」
僕は呟いた。
すると、その拍子に今まで流れ続けていたメロディがプツリと途切れる。
同時に僕は正面を向き直った。

そして、そこに。
「……か、りん……？」
「……」
少女は一人、佇むようにその場所に立っていた。
全身を黒いゴスロリの衣装の包んだ、あたかも人形のような背格好。
その腕の中には、耳が白で目が赤く、他が全部真っ黒に包まれたウサギのぬいぐるみを抱きかかえている。
かりんは静かに、その顔を上げた。
「かりん……かりんなのか？」
僕は思わず声に出し、確かめるようにその名前を呟いた。
「かり……」
僕が三度その名を呼び、一歩踏み出そうとしたその瞬間。
「動かないで」
世界が凍りつくような冷たい声が、凛と響き渡った。
「……かりん？　どうしたんだよ。僕だよ、大和……」
「分かってる。そんなことは。分かってる」
「……かりん？」
僕の声は掠れていた。
のどの奥が乾きすぎて、続く言葉が声になってくれない。
そんな僕に、かりんの言葉がさらに突き刺さる。
「大和。私と戦って」
「な……」
「あなた達が。この世界を。救おうというのなら。私とあなたは。やはり相容れることはできない。どちらかが倒れるしか。その先に道は開かれない。だから。今ここで。命をかけて。私と戦って」
「……何、言ってるんだ？　おかしいよ……どうしちゃったんだよかりん！　あんなに……あんなに戦いたくないって、そう言ってたじゃないか！」
「……」

「どうしたんだよ？　何があったんだよ？　教えてくれよ、僕に！」
「……ごめんなさい」
と、そう一言、低くかりんは呟いて。
「――……大和。私はあなたを……殺す」
決別の言葉を、絞り出した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２０：本当の声を

心はきっと、泣いていた。

「セレナーデ」

呟き、囁かれた言の葉が力となり、次々に襲い掛かってきた。

実体のない音の塊は、わずかに白く揺らいで光り、もの悲しい音色を奏でながら降り注ぐ。

「っ、やめるんだかりん！」

その音の塊を避けつつ、僕は言葉を投げた。

が、そんなことでは攻撃の手は止まない。

無尽蔵に生み出される弾幕に、僕の体の疲労の方が先に音を上げてしまう。

「うっ……」

足元を直撃した一撃で、僕の体はバランスを崩してわずかに浮き上がる。

不安定な空中に運ばれ、体の自由が利かない。

それを見逃すわけもなく、ここぞとばかりに無数の弾幕が無防備な僕の体の中心目掛けて飛来した。

ゴッという、まるで金属の塊が直撃したかのような衝撃。

「がっ……」

胃の中のものが全部吐き出されそうになるほどの威力。

一撃でそれだけの威力を誇るものが、十や二十では収まらない数で直撃した。

地面から空中へ、僕の体はほぼ垂直に強制的に押し上げられ、気付いたときには高さ五メートルまでに達していた。

意識が遠のきそうになるのを必死に堪えられたのは、腹部に残る真新しい痛覚のおかげだろう。

「く、そ……」
そのまま無防備な体勢で地面に叩きつけられるのを、かろうじて僕は防いだ。
逆立ちするような体制でてのひらを地面に向け、勢いよく風を解き放つ。
放たれた風が気流を生み、落下速度を緩和した。
「は、ぁ……はぁ、はぁ……」
ズキズキと腹部が痛む。
もしかしたら肋骨の数本くらいは折れているかもしれない。
「か、かり……ん……」
それでも僕は、彼女の名を呼んだ。
腹の底からこみ上げてくる鉄の味を無理矢理に飲み込んで、絶え絶えの声で呼びかけた。

「だめ、だよ……こんなのは、違う。間違ってる……」
「……間違ってない。私は私の。信じる道を行く。大和は大和の。信じる道を行けばいい」
俯き加減に告げられる言葉は冷たく、体温をすでになくしていた。
「……私にはもう。これしかないの。これしか残されていないの。あの頃を取り戻す。たった一つの方法。それがたとえ。間違った道だったとしても。そのためなら私は。どんな罪だって。背負っていける」
「……嘘、だろ？」
「……違う。嘘なんかじゃない」
「……いや、やっぱりそれは嘘だよ」
「……嘘じゃない」
「どうして、嘘をつくの？」
「……っ、嘘なんかじゃないっ！」
かりんは叫び、その手に今まで以上の大きな力を集束させ、迷うことなく叩きつけるように打ち出した。

直径三メートルにも及ぼうかというエネルギーの塊。
今から反応しても、きっと回避は間に合わないだろう。
けど、それでいい。
直後に、先ほどとは比べ物にならないほどの威力の一撃が僕の体を吹き飛ばした。
「っ……！」
もはや悲鳴は声にすらなろうとしない。
叫ぶ方が逆に体に障りそうだ。
吹き飛ばされ、地面に叩きつけられ、何度も転がり、引きずられるようにして止まる。
「……う、あ……」
呻くのがやっとだった。
防御の上からでこれだけのダメージを受けるということは、無防備な状態で喰らえば冗談ではなく死んでしまうかもしれないだろう。
「っ、う……」

それでも僕は立ち上がる。
全身に残るのはすでに痛み以外の感覚では何もなく、痛みさえもしだいに麻痺していくようだ。
棒のようになった両足を引きずって、前に進む。
ズルズル、ズルズルと。
たった数メートルの距離を戻るのに、一体どれだけの時間がかかるのだろう。
ようやく元の位置に戻り、僕は荒い呼吸の合間にかりんを見る。
その表情は、俯かれたまま隠れていた。
「……嘘、なんだろ？」
僕はもう一度繰り返す。
その言葉が合図になり、今と全く同じ巨大な一撃が再び繰り出された。
そして直撃。

僕の体はまたもや後方へと吹き飛ばされ、叩きつけられ、転がり、引きずられる。
「……っ、が、あ……」
痛みに痛みを上書きしても、やはり痛みは消えないらしい。
呻きながら立ち上がる。
立ち上がったまではいいが、すでに体はバランスを保つことさえも怪しくなっていた。
両足はどちらも膝が笑い、杖の一つでもなければ動けないくらいだ。
「ご、ほっ……」
せきこみ、口の中から生暖かい液体が吐き出された。
胃液なのか唾液なのかさえも分からないそれは、真っ赤に染まりかえっていた。
口の端から伝う血を、袖口で拭い取る。
そのときになって気付いた。
左腕の感覚がない。
痛みで痺れているかとも思ったが、どうやらそうではないらしい。
指先を動かそうとして走った痛みで、ようやく骨折していることに気付かされた。
左腕はもう、使い物になりそうもない。

「ぐ……」
一歩、前へ。
体の一部かどうかさえ怪しい足を動かして、引きずって、前へ。
一歩歩くたびに、体は確実に限界を乗り越えようとしていた。
筋肉が悲鳴をあげ、骨は軋み、血管はもはやズタズタに引き裂かれている。
視界が赤く染まる。
切れた額から垂れた血が、目の中に入ろうとしていた。
それを右手で乱暴に拭い取る。

そしてまた、元の位置に立つ。
「はぁ、はぁ……」
呼吸を繰り返すだけで、肋骨のあたりに鈍い痛みが連続した。
やはり骨折か、あるいはヒビでも入っているのかもしれない。
けど、こんな痛みなんかに構っていられない。
いくらでもがまんできる。
腕も足も、まだ動くだろう。
何かを伝えるための手段は、口が動けばそれでいい。
だったら、まだ動くさ。
本当に……本当に痛くて仕方がなくて、一番その痛みに苦しみながら耐えているのは、僕なんかじゃない。
それは、今目の前にいて俯いたままでいる……。
「……もう……いいでしょう？　立ち上がらないで……」
絞り出したような声で、かりんは言った。
「……だったら、簡単じゃ……ないか」
その言葉に、僕は答えた。
「最初にかりんが、言ったことじゃないか。僕を……殺せばいい。死人はもう、立ち上がることはおろか、喋ることもできないんだからさ
……」
「……っ」
「……どうしたんだよ？　今のかりんになら、何も難しいことじゃないよ。僕は今、立っているのがやっとなんだから。もう一度、ありったけの力を僕に……ぶつけてみなよ」
「……」
「……できないの？　それとも、本当は……したくないんじゃないの？　自分に、嘘をついているから」
「……っ、違うっ！　私は間違ってないっ！」
かりんのその手に、今まで以上の力が集まり始める。

光の球が膨らみ、巨大化していく。
その大きさは、もはや避けることがどうとかのそういうレベルの話ではなく。
何もかもを呑み込んで、消し去ってしまえるほどの規模だった。
「わあああああっ！」
かりんは叫んだ。
そして、解き放つ。
ありったけの力を込めた、その一撃を。
光が近づいてくる。
全てを呑み込み、全てを消し去る悲しい光。
けれど、そんなものは、もう……いらない。
「……どうして、君はっ！」
叫び、僕は右腕を大きく横に払った。
たった、それだけで……。
「あ……」
光の球は、跡形もなく消え去ってしまった。
風は全てを引き裂いて、無に還す。
ただ一つ、そこに残されたのは。

――ずっと言いたくて、だけど言えないでいた、偽りのない言葉だけ。

「どうしてっ……言えないんだ……っ！」
「う、う……」
「たった一言じゃないかっ！　そうだろ？」
「……っ」

「――どうして一言、『助けてくれ』って言えないんだよ！」

「……違う。違う……」

かりんは首を小さく横に振る。
そして、その膝がガクンと折れた。
クロウサを腕の中に抱きかかえたまま、地面にへたり込む。
「……じゃない。そんなんじゃ……ない……」
「……だったら、どうして」
僕は歩を進め、かりんの目の前に同じように膝を折り、同じ目線の高さで言った。

「――どうして、泣いてるのさ……」

「……う、うっ……うわあああああ……」
かりんは堰を切ったように泣き出した。
その小さな手が。
小刻みに震えながら、僕の上着の裾を強く強く握り締めていた。
僕はそっと、かりんの頭を抱えて胸に寄せた。
「ありがとう、ヤマト」
「クロウサ？」
「これでようやく、かりんは救われた気がするんだ。かりんに代わって礼を言わせてくれ」
「……そっか。なら、よかったよ。じゃあもう、戦う必要もないんだね？」
「ああ。もうそんな必要はない。オイラ達の、負けだ」
そう言ったクロウサは、何となく……何となくどこか、満足そうに微笑んでいた気がした。
……よかった。
これで、約束はどうにか、果たせたみたいだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２１：二人の頃

「……大丈夫？　大和」
「……っ、ああ、何とかね……」
そうは答えるが、骨折をはじめとした全身の打撲はかなりの激痛で、誰の目にも僕のやせ我慢は明らかだろう。
かりんの治癒のおかげで、それでも痛みはずいぶんと和らいではいる。
切り傷や擦り傷程度ならすぐに塞がるが、さすがに折れた骨はそう簡単にくっつくものではない。
普通なら二ヶ月か、あるいはそれ以上の時間がかかっておかしくないのだから。
「ありがとう。かりんのおかげで、大分楽になったよ」
「……ううん。結局私は。また大和を。傷付けてしまった。戦いたくないと言ったのは。私のほうだったのに……」
言って、かりんはまた目を伏せてしまう。
「かりん……」
腕の中で抱かれたクロウサが、悲しそうな声で呟いた。
「そんなことは、ないよ」
僕は告げ、かりんの頭を撫でる。
「かりんはかりんのために、できることを精一杯やったんだ。他人の目から見ればそれは確かに、間違ったことだったかもしれない。けど、かりんはちゃんと自分で考えて、その道を選んだんだから。そんな風に自分を責めるのは、もうやめよう」
間違うことで初めて気付かされる真実もある。
失敗は成功の元という言葉もあるように、全てが正しく、美しく、理想のままに進むことはありえない。
いつどんな形で障害が立ちはだかるかも分からない。

それは時として、越えられない壁として行く手を阻むこともあるだろう。
そのとき、諦めて引き返すのも間違いではない。
強引にぶち壊して進むのも、間違いではない。
何が正しいかとか、何が間違ってるかなんていうそんなものは、結局個人個人の価値観の中でしか比較できないものであって。
たとえ百人のうちの九十九人が、それは悪だと否定をしても。
たった一人信じ続ければ、それはその人の中では真実になるのだから。

「かりん、答えたくないなら答えなくていいから、聞いてもいいかな？」
「……何？」
「その……かりんがこうまでしてこの世界を変えようとしたのは、やっぱり……君のお兄さんのことがあるからなの？」
「……うん」
静かに、かりんは一つ頷いた。
「……私の両親は。私が生まれて間もない頃に。事故で死んじゃったの。それからはずっと。お兄ちゃんだけが。たった一人の家族だった……」
顔を上げ、どこか遠くを見つめるようにかりんは続ける。
「……両親がいなくなって。私とお兄ちゃんは。施設に預けられたの。そこには。私達みたいな。身寄りのない子が他にもたくさんいて。最初は戸惑ったりもしたけど。すぐに打ち解けて仲良くなれた。施設の大人の人達も。皆いい人で。すごく優しかった」
振り返ればそれは、そう遠すぎる日々のことではないだろう。
かりんの表情に少しだけ、懐かしさを匂わせる微笑が浮かぶ。
「……両親がいないのは。やっぱり悲しかったけど。友達も沢山いて。何よりお兄ちゃんがいつも。いてくれたから。私はちっとも。寂しくなんかなかった。お兄ちゃんはいつも。私のことを。気にか

けてくれてたし。私の中では。お兄ちゃんは同時に。お父さんでもあったの」

「……そっか。きっと、優しい人だったんだね」

「……うん。すごく優しかった。怒られたことなんて。一度もなかったかもしれない。お兄ちゃんは。施設の中でも。年長者の方だったから。私みたいな小さい子達の。面倒見もすごくよくて。大人の人達からも。頼りにされてて……あの頃は。すごく楽しかった。あの場所には。何もなくなった人達しかいないのに。でもあそこには。全てがあった。幸せも温もりも。優しさも喜びも。全部全部揃ってた……」

僕はふと想像してみる。

かりんが言うような、何もないけど全てがある場所。

それはきっと、一度失うことの悲しさを知った人間でなければ、幸せと感じることができない場所なのだろう。

失ったことが、結果的に新しいものを得るきっかけになる。

どんなものでも、失ってしまえばそれは悲しいことだけれど。

いつまでも失ってばかりじゃないだろう。

いつかきっと、その悲しみを上塗りできるだけの幸せが降りかかる。

それはきっと、懐かしいような暖かさがあって。

どことなく安心できるような、そんな感覚なのかもしれない。

「……でも」

と、かりんは話を区切る。

「……そんなささやかな幸せも。ずっとは続かなかった」

「……」

僕にはその後に続く言葉が、容易に想像できた。

不幸が訪れてしまったのだ。

きっと、かりんに残された最後の居場所を、根こそぎ奪い去ってしまうほどの強風……嵐のような、出来事が……。

「――……私の七歳の誕生日に。お兄ちゃんは……交通事故で死んでしまった……」

「……かりん、無理しないで」

「……ううん。大丈夫。大和にはちゃんと。聞いてほしいから」

「……分かった。でも、無理はしないで」

一つ頷き、かりんはふとクロウサに目を落とした。

「……その日お兄ちゃんは。私にプレゼントを買うために。施設から出かけてたの。私の誕生会を。施設の皆がやってくれることになって。お兄ちゃんはその場で。私にプレゼントをくれるつもりだったみたいなの。それがこの……」

「オイラってわけさ」

クロウサが喋る。

「アイツは……ハルヒコはお店でオイラを買って、それを丁寧に包装してもらってさ。あとはオイラを、施設まで持ち帰ってかりんに渡すだけだったんだ。けど、その途中で……」

「……事故だったの。その日は真冬で。雪もいっぱい積もってて……」

「……きっと、ハルヒコも少し浮かれてたんだ。プレゼントを渡したときのかりんの笑顔が早く見たくて、少しだけ焦ってたんだ。だから、あのときハルヒコは、信号が青から赤に点滅しかけてた歩道を、急いで駆け出したんだ」

「まさか、それが原因で……」

「……ああ、そうさ。そのまま走り抜けてれば、それでよかったんだ。けど、ハルヒコは運悪く雪道に足を取られて転びそうになった。そのとき、オイラを手放してしまったんだ。オイラは宙を描いて、地面に落ちた。当然そのときにはもう、信号は赤に変わってしまってた。そして、ハルヒコがオイラを拾おうと近寄ってきたところに、大型のトラックが突っ込んで……」

「……」
「そんな、ことが……」
「……分かってたの」
かりんは呟いた。
「……事故だって。本当は分かってた。悪いのはお兄ちゃんで。信号を無視しなければ。そんなことにはならなかったから」
「かりん……」
「……全部全部分かってた。でも。心がどうしても納得できなくて……頭の中がごちゃごちゃになって。もういないんだって。どれだけ自分に言い聞かせても。全然納得できなくて……悲しくて、寂しくて。どうしようも……なく、て……ただ、泣くことしか……でき、な……くて……」
かりんから嗚咽が漏れる。
その小さな体を小刻みに震わせて、かりんは膝を付いて泣いていた。
「……いっぱい泣いて。お兄ちゃんはもういないんだって。そう思ったらまた。涙が出てきて……それの繰り返ししか、できなくって……」
「……」
何となくだけど、僕にも気持ちは分かる。
もちろんそれは、当事者のかりんほどの悲しみを感じることはできない。
同情と言われれば否定はしない。
他人の悲しみに共感することが、同情だと思うから。
「……あの日が」
かりんは続ける。
涙に枯れた小声で、想いを絞り出すように。
「……あの日が私の誕生日じゃなければ。お兄ちゃんは今も。生きててくれたのかな？　私の隣で。笑ってくれてたのかな？　私の名

前を……今日も呼んで、くれたの……かな……？」
「……」
クロウサは何も言わなかった。
強く抱きしめられることを嫌とも思わず、かりんの頬を伝い落ちてきた涙を、その黒い体に染み込ませた。

僕はもう一度、かりんのその頭を優しく撫でた。
ふいに、かりんが顔を上げる。
「……あのね、かりん。僕にはあんまり、うまい言葉は言えないかもしれないけど」
「……」
「お兄さんの死を、自分のせいにするのだけはしちゃいけないことだよ」
「……けど。だけどあの日。お兄ちゃんがプレゼントなんか買いに行ってなければ……」
「うん、確かにそうかもしれない。確かに買い物に出かけてなければ、お兄さんは助かったかもしれない。けど、それはお兄さんが死んでしまった今だから言えることだよね？」
「……っ」
「厳しいことを言うようかもしれないけど、最後まで聞いてほしい。どんな過去があっても、それはもう変えることはできない。生きることも死ぬことも、全部含めてこの世界の流れなんだ。時々それを運命っていう言葉でごまかす人もいるけど、そういうのとは関係なしに僕達はこの世界で生きている。その流れの中には、当然死ぬことも含まれてる。病気か事故か、それとも寿命か。それは誰にも分からないだろうし、きっと分かっちゃいけないことなんだ。自分の終わりが最初から分かってたら、誰も一生懸命に生きようとなんてしないだろ？」
「……そう、だけど」
「うん、分かってる。かりんの思ったことは、悪いことじゃないと

思うよ。僕だって、友達や家族が死んじゃったら、生き返ってほしいと思うだろうしね。逆に、こんなやついなくなればいいって思うことはあるよ。でも、それでもさ……」

一度言葉を区切り、僕は続けた。

「――人は簡単に死ぬことができる。けど、死んだ人間はもう……生き返りはしない。何があっても」

「……うん」

「かりんも、分かってたんだよね？　分かってたけど、分かろうとできなかった。でもそれは、仕方のないことだったと思う。かりんにとって、何よりも大切な人だったから……」

「……うん……うん」

「今ここで、仮にアイツのやり方で世界が生まれ変わったとしても。次の世界にいる君と君のお兄さんは、本当に元通りになれるのかな？　かりん達が一緒に生きて過ごしてきた時間を、取り戻せるのかな……？」

「……ない。できないよ、そんなの……だって、私とお兄ちゃんが一緒に過ごした時間は、幸せだったあの時間は、あのときだけだもの……」

「ほら、ちゃんと分かってるじゃないか。じゃあ、もう何をするべきか、分かるよね？」

声には出さず、かりんは頷いた。

「……彼を止める。この世界を……私とお兄ちゃんが一緒に過ごせた。時間と記憶があるこの世界を。消させたくないよ……」

「ああ。絶対に消させない。そのために、ここまできたんだ」

痛みを忘れて、僕は笑ってみた。

すると、かりんもしっかりと笑い返してくれた。

初めて会ったあの時のような、小さく静かな微笑で。

……が。

「……あ……」
と、そんな呟いたようなかりんの声。
「……かりん？　どうし……」
聞きかけて、僕は言葉を失った。
トサリと、かりんの腕の中からクロウサが転がり落ちた。
ポタリと、かりんの胸から赤い雫が零れ落ちた。
そこに。
かりんの胸に、どこかで見たあの黒い切っ先が、真っ直ぐに突き刺さっていた。
「……や、ま……と……」
か細すぎる声。
こんなに近くにいるのに、どうして声は届かない？
グラリと、その小さな体が傾いて沈む。
ドサリと音を立て、小さな体が横たわった。
胸と背中を貫いた穴から、真っ赤な血が流れ出していく。
「かりん！　かりんしっかりしろ！」
転がり落ちたクロウサしきりにが叫ぶ。
「か、りん……？」
僕は片言で、その名前を呼んだ。
しかし、もうそこからの返事はなく。
音もなく静かに閉じられた双眸。
涙の跡だけが今も乾かないままに残り、その表情はなぜか柔らかく微笑んでいた。
「やれやれ。ここまできて裏切りとはね。ほとほと人の手を焼かせるのが好きな連中だ」
そこに、闇がいた。
いつの間に現れたのか、その余韻さえ残さず、静かに立ちはだかる。
「……お前が、やったのか……？」

震える声で僕は問う。
「他に誰がいると？」
あっさりとそれは認めた。
「っ、あああああっ！」
怒りで体は動いた。
僕の中で、何かの歯止めが消えていた。
キレルとは、こういうことなのかもしれない。
今の僕を突き動かす感情は、ただ一つ。
――殺意だけだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２２：「ありがとう」

自分の体に対する制御は、もうきかなかった。
歯止めのない感情が溢れ出して、全身の痛みさえ忘れて殴りかかっていた。
届くかどうかも分からない、壊れかけの拳を振り上げて。
「あああああっ！」
握り締めた拳の方が引きちぎれるほどの力を込めて、全力で振るう。
が、その拳は虚しく空を切る。
当たらない。
ただの一度も、かすりさえしない。
がむしゃらになって殴りかかる。
休む間を自分に与えず、足が動く限り追いかけ、拳を振るった。
「……」
それでも当たらない。
必要最小限の動きだけで、それは僕の攻撃を全てかわしている。
「くそ……くそ……っ！」
次第に息が上がっていく。
考えてみればそれは当たり前のことだった。
すでに二度の連戦を終え、体力も精神力も極限の域まで使い果たそうそしているこの体。
痛みは歯を食いしばれば堪えることはできるだろう。
しかし、失った体力はどうがんばっても取り戻すことはできない。
流れ出た血も、また然り。
「……はっ、はぁ……はぁ……」
追いかける足が鈍る。
呼吸の繰り返しだけで肺が内側から破裂してしまいそうで、息を

吸い込むだけで全身に痛みが走る。
両足はすでに棒同然か、あるいはそれ以下。
今の今まで動いてくれたことが奇跡的にすら思えてくる。
視界が霞み始める。
汗の球が頬を伝い、血と混ざって滴り落ちた。
「は……くそ、く、そ……っ」
届かない。
ほんのわずかなその距離が、永遠のように遠く果てなく感じられる。
手を伸ばせばすぐにでもつかめるはずなのに。
全力で拳を叩きこめるはずなのに。

「ヤマト、かりんが……！」
ふと呼ばれたその声に、僕は振り返る。
地面を転がっていたクロウサが、必死に叫んでいた。
「……う、あ……」
微かな呻き声。
それは横たわったかりんのものだった。
「っ、かりん！」
その声に意識を引き戻され、僕は急いでかりんの傍へ駆け寄る。
胸を貫かれ、かりんの出血はおびただしい量に達していた。
このままでは間違いなく失血死してしまう。
「かりん、しっかりするんだ。かりん！」
強く呼びかける。
横たわるその体を抱き上げる。
「……やま……と？」
「ああ、僕だよ」
そう答えると、かりんは力が抜け落ちかけているその体を必死に動かして、小さなその手を伸ばしてきた。
僕はその手をしっかりと取り、強く握り返した。

そこにはすでに、体温というものが失われかけていた。
氷のように冷え切った手のひらと指先。
本当に、少しでも力を入れれば跡形もなく砕け散ってしまいそう。
「……よ、かった……」
それだけ言うと、かりんはどこか満足そうに笑みを浮かべた。
その微笑が、あまりにも痛々しい。
今もなお少しずつ流れ続ける血潮。
その一滴一滴が流れるたびに、命の灯は確実に消えていく。
「もう喋っちゃダメだ。待ってて、今からでも傷口を塞げば……」
望み薄だが、一命は取り留められるかもしれない。
僕は自分に残されたありったけの力を、治癒のために使うべく手のひらに集中させた。

しかし、それを。
「……かりん？」
もう片方のかりんの手が、必死にしがみついてくる。
まるで、やめてくれと、そう叫んでいるように。
「何するんだよ、かりん？　早く治癒しないと、かりんが……」
「……いい、の……もう、いい……から」
「な……」
僕は絶句しながら、自然とその先に続くであろう言葉を想像してしまう。
ダメだ。
そんな言葉を、言わせてはならない。
「何、言ってるんだ？　大丈夫だよ。約束しただろ？　必ず助けてやるって！」
その僕の言葉に、しかしかりんは小さく首を左右に振った。
「……いいの。本当に、もう……いいから。私のために、使う力があるなら……それ、を……彼を止める、ために……っ」
言いかけたかりんの表情が、苦痛に歪んだ。

「かりんっ！」
「……お、願い……私は、もういい……から。もう、十分……だから……」
「っ、そんなわけないっ！　何が十分なんだよ？　そんなことないだろ！　さっき、ようやく気付けたばっかりじゃないか。本当の自分の気持ちを、言葉にできたばっかりじゃないか！」
僕は怒鳴り散らすように叫んでいた。
自分でももう、何が何だかわからなくなっていたのかもしれない。
どうしようもなくて、ただ喚いているだけ。
それはまるで、おもちゃを与えてもらえない子供が、母親に対して駄々をこねているのと同じで。
矛盾なんてものにはとうに気付いていた。
けれど、矛盾させでもしないと何も出来ない気がして。
最初から分かっていた自分の無力さを、ただ認めたくなかっただけで。
「だから、そんなこと言うなよ！　必ず……必ず助けてやるから。絶対に、絶対に僕が……」
いつからだったろう。
僕は、涙を流していた。
それはきっと、この体にある無数の痛みのせいなんかじゃない。
ただ、単純に。

――悔しくて……悔しくて、仕方がなかったんだろう。

「っ、助けて、やるから……っ！」
たどたどしい言葉だった。
自分の言葉を自分の耳で聞いていて、どれほど頼りなく、情けない言葉であるかがよく分かった。
何の根拠もなく。
何の自信もなく。

ただ、うわべだけを着飾った言葉を連ねている。
気付いていた矛盾。
どうにかしたいという理想と、どうにもならないという現実。
ないものねだりは叶わないと、とうの昔に気付かされているのに。
それでも僕は、叫ぶことしかできなかった。
根拠のない強がりで自分を偽って、虚勢の壁で仮初の安らぎを与えて。
けど、それが何になる？
心の奥底では、もう気付いていたんだ。
だからこそ、かりんが胸を貫かれた直後、僕は。
真っ先に殴りかかっていったんじゃないか。
それは、仇をとるという行為。
それは、心のどこかでかりんの死を受け入れてしまっていた行為。
本能が動かした体は、目の前の現実を如実に語る。
かりんは、もう……助からない。

「……っ、くそっ……くそっ……」
そんな言葉しかこみ上げてこない。
もっとこう、気の利いた言葉はないものだろうか。
でも、それでも。
「……大和」
かりんのその手は、僕の手をすり抜け、涙の伝う僕の頬に優しく触れてくれた。
そこに、握り締めたときのような冷たさはなく。
不思議と落ち着きを感じてしまうような、温もりがあって。
僕の頬をそっと撫でるように触れて、かりんは言った。
「ありがとう、大和。あなたのおかげで、私は自分の間違いに気付くことができた……」
「……」
「きっと、お兄ちゃんもこんなこと、望んでなかったよ。もう少し

で私は、いなくなったお兄ちゃんをまた悲しませてしまうところだった……」

「……っ、か、りん……」

「……私は、もう十分だから。本当ならあの日。お兄ちゃんが死んでしまったあの日、私も死んでしまったはずだったの。体は生きていても、心が死んでしまっていたから。けど、そんな私を支えてくれたのは、クロウサだった」

「かりん……」

「ごめんね、クロウサ。あなたも本当は、ずっと前から私の間違いに気付いてたんだよね？　それでも、何も言わずに私の味方であり続けてくれた。ごめんね、いっぱい迷惑かけたよね？」

「そんなことない。オイラだって、かりんだったからここまで一緒にこれたんだ。そして、その気持ちはこれからだって変わるもんか。オイラはずっと、この先もずっとずっとかりんと一緒だ」

「……うん。ありがとう」

そう答え、かりんは微笑んだ。

「でも、ね。ごめんね。その約束は、もう、守れない……」

呟いた言葉。

かりんの目が、静かに閉じようとしていた。

「っ、ダメだ！　目を開けるんだかりん。そんなのは絶対にダメだ！」

「そうだぞかりん！　オイラはこんな結末、絶対に認めないぞ！」

「……ごめ、んね。でも、これはきっと、私の罪だから。もう、逃げたり……したくない、から……」

頬に触れていたその手が、スルリと剥がれ落ちる。

落ちるその手を、僕は掴んだ。

掴んで、強く強く握り締めた。

認めない。

こんな終わり方、絶対に認めない。

認めたくない。
「かりん、かりん……」
「ダメだかりん！　死んじゃ、ダメだっ！」
その言葉が、かりんの耳にはどう届いたのだろうか。
最後にもう一度、かりんはしっかりと僕とクロウサに向けて優しく微笑んで。

「――……ありがとう。ごめんね。そして……さよ……な……」

やがて、閉じる瞳。
抱きかかえた小さな体はもう、ピクリとも動かない。
「……っ！」
「か、りん……」
その顔は。
最後の最後まで優しいままで。
暖かさに包まれて、眠っているようだった……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２３：背中

腕の中に感じていたわずかな重さが消えていく。
抱きかかえたかりんの体は徐々に半透明に薄れていき、まるで目の前で蜃気楼を見せられているかのようだった。
「あ、あ……」
薄れていく現実感。
存在を示す重さが、暖かさが、消えていく。
雪が溶けて消えるように、かりんの体は天に昇るように粒子化していった。
白く淡く、そしてあまりにも儚いけど、美しすぎる光。
消えていく。
自分の間違いと、過ぎた頃の思い出だけを胸に仕舞い、ゼロに還っていく。
やがて、何もかもが文字通りに消えてなくなった。
足元に転がり落ちていたのは、かりんが身に着けていた「Ｒｉｎｇ」。
今はもうその力の大半を失い、どこからどう見てもただの金属片にしか見えなかった。
僕はそれを、震える指先で拾い上げる。
冷たかった。
その冷たさが、余計に悲しかった。
「かりん……」
すぐ傍でクロウサがその名前を呟く。
名前を呼ばれた少女は、もういない。
どこにも、いない。

「今生の別れは済んだかな？」

その声が、意識を現実に引き戻した。
視界の向こう、闇を引き連れたそれは待ちくたびれたように立っていた。
「……お前、は……」
声が震えているのは、多分恐怖のせいじゃない。
この際、理由なんてどうでもよかった。
僕の胸の中にたぎるように残ったのは、ただの虚しさと悔しさと、怒りだけ。
「あまりこちらの予定を次々に狂わせないでもらいたいものだね。その度に打開策を考えるこっちの身にもなってほしいよ。まぁ、この場合に限って言わせてもらえば、予想の範疇ではあったけどね」
そんな言葉はもう耳には入ってこなかった。
「……何も、感じないのか？　仮にも、かりんはお前の仲間だったはずだろ……？」
「君は一体、どこまでくだらない誤解を続ければ気が済むのかな？」
それははっきりと言い切る。
言ってはならないことまでも、ためらいなく。

「――拾った道具だから、僕に所有権があっただけのこと。そんなに大事に扱ってほしいのなら、取扱説明書でも添えておくことだ」

「……っ！」
もはや、叫びにも声にもする必要はなかった。
体が動く理由は、たった一つの単純な動機。
こいつは、殺す。
何が何でも殺す。
四肢をばらばらにして、全ての骨を砕き、肉を裂き、神経を引きちぎり、原型を留めない肉と血の塊に変えてやる。
怒りの引き鉄は引かれた。
かつてない力がその手に宿っていた。

それはすでに、風ではない。
制御の利かない暴風……嵐だった。

「あああああっ！」
その手に握り締めたのは、一本の剣。
わずかに淡い緑色に光るそれは、風の力を凝縮したエネルギーの塊だ。
しかしそこに定められた原型はなく、刀身部分は目には映らないほどに薄く鋭い。
全力を持ってそれを振るう。
何もかもを呑み込むような轟音が響いた。
空振った衝撃だけで、硬く頑丈に張り巡らされた根の床が簡単に引き裂かれた。
まるで巨大な獣が強靭な爪で地を抉ったように見える。
「……君には本当に驚かされる」
それは口ではそう言うが、実際は軽々と攻撃を回避していた。
「風の力とは、ここまで底なしのものなとはね。怒りで我を忘れているからかもしれないが、ここまで古代の力を引き出せるとは……」
賛辞ともとれるその言葉も、今の僕の耳には全く届かない。
僕自身、我を忘れていたのかもしれない。
煮えたぎるような怒りと、自分に対する憤りだけが、今の僕を突き動かしていた。
「……っ、死ねえええええっ！」
全力で剣を振り下ろした。
信じられない速度と、それと空気と摩擦による衝撃が、わずかに火花すら散らせた。
繰り出された突風。
いや、それはすでに小型の台風か、あるいはそれ以上の強さだろうか。
形のない牙が、全てを呑み込むように襲い掛かる。

根の床が面白いくらいに朽ち果てていく。
残骸を吹き飛ばしながら、風の塊は真っ直ぐにそれの中心を目掛けて突き進む。
「しかし、悲しいかな。怒りで我を忘れ、内に眠る潜在能力を全て引き出して……」
迎い来る風を避けることもせず、それは落ち着いて語る。

「――やはり、この程度か」

静かに手のひらをかざす。
そこへ、風の塊が直撃した。
次の瞬間。
何一つの音もなく、風がかき消された。
「な、に……？」
その光景に、思わずそんな言葉が出る。
間違いなく直撃したはずだ。
少なくとも、あの手のひらに触れたはず。
それがどうして一瞬で、何もなかったかのように掻き消えてしまうんだ？
「まさか、アイツ……」
クロウサは呟いた。
「……呑み込みやがったのか？　ヤマトの力全部、自分の中に取り込んじまいやがった……」
「何、だって……？」
「ご名答」
と、隠す素振りも見せずにそれは頷く。

「さて。それじゃあ力を返そうか」
言うと、それは差し出したままの手のひらにわずかに力を込めた。
たったそれだけで……。

「……な……」
「嘘、だろ？　こんなの……」
そこに、信じられない力があった。
風というレベルを遥かに超越した、しかし風から成る力の集合。
分かる範囲の言葉で例えれば、竜巻。
「倍返しという言葉があるけれど、どうやらそれでは足りないかもしれないね」
倍どころの話ではない。
僕が叩き付けた一撃の十倍……いや、それ以上の威力を誇るであろう力が、あの手のひらの上で踊っていた。
「……」
あまりの違いに、いつしか声も出なくなっていた。
乾いた空気を呑み込む音が、やけに耳の奥にまで響く。
そして、嫌でも理解させられる。
説明など不要な、力量の差を。
「では、返そう。そしてお別れだ。来世でどうか幸せに」
音もなく、合図もなく、それは放たれた。
逃げるとか避けるとか、そういう方法の一つも思い浮かばなかった。
なぜなら、逃げることも避けることもできないほどのとてつもない力だったから。
「……く、そ……くそおおおおおっ！」
目の前に完全な死が迫っていた。
呑み込まれることをただ待つだけの時間。
「……ごめん、かりん」
両膝が折れ、地面にへたり込む。
「何も、守れなくて……」
これが、抗えない運命なのかと。
屈することを知り始めた、刹那の拍子に。

「――ふざけるな。そんなもの、オイラは絶対に認めない！」

そんな声が聞こえて、僕は顔を上げた。
すると、そこに。
一体いつから、そこにいたのか。
いや、そもそも誰なのか。

――両手を広げ、壁のように立ちはだかる誰かが、背中を向けて立っていた。

「君は……？」
ふと、僕は問う。
するとその人は……少年はわずかに振り返って、僕の目を見て。

「――君を死なせはしない」

たった一言、それだけ告げて。
小さく笑って、前を向いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２４：深みへ

「……出口？」

長く続いた洞窟のような暗がりの先に、ようやく明るさが見て取れた。

飛鳥はわずかに歩調を速め、小走りでその場所へと急ぐ。

暗闇を抜ける。

「……何、ここ？」

辿り着いた場所は、ただただ広いだけのがらんどうな空間で、不気味なくらいに殺風景だった。

シンと静まり返るその場所で、飛鳥はしばし呆然と立ち尽くす。

キィンと、耳の奥で耳鳴りがしたかと思うと、直後にすぐ近くから何かの物音が聞こえた。

「っ、誰？」

警戒しながら振り向きざまに叫ぶ。

薄暗い景色の向こうから、一人分の足音が徐々に近づいてきていた。

「……っ」

緊張が走る。

体が受けたダメージから考えても、これ以上の無理な戦闘は文字通り命を削ることになりかねない。

最深部を目指すためにも、できる限りの余力を残しておきたいのはやまやまだったが、相手次第ではそんな悠長なことを言ってられる余裕もないだろう。

バチッと、手の中で雷が弾ける。

弓を構え、弦を引き、青白い閃光を放つ矢を向ける。

「……その声は、飛鳥……ですか？」

としかし、暗がりの向こう側の声は聞き覚えのあるものだった。
「……氷室？　氷室なの？」
弓を提げ、矢を消滅させて飛鳥は言葉を返す。
足音が近づき、闇の中からその輪郭が覗いた。
「どうやら、そちらも無事だったようですね……」
姿を現した氷室の外見は、一言で言えばボロボロだった。
飛鳥もそれなりに傷を負ってはいるものの、氷室のそれと比べれば比較的軽傷だ。
が、氷室はすでに満身創痍という言葉が似合うくらいの姿だった。
「ちょ、ちょっと、大丈夫なの？」
慌てて飛鳥は駆け寄り、肩を貸す。
「平気ですよ……と、言いたいところですが、見ての通りです。少し、いらない傷を増やしすぎましたね……」
言うや否や、氷室の体が前のめりに傾く。
「っと……情けないですね」
「無理しない方がいいって。その傷、浅くないじゃない」
「ええ、本当に。不愉快極まりないですね。よりによってあんなやつ相手に致命傷に近い傷をもらうなんて……」
「……大人しく休んでたほうがいいと思うけど、ここまできてそんな言葉に従うわけないわよね」
「理解が早くて助かりますよ。さぁ、先を急ぎましょう。大和達にも、早く合流しないと……」
「うん、分かってる」
二人は揃って歩き出す。
景色と呼ぶには程遠い外観の根の壁が、見えない眼差しを突きつけているかのようにその行方を眺めていた。
「ねぇ、氷室。あれ、何？」
「え……？」
少し歩いたところで、氷室は聞かれた。

飛鳥の指差すその方向に目を向けてみると、そこにはなにやら黒い塊のようなものが佇んでいる。
この世のどんな色合いの黒にも属さない、闇と闇が混ざり合うことを繰り返し続けてできたような、そんな不気味な色合いの黒。
遠目から見ているだけで悪寒が走り、息苦しささえ感じてしまうほどだ。
「……何か、いやだよあれ。見ているだけで気分が悪くなってくる」
その不気味さに呼応するかのように、全身のあちこちの傷が疼くように悲鳴を上げた。
「っ……」
「……とにかく、近くにいって見ましょう。無関係とは思えません」
「う、うん……分かった」
二人は少しずつ歩を進め、その黒い塊に近づく。
そのたびに、重さのない薄い膜を音もなく破るような感覚に襲われた。
それはまるで、その塊までの距離に幾重にも薄い膜が張り巡らされ、進入を拒んでいるかのようだった。
嫌にまとわりつくその感覚は妙にリアルで、しかし現実には体には何も付着していない。
見えない粘膜を全身が包んでいるようで、それがさらに不気味さを引き立てていた。
「な、何なの、これ……？」
「見えない何かで、押し返されそうです。何もない、はずなのに……」
二人の目の前に佇むのは、何もない空間だけ。
ただ、その塊のような闇から溶け出した粒子のような何かが、ゆらゆらと揺れるように蠢いている。
「やだ、これ……これ以上近づけない……近づきたくない……」
二人の足はそれ以上、一歩たりとも前に踏み込むことができなくなっていた。

進もうとする意思とは裏腹に、本能が全身を拒絶する。
そして叫ぶ。
警告する。
下がれ。
近づくな、と。
そしてその言葉が実際に力を持つかのように、二人の体は見えない何かの力に弾き出されるように後方へと飛ばされた。

「うあっ……」
「ぐっ……、これは、一体……？」
ただただ、闇はそこに佇むだけ。
それは見ようによっては箱のようにも見え、まるでその中に何かを閉じ込めておくためのもののようだった。
よく見れば、それはわずかではあるが宙に浮いている。
揺れているように見えたのはそのせいだったのだろう。
「何よこれ、何なの？」
「……」
氷室は目を凝らした。
もしもこれが箱、あるいはそれに近い役目を持ったものならば、その中には何かが入っているはずである。
さながらにそれはパンドラの箱を思わせた。
ありとあらゆる災いを閉じ込めたとされる箱。
しかしその中には、たった一つの希望が隠されていたという。
果たして、この場合はいかなるものなのか。
闇が揺れる。
その隙間から、一瞬だけ中身が見て取れた。
そして、そこに。
「……真吾……？」
氷室はその名を呟く。
「……ちょっと、何言ってるのよ氷室？」

飛鳥がすぐさま聞き返す。
「あの中に、真吾がいます。しかし、意識を失っているようにうなだれて……」
「本当？　だったら、急いで助けないと……」
急いで駆け寄ろうとするものの、その闇は行く手を阻む。
「うっ……」
意思だけでは拭いきれない防衛の本能が、何度も進む足を止まらせた。
「こ、の……っ」
無理に体を動かそうとしたところで、逆に反発する意思が強くなる。
どうあがいても体は思うように動かず、ただひたすらに防衛本能のみが働いた。
「ラチがあきません。破壊します」
「破壊って、中にはアイツがいるんでしょ？　そんなことしたら……」
「もちろん、加減はします。このまま黙って傍観しているよりはマシだろうし、何より真吾の意識があったら彼も同じことを言うはずです」
「そ、それは確かにそうかもしれないけど……」
とはいえ、仲間に向けて攻撃を仕向けるのは気が引ける。
しかし、このまま手をこまねいていたところで時間の無駄であることも明白。
飛鳥は一瞬だけ迷い、しかしすぐに思考を切り替える。
「分かったわよ。やればいいんでしょやれば！」
「……どうして半ギレなのか分かりませんが、まぁそういうことです」
氷室の右手に青い槍が握られる。
習い、飛鳥もその手に弓矢を構えた。

「狙いは一点。地面すれすれに浮いている部分の中心です」
「了解」
二人に残された力は残り少ない。
この場で力を使いきるにはいかないが、恐らく中途半端な力ではあの塊を破壊することはできないだろう。
とはいえ、加減を間違えれば中にいる真吾もろとも吹き飛ばしてしまう可能性もある。
色んな意味で面倒だなと、口には出さずに氷室は舌打ちした。
「行きますよ」
「いつでもいいよ」
一拍の間。
直後に、それぞれの一撃が解き放たれる。
雷の矢と水流は絡み合い、一つになって一点に直撃した。
音らしい音はない。
が、微かにその塊には亀裂が生じていた。

「もう少し威力を」
「うん」
二人は徐々に力を上げていく。
小さなヒビが上方向に走り、ビシビシと音を立てながら裂け始めた。
そしてとうとう、亀裂は頂点にまで達し、黒い塊に縦一閃の筋が走る。
やがてそれは音もなく弾け、空気に溶けるように消えていった。
その中から、崩れ落ちるように真吾の体が投げ出され、そのまま根の床の上に落下する。
「真吾！」
飛鳥が駆け寄る。
「ちょっと、しっかりしなさいよ！」
体を揺すると、呻くように真吾は声を漏らした。

とりあえず命に別状もなさそうだが、ひどく衰弱しているような様子だ。
「……お、お前ら……」
「気がつきましたか？」
「……俺は、どうして……」
「どうしてって、こっちが聞きたいわよ。変な塊の中に閉じ込められてるし、氷室が気付かなかったらアンタごと壊してたんだからね」
「……そう、だ。アイツは、アイツはどこに……うっ……」
起き上がろうとするものの、真吾の体はまともに動こうとはしなかった。
目立つ外傷などは何もないのに、ひどく体力を失っている。
「早く、早くアイツを止めないと……」
「ええ、そのつもりです。それで、肝心のやつはどこに？」
「最深部。そこでアイツは、最後の儀式を行うはずだ。それを止められなかったら、もうどうしようもない」
「だったら急がないと。早く最深部へ行こうよ」
「そうですね。急ぎましょう」
「……お前達は、先に行け。俺もすぐ追いつく」
「……分かりました。状況が状況ですから、今はあなたの言葉に従いますよ」
「野垂れ死んだりしたら、承知しないからね」
それだけ言い残して、二人は先を急いだ。
その背中を見送ってから、真吾はよろめきながら立ち上がる。
「く、そ……力のほとんどを奪われてやがるな。あの檻みたいなのが、少しずつ力を奪っていったのか……」
すでに今の真吾に戦うために使える力などは残っていなかった。
それどころかこうして、歩くことさえもままならない状態。
「後から追いつくとは言ったが、それも怪しいな……」
呟き、乾いた笑いが漏れる。

時間がない。
それは、あらゆる意味でのことだった。
この世界がなくなるまでの時間。
もしかしたら、それよりも早く真吾は……。
「……頼む、もう少しだけもってくれよ、俺の体。望まれて生まれたわけじゃない俺にも、今は帰る場所があるんだからよ……」
引きずる体は重い。
全てが終わるまで、自分はそこに居られるだろうか？
答えを待つ暇もなく、真吾は自由の聞かない体を引きずり始めた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２５：彼の願い

「……さて、処理も終わったことだし、僕も急がないといけないな」
それは砂煙の中に横たわるモノに一瞥すると、何事もなかったかのように去って行った。
僕の体は跳ね返された一撃によって吹き飛ばされ、根の地面に叩きつけられて何度も転がった。
痛みを感じるよりもまず、意識が遠ざかっていく感覚に襲われた。
ロウソクの火が次第に弱々しく消えていくように、僕の生命力ももはや風前の灯に等しかった。
……体が動かない。
指一本でさえ、まともに動かすことができない。
かろうじて消え入りそうな呼吸を繰り返すのがやっとで、それを生きていると表現するのは無理があった。
「……か、り……ん……」
遠ざかっていく意識の中で、彼女の名前を呼んだ。
この腕の中で、静かに消えて行ったあの命の重み。
無駄にすることはできない。
必ず敵は討つ。
そう、心にどれだけ強く誓っても、肝心の体はもう動かない。
動こうともしてくれない。
微かに開いた視界の先、赤い水溜りが広がっていた。
それは全部、僕の体から流れ出している血によって形作られているものだった。
全身全霊で打ち込んだ風の力。
それをいともたやすく跳ね返され、無数の風の刃は僕の体を切り刻んだ。
全身の何ヶ所にも傷を負い、傷口は真っ赤な血を流し続ける。
目はかすみ、体温も徐々に奪われていく。

意識が遠のき、世界が暗転する。
「……かりん、ごめ……」
それだけの言葉を搾り出して、僕の意識はそこで途絶えた。
暗転した視界の中、底なしの沼に体が引きずり込まれていくような感覚。
これが……死。
抗うこともできず、ただ引きずりおろされていく。
深い海の底に溺れていくかのように。
僕の体は沈み、自由を失う。
ただ最後に、往生際悪くその手を伸ばしてみた。
しかし、掴めるものは何もなく。
また、堕ちていく……はずだった。
その手が、僕の手を掴むまでは。

眩しさに目を開けた。
そこは、白い……本当に真っ白な場所だった。
部屋なのか、空間なのか。
どちらにしても現実感がなく、夢か幻かと疑ってしまいそうなほどだ。
「……生きてる、のか？　僕は……」
あれだけの血を流してなお、まだ生きているなんて、どうやら僕は相当往生際が悪いか、悪運が強いかしているようだ。
「気がついたかい？」
ふいにかけられたその声に、僕は背後を振り返る。
するとそこに、一人の少年……といっても僕と同い年くらいの風体だが、静かに立っていた。
「君は……？」
「僕の名前は、春彦」
「春彦って……もしかして君が、かりんのお兄さんの……？」
「ああ、そうだよ」

「で、でも、どうして？　確か、君は昔交通事故で死んでしまったはずじゃ……」
「確かに僕は、あの日交通事故で命を落とした。けど、それがどうしても無念でね。どういう奇跡か知らないけれど、僕は僕の心の一部をあの時持っていたぬいぐるみに移すことができた」
「ぬいぐるみ……クロウサのことか」
「そう。それからずっと、僕は妹を見てきた。ぬいぐるみの体では喋ることも動くこともできなかったけど、傍に居れるだけで僕は満足だった。そうやって陰ながらに、かりんを見守っていくつもりだったんだ。あの日が来るまでは……」
「あの日……？」
「ほんの些細な偶然が、かりんと僕の運命を捻じ曲げてしまったんだよ。ちょうど、君がその指輪を拾ってしまったようにね」
「……そうか、かりんが契約者に選ばれて、それで……」

春彦は頷いて答える。
「『Ｒｉｎｇ』と呼ばれるものの力で、また奇跡じみたことが起こった。この人形が意思を持ち、喋るようになったんだ。僕の意思とは違う、別のものがね」
「それが、クロウサだね？」
「そう。けど、別に僕の心が追い出されたってわけじゃなかったんだ。言ってみれば、一つの人形に二つの心が存在するようになった。僕とクロウサは人形を通して意志の疎通はできるけど、人形の主人格はあくまでもクロウサだから、僕は人形の体を介してかりんに話しかけたりすることはできない。そうやって僕はずっと、人形の中で息を潜めていたんだ。かりんが僕を生き返らせようなんていうバカなことも、見て見ぬ振りをすることしかできなかった……」
「バカなことって……そういう言い方はないだろ？　かりんは、君のために必死になってたんだ。間違いだと分かっていても、すがる思いでわずかな望みにかけて、それを君は……」

「分かっている。元を正せば、こうなってしまった一番の原因は僕の死にあるわけだからね。けど、僕はもう死者でしかない。この声がかりんに届くことも、この手が触れることも、二度とないんだ……」

「……っ」

そうだった。

分かっていたのに、僕は身勝手な言葉を吐き捨ててしまった。

一番苦しくてたまらないのは、春彦自身に決まっているというのに……。

「……大和、だったね？　だから君に、頼みがある」

「……頼み？」

「僕はクロウサの中からではあるけど、ずっと君たちの戦いも見てきた。君が真剣にかりんを救おうとしてくれたことも、この戦いを犠牲なく終わらせようとしている気持ちも知っている。だから、頼みたい。一秒でも早く、この無意味な戦いを終わらせてほしい」

「……それは、もちろんそうしたいよ。けど、僕はもう……」

この体はじきに朽ち果てるだろう。

立ち上がる力さえ残されていない僕に、一体何をどうできるというのだろうか。

「分かっている。だから、これは僕にできる最初で最後の助力」

「……何を、言って……」

「――この場に残された僕のわずかな命の欠片、全て君に託す」

「な……」

それは、つまり。

「ま、待ってよ！　そんなことしたら、今そこに居る君は……心の一部でしかない君は、どうなるんだ？」

「……消滅する。恐らくは、かりんの記憶にさえも俺の記憶は残ることはないだろう。いや、最初から僕はこの世界のどこにも存在し

なかったことになるだろう」
「そん、な……」
「気に病むことはないよ。どうせ僕はもう死んでしまっているんだから」
「っ、そういう問題じゃないだろ！」
僕は感情に任せて叫んでいた。
「死んでるからとか生きてるからとか、そんなの関係ない！　そんな、誰の記憶からもいなくなってしまうなんて、そんなことあっていいはずないじゃないか！」
「……大和」
「だってそうだろ？　たとえ死んでしまっても、覚えてくれてる人はいるんだ。かりんがそうだったじゃないか。人形の中で何もできなかったとしても、そのことを嬉しく思わなかったのか？　いつも自分のことを思い出してくれる人がこんなに傍に居たことを、何とも思わなかったのかよ！」
「そんなわけないだろ！」
春彦もまた叫んだ。
様々な感情を押し殺していても、溢れ出す言葉は止められない。
「分かっているんだ、そんな矛盾は。しかし、もうこれしか手段はないんだ。僕の肉体はすでに滅び、存在しない。しかし大和、君はそうじゃない。今ならまだ間に合うんだ。僕のわずかな命の欠片でも、今の君ならまだ立ち上がることはできる。立ち上がって、立ち上がって……何度倒されても、今まで君は立ち上がってくれた。他の誰でもない、かりんのためにだ。だから、だから……」
「春彦……」
「……だから、君に託すんだ……」

……本当ならば。
本当ならば、春彦自身がその拳であいつを思いっきり殴りつけてしまいたいだろう。

しかし、それができないということを嫌というほどに理解しているから。

すでに死んでしまっている自分では、それも叶わないと理解しているから。

「……頼む。かりんの……妹の敵を、討ってくれ。そして、この無意味な戦いの幕を引いてくれ。かりんが最後まで願ってやまなかった、当たり前の時間と世界を……取り戻してやってくれ……」

涙ながらに春彦は言った。

どれだけの悔しさがそこにあっただろう。

どれだけの悲しさがそこにあっただろう。

大切な人をその手で守ることさえできないこと。

大切な人を目の前で失ってしまうこと。

そして何より、大切な人が願ったことさえ叶えられないこと。

それはきっと。

ナイフで心臓を抉り取られるよりも。

拳銃で頭を撃ち抜かれるよりも。

生きながら炎で身を焼かれるよりも。

ずっと、ずっと……。

――心が痛んで、仕方のないことなのだろう。

「……もう一度だけ言う」

その言葉に、僕は顔を上げる。

「僕の命を、君に託す。どうか、打ち勝ってほしい。全ての間違いを、打ち砕いてくれ」

そして、弾けた光。

あまりにも儚く、弱々しく、しかし暖かい命の欠片。

僕の胸の中に、溶け込んでいく。

「……ああ、分かった。必ず……必ず止めるよ。だから、だから君も……」

溶け込んだ光が広がっていく。
春彦の想い、記憶、全てが流れ始める。

「――ここで、最後まで見届けてくれ」

体の中、どこかで誰かの声がした。
ああ、と、そう一言。
優しい声で、頷いていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２５：彼の願い（後書き）

お久しぶりになります、作者のやくもです、こんにちは。
四月末に事故で腕を骨折してしまい、そのせいで執筆作業ができない状況が続いていましたが、近日になってようやく完治できましたので、執筆作業のほうを再開させていただきます。
長らくお待たせした読者の皆さん、本当に申し訳ありませんでした。
なお、本日投稿したもう一つの作品の続編、ｗｅ　ｃａｎ　ｎｏｔ　ｆｌｙ．ｂｕｔ――――の後書きにても同じようなことを書かせていただきましたが、その中の一部にある小説の削除に関するコメントですが、規約の方で極力小説の削除は控えるようにと注意書きがありましたので、削除ではなく更新未定という風に言い方を変えさせていただきます。
どちらにしても読者の方々にはご迷惑をおかけしますが、なにとぞご了承ください。
それでは今後ともよろしくお願いしたします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２６：奇跡の還る場所

「大和、ねぇ大和ってば！」
「……出血がひどすぎます。これでは、もう……」
「っ、縁起でもないこと言わないでよ！　そんなわけないでしょ！」
飛鳥と氷室は先を急ぐ途中、地に伏して倒れていた大和の姿を見つけた。
二人が駆けつけたとき、すでに大和の意識はなく、おびただしい量の出血が赤い水溜りを作っていた。
それからこうして必死に声をかけ続けてはいるが、大和からの反応は何も得られないでいる。
常識的に考えれば、目の前に広がっている血液の総量はとっくに致死量のそれを超えている。
だからもう、生きているはずはないのだと。
心のどこかではそうと分かりつつも、突きつけられた現実を認めたくないがゆえに声をかけるのだろう。
「何やってんのよ大和、こんなとこで寝てる暇なんてないのに……」
「……飛鳥、気持ちは分かりますが……あなたも分かるでしょう。冷え切ったこの体が、何を物語っているのか……」
「っ、それ、は……」
飛鳥の体から途端に力が抜けていく。
花がしおれてしまうように、力なくその場に膝を着いた。
「……私達だけでも先に行きましょう。ここでいつまでもこうしているよりは、ずっといいはずです」
その言葉に飛鳥はすぐには反応を示さなかったが、しばしの後、思いつめたように小さく首を縦に振った。
二人は立ち、先を急ぐためにその場を立ち去ろうとして……。
「……待って、くれ」
ふと、そんな声を聞いた。

しかしその声は、この場に横たわる大和のものではなく。
二人は揃って声のした方向を振り返る。
今もなお薄い砂煙の壁が立ち込める中、周囲は根の床の一部が抉り取られたように変形し、残骸と化していた。
その、瓦礫の奥に一つ。
うっすらと見える影があった。
目を凝らしてそれを見てみると、それは……。
「ア、アンタは確か」
「……人形、ですか？」
崩れた根に背中を預けるようにして姿を見せたのは、クロウサのものだった。

「どうしてアンタがこんなところにいるの？　あの子と一緒じゃないの？」
「悪いんだけど、今はいちいち説明してるだけの余裕がないんだ。頼む、オイラを大和のところに連れて行ってくれ」
「大和、の……？」
「……それは簡単ですが、しかし大和はもう……」
氷室はわずかに背後を振り返る。
そしてそこには、やはり見間違えなどではない、すでに体温を失った大和の体が冷たく横たわっていた。
「……っ」
「いいから、早くしてくれ。本当に大和を見殺しにするつもりか？」
「見殺しって……それ、どういう……」
「時間がないんだ！　急いでくれ！」
クロウサは怒鳴った。
人形相手だというのに、氷室も飛鳥もその鬼気迫る迫力に気圧され、無言で頷くしかできなかった。
クロウサを拾い上げて、もう一度大和の横に行く。
「オイラを、大和の胸の上に置いてくれ」

「う、うん。こう、でいいの……？」
言われるがままに、飛鳥はクロウサの体を大和の胸の上に置いた。
「ヤマト……」
ふいにクロウサはその名を呼び、人形であることを忘れさせるほどに人間らしい、悲しい表情を浮かべた。
「アイツとの……ハルヒコとの約束だ。君にばかり辛い目を、痛い目を見せて本当にごめんな。でも、これで最後だから。最後になるって、信じてるから。オイラも、ハルヒコも。そして……かりんも」
「ちょっと、それってどういう……」
飛鳥のその言葉を無視して、クロウサは自分の中にあるもう一つの命を捧げる。
悔しさも悲しさも、優しさも喜びも、全部全部めいっぱいに詰め込んだ、わずかな命の欠片を。
「頼んだよ、ヤマト……」
そして、光が生まれた。
それは光と呼ぶには、あまりにも弱々しい輝きで。
しかし、世界中のどんなものよりも暖かく、そして優しさに満ち溢れているような、そんな淡い光だった。
その光の雫が、一つ、また一つと大和の体に浸透していく。
やがてその光は、大和の全身へと行き渡る。
体全体を薄い光の幕で覆われたように、大和の体は静かに発光していた。
その光が徐々に内側に集まっていき、最後には心臓の真上で球状になり、そして胸の中へと沈んでいく。
光が止む。
胸の上のクロウサは糸が切れたようにバランスを崩し、静かに転がって地面に落ちた。
それを拾い上げようと、飛鳥が手を伸ばしたときだ。
――ドクン。

「……え？」
「今のは、まさか……？」
聞こえたのは、確かに心臓の鼓動。
そしてその音の発信源は、間違いなく……。
二人の視線が一点で交差する。
そこに横たわる、大和の体へと。
「……う……」
その口から、声が漏れ。
その眼が、薄く見開かれ。
「……はる、ひこ……？」
その言葉と共に、凍り付いていた体は動き出す。
たった一つの、破ることのできない約束のために。

「そう、だったんだ。そんなことが……」
「彼女のお兄さんが、大和に全てを託してくれたんですか……」
目覚めた僕は、今までの経緯を二人に説明した。
かりんがすでに死んでしまったこと。
僕も死に掛けていたこと。
その危機を、かりんの兄である春彦の奇跡が救い出してくれたこと。
あらかた話し終えると、場の空気はやはり自然と重苦しいものとなった。
氷室も飛鳥もどちらからともなく口を閉じ、余計な言葉を発することはなかった。
二人とも、僕がかりんに対して強い思い入れをしていたことを知っているから、気を使ってくれているのだろう。
そんな中、僕は飛鳥の持つクロウサに目が向かった。

目が合うと、クロウサはなんとなく満足そうな表情をしたような気がした。
「ヤマト、ハルヒコに会ったんだね？」
「……うん。彼に、助けられたよ。前は、かりんにも助けられた。本当に僕は、助けられてばかりだ」
「だったら、今度はお前の番だよな？」
「そうだね。二人との約束は、必ず果たすよ。僕の命に代えたって、絶対に……」
「意気込むのはいいけど、勘違いするなよヤマト。仮にアイツを打ち倒せたとしても、その代償としてお前が……いや、もう他の誰も傷ついたり、命を落としたりしちゃいけないんだ。そのことを忘れるな」
「……うん、分かったよ」
「よし。それじゃ……」
ふいに、クロウサの喋り方に苦しさが混ざったような気がした。
それは決して気のせいなんかではなく。

「……オイラの役目は、これでおしまいだ」
「……え？」
どういうことだと、僕は言葉に出せずにいた。
「もともとオイラは、かりんの持つ『Ｒｉｎｇ』の力の影響で、こうして喋ったりすることができていたんだ。けど、かりんはもう死んでしまっている。『Ｒｉｎｇ』の力は契約者がいなくなれば自然に消滅する。だからオイラも、もうすぐ……」
「クロウサ……」
「……ヤマト、オイラがただの……ただのぬいぐるみに戻ったら、オイラの背中を開けてくれ。その中に、かりんの『Ｒｉｎｇ』が……ある」
「クロウサの、中に？」
「……なるほど。そういうことですか」

「そういうことって、どういうことよ？」
「不思議には思っていたんですよ。『Ｒｉｎｇ』は身に着けなくては効果がないのに、彼女にはそんな様子はなかった。私達のようにアクセサリとして身に着けているなら不自然ではないですが、彼女はそうではなかった。ですから、どこに『Ｒｉｎｇ』を持っているのかとは思っていたのですが……人形の中だったのですね。だから彼女は、常にこの人形を抱きかかえていた」
「……多分、それだけじゃないと思う」
僕は独り言のように告げる。
「この人形……クロウサは、かりんが春彦からもらった最後のプレゼントだった。クロウサだけが、死んでしまった春彦と繋がる、たった一つの触れることのできる記憶だったんだ。だからかりんは、何よりも春彦に近いこの場所に、奇跡さえ起こせるかもしれない『Ｒｉｎｇ』を隠していた。いつか本当にその奇跡が起きて、春彦が自分の目の前に笑って、またやってくるんじゃないかって、そう思って……」
「……全く、ヤマト、君ってヤツは……」
クロウサはどこか、満足そうに笑った気がした。
「……もう、時間みたいだ。それじゃ、オイラも消えるよ。君達との出会いは、決して好ましい形によるものではなかったけれど、結構楽しい時間を過ごさせてもらったよ。できるならもっと、君達とかりんが別の形で……巡り会えて……いれ、ば……」
遠ざかる声。
少年を思わせる無邪気なその声が、消えていく。

「――サヨナラだ、ヤマト」

「……うん。ありがとう、クロウサ。きっと、かりんもそう思ってくれてるよ」
「だと、いいなぁ……」

人間以上に人間らしかった人形の、あるはずのない奇跡が生んだ小さな命が消える。

「……カミサマ、もしもいるのなら、どうか、次こそは……――」

そして、言葉は途切れる。

僕の手の中で、クロウサと名づけられた人形はカクンと首を傾げた。

そしてそれっきり、二度とあの少年の声で話し出すことはなかった。

最後の最後、クロウサは……何と言っていただろうか。

消え入りそうだったその言葉を、僕はしっかりと聞き取っていた。

だからこそ。

「……飛鳥、氷室」

二人の名を呼び、立つ。

「――行こう」

止めなくちゃいけない。

今はもういない人達との、誓いを果たすために。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２７：最終戦開始

「……頃合、かな？」

それは一人、虚空へと呟く。

大樹の根の、その最深部。

本来、何者の手によっても犯すことは許されない禁忌の領域であるその場所。

はるか昔、神の手によっていくつもの並列世界が創造され、その一つ一つの世界に最初に撒かれた大いなる種子。

原初の記憶。

その種子が、今こうして……それの目の前にあった。

青白い光をわずかに放ちながら、まるで生物の心臓のように静かに鼓動を刻み続ける。

ドクン、ドクン。

ドクン、ドクン、と。

いや、心臓のように、ではない。

それは紛れもなく、心臓そのものなのだ。

何世紀という、気が遠くなるような歳月を、ずっとこの場所で過ごし続けてきた。

そして様々な時代を超え、この世界のありとあらゆることを記憶してきたのだ。

それが目的とする、世界を新しく造りかえるということは即ち、そこにある過去に記憶を改竄するということだ。

そうなれば、歴史は狂いだす。

ありもしない事実が真実となり、あるはずのない舞台が目の前に広がるだろう。

死人は甦り、逆に生きる人こそ死に絶える。

そしてそれらは、誰の目にもおかしいという風には映らなくなる。

さもそれが当然というように、それが正しい記憶となってしまう。
「……辿り着いた。ようやく辿り着いたよ。神でさえ触れることのなかった領域に、今、ようやく……」
それは不敵な笑みを浮かべる。
その笑みは素直に喜びの感情から生み出されたものであったが、誰の目に見てもその笑みは狂気を含んだものだった。
「これでこの世界は、もう一度やり直すことができる。正しい道だけを歩み、誰もが苦しまずにすむ理想郷になる……」
その手が、原初の記憶へと伸びる。
手の中にすっぽりと納まってしまうほどの大きさのそれは、わずかに力を込めるだけで粉々に砕け散ってしまいそうなほどの儚さだ。
伸びた手の指先が、触れる。
……その、刹那。

バチンという音と共に、触れかけた指先を見えない何かが弾き返した。
「っ、この期に及んで、まだ抗うというのか、種子よ」
問いはすれど、種子は答えない。
青白い鼓動は静かに繰り返し、何事もなかったかのように今を流れる。
「……いいだろう。抗うのならば、どこまでも抗うがいいさ。そして、その記憶に焼き付けろ。世界が変わる瞬間を」
それはさらに、強引に手を進入させていく。
バチバチと、抵抗する白い火花が周囲に飛び散った。
しかしその上からでも、伸ばした指先は徐々に種子へと近づいていく。
ビシビシと、亀裂が生じるような音がした。
見れば、障壁のような光の壁にいくつかのヒビが入っている。
進入する力に耐え切れず、悲鳴を上げているようだった。
「……無駄なことを。悟るがいい、抗うことの無力さを」

さらに押し出す力が強まる。
亀裂が一つ、また一つと増え、そして透明な破片が少しずつ崩壊し始め……。
「終わりだ……」
ダメ押しと言わんばかりに、更なる力を込めたそのとき。
その背後で、巨大な爆音が響いた。
次に、まるで台風を思わせるような強い風。
確かな敵意を持って飛来するそれを、それは咄嗟に両手で受け止めた。
ものすごう風圧。
岩壁さえ楽々に抉り取るであろう威力の風だったが、それを受け止めた両手にはかすり傷程度しか与えられてはいない。
「ち……」
しかし、咄嗟に両手で受け止めてしまったせいで、種子へと伸びていた片手も引き抜かれてしまっている。
ヒビだらけになっていた障壁が、ここぞとばかりに瞬く間に修復されていく。
それは舌打ちしつつも、視線を背後に向ける。
衝突した突風の名残が煙を巻き上げ、視界は薄い霧の壁に阻まれていた。
その煙幕が、次第に薄れていく。
そして、その向こう側に。
「……なぜ、お前が……」
確かに命の鼓動を奪い取ったはずの少年が、立っていた。
「……お前の好きには、させない……！」
風の剣を構え、僕は告げた。
もうここしか、チャンスは残されていない。
ここでアイツを食い止めないければ、何もかもがおしまいになってしまう。

この世界の運命も、僕達の運命も、そして……僕達に全てを託してくれた人達の気持ちも。

「……本当に、君には驚かされるばかりだ」

身を翻し、それは言った。

「これで実質、二度目かな？　君が死の淵から這い上がってきたのは。理解できないな。僕が言うのも変な話だが、君は本当に人間なのかと、考えさせられるよ」

「悪いですが」

氷室が口を挟む。

「あなたと呑気にお喋りしているほど、こっちは余裕がないんですよ」

「そういうこと。今までの分もまとめて返させてもらうからね」

氷室に次いで、飛鳥も弓を引き、矢を構えた。

「頭数さえいれば僕に勝てると思ったかい？　確かに手間はかかるだろうが、さしたる問題ではないさ。一人消すも三人消すも、もう大して変わりはないのだから」

「……そうやって」

「ん？」

「……そうやって、他人を傷つけてきたのか？　そういう気持ちで、かりんを殺したのか……？」

ふと気がつくと、僕は声を押し殺すようにして聞いていた。

そしてそれは、勤めて冷淡に言葉を返す。

「考えたこともないな。どの道、君達が倒れれば世界は生まれ変わるんだ。その世界でまた生を受けるのだから、どちらでもいいだろう」

何の含みもない、ただトゲを剥き出しにしただけの茨の言葉。

分かっていたはずだった。

もうすでに、言葉を交わすような状況などはとっくに通り越しているということ。

それでも心のどこかには、甘さが残っていて。
僕は今でも、戦わずに済む道があればそれを選びたかったんだろう。
……けど。
今の言葉で、今度こそ理解した。
もう、交わす言葉はない。
どちらかが起き上がれなくなるまで倒れることでしか、互いの気持ちを現実にすることはできないのだと。
「……氷室、飛鳥。頼みがあるんだ」
「え？」
「……一応、聞きましょう」
「アイツは、僕一人で倒す。ううん、僕が倒さなくちゃいけないんだ。だから、二人とも手を出さないでほしい」
「……大和、本気で言ってるの？」
呆れたような飛鳥の声にも、僕は無言で頷く。
「……癪ですが、彼の言葉は間違っていませんよ。仮に私達が三人がかりで一斉に向かっても、恐らく勝てません」
「分かってる」
「分かっていて、それでもなお一人で戦うと？」
僕はもう一度、無言のまま頷く。
「そんなの、できるわけ……！」
怒鳴りだした飛鳥の言葉を、氷室が目で制した。
そして氷室は、その手に握っていた水の槍を静かに消し去った。
「……いいでしょう。あなたの好きにしなさい」
「ちょ、ちょっと氷室、本気なの……？」
「……納得したわけではありません。ですが、大和にはそうするだけの権利があるような気がするんですよ」
「あ……」
氷室の言葉を受けて、やがて飛鳥も構えた弓矢を静かに下ろし、

消した。
「……分かった」
「……二人とも、無理言ってごめん。ありがとう……」
「大和、その代わり私達からも条件があります」
「……ん」
「……必ず、生きて彼を倒すこと。たとえ相打ちで倒したとしても、それじゃ誰も救われません。それだけは覚えておいてください」
「……」
その言葉に、僕は答えることも頷くこともしなかった。
できなかった、と言ったほうが正しいかもしれない。
「……ちゃんと、戻ってきなよ。私達のところへ」
「……うん」
僕は数歩、前へと歩み出る。
「話し合いは済んだのかな？」
「……ああ、終わったよ。そして……」
その手に握った剣の切っ先を、それに向ける。

「――お前も今、ここで終わるんだ」

「――世迷言、だね」

合図はない。
しかし、二つの影が地を蹴ったのは全くの同時だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２８：一閃の果てに

余計なことは何一つ考えていなかった。
ただ、自分の中にある力という力を全部、一点に集約してぶつけるだけ。
敵わないかもしれない。
及ばないかもしれない。
けど、きっとそれは無駄なことじゃない。
「うあああああっ！」
どうなったって構わない。
かりんと春彦、そしてクロウサと交わした約束を果たせるのならば、僕の体なんか……命なんか、いくらでも放り出していい。
たとえそれが、結果的に誰かを悲しませるものになったとしても。
……それでも、構わない。
たった一度……いや、一瞬でいい。
目の前の敵を超越できるだけの……力を。
願うように剣をかざす。
振るえ。
ただ、真っ直ぐに。

どんな衝撃音が響いたのだろうか。
少なくとも、僕の耳にはその音は届いていなかっただろう。
ありったけの力で振り下ろした剣は、刀身全体から空気の渦を巻き上げ、音速を超える速度で回転していた。
空気が裂け、真空が生まれる。
体を支える二本の足が、根の床を削り取りながら沈んでいった。
「……っ、ぐ……っ」
巻き起こる烈風。
真空の刃が、目の前の敵と同時に我が身にも跳ね返り、腕や足、

肩や頬を何ヶ所も切り裂いた。
鮮血が迸るが、赤い雫は空気の渦に触れるや否や、跡形もなく飛散して消え去る。
そんな痛みに構っている余裕はない。
剣を握るその両手だけに、渾身の力を込める。
だが、それでも。
振り下ろしたはずの剣は、目の前を切り裂くまでには至らない。
「ぐ、が……っ、ああ……」
まるで闇のカーテンのように、黒い障壁が風の剣を受け止めていた。
皮一枚か、あるいはそれ以下の厚みしかないその壁に、しかし風の剣はそれ以上食い込むことができない。
「……っ」
かたや、風の剣を受け止めるそれも、決して楽ではなかった。
まだ片手でしか防御をしていないとはいえ、今までの力量からは想像もつかないほどの大きな力が押し寄せていることを実感させられている。
「……この期に及んで、どこにこんな力が……」
片手だけではどうやら耐え切ることができないようだ。
それは初めて、目の前の力に危険性を感じていた。
「くっ！」
風の剣を、両手で受け止める。
障壁の力が一段と強まり、振り下ろされた風の剣をわずかに押し返す。
「く、そ……っ、まだ、だ……もっと強く、強く……」

轟、と。
その言葉に答えるかのように、風は強さを増した。
もはやその規模は大型の台風か、いや、あるいは嵐にさえ匹敵するものになっているかもしれない。

全身を引き裂くように駆け巡る痛み。
肉は裂け、骨は軋み、血が噴き出した。
それでも、剣を握る手は離さない。
絶対に、離せない。
「ぐっ……」
それは歯噛みした。
おかしい。
もうとっくに、目の前の少年の体には力は残されていないはずだ。
立っているのもやっとのはずのその体の、一体どこにこれだけの力があるというのか？
底なしに溢れてくるそれは、恐怖の対象として十分認識できるものだった。
危険だ。
本能がそう告げる。
ならば、手段を選ばず今この場で、確実にその息の根を止める必要性がある。
両の手はこれ以上動かせない。
少しでも力を抜けば、その隙にこの風は更なる力で振り下ろされ、間違いなくこの体を両断するだろう。
持久戦に持ち込めば先に倒れるのは少年のほうだろう。
しかし、今までのことも考えるとそんな確証のない理由に頼るのは愚かな行為だ。
理屈や計算では、少年の力は把握できるものではない。
現に少年は、二度もの死線を潜り抜けて今この場に立ちはだかっているのだから。
「っ、ならばこれで止めを刺してやるまでだ！」
グニャリと、それに付き従うようにまとわりついていた闇が蠢いた。
影が異形の型を成し、うねりを繰り返しながら変形していく。

「っ、な、に……？」
僕は視界の端で　その影を微かに捉えていた。
グニャグニャと曲がりくねりながら、黒い影が見る見るうちに変形していく。
やがてそれは、五指を鋭く尖らせた巨大な手……魔手の姿と成る。
「あれ、は……っ！」
それには見覚えがあった。
あの夜、確かに一度僕の心臓を貫いた黒い刃。
禍々しいその切っ先は、さらに漆黒の濃さを増しているようにも見える。
「……一度は確かに、貫いたはずだが」
それが語る。
「どうやらその程度では、手緩いらしい。だから今度は、跡形もなく握り潰させてもらうよ。欠片も残らないようにね」
ギリギリと音を鳴らしながら、魔手がその五指を大きく開き、構えられる。
「く……っ！」
今剣を握る手を離せば、障壁の押し返す力でこの場に集まった全部の力が飛散してしまう。
かといって、この体勢じゃどれだけ真正面から飛んでくるものであろうとも、回避することはできない。
一体、どうすれば……！
魔手は狙いを定めた。
一点、その体の中心にある命の鼓動を絶つために。
ならばこちらも、一か八かでも賭けに出るしかない。
あの魔手があるということは、多少なりともそれの集中力、および注意はそちらにも割かれているはず。
ならばその分だけでも、障壁を生み出す力も弱まっているはずだ。
魔手が僕を目掛けて解き放たれる、その瞬間。
一瞬だろうけど、必ずそこで障壁の力は弱まる。

そこに、賭けるしかない。
どうせこのままじゃ消える命なのだから、最後に限界を超えた奇跡を……！

「……か、りん……春彦、クロ……ウサ、力を、貸してくれ……」
その言葉が、今はいない人達に届いたのだろうか。
クロウサから受け取ったかりんの『Ｒｉｎｇ』。
ポケットの中にしまいこんだ、すでに力を失ったはずのその『Ｒｉｎｇ』が、再び弱々しくも光り始めた。
まるで、最後の後押しをしてくれているかのように。
「これが本当に最後だ。もう、何人たりとも邪魔はさせない」
魔手が、静かに呼吸した。
シンと、一瞬の静寂。
一瞬の後、動く。

「――冥府の鉤爪よ、心の臓を握り潰せ」

魔手が走る。
同時に、障壁による押し返す力がわずかに弱まった。
その刹那の拍子を、見逃さない。
「い、けえええええっ！」
呼応する音の『Ｒｉｎｇ』。
風と音は今一つとなり、それは……詩となった。
「な、に……？」
障壁に亀裂が走る。
小さなヒビが枝葉のように次々と分かれ、やがて表面全体に行き渡り、ついには障壁がガラスのように砕け散る。
「ば、かな……っ！」
振り下ろされる力は、すでに風ではなく。
それはいつの日か、滅びを予め定められた一つの世界で、一人の

吟遊詩人が奏でた詩。
幾重にも折り重なった時代と場所を超え、今この場所でその詩は、ようやく誰が為に紡がれること知る。
かつてない力が来る。
ただ真っ直ぐに、一片の迷いも躊躇いもなく。
真っ直ぐに、振り下ろされる。
……だが。
「……確かに見事な力だが……残念だがわずかに遅いね」
そう。
振り下ろされる力よりもわずかに早く、魔手は僕の心臓に到達しようとしていた。
当然、回避しようにも僕の体は言うことを聞いてくれないし、そもそもそんな力はもう体のどこにも残されていなかった。
だからせめて、相打ちになってくれと。
そう願って、僕はその目を閉じかけていた。

……ごめん、かりん……春彦……クロウサ。

……約束、守れないみたいだ……。

視界が暗転する。
そしてその直後に、確かな手応えを感じた。
しかし、やはりそれよりも一瞬だけ早く、僕の心臓はあの魔手によって握り潰され……。
……握り、潰されて……いない？
「え……？」
視界が開く。
すると、僕の胸の手前で魔手はピタリとその動きを止めていた。
その魔手が、目の前で音もなく崩れ去っていく。
これは一体、どういう……。

内心で呟きながら、僕は視線を移して……。
……そこに。
「……お、前……どう、して……」
苦悶の声で、それは膝を折っていた。
そして、その間には……。

「――しん、ご……？」

その背には、両断されたようなひどい傷跡が鮮明に残っていた。
真っ赤な血がとめどなく流れ出し、足元は地の水溜りで溢れている。
「……よぉ。悪かった、な……面倒ばっか、押し付け……ちまって……けどまぁ、間に合って……よか……」
そして、崩れる体。
血の海の中に、真吾の体は静かに横たわった。

「――真吾っ！」

僕は叫び、駆け寄った。
背後から、氷室と飛鳥の足音も続くようにやってきていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２９：リセット

背中を両断されたその体は、瞬く間に体温を失っていく。
苦痛に歪む表情と、消え入りそうなほど小さな声が痛々しくて仕方がなかった。
「真吾、何で……どうして……っ！」
その体を抱えながら、僕はわけも分からずにそう繰り返すしかできなかった。
駆け寄ってきた飛鳥と氷室も、その傷跡の惨状に目をしかめ、言葉を失っていた。
「何で……何で君が、こんなことに……」
「……いい、んだよ。これが一番、手っ取り早く……全てを終わらせる手段、なんだからな……」
言い終える前に、その表情が再度苦痛に歪んだ。
「……最初に、言っただろ？　俺とアイツは、同一なんだって。俺が消えれば、アイツも消え……俺が、死ねば……アイツも死ぬんだ」
「……あなたは最初から、こうするつもりだったんですね？」
「……氷室？　どういうこと……？」
「……要するに、私達は甘かったということです。特に大和、あなたのその優しさは普通に生きる上でならば間違いなく長所ですが、この戦いの中では不必要な……本来なら切り捨てなくてはいけないものだった。ですが、あなたにはそれができなかった。そのことを理解していたからこそ、こうするしかなかったのでしょうね……」
「……ま、さか……」
僕は遠い声で呟き、真吾に視線を戻した。
「……悪かったな。でも、ここしかチャンスがなかったんだ。迷いを捨てたお前が、なりふり構わずに剣を振るう瞬間。それでもきっと、お前は迷わずにはいられない。剣を振り切る最後の最後の瞬間

に、ほんの少しでも手を緩めてしまうかもしれない」
「……」
「……だから、そうなる前に、俺は自ら命を絶つつもりだった。けれど、神の分身とも言える俺達に自分で自分を殺すことはできない。それは神に剣を向けることに等しいからだ。つまり、俺はアイツを殺せないし、アイツは俺を殺せない。だったらもう、別の第三者にどちらかを殺してもらうしかないんだよ……」
「……でも、だからって……！」
「……氷室にもな、一回頼んでみたんだ。殺してくれってな。けど、あっさり断られた。お前ら三人の中で、一番感情を押し殺せそうなやつに拒否された時点で、もうお前にも飛鳥にも同じことは頼めないと悟った。それどころか、余計な迷いを生ませることになっちまったかもしれないしな……」
「……」

「……けど、どうして今なんだよ！　あのままでも僕は、もしかしたら相打ちくらいには……」
「それじゃ、ダメなんだよ」
「……え」
「……お前が死んだら、何の意味もないだろ。何で今、お前が生きていられるか……分かってんだろ？」
「……っ」
「それにな、確かに相打ちにはもっていけたかもしれない。けど、やっぱりそれは無理だ。こうして今俺が、喋っていられるのが答えだろ？」
　それはつまり、あの一振りで完全に絶命まで追い込むことができなかったということだ。
　苦しみや苦痛を与える暇など、それこそ与えてはいけない。
　どれだけ死が近づいても、死に至る前の時間は生きているのだから。

ならばそのわずかな時間でも、種子を破壊してこの世界を破壊するくらいの芸当は、十分可能だっただろう。
「けど、これでもうその心配もない。俺が動けない体なんだから、アイツも動けない。あとはこのまま、死を迎えれば……それで全て、丸く収まるんだよ……」
「っ、そんなの、納得できるわけ……！」
「できなくてもするんだ」
その言葉だけで、僕はそれ以上何も言えなかった。
「理屈だけで全てが整理できるほど、この世界ってやつは綺麗にできてないんだよ。どんな時代でも、どんな場所でも、必ずどこかで犠牲は必要になってくる。例えどんなに些細な出来事であってもだ。俺はそれを、嫌というほどこの目で見てきた。だからもう、慣れちまったんだよ」
「……真吾」
「……お前らはお前らなりに、できることをした。胸張れよ、俺が保障してやる」
「……そんなの、全然嬉しくなんか……」
「……バカヤロウ。泣いてんじゃねぇよ。あの子との約束、ちゃんと守れたじゃねぇか」
「……っ」
「お前らはただ、笑ってればいいんだよ。面倒ごとは全部、俺が引き受けてやる。こう見えて、お前らの何千倍の時間生きてきた人生の大先輩なんだぜ？　死ねるなんて、願ったり叶ったりだ。怖くも、何ともねぇよ……」
そう言い放つ真吾の目の端からは、言葉とは裏腹に、透明な雫がわずかに滲み出していた。
「……クソ、何だよ、これ。ハハ、笑えねぇ……笑えねぇよ。何で、俺……泣いてんだろうな……？」
ハハハと、真吾は痛みの中で乾いた笑いを見せた。
その声も、しだいに掠れたように遠のいていく。

とうに冷え切ったその体を、今の今までかろうじて動かしていた力が……なくなる。

「……時間だな。そろそろ、お別れだ」

「真吾……っ！」

「……」

「っ……！」

「……大和、最後に一つ、頼まれてくれ」

「……何？」

「施設のあのバカに、伝えといてくれ。心配かけて、悪かった。もう、全部終わったってよ」

「……嫌だ」

「……」

「伝えたいなら、自分の口で言えよ。そうじゃないと、意味がないだろ」

「……ふぅ。最後の最後で、キッツイこと言うぜ……しかし、まぁ……」

真吾は静かに眼を閉じる。

涙の跡が乾き切る前に、その目は光を失った。

「――できると、いいな……」

その体はもう、二度と動くことはないだろう。

そして対となる、もう一つも。

「……結局、僕もまた手のひらの上……そういう、こと……か……」

たった一言、それだけを言い残してそれは息絶えた。

二人の死体はその後、音もなく空気に溶け、風化するかのようになくなった。

その跡には、二つの『Ｒｉｎｇ』だけが取り残されていた。
僕はそれらを拾い上げる。
力を失いかけた二つの『Ｒｉｎｇ』は、もうただの銀細工でしかない。
「大和」
氷室の声に、僕は振り返る。
「これを……」
言って、氷室は僕にそれを手渡した。
それは、二つの『Ｒｉｎｇ』だった。
「一つは私の、もう一つはあの男から奪っておきました」
「はい、私も」
飛鳥からも同様に、二つの『Ｒｉｎｇ』を受け取る。
「私のは、相手が持っていけって投げてよこしたんだけどね」
これで計八つの『Ｒｉｎｇ』が、この場に集まったことになる。
しかし、最後の一つは……。
「余計な心配はしなくていい」
その声に、僕達は振り返る。
「君は……」
そこには、日景の姿があった。
「どうして、君が……」
「構えなくていい。もう、全て終わっているんだろう？」
「僕達はその言葉に無言で頷いた」
「そうか。僕の『Ｒｉｎｇ』からも、力の大半がなくなっている。もしやと思ったら、案の定だったか」
日景は手の中の『Ｒｉｎｇ』を一瞬だけ見つめ、それを僕に向けて放った。
「これは……」
「持って行け。もう僕には用のないものだ。お前が思うように、使えばいい」
「……大和、全ての『Ｒｉｎｇ』を持って、あの種子のところへ」

「あ、うん……」
「……黒栖大和」
名を呼ばれ、僕は振り返った。
「お前は……」
「……」
「……いや、いい。何でもない」
その時、日景が何を言おうとしていたのか。
僕には何となく、見当がついていた。
日景もそれを察したのだろう。
だから、その問いを投げることまではしなかった。

根の階段を上り、種子の前に立つ。
青白く光りながら鼓動を繰り返すそれは、間近で見れば生命の躍動そのものだった。
生物の心臓が鼓動を繰り返すように、この巨大な樹もまた生き、鼓動を繰り返している。
それも、何億年という、それこそ気が遠くなるような昔から。
決して人目につかない、この大地の底の底。
たった一人で、時を刻み続けてきたのだろう。
僕は手の中にある九つの『Ｒｉｎｇ』を、種子の前に置いた。
すると、種子の鼓動に反応するかのように、光を失った『Ｒｉｎｇ』から同じ色の光が放たれ始めた。
九つの『Ｒｉｎｇ』はやがて、それぞれが溶け合うようにして一つになり、光の球になった。
眩しいほどの光を放つそれは、やけに暖かく、優しく包まれるような感覚だった。

「――九つの遺産全てを束ねし者よ」
「……声が？」

「――古の契約に於いて、汝の望みを受けましょう」

「僕の、望み……」

「――汝が富を望むなら、数多の財宝を捧げましょう。汝が力を望むなら、血肉に働きかけましょう。汝が滅びを望むなら、あらゆる全てを葬りましょう。しかし、もしも……」

「……」

「――汝が、他の何かを望むと言うのなら。汝が願いを、叶えましょう」

「……僕の、願いは……」

静かに僕は、後ろを振り返った。

そこにいる氷室と飛鳥、そして日景は、目が会うとただ黙って頷いてくれた。

「……僕の願いは、一つだ」

「――訊きましょう。汝が何を望むかを」

「――僕達が生きるこの世界を、ありのままの姿に。二度と、捻じ曲げられることがないように。ただ、それだけだ」

「――それが汝の望みとあらば、契約に従い、叶えましょう」

そう答えると、光の球は静かに種子の中へと浸透していく。

僕の……僕達の願いを、ゆっくりと受け入れていくかのように。

「――契約はここに成立しました。汝が望みし世界に、価値ある未来があらんことを……」

そして、全てが光に包まれた。

僕を、皆を、樹を。

全てを包んで、光は消え、そして始まっていく。

――全ての記憶が、還っていく……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３０：明日

――きっと、また会える……。

それは、誰の言葉だっただろうか……。

「……い、……って。おーい……」

「……ん」

誰かが呼ぶ声。

何だろう、この感覚は。

懐かしいようで、それでいていつも身近にあったような……。

「おーい、……にしろって。とっくに……だぞ？」

「やめとこうよ。朝から疲れてたみたいだったしさ」

「けど、このままにもしておけないだろ？」

「……あ、れ……？」

「あ、起きた」

「お？」

僕はゆっくりと顔を上げた。

見覚えのある四人の顔。

まだ目の前はぼんやりとしているけど、はっきりとそうだと分かる。

「……悟？　それに、皆……どうしたの？」

「どうしたのって、お前なぁ……」

「よっぽど熟睡してたみたいだな、こりゃ」

「え？」

呆れたように漏らす悟と健史。

その隣で小さく笑う美野里と、どこか怪訝そうな表情の唯がいた。

「大和、午後からずっと寝てたんだよ。　覚えてない？」

美野里に言われ、僕は思い返す。

「……そう、だっけ？」
「呆れた。いつから寝てたのか覚えてないの？」
唯はそう言うが、実際僕の記憶はどうにも曖昧で、なかなか思い出せそうになかった。
「ってことは、今ってもう」
「そ。とっくに放課後だよ」
「全然起きないから、皆で起こしにきたんだ。ほれ、とっとと帰ろうぜ。このあと委員会で、この教室使うみたいだしよ」
「あ、うん。分かった」
とりあえず僕は皆に促され、帰り支度を始める。
荷物をバッグに詰め込んで、まだ少しダルさの抜けきらない体を引きずって廊下に出る。

「どっか寄っていくか？」
「んー、どうすっかなぁ」
「中間試験も終わったし、少しくらいは息抜きしてもいいよね」
「うん、そうだね」
「……」
四人の会話をすぐ傍で聞きながら、僕はなぜかこの場所に現実感をあまり感じられないでいた。
何かこう、密度が薄いような……そんな感覚だった。
原因には思い当たる節があった。
それは、言うまでもなく……。
「……大和、大丈夫？」
「……え？」
唯の言葉に僕が答えると、皆の足が止まった。
「どこか調子悪いの？　でも、顔色はそんなでもないよね……」
「寝不足とかじゃないか？　さっきまで寝てたわけだしさ」
「時期的にも季節の変わり目だからな。体調崩すのもない話じゃないけど」

「どこか痛むとかある？」
「あ、いや……」
違う。
違うんだ。
多分この感覚は、肉体的に引きずっているものがあるとかないとか、そういうものじゃなくて。
「……大丈夫だよ。ちょっと、遅くまでゲームしててさ。それでね」
「何だ、やっぱり寝不足か」
「ま、ありがちだよな」
「でも、一応早めに休んだほうがいいと思うな。悪化したら大変だし」
「んじゃ、今日のところは大人しく帰るとするか」
「そうだな。また金曜にどこか遊びに行こうぜ」
そんな風に話がまとまり、止まった足は再び歩き出す。
僕としても、そのほうが都合がよかった。
今はまだ、色んなことに対する気持ちの整理が終わっていなかったから。

「……ねぇ、大和」
「……何？」
「その……何か、あった？」
「え？」
「ううん、気のせいならいいんだけどさ。何か前とちょっと、様子が違うって言うか……そんな風に見えたから」
「唯……」
「気のせいならいいの。私の勘違いだと思うし。ほら、行こう。皆行っちゃうよ」
そう言い残すと、唯は僕の横をすり抜けて走っていった。
そして唯の言葉は、本当はしっかりと的を射ていた。
「色々、あったな。思い出すのも大変なくらいに、本当に……」

……そう。

あれは決して、夢でも幻でもない。

今ある現実から少しずれた、もう一つの現実で確かにあったんだ。

……あれから……全てが終わってから、今日でちょうど一週間。

現実は今日も、狂うことなく真っ直ぐに流れ続けている。

僕の記憶に、色褪せないもう一つの真実を刻み付けたまま……。

こうして五人で放課後の道歩くなんて、ずいぶんと久しぶりな気がする。

ほんの数日前までは、こうしていることがただの当たり前でしかなたっかというのに。

沸き立つように感じるこの懐かしさと居心地のよさは、一体何なんだろう。

しかし同時に感じる、後ろめたさのような息苦しさ。

話せない……話してもまず、信じてもらえないであろう隠し事を胸に抱えているという事実。

もちろんこの真実は、むやみやたらに口外にするようなことじゃない。

例えそれが信じられる、信じられないにかかわらず、だ。

僕は顔を上げて、歩きなれた街並みの変わらぬ風景を眺めた。

何一つ、変わった様子は見られない。

普通すぎる景色。

変化のない日常。

本当の現実というものは、本来ならこういうものなんだ。

だから、僕が関わってしまったあの世界は、ある意味で作り物……バーチャルのようなものなのかもしれない。

けど、それでも。

まぶたの裏に焼きついている光景が、その考えをあっさりと否定する。

あれは間違いなく、現実だった。
今いるこの現実よりも、ずっとずっとリアルで、ずっとずっと必死になれた。
だからどうだ、というわけではない。
そういうことを言いたいわけじゃない。
ただ僕は……納得がいかないんだろう。
取り返せないものが、二度と戻ってこないものが、そこにはいくつもあったから。

「……」
胸の中で大きく溜め息を吐いた。
と、ちょうどそのときだ。
ポケットの中の携帯が、小刻みに震え出したのは。
僕は携帯を取り出し、画面を見る。
新着メールが一件届いたところだった。
が、その差出人は……。
「……あ、ごめん皆」
「ん？」
「どうした、大和」
「ちょっと、用事できちゃったからさ」
「そっか」
「ときに大和、まさかその用事ってのは女絡みじゃないだろうな？」
「そんなんじゃないよ」
「悟、オヤジっぽいよ」
「うるせぇ。普通気になるだろうが」
「まぁ、とにかくそういうんじゃないからさ。それじゃ、またね」
「おう、また明日な」
「途中でぶっ倒れんじゃねーぞ」
皆の言葉に苦笑しつつも、僕はそこで一人道を外れた。
そんな僕を、唯だけは先ほどの怪訝そうな表情で見送っていた。

扉を軽くノックする。
「開いてますよ、どうぞ」
中からその声が聞こえ、僕は扉を押し開けた。
「お久しぶりですね。とは言っても、あれからまだ一週間しか経ってはいませんか」
「そうだね。でもよかった。元気そうだね、氷室」
「大和も無事で何よりです」
メールの送り主は氷室だった。
内容は、今時間があるかどうかというものだった。
けど僕はそれに対して返信さえもせずに、こうして氷室の事務所を訪れてしまっている。
氷室自身、そのことにはあまり驚いた様子はないようだ。
「ケガ、大丈夫？」
「ええ、もう平気ですよ。あの時にはすでに、傷のほとんどは塞がってましたからね」
「そっか。よかった」
「あなたはどうなんです？　大和」
「え、僕？　僕も体はもうすっかり……」
「そうじゃありません。むしろ、心のほうがきついんじゃないですか？」
「あ……」
見透かしたようなその言葉に、僕は反論をできなかった。
「……気にするなとも、忘れてしまえとも言いませんよ。ですが、ある程度は割り切らないと、目の前の現実の中で息苦しくなってしまいませんか？」
「……うん。というより、今も息苦しくて仕方ないのかも」
「……そう、ですか」

そして沈黙が流れる。

時間にして数秒ほどのその間を破ったのは、扉が開く音だった。

「入るわよ？　ってもう入ってるけど……」

ふと、その人物と目が合う。

「……飛鳥？」

「……あれ、大和？」

「私が呼びました。もともと飛鳥も呼ぶつもりでしたが、たまたま今回は飛鳥が尋ねてくるという連絡のほうが早かったのでね。ちょうどいいと思ったので、大和には私から連絡をつけておきました」

「でも、氷室……」

「私は別に、来いと言ったわけじゃないですよ。時間が取れるかどうか聞いて、それから誘うつもりだったんですが、大和がそのままやってきたんです」

「もしかして、いないほうがよかった？」

「あ、違うの。そういうんじゃなくってさ。ただ、その……」

飛鳥は何か言いづらいことを抱えているように、言葉を繋げなかった。

「……戦いは終わりはしましたけど、まだ全部にけじめをつけられたわけではないでしょう。特に大和、あなたはね」

「……」

「あの戦いの記憶は、あなたにとってあまりに衝撃的過ぎた。この場合は悪い意味ですがね」

「ちょっと、氷室……」

「大丈夫。大丈夫だよ、飛鳥」

「大和……」

「僕も、頭では分かってはいるんだ。けど、まだどうしても整理ができなくってさ……」

「それは……無理もないよ。だって、あの戦いの中で一番の傷を負ったのは、大和だもの」

それは肉体的な損傷という意味ではなく、精神的な損傷のことだ。
「……だから、大和はしばらくそっとしておいたほうがいいかなって思って。それで、私からは連絡しなかったんだけど」
「ううん。僕がここにきたのは、僕自身が決めてそうしたことだから。別に氷室のせいじゃないよ。それに……」
「それに？」
「……正直、助かったよ。何て言うか、居づらくってさ。元の日常に戻っただけなのに、何かすごい、息苦しくって……」
「うん……」
「友達と一緒にいるときも、僕だけが皆と違うものを見ているようで……けど、そのことを話すわけにもいかないし、話してもきっと信じることはできないと思うから……」
「……でしょうね。こんなファンタジー、まず誰も信じてくれはしないでしょう。ですが」
氷室は椅子から立ち上がり、続ける。
「私は、それでいいんじゃないかと思ってます。誰にも信じられなくても、信じる者……つまりは当事者である私達さえ、この目で見てきたことを胸にしまいこんでおけば、それでいいんですよ。誰にも話せなくてもいい。誰にも理解されないでもいい。けどそれは、決して夢でも幻でもない。他でもない私達の記憶が、全てを物語っているのだから」
「……うん。氷室の言う通りだと、僕も思う。けど、どうしても……」
「あ……」

どれだけ受け入れようとしても。
どれだけ割り切ろうとしても。
いつも、浮かんでくるんだ。
あの顔が。
あの声が。

守れなかった人と、守りきった約束。
どちらが欠けてもいけなかったんだ、本当は。
けど、それもすでに過去のことで。
こうして世界は、変わらない今を流れている。
けど、どうしても僕には……それでよしとすることができなかった。
「大和」
氷室に呼ばれ、僕は顔を上げる。
「今すぐに背伸びして、大人になる必要はないんですよ。どんなことにも時間は必要です。ましてやそれが、心の奥深く刻み込まれているものならば、なおさらです。今は分からなくてもいい、いつか分かるときが来る。あまり好きな言葉じゃありませんが、この言葉も一つの真実です」
「氷室……」
「まずは、生き急がないことです。焦れば焦っただけ見落とすものが増えるし、同時に人生を損する。命を賭けてまで果たした約束の世界で、あなたがそんなんじゃ報われませんよ」
「そうだよ、大和。時間はまだいっぱいあるんだしさ。少しずつ、ゆっくりでいいんじゃないかな」
「……そう、だね。うん、ありがとう。だいぶ気持ちが楽になった気がするよ」
「……何かあったら、いつでも頼ってください。私達は同じ運命の下で戦った、仲間なんですから」
「ありがとう、氷室。飛鳥も、ありがとう」
「お互い様だって。気にしないの」
心は少しだけ、軽くなっただろうか。
本音を言えば、まだ全てを割り切れるようになるには時間がかかると思う。
それでも確かに、氷室の言うように。
今を生きる僕達が、下を向いてばかりでは……やはり、顔向けが

できない。
時間がかかってもいい。
まずは、真っ直ぐに歩けるようになろう。
せめて、恥ずかしくないように。

事務所を出て、帰路につく。
すでに日は落ち始め、冬を目の前に控えたこの季節は暗くなるのも早い。
オレンジと紺に交じり合う空を眺めながら、僕は歩道の上を歩いていた。
どこもかしこも見慣れた景色。
この当たり前の景色が、ほんの少し前まで消えてなくなりそうだったなんて……。
道を抜け、駅前に出る。
ちょうど駅に電車が到着したようで、降りた乗客が一斉に出て、各々が向かう方角へと散っていく。
僕は人並みの中を掻き分けて、信号の前に並んだ。
目の前を何台もの車が通り過ぎていく。
やがて、赤から青に変わる信号。
動き出す人並みに倣い、僕も歩き出す。
足元は白と黒の横断歩道。
折り重なるその色合いが、ふいにあの日の記憶を呼び覚ます。

「――ヤマト」

「……っ？」
聞こえるはずのないその声に、僕の足は動きを止めた。
まさかとは思いつつも、僕は振り返る。
周囲を見回す。
だが、やはりそんなことはあるはずもなく。

「……」
僕は再び歩き出し、歩道を渡り終えた。
今のは幻聴……だったのだろう。
そうさ、そうに決まっている。
ありえない。
ありえるわけがないんだ。
……かりんは、もう……。

次の瞬間、僕の体に軽い衝撃が走った。
肩の辺りが軽くぶつかったような感覚。
直後に、ドサドサと何かが地面に落ちる音。
「あ、すいません」
僕よりも早く、ぶつかったと思われるその人は言った。
「あ、いえ。こっちこそ、余所見してたので」
言いながら、僕は地面に落ちたものを拾うのを手伝った。
「すいません、助かります」
そう言った人は、僕と同じくらいの年頃の少年だった。
僕と同じで、彼もまた学生服に身を包んではいたけれど、その制服はこの近辺ではあまり見慣れないものだった。
と、今はそんなことを気にしている場合ではない。
僕は彼の荷物を拾い上げ、腕の中に収めていく。
「あれ？」
ふと、その中の一つの資料に目がいく。
それは、入学案内の資料のようだった。
いや、それよりも何よりも気になったのは……。
「これ、うちの高校？」
「え？」
呟いた僕の言葉に、彼が反応を示した。
「この高校の人ですか？」
「あ、うん。でも、その制服ってうちのとは違うよね？　もしかし

て、転校してきたとか？」
「実はそうなんですよ。つい最近この街に越してきたばっかりで」
僕は拾った荷物を彼に手渡す。
「どうも。ちょうど今日、転入の手続きをしてきたところなんです」
「そうなんだ」
「えっと、ちなみに何年ですか？」
「あ、僕は二年」
「あれ、同い年か。てっきり先輩かと思ったよ」
「じゃあ、もしかしたら同じクラスになったりするかもしれないね」
「そうだね。早速明日から通うことになると思うから、見かけたらよろしく」
「こちらこそ。あ、僕は黒栖大和って言うんだ。クラスは二組」
「あ、俺は……」
と、彼が自分の名前を僕に告げようとした、その時だった。

「――……お兄ちゃん」

ふと、そんな声が聞こえて。
「……え？」
その声に、僕は確かな何かを感じて……。
「あ、悪い悪い。待たせちゃったな」
「……遅い。十分遅刻」
「ごめんごめん。今度埋め合わせするからさ」
「……チョコレートケーキ」
「分かった。今度な」
コクリと少女は頷き、小さく微笑んだ。
そして少女は僕に視線を移し、聞いた。
「……お兄ちゃんの、お友達？」
「ん？　ああ、そうなる予定の人だ」
「……？」

少女はきょとんと小首を傾げた。
僕はただ、呆然とその姿を見つめていた。
「どうかした？」
「……あ、いや。君の、妹？」
「そうなんだ。駅前で待ち合わせしててね。何しろ、一番分かりやすいのがここしかなくってさ」
僕から受け取った荷物を持ち、彼は立ち上がる。
「っと、そうだ。まだ名前言ってなかったっけ。俺、鈴代春彦（すずしろ　はるひこ）。で、こっちが妹の」
少し恥ずかしそうに、その少女は小さくお辞儀をして……言った。

「――……かりん。鈴代かりん」

それは。
一つの、奇跡だったのだろうと。
僕は、疑わなかった。

「……」
「あれ？　黒栖君、どうかした？」
「……？」
春彦とかりんは、揃って不思議そうに僕の顔を覗き込んでいた。
僕はふいに、溢れ出るようなその感情を何とか……何とか、押し殺して。
「……いや、何でも……ないよ」
そう言い返すのが、精一杯だった。
「やば、もうこんな時間か。早く帰って晩飯のしたくしないと」
「……うん」
「それじゃ黒栖君、また明日。一緒のクラスだといいんだけどね」
「……そうだね。そうなるといいな」
「それじゃ、また」
軽く手を上げ、春彦は歩き出す。

最後にもう一度、かりんが小さく頭を下げ、小走りにその背中を追いかけていった。

世界は確かに、廻り始めていた。
ぐるぐる、ぐるぐると。
新しい物語を紡ぎながら、静かに、ゆっくりと。
そして……。

――全ての輪は、今、ここに繋がる……。

ＥＮＤ

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３０：明日（後書き）

最後まで拝読ありがとうございました。
ずいぶんと長くなってしまいましたが本作「ＬｉｎｋＲｉｎｇ」、これにて完結です。

ありがちな終わり方でアレなのですが、個人的にこういう終わり方が一番好きなものでして、どうしてもこの終わり方は必ず書こうと、連載当初から決めていたことです。

振り返ると反省点しか出てこないので、それに関しては省かせていただきます。
ともあれ、ここまで続けられたのも読者の方々がいてくれたおかげです。
本当にありがとうございました。
また近いうちに新しい作品を書こうと思っていますので、そのときにまたお会いできればと思います。

それでは長くなりましたが、これにてお礼の言葉とさせていただきます。
また縁があれば、他の作品でお会いしましょう。
それでは、失礼します。

やくも

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5147a/

LinkRing

2010年10月8日13時04分発行